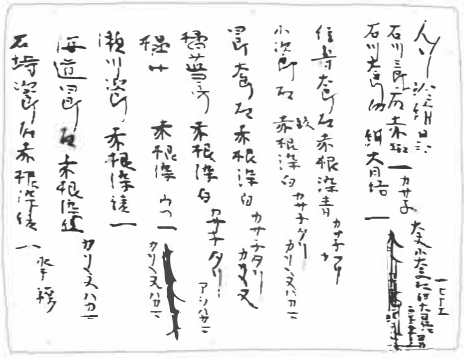
岩手県文化財調査報告書第155集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

―堀内部地区内容確認調査―

本文編



2019年3月

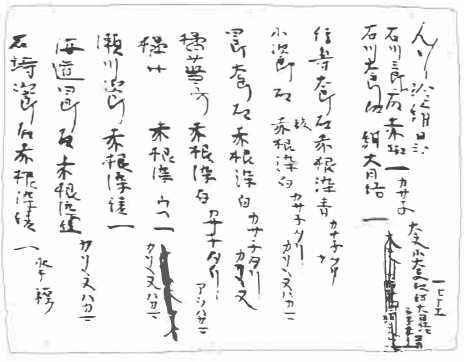
岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第155集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

―堀内部地区内容確認調査―

本文編



2019年3月

岩手県教育委員会

序

柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたり北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏の残した遺跡で、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡などの文化財と並び、当時の平泉の核をなしていた遺跡の一つです。

本遺跡は、昭和63年から（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（現（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道４号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・堀跡などが確認され、また、膨大な量のかわらけや木製品など、質・量ともに卓越した遺物が出土いたしました。これらの豊富な遺構・遺物により、本遺跡が『吾妻鏡』に記された「平泉館」であることが指摘されています。

このような経過のなかで、遺跡に対する建設省（現国土交通省）のご理解により、平成５年には遺跡の保存が決定し、平成９年３月に『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定されました。県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、史跡公園として整備して後世に伝えるとともに、広く活用していきたいと考え、平成10年度から史跡整備に向けた発掘調査を実施してきました。史跡公園の公開も進み、これまで多くの方々にご来園いただいております。また、調査で出土した資料はその価値の高さから平成22年に国の重要文化財として指定されています。これらの資料の保存と、遺跡と合わせた活用を今後とも図っていく所存であります。

これまでの継続的な発掘調査により遺跡の中心部と考えられてきた堀に区画された内部の範囲の発掘調査が進展してきました。本報告書は昨年度刊行した図版編と合わせて、岩手県教育委員会が実施してきた遺跡堀内部に関わる内容確認調査を中心にその調査成果をまとめるものです。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成に当たり、ご指導・ご協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方、文化庁、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げますとともに、本書が平泉文化研究発展の一助になれば幸いです。

平成31年３月

岩手県教育委員会

教育長　高　橋　嘉　行

例　言

1．本報告書は柳之御所遺跡の堀内部を中心とした内容確認調査の発掘調査報告書の本文編である。本報告書は本文編と図版編で構成される。なお、本書では２条の堀及びそれに囲まれた範囲を「堀内部地区」と呼称する。また、堀の外側の柳之御所遺跡の遺跡及び史跡範囲については「堀外部」と記す。

2．本書には柳之御所遺跡の解明及び整備に係る資料を得ることを目的に国庫補助事業として岩手県教育委員会が主体となって実施した調査の成果を掲載した。調査一覧等は本文編に掲載するが、柳之御所遺跡堀内部に関わる調査の大まかな区分は下記のとおりである。なお、この他に平泉町教育委員会による住宅等の小規模開発への対応に伴う調査などがある。

調査目的	調査次数	調査主体
学術調査	1～10	平泉遺跡調査会
緊急調査	21・23・28・31・36・41	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
範囲確認調査	37・38・42	岩手県教育委員会・平泉町教育委員会
内容確認調査	47・48・49	岩手県教育委員会
内容確認調査 （本書の主な対象）	50・52・55・56・57・59・ 64・65・68～70・72～79	岩手県教育委員会

3．本書にかかる発掘調査については平泉遺跡群調査整備指導委員会（旧　柳之御所遺跡調査整備指導委員会）の指導と承認のもとに行なっている。

4．出土遺物及び遺構の整理等は各次調査における概報作成時に各次の調査担当者が行なっている。掲載写真や図作成は、これまでの岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課柳之御所担当の職員による整理に基づくものである。調査整理の職員体制は本文中に記載している。調査及び整理と平成16年以降に本格化した史跡整備にあたっての遺構遺物の再整理は、斉藤邦雄・佐藤嘉広・岩渕計・大関真人・羽柴直人・杉沢昭太郎・西澤正晴・村田淳・伊藤みどり・村上拓・櫻井友梓が主に担当してきた。特に史跡整備にあたっての再整理では、佐藤嘉広・杉沢昭太郎・西澤正晴が中心となり遺跡内の多岐にわたる事項について検討を行ってきた。本書はそれらで得られた多くの成果を受け、内容の再確認と一部資料の再整理を行なったものである。

5．文字資料の釈読については岡陽一郎、阿部勝則、小岩弘明、時田里志、七海雅人、平田光彦の各氏と岩手県教育委員会による共同研究の成果を含む（岡ほか2012・2013）。

6．遺物実測図及び遺物写真は既に各年次刊行の発掘調査概報に掲載しており、本報告書では主要なものを抜粋し、それぞれ本文編及び図版編に掲載する。かわらけ等の土器類の図の多くは概報を参照されたい。本書で掲載の遺物図面は過去の整理資料に基づき、再実測及び再トレースを行っている。また再トレースにあたって、一部に加除修正を行った。遺物の再実測及び遺構・遺物の再トレースは阿部めぐみ・石川奈奈子・岩渕恵美子・木村路子・前田優子・櫻井友梓が行った。

7．本報告書は、４に記した調査整理とその再整理の成果から柳之御所担当職員の協議と検討のもと、木村路子・阿部めぐみが図版作成を補佐し、櫻井友梓が執筆・編集した。

8．本報告書作成に係るデータや図版等は岩手県教育委員会が保管している。

凡　例

1．本書で用いた遺構の呼称は、調査時に付した名称である。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。その際、昭和63年度に（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（現（公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）が実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用し、本書でも記載している。

ＳＡ：塀・柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＣ：道路状遺構　ＳＤ：溝・堀　ＳＥ：井戸・井戸状遺構　ＳＧ：園池　ＳＫ：土坑・柱穴の一部　ＳＸ：その他　ＳＩ：竪穴遺構　Ｐ：柱穴

例：21ＳＫ１　第21次調査の第１号土坑

ただし、建物跡の一部について、既往の報告書で「HSB」の略号を付したものは（岩手県教委2004)、混乱を避けるため、それを利用した。これは主に遺跡南側の21次・23次調査範囲の再検討によって把握可能と捉えた建物跡にあたる。

2．平面図では、同一の範囲を複数次にわたって調査したものについては、最終次調査の図面を基本に編集を行なっている。ただし、本来の遺構形状が埋め戻しまでの期間での崩壊などの不測の事態により変化したと見なしうる場合などは、本来の遺構形状を反映して図化していると考えられる次数の図面を採用している。

3．調査が長期に及んでいるため、調査次数の差異や同一調査時でも様々な要因により遺構の線表現が連続していない場合、同一と見なしうるものなどは原図等から補正を行なったが、判断ができないものは原則として線の補正を行なっていない。そのため、同一の溝とみられるものでも線が不連続になっているものなどもある。ただし、これらの多くは時期不明の遺構で、遺跡の評価や検討に大きな影響は及ぼさないものと判断できる。

4．本書の主な対象は上述のとおり国庫補助事業による内容確認調査だが、同一の遺構が連続する部分など一部、緊急調査時等の図面を合成して作成している。それに際しての補正内容も上記３・４のとおりである。

5．遺構の埋土観察、遺物の色調観察に際しては『新版標準土色帖』を参考にした。

6．遺構及び遺物写真図版に掲載した写真は各年次刊行の概報に掲載されたもの及びその後の整理事業等で作成したものである。遺物実測図の作成はこれまでの整理に基づくが、実測図等では再実測したものを含むほか、再トレースにあたって線の加除修正など調整を行った。

7．遺物写真図版においては各調査時ごとに割り振られている登録番号を遺物番号として記載した。

8．遺構図の縮尺は、それぞれにスケールを付して各図に示した。

9．遺物図版は土器類は1/4、木製品類は1/6及び1/12を基本に掲載した。それぞれにスケールを付した。

10．柳之御所遺跡の調査では、遺構の測量や遺物の取り上げなどの作業に際し基準となるグリッドを(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1988年からの緊急調査に際し平泉町教育委員会と協議のうえ設定している（岩手県埋蔵文化財センター1995)。平面直角座標第Ｘ系（旧日本測地系(T.D.)）をもとにした５×５ｍグリッドで、柳之御所遺跡の遺跡範囲（堀内外部を包括する周知の埋蔵文化財包蔵地）の北西端辺りが原点（０，０）となる。南北方向の基準線に対して真北は西に０°11′振れる。柳之御所遺跡内での継続調査においては1988年以来進めているグリッド内での位

置を示すことが調査研究の継続上有効と考えており、従来の局地座標で行っている。本報告書での記載も原則としてこの局地座標値で記す。なお、基準の座標値は設定時の旧日本測地系（T.D）で下記のとおりである。

（50,50）　　X座標：－111,870.000、Y座標：24,930.000

（100,100）　X座標：－112,120.000、Y座標：25,180.000

柳之御所遺跡調査における記載では、49次調査まではグリッドの呼称をX座標方向、Y座標方向の順に記載していたが（47～49次調査では原図ではX-Yになるが、報文作成段階で錯誤がある。）、50次調査以降、その順を逆転させY座標方向、X座標方向の順で呼称・記載されている。混乱を最小限にとどめるため、本書においてもこれに基づき、たとえば66-70（Y-X）グリッドならばX軸方向が70、Y軸方向が66を示している。

また、本遺跡では大規模な調査の開始以降に宮城県東部地震（2008年）や東日本大震災（2011年）の影響により大きな変動を受けており、その後に行った再測量において当遺跡内での座標変動とその数値を改めて確認している。その変動値の参考として、遺跡内に配置した測量の座標値を下に示す。変動値をみるとそれぞれ変動が確認できるが、遺跡全体が概ね同様の変化を示しており、遺跡範囲といった比較的狭い範囲での相対的な位置関係には大きな変化はみられない。このことからも遺跡内での局地座標を継続して用いることが可能であると判断している。

		基準点座標値（旧日本測地系）	参考	
			世界測地系（J.G.D2000）	世界測地系（J.G.D2011）
岩教委No.1	X	－11203.591	－111728.332	－111729.742
	Y	25022.588	24722.240	24724.980
岩教委No.2	X	－112151.906	－11843.647	－111845.063
	Y	25179.171	24878.824	24881.572
岩教委No.3	X	－112085.860	－111777.601	－111779.014
	Y	25079.862	24779.514	24782.259
岩教委No.5	X	－111882.041	－111573.783	－111575.201
	Y	25048.864	24748.514	24751.258
岩教委No.6	X	－111949.196	－111640.938	－111642.353
	Y	25001.637	24701.289	24704.031
岩教委No.7	X	－111795.662	－111487.405	－111488.820
	Y	24892.200	24591.851	24594.586

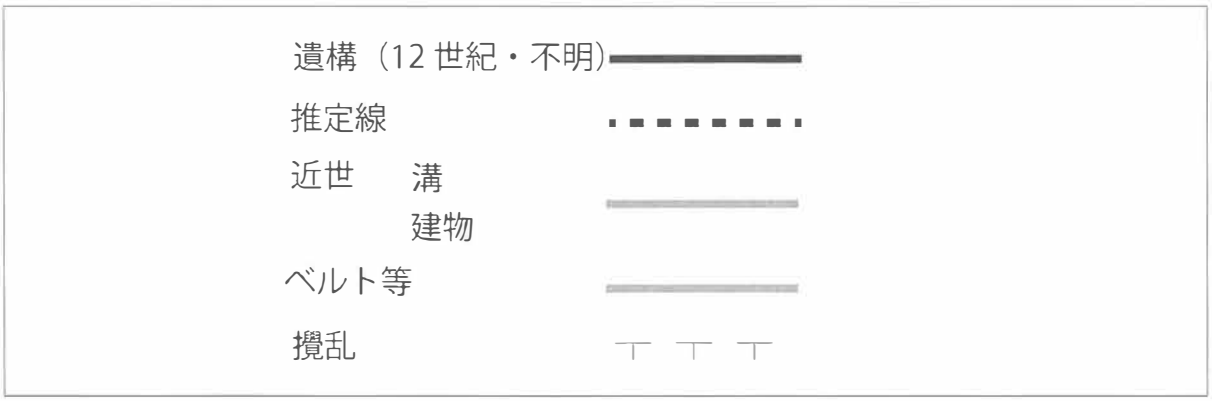
11. 遺物出土位置及び遺構検出位置の表記については10のとおりとする。遺構のうち、掘立柱建物跡など複数のグリッドにまたがる遺構については、位置の参考として中心や北西付近のグリッド数値を表記する。遺構の大きさ等の数値はcm単位で記載し、尺度は平泉における当時の基準尺度が不明でその検討の必要もあろうが、本書では１尺=30.3cmを便宜的に用いて記載した。
12. 新旧関係を示す遺構の切り合い関係がある場合は、「旧遺構→新遺構」と記載する。また極めて煩瑣となるため、12世紀の遺構と近世以降の遺構の新旧については、必要不可欠なものを除き基本的に本文中には記載していない。
13. 遺跡では２回にわたる大規模な災害の影響を受けて地形の変動が起きている。平面的な移動への対応については10のとおりである。標高については当初の計測値と比べた場合に遺跡全体で15cm程

度の沈下が看取できる。本文編に掲載する個別遺構の図面等においては、標高値を調査時の記載に基づいて掲載する。

14. 遺跡内で確認されている建物跡は後述の竪穴遺構１棟を除き、掘立柱建物である。以下で、建物跡とのみ記載した場合は掘立柱建物を指す。

15. 本文中で図□と記した場合は本文編での図番号を指す。図版編の図を指す場合は「図版編図□」と記す。

16. 図の標記は下記のとおりである。



17. 本書に関連する主な既刊の報告書は下記のとおりである。このうち、緊急調査の内容をまとめた岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの報告（(財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第228集）に文中で言及する場合には「埋文報告」、内容確認調査のうち１・２次３カ年計画に基づく調査内容をまとめた岩手県教育委員会の報告（岩手県教育委員会2004『柳之御所遺跡－第57次発掘調査概報・猫間が淵跡発掘調査報告・第１・２次内容確認調査総括報告書』岩文第118集）に文中で言及する場合には「1・2次総括」と略す。また、教育委員会は「教委」と、埋蔵文化財センターは「埋文」と略す場合がある。

編著	年次	書名
(財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1995	『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第228集
	1989	「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（昭和63年度分）』岩埋文135集
	1990	「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成元年度分）』岩埋文147集
	1991	「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成２年度分）』岩埋文159集
	1992	「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成３年度分）』岩埋文178集
	1993	「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成４年度分）』岩埋文195集
	1994	「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成５年度分）』岩埋文209集
岩手県教育委員会	1993	『平泉遺跡群範囲確認調査－第37次柳之御所跡発掘調査報告書－』岩手県文化財調査報告書第94集（以下、岩文とのみ略す）
岩手県教育委員会	1994	『平泉遺跡群範囲確認調査－第42次柳之御所跡発掘調査報告書－』岩文第96集
岩手県教育委員会	1998	「柳之御所遺跡」『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成９年度）』岩文第103集
岩手県教育委員会	1999	『柳之御所遺跡－第47・48・49次発掘調査概報』岩文第104集
岩手県教育委員会	2000	『柳之御所遺跡－第50次発掘調査概報』岩文第107集
岩手県教育委員会	2001	『柳之御所遺跡－第52次発掘調査概報』岩文第111集

編著	年次	書名
岩手県教育委員会	2002	『柳之御所遺跡－第55次発掘調査概報』岩文第113集
岩手県教育委員会	2003	『柳之御所遺跡－第56次発掘調査概報』岩文第117集
岩手県教育委員会	2004	『柳之御所遺跡－第57次発掘調査概報・猫間が淵跡発掘調査報告・第１・２次内容確認調査総括報告書』岩文第118集
岩手県教育委員会	2006	『柳之御所遺跡－第59次発掘調査概報』岩文第121集
岩手県教育委員会	2007	『柳之御所遺跡－第64次発掘調査概報』岩文第123集
岩手県教育委員会	2008	『柳之御所遺跡－第65次発掘調査概報』岩文第125集
岩手県教育委員会	2009	『柳之御所遺跡－第68次発掘調査概報』岩文第127集
岩手県教育委員会	2010	『柳之御所遺跡－第69次発掘調査概報』岩文第130集
岩手県教育委員会	2010	『柳之御所遺跡－第Ⅰ期保存整備事業報告書』岩文第131集
岩手県教育委員会	2011	『柳之御所遺跡－第70次発掘調査概報』岩文第133集
岩手県教育委員会	2012	『柳之御所遺跡－第72次発掘調査概報』岩文第135集
岩手県教育委員会	2013	『柳之御所遺跡－第73次発掘調査概報』岩文第137集
岩手県教育委員会	2014	『柳之御所遺跡－第74次発掘調査概報』岩文第140集
岩手県教育委員会	2015	『柳之御所遺跡－出土資料（重要文化財指定品）目録』岩文第141集
岩手県教育委員会	2015	『柳之御所遺跡－第75次発掘調査概報』岩文第144集
岩手県教育委員会	2016	『柳之御所遺跡－第76次発掘調査概報』岩文第147集
岩手県教育委員会	2017	『柳之御所遺跡－第77次発掘調査概報』岩文第150集
岩手県教育委員会	2018	『柳之御所遺跡－第78・79次発掘調査概報』岩文第153集
岩手県教育委員会	2018	『柳之御所遺跡－堀内部内容確認調査　図版編』岩文第154集

18. 図版編の一部記載の誤りを下記のとおり訂正する。

	誤	正
図34	31SA2	31SA5
図53	42SA21	42SA20

目　次

第Ⅰ章．緒言

第１節　柳之御所遺跡の概要…… 1
（１）地理的な位置 …… 1
（２）歴史的な位置 …… 2
（３）柳之御所遺跡における各時代の遺構・遺物 …… 4
第２節　調査の経緯…… 5
（１）調査と史跡指定までの経緯 …… 5
（２）史跡指定以降の経過 …… 6
第３節　調査組織と成果の概要…… 8
（１）調査組織 …… 8
①史跡内容確認調査以前の発掘調査
②史跡内容確認調査
（２）堀内部の調査成果の概要 ……10
①史跡内容確認調査以前の発掘調査
②史跡内容確認調査
（３）指導委員会 ……26
第４節　報告書作成の経過……27

第Ⅱ章．柳之御所遺跡の調査研究史

第１節　発掘調査以前の「柳之御所遺跡」……29
第２節　柳之御所遺跡の発掘調査と研究……30
第３節　大規模発掘調査以降の柳之御所遺跡をめぐる調査研究……32
（１）遺跡の性格及び機能 ……32
（２）遺跡内の遺構変遷 ……33
（３）遺物を主対象にした研究 ……34

第Ⅲ章．発掘調査の成果

第１節　遺跡の概要……39
（１）基本土層 ……39
（２）検出遺構の概要 ……40
（３）本節の記述方法と内容 ……40
第２節　遺構と出土遺物……41
（１）堀跡・橋跡 ……41
①南端部の様相
②猫間ヶ淵周辺の様相
③北端部の様相
④56SD40溝跡（内溝）

（２）掘立柱建物跡・竪穴遺構 …… 108
①掘立柱建物跡
②竪穴遺構
（３）池跡 …… 176
①概要
②各トレンチでの土層の所見と状況
③時期ごとの遺構と遺物の特徴
④埋文調査との対応
（４）井戸跡 …… 190
（５）土坑 …… 226
（６）塀跡 …… 263
（７）道路跡 …… 276
（８）その他の遺構 …… 283
①性格不明・祭祀遺構
②溝跡
第３節　出土遺物…… 294
（１）遺物の概要 …… 294
（２）国産陶器 …… 295
（３）輸入陶磁器 …… 308
（４）瓦 …… 318
（５）木製品等 …… 328
①木製品
②漆器・漆製品
③木製品の樹種
（６）その他 …… 352
①金属製品
②土・石製品
③動物遺存体

第Ⅳ章．総括
第１節　遺物の特徴…… 366
（１）かわらけ …… 366
（２）文字資料 …… 374
第２節　柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷…… 386
（１）堀跡・橋跡の変遷 …… 386
①堀の事実関係
②堀跡・橋跡の変遷
③堀跡周辺の様相
（２）建物跡などの変遷 …… 396
①遺構の事実関係

②遺構の変遷
（３）柳之御所遺跡堀内部地区の変遷 …… 409
第３節　まとめと課題…… 413
（１）平泉遺跡群における柳之御所遺跡の位置 …… 413
①柳之御所遺跡堀内部地区の概要と各時期の様相
②平泉遺跡群における柳之御所遺跡の素描
（２）まとめと課題 …… 418

挿　図　目　次

図１　12世紀の平泉の概略…… 3
図２　柳之御所遺跡の調査範囲図…… 7
図３　緊急調査（21・23・28・31・36・41次調査）・調査範囲 ……11
図４　50次調査遺構概略図……13
図５　52次調査遺構概略図……14
図６　55次調査遺構概略図……15
図７　56次調査遺構概略図……16
図８　57次調査遺構概略囲……17
図９　59次調査遺構概略図……18
図10　64次調査遺構概略図……19
図11　65次調査遺構概略図（１）……19
図11－２　65次調査遺構概略図（２）……20
図12　68次調査遺構概略図……20
図13　69次調査遺構概略図……21
図14　70次調査遺構概略図……22
図15　72次調査遺構概略図……23
図16　73次調査遺構概略図……23
図17　74次調査遺構概略図……24
図18　75次調査遺構概略図……24
図19　76次調査遺構概略図……25
図20　77次調査遺構概略図……25
図21　78次調査遺構概略図……26
図22　79次調査遺構概略図……26
図23　遺跡南端部平面図（1/800）……43
図24　遺跡南端部平面図（1/600）……44
図25　21SD2平面図（１）……46
図26　21SD2断面図（１）……47
図27　21SD2平面・断面図（２）……48
図28　21SD2平面・断面図（３）……49
図29　21SD2平面・断面図（４）……50
図30　遺跡南端部の整地平面・断面図……53
図31　21SD2出土土器類実測図（１）……54
図32　21SD2出土土器類実測図（２）……55
図33　21SD2出土土器類実測図（３）……56
図34　21SD2出土土器類実測図（４）……58
図35　21SD2出土木製品実測図……59
図36　21SD1平面図（１）……61
図37　21SD1断面図（１）……62
図38　21SD1平面・断面図（２）……64
図39　21SD1平面・断面図（３）……65
図40　21SD1平面・断面図（４）……66
図41　21SX35・23SX12平面図……68
図42　21SX35断面図……69
図43　23SX12平面・断面図……70
図44　遺跡南端部整地・土坑分布……72
図45　土坑（77SK2・77SK3）平面・断面図 73
図46　21SD1出土土器類実測図（１）……75
図47　21SD1出土土器類実測図（２）……76
図48　猫間ヶ淵周辺平面図（1/600）……78
図49　72SD1・72SD2平面図（1/300）……80
図50　72SD1・72SD2断面図……81
図51　31SX1・31SX2平面・断面図……84
図52　猫間ヶ淵周辺出土土器類実測図……85

図53　猫間ヶ淵周辺出土木製品実測図……86
図54　75SX1平面・断面図……87
図55　猫間ヶ淵周辺整地分布……88
図56　遺跡北端部平面図（1/600）……90
図57　遺跡北端部72SD1・72SD2平面図（1/400）……91
図58　72SD2断面図……93
図59　79SX1平面・断面図……95
図60　72SD2出土土器類実測図……98
図61　72SD1断面図…… 100
図62　41SX2平面図…… 102
図63　72SD1出土土器類実測図…… 103
図64　72SD1出土木製品実測図…… 104
図65　56SD40・56SX16平面図…… 106
図66　56SD40・56SX16断面図…… 107
図67　23SB1詳細図…… 113
図68　23SB2詳細図…… 114
図69　23SB3詳細図…… 115
図70　23SB4平面図…… 115
図71　23SB5平面図…… 116
図72　23SB6平面図…… 117
図73　23SB7平面図…… 117
図74　23SB8平面図…… 118
図75　23SB9平面図…… 119
図76　23SB10平面図…… 119
図77　28SB1詳細図…… 120
図78　28SB2詳細図…… 122
図79　28SB3詳細図…… 123
図80　28SB4詳細図（1）…… 125
図81　28SB4詳細図（2）…… 126
図82　28SB5平面図…… 127
図83　28SB6詳細図…… 128
図84　28SB8平面図…… 129
図85　31SB1平面図…… 129
図86　31SB2平面図…… 130
図87　31SB3平面図…… 130
図88　31SB4平面図…… 131
図89　31SB5詳細図…… 132
図90　31SB6平面図…… 133
図91　31SB7平面図…… 134
図92　31SB8平面図…… 134
図93　41SB1平面図…… 134
図94　41SB2平面図…… 135
図95　41SB3平面図…… 135
図96　48SB1平面図…… 136
図97　50SB3詳細図…… 137
図98　50SB4詳細図…… 138
図99　50SB5平面図…… 138
図100　50SB6A平面図…… 139
図101　50SB6B平面図…… 140
図102　50SB7平面図…… 140
図103　50SB8平面図…… 141
図104　50SB9平面図…… 141
図105　50SB10平面図…… 142
図106　50SB16平面図…… 142
図107　50SB17平面図…… 143
図108　50SB18平面図…… 143
図109　50SB19平面図…… 143
図110　50SB20平面図…… 144
図111　50SB21平面図…… 144
図112　50SB22平面図…… 144
図113　50SB23平面図…… 145
図114　50SB24平面図…… 145
図115　50SB25平面図…… 146
図116　50SB26平面図…… 146
図117　50SB27平面図…… 146
図118　50SB28平面図…… 147
図119　52SB14平面図…… 147
図120　52SB18平面図…… 147
図121　52SB19平面図…… 148
図122　52SB21平面図…… 148
図123　52SB25詳細図…… 149
図124　52SB26平面図…… 150
図125　52SB27平面図…… 151
図126　55SB5詳細図…… 152
図127　55SB6詳細図…… 153
図128　55SB8平面図…… 154
図129　55SB9平面図…… 155
図130　55SB10平面図…… 155
図131　55SB11平面図…… 156

図132　55SB12平面図 …… 156
図133　55SB13平面図 …… 157
図134　55SB14平面図 …… 157
図135　55SB16平面図 …… 158
図136　55SB17平面図 …… 158
図137　55SB18平面図 …… 158
図138　55SB19詳細図 …… 159
図139　55SB20平面図 …… 160
図140　55SB21平面図 …… 160
図141　55SB23平面図 …… 161
図142　55SB24平面図 …… 161
図143　55SB25平面図 …… 161
図144　55SB27平面図 …… 162
図145　55SB29平面図 …… 162
図146　56SB1平面図 …… 162
図147　56SB2平面図 …… 163
図148　56SB3平面図 …… 164
図149　56SB4平面図 …… 164
図150　56SB5平面図 …… 164
図151　72SB1平面図 …… 165
図152　HSB13平面図 …… 165
図153　HSB14平面図 …… 165
図154　HSB15平面図 …… 166
図155　HSB16平面図 …… 166
図156　HSB17平面図 …… 167
図157　HSB18平面図 …… 167
図158　HSB19平面図 …… 167
図159　HSB20平面図 …… 168
図160　HSB21平面図 …… 168
図161　HSB22平面図 …… 168
図162　HSB23平面図 …… 169
図163　HSB24平面図 …… 169
図164　HSB25平面図 …… 169
図165　55SX2詳細図（1）…… 171
図166　55SX2詳細図（2）…… 172
図167　55SX2出土土器類実測図（1）…… 173
図168　55SX2出土土器類実測図（2）…… 174
図169　52SI2平面・断面図 …… 176
図170　23SG1平面図 …… 177
図171　23SG1断面図（1）…… 179
図172　23SG1断面図（2）…… 181
図173　64SX1平面・断面図 …… 184
図174　23SG1出土土器類実測図（1）…… 185
図175　23SG1出土土器類実測図（2）…… 186
図176　23SG1石組周辺平面図 …… 187
図177　23SG1変遷図 …… 188
図178　37SE2詳細図 …… 193
図179　50SE2平面・断面図 …… 193
図180　50SE3詳細図 …… 194
図181　50SE3出土木製品実測図 …… 195
図182　52SE1詳細図 …… 196
図183　52SE7詳細図 …… 197
図184　52SE8詳細図 …… 200
図185　52SE8出土木製品実測図 …… 201
図186　52SE9詳細図 …… 202
図187　52SE10詳細図 …… 203
図188　55SE1詳細図 …… 204
図189　55SK38平面・断面図 …… 205
図190　55SK43平面・断面図 …… 206
図191　55SK44詳細図 …… 206
図192　56SE1平面・断面図 …… 207
図193　56SE3平面・断面図 …… 208
図194　56SK80詳細図 …… 209
図195　57SE2平面・断面図 …… 209
図196　70SE1詳細図 …… 210
図197　70SE3詳細図 …… 211
図198　77SK1詳細図 …… 212
図199　井戸跡断面図（1）…… 217
図200　井戸跡断面図（2）…… 221
図201　井戸跡断面図（3）…… 224
図202　井戸跡断面図（4）…… 225
図203　52SK9平面・断面図 …… 235
図204　52SK10平面・断面図 …… 236
図205　52SK11詳細図 …… 237
図206　52SK13平面・断面図 …… 237
図207　52SK14平面・断面図 …… 238
図208　52SK21平面・断面図 …… 238
図209　52SK22平面・断面図 …… 239
図210　52SK24詳細図 …… 239
図211　52SK25平面・断面図 …… 240

図212　52SK37平面・断面図 …… 240
図213　55SK34平面・断面図 …… 241
図214　55SK40詳細図 …… 242
図215　55SK41詳細図 …… 243
図216　55SK51平面・断面図 …… 243
図217　55SK53平面・断面図 …… 244
図218　55SK54平面・断面図 …… 244
図219　56SK26平面・断面図 …… 245
図220　56SK27平面・断面図 …… 245
図221　56SK28平面・断面図 …… 246
図222　56SK29平面・断面図 …… 247
図223　56SK31平面・断面図 …… 247
図224　56SK33詳細図 …… 248
図225　56SK34平面・断面図 …… 248
図226　56SK53平面・断面図 …… 249
図227　70SK20平面・断面図 …… 249
図228　70SK22詳細図 …… 250
図229　70SK24平面・断面図 …… 251
図230　50SE1詳細図 …… 252
図231　55SK29詳細図 …… 253
図232　55SK33詳細図 …… 254
図233　55SK35平面・断面図 …… 254
図234　55SK50平面・断面図 …… 255
図235　56SK32平面・断面図 …… 255
図236　56SK40平面・断面図 …… 256
図237　56SK52平面・断面図 …… 256
図238　65SK2平面・断面図 …… 257
図239　65SK14平面・断面図 …… 257
図240　65SK18平面・断面図 …… 257
図241　68SK35詳細図 …… 258
図242　72P47平面・断面図 …… 259
図243　土坑実測図（1）…… 261
図244　土坑実測図（2）…… 262
図245　塀跡分布図 …… 267
図246　55SA1周辺平面図（1/300） …… 270
図247　72SA1・72SA2平面・断面図 …… 271
図248　23SA1周辺平面図（1/300） …… 273
図249　23SA1平面・断面図 …… 274
図250　28SA1平面・断面図 …… 275
図251　塀跡出土土器類実測図 …… 276
図252　道路跡分布図 …… 278
図253　52SC1・55SC1平面図 …… 279
図254　52SC1・55SC1平面・断面図 …… 280
図255　21SC1平面・断面図 …… 281
図256　道路跡出土土器類実測図 …… 282
図257　55SX1詳細図 …… 285
図258　55SX1出土土器類実測図 …… 286
図259　70SX1詳細図 …… 287
図260　整地平面・断面図 …… 288
図261　28SX1詳細図 …… 290
図262　国産陶器類実測図（1）…… 297
図263　国産陶器類実測図（2）…… 298
図264　国産陶器類体部片 …… 299
図265　国産陶器類出土分布図 …… 304
図266　国産陶器類（渥美）出土分布 …… 305
図267　国産陶器類（常滑）出土分布 …… 306
図268　国産陶器類（須恵器・須恵器系）
出土分布…… 307
図269　輸入陶磁器類実測 …… 309
図270　輸入陶磁器類出土分布 …… 313
図271　輸入陶磁器類（白磁）出土分布 … 314
図272　輸入陶磁器類（青磁）出土分布 … 315
図273　輸入陶磁器類（青白磁）出土分布　316
図274　中国陶器出土分布 …… 317
図275　軒丸瓦分類図 …… 321
図276　軒平瓦分類図 …… 322
図277　平瓦・丸瓦分類図 …… 323
図278　瓦類出土分布 …… 325
図279　瓦類（軒瓦）出土分布 …… 326
図280　瓦類（平・丸瓦）出土分布 …… 327
図281　木製品実測図（1）…… 331
図282　木製品実測図（2）…… 335
図283　木製品実測図（3）…… 339
図284　木製品実測図（4）…… 343
図285　木製品実測図（5）…… 345
図286　木製品実測図（6）…… 346
図287　漆製品実測図 …… 349
図288　金属製品実測図（1）…… 355
図289　金属製品実測図（2）…… 356
図290　その他遺物（1）…… 362

図290－２　その他遺物（２）…… 363
図291　かわらけの変遷 …… 370
図292　文字資料（１／６）…… 377
図293　埋－2272 …… 379
図294　49－475…… 381
図295　50－5003 …… 382
図296　69－239…… 382
図297　74－960…… 383
図298　75－501…… 384
図299　堀の変遷模式図（１）…… 388
図300　堀の変遷模式図（２）…… 388
図301　堀の変遷模式図（３）…… 389
図302　南端部の堀と整地の変遷 …… 390
図303　堀の変遷 …… 394
図304　堀跡出土の土器（南端部）…… 395
図305　堀跡出土の土器（北端部）…… 396
図306　集中域①の遺構 …… 401
図307　集中域②の遺構 …… 402
図308　集中域③の遺構 …… 404
図309　集中域④の遺構 …… 405
図310　建物Ⅰ（6～9°）…… 406
図311　建物Ⅱ（0～5°）…… 407
図312　建物Ⅱ後（0～5°・16°～）…… 408
図313　建物Ⅲ（10～15°・16°～）…… 409
図314　柳之御所遺跡の遺構変遷【Ⅰ期】… 410
図315　柳之御所遺跡の遺構変遷【Ⅱ期】… 411
図316　柳之御所遺跡の遺構変遷【Ⅲ期】… 412
図317　柳之御所遺跡（～Ⅰ期）…… 415
図318　平泉における柳之御所遺跡（１）… 415
図319　平泉における柳之御所遺跡（２）… 416

挿　表　目　次

表１　柳之御所遺跡の整備関連事項…… 8
表２　平泉遺跡群調査整備指導委員会（柳之御所遺跡調査整備指導委員会）名簿……27
表３　柳之御所遺跡の建物変遷案の対照……34
表４　かわらけ変遷案の対照……35
表５　柳之御所遺跡の調査一覧……37
表６　柳之御所遺跡堀内部地区で確認された遺構……40
表７　堀跡とその遺構名の対照……42
表８　橋跡とその位置……42
表９　12世紀代の掘立柱建物跡…… 108
表10　12世紀以降の掘立柱建物跡…… 111
表11　その他の竪穴遺構…… 175
表12　池跡の対応…… 176
表13　12世紀代の井戸跡…… 190
表14　近世以降の井戸跡…… 191
表15　12世紀代の土坑…… 226
表16　12世紀以降の土坑…… 233
表17　12世紀代の塀跡…… 263
表18　近世以降の塀跡…… 264
表19　12世紀代の道路跡…… 276
表20　性格不明遺構等…… 283
表21　溝跡…… 291
表22　柳之御所遺跡堀内部地区の出土遺物 294
表23　調査次ごとの国産陶器出土量…… 301
表24　産地・器種ごとの国産陶器出土量… 302
表25　調査時ごとの輸入陶磁器類出土表… 311
表26　器種ごとの輸入陶磁器出土量…… 312
表27　調査次ごとの瓦類出土量…… 319
表28　瓦類出土点数…… 320
表29　刀子（柄木）一覧…… 328
表30　鞘一覧…… 329
表31　糸巻一覧…… 330
表32　扇骨一覧…… 332
表33　横櫛一覧…… 333
表34　下駄一覧…… 334
表35　栓一覧…… 336

表36　遺構ごとの出土量（箸）…… 337
表37　匙一覧…… 337
表38　杓子一覧…… 338
表39　遺構ごとの出土量（折敷）…… 338
表40　笹塔婆一覧…… 341
表41　遺構ごとの出土量（ちゅう木）…… 342
表42　脚一覧…… 342
表43　建築部材一覧…… 344
表44　格子一覧…… 344
表45　漆器椀類一覧…… 348
表46　漆付着土器一覧…… 350
表47　樹種同定結果…… 350
表48　資料種別樹種同定結果…… 351
表49　刀子一覧…… 353
表50　その他金具（釘・鋲）一覧…… 353
表51　銭貨一覧…… 356
表52　穿孔かわらけ一覧…… 357
表53　内折れかわらけ一覧…… 357
表54　円盤状土製品一覧…… 358
表55　遺構ごとの出土量（壁土）…… 359
表56　滑石製品一覧…… 359
表57　硯一覧…… 360
表58　碁石一覧…… 360
表59　羽口一覧…… 361
表60　砥石一覧…… 361
表61　動物遺存体の出土遺構…… 363
表62　植物質遺存体の出土遺構…… 363
表63　柳之御所遺跡自然科学分析等一覧… 364
表64　遺構ごとの時期区分…… 372
表65　遺跡内の年輪年代結果一覧…… 372
表66　遺跡内の炭素年代測定…… 373
表67　柳之御所遺跡内部出土の文字資料… 374
表68　墨書資料の種別…… 378
表69　堀の変遷と関連遺構…… 391
表70　●～5°の建物群 …… 398
表71　6～8°の建物群 …… 398
表72　10～15°の建物群 …… 399
表73　16～25°前後の建物群 …… 399
表74　掲載遺物一覧 …… 423

第Ⅰ章. 緒　　言

第１節　柳之御所遺跡の概要

（１）　地理的な位置

柳之御所遺跡は、岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在し、経度・緯度は北緯38度59分28秒、東経141度７分35秒（旧日本測地系）である。遺跡が所在する東北地方は日本列島において本州島東北部にあたる。その地理的な位置から、朝鮮半島やユーラシア大陸に近接し、北東アジア世界の中で列島中心部と北方世界との交流点として機能した（図版編－図１）。東北地方は中央を奥羽山脈が走り、それを境に大きく東西に日本海側と太平洋側とに分かれる。この地理的な境界は気候などの環境的な側面やそれらを受けた歴史にも大きな影響を与え、現在に至るまで両地域を区分する様々な面での境界となっている面も多い。平泉町が所在する岩手県は、本州島の北半部の東北地方太平洋側に位置する。

平泉町は岩手県南部に位置し、面積6,339㎢、人口約7,700人の町である（平成30年現在）。岩手県南部から中央部に形成される北上盆地は海抜1,500～2,000ｍの奥羽山脈が西に連なり古生代を主とする北上山地が東に、南端は西から張り出す磐井丘陵に接する。平泉町が立地する北上盆地南部は奥羽山脈から発達した大小の扇状地が南北に並び、平泉町の北には胆沢扇状地が広がる（図版編－図２）。

町の中央部は北上川が北から南へと縦断するように流れる。北上川は岩手県北部の二戸郡と岩手郡境の七時雨山に源をもち、奥羽・北上山系を東西に分けて岩手県を南北に縦断した後に宮城県域に入る。北上川は幾度もの河川改修を経て、現在は宮城県追波湾に流れる。岩手県内を盛岡市あたりから平泉町域まで概ね平野部を流れる北上川は平泉町を過ぎた後、一関市において狐禅寺狭窄部に入る。この狭窄部は川幅が100ｍに満たず、さらに延長も約26ｋｍと長い。そのため、北上川上流からの水量がせき止められるかたちとなって、流域に度重なる洪水を起こしてきた。特に、昭和23年のカスリン台風、昭和24年のアイオン台風の際には大きな被害を岩手県南部にもたらしている。平泉町や一関市でも中心市街地が浸水するなど大きな被害を受けている。これらの被害などを受けて計画された治水対策のひとつが一関遊水地事業となり、後述する柳之御所遺跡の調査要因となっていく。

なお、北上川には平泉町の北側で衣川、南側で太田川が合流する。この２つの河川に囲まれた範囲は、北上川を挟んで東側に標高596ｍの束稲山を主峰とする束稲山地、西側に標高200ｍほどの衣川丘陵が広がり、この河川と丘陵に囲まれた平坦な地形面が概ね、12世紀当時に奥州藤原氏が拠点を築いた「平泉」の中心的な範囲にあたる。

柳之御所遺跡は現在の平泉町中心部の東側に位置し、北上川西岸の河岸段丘の端部にあたる。遺跡の背後（北西側）には高舘の丘陵があり、東に北上川、西から南にかけて猫間ヶ淵と呼称される低地によって区切られた河岸段丘上に立地する。遺跡内の現況標高は南側で25ｍ、中心部で27ｍ、北側では32ｍとなっている。遺跡の北西側が高く、南東側に向かって傾斜している。猫間ヶ淵の範囲は標高22～23ｍほどである。現在は国道４号バイパス等に伴う盛土造成により北上川と遺跡は直接接しないが、遺跡の調査開始時点では北上川と遺跡が接しており、遺跡より南東の範囲は標高22ｍほどの低地となっていた。12世紀当時の北上川の流路は判然としないが、現在の遺跡範囲はより東に広がり、河川もしくは低地と接していたと考えられる。調査結果からも遺跡の北東側はその後の北上川の流路となって失われたことがわかる。そのため、遺跡機能時の遺跡範囲とその周囲の地形、特に遺跡北側か

ら東側の遺跡範囲や往時の様相には不明な点が残る。

遺跡範囲は昭和63（1988）年から本格的に開始された緊急調査以前には住宅地や田畑として利用されていた場所で、発掘調査においてもこれらに伴う地形改変や攪乱が多く認められる。遺跡範囲のうち堀内部地区の全域とその外部の大部分を含む平成９年に史跡指定された範囲は、開発対応の緊急調査後に、岩手県による公有地化が継続して行われている。史跡公園としての活用も行われてきているものの、整備等は現在も継続している。

（２）歴史的な位置

柳之御所遺跡が所在する地形面は後期旧石器時代には安定した地形面であったと考えられているものの、平泉町域では旧石器時代に遡る遺物は確認されていない。北側の胆沢扇状地では後期を中心に旧石器時代の遺跡が複数確認されているほか、一関市花泉町域には動物遺存体などの出土で著名な花泉遺跡が知られる。

平泉町では縄文時代以降には現在の地形面が形成されたと考えられている。調査件数は多くないが、発掘調査事例でもこの時期から遺構・遺物が確認されている。北上川西岸では泉屋遺跡で縄文時代後期から晩期の集落跡が確認されている。また、柳之御所遺跡でも縄文時代後期から晩期の土器が出土しているほか、堀外部では剥片が集中した土坑も確認されている。北上川東岸の長島地区では縄文時代後期の新山権現社遺跡や縄文時代晩期の中村遺跡が調査されている。また、長島地区のうち標高の低い現在の北上川沿いの沖積地においても、本町Ⅱ遺跡などで縄文時代の遺跡が確認されている。

北側の胆沢扇状地では弥生時代の遺跡も多く確認されているものの、平泉町域では弥生時代の遺構・遺物の調査事例は少ない。北上川西岸では当該時期の遺物が散見されるが、まとまった遺構は確認されていない。北上川東岸の里遺跡では、弥生時代中期の遺物が確認されている。

古墳時代には中期後半に胆沢扇状地には角塚古墳が造営される。この周囲では前期からも集落が確認されているほか、中半入遺跡のような豪族居館とも目される遺跡も確認されている。また、古代においても奈良時代以降に集落が多数形成されるほか、９世紀初頭には胆沢城に鎮守府が置かれる。平泉町域はおおむね現在の一関市域と合わせ、古代には陸奥国の範囲になり、磐井郡域にあたる。なお、磐井郡の成立時期や位置づけには未詳の部分が多い。発掘調査による考古学的情報も隣接諸地域と比して少なく課題も残る。平泉町域では古墳時代から８世紀代にかけての遺構・遺物は確認されていない。その後、９世紀から10世紀代以降にかけて遺構・遺物が確認されるようになる。泉屋遺跡では竪穴住居跡が確認され、墨書土器の出土も注目できる。柳之御所遺跡でもこの時期の遺構・遺物が確認されている。北上川東岸の竜ケ坂遺跡では灰白色火山灰（To-a）に覆われた水田跡が調査されている。水田からはヒトや動物の足跡が確認され、貴重な事例である。

東北地方北部では11世紀以降、安倍氏や清原氏などの地方豪族が勢力を伸ばす。衣川流域は安倍氏の拠点のひとつとみられ、長者ケ原廃寺跡は安倍氏に関連する寺院と考えられている。平泉町域ではこの段階の様相は明確ではないが、中尊寺でも12世紀を遡るとみられる大溝が確認されている。

奥州藤原氏が平泉に拠点を置く12世紀代には、北上川西岸の現在の平泉町中心部を分布の中心として多くの遺跡が分布するようになる。柳之御所遺跡の周辺では、遺跡の西には猫間ヶ淵跡、無量光院跡が隣接して位置し、北には高館跡、南には伽羅之御所跡が接している。無量光院跡は三代秀衡が建立した寺院跡である。これまでの発掘調査で宇治平等院と類似しつつも、細部に異なる特徴をもつ伽藍や遺構の内容が確認されている。上層の遺構が良好なため部分的な確認にとどまるが、下層にも遺構が存在することが遺跡内で確認されており注目される。伽羅之御所跡は地名から『吾妻鏡』に記載

される加羅御所に比定する見解もある。これまで複数の地点で調査が行われ、貴重な遺物も出土しているが、小規模の発掘調査にとどまり遺跡の様相や性格を明確に示すものは確認されていない。近年の調査により周辺部で溝跡等が確認されており、無量光院跡を含めた周辺での区画の様相も検討されつつある。また、現在義経堂が所在し、源義経の伝承とともに知られる高館跡でも12世紀代の堀が確認されるなど、柳之御所遺跡と同時期にも関連をもって機能したことが想定される。

平泉町の現在の中心部ではこの他に志羅山遺跡や泉屋遺跡、倉町遺跡といった当時の平泉の街並みに関連する遺跡が調査されている。志羅山遺跡や泉屋遺跡では東西大路やそのほかの道路跡、それらに接する区画で建物跡などが検出されている。また、倉町遺跡では東西大路沿いに倉庫の跡が確認されている。これらの成果から、平泉の拠点的な範囲に、奥州藤原氏三代によって道路跡や街並みが形成され、中尊寺や毛越寺などの寺院が建立され繁栄したようすが理解できる。現在、白山神社がある白山社遺跡なども、都市域の四方を捉える上で重要な要素でもある。四方鎮守の存在も文献史料から指摘されるところだが、現地や性格の確定には至っていない。さらに、北上川を挟んだ東岸域でも遺物や遺構の量は少なくなるものの、調査が実施されている。本町Ⅱ遺跡では墓域も確認され、里遺跡

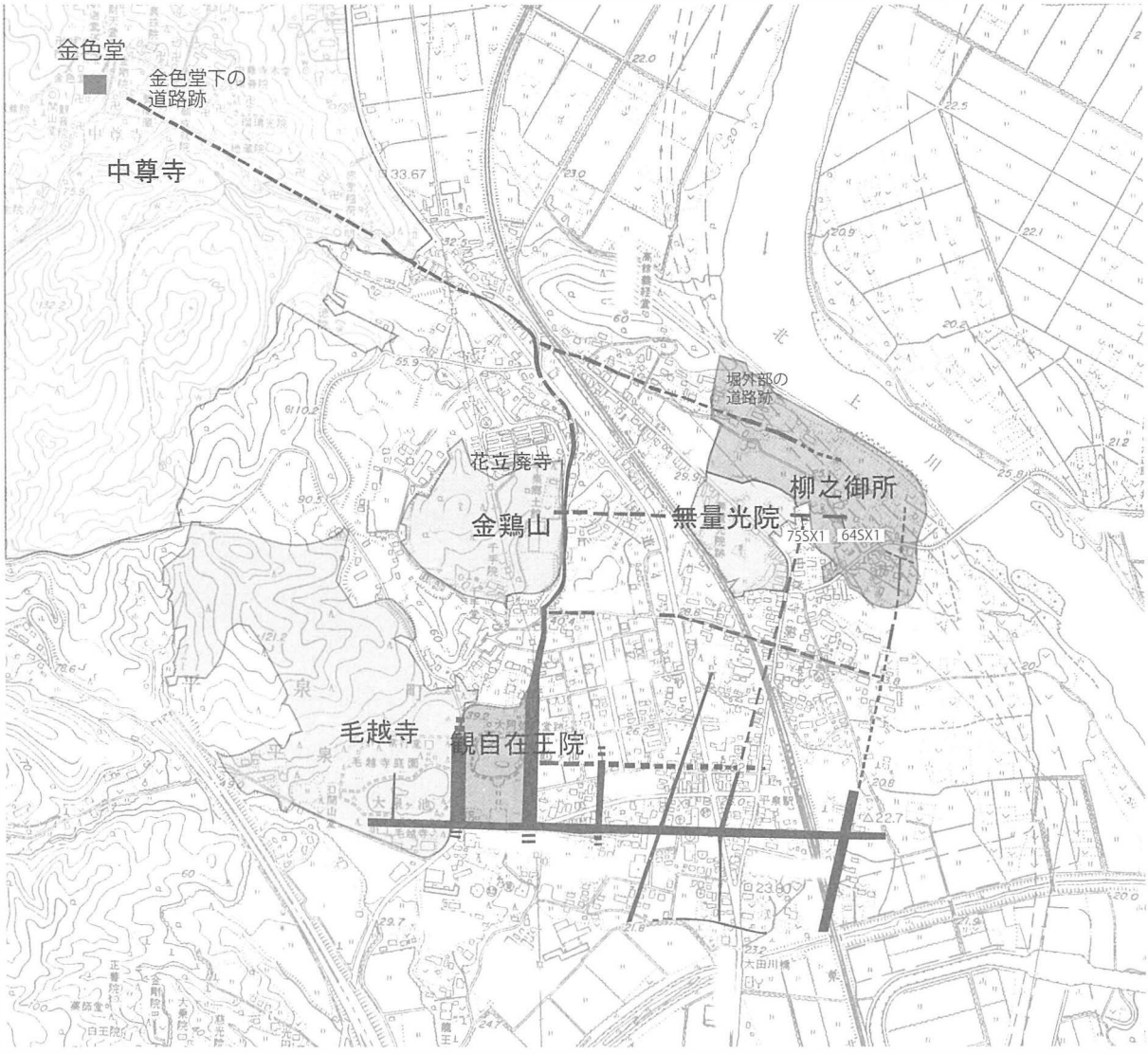


図1　12世紀の平泉の概略

や月館大師堂など複数の遺跡や地点で12世紀代の遺構・遺物が確認されている。

近年では、平泉町域から衣川を挟んで北側でも奥州市接待館遺跡が確認されたほか、かわらけ生産窯が確認された奥州市白鳥舘遺跡などの調査も行われており、当時の平泉の範囲が現在の平泉町中心域を拠点としながらも周辺に広がることが明らかになっている。しかし、これらの平泉の繁栄の多くは政権都市としての性格もあいまって、一部の寺院を除き、奥州藤原氏の滅亡とともに失われていく。

奥州藤原氏が滅亡して以降、平泉保が置かれ、葛西氏が拠点を置いたことが知られる。考古資料の面からは、花立Ⅱ遺跡や泉屋遺跡の一部で遺構・遺物が確認されるなどしているものの、前代の12世紀代の様相と大きく異なり、分布は限定的である。中世後期段階には城館跡が北上川東岸を中心に確認されているほか、柳之御所遺跡に隣接する高館跡でも該期の遺構が確認されている。

近世には岩手県南部は伊達藩領となる。現在の平泉町内を走る奥州道中が整備され、一里塚などが築かれた。また、北上川舟運が活発に利用され、柳之御所遺跡の遺跡範囲には御蔵場が置かれ舟運の拠点となった。このほか、太田川と北上川に面した泉屋遺跡でも近世段階の屋敷地が確認されている。なお、無量光院跡の整備が行われるなど、伊達氏によって平泉の文化財が顕彰されたことも、現在にこれらの資産が良好に伝わる要因となった。

（３）柳之御所遺跡における各時代の遺構・遺物

①12世紀以前

遺跡内でもっとも遡る時期の考古資料は、縄文時代の資料である。縄文時代晩期を中心とする縄文土器が遺跡内の標高が低い地点などを中心に、各所から出土している。より古い時期の土器片も縄文時代中期や後期とみられる資料が出土しているが数量は少ない。縄文時代の柳之御所遺跡堀内部地区の範囲では後晩期を中心に遺物はみられものの、遺構の分布は確認できておらず、明確ではない。また、堀外部では剥片が集中する土坑が確認されている。このほか、弥生時代の土器片も出土しているものの、遺物量は希薄で遺構も確認できていない。

古代では竪穴住居が確認されており、９世紀後半から10世紀初頭の遺構・遺物が確認されている。この時期には住居とみられる竪穴建物が複数棟確認されているが、集中する範囲は確認できておらず、大規模な集落域としては認識できない。

これらの12世紀代以前の資料の多くは遺物にとどまり、本来分布したであろう遺構の多くは12世紀代の造成やそれ以降の改変によって失われたとみられる。

②奥州藤原氏の時期

奥州藤原氏が平泉に拠点を築く11世紀末から12世紀にかけて遺跡範囲のほぼ全体が利用される。２条の大規模な堀跡に区画された平坦な地形面のほぼ全域が利用されており、低地部も整地が行われるなど造成も確認できる。堀内部の範囲は道路跡や塀跡によって、さらに細かく分節される。そのうち、大規模な掘立柱建物や園池は遺跡範囲のほぼ中央に集中して分布しており、この周囲が中心的な機能をもつ時期があることが推定できる。本書が主な対象とするのは、この11世紀末から12世紀代の平安時代末の遺構と遺物である。堀内部地区の遺構などの内容の詳細については後述する。

堀外部では長さ60mほどにわたって道路跡が確認されている。平行する溝跡で確認されており、造り替えもしくは改修とされる溝の切り合いが１度確認されている。この道路跡は堀内部から延長し、中尊寺方向へと向かうと想定されている。道路の路面幅は７～８mほど、側溝を含めて10mほどである。道路跡に沿って建物跡等が分布し、特に道路跡より北側の範囲は、区画が特に確認されていない

時期、溝により区画される時期の変遷が指摘されている。大きく４つの区画に分かれる。溝などによる区画の内部には掘立柱建物が分布する。これらには四面庇の建物跡もみられる。

③鎌倉時代以降

12世紀以降、中世段階の様相は遺物が少ないことからも明確ではない。特に、本書が対象とする堀内部地区においては顕著な遺構と遺物が確認されておらず、基本的には奥州藤原氏滅亡後の継続利用がなかったとみなしうる。

再び遺跡堀内部の区域が積極的に利用されるのは近世以降とみられる。堀内部地区の北側を中心に、近世段階の掘立柱建物跡が複数確認されている。近世段階の掘立柱建物は遺跡北側の北上川流路に近い範囲を中心に確認されている。これらは仙台藩の御蔵場として利用されたと考えられている。なお、本書では各年次の報告において近世以降とみなして報告された遺構については区別して図示した。ただし、近現代のものを攪乱として図示しているものの、溝や土坑など両者の時期と遺構の区分には必ずしも明確ではない場合も残る。

また、堀外部では高館跡に近い部分を中心に16～17世紀頃の陶磁器類が確認されている。これらの時期の遺物は堀内部に近い範囲では希薄で、高館跡の城館としての利用と関連するものと考えられる。

第２節　調査の経緯

（１）調査と史跡指定までの経緯

柳之御所遺跡が所在する平泉町や隣接する一関市など岩手県南部は北上川中流域にあたる。この地域は、前述の地形的な特徴もあり、洪水が起こりやすい水害の常襲地域であった。特に、昭和22（1947）年と昭和23（1948）年に連続したカスリン、アイオンの両台風による水害は、当該地域に大きな被害を与えている。そのため、建設省（現在の国土交通省）は北上川の洪水対策として堤防と遊水地を築く一関遊水地事業と、あわせて国道４号バイパスを併置する計画を示し、そのルートは平泉町内にもかかるものであった。

この計画を受け、昭和47（1972）年に建設省から平泉町教育委員会に分布調査が依頼され、昭和49（1974）年に平泉町教育委員会から依頼を受けた岩手県教育委員会によって分布調査が行われた。分布調査時の記載メモなどからは、この段階で堀などの区画施設が認識され遺跡の重要性に留意していることがわかるものの、宅地等での利用が多くの範囲にわたり全体の把握が困難になってきているようすも窺える。分布調査の結果、遺跡の重要性を示唆する見解も示されたものの、この段階では遺跡保護までには至っていない。その後、昭和56（1981）年に再度分布調査が行われ、昭和57（1982）年から平泉町教育委員会によって範囲確認調査が行われた。また、これらの調査に先立つ昭和40年代には、藤島亥治郎氏ら平泉遺跡調査会によって１～10次の調査が行われたものの、いずれも小規模な面積にとどまるものであった。これらの各調査では12世紀代とみられる遺構、遺物が出土しているが、部分的な調査であり、全容をつかむには至らなかった。これらの範囲確認調査の結果を受け、昭和63（1988）年より本格的に岩手県埋蔵文化財センターが発掘調査を開始することとなり、平泉町教育委員会も現在堀外部として認識されている範囲を対象に平成元（1989）年より同事業に係る発掘調査を開始している（21・23・28・31・36・42次調査）。

調査は遺跡南端部から開始され、６カ年（当初は５カ年）の計画で行われることとなった。なお、

調査に先立って平泉遺跡群調査指導委員会（委員長　藤島亥治郎）を設置し、指導助言を得ながら調査にあたっている。発掘調査は遺跡の南端部の現在堀跡が確認されている堀跡周辺から調査が開始された。開始初年度から、大規模な堀跡が検出され、膨大な量のかわらけが出土し、大きな注目を集めることとなった。その後の調査の進展に伴い、園池跡や大型の掘立柱建物跡が検出されるなど、多くの遺構・遺物が確認され遺跡の重要性が明らかとなった。これらの発掘調査の進展に伴い、遺跡の重要性が明らかになり、関連学会から遺跡の保存が求められ始めた（平泉文化研究会1992、1993）。保存運動は、関連学会のみにとどまらない大きな動きとなり、中尊寺など関連団体からも20万人もの署名が集められるなど、注目を集めることとなった。調査概要については後述するが、これらの発掘調査の成果を受け、平成４（1992）年には平泉遺跡群調査指導委員会において、遺跡の性格を吾妻鏡に記載される「平泉館」に比定する意見が出されるに至った。遺跡に対する保存運動の高まりがある一方で、水害に悩まされてきた当該地域における治水の重要性も指摘されており、それらをいかに解決していくのか大きな課題となった。また、遺跡範囲の確認のため、一関遊水地事業に係る発掘調査と併せて、平成４（1992）年より岩手県教育委員会（37・42次調査）、平泉町教育委員会が遺跡の範囲確認調査を開始し、事業予定地外での遺跡の内容の把握に努めている。

これらの調査と合わせて大きく進展した研究成果により、遺跡の性格が示されつつある中でその重要性が明らかになり、保存運動の高まりもあり、建設省（現国土交通省）と岩手県知事などによる遺跡保存と治水対策に関わる協議が行われることとなった。その結果、平成５（1993）年11月に、工事計画の変更という判断が行われ、遺跡の保存と治水事業との両立を図るとの基本方針が合意されることとなった。当初の計画の範囲では、遺跡中心部を堤防とバイパスが通る予定であり、北上川の河道との兼ね合いから変更は難しいとされていたが、北上川の河道を、より東側に移す工事を行い、遺跡全体を保護するとの事業変更計画が示され、遺跡保存と治水の両立が実現された。なお、保存運動とともに遺跡の性格や重要性への学問的な検討も合わせて行われ、歴史学などの研究者から多くの研究成果が示されている。平泉を対象とする研究が深まったことも、発掘調査と保存運動の中で得られた重要な成果のひとつであろう。

柳之御所遺跡は、平成７（1995）年に国の史跡として答申を受け、平成９（1997）年３月に「柳之御所遺跡」として告示を受けた。なお、柳之御所遺跡の史跡範囲のうち、遺跡中心部にあたる堤防バイパス用地が国との用地交換により平成10年に岩手県の用地となった。その後も柳之御所遺跡の史跡指定地について、岩手県による公有化が行われている。

（２）史跡指定以降の経過

岩手県教育委員会では史跡整備を視野に、平成８（1996）・９（1997）年度に、史跡指定された柳之御所遺跡の範囲内容確認調査を行った（47・48次調査）。さらに、平成10（1998）年度からは平泉町内に柳之御所遺跡調査事務所を置き、史跡整備のための内容確認調査を実施している（第49次調査）。

平成11（1999）年度以降は本格的に内容確認調査を実施している（50次調査以降）。この調査の内容が本報告書の主たる内容となる調査で、詳細な内容については後述する。継続的な調査により平成29（2017）年度までで堀内部の範囲の調査は概ね完了している。

これらの発掘調査に併行して遺跡の保存への取り組みや具体的な保護措置にも継続して取り組まれており、平成16年に追加指定、平成17年に猫間が淵、奥州市長者ヶ原廃寺跡、奥州市白鳥舘遺跡の追加指定を受け、併せて「柳之御所遺跡・平泉遺跡群」と指定名称を変更している。その後も「高屋」

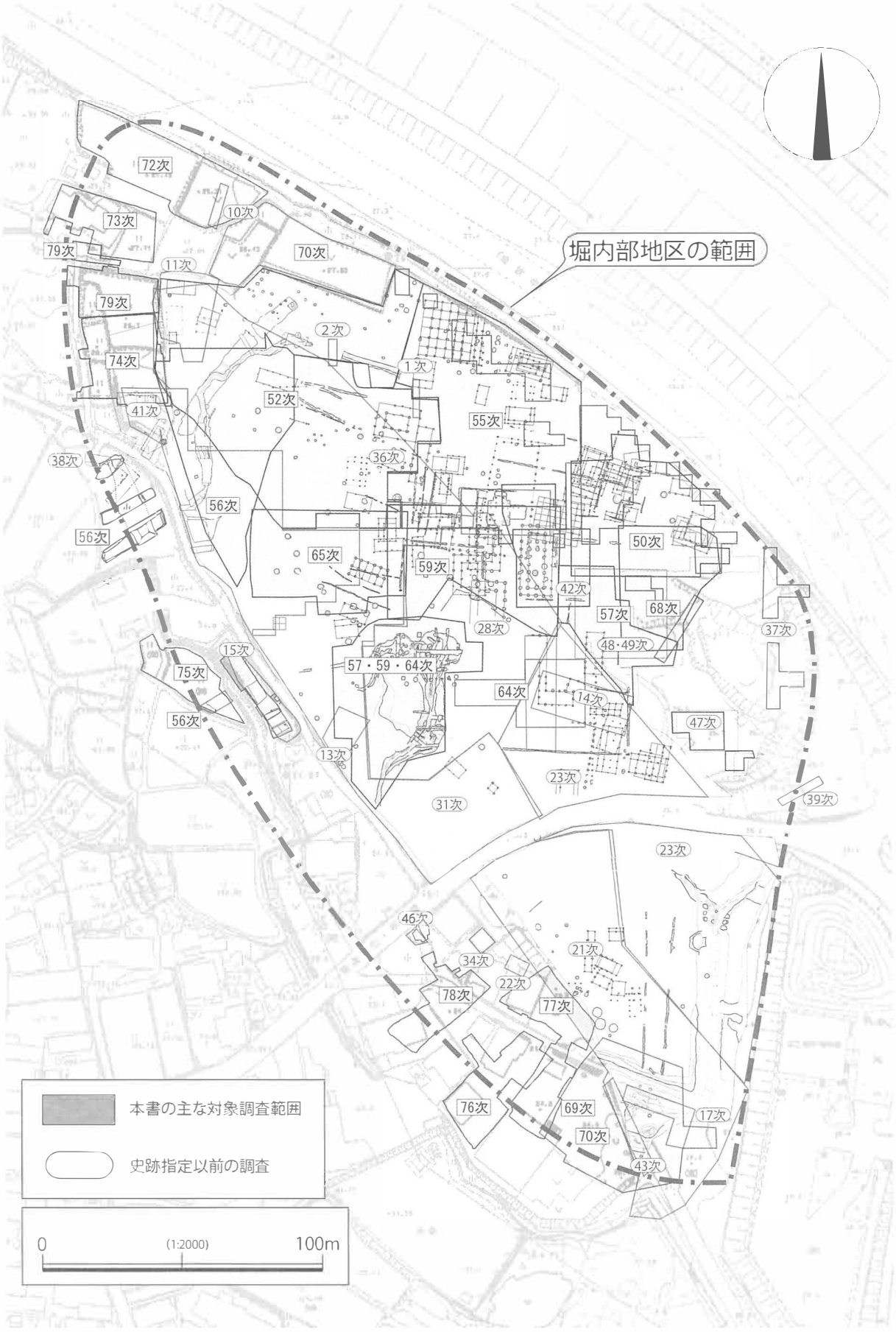


図２　柳之御所遺跡の調査範囲図

とみられる倉町遺跡など、各遺跡についても順次追加指定を行い、遺跡の保護管理に努めている。柳之御所遺跡に関連する範囲でも、未指定の範囲などが残されており、内容の解明や遺跡保護にむけての調査等が現在も進められている。また、史跡「柳之御所遺跡・平泉遺跡群」の柳之御所遺跡及び平泉町内の史跡地については、平泉町により保存管理計画が策定されており、それに基づいて管理が行われている（平泉町・平泉町教育委員会2006）。

岩手県教育委員会では遺跡の重要性を鑑み、堀内部を中心に史跡整備事業を平成15年より具体的に行い、「平泉遺跡群調査整備指導委員会」による指導を得ながら発掘調査と整備を進めてきた。整備計画等は表１のとおりである。一定の整備が完了した平成22年度から、史跡公園は一部の整備を残し整備事業を継続しているものの、公開を行っている。

また、出土遺物も主要なもの942点が平成22年６月29日付で重要文化財に指定されている（岩手県平泉遺跡群（柳之御所遺跡）出土品　考第588号）。なお、平泉町所有品も町内遺跡出土品として同時に重要文化財に指定されており、柳之御所遺跡の出土品の一部が含まれている。

表１　柳之御所遺跡の整備関連事項

年次	整備関連事項
平成８年度	『柳之御所遺跡整備基本構想』、史跡指定
平成10年度	堤防バイパス用地取得（岩手県）、調査事務所設置
平成13年度	『柳之御所遺跡整備基本構想』改訂
平成14年度	『柳之御所遺跡整備基本計画』
平成15年度	『柳之御所遺跡整備実施計画』
平成17年度	『史跡柳之御所遺跡・平泉遺跡群保存管理計画』策定（平泉町）
平成22年度	史跡公園暫定公開
平成29年度	『柳之御所遺跡整備基本計画』改訂 『柳之御所遺跡ガイダンス施設整備基本構想』 『柳之御所遺跡ガイダンス施設整備基本計画』

第３節　調査組織と成果の概要

（１）調査組織

柳之御所遺跡発掘調査のうち堀内部の大規模な発掘調査の調査組織は下記のとおりである。

①史跡内容確認調査以前の発掘調査

【21・23・28・31・36・41次調査　調査主体：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター】

21次調査（1988（昭和63）年）　調査期間：1988年４月14日～11月30日

調査担当：三浦謙一、東海林隆幹、酒井宗孝、田鎖寿夫、中村良一、斉藤邦雄、平井進

23次調査（1989（平成元）年）　調査期間：1989年４月７日～11月17日

調査担当：三浦謙一、東海林隆幹、田鎖寿夫、斉藤邦雄、星雅之

28次調査（1990（平成２）年）　調査期間：1990年４月10日～11月30日

調査担当：三浦謙一、田鎖寿夫、松本建速、斉藤邦雄

31次調査（1991（平成３）年）　調査期間：1991年４月10日～12月５日

調査担当：三浦謙一、松本建速、阿部勝則、斉藤邦雄

36次調査（1992（平成４）年）　調査期間：1992年４月10日～12月５日

調査担当：松本建速、鎌田勉、阿部勝則

41次調査（1993（平成５）年）　調査期間：1993年４月16日～12月14日

調査担当：松本建速、平澤祐子

【範囲確認調査　調査主体：岩手県教育委員会】

37次調査（1991（平成４）年）　調査期間：1991年５月７日～1991年10月31日

調査担当：小田野哲憲、熊谷常正、中村英俊、津島秀章

42次調査（1992（平成５）年）　調査期間：1992年５月７日～1992年12月

調査担当：小田野哲憲、熊谷常正、中村英俊、小野寺泰憲

【範囲内容確認調査　調査主体：岩手県教育委員会】

47次調査（1996（平成８）年度）　調査期間：1997年３月10日～３月31日

調査担当：佐々木勝、佐藤嘉広、鈴木徹、佐々木務

48次調査（1997（平成９）年度）　調査期間：1998年２月16日～３月27日

調査担当：佐々木勝、佐藤嘉広、鎌田勉、鈴木徹、佐々木務

49次調査（1998（平成10）年度）　調査期間：1998年５月11日～10月31日

調査担当：佐々木勝、斉藤邦雄、三浦謙一、鎌田勉、女鹿潤哉、日下和寿

②史跡内容確認調査（本書の主な対象）【調査主体：岩手県教育委員会】

50次調査（1999（平成11）年）　調査期間：1999年５月13日～10月31日

調査担当：斉藤邦雄、羽柴直人

52次調査（2000（平成12）年）　調査期間：2000年５月15日～11月17日

調査担当：斉藤邦雄、羽柴直人、佐々木務

55次調査（2001（平成13）年）　調査期間：2001年５月11日～11月13日

調査担当：斉藤邦雄、羽柴直人、佐々木務

56次調査（2002（平成14）年）　調査期間：2002年５月13日～11月29日

調査担当：斉藤邦雄、杉沢昭太郎、佐々木務、戸根貴之

57次調査（2003（平成15）年）　調査期間：2003年4月14日～10月31日

調査担当：斉藤邦雄、杉沢昭太郎、大関真人、戸根貴之

59次調査（2004（平成16）年）　調査期間：2004年５月10日～10月31日

調査担当：斉藤邦雄、佐藤嘉広、杉沢昭太郎、佐藤淳一、大関真人

64次調査（2005（平成17）年）　調査期間：2005年４月15日～９月30日

調査担当：佐藤嘉広、杉沢昭太郎、大関真人、吉田充

65次調査（2006（平成18）年）　調査期間：2006年５月７日～９月30日

調査担当：佐藤嘉広、西澤正晴、大関真人、吉田充

68次調査（2007（平成19）年）　調査期間：2007年５月７日～10月15日

調査担当：佐藤嘉広、西澤正晴、吉田充、岩渕計

69次調査（2008（平成20）年）　調査期間：2008年５月７日～12月10日

調査担当：佐藤嘉広、西澤正晴、岩渕計、千葉正彦

70次調査（2009（平成21）年）　調査期間：2009年５月７日～10月31日

調査担当：岩渕計、西澤正晴、櫻井友梓、半澤武彦

72次調査（2010（平成22）年）　調査期間：2010年５月７日～10月31日

調査担当：岩渕計、村田淳、櫻井友梓、半澤武彦

73次調査（2011（平成23）年）　調査期間：2011年６月１日～10月31日

調査担当：鎌田勉、村田淳、櫻井友梓、戸根貴之
74次調査（2012（平成24）年）　調査期間：2012年６月１日～10月31日
調査担当：鎌田勉、村田淳、櫻井友梓、佐藤郁哉
75次調査（2013（平成25）年）　調査期間：2013年６月１日～11月30日
調査担当：岩渕計、伊藤みどり、櫻井友梓、佐藤郁哉
76次調査（2014（平成26）年）　調査期間：2014年６月１日～11月30日
調査担当：岩渕計、伊藤みどり、櫻井友梓、大沢勝
77次調査（2015（平成27）年）　調査期間：2015年５月15日～11月30日
調査担当：岩渕計、村上拓、櫻井友梓
78次調査（2016（平成28）年）　調査期間：2016年５月15日～10月31日
調査担当：千葉正彦、村上拓、櫻井友梓
79次調査（2017（平成29）年）　調査期間：2017年４月17日～９月30日
調査担当：千葉正彦、村上拓、櫻井友梓、大関真人

（２）堀内部の調査成果の概要

①史跡内容確認調査以前の主な発掘調査の概要

【21・23・28・31・36・41次調査】

一関遊水地事業に伴う緊急調査である。第21次調査では内側の堀跡と外側の堀跡を検出・精査した。内側の堀跡は、次年度の23次調査と併せて約120m分が調査された。広く堀跡を調査した例は以後もなく、貴重な調査となっている。これに対し外側の堀跡は約５mの調査で、詳細な情報はあまり得られなかった。また、内側の堀跡では２箇所の橋が確認された。南側の橋跡は南に位置する伽羅之御所跡に通じると推定される。その橋跡の北に接して道路遺構が見つかり、遺跡内を北方向へ延長することがわかった。堀跡からは各種の遺物が大量に出土し、トン単位のかわらけのほか常滑や渥美などの国産の陶器や中国産の陶磁器、多様な木製品などが出土している。調査面積は9,750㎡である。

第23次調査は21次調査の北側から県道相川・平泉線までが調査範囲である。調査では21次調査で検出された内側の堀跡の調査を継続して行っている。県道の南側では、住宅による攪乱が多いものの数多くの柱穴や井戸・土坑などが検出されている。土坑には大形鉄製品である花瓶と火舎が出土したものがある。県道の北側では池跡の一部を検出した。そのほか後に中心部を区画すると判明した塀跡や大型の掘立柱建物などを調査している。調査面積は7,000㎡である。

第28次調査では、23次調査から継続して調査された池跡が東西36m南北46mの馬蹄形を呈し、要所に景石を配していることが判明した。その北東隣接地には大規模な四面庇の掘立柱建物跡が集中して検出された。その周辺には井戸が多数存在し、輪宝と橛とかわらけがセットで埋納された地鎮め土坑が発見された。金槌と鑿が出土した土坑、人面墨書かわらけが出土した井戸なども地鎮めの可能性がある。また寝殿造に類似した建物を墨画した折敷や、「人々給絹日記」の墨書折敷などの貴重な資料が井戸から出土している。この調査範囲は柳之御所遺跡では中心となる範囲と考えられ、その見解は大枠では現在でも引き継がれている。調査面積は4,500㎡である。

第31次調査では池跡の西側を広く調査し、無量光院跡側の張出しに対峙する位置に宝幢の可能性がある遺構を検出した。2000本を越えるちゅう木や、渥美の刻画文片、松鶴鏡、土壁や破風板などの建築部材も土坑や井戸跡から多数出土した。ちゅう木を出土する土坑はトイレ状遺構とも呼ばれ、排泄物を貯留した施設ではないかと考えられた。調査後は建設省との協議により遺構の保全を計ることか

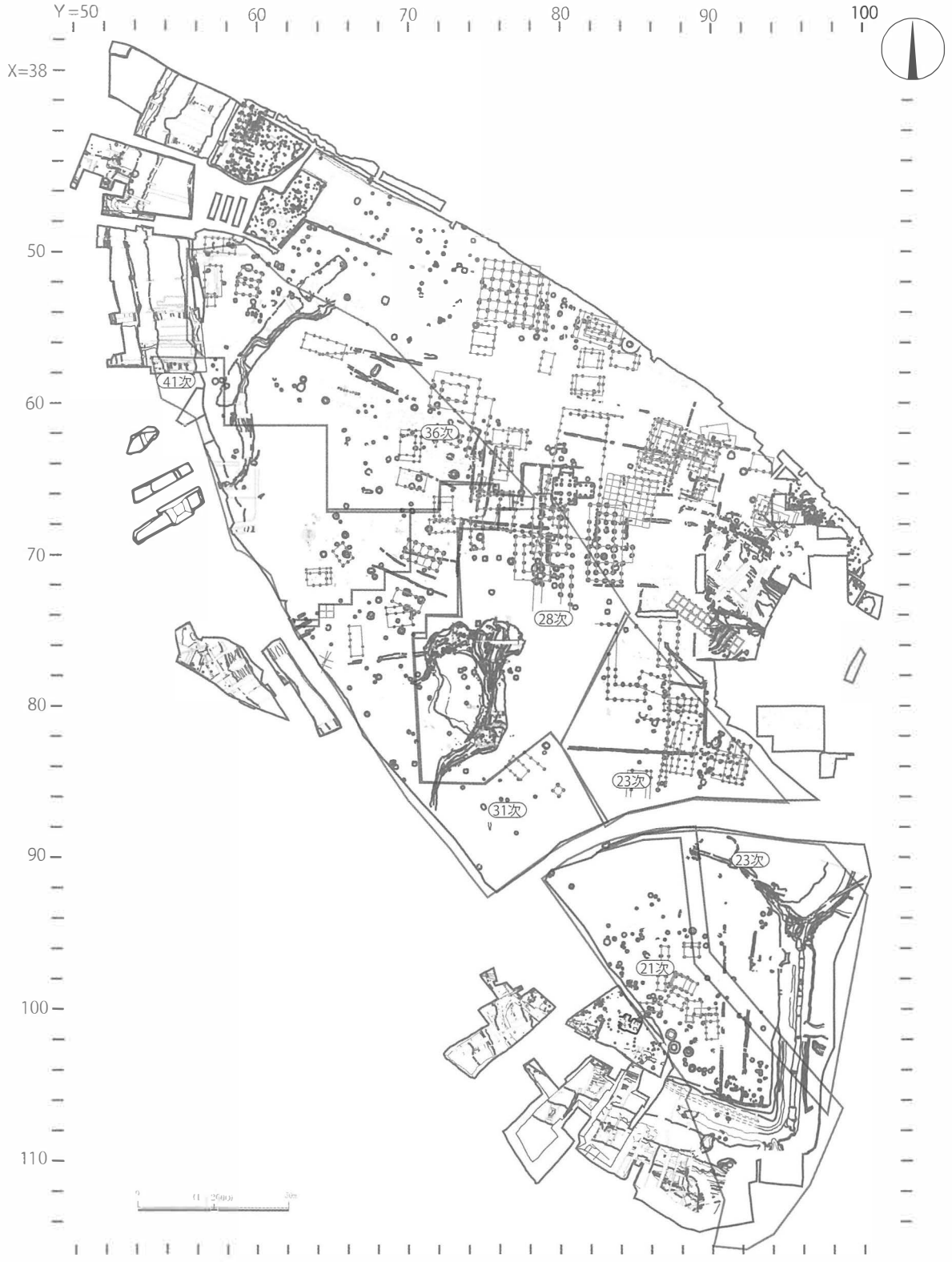


図３　緊急調査（21・23・28・31・36・41次調査）調査範囲

ら、砂による埋め戻しを行っている。調査面積は3,500㎡である。

第36次調査では遺構の確認調査を中心とした調査で、遺構の精査はあまり行っていない。遺構の詳細な情報は少なく、不明な部分が多く残る。この範囲はその後52次・56次調査で詳細な範囲確認が行われている。36次調査では11次調査で検出された整地層を確認しており、堀内部地区北西端に遺構の分布が広がっていることが判明している。この整地層は56次調査で再度調査している。調査面積は4,000㎡である。

第41次調査では堀内部地区の北西縁一帯を調査した。この調査も範囲確認調査の意味合いが強く、遺構の検出にとどまる部分も多い調査となっている。検出した遺構は、堀跡や掘立柱建物跡・塀跡・井戸跡・土坑などである。このうち堀跡は南側で確認された内側の堀跡の延長と想定されるが、それぞれの調査位置で断面形状が異なるなどの相違点が確認された。堀跡では橋も確認されている。調査面積は3,800㎡である。

【37・42次調査】

岩手県教育委員会による範囲確認調査である。岩手県埋蔵文化財センターの調査区の北側を中心に遺構の状況を確認している。この37・42次の２カ年にわたる範囲確認調査により、遺跡が段丘上の全体に広がることが明らかとなった。

第37次調査では堀内部地区の東縁の最も北上川よりを対象に調査した。トレンチとグリッド調査が主体だが、遺構の分布範囲を確認するため広範囲を調査している。遺構の分布状況や地形の状況などを確認しているが、調査目的から多くは検出にとどめている。その後、50次・68次調査において一部の調査区を再度調査している。調査面積は2,340㎡である。第42次調査では28次調査で確認された大形建物跡の延長を確認し、４間×９間の大規模な掘立柱建物跡と判明した。最終的には近世の遺構と判明したが大溝跡や、調査時には「整地層」として認識・報告されているが、55SX2竪穴建物跡などを検出している。調査面積は1,770㎡である。

【平泉町教育委員会による調査】

平泉町教育委員会による調査のうち、堀内部に関連する主な調査の概要を記す。

11次・13次・14次調査では掘立柱建物跡などが確認されている。これらの範囲は再度調査され後次の調査範囲に含まれる。13次調査では井戸跡から多量の瓦が出土しており、注目される。堀に関わる調査として、15次・17次調査があるが、小規模な調査のため内容が判然としていない。その後、大規模な調査により堀の存在が明らかとなるが、以降の堀跡に関わる調査に、38次・39次調査の範囲確認調査と43次の緊急調査がある。43次調査では橋の部材が多数出土している。このほかに住宅対応に関わる小規模な調査が複数地点で行われている。

【47・48・49次調査】

岩手県教育委員会による内容確認調査である。第47次調査は、調査範囲を23次調査の東側隣接地に設定して実施した。検出遺構は少なく、土坑・柱穴のみである。調査面積は180㎡である。

第48次調査は23次調査で検出された門の可能性が考えられた建物跡（23SB2建物跡）の再検討をおもな目的とする。建物跡は掘立柱建物跡と判明した。そのほか、12世紀の通常の建物と比べ、平面の傾きの軸線が北から40°ずれる大型建物を発見した（48SB1建物跡）。詳細な時期は不確定だが、近世に所属する可能性も考えられた。調査面積は200㎡である。

第49次調査以降、計画的に調査を行うことになる（第１次３カ年計画）。49次調査では過去の調査で検出されていた園池・中心建物群を囲む塀跡（23SA1）の確認を目的に実施した。北上川に面する東辺の塀跡の追跡を行った結果、それまで検出されていた部分から７ｍほど北に延長することが確認された。しかし、さらなる延長については検出されず、塀跡はこの部分で途切れていた可能性が高くなった。調査面積は500㎡である。

②史跡内容確認調査の概要

本報告書の主たる内容となる調査である。史跡整備を視野に入れ、史跡の内容確認と遺構情報の把握を目的としている。これ以降の内容確認調査では年次計画に沿って行われ、調査主体は岩手県教育委員会である。なお、３カ年ごとに調査計画を設定して調査を行っており、以下では各計画ごとに記す。

【第１次３カ年計画（49次より）】

50次調査（1999（平成11）年）

緊急調査で確認された園池や大型の建物など塀で囲まれた範囲の周辺を対象に、12世紀代の遺構の広がりと密度を確認することを目的として発掘調査を行った。主に上記の範囲の北側周辺での遺構分布状況の確認を目的として調査を行っている。その結果、12世紀代の遺構が調査当時の北上川の河岸縁まで分布し、柳之御所遺跡の一部が北上川の侵食で失われていることが確認された。また、塀や井戸状遺構の検出、複雑に重複する掘立柱建物などが多数検出され、複数時期にわたって遺跡が営まれたことが明らかになった。遺物では、銅印「磐前村印」と、器表面を漆の沁み込んだ麻布で被覆されたほぼ完形に近い白磁四耳壺が同一の井戸状遺構から出土した（50SE3井戸跡）。現状での北上川沿いにあたる遺跡北端部周辺にも多くの建物跡が分布することや、遺跡の性格の解明につながりうる文字資料の出土などの多くの成果が得られている。調査面積は1,800㎡である。

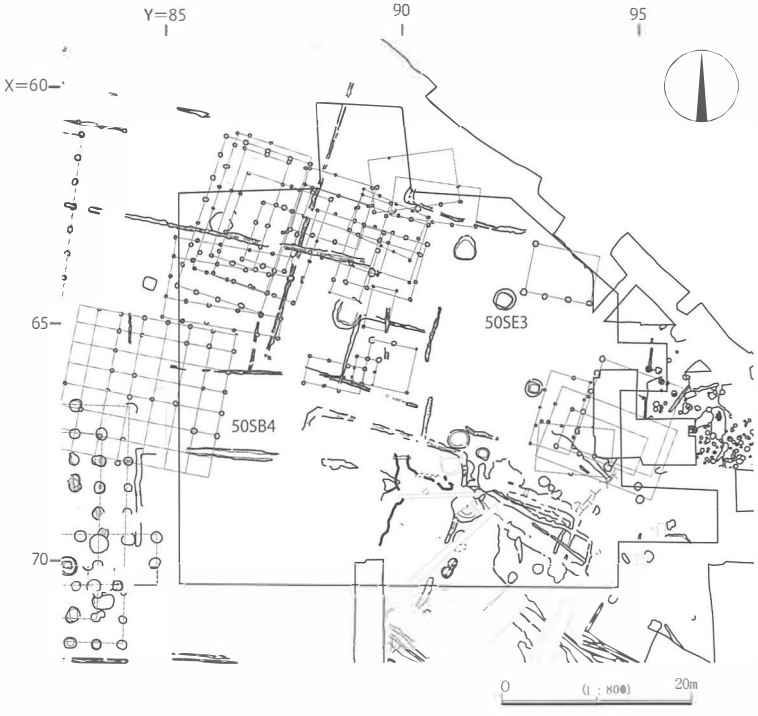


図４　50次調査遺構概略図

52次調査（2000（平成12）年）

52次調査では、50次調査と同様に遺跡の北側範囲での遺構分布状況の確認を目的として調査を行っている。50次調査範囲の西側が対象となっている。調査では、園池周辺域の中心建物群とは異なる範囲からも、これまでの調査で確認されていた建物とは、軸線の異なる大型の建物が検出された（52SB25建物跡）。これらの成果から、時期を異にして大型の建物で構成される複数の地域が存在したことが想定することができ、柳之御所遺跡の遺構の変遷を考えるうえで重要な課題を提示した。大型の施設の分布範囲の拡充や変化は、平泉における奥州藤原氏内部の重要な転換期やそれに伴う遺跡の変化を反映している可能性が考えられた。

また、柳之御所遺跡はそれまでの調査成果から、遺跡が機能した主体となる時期が三代秀衡の治世に対応する12世紀第三四半期とみられることが指摘されてきたが、新たに12世紀初頭あるいは前葉に位置づけられる土器群が発見された（52SE10井戸跡）。この成果により、遺跡の機能が12世紀前半代初代清衡の時期まで遡ることが明らかになった。これは政庁「平泉館」の性格あるいは、奥州藤原氏の平泉での確立期の状況を推定させる重要な発見であった。12世紀前半の遺構と遺物が確認されたことは、遺跡の検討を進める上で大きな成果となっている。これにより遺跡理解や研究に大きな変化が生じることとなった。調査面積は2,500㎡である。

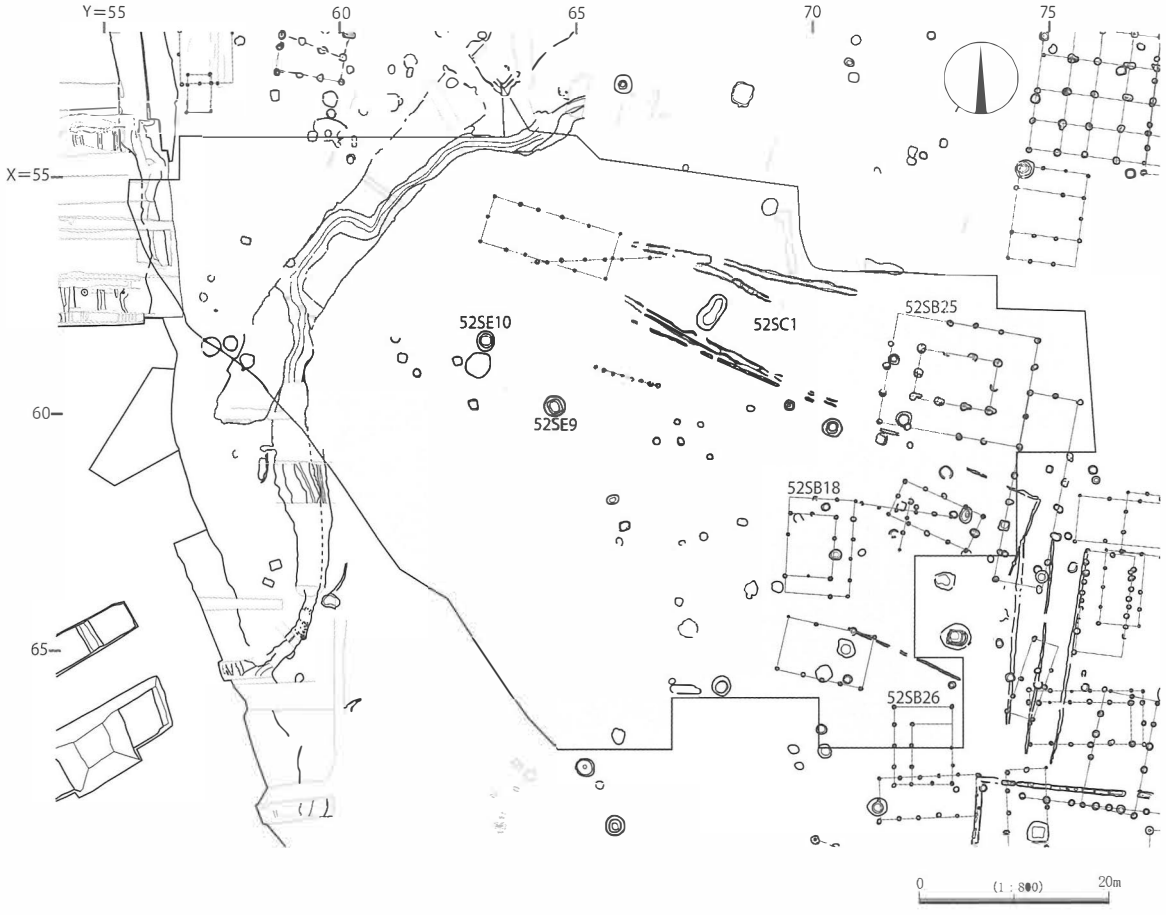


図５　52次調査遺構概略図

【第２次３カ年計画】

55次調査（2001（平成13）年）

52次調査から継続して、遺跡の北側での遺構分布状況の確認を目的としている。52次調査の北側に調査区を設定し、50次・52次調査と連続する調査区となっている。調査の結果、園池の北側で、遺跡の現況での北端部から6間×6間の大型の総柱掘立柱建物跡が検出された（55SB6建物跡）。遺跡内でも、もっとも大きな平面規模をもち、遺構の性格付けなどが注目された。これまで園池周辺に固定して想定していた柳之御所遺跡の中枢施設が、時期によって移動する可能性などが想定されるようになった。そのほかの遺構として、竪穴遺構（55SX２）や祭祀遺構（55SX1）が確認された。遺物では初代清衡の時代である12世紀前半頃のかわらけがまとまって発見され、52次調査の成果と合わせ、12世紀前半の遺物も一定量存在することが判明した。調査面積は3,100㎡である。

図６　55次調査遺構概略図

56次調査（2002（平成14）年）

遺跡西側の遺構分布状況の確認を目的に41次調査の範囲も含めて調査を行った。このほか、猫間ヶ淵の周囲にも調査区を設定し、堀内部地区北西部と堀内部地区を囲む２条の堀跡の追跡調査を実施した。２条の堀跡の位置を確認したほか、時期の検討なども可能となる成果を得ている。遺跡を囲む２条の堀跡のほかにも、周囲の遺構の中でもっとも時期的にさかのぼり、12世紀前半に機能したとみられる大溝（56SD40）が確認されたことは大きな成果である。この大溝には56SX16土橋跡が確認でき、土橋で溝を通過できたことがわかる。

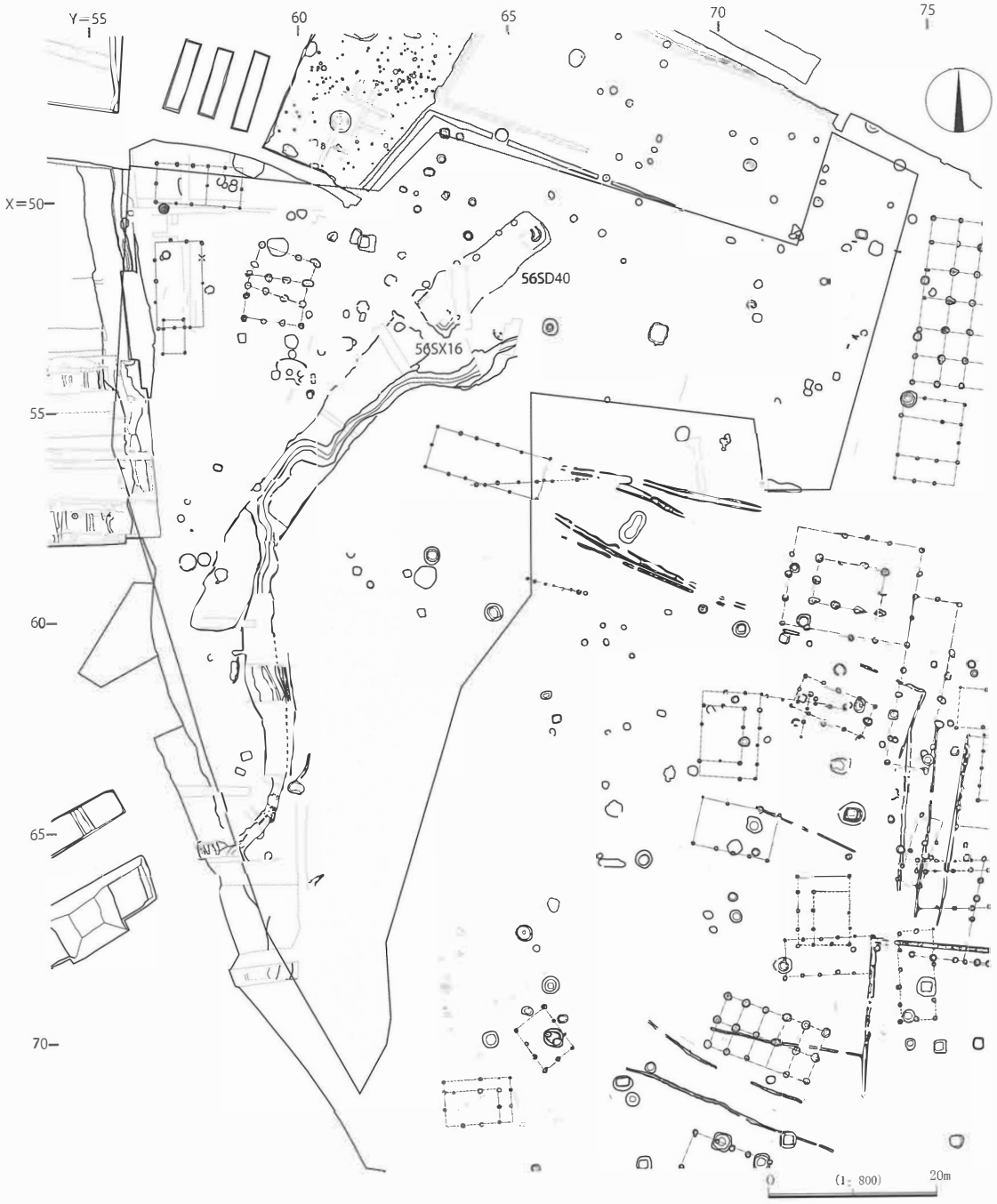


図７　56次調査遺構概略図

さらに、遺跡の北西部からは30数基のトイレ状遺構が集中して検出された。過去の調査で確認されたトイレ状遺構とは分布の様相が異なり、集中して見つかっている。これは各種の遺構の分布の立地的な特徴などが把握できた点で注目できる成果である。その用途など当時の生活の様子を分析できる資料が蓄積された。また、平泉では初めてとなる中国南部の吉州窯製の陶器片も出土し、奥州藤原氏の経済基盤の豊かさを改めて示すものとなった。このほか、掘立柱建物跡が複数確認でき、遺跡の全体で遺構の分布が把握できた。調査面積は4,000㎡である。

57次調査（2003（平成15）年）

前次の調査までで堀内部の位置する段丘上の遺構分布状況が把握されたことなどから、既往の調査成果の再検討なども含めて遺構情報の把握を目的とした調査が行われることとなった。57次調査では、23次調査（平成元年度）で造り替えが確認されていた園池についての詳細な規模や造成時期の把握を主な目的とし、池跡部分に調査区を設定した。また、塀跡の追跡と門跡の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、塀跡及び門跡を確認することはできなかったが、園池の造成時期や北半部の汀線が明らかとなった。

このほか、今回の報告範囲からは外れるが、高館南側裾部分の遺構分布の確認を目的として調査を実施している。調査面積は4,000㎡である。

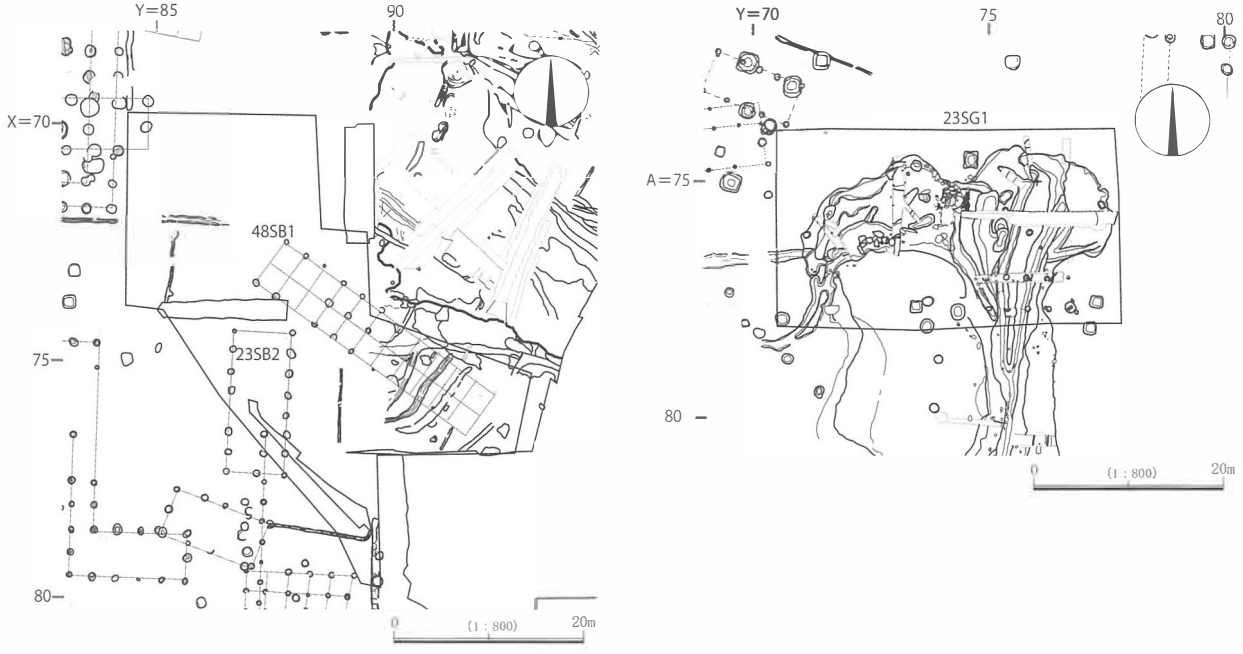


図８　57次調査遺構概略図

【第３次３カ年計画】

59次調査（2004（平成16）年）

前次の調査から継続して遺構情報の確認を目的とした調査を実施した。59次調査では、園池周辺に分布する大型の規模をもち中心的な建物群と見なされてきた遺構の規模や新旧関係の確定を主な目的として調査を行った。28SB4建物の全体形状を平面的に確認し、その他の建物の検討を行った。その

結果、建物規模や遺構の切り合い関係などについて一定の見通しを得ることができた。特に、28SB4建物跡の全形を確認し、遺構の切り合い関係を確認できたことは、これ以降の検討に多くの情報をもたらす成果であった。

また、23SG1池跡についても57次調査に続いて、一部に調査区を設定して調査を実施している。池跡に架かる橋跡を一部で確認しているほか（64SX1）、池跡の南側での状況を確認している。調査面積は3,500㎡である。

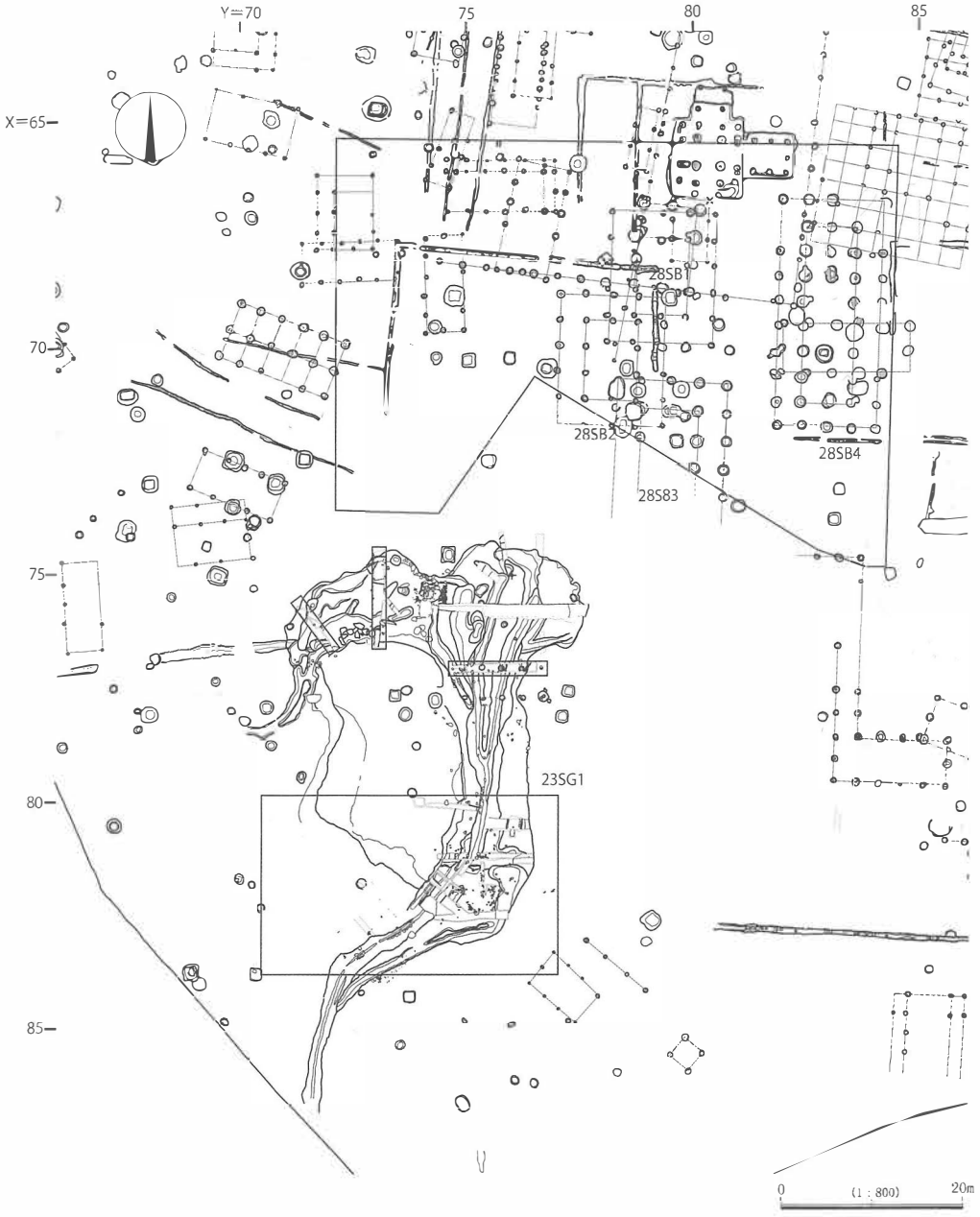


図９　59次調査遺構概略図

64次調査（2005（平成17）年）

57・59次調査で一部に調査区を設定し多くの情報を得た23SG1池跡を対象に、①池に架かる橋、②

不明瞭だった池南西部の汀線、③園池東側への施設の広がりを確認する目的で実施した。調査の結果、①橋跡は古い段階の園池跡に付随するもので、東西方向に長軸を持ち、桁行７尺（約210cm）間隔、梁行き10尺（約300cm）の４間×１間の掘立柱構造によるものであること、②池南西部は岸と見られる小さな盛り上がりと池底の痕跡を確認し、新段階の園池跡は中島を持つ園池であること、③削平のため残りが悪いが、井戸２基、土坑２基、柱穴数基が新たに確認された。調査面積は2,500㎡である。再調査のため、出土遺物は多くないが、池の堆積土から修羅が発見された。

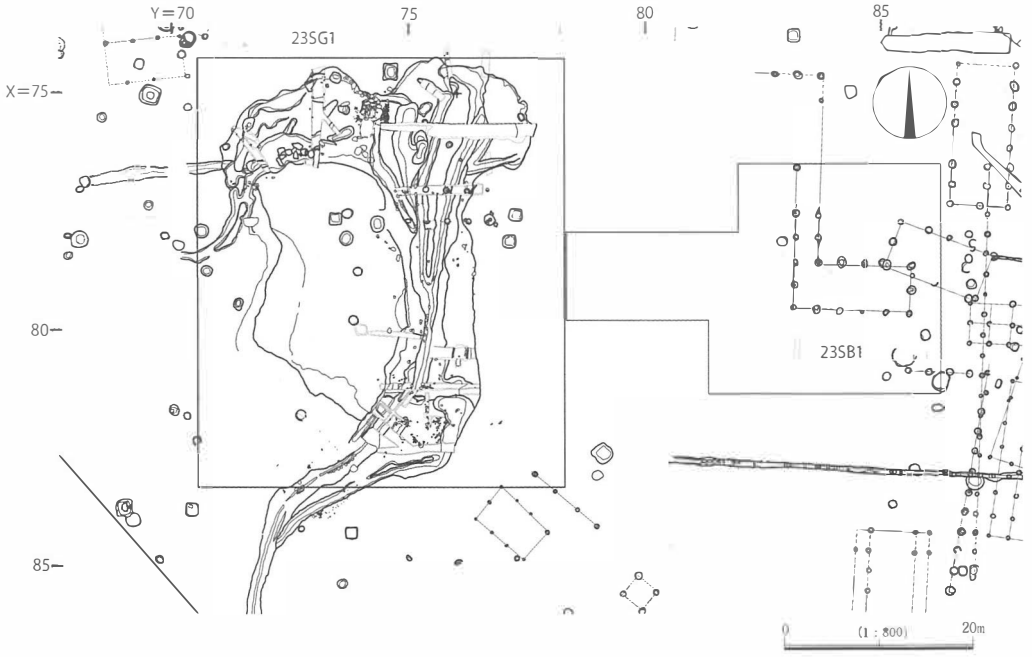


図10　64次調査遺構概略図

65次調査（2006（平成18）年）

65次調査では中心域の周辺の再調査を行い、55SX2の構造把握、大型建物跡が集中する中心域西と北側で、塀・柵・門などの遮蔽施設の検出とその付近に位置する掘立柱建物跡の再確認を目的とした。

調査の結果、55SX２竪穴建物跡の再調査では、平面規模などの基本的な内容では既往の調査所見とは大きく異なることはないが、柱穴規模が再検討された。

西側調査区では31SB5建物跡について、以前の調査で検出されていた柱穴のほかに新たに柱穴が確認され、５間×２間の総柱建物跡であることが確認された。この成果により、建物跡は倉町遺跡（平泉町字倉町所在）で検出され、「高屋」と解釈された建物跡と類似することがわかった。目的と

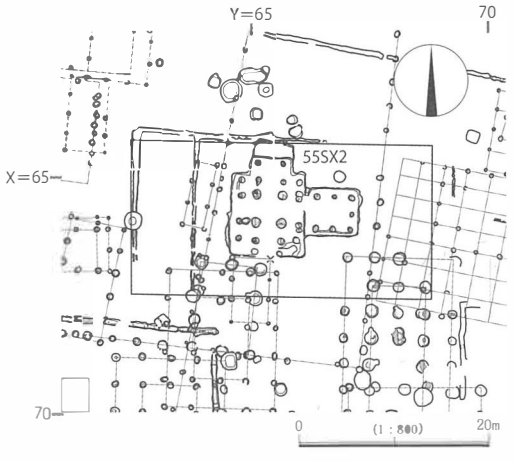


図11　65次調査遺構概略図（1）

していた中心部を区画する塀跡などの痕跡は確認できなかったことから、遺構としては中心区画の西側には明確な区画施設がなかったと想定できる。調査面積は2,500㎡である。

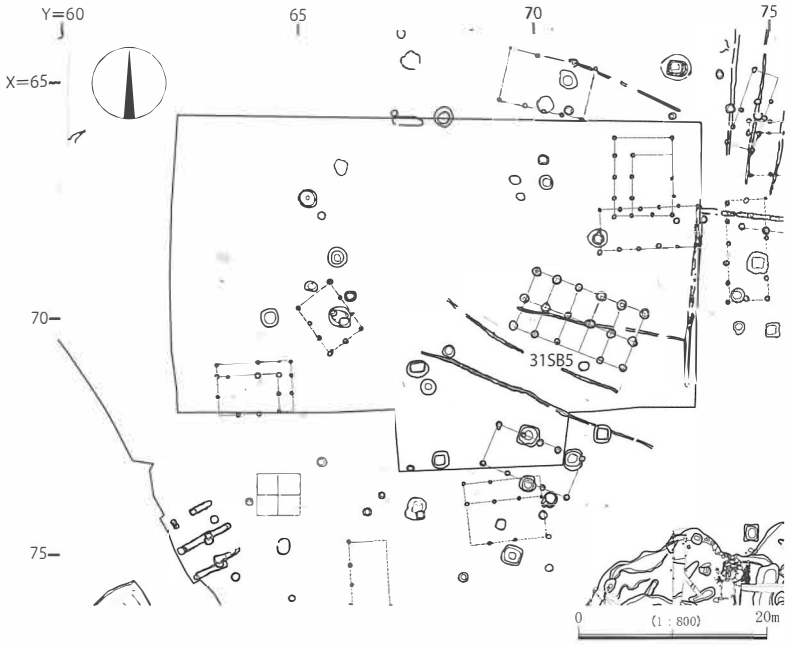


図11－2　65次調査遺構概略図（2）

【第４次３カ年計画】

68次調査（2007（平成19）年）

中心域周辺の調査を継続し、東側の低地部についての状況を確認することを目的として行った。68次調査は、地形の観察から北上川の方向へ下がる地形が観察できる位置に設定し、この周囲の遺構の状況や当時の地形状況の確認を目的としている。

調査の結果、12世紀から近世の整地層（上位）と12世紀の可能性のある整地層（下位）を確認し、下位の整地層のさらに下層に10世紀頃の自然堆積層を確認した。この２面の整地層は、流水による削平を受けており、道路跡等の遺構は確認していない。低地部は整地が行われる12世紀当時においても、周囲に比べ地形が一段低い状況が想定され、南からの道路が延びる可能性は低いように思われる。また、10世紀の自然堆積層の上に整地層が施されていることから、整地層の範囲内においては堀跡や運河などが存在した可能性も低い

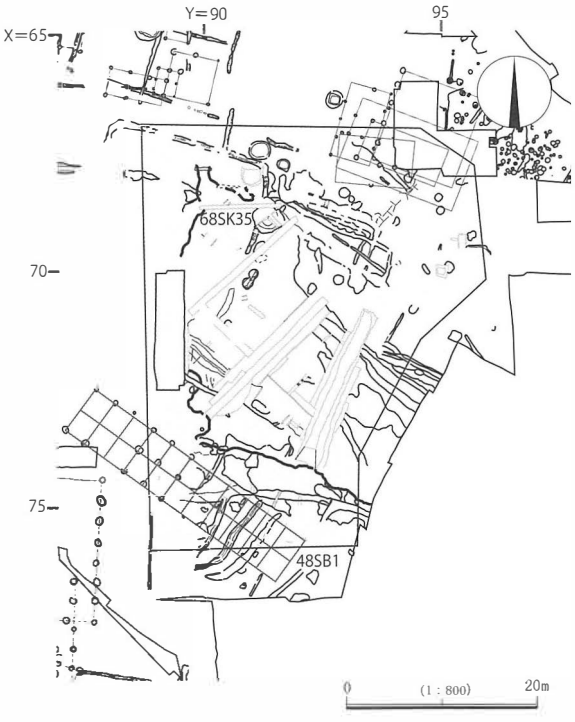


図12　68次調査遺構概略図

ことがわかった。調査面積は1,200㎡である。

69次調査（2008（平成20）年）

1988年から行われた緊急調査で当初の調査対象になったことや大量の遺物の出土があり注目されたものの、調査範囲が限定的で不明な点が多く残されていた遺跡南端部の堀跡の状況を把握することを目的として実施した。

内側の堀跡（21SD1）、外側の堀跡（21SD2）の２条の堀跡を検出したほか、外側の堀よりさらに外側に溝跡を確認した。２条の堀跡では、これまで時期関係に不明な内容が残っていたが、21SX4とした遺構の切り合いから外側の堀から内側の堀へと時期差があることを確認した。外側の堀跡からの出土遺物には橋部材とみられる部材や木簡等が出土している。特にこれまでの調査で不明な点が多く残されていた外側の堀跡（21SD2）について、一定の面積の調査を行ったことで土層の状況なども確認できたことは大きな成果となった。調査面積は2,500㎡である。

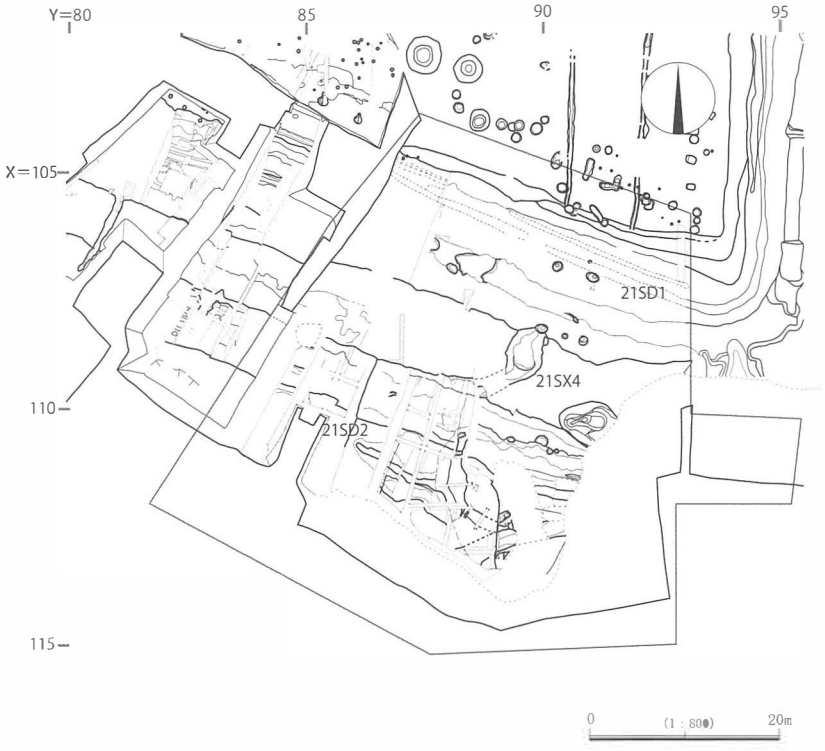
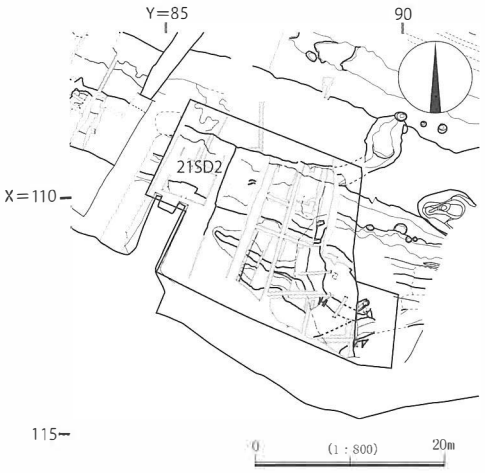


図13　69次調査遺構概略図

70次調査（2009（平成21）年）

遺跡の南北の２か所に調査区を設定して調査を実施した。南側の調査区では、69次調査で検出した外側の堀跡の詳細把握を目的として行った。調査範囲は69次調査と重なる部分である。調査の結果、69次調査では遺跡や堀の廃絶以降とみられる自然堆積層に覆われていた部分を精査し、外側の堀跡の規模が明確に確認できた。また69次調査と合わせた堆積状況の検討から、外側の堀には少なくとも２時期あることや埋没後整地されていること、重複する溝跡（21SX4）は３回目の堀跡の改修痕跡の可能性があることなどが指摘できた。

北側の調査区では、堀内部地区北端の未調査部分について調査を実施した。ここでは、後世に大幅な削平を受けているものの、井戸跡やトイレ状遺構が集中して見つかっている。井戸跡のうち１基は確認面からの深さが4.5mある比較的大型の遺構である。トイレ状遺構は56次調査でみつかった集中域がさらに北側に広がることが判明した。調査面積は1,700㎡である。



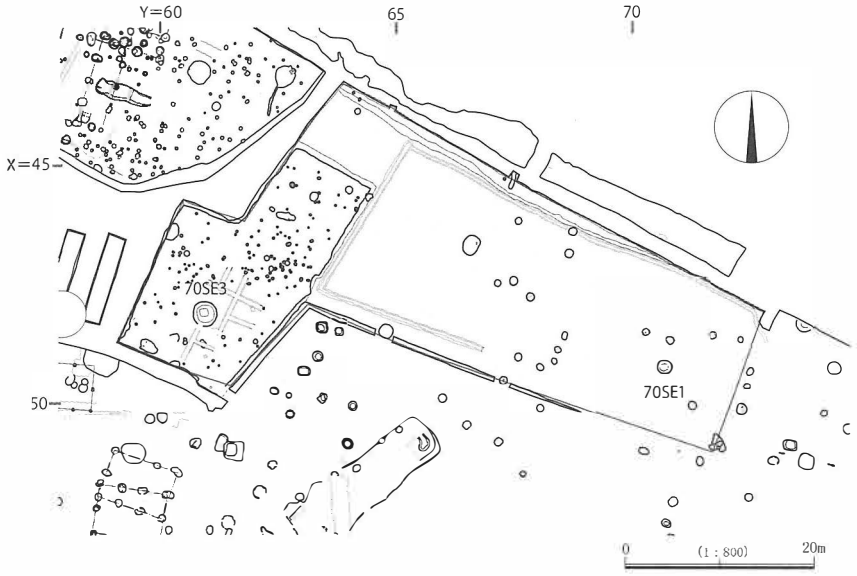


図14　70次調査遺構概略図

【第５次３カ年計画】

72次調査（2010（平成22）年）

柳之御所遺跡の堀外部と接する北端部周辺の調査を行った。遺跡の他の範囲と同様に、２条の堀跡を確認した。内側の堀（72SD1堀跡）と外側の堀跡（72SD2）の両者を確認し、一部の精査を行った。調査の結果、堀跡の規模や土層の差などを明確に確認できた。外側の堀跡は削平の影響もあり残存は良好ではなかったが、内側の堀跡は深さ４mほどの規模で確認できた。ただし、堀跡の周辺では削平の影響もあり、関連する遺構は確認されていない。

また、地形改変が少ない範囲では掘立柱建物跡や塀などの多くの遺構を確認し、遺跡北端部では堀に近接する位置まで遺構が分布することを確認できた。調査面積は1,500㎡である。

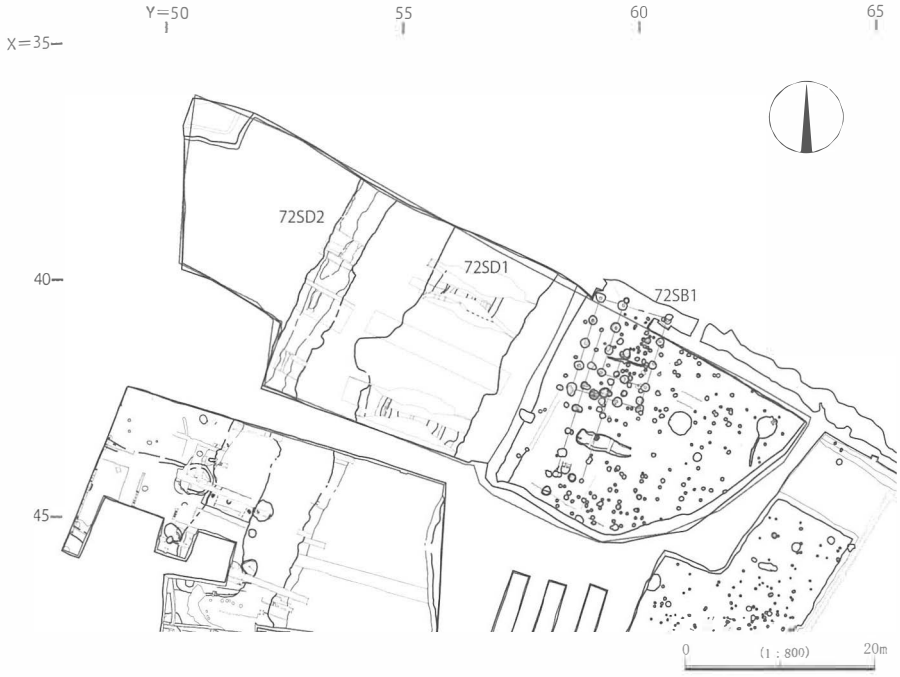


図15　72次調査遺構概略図

73次調査（2011（平成23）年）

72次調査範囲に隣接する南側を対象に調査区を設定し、堀内部地区と外部とが接する範囲を対象とした。２条の堀跡と堀外部で確認されている道路跡と一連の道路跡の可能性がある平行する２本の溝跡、性格不明の土坑を確認した。外側の堀跡では調査範囲のほぼ全域で、埋め戻しが行われており、整地等の痕跡も確認できた。堀跡の廃絶の状況や時期関係を検討する成果が得られている。

調査面積は800㎡である。

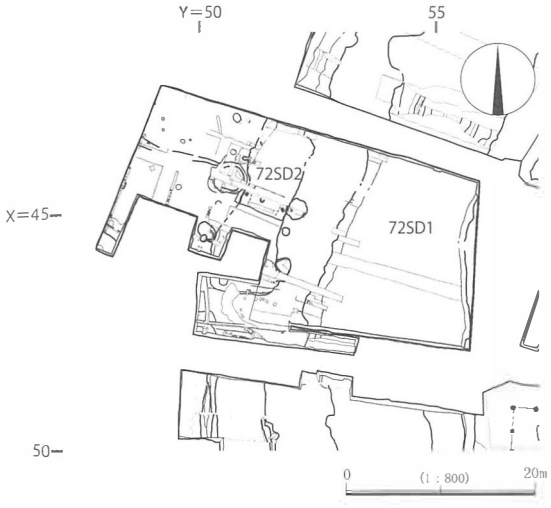


図16　73次調査遺構概略図

74次調査（2012（平成24）年）

遺跡の北端から西端にかけての堀内部と外部とが接する範囲を対象とした。調査前の状況でも堀の位置が水田の形状に反映されており廃絶の様相などが注目されていた位置である。内外の２条の堀跡、外側の堀跡周辺から堀外部へと広がる範囲の整地層を確認した。整地層は堀外部において、平泉町教育委員会が35次調査において確認しているものと対応すると考えられる。堀の構築に伴うものと堀廃絶時の２時期の整地層が確認された。外側の堀跡は幅６～７ｍ程で確認し、複数回の掘り直しが確認できるなど、内側の堀跡では幅10～12m、深さ４ｍ程で確認している。断面形状が急峻なＶ字状になるなど、遺構の特徴が把握できた。また、41次調査の範囲と一部が重複しており、41次調査で確認されていた内側の堀跡に架かる橋跡（41SX2）を再検出した。周囲には関連する遺構は検出されな

かった。

遺物では内側の堀跡で漆製品などを含む木製品が多く出土した。木製品では折敷や椀類のほか擬人化されたカエルが描かれた12世紀後半の墨画折敷片が出土した。また、土器類ではかわらけが多く出土したほか、絞胎陶器が複数点出土したことも注目できる。調査面積は1,000㎡である。

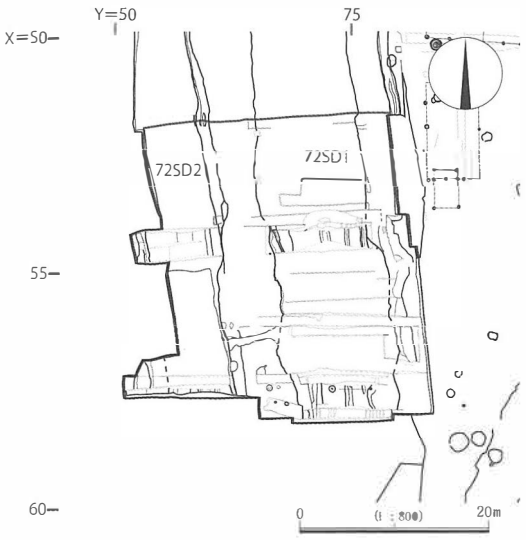


図17　74次調査遺構概略図

【第６次３カ年計画】

75次調査（2013（平成25）年）

柳之御所遺跡と無量光院跡との間の猫間ヶ淵跡周辺を対象に行っている。56次調査と一部重複するが平面的に広く検出を行った。

２条の堀跡の延長方向を確認したほか、２時期の整地層、無量光院跡方向から延びる12世紀後半の橋に関連する施設（75SX1）を確認した。内側の堀跡は幅６～７mで確認し、漆塗りの下駄などが出土したほか、題籤軸の出土も注目された。外側の堀跡では後世の溝などが複数重複していたが、規模や走行方向を確認できた。堀跡に接して整地が行われたことも確認しており、低地部での堀の構築状況を検討する材料が得られている。また、無量光院跡と柳之御所遺跡との間には、堀内部地区の範囲でこれまでも性格不明の土坑を確認し(36SX1・36SX2)、地形観察から無量光院側から延びる土手状の高まりが看取できるなど、2つの遺跡がつながる位置として注目されていた。この調査で、通路跡の可能性が指摘されてきた範囲で建物跡を確認したことは、隣接する両遺跡の関係を改めて補強する成果となった。調査面積は800㎡である。

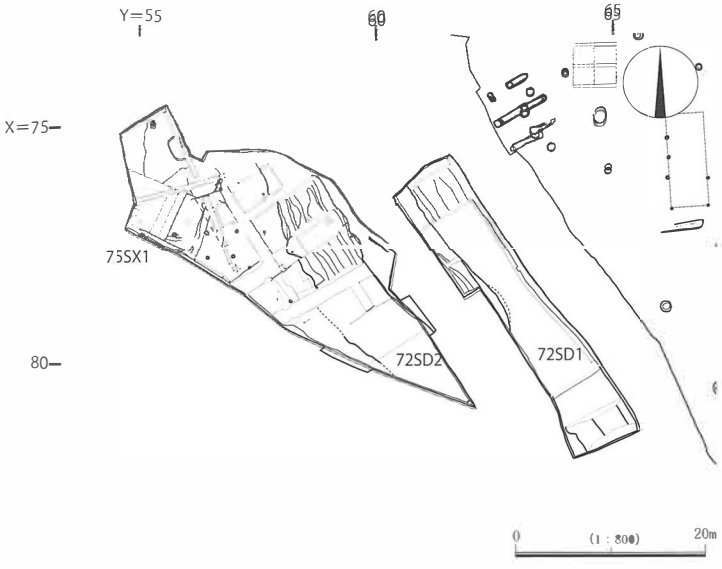


図18　75次調査遺構概略図

76次調査（2014（平成26）年）

69次、70次調査で実施した遺跡の南端部周辺を調査した。69・70次調査と75次調査までの周囲での堀跡の位置の確認や関連遺構の把握を目的としている。２条の堀跡のほか、これらと重複をもつ溝跡を確認した。２条の堀跡の土層の状況などは近接する調査範囲での把握内容と大きく異なる内容ではないが、周囲も含めて追認することができた。外側の堀では内岸側に人為層とその崩落土層が確認できた。また、内側の堀跡では人為堆積土に由来する崩落土層を確認し、２条の堀跡の間に遺跡の機能時には人為堆積による土層が存在したことがわかった。調査面積は800㎡である。

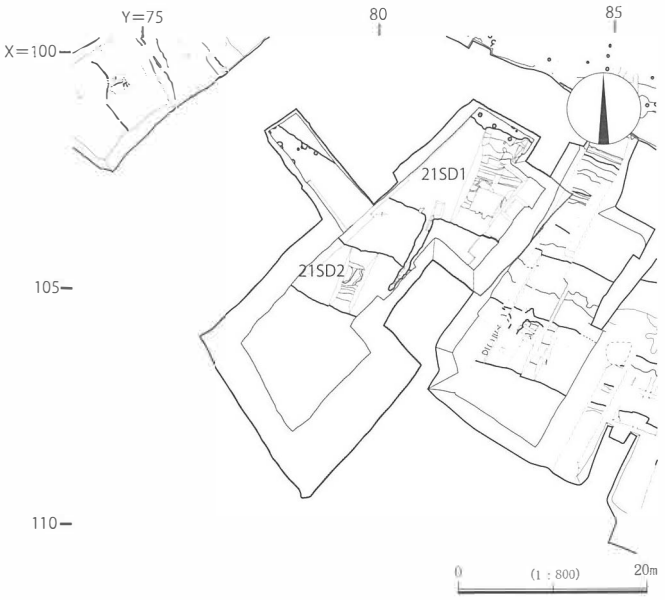


図19　76次調査遺構概略図

77次調査（2015（平成27）年）

76次調査と69・70次調査の間にあたる遺跡の南端部を調査した。２条の堀跡の状況の確認、76次調査で確認された人為層の状況の確認を目的としているほか、堀の内側にあたる遺跡縁辺部での遺構状況の把握を目的としている。調査の結果、76次調査で確認された人為層の延長は確認されず、周囲には広がらないことがわかった。このほか、２条の堀跡の間に整地層を確認したほか、外側の堀跡では掘り直し等の痕跡を確認した。外側の堀跡の埋戻しを行った人為土層が69・70次の調査範囲と76次調査の調査範囲まで連続することが確認できた。また、内側の堀跡より堀内部側にあたる内岸周辺では21次調査で確認された遺構との関連が想定できる特異な形状の土坑（77SK2・77SK3）が確認された。調査面積は1,000㎡である。

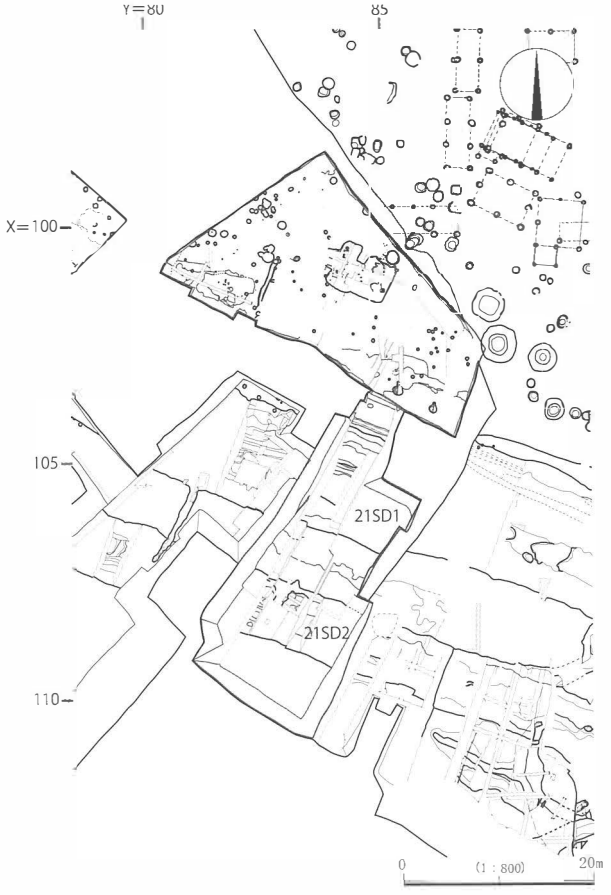


図20　77次調査遺構概略図

【第７次計画】

78次調査（2016（平成28）年）

76次調査の北側にあたる、遺跡の南端部周辺の調査を行った。76次調査と75次調査の中間にあたり、２条の堀跡の位置や走向方向の確認を目的として調査を実施した。内側の堀跡では、遺跡廃絶に前後するとみられる遺構最終段階の埋め戻しが確認できた。外側の堀跡では構築にあたって猫間ヶ淵の低地部分を人為的に整地していることが確認できた。これまでの調査でも部分的に整地等が確認されていたが、遺構構築に際して大規模な地業が行われたことが確認できた。調査面積は800㎡である。

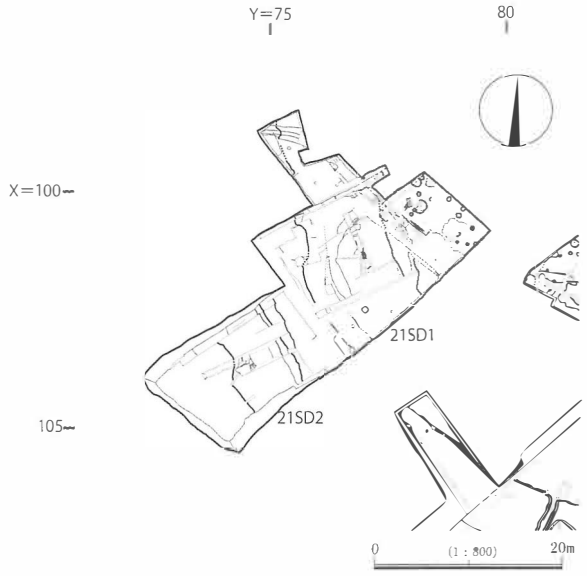


図21　78次調査遺構概略図

79次調査（2017（平成29）年）

73次調査と74次調査に挟まれた未調査の範囲を対象に調査を行った。堀内部と外部の接続する位置で、橋などの導入施設の確認を目的として調査を実施した。２条の堀跡を確認したほか、外側の堀跡では地山掘り残しによる土橋を確認した(79SX1)。また周囲では整地も確認でき、内側の堀跡が機能した段階でも、周囲の導入部としての機能が推察される成果を得られた。調査面積は800㎡である。

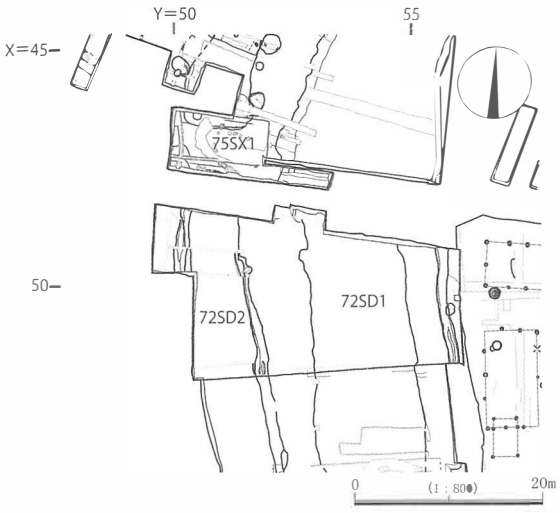


図22　79次調査遺構概略図

（３）指導委員会

岩手県教育委員会では、柳之御所遺跡の調査・整備にあたって、平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導・助言を得ながら事業を推進している。本指導委員会は、平成10年に岩手県教育委員会が柳之御所遺跡の調査を計画的に進めるに際して、専門的な見地から指導助言を受けるために立ち上げたものである。平成10年に「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」として設置した。その後、平成13年度から整備事業等を推進していく必要性から、史跡整備や建築史学からの検討を行うため、「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」と名称を改めた。また、平成15年度からは周辺に分布する関連遺跡もあわせて検討を行う必要性から、「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と名称を改めて柳之御所遺跡のみでなく関連する周辺の遺跡の指導助言を得るとともに、各分野で個別に詳細な検討を行うため「遺構検討部会」「整備検討部会」「保存管理計画検討部会」「ガイダンス検討部会」の４つの専門部会を設置している。「平泉遺跡群調査整備指導員

会」の構成委員は表の通りである。

なお、柳之御所遺跡に係る指導委員会はこれまでも調査、整備検討などの各段階において設置しており、過去に複数の委員会が設置され指導を得ている。本格的な発掘調査の開始にあたっては、平泉町を主体として昭和63（1988）年から主に発掘調査の指導のために「平泉遺跡群調査指導委員会」が設置され、平成５年度まで年２回程度開催されている。

表２　平泉遺跡群調査整備指導委員会（柳之御所遺跡調査整備指導委員会）名簿

委員名	所属（在任当時）	専門	任期（年度）
入間田宣夫	東北大学名誉教授	古代・中世史	H10～
牛川　喜幸	京都橘女子大学教授	造園学	H10～H18
○岡田　茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	考古学	H10～
小野　正敏	国立歴史民俗博物館名誉教授	考古学	H10～
◎河原　純之	元千葉大学教授	考古学	H10～H22
○工藤　雅樹	福島大学名誉教授	考古学	H10～H21
斉藤　利男	弘前大学名誉教授	中世史	H10～
佐藤　　信	東京大学教授	古代史	H10～H29
島田　敏男	奈良国立文化財研究所	建築学	H10
◎田辺　征夫	大阪文化財センター理事長	考古学	H10～
村田　健一	奈良国立文化財研究所	建築学	H11～H13
清水　　擴	東京工芸大学名誉教授	建築学	H13～
玉井　哲雄	国立歴史民俗博物館名誉教授	建築学	H13～
西村　幸夫	東京大学教授	都市工学	H13～
遠藤セツ子	メビウスの会代表	地元有識者	H14～
清水　真一	徳島文理大学教授	建築学	H14～
関宮　治良	古都ひらいずみガイドの会	地元有識者	H14～
田中　哲雄	元東北芸術工科大学教授	造園学	H15～
坂井　秀弥	奈良大学教授	考古学	H21～

◎は委員長経験者、○は副委員長経験者

第４節　報告書の作成の経過

これまでの柳之御所遺跡の主に堀内部に関わる発掘調査成果については、緊急調査分を報告した『柳之御所跡』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集）を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが平成７年に刊行している。この報告書で緊急調査分の遺構及び遺物の内容については一定の報告が行われている。緊急調査で得られた多量の遺構・遺物の図面や事実関係はこの報告書中に概ね示されているものと把握できる。

岩手県教育委員会が実施してきた内容確認の調査については各年度毎の調査成果を年次報告書として刊行してきた。既刊の年次報告等は例言に示した通りである。これらは概報としての性格をとっているが、各年度の調査成果及び遺物の内容については各調査の調査担当者により整理が行われ、一定の報告を行ってきたところである。また、『柳之御所遺跡－第57次発掘調査概報・猫間が淵跡発掘調

査報告・第１・２次内容確認調査総括報告書』（岩手県文化財調査報告書第118集）において第57次調査までの成果をまとめている。

一方で、１）内容確認調査では概報という性格上、各次にまたがった調査成果の把握が調査担当機関以外では難しくなっていること、２）史跡整備にあたって検討を進めてきた内容や遺構解釈の変更は随時、刊行物（『平泉文化研究年報』）で提示しているものの発掘調査報告書としては示していない内容があること、３）内容確認調査での進展により緊急調査成果も含めた遺跡の内容が把握可能となっていると考えられることなど、遺跡内容をまとめて報告する必要性が生じていた。そのため、堀内部の調査が概ね終了する平成29年度の調査成果分までを目途にこれらの報告書の内容をまとめて提示する必要性が考えられた。

作成の方針

① 内容確認調査の内容を基本とするが、緊急調査と範囲の重複も多く、事実関係の再検討も行われている。そのため調査次数に分割していずれかを選択して報告したのみでは遺跡内容を把握できず、また遺跡全体を総括することもできない。それらの一体的な把握のため必要に応じてそれ以前の調査内容についても掲載する。

② 奥州藤原氏が活動した時期を遺跡の性格が示されるもっとも主要な時期と想定し、その時期を本書の主たる対象とする。ただし、近世以降などの遺構についても遺構図においては、除外せず区別して掲載する。これまで一部で除外されていた遺構についても、図面掲載等は可能な範囲で行う。

③ これまでの発掘調査の成果報告として、遺構・遺物の基本的な情報の提示が重要と考える。性格など成果をふまえた解釈論等にのみ重点を置くのではなく、発掘調査で得られた情報（遺構の位置、切り合い関係、遺物の出土状況など）の提示を主な目的とする。また、遺物の図面等は膨大な量となり、各概報との重複も多くなることから年代的位置付けにおいて重要な資料など一部を選択して掲載する。

④ 上記を基本とした上で、遺跡の性格を把握する上で重要と考えられる遺跡の変遷等についても提示する。また、遺跡を評価する上で重要な論点をできうる限り把握した上で、遺跡の把握に必要な検討を可能な限り行う。

これらを基本的な作成方針として設定した。遺跡の概要や内容については本書で理解できることを目的としているが、個別の詳細図面や膨大な遺物図面については既往の概報に譲る部分も生じている。その場合にはその旨を記載する。

作成にあたっての基本的な遺構情報や遺物の整理等は各調査次の担当者を中心に行われてきたものである。また、史跡整備を進めるにあたっては、遺構情報の整理を担当者が行ってきている。本報告書の作成に際してはこれらの調査や検討の成果が基本となって行うことができたものである。 なお、これまでの調査担当者が多いことから、特に50次以降の本書が主たる対象とした調査時の主担当者による検討会を数度開催した。整理内容については平泉遺跡群調査整備指導委員会において随時提示しているほか、文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門（現　文化庁文化財第一課）の指導を得た。

これらの方針と経過のもと調査内容の精査等を行ったが、後述するように調査内容の詳細な把握や学術的な成果の検討には不十分な点も多く残る。それらは執筆担当の責に帰するものであるが、今後のさらなる検討の材料となることを期待するものである。

第Ⅱ章．柳之御所遺跡の調査研究史

第１節　発掘調査以前の「柳之御所遺跡」

遺跡名にある「柳之御所」という名称は同時代や近接する時期の史料には記されていない。そのため本節ではまず柳之御所の地名の由来について、同時代の名称でないことが前提になるが、斉藤利男、大石直正、千葉信胤の各氏の整理を受けながら再度示し（斉藤1992、大石1991、千葉1993）、遺跡及び現在の遺跡範囲に対しての認識を確認しておきたい。また、文学作品中における平泉についての研究もある（相原2014）。なお、下記の文中の文書名及び引用は『平泉町史　史料編』（平泉町史編纂委員会1985・1993）による。

「平泉館」について　柳之御所遺跡の研究においてもっとも強く関連性が指摘されてきた「平泉館」については『吾妻鏡』にいくつかの記載があるので、まず確認しておきたい。平泉内の諸施設が記載された『吾妻鏡』文治５年９月17日条の「寺塔已下注文」には中尊寺、毛越寺などの寺院と並んで、宿館の存在が記される。

一　舘事秀衡

金色堂正方、並于無量光院之北、構宿館。号平泉館。西木戸有嫡子国衡家。同四男隆衡宅相並之。三男忠衡家者。在于泉屋之東。無量光院東門構一郭。号加羅御所。秀衡常居所也。泰衡相継之為居所焉。

ここで記された諸施設は無量光院の周囲に位置したとみられ、後述するようにその所在の比定が大きな研究課題のひとつとして取り上げられることとなる。

また、それ以前の『吾妻鏡』文治５年８月22日条では、『吾妻鏡』文治５年８月21条で藤原泰衡方により火を放たれ焼亡した平泉館の様相が記される。長文のため内容のみまとめておく。

・源頼朝は８月22日の申の刻に、雨の中平泉館に着くが、既に主はいない。
・数町の縁辺は人もなく、累跡の郭内は地のみになっている。
・南西の角に一宇の倉廩が焼け残っている。中には沈・紫檀以下の唐木の厨子が数脚有り、牛玉・犀角・象牙笛・水牛角・紺瑠璃等笏・金沓・玉幡・金花鬘・蜀江錦直垂・不縫帷・金造鶴・銀造猫・瑠璃灯炉・金の器に盛られた南廷百などがあった。

これらが実態をどの程度記したものかは不明だが記載内容からは、一定の範囲をもつ区画であることや、倉が置かれていたことなどが窺える。このほか、『吾妻鏡』文治５年９月14日条からは、平泉館に陸奥・出羽両国の「省帳田文已下文書」が置かれていたこともわかる。遺跡の同時代史料として数や記載分量はきわめて少ないものの、「平泉館」の具体的な内容を示す史料である。またこれ以前の鎌倉方が平泉に来る以前の記載のため具体的な内容か不明だが、『吾妻鏡』文治３年10月29日条で、藤原秀衡が平泉館で死去したことが記される。なお、繰り返しになるが、「柳之御所」という名称はこの時期の史料にはみられない。

地名としての「柳之御所」　柳之御所の名前が現地の地名としてもっとも古くみられるのは、元禄９（1696）年の「毛越寺・中尊寺達谷旧蹟書出」である。そこには高館の北にあると記されており、現在の地名および遺跡名としての柳之御所の位置とは異なる場所を指しているとみられる。また、元禄14（1701）年の「毛越寺古跡書上控」にも同様の記載がみられる。

その後、柳之御所の名称が享保４（1719）年の『奥羽観蹟聞老志』にみえるほか、『平泉旧蹟志』などの平泉を対象にした史料や『安永風土記』などに確認できる。

宝暦10（1760）年の相原友直による『平泉旧蹟志』には下記のとおり源義経の居所もしくは清衡・基衡の居館と記される。

一　柳御所跡、高館の東方なり、秀衡、義経を此館に居らしむると云ふ、又一説には、清衡・基衡二代の居館と云ふ、

また、「平泉館」の項に柳御所跡と伝えられると記されており、両者が同一視されている。柳之御所を現在の位置に比定するのは、この相原と18世紀初頭（1703～1729）の「仙台領図」がもっとも遡るものとされる。江戸時代以降に描かれた各種の「平泉古図」でも高館に近接して柳之御所などの記載がみられる。

田辺希文による明和９（1772）年の『封内風土記』では柳之御所は清衡・基衡の居館と伝えられ源義経の記述もみられる。「平泉館」は加羅御所にあてている。安永４（1775）年の『安永風土記』においては、柳之御所は清衡・基衡の住居として記載され、「平泉館」がこれにあたるとしている。この両書では「柳之御所」の所在地についての記述はみられない。

なお、松尾芭蕉は元禄２（1689）年に平泉を訪れるが、『おくのほそ道』や『曽良随行日記』では、「高館」や「無量光院」、「秀ひらやしき」などの記載内容から遺跡範囲の周辺を通過したと考えられるが、柳之御所の名称は記されない。その約100年後の天明６（1786）年に平泉を訪れた菅江真澄の『かすむこまかた』には柳之御所が下記のとおり記される。

柳の御所は、清衡、基衡の館の跡にして、其むかし江刺ノ郡豊田ノ館をうつされて、

これらの近世文書から、「柳之御所」が現在の位置に比定されるようになるのは18世紀初頭以降と考えられ、その性格については源義経や奥州藤原氏三代に関連する居館と見なされていたが、清衡・基衡の居館との見方がとられるようになることがわかる。その後、18世紀中葉以降、現在の遺跡所在地周辺の地名が「柳御所」として字名に用いられ、遺跡名として用いられることとなる。明治期の高平真藤の『平泉志』でも同様の記載がみられる。

なお、同時代の史料にみられない柳之御所の地名の由来について、斉藤利男は中世の謡曲に求めている。謡曲「やしま」には源義経の邸宅を柳之御所と呼んでいる。また『平家物語』においても同様の記載がみられる。この「柳の御所」の語源について、斉藤利男は将軍の営を示す「柳営」の語が、源義経の居館に用いられたとの説を提示している（斉藤1992）。

第２節　柳之御所遺跡の発掘調査と研究

近代に入り、柳之御所遺跡が所在する範囲は遺跡として認識されるようになる。昭和初期の岩手県における考古学調査の初期を担った小田島禄郎による、柳之御所遺跡周辺を含む平泉周辺の踏査が考古学調査の嚆矢であろう（岩手県立博物館1998）。

昭和以降には柳之御所遺跡で発掘調査が行われるようになる。これ以降の柳之御所遺跡の発掘調査は大きく下記の４つの段階にわけることができよう。なお、平泉やその文化に対する研究全体を概観すれば、下記の柳之御所遺跡調査の１期以前に昭和25（1950）年の中尊寺での藤原氏四代御遺体学術調査や昭和27（1952）年の無量光院跡及び昭和29（1954）年からの毛越寺・観自在王院跡、昭和34（1959）年からの中尊寺境内の発掘調査などがある。これらの寺院跡を主な対象とした文献史学や建築史学、考古学、美術史学などの複数の分野からの総合的研究が平泉研究を進展させてきたことは

十分に留意すべきであるが、ここでは報告書の対象から、主に柳之御所遺跡に限定した内容にとどめる。これらの総合的研究が平泉のみならず、東北地方の歴史考古学の発展と学際的研究に大きく寄与したことは、重要な内容であることは改めて強調しておきたい。

１期　藤島亥治郎氏ら平泉遺跡調査会による調査（～1970年代・１～10次）
２期　平泉町教育委員会による確認調査（1980年代・11～20次）
３期　遊水地事業に伴う緊急発掘調査（1990年代・21次～41次）
４期　史跡指定後の内容確認調査（2000年～・47次～）

１期と２期の調査段階までの文献史学などの研究においては平泉館や柳之御所については言及が少ないが、清衡・基衡の居館を柳之御所に秀衡・泰衡の居館を伽羅御所にそれぞれ比定し、あわせて平泉の館と理解されている（高橋1958)。発掘調査の実施にあたっても、柳之御所及び高館、伽羅御所の周辺に平泉館が所在したとの想定により調査が行われている。平泉遺跡調査会による１～10次調査はいずれも小規模なトレンチ調査で調査位置は現在の堀内部地区のみでなく外部にも広がる。小面積のため全体像を把握するには至っていないが、現在遺跡として認識されている河岸段丘上の広範囲に遺構・遺物が所在することが確認されている。調査以後の研究でも、基本的には同様の認識が継続される。柳之御所遺跡が重要な遺跡であるとの認識のもと、１期の調査を主に担当した藤島亥治郎の言及からも遺跡の性格についてはそれまでと同様に周辺もあわせて平泉館にあてる記述がみられる（藤島1980)。

昭和50年代以降に再開された、11次以降の平泉町教育委員会による内容確認調査及び住宅など開発対応の調査でも堀内部地区及び堀外部地区の広範囲で調査が行われ、各所で遺構・遺物が確認されている。これらには堀内部地区で瓦がもっとも多く出土した遺構である13次調査の井戸跡やちゅう木類が認識された18次調査などの重要な成果も含まれる。これらの調査は小規模な面積を対象にしたもので遺構・遺物が確認されているものの、全容を把握するには至っていない。これらの調査により広範に遺構・遺物が分布することが認識されていたものの、北上川の影響等もありその残存は良好ではないと考えられていた。そのため、遺跡の重要性が認識されながらも、遺跡保護への方策に先んじて開発対応の調査が行われることとなる。

これ以降、３期及び４期の段階の昭和63（1988）年の大規模な発掘調査の開始により、遺跡の内容が明らかとなった。堀内部地区に関わる調査の概要、調査の経緯とそれ以降の経過については第Ⅰ章において既述のとおりである。大規模な発掘調査の開始により、奥州藤原氏及び平泉について寺院以外の居館での調査研究が大きく進展し、あわせて考古資料の分析も大きく進展した。本節では３期以降の調査の経過を遺跡の評価に関連して記しておく。大規模な発掘調査の開始により遺跡の評価が学術的な側面及び遺跡保存の側面から様々に行われるようになる。発掘調査はそれらと平行しながら進められ、平成４（1992）年12月の平泉遺跡群発掘調査指導委員会（委員長　藤島亥治郎）では柳之御所遺跡が『吾妻鏡』に記載された「平泉館」であると指摘した。遺跡の性格についての研究は後述するが、これ以降、多くの研究では柳之御所遺跡が「平泉館」に比定されて進められていく。３期の発掘調査に関わる調査報告書は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが刊行している（岩手県埋蔵文化財センター1995)。これにより多量の遺構、遺物の報告が行われているほか、多くの分析が行われ、平泉の考古資料が広く知られることとなった。しかし、そこでは遺跡の性格について特定は避けながらも加羅御所の可能性も残したかたちで記述しており、性格についての議論が続くこととなった。なお、この報告書に言及する場合には「埋文報告」と記載する。

その後、４期とした内容確認調査が岩手県教育委員会によって開始される。未調査範囲の調査と既調査範囲の再調査と検討が行われた。一連の調査では、12世紀前半に遡る土器群が出土し、遺跡の変遷が12世紀代を通して存在したことなど多くの事実が明らかとなった。４期の調査成果として特に大きい内容や３期での内容に修正が必要となった点を項目にすると、①12世紀前半の土器群が確認され、遺物の変遷の検討が可能となったこと、②遺物の確認と合わせ遺構変遷が12世紀代を通して把握可能となったこと、③堀内部全体の遺構分布状況が把握されたこと、④大規模な建物群の構成や変遷が検討されたこと、⑤池の変遷が検討されたこと、⑥堀の位置や変遷が検討されたこと、などが挙げられる。遺物の特徴は３期までで把握されていた内容も多いものの、遺構の内容を中心に再検討が求められ、発掘調査とその再検討が行われてきたことによる成果は大きい。

なお、史跡内容確認調査は３カ年ごとの計画を策定して行ってきており、１・２次の内容を総括した報告書も刊行した（岩手県教育委員会2004）。なお、この報告書に言及する場合には「１・２次総括」と記載する。ただし、その後も調査が継続したことや史跡整備にむけた内容の再検討により、遺跡理解に変更も生じている。変更内容などは既往の刊行物でも公開に努めてきたが（柳之御所遺跡調査事務所2005～2008）、これらの状況を鑑み、本書ではこの報告書内容とその後の変更内容などを追加し、これらをふまえた遺跡内容の報告を意図したものである。

本書は４期の段階の成果を主とした内容だが、３期と４期の成果は調査範囲が重複もしくは接しており、両者を合わせてはじめて柳之御所遺跡の堀内部の成果が理解できるものである。本書の主な対象となる４期の成果の意義付けは３期の成果を合わせて報告することで可能となるものであり、本書においては必要に応じて両者を含めて報告を行う。

第３節　大規模発掘調査以降の柳之御所遺跡をめぐる調査研究

大規模な発掘調査の開始に伴い、遺跡内容が明らかになるとともに研究成果が多く挙げられることとなる。調査担当者による調査成果のまとめも、その都度発表されているほか（三浦1993、西澤2007、岩手県教育委員会2017b）、既述のとおり調査の各段階で総括的な内容をもつ報告書も刊行されている（岩手県埋蔵文化財センター1995、岩手県教育委員会2004）。

柳之御所遺跡を含めた平泉遺跡群の研究は個別の論考などを挙げていくことは極めて広範に及ぶために網羅的には記しえないが、個別の遺物など多岐にわたる成果が挙げられている。平泉研究の論点は多くの分野にまたがり成果も多岐にわたるが、ここでは柳之御所遺跡の発掘調査成果の位置づけに直接関わる論点として、①遺跡の性格、②遺跡の変遷、③遺物内容についてそれぞれ代表的な内容に触れる。多くの研究成果が示されており必要なものは個々の記載で触れることとするが、本報告書で触れる以外にも多くの研究が蓄積されていることは言を俟たない。

（１）遺跡の性格及び機能

柳之御所遺跡の性格は、調査当初は近世以降の伝承を受け、清衡と基衡の居館の可能性が高いと考えられていた。発掘調査では当初、12世紀後半の遺物が多く出土していると考えられた。そのため、大規模な調査以降の論考では三代秀衡の時期の遺跡として論じられている。その後の内容確認調査で12世紀初頭に遡る遺物が確認されたことにより、柳之御所遺跡も12世紀後半のみでなく、12世紀の100年間を通して機能したことが確認された。この点は内容確認調査の大きな成果であり、各研究時点の遺跡への認識の大きな差異として存在することは留意すべき点であろう。なお、性格や機能につ

いては、直接的な資料がない場合に考古資料からは確定が難しいことが前提となる。また、100年間の奥州藤原氏の治世下における性格や機能の変化とそれに伴う可能性がある当時の名称の対応などの課題も残るが、現在までの研究史の概略を示しておく。

柳之御所遺跡の性格については平泉館に比定する見解が大規模な発掘調査以降に示される。なおこれらで多く言及され議論の焦点のひとつとなってきた「平泉館」は前掲の『吾妻鏡』の記載から、ごく簡略化すれば下記のように想定される。

・位置関係　金色堂の正方で、無量光院の北に位置する。一定の範囲の広さをもつ。
・性格・機能　居館であり公的な権限と行政的な機能をもつ政庁である。
・その他　平泉館の他に、常居所として加羅御所が存在した。

これら以外にも「館」や「宿館」の語義を詳細に検討した場合など多くの属性がありうるが、記載内容のみを単純にみた場合には上記のように解されてきた。遺跡の機能、性格については大規模な発掘調査の開始当初から大石直正や入間田宣夫、斉藤利男の各氏によって柳之御所遺跡の堀内部地区が平泉館にあたるであろうことが述べられてきた。なお、堀内部地区の調査を担当した三浦謙一は遺跡の性格の特定について慎重を期しており、平泉館に対応する可能性を示唆するものの、直接的な言及はなされていない。なお、発掘調査開始当初は秀衡期に限定される遺跡として理解され、これらの見解や研究もその年代観に従って示されてきたが、その後遺跡は清衡期から機能したことが明らかとなっている。秀衡期以前の遺跡のあり方は改めて検討の必要が生じたことにもなろうが、それについては当初から政庁が置かれたとみる見解が多い。

一方で異なる見解も示されている。埋文報告において松本建速は『吾妻鏡』の記述の解釈などから、断定は避けつつも柳之御所遺跡堀内部が加羅御所に比定できる可能性を挙げている（岩手埋文1995）。その後、菅野成寛は火災痕跡がみられないことなどを挙げて、柳之御所遺跡堀内部地区が平泉館にはあたらないと想定している（菅野2007）。

その後、入間田宣夫は松本建速や菅野成寛の根拠を検討し改めて平泉館にあたることを論じている。さらに堀内部のうち塀に区画された範囲が平泉館に比定でき、堀内部地区の塀より外側が西木戸の外として記される施設にあたるとの見解を示している（入間田2013ほか）。八重樫忠郎は考古資料の様相から柳之御所遺跡堀内部地区が平泉館であると改めて記している（八重樫2016）。なお、岩手県教育委員会では史跡内容確認調査において当初より平泉館と措定して調査整備を行ってきている。また、近年までの調査研究の成果を受けて、平泉館に比定できる可能性は高いと考えている（岩手県教育委員会2017a・b）。このように遺跡の性格には複数の指摘がなされてきたが、その後の多くの研究では柳之御所遺跡を平泉館に比定する、もしくはそれを前提として行われてきた。

また、遺跡の性格と関連して遺跡の形態などの祖形についても、奥州藤原氏の系譜などと合わせて議論が行われてきた。そこでは鎮守府胆沢城の形態に原型を求めるものや（斉藤1992）、安倍氏の居館などに系譜を求めるものがある。近年では、安倍氏の居館などの東北地方在来の居館系譜を論じる中で、払田柵から大鳥井山遺跡などの清原氏の居館の系譜を求める見解などが示されている（横手市教育委員会2009）。

（2）遺跡内の遺構変遷

遺構変遷について、埋文報告において、松本建速は４時期の変遷を挙げている（岩手埋文1995）。この段階では12世紀後半に遺跡の存続が限られると認識されており、それに基づいた遺跡理解が示さ

れている。その後、遺跡の継続期間が100年間にわたることが確認され、遺構変遷の検討もその時間幅と前提の中でおこなわれることとなる。羽柴直人は遺跡内の遺構を６時期にわけて理解している（羽柴2004）。また、岩手県教育委員会でも、１・２次総括ではその時点での見解を示した（岩手県教委20004）。しかし、その後史跡整備を進めるにあたって岩手県教育委員会では、史跡整備を視野に入れた検討を行い、５期程度の変遷を想定している（柳之御所遺跡調査事務所2005～2008）。これ以外にも八木光則や八重樫忠郎が変遷案を示している（八木2001・八重樫2015）。

これらの検討では遺構の切り合いや建物の軸方向を基にしており、基本的な検討項目は一致する部分が多い。遺跡内では柱穴を中心に遺構同士の切り合い関係が認められない遺構が多く、また遺跡全体の遺構残存の不良や検出面及び埋土の土質の特性などもあり、切り合いや前後関係の認定自体にも困難を極める部分が多かったことも、遺構変遷の把握を難しくしている。このほか、遺跡全体の範囲での変遷とするか、中心域の継続性を想定して地区ごとの変遷をみるかなどの差もあり、各論考では細部に相違が存在する。

参考に代表的な検討事例での遺構変遷の概要を示すと下表のとおりである。

表３　柳之御所遺跡の建物変遷案の対照

岩手県教委2004		柳之御所事務所2008		羽柴直人2004		岩手埋文1995	
Ⅰ期	28SB6・28SB2・28SB8・55SB5・50SB6ほか	Ⅰ期	55SB5・55SB6 28SB6	1・2期	28SB3・28SB6 55SB5	Ⅰ期	28SB6
		Ⅱ・Ⅲ期	28SB1・2・3 28SB4 23SB2　ほか	3期	28SB2・28SB8 50SB6	Ⅱ期	28SB3
Ⅱ期	28SB3・28SB1・50SB6Aほか	（Ⅳ期）	50SB6 31SB5	4期	28SB1・31SB7	Ⅲ期	28SB2→28SB1 28SB4
		Ⅴ期	52SB25 50SB4　ほか	5期	28SB4 55SX2	Ⅳ期	28SB8
Ⅲ期	28SB4・55SB6・52SB25・31SB5ほか			6期	55SB6・52SB25 50SB4		

※各研究における時期区分はそれぞれで上表のように対応するものではない。特に埋文報告では全ての遺構を12世紀後半と捉えており、実年代の設定が異なる。ここでは相対的な変化を示すため、便宜的に並べている。

（３）遺物を主対象にした研究

土器類　かわらけ　遺跡内でもっとも多く出土し、年代的な検討を可能とする資料であるかわらけ類には多くの研究がなされてきた。編年的な検討に限定しても、いくつかの見解が示されてきた。研究初期の成果に松本建速のものがある（松本1995）。その後、柳之御所遺跡出土資料を中心に羽柴直人や佐藤嘉広などの研究があり（羽柴2001・佐藤2005）、これらの土器編年を受けて整理された成果もある（井上2016）。これらの土器変遷の検討には細部に相違もあるものの（表４）、共通理解が得られている部分も多い。まず、ある程度の共通理解として挙げうる一定の項目をあげておきたい。

１）ロクロかわらけのみの時期、手づくねかわらけが導入される時期、手づくねかわらけが主体となる時期に変遷する

2）手づくねかわらけは年代幅を広く取った場合の12世紀中葉に導入される
3）ロクロかわらけは器高が低減化する。手づくねかわらけは口径が縮小化する。

表４　かわらけ変遷案の対照

	羽柴2001		井上2016		岩手埋文1995・松本	佐藤2005
第１四半期	１期	52SE10	１期	52SE10		52SE10
	２期	55SE1				55SE1
第２四半期	３期	52SE7	２期	55SE1		28SE2
				31SE2		28SE4
				28SE13		28SE15
				52SE7		28SE16
第３四半期	４期	50SE3	３期	50SE3	28SE4	21SE3
				28SE9	28SE15	52SE1
				52SE9	28SE16	
				28SE2	31SE2	50SE3
	５期	28SE16		28SE16	28SE2	55SX2
		55SX2		55SX2		
第４四半期	６期	28SE3	４期	28SE3	28SE3	30SE6
		30SE6		28SE11	28SE7	31SE7
		52SE8		30SE6	28SE11	52SE8
				52SE8	31SE6	

上記の理解が共通する一方で、各論考では遺構ごとの出土土器を変遷上のひとつの単位として扱う。そのため、各遺構の前後関係には相違も生じている。これは個別の土器をどの段階と想定するかの認識の差と、一単位として遺構出土資料を把握した場合に遺物群が内包する各要素のいずれを主たる要素として評価分類するかといった差にもよる。表に示したように個別の遺構の位置づけに差が生じているものの、絶対年代の与え方や重視する属性の差がある一方で相対的な変遷の枠組みや位置づけの差は大きく離れるものではない。また、位置づけが異なる資料も資料数が限定的であることや重視する属性の差、土器の群としての把握の差に由来する点が多い。

陶磁器類　国産陶器や輸入陶磁器類では八重樫忠郎が柳之御所遺跡堀外部地区の資料などを中心に遺跡の性格や位置づけを行っているほか（八重樫1995）、近年の集成もある（愛知県史編さん委員会2012）。輸入陶磁器類では堀内部の出土資料の検討を行った羽柴直人の論もある（羽柴2009）。また、輸入陶磁器類の科学分析や中国、博多での研究の深化に基づく、平泉出土資料への議論もある（徳留2018）。

その他　瓦は平泉では中尊寺と柳之御所遺跡堀内部がまとまって出土する範囲だが種別の提示が少ない。文様や技法の系譜や建物への利用方法が主な論点となってきた。鎌田勉は瓦当文様を中心に技術系譜を論じている（鎌田1994）。また、上原真人は遺跡内に持仏堂を想定する（上原2001）。現在までの出土資料では多様な軒瓦が確認できる（岩手県教育委員会2015）。

遺跡を特徴づける遺物のひとつである木製品類は三浦謙一が出土の概要をまとめているほか（三浦1995）、近年の出土資料などの検討もある（櫻井2016）。この他出土品は石製品なども含め多くの種別にまたがる（櫻井2012）。遺跡内から出土した木製品には建築部材も含まれ、冨島義幸の検討などがある（冨島2006）。

これらの研究史をみると、柳之御所遺跡に直接関わる論点である遺跡の性格・機能、遺構変遷の各項目ではそれぞれに見解が分かれる部分があることがわかる。

遺跡の性格や機能については多くの論考で柳之御所遺跡堀内部が居館・政庁の機能をもち、『吾妻鏡』にみえる「平泉館」に対応すると考えられているものの、異なる見解も少数ながらみられる。現在の平泉から得られる新規の情報の多くは発掘調査による考古資料だが、当然ながら考古資料と遺跡の当時の性格を対応させることは簡単な問題ではない。多くの研究や論点が示されてきた柳之御所遺跡についても、考古資料から何をもって「平泉館」に相当させうるかは言及が少ない。これは考古資料と遺跡の対応が単純な問題ではいないことを示すと同時に、奥州藤原氏の築いた平泉政権の実相についての検討課題が残ることにも起因しよう。また、初代清衡や二代基衡の時期の機能が各時期においてどの程度変化し、それらに対して秀衡期とみられる文献上の記載内容が敷衍できるのかなどの課題もあると思われる。

遺構の変遷については多くの議論が行われてきており、検討されてきた属性については共通する部分も多い。ただし、削平などによる遺跡の残存状況の不良さや土質等にも起因する調査と遺構検出の困難さなどもあり、確定できない部分が生じると考えられる。また、堀内部全体の把握の仕方によっても変化が生じる部分がある。

遺物に関する研究も多く行われてきたが、編年的研究など多く進められてきた課題もあり、一定の共通認識が得られている部分もあるものの細部には相違もみられる。また、検討が少ない遺物もあることや数量的な検討が難しい部分もある。

本書では、これらの諸課題をふまえつつ、これまでの調査成果を報告し各遺構・遺物の調査成果を報告するものである。既刊の報告書や概報によって一定の基礎データの提示がなされてきているものの、まとまった形で示されていないものや変更が生じた部分などがあり、それらの提示を行っていく。その上で調査成果から、遺跡の変遷や機能・性格について位置づけを行うものである。

ただし、本書での提示までにも多くの時間がかかっているものの、不十分な点が多く残されている。今後のさらなる検討と議論の材料となることを希望するものである。

表５　柳之御所遺跡の調査一覧

次数	年度	地区	調査目的	調査主体（編著）	報告書名
1	1969		内容確認	平泉遺跡調査会	『平泉館（柳の御所）第１次発掘調査略報』
2	1969		内容確認	平泉遺跡調査会	同上
3	1969		内容確認	平泉遺跡調査会	同上
4	1970		内容確認	平泉遺跡調査会	『第Ⅰ期第１次平泉館発掘調査略報』
5	1970		内容確認	平泉遺跡調査会	同上
6	1970		内容確認	平泉遺跡調査会	同上
7	1970		内容確認	平泉遺跡調査会	同上
8	1971		内容確認	平泉遺跡調査会	－
9	1971		内容確認	平泉遺跡調査会	－
10	1972		内容確認	平泉遺跡調査会	『柳の御所第３次発掘調査略報』
11	1982	内部	内容確認	平泉町教育委員会	『柳之御所遺跡発掘調査報告書-第11・12次発掘調査概報』岩手県平泉町文化財調査報告書第１集（以下、平文）、1983年
12	1982	外部	内容確認	平泉町教育委員会	同上
13	1983	内部	内容確認	平泉町教育委員会	『柳之御所跡発掘調査報告書－第13・14・15・16次発掘調査概報』平文第３集、1984年
14	1983	内部	内容確認	平泉町教育委員会	同上
15	1983	堀	内容確認	平泉町教育委員会	同上
16	1983	外部	内容確認	平泉町教育委員会	同上
17	1984	堀	内容確認	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第６集、1985年
18	1986	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第11集、1987年
19	1987	外部	内容確認	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第13集、1988年
20	1988	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『柳之御所遺跡発掘調査報告書－第20・22次発掘様調査報告』平文第15集、1989年
21・23・28・31・36・41	1988～1993	内部	開発対応	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	『柳之御所跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第228集、1995年
22	1988	内部	開発対応	平泉町教育委員会	『柳之御所遺跡発掘調査報告書－第20・22次発掘調査報告』平文第15集、1989年
24・25・27・29・35	1989～1992	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『柳之御所跡発掘調査報告書－第24次・25次調査概報』平文第19集、1990年 『柳之御所跡発掘調査報告書－第27次・29次調査概報』平文第24集、1991年 『柳之御所跡発掘調査報告書－第35次調査概報』平文第32集、1993年 『柳之御所跡発掘調査報告書－平泉バイパス・一関遊水地関連遺跡発掘調査』平文第38集、1994年
26	1989	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『東北電力鉄塔用地（No.49 No.48 No.47）発掘調査報告書』平文第20集、1990年
32	1991	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第29集、1992年
33	1991	外部	開発対応	平泉町教育委員会	同上
34	1991	内部	開発対応	平泉町教育委員会	同上
37	1992	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『平泉遺跡群範囲確認調査－第37次柳之御所跡発掘調査報告書－』岩手県文化財調査報告書第94集（以下、岩文）、1993年
38・39・40	1992	堀・外部	内容確認	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群範囲確認調査報告書-柳之御所跡第38次・39次・40次発掘調査』平文第33集、1993年
42	1993	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『平泉遺跡群範囲確認調査－第42次柳之御所跡発掘調査報告書－』岩文第96集、1994年
43	1993	堀	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第40集、1994年
44	1993	外部	内容確認	平泉町教育委員会	『平泉遺跡範囲確認調査報告書－高館跡第３次・柳之御所跡第44次発掘調査』平文第39集、1994年
45	1994	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『柳之御所跡第45次発掘調査報告書』平文第46集、1994年
46	1994	内部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第47集、1995年
47	1996	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成９年度）』岩文第103集、1998年 『柳之御所遺跡－第47・48・49次発掘調査概報』岩文第104集、1999年
48	1997	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第47・48・49次発掘調査概報』岩文第104集、1999年
49	1998	内部	内容確認	岩手県教育委員会	同上

次数	年度	地区	調査目的	調査主体（編著）	報告書名
50	1999	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第50次発掘調査概報』岩文第107集、2000年
52	2000	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡-第52次発掘調査概報』岩文第111集、2001年
53	2000	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査略報』平文第77集、2001年
54	2000	外部	開発対応	平泉町教育委員会	同上
55	2001	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第55次発掘調査概報』岩文第113集、2002年
56	2002	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第56次発掘調査概報』岩文第117集、2003年
57	2003	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第57次発掘調査概報・猫間が淵跡発掘調査報告・第１・２次内容確認調査総括報告書』岩文第118集、2004年
58	2003	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第85集、2004年
59	2004	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡-第59次発掘調査概報』岩文第121集、2006年
60	2004	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第92集、2005年
61	2004	外部	開発対応	平泉町教育委員会	同上
62	2004	外部	開発対応	平泉町教育委員会	同上
63	2004	外部	開発対応	平泉町教育委員会	同上
64	2005	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第64次発掘調査概報』岩文第123集、2007年
65	2006	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第65次発掘調査概報』岩文第125集、2008年
66	2006	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第108集、2008年
67	2006	－	試掘	岩手県教育委員会	
68	2007	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第68次発掘調査概報』岩文第127集、2009年
69	2008	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第69次発掘調査概報』岩文第130集、2010年
70	2009	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第70次発掘調査概報』岩文第133集、2011年
71	2009	外部	開発対応	平泉町教育委員会	『平泉遺跡群発掘調査報告書』平文第116集、2011年
72	2010	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第72次発掘調査概報』岩文第135集、2012年
73	2011	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第73次発掘調査概報』岩文第137集、2013年
74	2012	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第74次発掘調査概報』岩文第140集、2014年
75	2013	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第75次発掘調査概報』岩文第144集、2015年
76	2014	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第76次発掘調査概報』岩文第147集、2016年
77	2015	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第77次発掘調査概報』岩文第150集、2017年
78	2016	内部	内容確認	岩手県教育委員会	『柳之御所遺跡－第78・79次発掘調査概報』岩文第153集、2018年
79	2017	内部	内容確認	岩手県教育委員会	同上

第Ⅲ章. 発掘調査の成果

第１節　遺跡の概要

（１）基本土層

柳之御所遺跡内の基本土層は、大きくは下記のとおりである。ただし、遺跡内でも単一の様相を示すものではなく、地点の検出面などの標高の高低によっても異なるなど、Ⅳ～Ⅵ層を中心に細分も可能である。また、遺跡内の多くの範囲は宅地開発等により当時の地表面にあたる土層は残されていない。さらに地形造成などに伴う改変もあり、当時の整地面や旧表土と把握できる土層などの残存は低地部分などに限定的である。そのため、これらの地形の改変などの影響が大きいこともあり、遺跡内の遺構の多くはいわゆる地山面にあたる黄褐色粘土質の土層であるⅨ層での検出となる。基本土層とした下記についても比較的良好に確認できるのは猫間ヶ淵などの低地部分に限定される。

なお、既往の調査報告での層序との対応については参考のため、埋文報告（岩手埋文1995）との対応の概略は（1995－□層）として、また、土層の残存が良好な69次調査での土層との対応の概略は（69次－□層）として記した。

Ⅰ層　表土。（1995－Ⅰ層・69次－Ⅰ層）

Ⅱ層　宅地造成等に伴う盛土層。（1995－Ⅰ層・69次－Ⅱ層）

Ⅲ層　12世紀以降の堆積層。12世紀代の遺物及び近世以降の近現代までの遺物を含む黒褐色及び灰褐色の土層（69次－Ⅲ層）。

Ⅳ層　12世紀以降の堆積層。12世紀代の遺物を多く含み、炭化物を含む土層。Ⅲ層と土質は類似するが、炭化物や12世紀代の資料が多い出土遺物の様相から12世紀代に近い時期の堆積とみられる（1995－Ⅱ層・69次－Ⅳ層）。猫間ヶ淵に接する低地部分などの遺構埋土中では12世紀代の可能性がある土層が確認でき（69次－Ⅴ層）、このⅣ層中でも分層可能である。

Ⅴ層　12世紀代の表土。黒褐色土層。土層の残存が良好な位置ではこの土層上面が検出面になる。低地部では整地土層が確認できる位置もある。12世紀代の中でも整地などを境界に細分できる位置もあるが、遺跡中心部などの標高の高い地点では削平のため分層しての把握は困難である。（1995－Ⅲ層）

Ⅵ層　12世紀以前の堆積層。灰褐色の粘性の強い土層。10世紀前半に降灰した十和田a火山灰（To－a）とみられる灰白色火山灰を含むが、小ブロック状になるなど多くは二次堆積による。低地部では火山灰が層を成す位置もあり、上下に分層可能である。平安時代の土器を含む（69次－Ⅶ～Ⅸ層）。

Ⅷ層　12世紀以前の堆積層。黒褐色のシルト質土層。縄文・弥生時代の遺物を少量含む（69次－Ⅹ層）。

Ⅸ層　いわゆる地山にあたる土層。黄褐色の粘性の強い土層。遺跡内の多くで検出面となる土層である。より下層では細分可能である。（1995－Ⅳ層・69次－ⅩⅠ層）

（2）検出遺構の概要

柳之御所遺跡堀内部地区で検出されている遺構を種別に示すと表6のとおりである。これは岩手県埋蔵文化財センター（21・23・28・31・36・41次調査）、岩手県教育委員会による調査での検出遺構を合計した数値である。また、これらの調査範囲内に包含される平泉町教育委員会による調査（11・13・14次調査）も含むほか、同じく平泉町教育委員会により堀跡が検出された調査もある（15・38・40・43次調査）。

ただし、次数が異なる調査でも平面的に重複し同一と考えられるものは同一遺構としている。複数の調査次において異なる遺構番号を付されているものでも、平面的に連続するなど同一の遺構となりうる事例を含むが、同一と確定できない場合については別遺構としている。また、遺構とされていたものの、後次の調査で遺構として認定されなかったものについては、後次の調査成果により遺構ではないと判断されたものとして基本的に図上で省いている。ただし、後次の調査での見落としと判断できるものはこの限りではなく、図上及び遺構番号として残した。このほか、原図等に記載されているものの遺構か性格が判然としない表記として、明確ではない平面的な土層の相違などの表記も散見される。これらは図上に記されているが、図面による確認では不明確な部分が残ったものである。そのため、これらのうちには遺構として認定したもののもあるが、図上には線として残したものの遺構として認定できていないため遺構番号を付していないものもある。

これらの不確定とせざるを得ない前提条件があるため、下表で示した数値は現状で確定できた遺構の合計となる。そのため既往の調査概報などを合計した数値とは必ずしも合致しないが、数量自体の実数が大きな意義をもつものではなく、遺跡内での検出遺構の傾向を示すものである。

表6　柳之御所遺跡堀内部地区で確認された遺構

遺構種別	12世紀代	近世・近現代・不明	合計
堀・溝	4	－	4
橋跡	8（土橋を含む）	－	8
掘立柱建物跡	99	44	143
竪穴遺構	2	6	8
池跡	1	－	1
井戸跡	74	14	88
土坑	402 （上記のうちトイレ状）	369	771
塀跡	34	25	59
道路跡	5	－	5
性格不明遺構	102	102	
溝跡	411	411	
合計	629	971	1600

（3）本章の記述方法と内容

以下では、第2節でこれらの検出遺構を種別ごとに項を分けてまとめ、遺構と遺物の特徴を記載する。記述に際して、まず遺構の種別ごとに項を分け、遺跡全体の検出遺構をそれぞれの項で表に示す。その際、本書の主な対象時期である12世紀代の遺構を先表で示し、それ以外の時期の遺構を次表に示す。

次に、本書の主な対象調査である50次以降の調査成果を本文に記す。合わせて、その遺構から出土した遺物について遺構の時期決定の手がかりとなるかわらけや、遺構や遺跡の性格を検討する上で重

要な文字資料などの資料を中心に、それぞれの出土遺構の記載の中で掲載する。また、各遺構から出土した遺物で特筆すべきものについても記載するように努める。それ以外の遺物として、国産陶器類などの破片資料は遺跡を検討する上で重要な資料だが、数量が多く個々の資料ごとの差異は少ない。そのため、数量の把握を目的として第３節でこれらの遺物の全体の出土量や分布を示す。これらを含めた資料の実測図等は既刊の概報で多くを掲載してきている。個体ごとの差が少ない国産及び輸入の陶磁器類などの体部片などを中心に遺物実測図面の多くはこれらに譲る。図上の遺物番号については各報告書の掲載番号も付記する。50次調査から64次調査までの資料では掲載番号と登録番号を分けておらず、埋文報告及びその後の概報との区別のため「埋－□」「50－□」等と記す。また、65次以降の調査については掲載番号のほか登録番号も備考に付記する。かわらけの記載では口径・底径・器高などの器形の大きさを示すいわゆる法量値を記す場合が多い。その際、既往の研究での把握方法や法量値の分布の傾向から、ロクロかわらけ大皿では器高３～４cm程度を境に４cm以上のものを器高が高いと表現する場合がある。あわせて器高が高く、底径が小さいなどの特徴とあわせて「椀型」「皿形」と記す場合がある。また、手づくねかわらけ大皿では口径13～14cm程度を境に、口径15cm以上の資料を大型、口径13～14cm前後以下の資料を小型と記す場合がある。

なお、50次以前の遺構番号が付加されている遺構でも50次以降の調査で精査した遺構については本文で記載するほか、それ以前の本報告の主たる対象ではない50次調査より以前の調査で精査された遺構についても主要なものを中心に概要を触れる。また、調査次以降の検討により変更が加えられた事項についても、それぞれ記すこととする。具体的には、建物としての認識が難しいと考えられた遺構や、遺構の重複関係などの認定に変更が生じたものや疑義が指摘されてきたものがこれにあたる。

第２節　遺構と出土遺物

（１）堀跡・橋跡

柳之御所遺跡で検出されている堀跡と、遺跡を区画するような関連する溝跡は表７のとおりである。ここでは遺跡を区画する意味をもつ遺構を取り上げ、この他の溝跡は後述する。なお、これらの堀跡は異なる調査次数で検出され、調査位置が平面的に離れていたことなどにより遺構名称を異にして付している場合もあるが、その後の調査検討により同一の遺構と理解できるものである。

柳之御所遺跡では遺跡を区画する堀跡が２条確認されている。長大な遺構のため、既報での遺構名等は調査次数によって異なる場合がある。遺構名の対照は表７のとおりで、位置関係に基づき、外側の堀跡（21SD2・56SD39・72SD2）と内側の堀跡（21SD1・56SD38・72SD1）として以下の記載を行う。また、これらの堀に関連する遺構として、堀に架かる橋跡及びその周辺で確認された橋跡のほか（表８）、整地層や土坑などがある。これらの遺跡の端部に位置し、堀内部への導入部としての位置や機能などに関連するとみられる遺構についてもここで記す。橋跡やこれらの遺構は各遺構が関連する堀跡の項で記載する。

２条の堀跡のほかに遺跡を区画する性格が想定できる遺構に、遺跡の中央やや西側で検出された内溝（56SD40）と、遺跡の南端部で検出された外側の溝（21SX3）がある。これらはそれぞれ遺構名と合わせて記載する。

これまでの調査では堀に関連する位置として、21次・41次調査で南端部の多くと北端部の一部の精査を行っている。その後、69・70・76・77・78次調査で南端部の未調査範囲を対象に、56・75次調査

で猫間ヶ淵周辺の未調査範囲を対象に、72・73・74次調査で北端部の未調査範囲を主な対象に調査を実施した。そのため堀跡の調査は南端部の内側の堀跡の成果を除いて、多くは50次以降の調査成果が主となる。ただし連続する遺構のため、21・41次調査範囲の成果についても必要な内容について適宜触れる。なお、堀の土層観察は各調査次で行われてきた成果によるもので、層相の違いを大きく分けて捉えると後述するように各地点で概ね共通の様相が認識でき、層相の対応が可能である。しかし、近接した調査位置においても堀の土層の深さや対応関係の細部には実際の様相に差異がある場合もあり、それぞれの認識された層序を厳密に対応させて遺構全体を統一した土層名で示すことは困難である。ここでは、まずそれぞれの調査時での土層について、成因や特徴などを記載する。それをふまえ、各地点において類似もしくは同一とみられる土層とその成因などから、全体の変遷を把握するよう努める。

表７　堀跡とその遺構名の対照

	外側の堀跡	内側の堀跡	内溝	外側の溝
南端部	21SD2	21SD1		21SX3
猫間ヶ淵・その他	56SD39	56SD38	56SD40	
北端部	72SD2	72SD1・41SD2		

表８　橋跡とその位置

	外側の堀跡	内側の堀跡	その他	内溝
南端部	(69SX3付近に推定)	21SX35		21SX3
23SX12			56SD40	
無量光院側			75SX1	56SX1（土橋）
北端部	79SX1（土橋）	41SX2		

①南端部の様相

【概要】

園池等が所在する範囲より南側を便宜的に南端部として示す（図23）。柳之御所遺跡堀内部以外の遺跡範囲との関連では、周知の埋蔵文化財包蔵地としての伽羅之御所跡と低地を挟んで近接する位置にあたる。

南端部では遺跡を区画する遺構として、外側の堀跡（21SD2）と内側の堀跡（21SD1）のほか、外側を走る溝（21SX3）が検出されている。また、２条の堀に重複もしくは関連して、それぞれの橋跡やそれに関連する遺構のほか、整地層や土坑が確認されている。それらについても２条の堀跡と関連する遺構としてそれぞれの堀跡の項で記す。内側の堀跡（21SD1）のうち、東側を南北方向に走る部分は21・23次調査の対象範囲にあたり、この段階で精査・完掘されている。この範囲はそれ以降の調査は行われておらず、土層などについての新たな知見は得られていない。そのため、ここでは内側の堀跡についてはそれ以降の調査次にあたる、堀跡が東西方向に走る範囲の調査成果を主に記す。

【外側の堀跡（21SD2・56SD39・72SD2）】

遺構　概要　外側の堀跡は遺跡を画する大規模な２条の堀跡のうち、外側を走る堀跡である（図24）。堀跡は遺跡の堀内部地区が立地する段丘と猫間ヶ淵の境界部分で遺跡の内部から外側の猫間ヶ淵などの低地に向かって下がる斜面地に位置し、南端部では南側に向かって傾斜する斜面の変換点の低位の段丘面に立地する。調査位置より東側の延長は河川の浸食によって失われており、本来の堀の走向について東側への延長方向やそこでの在否は確定できない。21次調査で東側の端部を調査したが対象面

図23　遺跡南端部平面図（1/800）

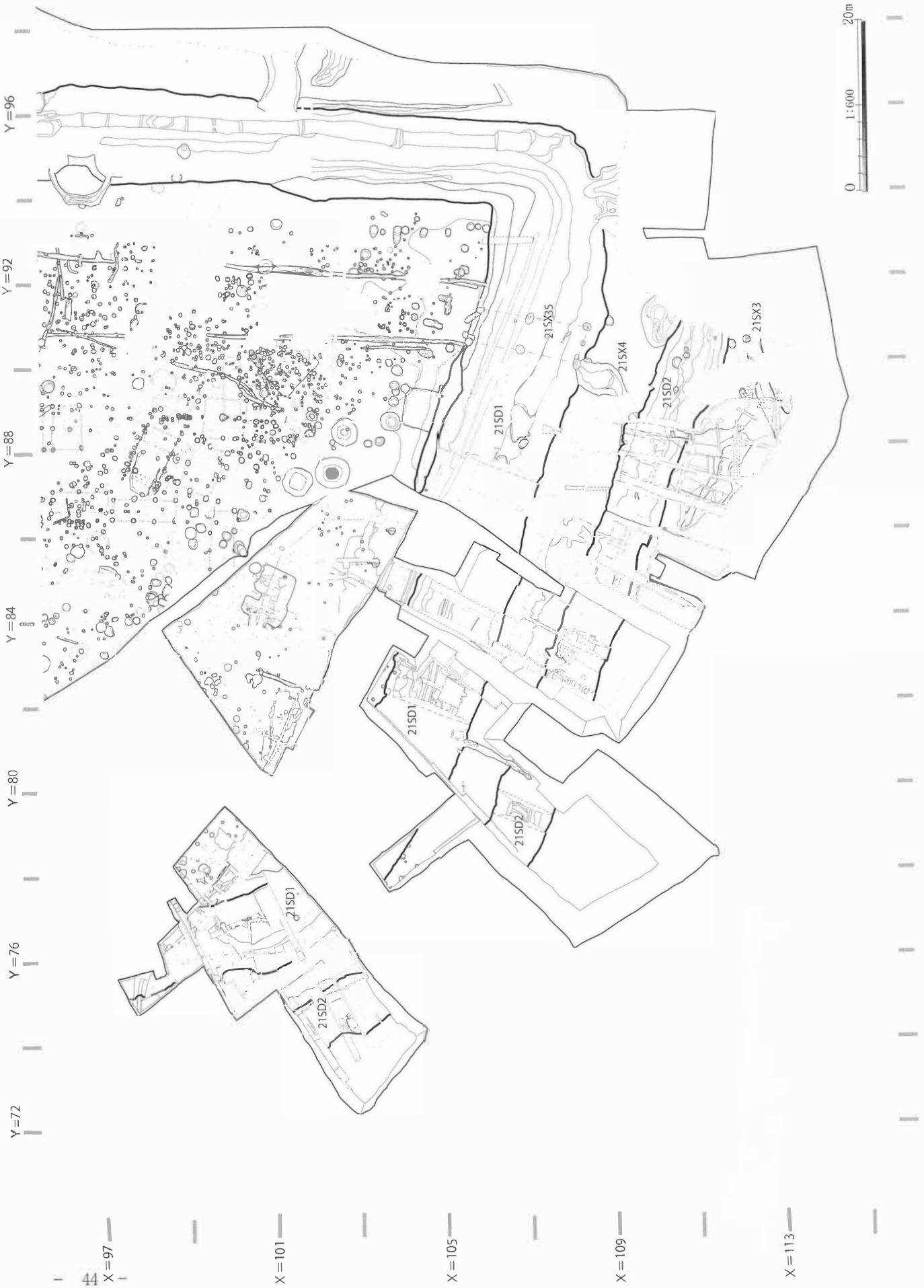


図24　遺跡南端部平面図（1/600）

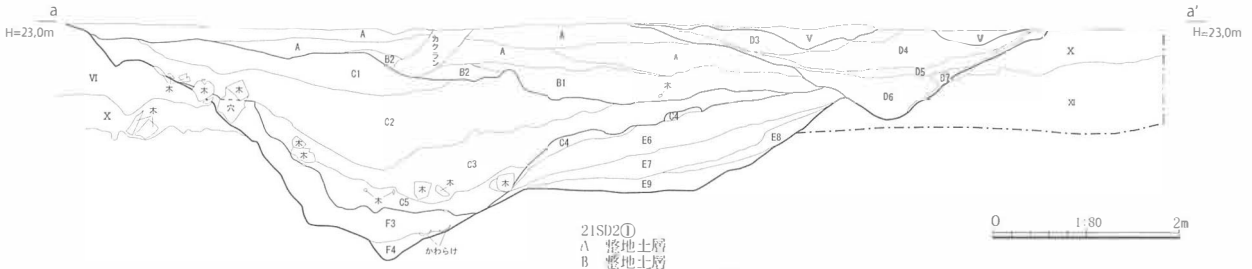
積は少なく、内容や位置には不明な点が多く残されていた。その後に69・70・76・77・78次調査で西側の延長を精査した。西側は東西方向に走り、79－107付近から方向を変えて北西から南北方向に向かう。堀の走向は猫間ヶ淵の低地の自然地形に沿う。幅5.5～８ｍで、最も幅が広く確認できた部分でも８ｍ程である。検出面からの深さは1.8～2.5m程である。底面標高は20.3～20.9m程で、概ね東側に向かって傾斜する。なお、南端部では100m程の延長が確認できた。

土層状況　Y=85～91付近では（図25・26－断面①②）、幅７ｍ程、深さ2.5m程で確認している（69・70次調査）。底面標高は20.3mである。この範囲では外側の肩を中心に上部を自然堆積層、東端部では整地層（以下、69整地層）が覆っており、これらを除去した後に全体が検出できる。土層からは、断面①・②でE層とした逆台形とみられる旧期の堀跡、それを掘り込むF層とした新期の堀跡の少なくとも新旧２時期の変遷がある。E層は自然堆積で黒褐色と灰褐色の土層が互層となる。F層も自然堆積で粘質土と砂層で構成され、一部はグライ化している。これを21SX4とした溝状の部分の土層にあたるD層が埋め戻している。D層は黄褐色土のブロックを多く含み、層の下面で木の枝や樹皮が平面的に広がる（図版編図版55）。平面的に広がり、薄く敷き詰められた状況で検出しており、敷葉等の工法とみられる。また、東端部ではC層とした69SX3の土坑状の掘り込みとその埋め戻しがある。C層からは多くの遺物が出土している。またD層の下層には69整地層（Ａ・B層）があり、D層と堆積の時間差は判然としないものの、この範囲では外側の堀跡の全体が埋め戻されていたことがわかる。人為層とみたＡ～Ｄ層は黄褐色土のブロックを多く含む。西側の断面②の最終の堆積土である自然堆積層Ⅳ・Ⅴ層は土器類を多く含み粘質土でラミナが形成されている。ラミナの形成など層相から水成堆積とみられ、21SD2の廃絶の状況を示唆する。東端は69整地層による整地が厚く行われるため、対応してⅣ・Ⅴ層を含め自然堆積層が薄くなる。整地層については後述するが、東端に位置する厚い69整地の範囲は幅5.5m程と限定的である。

Y=82～84付近では（図27－断面③④）、幅８ｍ程、深さ2.4m程で確認している（77次調査）。底面標高はもっとも深い位置で20.8mである。土層からは、断面③の44～48層や断面④の39～43・51～53層にあたる旧期の堀跡とみられる初期の自然堆積層があり、断面③の40～43層や断面④の36～38層にあたる掘り直しとみられる新期の堀跡の堆積がある。旧期の堀跡は逆台形を基本形状とするとみられるが、断面④の位置では深く掘り窪んでおり、地点による初期の堀の形状の違いを示すかもしくはさらに古い段階の形状を示すと判断できる。他地点の様相からは前者の可能性が高いが、地点ごとに構築や浚渫に段階差がある可能性も残り、両者の見方を留保しておく必要があろう。その上層では自然堆積による土層が堆積する。自然堆積土の堆積途中で掘り込みや水成堆積の土層での段階の差が断面からは認識できるが、大きな改修はみられない。上層では内側の肩に沿って、79SX1・79SX2とした掘り込みと人為土層による埋め戻しがある。黄褐色のブロックによって埋め戻されている。最上層は自然堆積による土層で、土器類を多く含む。③・④の断面で深さなどやや様相が異なるが溝状に堆積し、自然堆積による埋没は21SD2の廃絶の状況を示唆する。また、内側の岸周辺では整地層がある（以下、77整地層３）。整地層は旧表土にあたる黒色土層を直接覆う。21SD2とは直接の切り合い関係にはないが、平面的な位置関係や崩落した土層が21SD2の下層に堆積する状況から、21SD2が構築された段階に近い時期の地業とみられる。なお、77整地層３のうち断面④の57・58層は竪穴遺構（77SI1）の埋土である。77SI1は出土遺物の特徴から９世紀末から10世紀前半頃と判断できる。

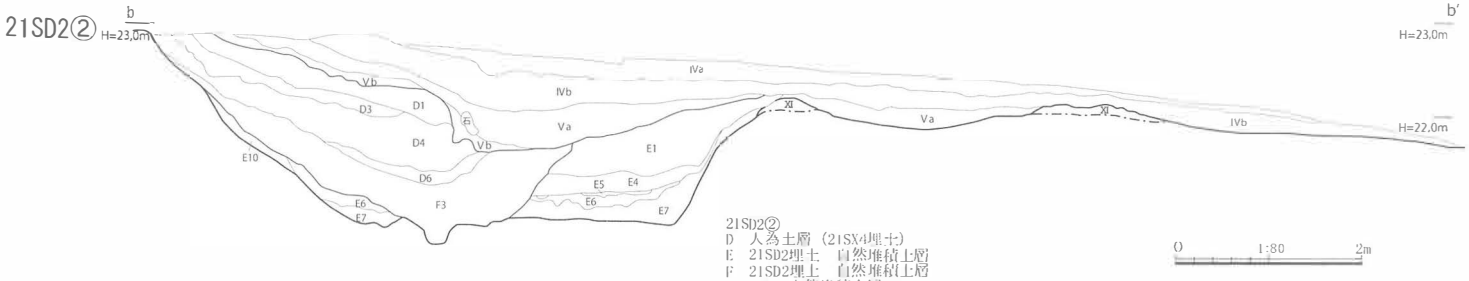
図25　21SD2平面図（1）

21SD2①



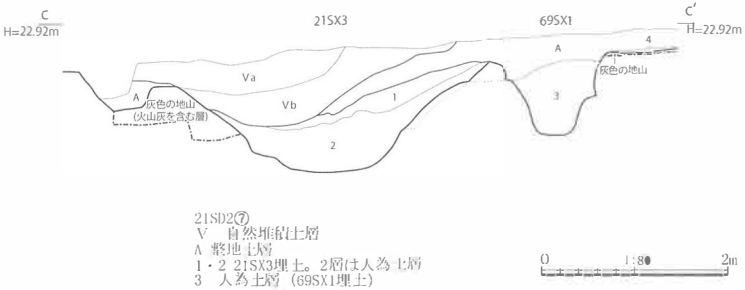
21SD2①
A　整地土層
B　整地土層
C　人為土層（69SX3埋土）
D　人為土層（21SX4埋土）
E　21SD2埋土　自然堆積土層
F　21SD2埋土　自然堆積土層
Ⅵ・Ⅹ・ⅩⅠ　自然堆積土層

21SD2②



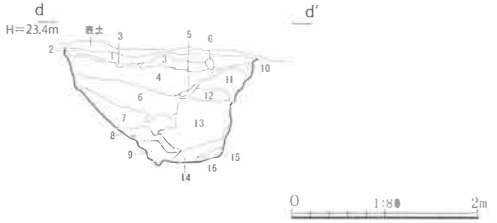
21SD2②
D　人為土層（21SX4埋土）
E　21SD2埋土　自然堆積土層
F　21SD2埋土　自然堆積土層
Ⅳ・Ⅴ　自然堆積土層

21SD2⑦



21SD2⑦
Ⅴ　自然堆積土層
A 整地土層
1・2 21SX3埋土。2層は人為土層
3　人為土層（69SX1埋土）

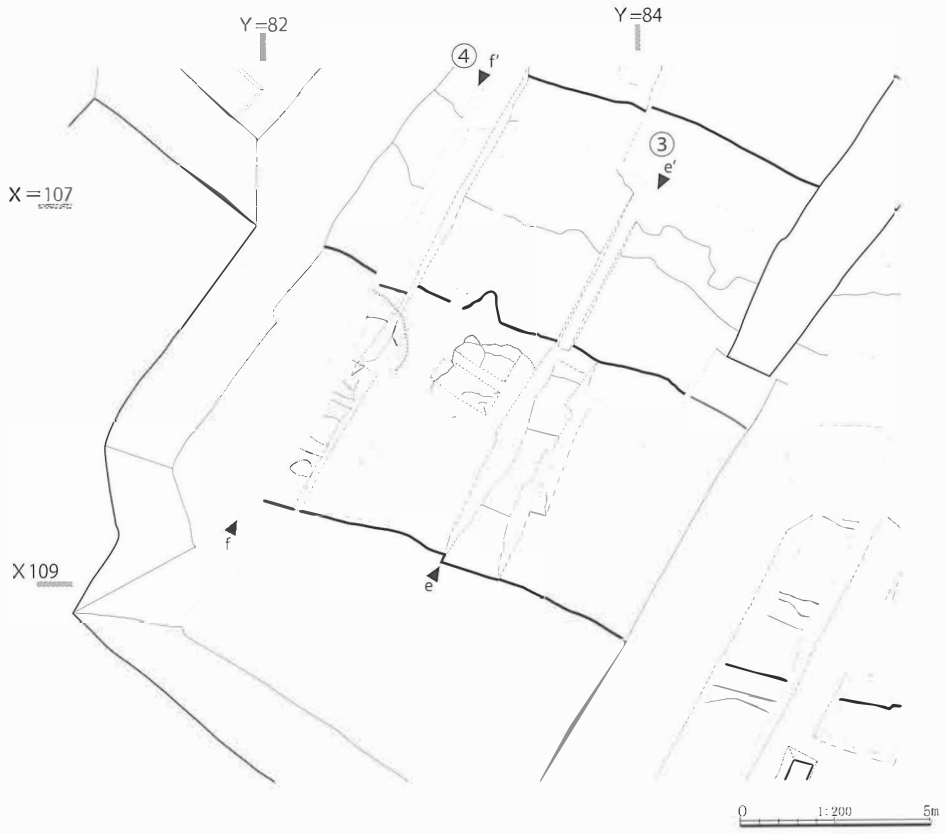
21SX4⑧



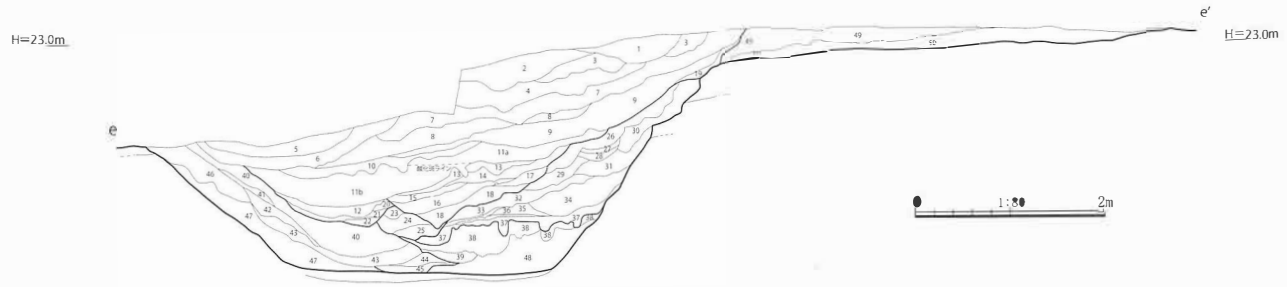
21SX4

1	10YR5/2	灰黄褐色砂混じりシルト	9	10YR3/1	黒褐色粘土混じりシルト
2	10YR4/6	褐色シルト	10	10YR5/1	褐灰色砂混じりシルト
3	5Y8/4	淡黄色地山粘土ブロック	11	5Y8/4	淡黄色地山粘土ブロック
4	10YR5/1	褐灰色砂混じりシルト	12	10YR2/1	黒色シルト
5	10YR4/1	褐灰色砂混じりシルト	13	10YR4/2	灰黄褐色粘土混じりシルト
6	10YR4/1	褐灰色砂混じりシルト	14	10YR4/1	褐灰色、10YR4/2灰黄褐色粘土混じりシルト
7	5YR8/4	淡黄色粘土	15	5Y8/4	淡黄色地山粘土ブロック
8	10YR4/1	褐灰色粘土混じりシルト	16	10YR3/1	黒褐色粘土混じりシルト

図26　21SD2断面図（1）

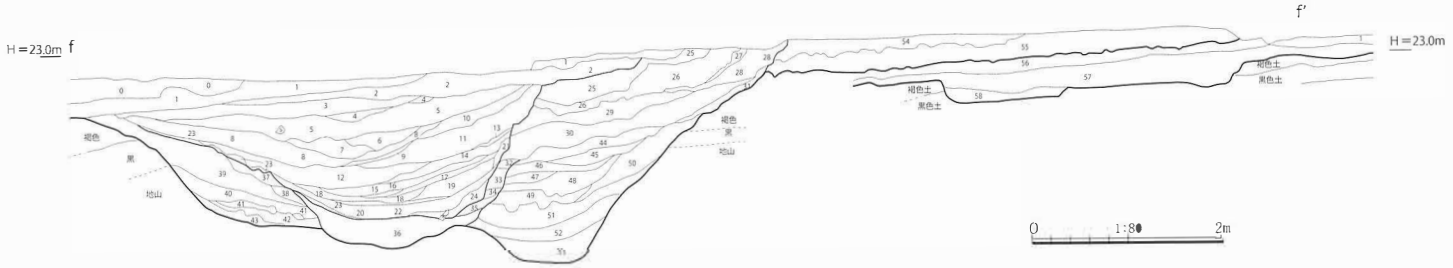


21SD2③



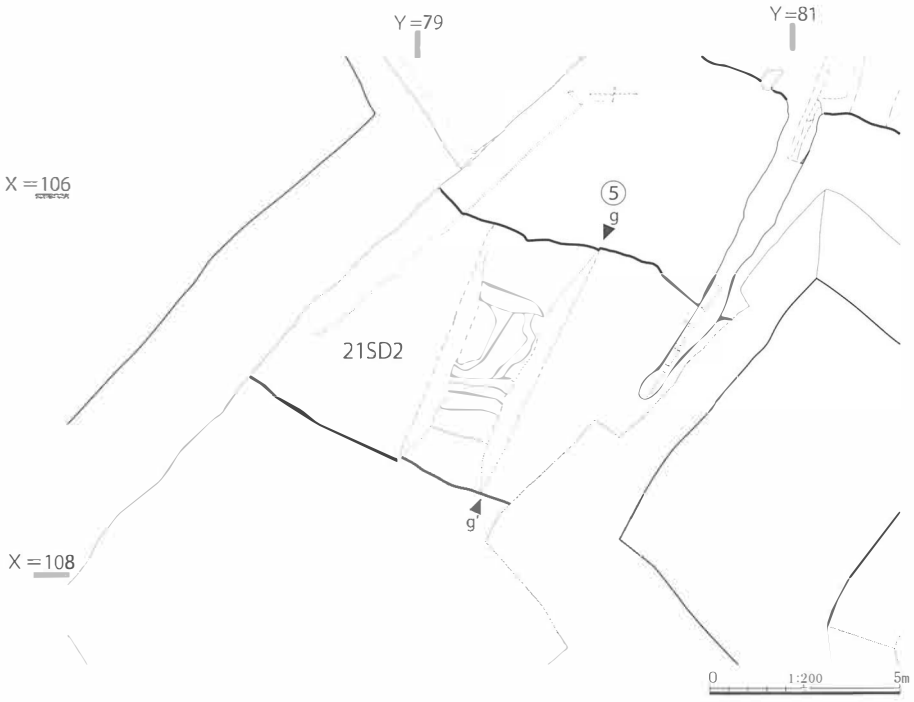
21SD2③
1　表土
5-6　遺物の多い自然堆積土層。
3-4　人為土層(79SX1・2埋土)
7-9・19　自然堆積土層
10-18・20-22　自然堆積土層
23-37　掘り込みとみられる、自然堆積土層
38-39　自然堆積土層
40-43　自然堆積土層
44-45・46-47・48　遺構構築後初期の自然堆積土層

21SD2④



21SD2●
0-3　表土
4-8/12　遺物の多い自然堆積土層。
25-27　人為土層(79SX1・2埋土)
13-31　自然堆積土層
32-35　自然堆積土層
44-49　掘り込みとみられる、自然堆積土層
36-38　自然堆積土層
39-43・51-53　遺構構築後初期の自然堆積土層

図27　21SD2平面・断面図（2）



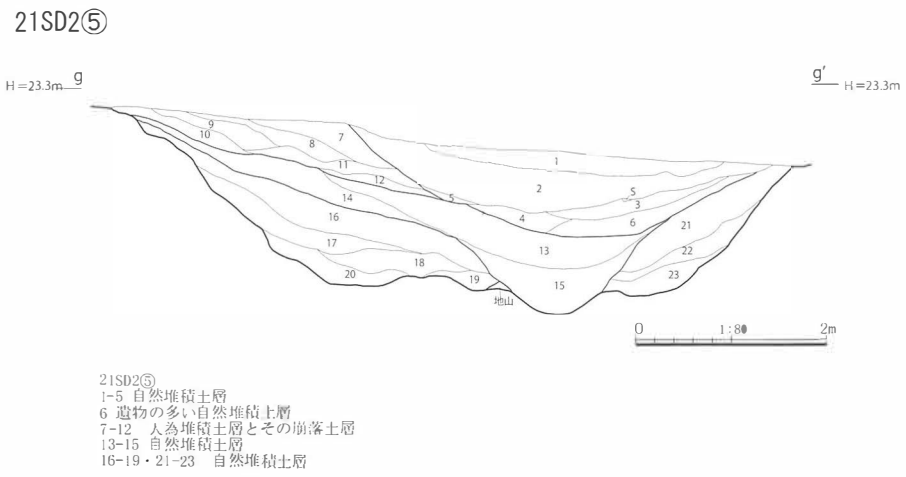
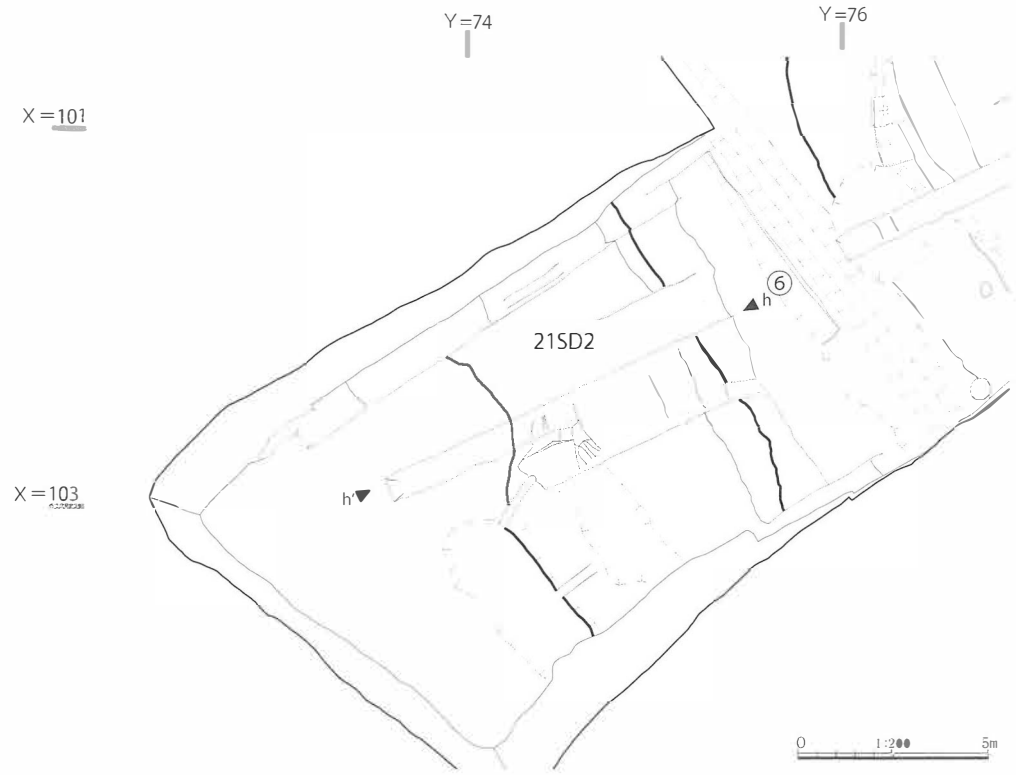
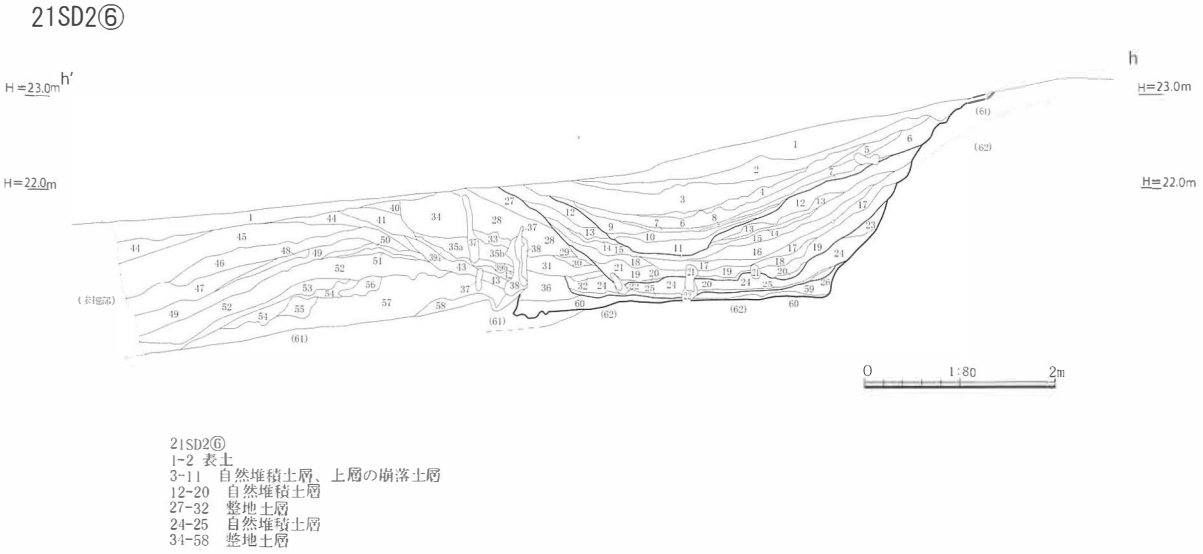


図28　21SD2平面・断面図（3）

Y=79～81付近では（図28－断面⑤）、幅6.5m程、深さ1.8m程で確認している（76次調査）。底面標高は20.9mである。土層からは、16～19・21～23層にあたる旧期の堀跡と、13～15層にあたる掘り直しとみられる新期の堀跡の堆積がある。旧期の堀跡の土層はいずれも自然堆積である。黄褐色土のブロックも含むが、ラミナが形成される水成堆積の土層を間に挟む。土層の底面で凹凸をもつ部分もあり、形状を変えるような大規模な掘り直しのほかに、小規模な造作が窺える。新期の堀跡の土層も自然堆積によるもので、層相から水成堆積とみられる。７～12層は黄褐色土のブロックを多く含む人為的な埋め戻しによる土層とその崩落土層である。内側の肩に沿って分布し、水平方向の堆積が確認で





21SD2⑥
1-2 表土
3-11　自然堆積土層、上層の崩落土層
12-20　自然堆積土層
27-32　整地土層
24-25　自然堆積土層
34-58　整地土層

図29　21SD2平面・断面図（4）

きる人為的な埋め戻しが21SD2の検出面まで行われている。最上層の自然堆積土層は、特に最下部に土器類を多く含み、21SD2の廃絶状況を示唆する。

なお、外側の堀跡はこの周囲まで東西方向に走るが、この周囲で自然地形に概ね沿って南北方向に走向方向を変える。

Y=74付近では（図29－断面⑥）、幅5.5m程、深さ2.1m程で確認している（78次調査）。底面標高は20.8mである。土層からは大規模な掘り直しやその他に複数回の小規模な造作が窺える。逆台形状の旧期の堀跡が構築され、さらに逆台形状を呈する新期の掘り直しが行われる。旧期の堀跡は逆台形の断面形で59・60層を構築底面とし、一部成形の後25・26層の底面を機能時の底面とみている。旧期の堀跡が自然堆積により埋没し、再度断面逆台形の新期の堀に掘り直しが行われる。この段階の底面を19・20層の底面とみている。新期の堀跡も自然堆積の土層で埋没する。その後、10・11層を底面とする自然堆積の土層が堆積する。これ以降の堆積は21SD2の廃絶に近い時期と考えられる。この自然堆積層が遺構廃絶時の状況を示唆するとみられる。なお、内側の岸より流入した人為層の崩落とみられる６層は、外側の堀と内側の堀の間に盛土整地の地業が行われたことを示す。

この位置では猫間ヶ淵跡の低地部分にあたる外側の肩が、旧期の逆台形状の堀跡の構築に際して土堤状に積み上げられる人為層で形成される。また、この位置の肩は逆台形の堀跡の掘り直しに際して、この人為層による土堤も積み直しが行われる。旧期の堀跡に伴う肩の構築は37・38層とした縦方向の土層を土留めの痕跡とみて、それより外側の部分に行われる。下層から暗色のブロック土、明るい粘土ブロック、両者の混じる土層で確認でき、堀の掘削に伴う排土を用いたことが推察できる。その後、一部の崩落を挟み、新期の堀跡に伴って27～32層が肩の再構築に伴う土層とみている。

南端部における外側の堀のまとめ　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は、細部の相違は存在するものの、南端部では各位置の様相は共通点が多い。そのため、調査が複数年次にまたがり近接する範囲でも様相の細部には差異があるものの、大枠での時期変遷としては各位置での状況を対応させた把握が可能である。

南端部での堀の変遷は、堀の構築→掘り直し等の改修→自然堆積（小規模な造作）→21SX4の掘り込み及び埋め戻し→廃絶、の変遷が理解できる。地点による土層の差異はこの範囲で度重なる掘り直し等の造作が行われたためで、造作の多さは南端部における外側の堀跡の特徴のひとつである。また、南端部での北西端にあたる部分（Y=74付近）では21SD2の構築に際して堀の外側を厚く整地している。堀構築時に低地に地業を行い、それによって堀を成形して構築したことを示す。後述する猫間ヶ淵周辺でも同様の地業が確認されている。位置によっては旧地形での低地部にまたがって堀が設計、構築されたことを示す。21SD2に関連する遺構として把握できる土層に、69SX3とした人為層によって埋め戻された土坑状の掘り込み、人為的に埋戻された土層の連続（21SX4（77SX1・77SX2）、69SD3、整地層がある。

関連遺構　69SX3　21SD2の東端（Y=85～91付近）で確認したC層とした土層である（図25・26－断面①②）。21SD2の堆積土に位置する平面で５～６m程の円形に近い土坑状の掘り込みである。堆積層はブロック土や遺物の混入の程度などにより細分できるが、いずれも黄褐色土のブロックを多く含む粘性の強い粘質土で人為的な埋め戻しによる土層である。土器類のみでなく木製品などの遺物が多く含まれる。平泉町教育委員会による43次調査で橋の部材等が出土している土層もこれに対応するとみられる（平泉町教委1994）。なお、埋文報告で図示された、21次調査の遺構・遺物で「新期層」としている遺物はこの土層からの出土である（岩手埋文1995）。

橋の部材のほか、43次調査では底面に土坑状の遺構が確認されていることから、柱穴が明確に組み合って構築物を構成する状況は確認できていないものの、外側の堀が機能した段階でこの位置（Y=85～91付近）の周囲に橋脚をもつ橋が架かっていたことが推察できる。

69整地層　21SD2の東端（Y=85～91付近）で確認したA・B層とした土層である（図25・26－断面①②、図30）。南北14m、東西5.5m程で限定的に確認できる。東側はさらに延長していたとみられる

が、21SD2と同様に河川の浸食により失われている。土層の対応から外側の堀及び関連する69SX3より新しく、21SX4より古い。南西側を中心に自然堆積層Ⅳ・Ⅴ層に覆われる。整地層は土質の違いから２層に分層したが、両者の分布は重なっており一連の地業と捉えることができると判断している。下層のB層は粘質土で砂粒を多く含む。上層は黄褐色や黒褐色土のブロックを多く含み、締まりの強い土層である。

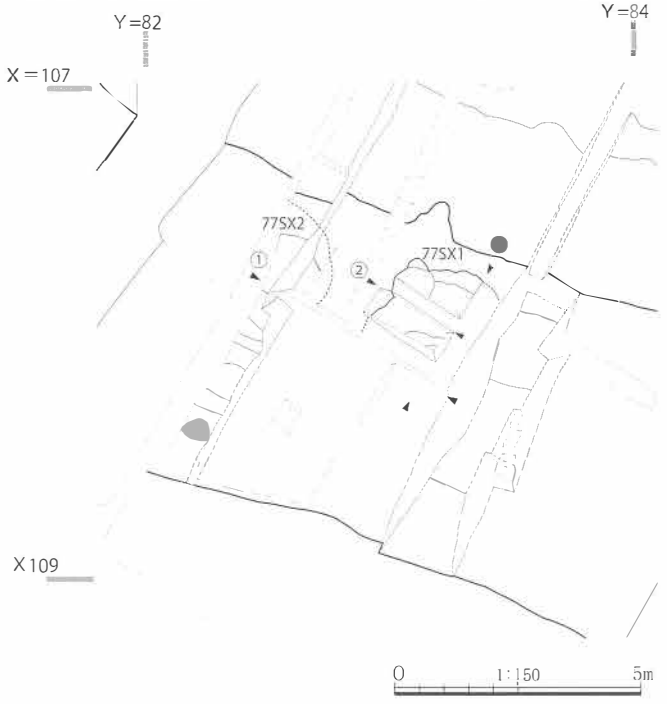
21SX4（77SX1・77SX2）　これらは各調査で外側の堀（21SD2）の北側に堆積する人為堆積土層で、調査による検出状況を通観すると、溝状に連続する土層として把握できる（図30)。21SX4、77SX1、77SX2として把握しており、21SD2の確認できる東端付近から、延長してY=79付近まで連続して確認できる。Y=79付近で幅が狭くなってきていることや、南北に方向を変えた範囲（Y=74付近）では確認されていないことから、分布は21SD2が東西方向に走る遺跡南端の限定した範囲に留まるかたちで把握できる。

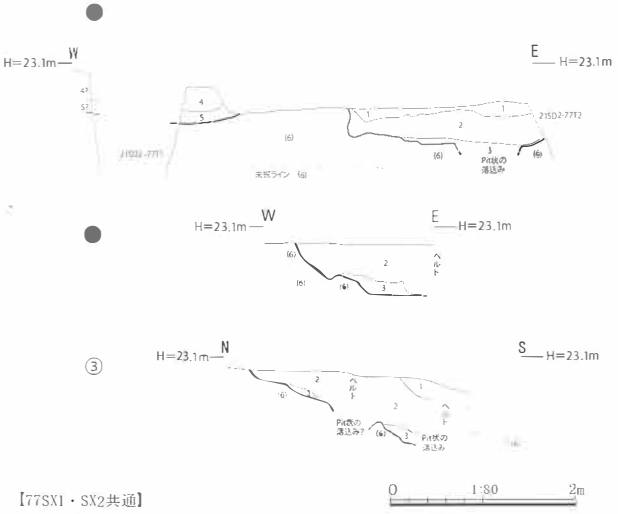
東側はY=88付近で北側に方向を変え、21SD1及びそれに伴う21SX35橋跡によって壊される。幅４ｍ程、深さは1.5m程である。底面は凹凸をもち、黄褐色土のブロックで埋め戻しが行われる。底面の凹凸は断面での観察からは全範囲に共通しており、一部ではピット状に深く掘り込まれる箇所がある。また、既述のとおり、東端部では21SX4の下部で木の枝や樹皮が平面的に広がる敷葉等の工法が行われる。

この人為層の広がりは、平面形状は大きくは溝状に連続するが、細部の特徴からは不整の円形プランの連続と把握できる箇所がある（77SX1・77SX2)。全体が埋戻しによる人為土で確認しているため平面での判別が難しいが、溝状の範囲の全体が不整形の掘り込みが連続して形成された遺構の可能性が高いと判断できる。21SD2と重複するため、21SD2の最終の掘り直しとその埋め戻しとの解釈もありうる。ただし底面では掘り込み後に表土等が形成されずに埋め戻されており、構築と埋め戻しの時間幅は短いものと想定できる。また、不整形の掘り込みが溝状に断続的に連続する平面形としても把握できることは重要であろう。これらの特徴から、21SD2廃絶時の新たな区画施設などに伴う遺構で、基礎地業などの関連遺構との捉え方を提示しておきたい。この点で21SX35橋跡の端部と接して止まる平面位置にも注目しておきたい。遺構の切り合いから、21SD2→21SX4→21SD1の新旧関係が確認できる。

76SD3　80－107付近に位置する、幅１ｍ程で南北方向に走る溝である（図24)。N－20°－Eでやや東に触れるが、21SD1及び21SD2の２条の堀と直交する。これらの遺跡を区画する遺構とは異なる性格をもつと判断できるが、判然としない。21SD2の北側に分布する人為層（上記21SX4・77SX1・77SX2の延長）の上面で確認しており、21SD1によって壊される。したがって、21SD2→76SD3→21SD1の新旧関係が確認できる。混和物をほとんど含まず、黄褐色土のブロックで構成される、人為的に埋め戻された土層である。埋土の特徴は上述の21SX4の土層と類似し、より混和物が少ない。遺物は76SD3の堆積土からは出土していない。

77整地層3　83－107付近では外側の堀（21SD2）と内側の堀（21SD1）の間で整地層が確認できる。本来は他の範囲でも地業が行われた可能性があるが、21SD2に接して検出できる範囲はこの位置に限定される。整地層は旧表土にあたる黒色土を直接覆う。整地層は混和物などにより分層が可能だが、間層はみられず、いずれの土層も同時期に工程差をもって行われた地業とみられる。21SD2の堆積土が一部で整地層に接し、21SD2と同時期もしくは機能時には既に地業が行われていた場合でも近い時期の構築とみている。いずれの土層にも縄文時代の石器や10世紀頃の土師器片などを含むのみで、12世紀代の遺物は含まれていない。



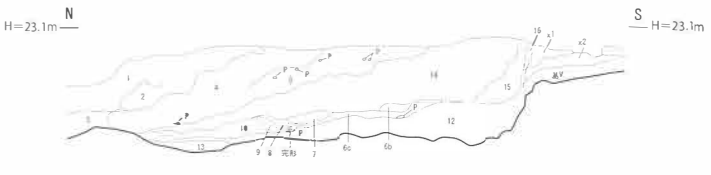


【77SX1・SX2共通】

0　1:80　2m

1　10YR4/1-4/2　褐灰-灰黄褐色　シルト　粘性やや強　しまり中．炭粒（径5mm）極微量．
2　2.5Y6/3　にぶい黄色　粘土ブロック層（ブロック径10-20mmが主体）．粘性やや強　しまりやや密．※SD2-T2の4層に相当．
3　10YR3/2　黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強　しまりやや密．10YR6/3にぶい黄橙色粘土ブロック（径20-40mm）多量．
4　10YR4/1-4/2シルト　1層によく似る．
5　10YR5/2　灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまりやや密．2.5Y6/3にぶい黄色粘土及び砂質シルトブロック（径20-30mm）多量．ブロックは上方からの加圧により水平方向に潰れている．SD2-T1の26層に相当．
(6)　2.5Y4/2-3/2　暗灰黄-黒褐色　粘土質シルト　地山崩落黄色土ブロックを微量含む．SD2-T1の29層・SD2-T2の7層に相当．※SD2内岸側縁上部を構成する土層．

④



⑤

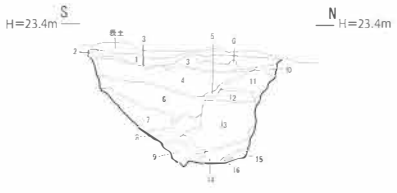


図30　遺跡南端部の整地平面・断面図

0　1:80　2m

遺物　概要　外側の堀（21SD2）からの出土遺物は、多くは上層の自然堆積土からの出土で、掘削の時期や機能時、改修の時期を示す遺物は極めて少ない。多くの遺物は廃絶とそれ以降の自然堆積による埋没の時期を示す。以下では遺構とその変遷との対応に留意しながら、出土遺物の特徴を土層の堆積の下位から記す。

外側の堀跡（21SD2）旧期　古い段階の堀からの出土遺物は極めて少ない（図31－1）。器形がわかる資料はY=85～91付近（69次調査、図25・26－断面①②）のE層から出土している。ロクロかわらけ大皿で口径14.8cm、底径6.2cmと口径に比して底径が小さい。器高が4.6cmと高く、直線的に立ち上がる器形である。

外側の堀跡（21SD2）新期　新しい段階の堀からの出土遺物も（図34－2～11）、器形がわかる資料は少ない。

Y=85～91付近（69次調査、図25・26－断面①②）で出土している資料である（図31－2～9）。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ大皿は口径13.3～14.1cm程で平均13.8cm程、底径7.3～7.4cm程で平均7.4cm程、器高3.2～4.7cm程で平均3.7cm程である。器高が高い資料を含むものの、多くは体部が湾曲して立ち上がり、器高の低い皿形の器形である。手づくねかわらけ小皿は口径8.0cm、器高1.7cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.6～14.4cm程で平均13.6cm程、器高2.5～3.3cm程で平均2.9cm程である。やや口径が大きく器高も高い、やや大型の器形を呈する資料も含むものの、口径が13cm前後以下の器形が多い。

その他、Y=79～81付近（76次調査、図28－断面⑤）及びY=82～84付近（77次調査、図27・断面③・④）で出土している（図34－10・11）。小破片が多く、図示した資料はロクロかわらけだが、手づくねかわらけも含む。ロクロかわらけ大皿は口径13.0cm、底径6.6cm、器高3.1cmである。

新しい段階の堀からは木製品も出土している（図35－126 ～131）。Y=85～91付近（69次調査、図25・26－断面①②）では、文字資料（図35－126）や漆製品（図35－127・129・130）、折敷の再加工

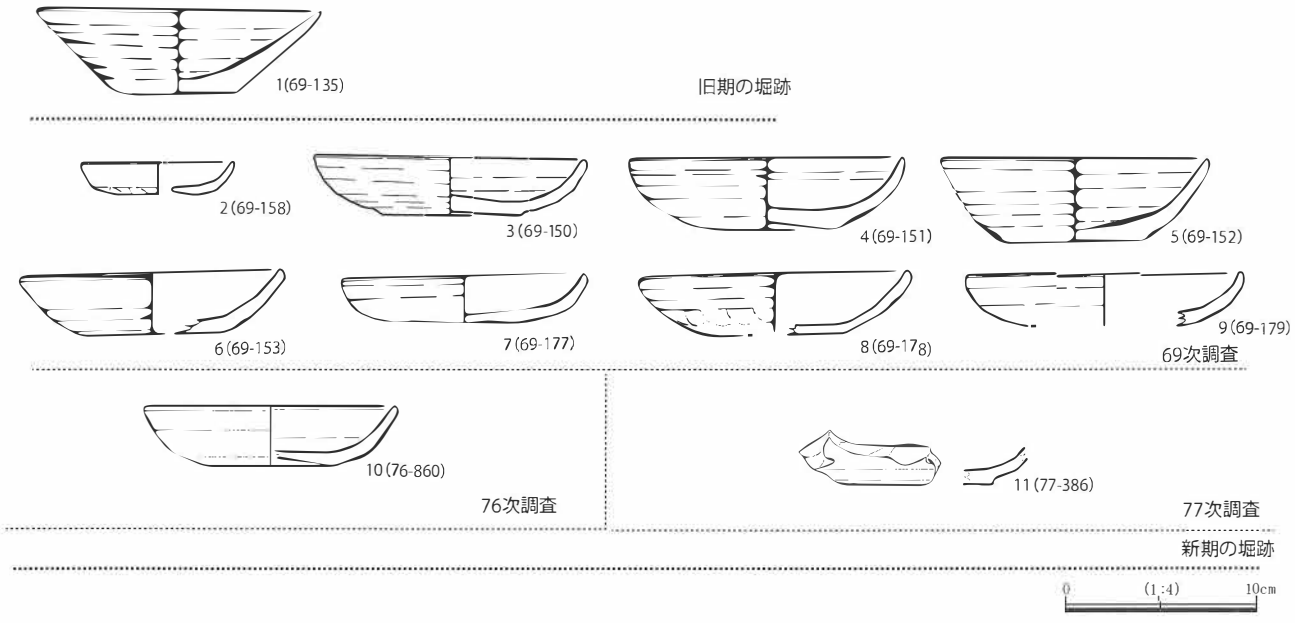


図31　21SD2出土土器類実測図（1）

片（図35－128）などがある。Y=79～81付近（76次調査、図28・断面⑤）では堀底の底面で木槌が出土している（図35－131）。全長が約72cmで、杵部分は径15cm程の円形、持ち手の部分は径５cm程の円形である。杵部は全体が粗いケズリにより整形され、中央部は使用による摩耗が著しい。なお、杵の頂部はケズリによる整形が残り、摩滅等もみられないことからこの部位を使用したものではなく、杵中央部を横位で利用したとみられる。

69SX3　69SX3は堀の廃絶に伴う土坑状の掘り込みで人為的に埋め戻された土層のため、出土遺物が多い（69次調査、図31－12～46）。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿では口径7.2～9.0cm程で平均8.2cm程、底径4.5～6.5cm程で平均5.9cm程、器高1.5～2.3cm程で平均1.8cm程、直線的な立ち上がりの器形が多い。ロクロかわらけ大皿では口径12.3～14.3cm程で平均13.1cm程、底径6.4～8.4cm程で平均7.4cm程、器高2.7～4.0cm程で平均3.4cm程である。体部下端で大きく屈曲する器形が多く、器形の低い皿形を呈するものが大半を占める。手づくねかわらけ小皿では口径8.3～8.7cm程で平均8.5cm程、器高1.6～2.1cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿では口径12.1～14.0cm程で平均13.4cm程、器高2.1～3.5cm程で平均2.9cm程である。口径が14cm程を超えるやや大型の器形を含むものの、多くは口径13cm前後以下の小型の器形を呈する資料が多い。34は内面に墨書がある。ひらがなとみられるが、判読できない。69SX3からは木製品も多く出土している。「タラウタユ二丈」と記される木片がある（図35－132）。「タラウタユ」と「二丈」は異筆とみられる。その他、糸巻きなどの紡織具や折敷片、形代など多くの種類が含まれる。漆製品も出土している。また、橋の部材の出土は遺構の性格と合わせて注目される（図35－145～147）。平泉町教育委

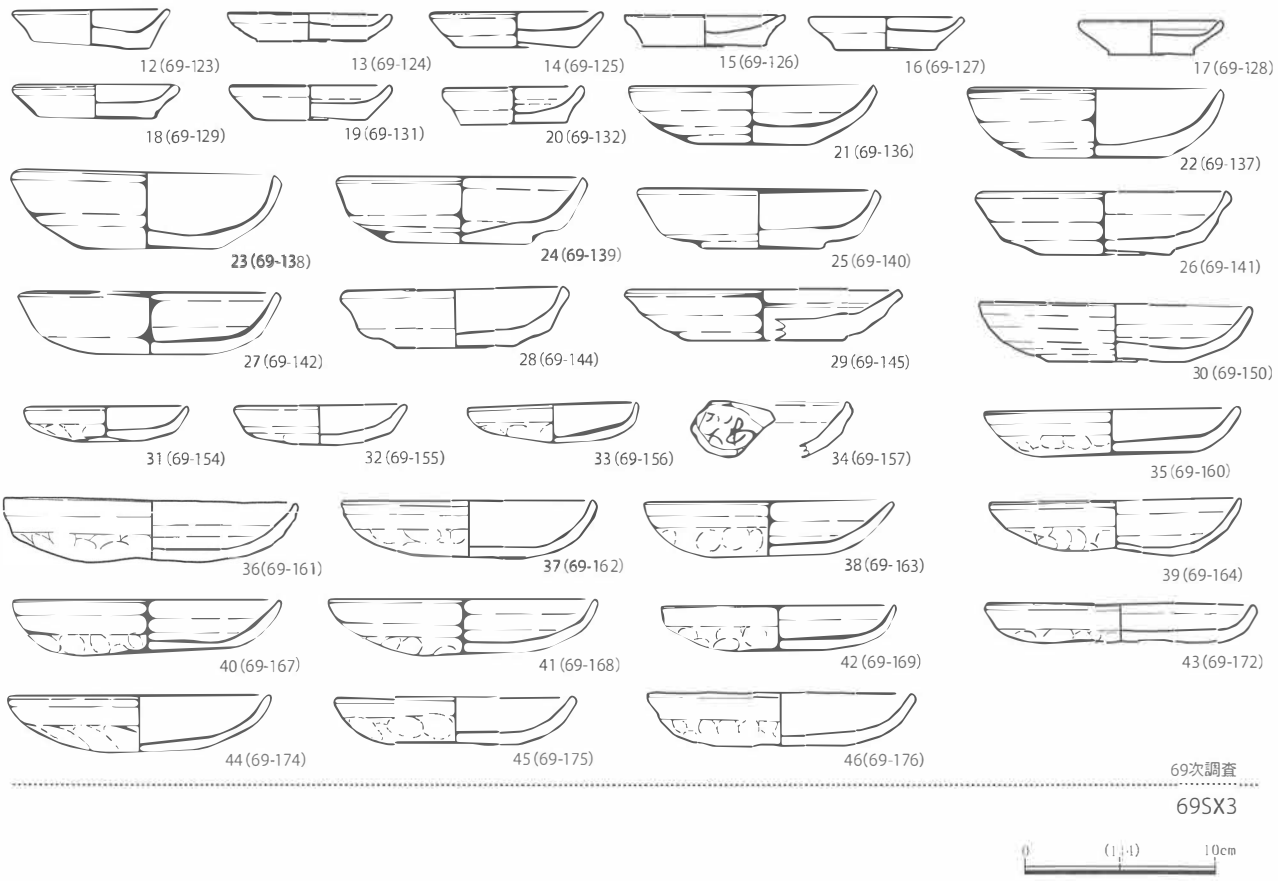


図32　21SD2出土土器類実測図（2）

員会による43次調査で出土した橋の部材と関連するとみられる（平泉町教委1994）。

70次調査でも69SX3の一部を再度精査しているが、出土土器類の傾向は69次調査と同様である。ロクロかわらけ大皿は口径14cm前後、提携７～８cm程、器高3.5～４cm程で、皿形を呈する。手づくねかわらけ大皿は口径13～14cm程で、大形の器形を含むものの小形の器形が多い。

21SX4　21SX4からの出土遺物は（69次・70次調査、図33－47～54）、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。図示した資料は、ロクロかわらけは小皿のみだが、破片では大皿も含まれる。ロクロかわらけ小皿は口径7.9～8.5cm、底径5.7～6.0cm、器高1.7～1.9cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.8cm、器高1.7～1.9cmである。手づくねかわらけは大皿では口径12.9～13.3cm、器高2.6～3.0cmである。口径が13cm前後の小型の器形を呈する。

一連の土層とみられる人為層からの出土は（76次調査、図33－55～75）、人為層下層の資料は人為層による地業の際に含まれたものである（図33－55～64）。人為層上層の資料は崩落に伴う土層の資料を含むものの、多くは地業のための人為層中に包含されていた資料である（図33－65～75）。いずれもロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。下層の資料では、ロクロかわらけ小皿は口径8.9cm、底径6.2cm、器高1.3cmである。底部から直線的に立ち上がる。ロクロかわらけ大皿は口径

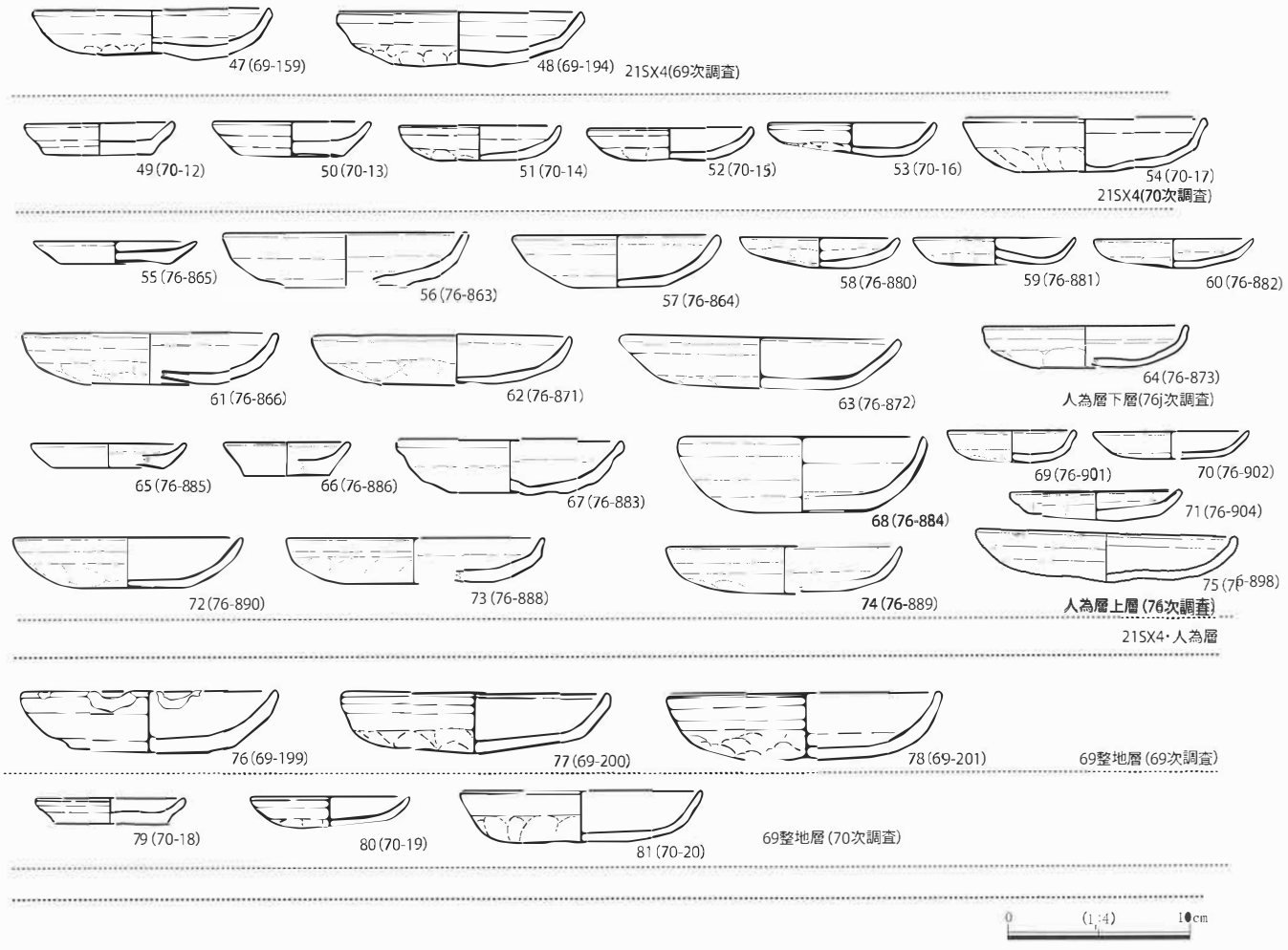


図33　21SD2出土土器類実測図（3）

11.1～13.2cm、底径5.5～7.6cm、器高2.2～2.9cmである。体部下端で大きく屈曲する器形が多く、器高が低く皿形を呈する。手づくねかわらけは小皿では口径8.8～9.8cm程、器高1.5～1.7cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.0～15．8cm程、器高2.1～2.9cm程である。口径が15cmを超える大型の器形を含むものの、多くは口径13cm前後以下の小型の器形を呈する。

上層の資料ではロクロかわらけ小皿は口径6.6～8.4cm、底径4.7～6.0cm、器高1.3～1.9cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.4～13.2cm、底径6.6～7.6cm、器高2.8～4.2cmである。器高が高い資料を含む。手づくねかわらけ小皿は口径7.0～9.2cm、器高1.2～1.8cmである。手づくねかわらけ大皿は12.0～14.6cm程、器高2.1～3.1cm程である。口径14cmを超えるやや大型の器形を含むものの、小型の器形を呈する資料が多い。

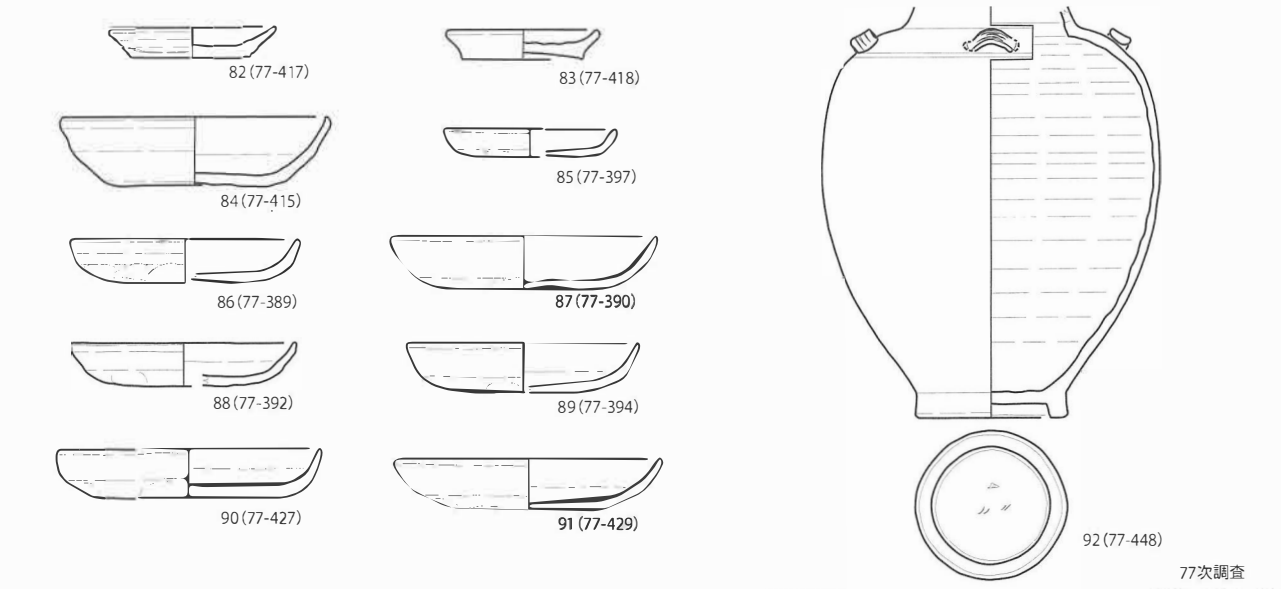
このほか、77次調査でも人為層の精査を行っているが、土器類の出土は少ない。

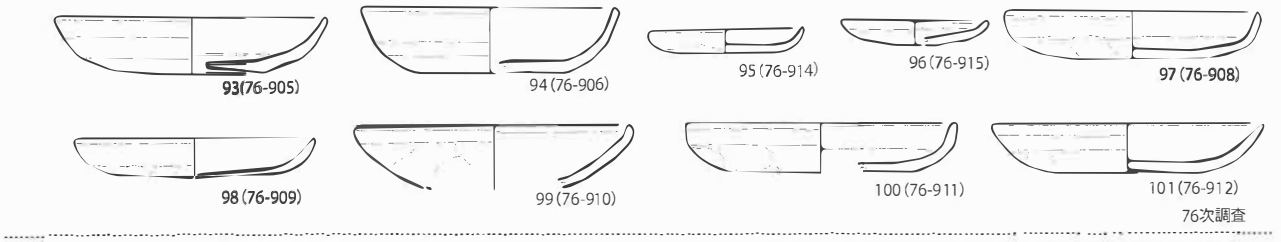
また、69次調査で確認された69整地層からの出土遺物は（69次・70次調査、図33－76～81）、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含み、手づくねかわらけは大皿で口径13.0～14.7cmで平均14.0cm、器高2.8～3.6cm程である。口径が14cm前後で大型の器形を呈する資料が多い。

外側の堀跡（21SD2）上層　外側の堀（21SD2）を最終的に覆う自然堆積層は多くの遺物を包含する。そのうち、Y=82～84付近では自然堆積層中で下層にあたる土層からの出土遺物を図示した（77次調査、図34－82～92）。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。手づくねかわらけ大皿は口径11.9～13.4cm程、器高2.1～2.8cm程である。大形の器形を含まず、口径の小さい小型の器形を呈する資料が多い。白磁四耳壺も自然堆積土層から（図34－92）、横位で出土した。福建省産とみられる。頸部下端から底部まではほぼ完形で、頸部から口縁部が欠損している。器高は残存高で21.7cm、最大幅は17.7cmである。台部は径8.0cm、高さ1.3cmである。底部外面に３カ所のロクロ爪の痕跡が残る。

Y=79～81付近で、自然堆積層中で下層にあたる土層からの出土資料も（76次調査、図34－93～101）、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ大皿は口径13.3～14.0cm、底径7.5～7.9cm、器高3.0～3.5cmである。手づくねかわらけ小皿は口径7.8～8.1cm、器高1.3～1.4cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.7～14.2cm程、器高2.2～3.3cm程である。小型の器形を呈する資料が多い。

21次調査出土遺物　また、参考として21次調査の資料を図示した（図34－102～125）。これらの資料は出土層位の厳密な対応は難しいものの、遺物への注記内容からは21SD2の精査時に底面付近から出土した遺物である。埋文報告で「古期層」として報告されている土層及びそこからの出土資料は、ここまで記載した旧期の堀と新期の堀の両者の土層を包含している。そのため、今回図示した資料もいずれの段階にあたるかは判然としないが、周囲の調査成果からみると旧期の堀跡の堆積土は多くの地点で部分的な残存にとどまり、出土遺物も少ない。21次調査の範囲と接する69・70次調査でも出土遺物の多くは新期の堀跡と捉えた土層からの出土で、埋文報告で図示された資料もそれに該当すると思われる。これらの調査成果や資料の注記等を勘案すると、今回図示した資料の多くも新期の時期に伴う遺物とみられる。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけの小皿は口径9.0～9.2cm、底径5.8～7.0cm、器高1.5～1.9cmである。ロクロかわらけの大皿は口径12.4～14.8cm、底径6.2～10.8cm、器高3.3～4.0cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.0～10.0cm、器高1.9～3.2cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.0～14.0cm、器高2.2～3.2cmである。





21次調査出土資料

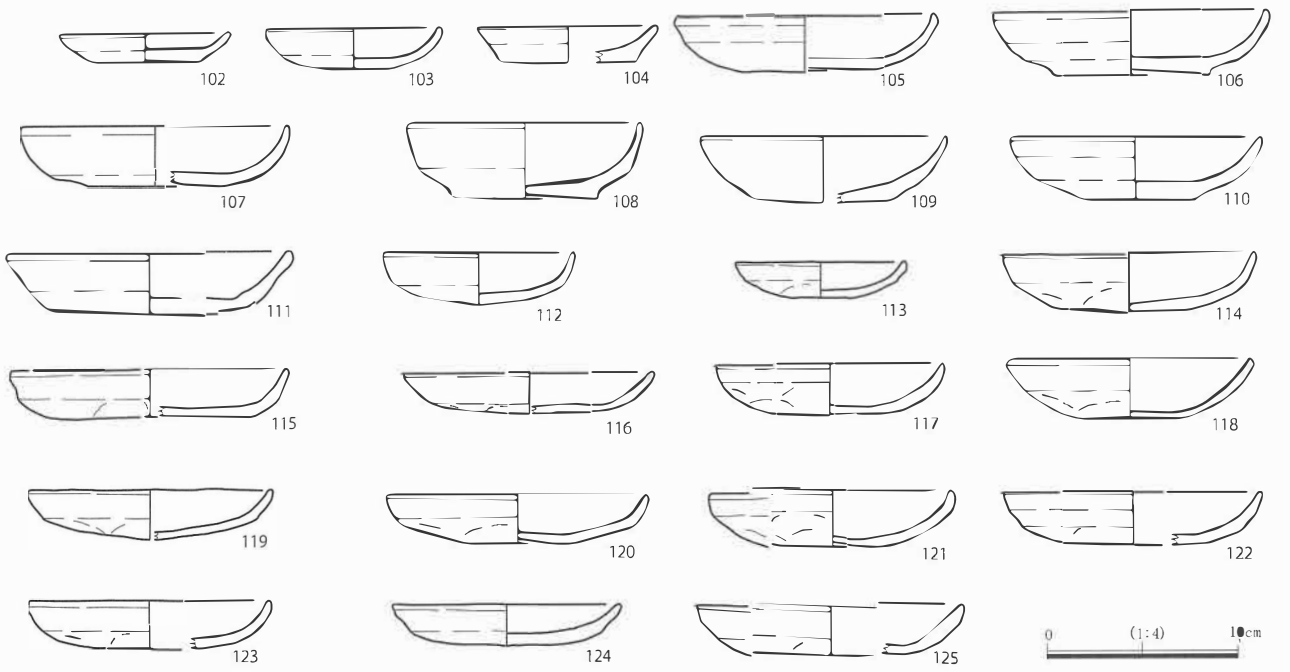


図34　21SD2出土土器類実測図（4）

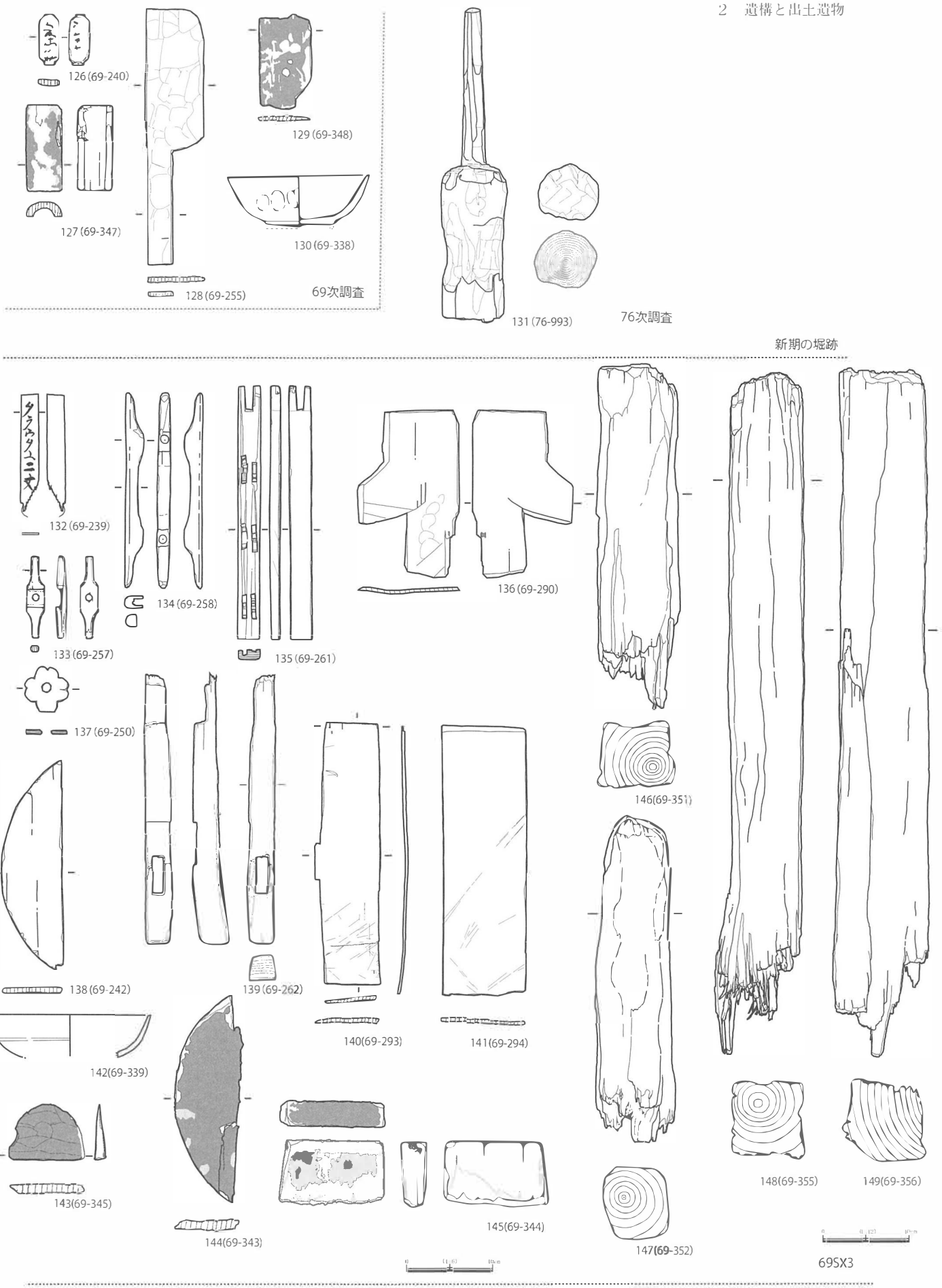


図35　21SD2出土木製品実測図

【内側の堀跡（21SD1・56SD38・72SD1）】

遺構　概要　内側の堀跡（21SD1）は遺跡を画する２条の堀跡のうち、内側を走る大規模な堀跡である。遺跡の堀内部地区が立地する段丘の高位縁辺部に位置する。21・23次調査で東端部の全体と南側の一部を調査し、69・76・77・78次調査で南側から西側にかけての延長を調査した。東側からみると、東端部は南北方向に走り、Y=94付近から南側では東西方向に、西側ではY=78付近から北西方向に方向を変える。X=89付近より北側への延長は河川の浸食によって失われたとみられ（平泉町教委1995）、本来の延長方向と位置は確定できない。堀の走向は遺跡が立地する段丘の自然地形に沿う。幅11～14m程で、最も幅が広く確認できた部分で14m程になる。検出面からの深さは2.4～3.6m程である。底面標高は20.6～21.4mで、概ね南東側に向かって傾斜する。なお、南端部として図示した範囲では、東側の南北方向に延びる部分で90m、東西方向に方向を変えて東西方向に120m程延長する部分で堀が確認できたことになる。

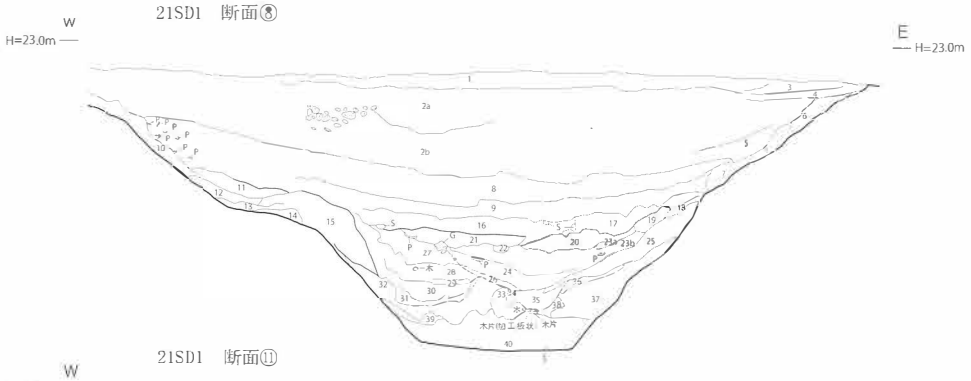
なお、東側の南北方向に走る位置は21次調査で全体が精査されており、その後に新たな知見は得られていない。埋文報告によれば、北側の範囲（X＝95以北）では21SD1の堆積土の上層部分に近世段階の溝（23SD34・23SD35）が認識されており、21SD1の残存は極めて悪いことが理解できる。その他の、21SD1の断面形状などを残すと判断できる位置での断面状況からは南端部と同様に、逆台形の形状で自然堆積の土層で埋没する状況が把握できる。平面図と断面図を抜粋して再掲する（図36・37）。また、X＝101以南では堀の内側の肩部分で幅１m程の平坦面が形成される。X=107付近まで確認でき、堀の北側（X=101以北）に向かって失われる。堆積土のうち、12世紀代とされた土層は底面から80cm程で、炭化物や遺物を多く含む土層がひとつの時間的境界として理解されている。埋没状況や過程は後述するその他の南端部の精査位置と同様の状況が想定できる。掘り直しが指摘されているものの、その掘り込みは明瞭ではない。堆積の段階差との想定もできよう。また、堆積土には地山ブロックの流入が少なく、堀の内側からの人為的な土層や堀の崩落は少なかったとみられる。他の調査地点と異なる特徴に、堀底面の整形が挙げられる。南北方向に延びる範囲では、底面がいくつかの長方形の区画に分かれる状況を検出している。南端部でも堀底面は一部が掘り込まれており、この範囲でも同様に底面は全体が平坦ではなく凹凸をもつとみられる。また、堀に関連する遺構として95－94付近で23SX12橋跡を検出している。橋跡などの関連遺構は後述する。

南北方向に走る堀はY=95付近で85°程屈曲して、東西方向の延長に大きく方向を変える。なお、南端部（Y=93～95・X=107付近）は堀の立ち上がりの残存が0.2m程と河川の浸食等により大きく失われている。また、Y=92付近で21SX35橋跡を検出しているが、詳細は後述する。この橋跡の周囲は21次調査で精査しており、土層等に新たな知見は得られていない。土層は自然堆積により、底面から80cm程までは12世紀代の土層と認識されている。それより上層との層界で多くの土器類や炭化物が観察された。また、堀の内側の肩部分に北側で確認されたものに続く平坦面が形成される。

土層状況　Y=88付近では（図38－断面⑨）、幅14m程、深さ3.6m程で確認している（69次調査）。底面標高は20.6mである。断面形状は逆台形で、明確な掘り直し等の痕跡は確認できない。堀の内側で幅1.5m程の平坦面があり、ここを境に傾斜角度が変化する。土層は全体に自然堆積による堆積である。底面から80cm程の堆積にあたる８・９層で炭化物や遺物が多く含まれている。これらの遺物や炭化物は堀内部側からの流入とみられる。また、上層の１～３層でも多くの遺物を含む。上層は近世以降の堆積とみられる。

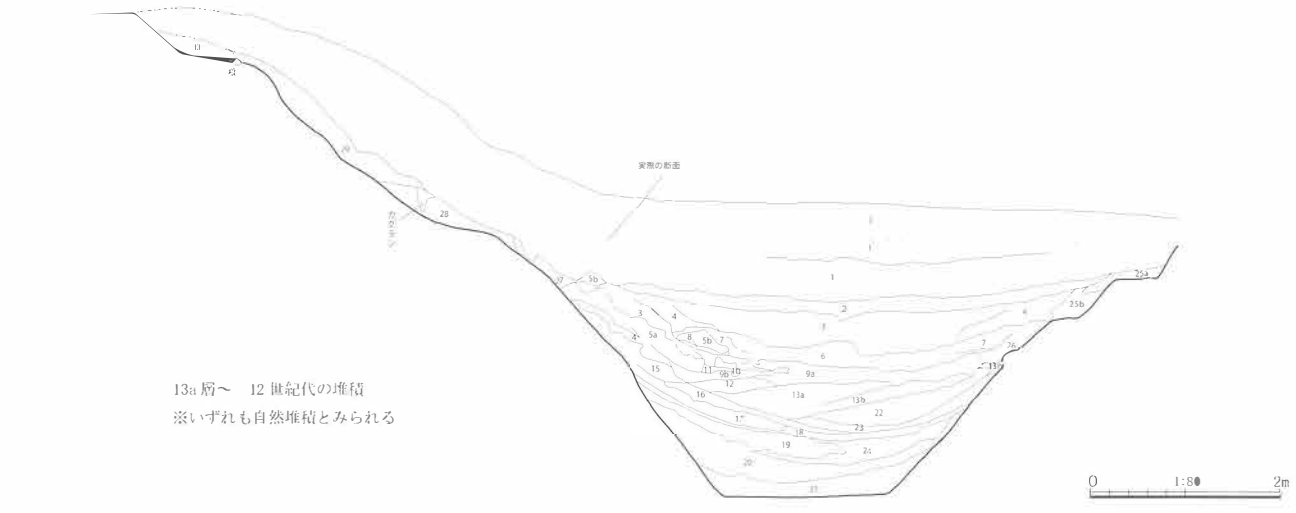
Y=84付近では（図39－断面⑩）、幅11m程、深さ2.4m程で確認している（77次調査）。底面標高は21.1mである。断面形状は逆台形となる。土層からは、底面で21層とした凹凸とその堆積が確認でき

21SD1　断面⑧



24 層～　12 世紀代の堆積
※いずれも自然堆積とみられる

21SD1　断面⑪



13a 層～　12 世紀代の堆積
※いずれも自然堆積とみられる

図36　21SD1平面図（1）

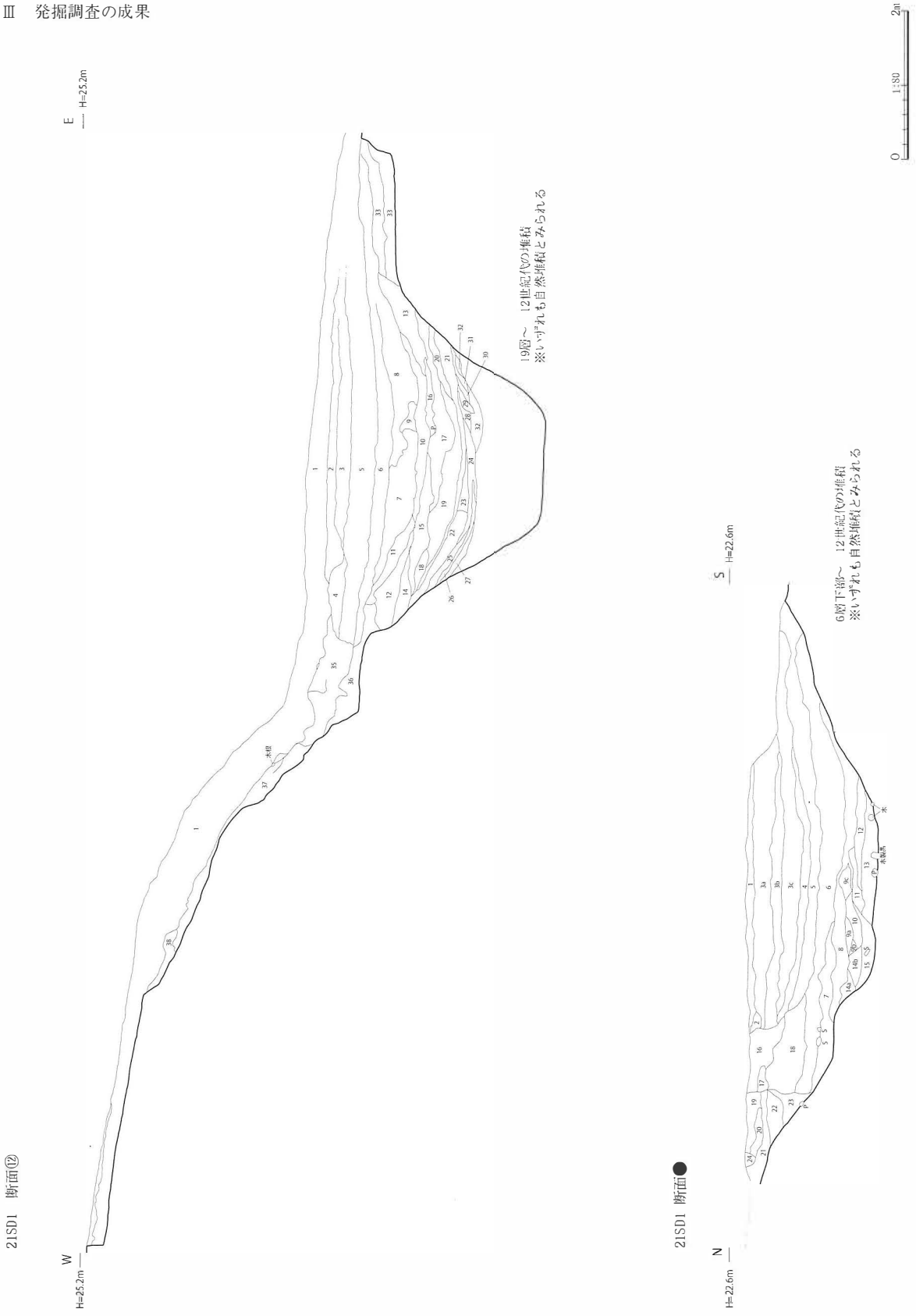


図37　21SD1断面図（1）

る。壁面の崩落（19・20層）と自然堆積（17・18層）が進んだ後、遺物を多く含む14層が堆積する。その後、自然堆積による土層を挟んで10層及び８層の下面でも完形に近い土器類を多く含む。底面から80cm程の堆積となる８層下面もしくは14層に堆積のひとつの段階を設定できよう。なお、これら

の遺物や炭化物の遺物の流入は堀内部地区の側からの流入による堆積として観察できる。一方で堀の外側からの自然堆積層の流入は顕著ではない。遺物のまとまった出土は人為的な投棄も一部に含む可能性があるが、堀の内側と外側での人為及び各岸部分における遺構の状況の相違を反映するとみられる。また、堀の外側から円礫が崩落していることは、堀の外側での施設や地業の有無を検討する上で注目できる。これより上層は自然堆積による土層で、１～４層では土器類を多く含み、近世以降の堆積とみられる。

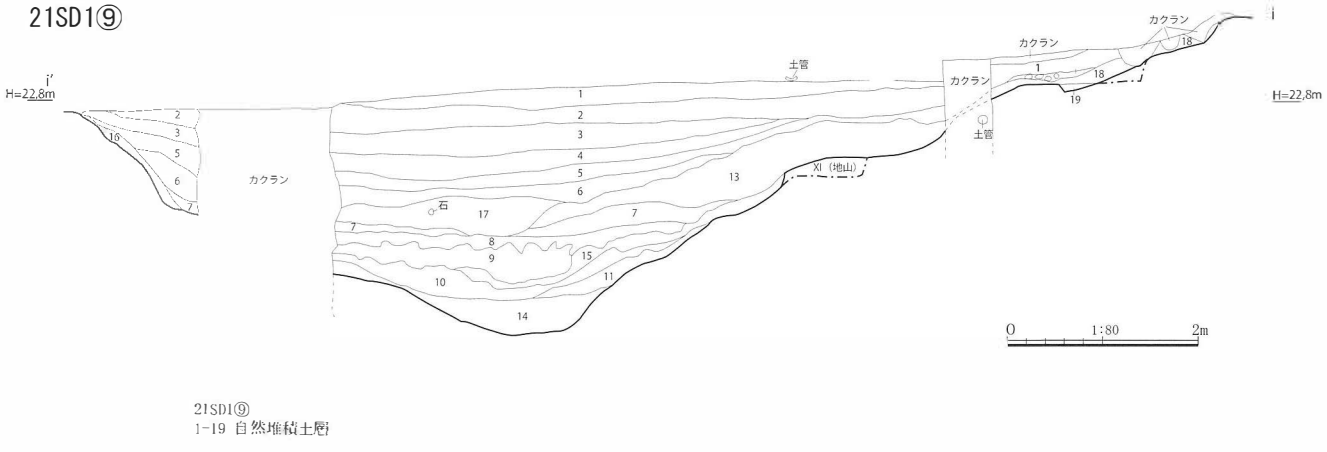
Y=82付近では（図39 －断面⑪）、幅11m程、深さ2.5m程で確認している（76次調査）。底面標高は21.4mである。断面形状は逆台形を呈する。底面は凹凸をもち、一部が不規則に溝状に掘り込まれるなど、不規則な小さい凹凸が連続する。下層のD層とした土層は自然堆積による土層で、上層のB層との層界に土器類や炭化物を多く含む。C層は黄褐色土のブロックや炭化物を含み人為的な様相をもつ土層に由来する。土層は堀の外側から斜行して堆積し、間に薄い炭化物などを含む間層が観察できる。斜行する状況や間層に自然堆積とみられる土層などもあり、埋め戻しではなく崩落による堆積と判断している。C層の下面に自然堆積によるD層と一体で植物質が遺存しているが、明確な層状を呈さず木組み等も確認できない乱雑な状況である。そのため、他地点で確認された植物質遺体などから把握された敷葉工法等（21SX4下層など）に由来するものではなく自然堆積と判断している。B層は自然堆積で、A層は摩滅した土器類を含む近世以降の堆積である。

南端部における内側の堀のまとめ１　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は細部の相違は存在するものの、南端部では概ね対応する。堀の構築→自然堆積による埋没（炭化物・遺物を多く含む土層）→（人為層の崩落）→自然堆積による埋没の過程が理解できる。また、最初の自然堆積による埋没の過程では遺物の投棄や小規模な造作が窺える地点も存在するものの、堀全体に関わるような大規模な掘り直し等は行われていないと判断できる。廃絶時にも堆積は底面から１m弱程にとどまり、全体の深さは２～３m程は保持される。大規模な堀としての形状は保たれたとみられる。断面の形状は逆台形を呈し、底面は平坦な範囲と凹凸をもつ範囲がある。21SD1に関連する遺構として把握できる遺構および土層に、21SX35橋跡、23SX12橋跡、77SK2・77SK3・その他の土坑群（21SX36・21SX37）、整地層（77整地層１、77整地層２、21整地層）がある。

内側の堀跡はこの周囲まで東西方向に自然地形に概ね沿って走るが、77－103付近を境に大きく湾曲して南北に方向を変える。

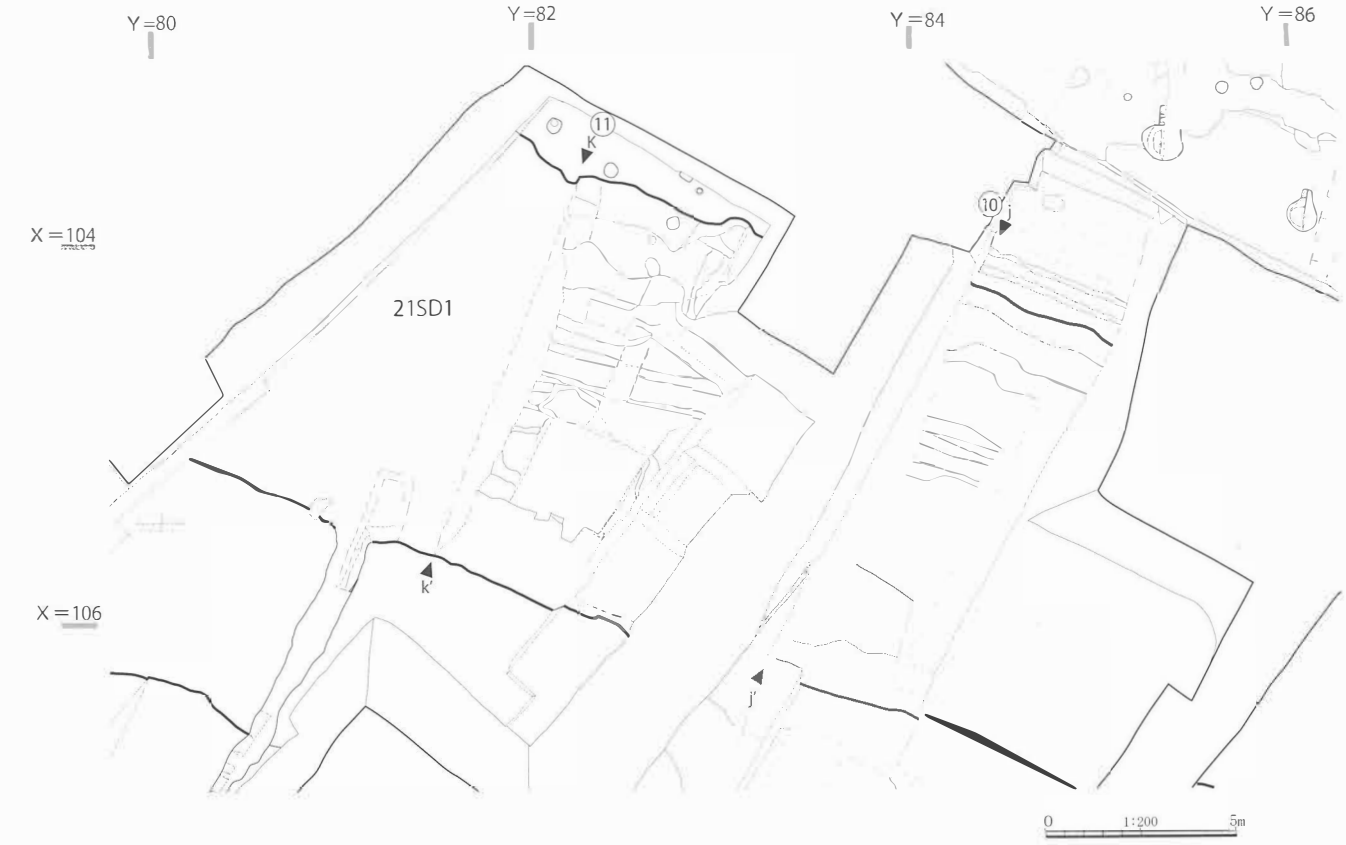
土層状況２　75－99付近では（図40－断面⑫⑬）、南北方向に走り、幅10m程で確認している（78次調査）。底面まで精査をしておらず、深さは不明である。断面形状は、立ち上がり部分の形状からは逆台形と推定しておきたい。この周囲では21SD1を平面的に検出したが、その平面形状内の北側で大きく人為的な土層が広がる状況が確認できた（図44）。その内容を把握するため、東西方向と（図40－⑫）と南北方向（図40－⑬）で精査している。土層からは、堀が一度構築され一部に土器類を含む自然堆積による土層が堆積し、その後に細分が可能な人為層が確認できる。旧期の人為層は、図40－⑫の13～18層が堀の外側から埋め戻され、樹皮等の層を挟んで５～12層が埋め戻される。敷葉等の工法と判断している。図40－⑬では18～28層に対応する。いずれも黄褐色土の地山に由来するブロック土で構成され、樹皮等の薄い層を挟むものの間層が形成されず、一連の造作と考えられる。図40－⑬の断面では、13～15層の旧期の人為層の崩落とみられる土層や10～12層の黒色土が流入し、９層の新期の人為層が堆積する。９層の下部で土留めとみられる丸太材と樹皮等の植物質の薄い層が確認でき、敷葉工法等の痕跡と判断している。４～９層は自然堆積による土層で、土器類などを含む。

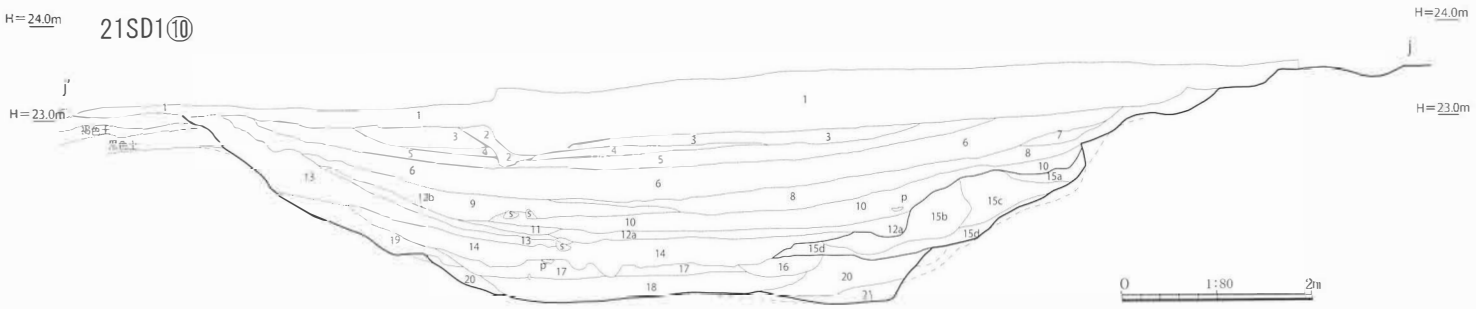
また、堀の外側の肩周辺が整地土によって構築されている。整地土は黄褐色土のブロックで構成さ



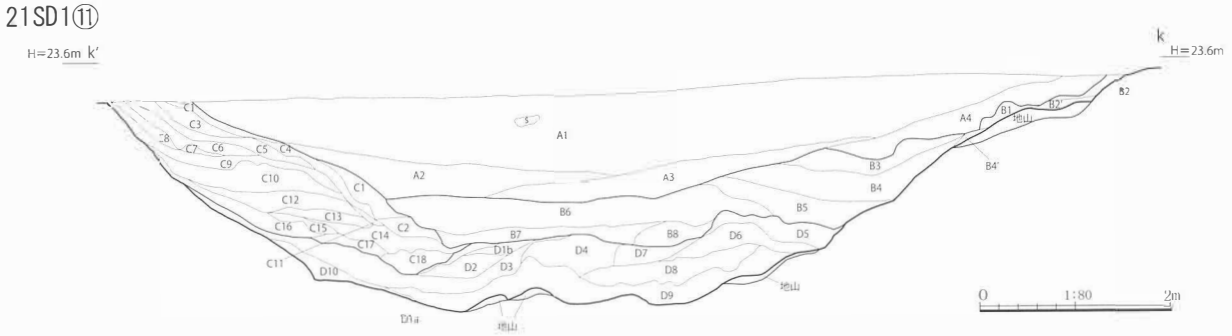
21SD1⑨
1-19 自然堆積土層

図38　21SD1平面・断面図（2）





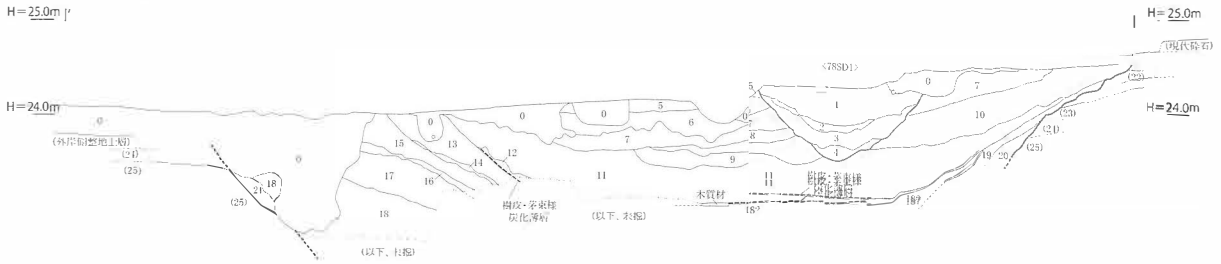
21SD1●
1-4　新しい時期の自然堆積土層
5-14　自然堆積土層
15　壁面の崩壊、自然堆積土層
19-20 自然堆積土層
21　底面の埋め戻しか



21SD1⑪
A 新しい時期の自然堆積土層
B 自然堆積土層
C 人為堆積土に由来する崩落土層
D 自然堆積土層

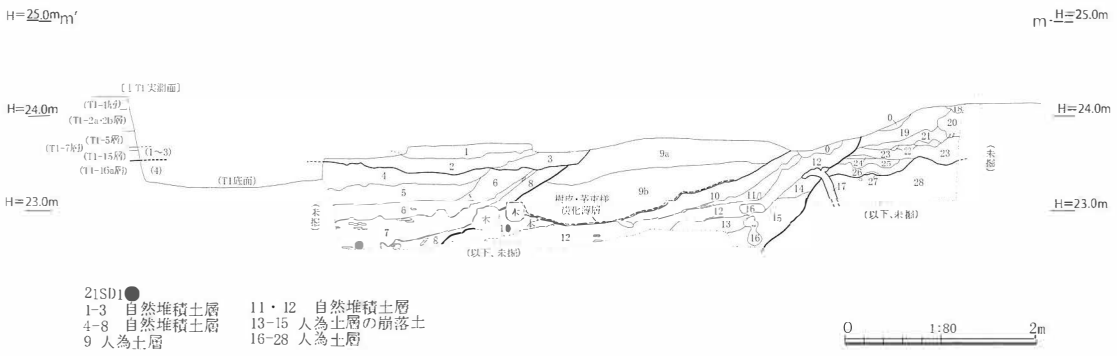
図39　21SD1平面・断面図（3）

21SD1⑫



21SD1⑫
1-4　自然堆積土層(78SD1埋土)
5-12　人為土層
13-18　人為土層
19・20　自然堆積土層

21SD1⑬



21SD1●
1-3　自然堆積土層
4-8　自然堆積土層
9　人為土層
11・12　自然堆積土層
13-15　人為土層の崩落土
16-28　人為土層

図40　21SD1平面・断面図（4）

れ、水平方向の厚さ20～30cm程の土層で確認でき、盛土による整地地業と判断できる。断面での観察では整地地業が行われた範囲を切って堀が構築されるのか、堀構築に際して整地が行われたかは判然としない。外側の堀の存在や水平方向への積み土などを勘案すれば、内側の堀の構築以前に整地が行われ、内側の堀の構築に際して再度整地が行われるなどの工程も想定できるものの確定できない。

南端部における内側の堀のまとめ２　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は南端部と、廃絶時の流入土を除いて対応する。整地（≒）堀の構築→自然堆積による埋没（遺物を多く含む土層）→人為層の崩落と埋め戻し→自然堆積による埋没（炭化物・遺物を多く含む土層）の過程が理解できる。

関連遺構　21SX35橋跡　89－105付近に位置する、２×１間の橋跡である（図41・42）。21次調査で精査され、69次調査でも再度検出している。堆積土層は21次調査で完掘されており、それに関する新たな知見は得られていない。軸方位はN－12°－Eである。21SK11、21SK7、21SK3、21SK1、21SK5、21SK8の６個の橋脚で構成される。柱間寸法は桁行が650（21.5尺）cmの等間に、梁行が北側で336（11.1尺）cm、南側で436（14.4尺）cmで復元できる。全長は桁行13m、梁行3.4mで、平面積は44.2㎡である。柱穴は掘方が径100cm前後の円形で、21SK1で径44cm、21SK3で径36cmの柱材が残り、いずれも八角形と推定されている（岩手埋文1995）。このほか21SK5、21SK7では径40cm程の柱あたりとみられる痕跡が図示されている。埋土上層に地山ブロックが多いことが報告されているものの、不明点も残る。柱材が残る柱穴を事例にみると、掘方埋土は地山ブロックを多く含む土層である。検出面の標高が21SK8、21SK11が24.6～24.7m、21SK5、21SK7と21SK1、21SK3が21.9～22.3mに分かれる。柱穴の深さはいずれも100cm以下のため、底面標高も大きく２つに分かれる。周囲には整地層が分布する（21整地層）。これらの橋跡を構成する土坑は整地層上面で検出されている。なお、21SK117・118、21SK119は北側の２個の柱穴の延長に位置している。埋文報告では21SX36として他の土坑と一連で理解されているが、位置関係に着目すれば21SX35との関係も注目できる。

21SX35を構成する21SK5→21SK6と、21SK8→21SK9・21SK10及び、21SK12→21SK11の新旧関係が確認できる。21SX35を構成する土坑以外はいずれの土坑も独立した単独の土坑で、橋の造り替えはないものと見なせる。

また、橋を構成する土坑には遺物が少なく、かわらけが出土しているものの小破片のみで、器形を復元できるものはない。

23SX12橋跡　95－95付近に位置する、２×２間の橋跡である（図43）。23次調査で精査されており新たな知見は得られていないが、ここでは参考として平面図を示した。軸方位はN－75°－Wである。23SK27、23SK23、23SK20・21、23SK18・19、23SK16・17、23SK22、23SK25、23SK26、23SK27で構成される。柱間寸法は桁行が西から364（12尺）cm・485（16尺）cmに、梁行が212（7尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行8.5m、梁行4.2mで、平面積は35.7㎡である。柱穴は径100cm前後の円形である。柱穴の切り合いから、橋は同位置で１度造り替えがある。柱穴の重複が明確なものは東側の柱列で北側から23SK20→23SK21、23SK18→23SK19、23SK16→23SK17の新旧が確認できる。23SK17で径44cm、23SK19で径50cm、23SK21で径52cm、23SK25で径44cmの柱材が残り、いずれも八角柱と推定されている（岩手埋文1995）。また、23SK18では底面に34×31×0.5cmの板材が確認されているほか、23SK26で木質の残存が図示されている。なお、西側の延長部分に23SK29、23SK33、23SK34が検出されている。位置関係からは23SX12との関係も注目できるが、柱穴との間隔が760cmとやや離れていることから、関係性を確定できない。

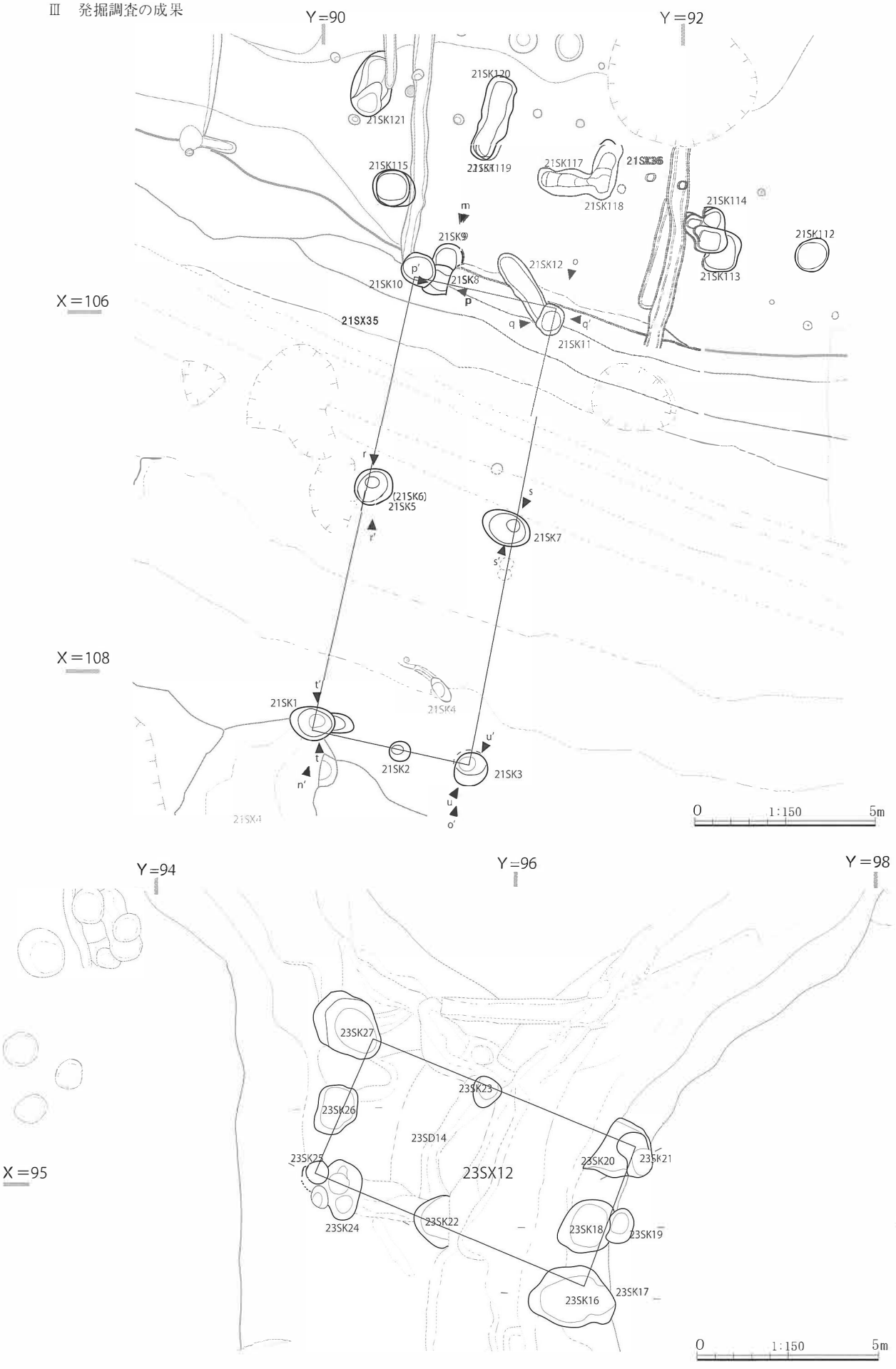
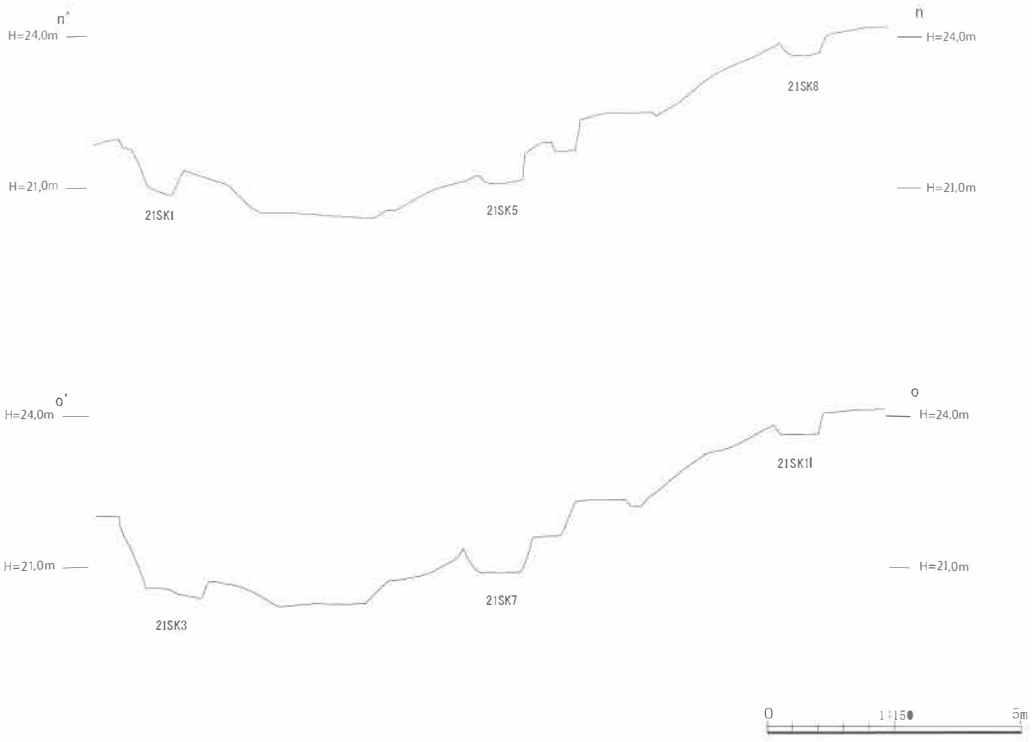
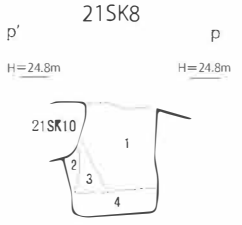
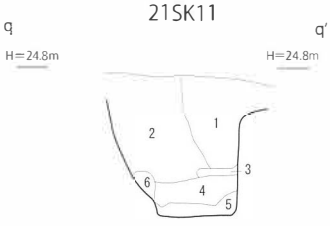


図41　21SX35・23SX12平面図

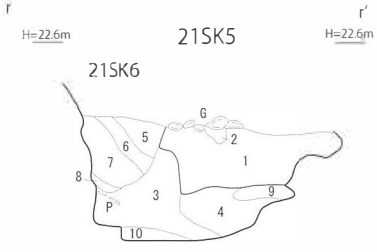




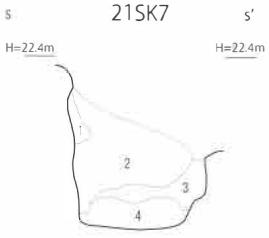
21SK8
1 2.5Y7/4　浅黄色粘土混じりシルト
2 2.5Y7/4　浅黄色粘土混じりシルト
3 10YR4/2　黒褐色砂混じりシルト
4 10YR4/2　黒褐色砂混じりシルト



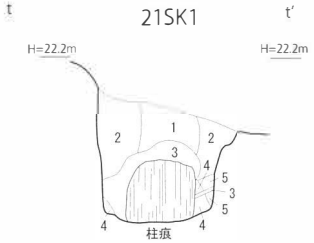
21SK11
1 2.5Y7/4　浅黄色粘土混じりシルト
2 2.5Y7/4　浅黄色粘土混じりシルト
3 7.5YR4/4　褐灰色砂混じりシルト
4 2.5Y7/4　浅黄色粘土混じりシルト
5 10YR2/1　黒褐色砂混じりシルト
6 10YR3/4　暗褐色砂混じりシルト



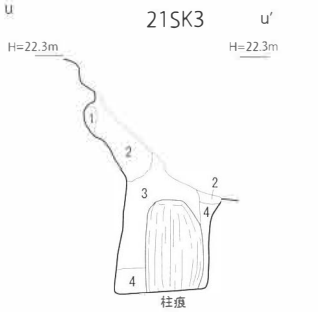
21SK5
1 10YR3/2　黒褐色砂混じりシルト
2 10YR2/3　黒褐色砂混じりシルト
3 10YR3/1　黒褐色砂混じりシルト
4 10YR4/2　灰黄褐色砂混じりシルト
5 10YR4/2　灰黄褐色砂混じりシルト
6 10YR4/1　褐灰色砂シルト混じり粘土



21SK7
1 2.5Y7/6　明黄褐色粘土ブロック
2 10YR3/4　暗褐色砂混じりシルト
3 10YR3/2　黒褐色粘土
4 10YR3/2　黒褐色粘土

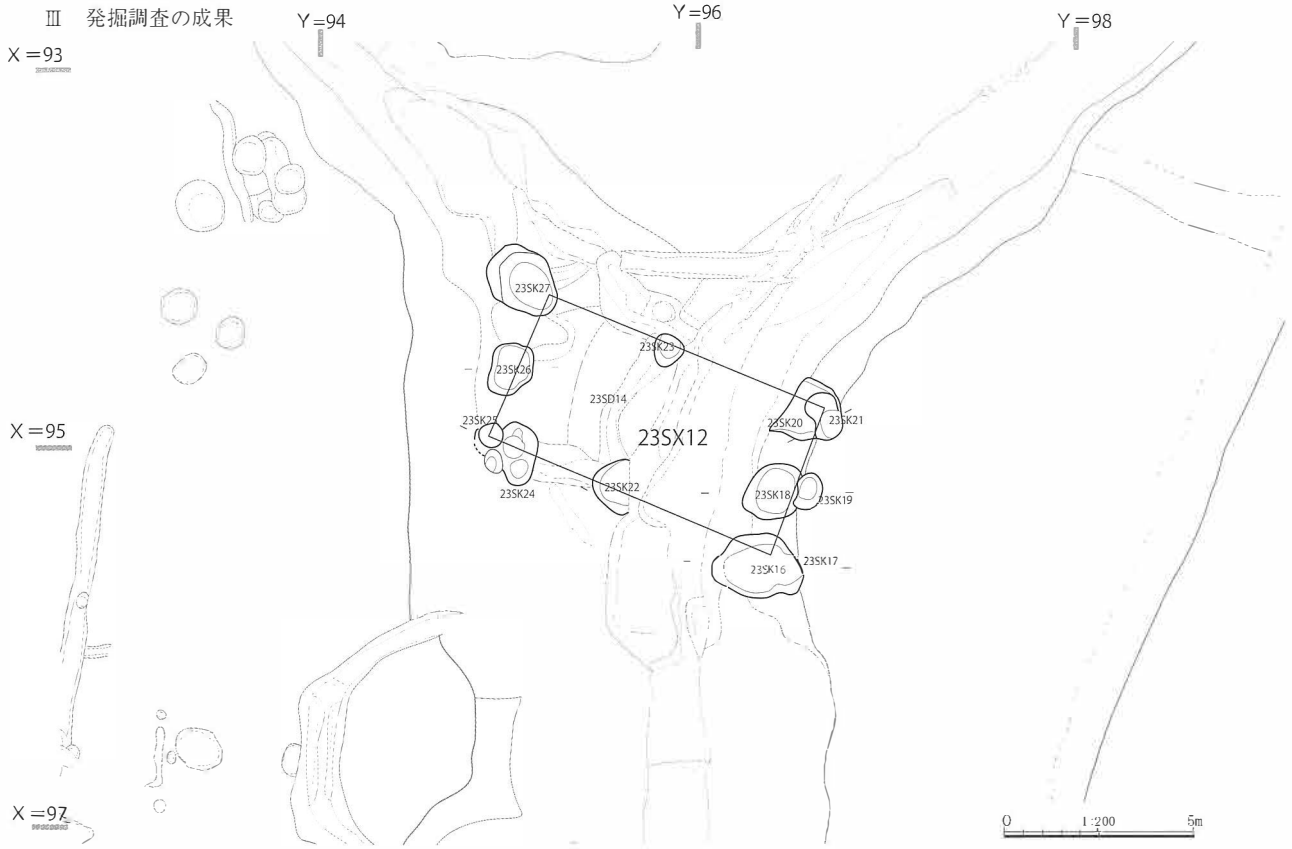


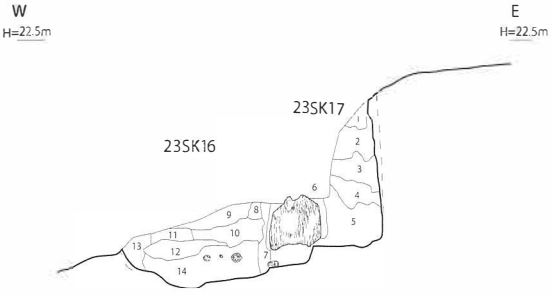
21SK1
1 10YR4/3　にぶい黄褐色砂混じりシルト
2 10YR4/3　にぶい黄褐色砂混じりシルト
3 10YR4/1　褐灰色砂　シルト混じり粘土
4 5G6/1　緑灰色砂混じりシルト
5 10YR7/4　にぶい黄褐色砂混じりシルト
6 柱痕（橋脚）



21SK3
1 10YR4/4　シルト混じり砂
2 10YR4/4　シルト混じり粘土
3 10YR4/1　シルト混じり粘土
4 5G7/1　明緑灰色シルト混じり粘土
（橋脚が変化したものか）

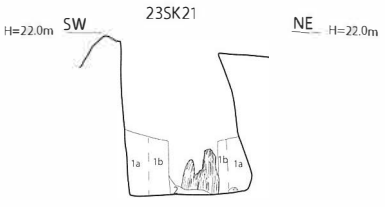
図42　21SX35断面図



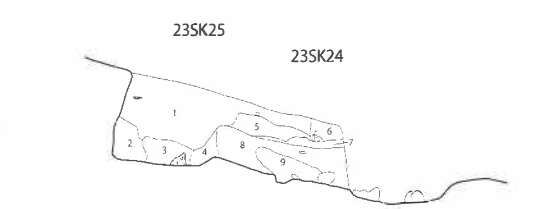


21SK16・17
1　5Y8/3淡黄色粘土。やや汚れる。
2　5Y8/3淡黄色粘土。ブロック、10YR6/2灰黄褐色シルトブロックが半々。
3　5Y8/3淡黄色粘土ブロック、10YR6/2灰黄褐色シルトブロック。灰黄褐色土卓越大小ブロック混入。
4　10YR6/2、10YR4/2灰黄褐色シルトブロックが主。5Y8/3淡黄色粘土大小ブロック約30%。
5　10YR4/2灰黄褐色シルトが主。5Y8/3淡黄色粘土大ブロック約30%。
6　2.5Y4/1黄灰色粘土。
7　2.5Y4/1黄灰色粘土が主。下半は緑灰褐色粘土がブロック状に混入。
8　10YR4/2灰黄褐色シルトが主。5Y8/3粘土小ブロック（径約1～2cm）約30%。
9　10YR4/2黄褐色シルトが主。地山粘土の中小ブロック散在。
10　10YR3/1黒褐色が主。中小の地山粘土ブロック散在。
11　10YR4/2灰黄褐色土が主。径約1cmの地山粘土ブロック25～30%。
12　10YR4/2灰黄褐色土が主。径約1cmの地山粘土ブロック約40%。
13　10YR2/2黒褐色土。10に似るが、含まれる地山粘土ブロックの割合が高い。
14　10YR2/2黒褐色土。10、13に似る。地山粘土大ブロック散在。約10%以下。下部の粘土ブロックは5GY6/1緑灰色。

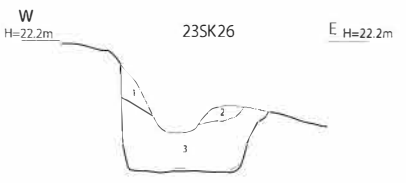
21SK18・19
1　10YR4/4褐色シルト。かわらけ極細片、炭化物片散在。
2　10YR4/3にぶい黄褐色が主。5Y8/3淡黄色粘土ブロック散在。
3　10YR4/2灰黄褐色が主。地山粘土小ブロック径5%。炭化物片散在。
4　2.5Y4/1黄灰色粘土。水分多く軟質。
5　5Y8/3淡黄色粘土大ブロックが主。10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック。
6　10YR4/4褐色土が主。径約1cmの地山粘土小ブロック。
7a　10YR4/2灰黄褐色土が主。径約1cmの地山粘土ブロック約10%以下。かわらけ細片含。
7b　10YR4/2灰黄褐色土が主。7aとほぼ同じ。地山粘土ブロックにやや大型のもの含む。
8　10YR3/2黒褐色土が主。地山粘土中小ブロック約10%以下。
9　10YR4/1褐灰色土が主。径約3cmの地山粘土ブロック約20パーセント。
10　10YR3/1黒褐色土が主。地山粘土中小ブロックが上半に散在。



23SK21
1a　10YR4/1褐灰色～10YR3/1灰黄褐色土。大小の粘土ブロックを含む。
1b　10BG4/1暗青灰色土。1aがグライ化したもの。
2　10GY2/1黒色粘土。



23SK24・25
1　10YR3/1オリーブ黒色粘土質土に粘土の大小ブロックや細砂が混入。
2　10GY5/1緑灰色粘土。
3　10Y4/1オリーブ黒色粘土。
4　10GY5/1緑灰色粘土と10GY3/1オリーブ黒色粘土質土。
5　10GY4/1暗緑灰色～10GY3/1オリーブ黒色粘土質土と2.5Y5/2暗黄灰色細砂の斑理。
6　1に似る。粒径50mm±の礫を含む。
7　10G5/1緑灰色土。細砂卓越。
8　10Y3/1オリーブ黒色。
9　10Y3/1オリーブ黒色土。粘土の大小ブロックと最大粒径100mm以下の礫を含む。
※2～4が23SK25の埋土。



23SK26
1　10YR4/2灰黄褐色土が主。地山粘土ブロック多量。径約5cm以下の礫少量。
2　5BG6/1青灰色粘土。
3　10YR3/1黒色粘土混じりシルトと地山粘土大小ブロックが半々。粘土は還元し、青灰色。

1:60　1m

図43　23SX12平面・断面図

なお、橋を構成する土坑には遺物が少なく、かわらけが出土しているものの小破片のみで、器形を復元できるものはない。

77SK2　86－103に位置する、径90×80cm程の円形に35×30cm程の張り出しをもつ土坑である（図44・45）。深さは85cmである。長軸での軸方位はN－1°－Eで、ほぼ正方位を示す。底径は60cm程で、底面に柱のあたり痕跡とみられる径25cm程の窪みが確認できる。張り出し部と正対する側の壁面に抉れがある。柱材の抜き取りに際して柱を引き倒すなどにより生じた痕跡と判断している。土層は、底面付近の４層とした埋土のほか、２層とした土層で埋め戻されている。２層は黄色のブロック土を含み、ブロック土の包含は２層上部で顕著である。

77SK3　85－103に位置する、径110cm程の円形に60×26cm程の張り出しをもつ土坑である（図44・45）。深さは110cmである。長軸での軸方位はN－0°－Eで、ほぼ正方位を示す。底径65cm程で、底面に柱のあたり痕跡とみられる径28cm程の窪みが確認できる。この窪み部分には柱材の痕跡とみられる炭化物が付着する。張り出し部と正対する側の壁面に抉れがある。柱材の抜き取りに際して柱を引き倒すなどにより生じた痕跡と判断している。土層からは、掘方埋土とみられる４・５層、抜き取り時に混入した３層、柱材の痕跡及び抜き取り埋土の２層、埋め戻しによる人為層の１層が確認できる。１層の人為層は、周囲に分布する77整地層２と類似した土層で構成され、整地層と柱穴は同時もしくは近いものの整地が先行する時期に構築されたと判断した。ただし、抜き取り等は整地層を切るため、平面的な確認では77整地２→77SK3となる。このことは後述する整地層と関連遺構の新旧関係の認定に際して留意すべき特徴と判断している。

その他の土坑群（21SX36・37）　21次調査で21SD1の平面プランに沿って、77SK2・77SK3と同様の遺構が確認されている（21SX36・21SX37）。21次調査で精査されており新たな知見は得られていないため、ここでは参考として平面図等を示した。

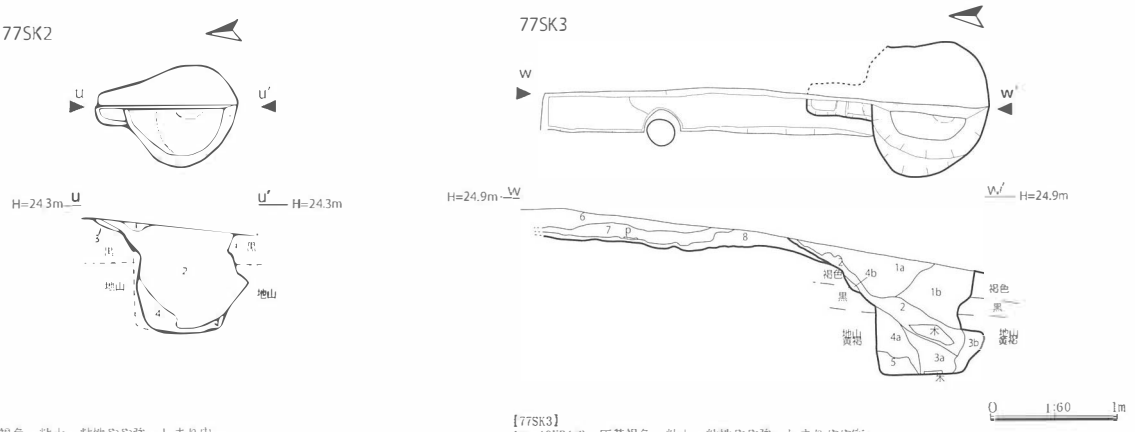
21SX36は西から21SK121、21SK119・120、21SK117・118で構成される。いずれも円形の柱穴に張り出しをもつ土坑である。埋土は人為的に埋め戻されている。埋文報告の記載からは21整地層に覆われるとされる。しかし、後述すように21SC1道路跡と21整地層、関連する遺構の新旧関係は不定な部分が残る。なお、既述のとおり、21SK119・120、21SK117・118は21SX35の柱の延長に近い位置にある。

21SX37は南から21SK116、21SK122、21SK34、21SK40で構成される。いずれも円形の柱穴に張り出しをもつ土坑だが、こちらは張り出しが短い。21SK34、21SK122では柱痕跡の可能性がある土層が記録されているが、埋土の多くは人為的な埋め戻しによる。埋文報告の記載からは21整地層に覆われるとされる。しかし、後述するように21SC1道路跡と整地層、関連する遺構の新旧関係は不定な部分が残る。なお、21SX37に平行して21SK109、21SK110、21SK111があり、人為土層で埋め戻されているが、平面形状は円形の土坑で検出されている。

整地層（77整地層１・２）　77整地層１は81－101付近に位置し、南北3.7m程、東西9m程に広がる（図44）。自然地形の旧表土にあたる黒褐色土層の上面に地業された整地で、先行する遺構とも捉えうる凹凸の掘り込みを埋め戻し、傾斜面を平坦に造成している。整地層は上下の２層で形成され、間層に自然堆積土層を挟み２時期に分かれる。下層の整地は黄褐色土のブロックで構成され、掘り込みを埋め埋め戻している。その後、下層整地の上面に炭化物片や土器類を含む自然堆積層が堆積する。その後、再度その自然堆積層上面を、ブロック土を含む人為的な土層で整地する。

77整地層２は85－103付近に位置し、南北5.5m程、東西14.5m程に広がる（図44）。自然地形の旧表土にあたる黒褐色土層の上面に地業された整地で、傾斜面を平坦に造成している。整地層は１層のみ

図44　遺跡南端部整地・土坑分布



【77SK2】
1　10YR5/2　灰黄褐色　粘土　粘性やや強　しまり中。
2　10YR2/1 黒色粘土質シルト・2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土質シルト・
2.5Y6/3-6/4にぶい黄色シルトの混ブロック層（径10-80㎜）。粘性中　しまりやや密。
地山ブロック（2.5Y6/3-6/4にぶい黄色）は上半部に多い（上半部多量・下半部やや多量）。
※本層は上部（壁面肩部と張り出しをつなぐラインより上）では地山ブロックの比率が卓越し、下部は黒色土のそれとほぼ同比。
3　10YR2/1　黒色　粘土質シルト　粘性やや強　しまり密。
2.5Y6/3にぶい黄色シルト（地山土）ブロック（径2-5㎜）極微量。
4　10YR5/3-5/4　にぶい黄褐色　砂　粘性中　しまり密。
2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルトブロック（径2-10㎜）少量。掘方埋土残存部か。

【77SK3】
1a　10YR4/2　灰黄褐色　粘土　粘性やや強　しまりやや密。
10YR6/3-5/3にぶい黄橙～にぶい黄褐色粘土質シルトブロック（径20-50㎜）少量。
2.5Y6/3-6/4にぶい黄色粘土ブロックやや多量　※木炭より鉄製鋤先出土。
1b　2.5Y6/3-6/4にぶい黄色粘土ブロック（径10-100㎜、多量）・10YR1.7/2灰黄褐色粘土質シルトブロック（径20㎜、微量）
・10YR3/1-2/2黒褐色シルトブロック（径10-20㎜、微量）の混ブロック層。
2　10YR4/1-3/1　褐灰～黒褐色　粘土　粘性強しまり中。材の一部残存する。
3a　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまり中。10YR6/1-6/2褐灰～灰黄褐色粘土ブロック（径20-50㎜）やや多量。
3b　10YR6/1-6/2　褐灰～灰黄褐色粘土ブロック層。粘性やや強　しまり中。
壁との境界面に10YR2/1黒色シルトの小径ブロック少量みられる。
4a　2.5Y6/3-6/4にぶい黄色粘土ブロック層。粘性やや強　しまり密。8層によく似る。
4b　4a層に同じ。
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまりやや密。2.5Y6/3-6/4にぶい黄色粘土ブロック（径50-100㎜）やや多量。
6　10YR4/2-3/2　灰黄褐～黒褐色　シルト　粘性中　しまり中。炭粒（径5-10㎜）微量だが目立つ。
土器細片微量。本層は付近に分布する新期住穴の埋土となっている。
7　10YR4/2-3/2　灰黄褐～黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強　しまりやや密。
2.5Y6/3-6/4にぶい黄色粘土ブロック（径10-30㎜）多量。
8　2.5Y6/3-6/4　にぶい黄色　粘土　粘性強　しまり密。遺構周辺の整地土層。

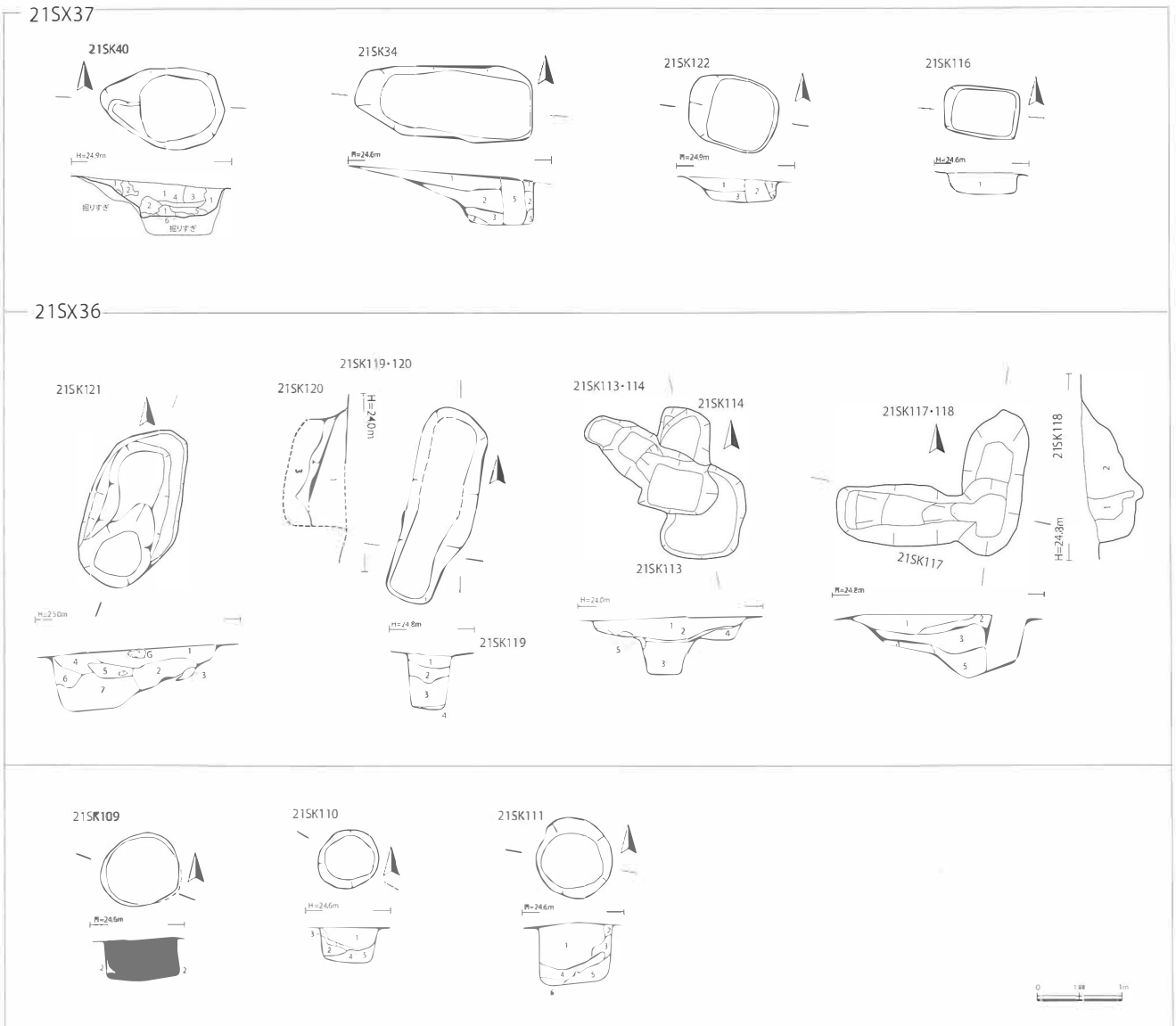


図45　土坑（77SK2・77SK3）平面・断面図

で黄褐色土で構成され、混入物や他の土層を含まない。なお、77整地層１と77整地層２は現状では攪乱等によりそれぞれ独立して検出しているが、一連の地業の可能性が高い。また、77整地層２は、外側の堀と接して確認された既述の77整地層3の下部と土層が類似しており、一連の整地地業とみられるが、両整地層の間に21SD1を挟み検出位置が両者は離れているため確定できない。

21整地層　21次調査では内側の堀（21SD1）の内側の岸周辺で21整地層が確認されている（図44）。21整地層は地山粘土ブロック等で形成される。21整地層を掘り込んで21SC1が構築されたことや、下層から土坑が確認されている。しかし、上述のとおり21整地層と関連遺構の新旧関係の認定は77SK2及び77SK3の検出時の状況からは、調査時の認定に困難な条件が付随し不確定な部分が残ることが推察される。この点で、21SC1道路跡と整地層、関連する遺構の新旧関係は参照すべき成果ではあるものの、その後の調査の知見からは必ずしも新旧が確定できないと捉えておきたい。

遺物　概要　内側の堀（21SD1）からの出土遺物は多くは近世の堆積とみられる上層の自然堆積土からの出土で、廃絶以降の自然堆積による埋没の時期のものである。各地点において相対的に下位にあたる土層から出土した遺物を中心に、下層から図示する（図47）。便宜的に「下層」、「中層」と記すが、土層の特徴については上記のとおりである。いずれの調査位置においても、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含むが、手づくねの資料が多い。

内側の堀跡（21SD1）下層　Y=88付近では（69次調査、図38－断面⑨）、底面付近及び９層付近からの出土資料がある（図46－１～15）。ロクロかわらけ小皿は口径9.4～9.6cm、底径6.6～6.8cm、器高2.0～2.1cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.0～13.2cm程、底径6.6～7.2cm、器高3.2～3.6cmである。器高の低い皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径8.2～9.5cm程で平均8.8cm程、器高1.3～2.1cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.2～14.7cm程で平均13.5cm程、器高2.4～3.2cm程で平均2.8cm程である。口径が14cmを超えるやや大型の器形も含むものの、小型の器形を呈する資料が多い。

Y=84付近では（77次調査、図39－断面⑩）、18層及び19～20層からの出土資料がある（図46－16～29）。ロクロかわらけ小皿は口径8.5～8.8cm、底径6.4cm、器高1.6～1.7cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.1cm、提携6.0～7.1cm、器高3.4cmである。手づくねかわらけ小皿は口径7.8～8.5cm、器高1.7～2.2cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.0～13.7cm程で平均13.0cm、器高2.1～3.0cm程で平均2.4cm程である。口径が13cm以下の小型の器形を呈する。

Y=82付近では（76次調査、図39－断面⑪）、D層とした自然堆積層からの出土資料がある（図46－30～42）。ロクロかわらけ大皿は口径14.0～14.8cm、底径7.0～8.0cm、器高3.1～3.8cmである。器高の低い皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径8.6～9.5cm程で平均9.0cm程、器高1.6～2.2cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.7～15.5cm程で平均13.2cm程、平均2.0～3.3cm程で平均2.7cm程である。口径が大きい資料も少量含むが、器高は低い。多くの資料は口径が小さい小型の器形を呈する。

75－99付近では（78次調査、図40－断面⑫⑬）、T1の20層及び25層、T3の19層からの出土資料がある（図46－43～56）。ロクロかわらけ小皿は口径8.8cm、底径6cm、器高1.6cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.2cm、底径6.5cm、器高3.4cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.4cm、器高1.8cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.4～15.6cm、器高2.4～3.6cmである。口径が大きい資料を含むが、多くは小型の器形を呈する。なお、46は内面に漆が付着する。

内側の堀跡（21SD1）人為層　遺跡の廃絶に近い時期の堆積と捉えられる資料に、人為堆積土の崩

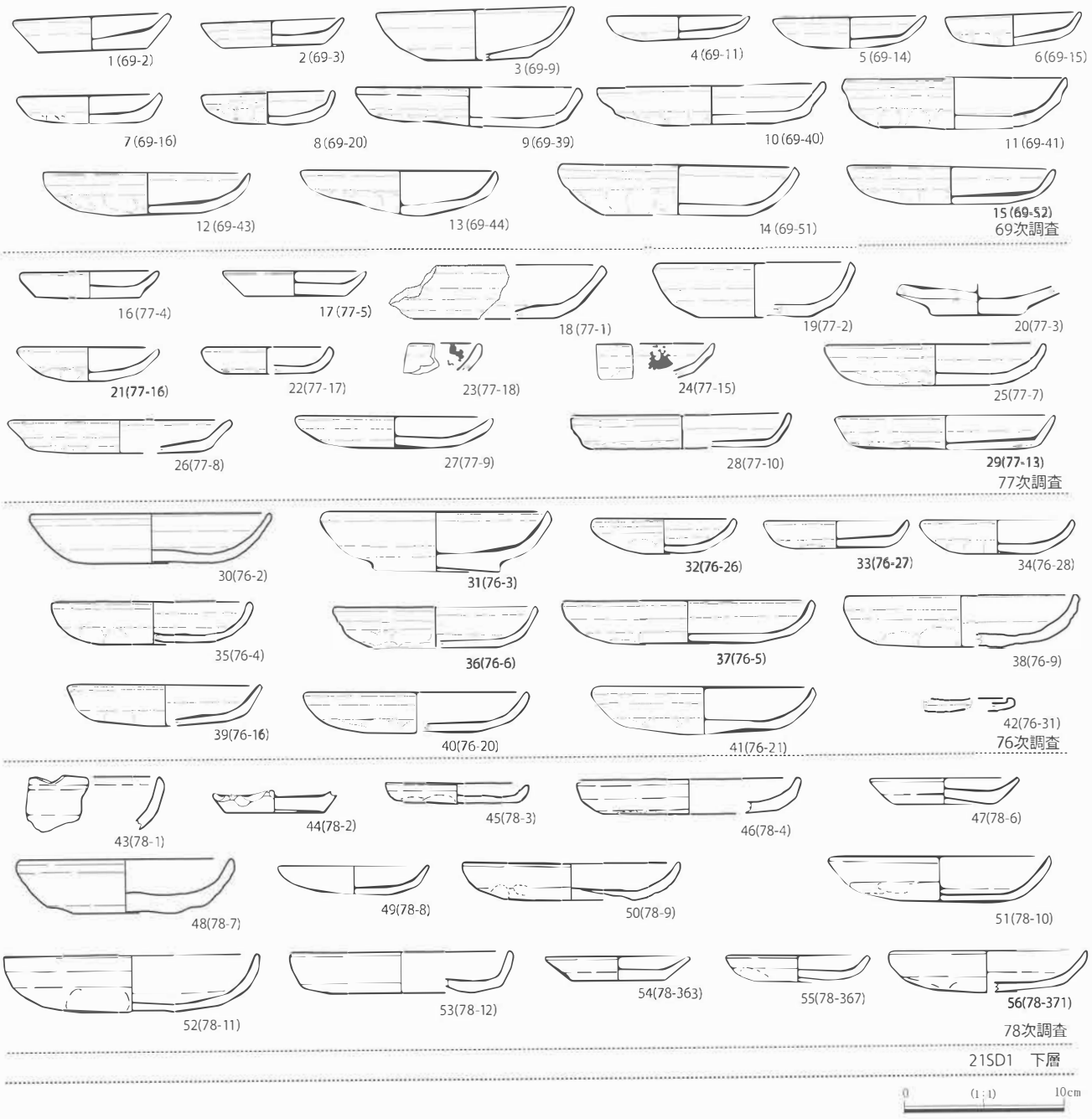


図46　21SD1出土土器類実測図（1）

落土からの出土資料がある。Y=82付近では（76次調査、図39－断面⑪）、C層とした人為層に由来する崩落土層からの出土資料がある（図47－57～75）。ロクロかわらけ小皿は口径8.6～9.6cm程で平均9.1cm、底径4.6～7.0cm程で平均6.0cm、器高1.4～2.8cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は10.6～14.0cm程で平均12.6cm程、底径5.8～8.6cm程で平均7.1cm程、器高2.3～4.0cm程で平均3.1cm程である。口径が小さい器形が多い。手づくねかわらけ小皿は口径7.5～10.6cm程で平均8.8cm程、器高1.6～1.8cm程で平均1.7cm程である。

75－99付近では（78次調査、図40－断面⑫⑬）、T2の11・12層からの出土資料がある（図47－76～85）。ロクロかわらけ小皿は口径8.3～9.0cm、底径5.7～6.8cm、器高1.5～1.9cmである。ロクロか

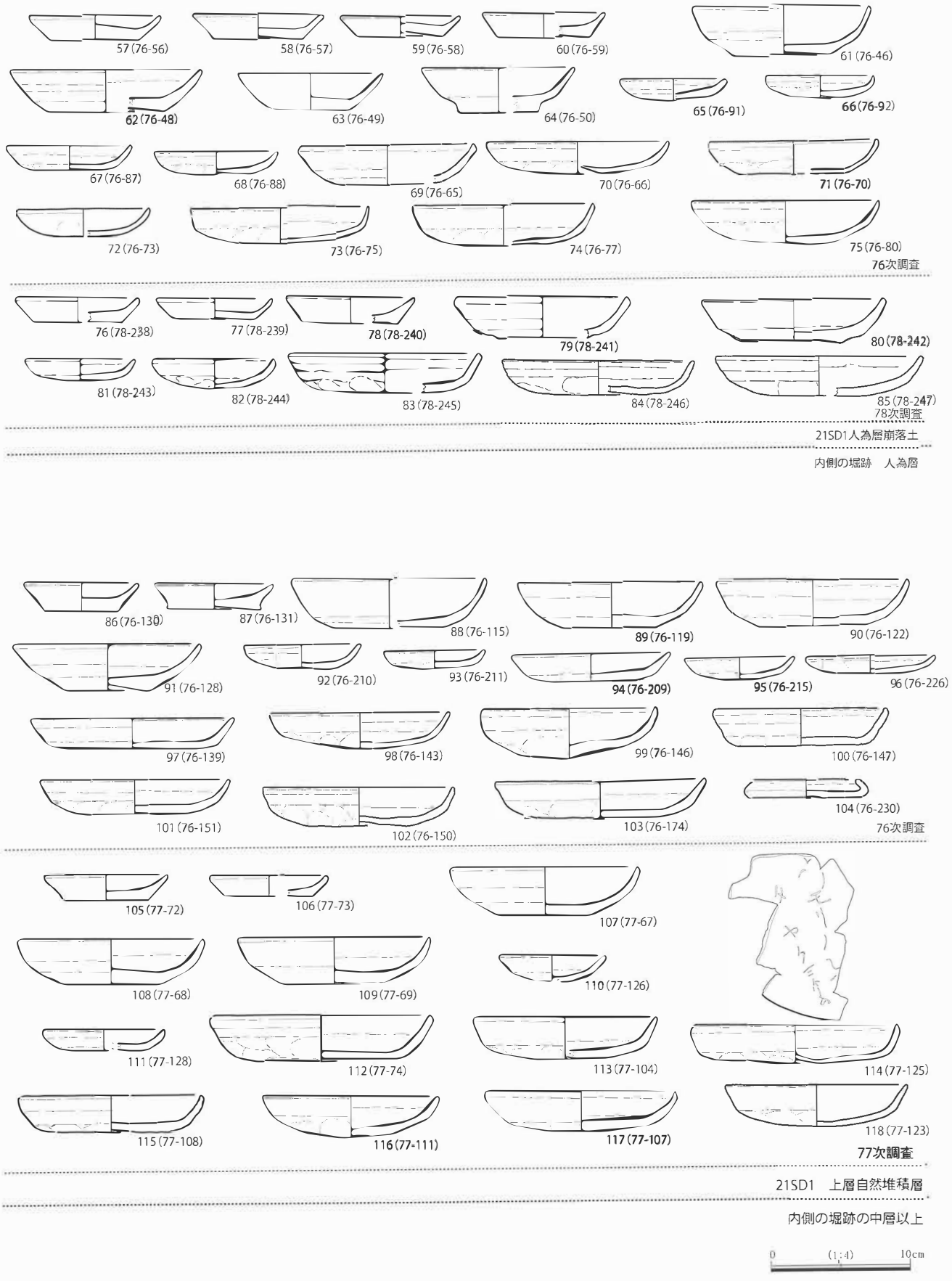


図47　21SD1出土土器類実測図（2）

わらけ大皿は口径12.3～13.1cm、底径7.2cm、器高3.3cmである。手づくねかわらけ小皿は口径7.8～8.7cm、器高2.1～2.2cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.7～14.6cm、器高2.5～3.1cmである。口径の小さい小型の器形を呈する資料が多い。

内側の堀跡（21SD1）中層以上　自然堆積層の中層以上の資料は遺跡廃絶後の堆積とみられる。ここではそれらのうち下層に近い、遺跡廃絶に近い堆積土層からの資料を図示した。

Y=84付近では（77次調査、図39－断面⑩）、10層、10～14層、12・13・14層からの出土資料がある（図47－86～104）。手づくねかわらけでは口径13cm程の小型の器形を呈する資料が多い。内面に刻書がある土器も出土している（図47－114）。カタカナで記載される。

「□□モリノ/
　タ
　　ヤク□ケム」

と判読できるが、全体での文意はとれておらず確定できていない。

Y=82付近では（76次調査、図39－断面⑪）、B層とした自然堆積土層からの出土資料がある（図47－105～118）。手づくねかわらけでは口径15cmを超える大型の器形を含むものの、多くは13cm前後以下の小型の器形を呈する。

【21SX3溝跡（外側の溝跡）】（図版編図52・76、図25・26－断面⑦）

遺構　89－112付近に位置する、東西方向に走る溝跡である。21次調査で検出されているが、69次・70次調査で精査した。外側の堀（21SD2）を覆う整地層の下で、整地層を除去した段階で検出された。東側の延長は河川の浸食によって失われている。西側の延長は検出できておらず、現状では長さ7.5m程の検出にとどまる。幅2.5～2.7m、検出面からの深さが0.8m程で底面標高は21.3mである。堆積土は全体が人為的に埋め戻されている。北側に近接して、幅1.2m、深さ1.1mで底面標高は21.7mの溝状もしくは土坑状の69SX1がある。69SX1→21SX3の新旧関係が確認できるが、これらは同一の方向を向いており、同様の性格が想定できる。69SX1も人為的に埋め戻されている。

21SX3からは、かわらけの細片のほかは、遺構の時期を示す遺物は出土していない。また、外側の堀（21SD2）を覆う整地層に全体が覆われており整地層より古いことがわかるが、他の遺構との重複はない。そのため時期の特定は難しいが、出土遺物がきわめて少ないことや人為的に埋め戻された堆積土の特徴などからは、遺跡内でも古い段階の遺構の可能性がある。

②猫間ヶ淵周辺の様相

【概要】

現在の遺跡南西部にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地「猫間ヶ淵跡」と柳之御所遺跡の間の低地部分を便宜的に「猫間ヶ淵周辺」として地区を区分して記述する（図48・49）。柳之御所遺跡堀内部以外の遺跡範囲との関連では、自然の低地である猫間ヶ淵跡を介して無量光院跡に近接する位置にあたる。

猫間ヶ淵跡周辺では柳之御所遺跡を画する遺構として、外側の堀（72SD2）と内側の堀（72SD1）のほか、２条の堀に関連する整地層や土坑が確認されており、それらについても２条の堀跡と関連する遺構として記す。

【外側の堀（21SD2・56SD39・72SD2）】

遺構　概要　外側の堀跡は遺跡を画する大規模な２条の堀のうち、外側を走る堀である。遺跡の西部

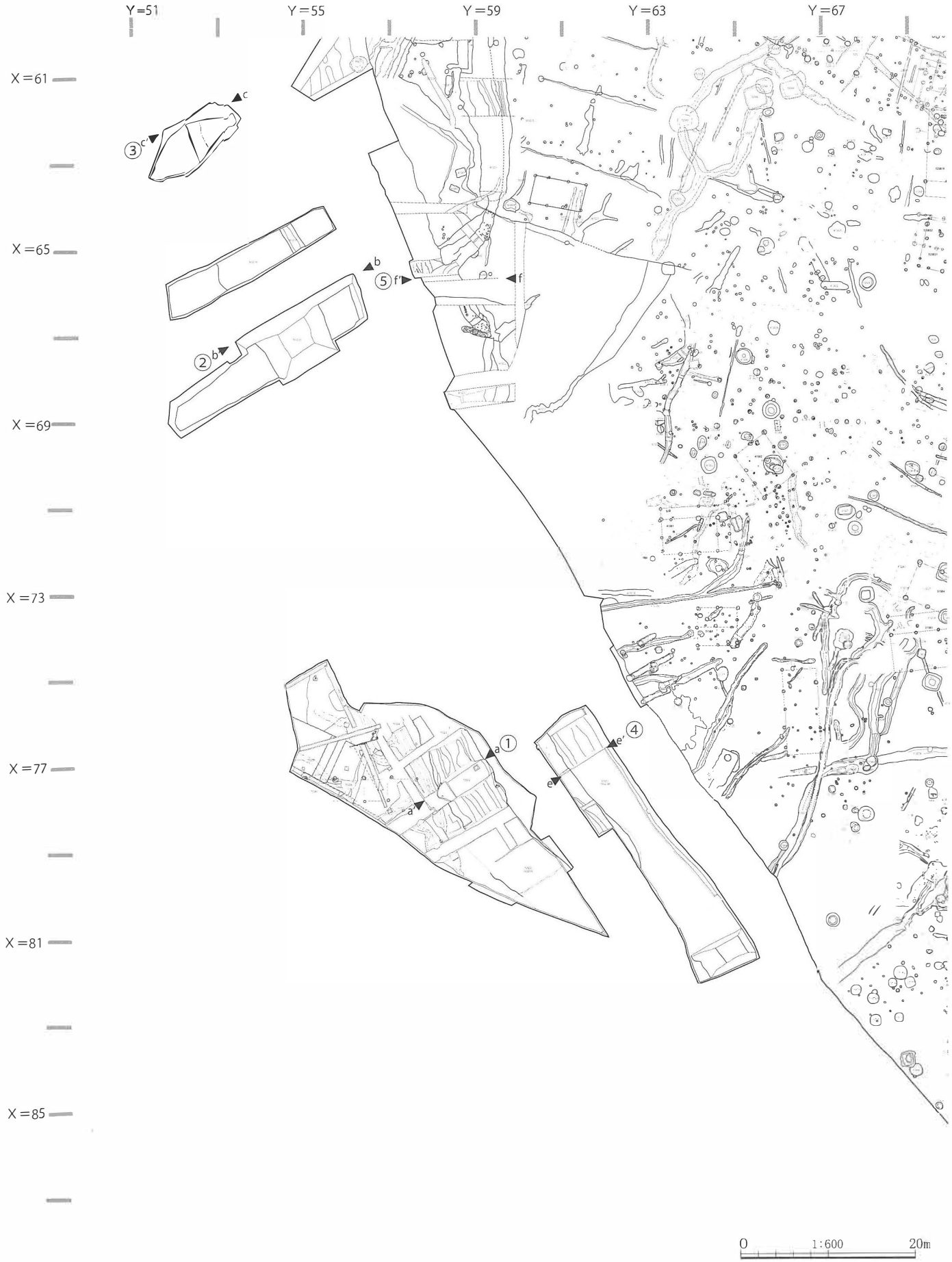


図48　猫間ヶ淵周辺平面図（1/600）

に立地する猫間ヶ淵の低地部分に位置する。56次調査で北側と南側の一部の精査を、75次調査で平面的に検出し一部を精査した。堀の走向は南北方向で、軸方位はN－15°－Wでやや西に振れる。周囲の段丘面と猫間ヶ淵跡の自然地形に沿う。幅５～７ｍ程で、検出面からの深さは1.2～2.1ｍ程である。底面標高は20.6～22.2ｍ程で、概ね平坦だが南側に向かって傾斜する。猫間ヶ淵跡の周辺では一部の未調査範囲を挟んで、110ｍ程の延長を確認した。

土層状況　58－77付近では（図48・50－断面①）、幅5.5ｍ程、深さ1.8ｍ程で確認している（75次調査）。底面標高は20.6ｍである。上部を75SD3（断面①－A層）、西端を75SD4（断面①－B層）の12世以降の近世段階とみられる溝に壊されている。堀の断面形状は逆台形である。土層からは、堀の堆積土はE層とした自然堆積による土層で砂層と粘性の強い土層が互層となる。ラミナ状の堆積もあり、土層からも水成堆積による土層と沈殿による堆積のグライ化した土層からなる。このうち、特にE7層までは構築後大きな時間を経ない12世紀代に堆積したとみられる。最下層では壁面の崩落に伴う黄褐色土のブロックを含む。12世紀代及びそれに近い時期の堆積とみられるE層を、C層とした砂質の土層が覆う。C層は砂と周辺の基本土で構成され、堀の形状より広い範囲で堀を覆うように堆積することから、堀の廃絶以降の水成堆積と考えられる。なお、これらの土層により外側の堀の最上層は失われており判然としないが、この範囲では掘り直しや埋め戻しといった人為的な様相は確認できていない。

また、堀の外側にあたる西側の整地層（以下、75整地層と記し、75SX1の項で後述）のうち旧期の整地は調査区内での遺構では古い段階に位置づけられる。直接的な重複はないものの、調査区内の先後関係から72SD2と同時期との想定もできよう。現状では整地と堀の間が失われているが、南端部の項で記した他地点の調査成果や検出標高から、堀の外側の肩が整地によって形成された可能性も残る。なお、現状で確認している堀の両端の壁は猫間ヶ淵の基盤土層にあたり、堀構築段階では上部に整地が行われたと仮定した場合でも、下部は堀の構築時にはある程度安定した地形状況だったと判断できる。これまでも指摘されてきたように（岩手県教委2004）、猫間ヶ淵跡と呼称される範囲の多くは、12世紀当時には湿地帯等であったとしても、常時滞水するような「淵」や河川といった様相ではなかったとみられる。

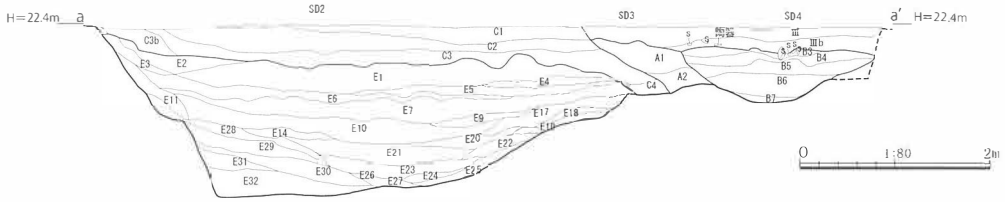
54－67付近では（図48・50－断面②）、幅6.5ｍ程、深さ2.1ｍ程で確認している（56次調査）。底面標高は21.3ｍである。堀の断面形状は逆台形である。土層からは、堀の堆積は自然堆積により、砂質と粘性の強い泥質の土層が互層となる。水成堆積による土層とグライ化した沈殿による土層からなる。掘り直しや埋め戻しといった人為的な様相は確認できていない。上層の４～７層は地山土に由来するブロックを含み、整地層の可能性がある。この土層が整地層であれば、外側の堀の掘り直しもしくは外側の堀の廃絶や内側の堀の構築に伴う地業との把握できよう。また、堀の内側にあたる東側の肩は整地土によって成形される。断面②の①・②・Ⅵb層が整地層にあたり、堀はこれを掘り込んで構築されている。外側の堀構築に際して地業が行われたとみられる。

52－62付近では（図48・50－断面③）、幅5.5ｍ程、深さ1.2ｍ程で確認している（56次調査）。底面標高は22.2ｍである。堀の断面形状は逆台形である。土層からは、堀の堆積土は自然堆積による土層で、砂質と粘性の強い泥質の土層が互層となる。掘り直しや埋め戻しといった人為的な様相は確認できていない。現状で確認している堀の内側の壁は猫間ヶ淵の基盤土層にあたり、下部はある程度安定した状態だったと判断できる。一方、堀の外側の壁は肩部分を黄褐色土のブロックを含む整地土によって成形される（断面③－１～３層）。なお、この精査位置の北側に連続して平泉町教育委員会が一部の精査を行っており（平泉町教委1993）、断面状況は酷似する。

図49　72SD1・72SD2平面図（1/300）

図50　72SD1・72SD2断面図

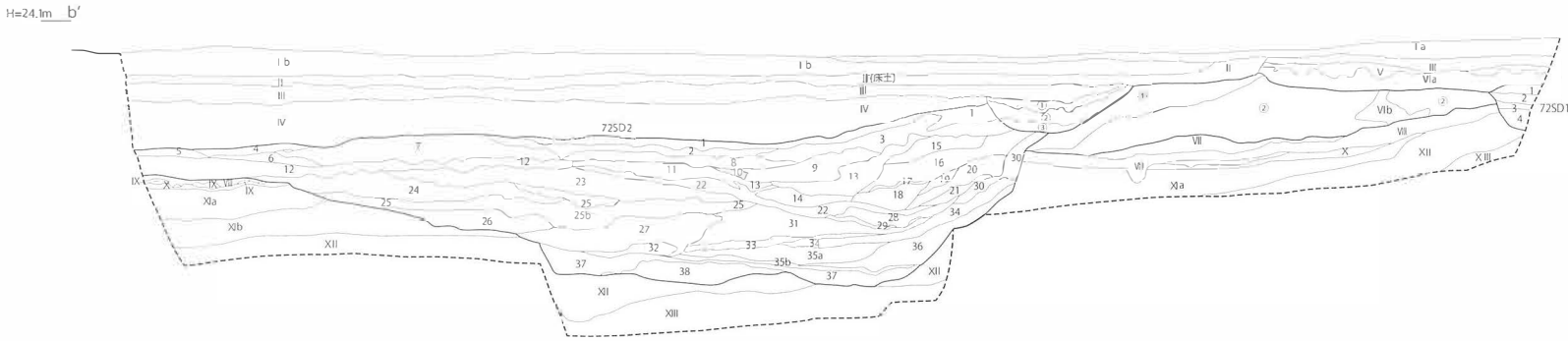
①



72SD2①

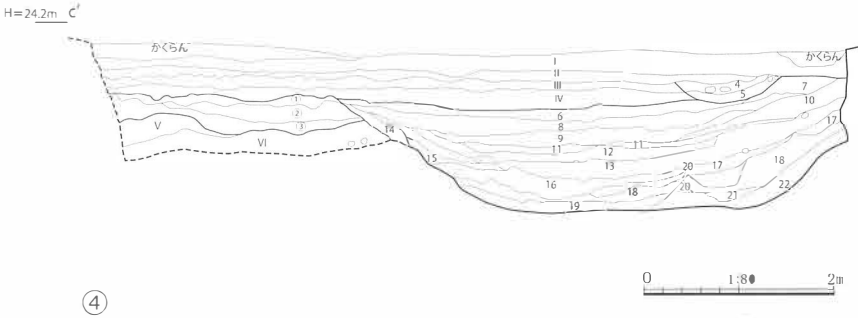
Ⅲ　12世紀以降の自然堆積土層
A　75SD3埋土
B　75SD4埋土
C　12世以降の自然堆積土層（砂層）
E　自然堆積土（72SD2埋土）

②



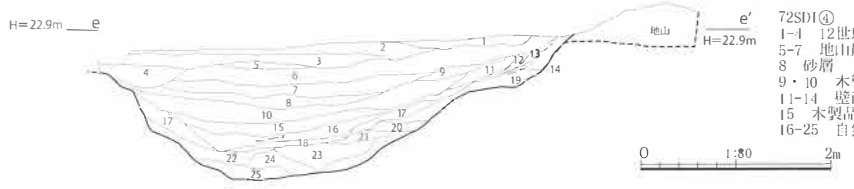
56SD39②
Ⅰ～Ⅵ　12世紀以降の自然堆積土層
1-3　新しい溝の埋土
72SD1　1-4　自然堆積土層（72SD1埋土）
①・②・Ⅵb　整地層
72SD2　4-7　整地層か
72SD2　1-3・8-38　自然堆積土層(72SD2埋土)
Ⅶ　猫間ヶ淵の土層（整地の可能性有り）
Ⅷ-ⅩⅢ　猫間ヶ淵の基本土層

③



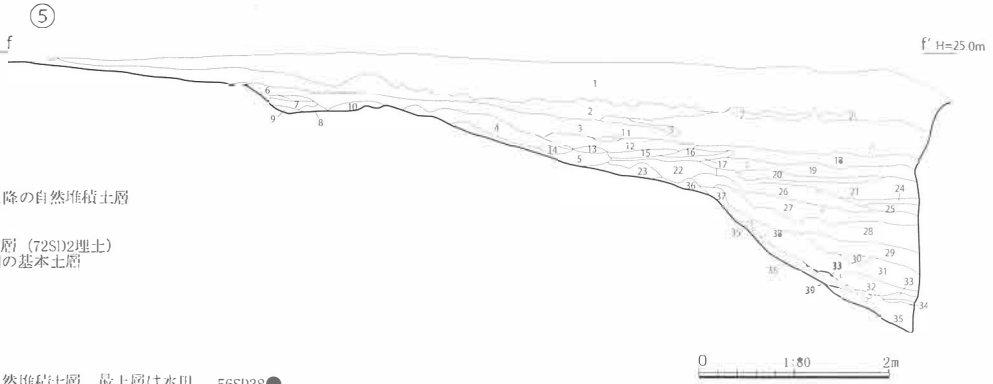
56SD39③
Ⅰ～Ⅳ　12世紀以降の自然堆積土層
4・5　新しい溝
①-③　整地層
6-22　自然堆積土層（72SD2埋土）
Ⅴ・Ⅵ　猫間ヶ淵の基本土層

④



72SD1④
1-4　12世以降の自然堆積土層　最上層は水田
5-7　地山崩落土を含む自然堆積土層
8　砂層
9・10　木製品を含む自然堆積土層
11-14　壁面崩落土層
15　木製品を含む自然堆積土層
16-25　自然堆積土層

⑤



56SD38●
1　7.5YR7/8黄橙色粘土　締り強　粘性やや有　径3～5cmの灰黄褐色粘土をブロック状に5%程度含む　整地層か?
2　10YR4/2灰黄褐色砂質土　締り有　粘性なし　下層に酸化鉄が層状に含まれる部分有　東側に黄橙色粘土ブロックを微量含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂質土　締りやや有　粘性なし　かわらけ片を少量　炭化物を微量含む
4　10YR4/4褐色砂質土　締り有　粘性なし　礫・かわらけ片を少量含む
5　10YR3/2黒褐色砂質土　締りやや有　粘性やや有　炭化物を少量含む　かわらけ片を少量含む　礫を多く含む
6　10YR3/2黒褐色砂質土　締り強　粘性なし　炭化物・かわらけ片を少量含む
7　10YR5/6黄褐色砂質土　締り強　粘性なし
8　10YR4/4褐色砂質土　締り強　粘性なし　かわらけ片が微量入る
9　10YR4/4褐色砂質土　締り強　粘性やや有　かわらけ片1コ入有
10　10YR4/4褐色砂質土　締り強　粘性あまりなし　明黄褐色砂質土ブロックを微量含む　かわらけ片1点含む
11　10YR4/4褐色砂　締りやや有　粘性なし
12　10YR3/4暗褐色砂質土　締り有　粘性やや有　かわらけ片少量含む　炭化物微量含む
13　2.5Y8/2灰白色砂質粘土　締りやや有　粘性やや有　かわらけ1片含む
14　10YR4/4褐色砂質土　締り有　粘性やや有　かわらけ片を少量含む
15　2.5Y7/3浅黄色砂質土　締り有　粘性やや有　かわらけ片をやや多く含む　礫を少量含む　炭化物を微量含む

猫間ヶ淵周辺における外側の堀のまとめ　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は、細部に差異は存在するものの、猫間ヶ淵周辺で概ね対応する。調査が複数年次にまたがり、近接する範囲でも様相の細部には差異があるため、厳密な対応は難しいが、堀の構築・周囲の整地地業→自然堆積（小規模な造作）→廃絶の変遷が理解できる。いずれの地点でも自然堆積による埋没を示しており、小規模な造作の痕跡を除いて大規模な掘り直しは確認できない。また、一部で埋め戻しとみられる黄褐色土のブロックが散見されるものの、他地点で把握されているような全体もしくは堀の大部分に及ぶものではない。ただし、埋没時の状況や堀構築後に一定期間経過した後の12世紀代の様相の把握と想定は、上部が水田による削平や自然の流路の影響を受けていることを考慮する必要がある。外側の堀を壊す溝は複数あり、この位置が現在でも農業用水路がとおるように流水の影響を受けやすい位置だったことがわかる。また、猫間ヶ淵周辺では堀の周囲で整地層が確認されている。堀の肩の状況などから、12世紀当時には水流をもつような位置ではないと判断できるが、湿地帯のため堀の構築に際してより安定させて肩を構築するため地業が行われたと考えられる。関連する土層には各地点で確認された整地層がある（75整地層）。75整地層については75SX1の項で記載する。

猫間ヶ淵の様相　柳之御所遺跡が機能した段階での、遺跡に接する位置での猫間ヶ淵跡の様相をみておきたい。75次調査で精査した58－77付近では（図48・50－断面①）、堀の壁は安定した土層になっており、検出時の上面から100cm程下がった位置で火山灰層が層をなしている。56次調査で精査した52－62付近では（図48・50－断面③）、外側の壁を人為的な盛土で構築している。堀の外側は安定した土層ではなかったことが推察できる。火山灰層や堀の状況からは、猫間ヶ淵跡は低地帯で部分的に低湿地帯を呈していたものの、常時の水流等や帯水した状況ではなかったと考えられる。湿地とみられる位置については後掲する。

遺物　外側の堀跡（72SD2）から出土した遺物は、他地点の同遺構と同様に少なく、同遺構のうちでも少ない範囲である。ここでは自然堆積層の資料のうち、いくつかを図示する（図52）。

58－77付近では（75次調査、図48・50－断面①）、木製品が出土しており（図53－１～６）、漆器椀、下駄、箸を図示した。このほか、土器類も出土しているが、多くは12世紀以降の溝に伴うものである。12世紀代とみられる堆積土からは土器類の出土が少ない。

52－62付近では（56次調査、図48・50－断面③）、木製品が出土している（図53－９～11）。完形で桟が付く折敷が出土している。長軸39cm、短軸26cmで厚さが2.4cmと大型である。両面に刃物痕が付くが、それを切って刺突痕がめぐる。なお、この痕跡から遊戯具との見解がある（小田2014）。折敷片や下駄のほか、漆器椀や箸なども出土している。土器類も出土しているが（図52－１～10）器形が復元できる資料は多くない。ロクロかわらけ大皿では器高の高い資料を含むものの、器高の低い皿形を呈する資料が多い。手づくねかわらけ大皿は口径の小さい、小型の器形が多い。

【内側の堀（21SD1・56SD38・72SD1）】

遺構　概要　内側の堀跡は遺跡を画する大規模な２条の堀のうち、内側を走る堀である。遺跡の西部に立地する猫間ヶ淵の低地部分と遺跡が所在する段丘の境の段丘縁辺部に位置する。56次調査で北側の一部の精査を、75次調査で平面的に検出し一部を精査した。また41次調査のAトレンチも図内に含まれる。堀の走向は南北方向で、軸方位はN－15°－Wでやや西に振れる。周囲の段丘面の自然地形に沿う。幅５～10m程で、検出面からの深さは1.4～2m程である。底面標高は21.3m程で確認している。猫間ヶ淵跡の周辺では間に未調査範囲を挟んで、120m程の延長が確認できた。ただし、堀内部地区側の肩は現在の道路と重複しており、調査区の制約から未検出の範囲が多い。

土層状況　61－77付近では（図48・50－断面④）、幅5.5m程、深さ1.4mほどで確認している（75次調査）。内側にあたる北側では調査区の制約から堀の上端を検出できていない。底面からの傾斜角度を勘案すると、未調査の範囲に延びる部分を合わせ、堀の上幅は6.5m程以上になると推測できる。底面標高は21.3mである。堀の断面形状は逆台形である。土層は自然堆積による。１～４層は新しい時期の堆積と判断している。その他の土層もブロック土や炭化物の顕著な土層などは確認されておらず、いずれの土層も堀構築後の自然堆積と判断できる。底面から80cm程までの10層以下はグライ化した土層が多く、遺跡機能時やそれに近い時期の堆積の可能性があるものの確定はできない。

56－66付近では、堀の断面形状全体は未検出であるものの、堀の両端を概ね確認している（図48・50－断面⑤、56次調査）。幅10m程、深さ２m程を確認しているが、底面までの精査は行っていない。西側の肩は一部を確認し、外側の堀跡との間の整地層（断面①・②・Ⅵb層）を切って構築されている。東側ではいずれも自然堆積の土層を確認している。28、29層で炭化物片や木製品類などの遺物を多く含む。この上層26・27層で砂質土を間に挟み、それより上層では自然堆積で土器類を多く含む土層がある。後述する56SD20（41SD1・52SD26）が上層に流入する状況を確認しており、内側の堀→56SD20の新旧関係が確認できる。

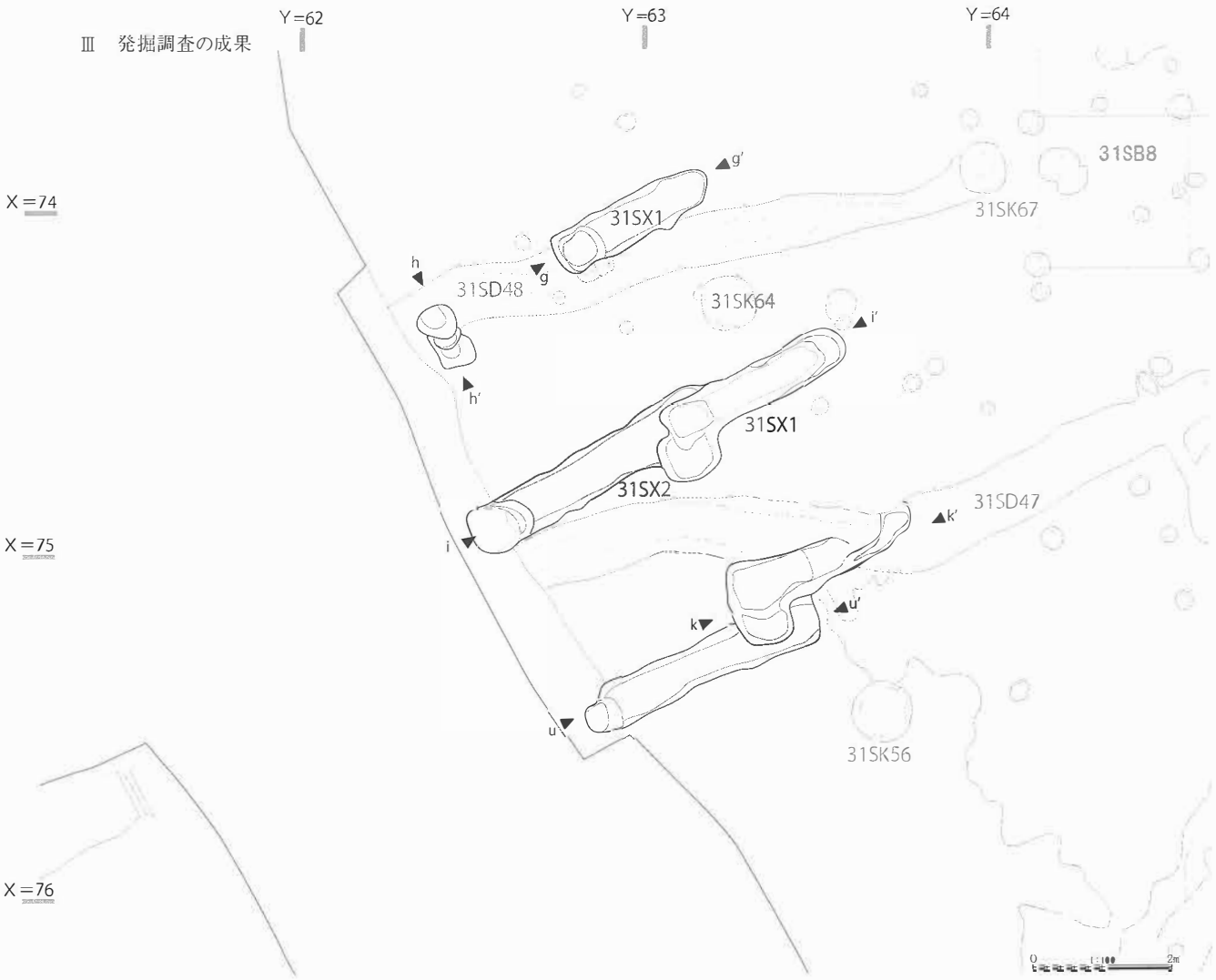
猫間ヶ淵部分における内側の堀のまとめ　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は、地点により遺物量や層相の細部などに相違は存在するものの、猫間ヶ淵の周辺では概ね対応する。堀の構築→自然堆積による埋没（炭化物・遺物を多く含む土層）→自然堆積による埋没の過程が理解できる。土層の堆積は単純で、堀全体に関わるような大規模な掘り直し等は行われていないと判断できる。形状は逆台形を呈す。廃絶時にも堆積は底面から１m弱程にとどまり、１m以上の深さをもつ大規模な堀としての形状が保たれたとみられる。関連する遺構として31SX1、31SX2、75SX1、整地層がある。

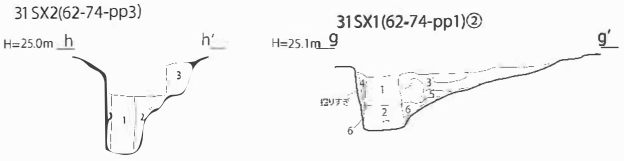
関連遺構　31SX1・31SX2　31SX1、31SX2はいずれも31次調査で検出された遺構で、それぞれ３個の柱穴で構成される２対の遺構である。その後の調査は行われておらず、新しい知見は得られていない。なお、平面図上では周辺に整地層の分布が記録されているが、詳細は判然としない。

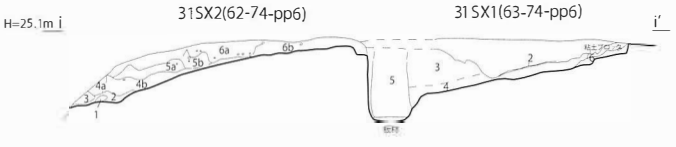
31SX1は63－74付近に位置し、３個の柱穴で構成される。柱穴は北から63－74PP6、62－74PP1、63－75PP1で、方形の径70cm程の柱穴に70×180cm程の長方形の張り出しが付く。いずれの柱穴でも径35cm程の柱痕跡が確認された。63－74PP1と62－74PP1では底面付近の板材が図示されている。柱穴の間隔は北から300cm、270cmである。

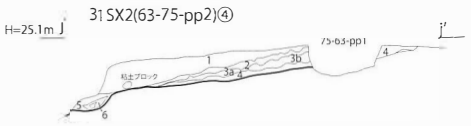
31SX2は62－74付近に位置し、３個の柱穴で構成される。柱穴は北から62－74PP6、62－74PP3、63－75PP2で、方形の径60cm程の柱穴に60×300cm程の長方形の張り出しが付く。63－75PP2は西側に延びる可能性もあるが、削平により失われている。柱穴の間隔は北から300cm、270cmである。

31SX1と31SX2は東西に平面的に並び、柱穴部分の間隔は330cm程である。31SX2→31SX1の新旧関係が確認されているが、同時存在の可能性も残る。









31SX2①
1　10YR6/8黄褐色～6/6明黄褐色が主となる粘土質。粘性強い。
　しまりなし。 含炭化物（1%）径1～3㎜大の角柱状のもの。
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト質の粘土。しまり弱い。粘性強い。
　含炭化物（1%）、鉄分（1%）、粘土ブロック入る（10YR4/6褐色～5/6黄褐色）
3　2.5Y4/4オリーブ褐色～10YR4/4褐色粘土質シルト　木根が多く混じる
　径5cm大の粘土ブロック入る

31SX1②
1　10YR5/4にぶい黄褐色シルト。炭化物片微量。
2　5Y5/1灰色粘土。
3　10YR6/3にぶい黄褐色～10YR5/4にぶい黄褐色。径約5cmの地山、
　浮石混じり土ブロック散在。
4　10YR6/3にぶい黄褐色粗砂。炭化物片約1%。浮石含。
5　2.5Y6/2灰黄褐色粘土。地山粘土ブロック約20%。
6　10YR6/3にぶい黄褐色粗砂。炭化物片約1%。浮石含。

31SX2③
1　10YR6/6明黄褐色粘土。
2　10YR3/2黒褐色粘土混じりシルト。黄褐色粘土粒含。
3　10YR5/3にぶい黄褐色砂混じりシルト。
4a　10YR5/6黄褐色粗砂。
4b　10YR6/6明黄褐色砂。
5a　10YR5/6黄褐色砂。
5b　2.5Y6/6明黄褐色砂。
6a　10YR4/4褐色シルト。地山粘土ブロック（径約2cm）約3%。小礫含。
6b　10YR6/4にぶい黄褐色シルト。6aよりは少ないが、小礫含。

31SX2④
1　10YR6/3にぶい黄褐色シルト。褐灰色土約10%。炭化物片約1%。小礫比較的多い。
　地山粘土ブロック（径約2～3cm）含。
2　10YR7/6明黄褐色粘土。炭化物片約1%。
3a　10YR3/3暗褐色シルト。地山粘土粒少量。炭化物片約1%。
3b　10YR4/3にぶい黄褐色シルト。地山粘土ブロック（径約1～2cm）と礫を含む（約7%）。
　炭化物片約1%。
4　10YR6/6明黄褐色粘土。部分的に3層の土が入る。炭化物片約1%。
5　10YR6/8明黄褐色粘土。地山粘土粒（径約5cm）と浮石が約3%。
6　10YR3/2黒褐色シルト。

31SX1⑤
1　10YR4/4褐色シルト。炭化物片約3%。かわらけ片少量。浮石含。
2　10YR7/6明黄褐色～10YR6/6粘土。
3　10YR5/2灰黄褐色シルト。炭化物片約5%。かわらけ片少量。径約15cmの礫含。
4　10YR6/3にぶい黄褐色粘土。地山粘土ブロック3%。小礫散在。
5　10YR5/3にぶい黄褐砂混じり粘土。地山粘土ブロック5%。炭化物片約1%。
6a　2.5Y7/4浅黄色と2.5Y6/4にぶい黄色粘土。5層の土が部分的に入る。
6b　10YR6/6明黄褐色砂混じり粘土。10YR6/2灰黄褐色土含。
7　10YR4/6褐色～5/4にぶい黄褐色砂混じりシルト。地山粘土ブロック約3%。小礫含。
8　10YR5/4にぶい黄褐色～10YR4/6褐色。
9　10YR4/2灰黄褐色粘土。地山粘土ブロック多量。炭化物片約3%。

図51　31SX1・31SX2平面・断面図

遺物　内側の堀跡（72SD1）から出土した遺物は、他地点の同遺構と比して少ない。ここでは自然堆積層の資料のうち、いくつかを図示する（図52）。

61－77付近では（75次調査、図48・50－断面④）、木製品が出土している（図53－12～17）。題籤軸は、３×1.3cm程の題籤部に10cm程の長さの軸が付く。厚さは0.3cm程である。

「馬」

「日記」

と記される。木製品では漆塗りの下駄が出土しており（図53－14・17）、２点に分離しており接合部は少ないが、１個体に接合するとみられる。この他にも漆器椀や不明木製品があり、鞘や箸などが出土している。かわらけや国産陶器も出土しているものの数量は少なく、多くは堆積層の上層からの出土である。なお、この周囲の猫間ヶ淵付近では瓦片の分布が濃い。分布図は次節で示すが、堀内部の縁辺部から流入したものとみられる。23SG1池跡の南西部は13SE1など瓦が集中して出土する遺構があり、瓦の利用や廃棄の位置との関連性が想起される。

56－66付近では（56次調査、図48・50－断面④）、木製品が出土している（図53－7）。鍬先で、長軸21cm程で幅14cm程である。方形の穿孔がある。このほか箸等を含む。図示したかわらけは、ロクロかわらけ大皿では器高の低い皿形を呈する資料が多い。手づくねかわらけ大皿は口径の小さい、小型の器形が多い（図52－11～22）。

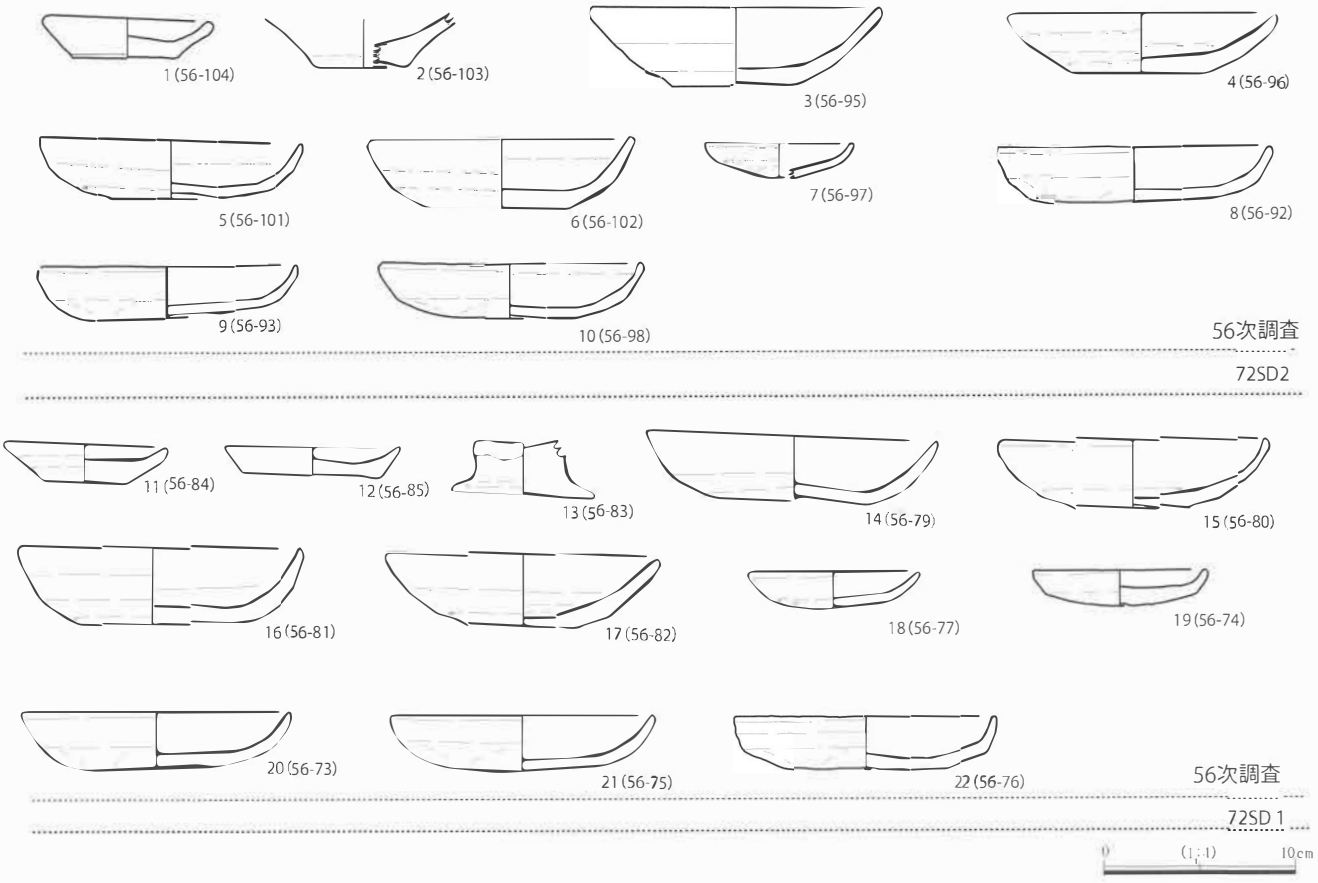


図52　猫間ヶ淵周辺出土土器類実測図

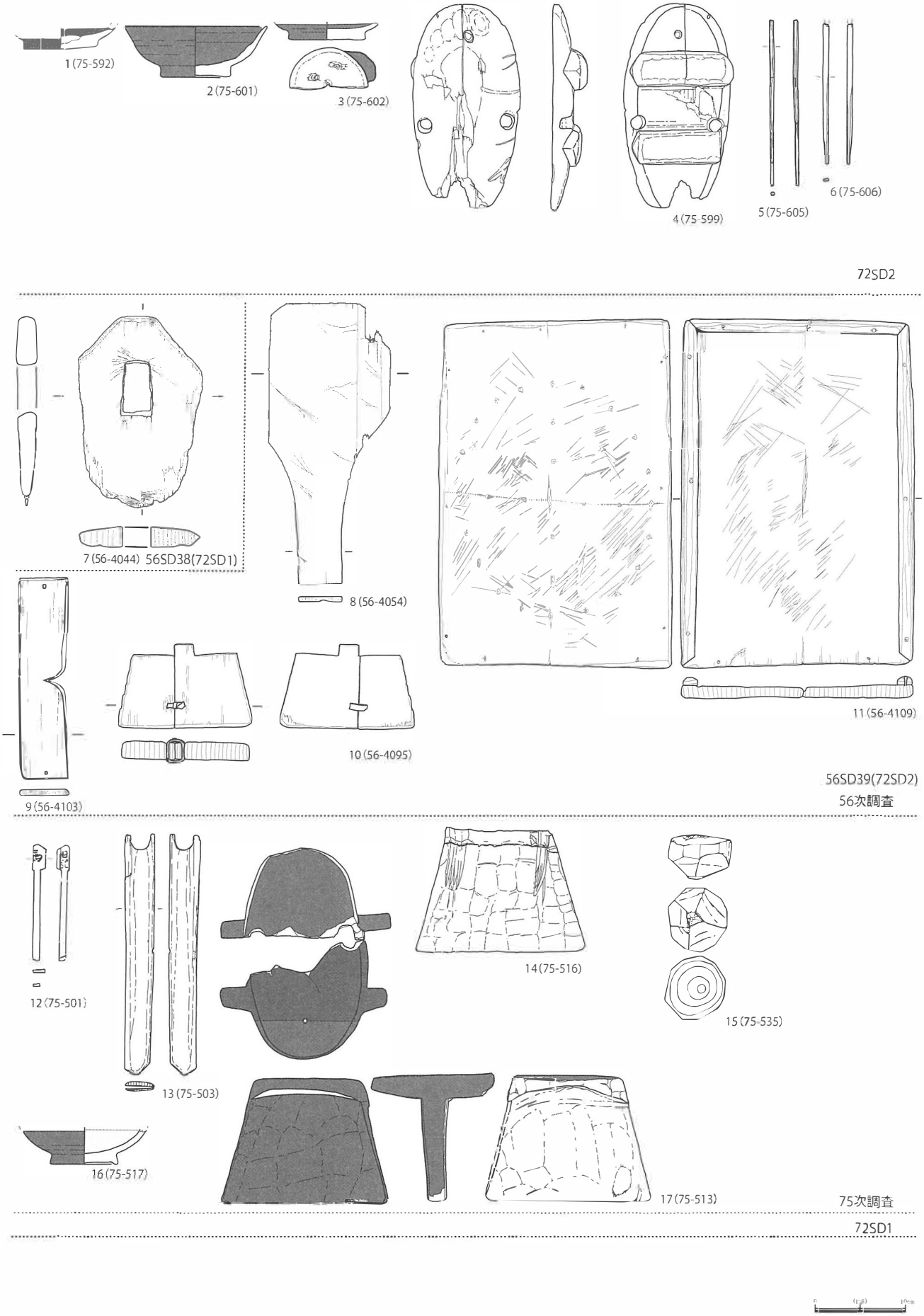
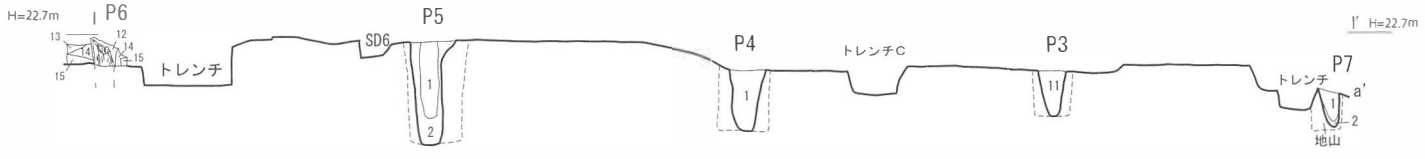


図53　猫間ヶ淵周辺出土木製品実測図



P6　12　柱材周りの腐食土　灰色でしまりやや弱く粘性強い

P5　1　5Y5/1 灰色粘質土　下層に木質残る　柱痕　下層しまり弱い　粘性あり
　　2　P6　15 層と同じ　掘り方

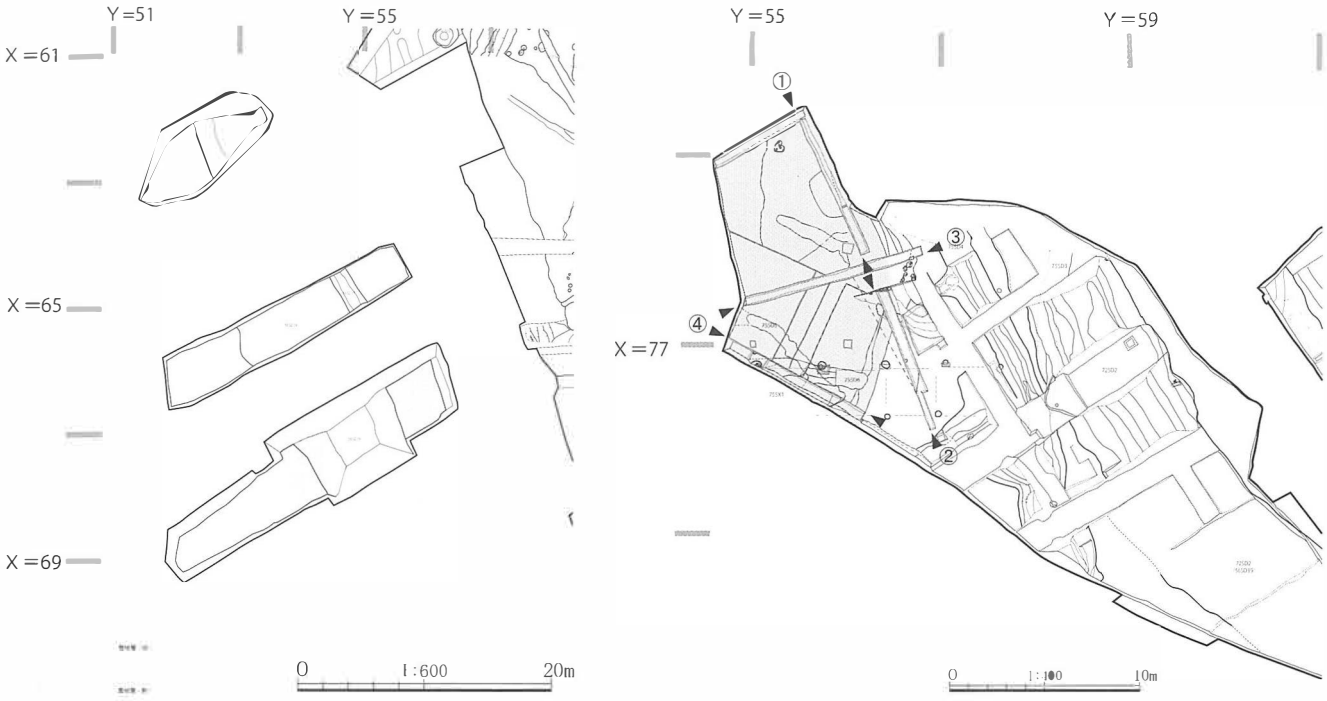
P4　1　2.5Y6/1 黄灰色粘質土　上～中層酸化し、砂、小礫少量含む　しまりややあり　粘性あり

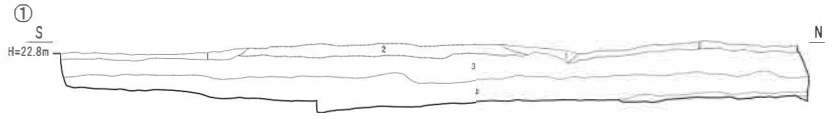
P3　1　2.5Y6/1 黄灰色粘質土　上～中層　酸化し、砂含む　しまりややあり　粘性あり

P7　1　2.5Y7/1 灰白色砂層　黄灰色の粗砂と炭化粒微量含む　しまりあり　粘性なし
　　2　黒色粘土質の地山のひっぱり　しまりあり　粘性強い

0　1:80　2m

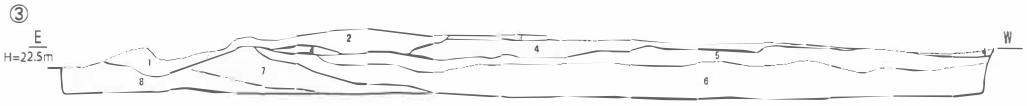
図54　75SX1平面・断面図



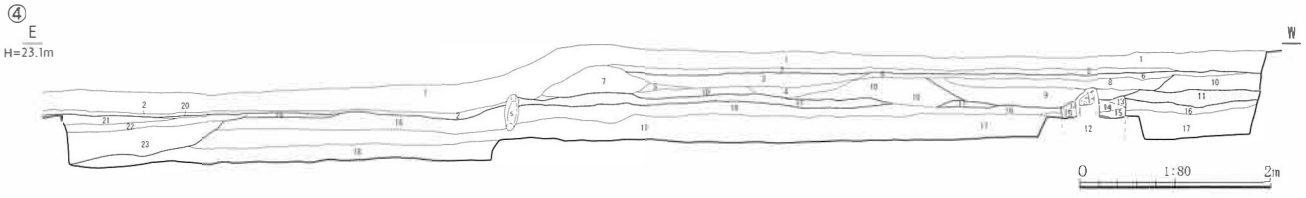


①
1 旧表土か
2 整地層（新）
3 自然堆積層Ⅲ
4 自然堆積層Ⅳ

②
1 旧地形の高まり　端部にのこる自然堆積層　SD5の下部にあたり、6と同様の旧表土にあたる層か　かわらけ片、炭化物片、2～5cm程度の黄褐色地山ブロックを含む　自然堆積層　粘性が強い　しまり強い　砂質シルト
2 2トレンチ16層・1トレンチ5層に対応
3 整地層（旧）　黄褐色の地山ブロックと暗褐色のシルト質の土とで構成される
4 整地層（旧）　3層と同様の整地層だが、黄褐色の地山ブロックが80%以上を占める



③
1 溝埋土　礫を含む　下部は黄褐色地山土を含む　かわらけ片を含み、自然堆積による溝埋土　粘性弱い　しまり弱い
2 溝埋土　石粒・かわらけ片を多く含む　下部は礫を含む溝埋土　粘性弱い　しまり弱い
3 旧表土　かわらけ片・炭化物片を少量含む　しまりが強く、調査区の高い部分に広がる旧表土
4 整地層（新規）　黄褐色の地山ブロック　かわらけ片を含む　しまりが強い
5 自然堆積層Ⅲ　かわらけ片を少量含み、粘性が強い　6層と類似するが石粒が少ない
6 自然堆積層Ⅳ　かわらけ片を少量含み、粘性が強い
7 整地層（旧）　黄褐色の地山ブロックと暗褐色のシルト質の土とで構成される
8 整地層（旧）　3層と同様の整地層だが、黄褐色の地山ブロックが80%以上を占める
9 暗褐色粘質土　基盤となる土層　粘性が強く滞水性のある猫間ヶ淵を形成する土層



④
1 表土
2 水田床土
3 SD5埋土　しまりややあり　粘性弱い　かわらけ細片、石粒を多く含む　5～10cm程度の円礫が多いが、15cm程度の礫もあり　2～5cm程度のブロックを含む　自然堆積層　砂質シルト
4 SD5埋土　炭化物、5～10cm程度のブロックを含む　しまりややあり　粘性弱い　3層と比してかわらけ片が少ない　自然堆積層　シルト層
5 SD5埋土　粘性が強い　しまりやや強い　炭化物片を少量含む自然堆積による粘質シルト
6 SDが入る時期の旧表土か　層下部にかわらけ片を含む　砂質シルト　2～5cm程度の礫、黄褐色の地山ブロックを含む　粘性が強く、しまり強い　炭化物片も含む　自然堆積層　SD検出面
7 旧地形の高まり　端部にのこる自然堆積層　SD5の下部にあたり、6と同様の旧表土にあたる層か　かわらけ片、炭化物片、2～5cm程度の黄褐色地山ブロックを含む　自然堆積層　粘性が強い　しまり強い　砂質シルト
8 SD6埋土　砂質シルト　しまりやや強い　粘性ややあり　かわらけ片、炭化物片を少量含む　2～3cm程度の石粒、黄褐色の地山ブロックを含む　自然堆積層
9 SD6埋土　粘質シルト　しまりやや強い　粘性あり　かわらけ片少量含む　下端に砂粒が入る自然堆積層　一部に暗褐色の土を含む
10 SD(8.9層)　掘り込む時点での旧表土か
11 整地層（新）　黄褐色の地山ブロックで形成される整地層　かわらけ片も少量含む
12 柱痕　しまりややあり　粘性強い　柱痕跡の土　灰白色の粘土質
13 柱掘り方埋土　しまりあり　粘性強い　灰白色の粘質シルト
14 柱掘り方埋土　しまりあり　粘性やや強い　粘質シルト　黄色の地山ブロックと灰白色の粘土層　砂を含む
15 柱掘り方埋土　13と同様のシルト
16 自然堆積層Ⅲ
17 自然堆積層Ⅳ
18 自然堆積層Ⅴ
19 SD4埋土　しまり強い　粘性ややあり　炭化物粒、石粒を含む　自然堆積土と同様の土質だが夾雑物が多く流された土
20 SD4埋土　しまり強い　粘性ややあり　黄褐色の地山ブロック　炭化物粒を含むシルト
21 SD4埋土　しまりややあり　粘性弱い　砂質シルト　地山粒、石粒を含む砂を含み自然堆積
22 SD4埋土　しまりややああり　粘性弱い　かわらけ片、石粒を多く服務砂質シルト
23 SD4埋土　しまり強い　粘性強い　自然堆積Ⅲ・Ⅳ層と類似し再堆積か　褐色の錆びが強く石粒等も含む自然堆積層

図55　猫間ヶ淵周辺整地分布

【75SX1】（図版編図66・67、図54）

遺構　55－77付近に位置する、４×１間で東西軸の掘立柱建物跡である。75整地層のうち手づくねかわらけを含む、新期の整地層上で検出している。内側の堀及び外側の堀とは、整地層を含め直接の重複はない。建物の軸方向はN－0°－Eである。柱穴７個を検出している。桁行方向の延長は北側柱列の延長位置で柱穴が検出されていないこと。そのため、東側には延長しないとみられるが、後世の溝等が存在しており不確定の部分が残る。建物跡の南側は未調査のため規模が確定できないが、周囲の地形状況から判断すれば梁行方向は南に数間程度延びるとみられる。柱間寸法は桁行が西から342（11.2尺）・342・330（11尺）・303（10尺）cmに、梁行が291（9.6尺）cmに復元できる。現状での全長は桁行13.2m、梁行2.9mである。柱穴は掘方の検出された柱穴と、掘方が検出されず柱痕跡のみで確認された柱穴がある。ただしこれらの柱穴の検出状況の相違は検出面の標高差と対応しており、遺構残存状況の差によるもので、本来はいずれも掘方をもつ柱穴とみられる。掘方は径45～55cmの円形で、柱痕跡は精査したP5では径20cmで深さが108cmである。断面を確認した柱痕跡はいずれも先端部が尖る杭状になっており、掘方を掘った後に柱材を据え、打ち込んだものとみられる。底面標高は桁行方向の北側柱列で、西から21.54m・21.7m・21.82m・21.68mである。

関連遺構　75整地層　55－75付近で、上下２層の整地層を確認している（図55）。旧期の整地層は72SD2に直接接しないが、これに沿うように5×12m程の範囲で検出している。黄褐色土のブロック及び暗褐色土で構成され、土堤状に盛り上がる。整地土はブロック土の比率により分層が可能だが、間層を挟まず、分布範囲も重なることから一連の整地と判断している。整地土にはかわらけの細片を含むものの、出土量は少なく、図示できる資料もない。

新期の整地層は、旧期の整地層より大きく西に広がる。旧期の整地後に、自然堆積とみられる土層が堆積し、その後に締まりの強い黄褐色土のブロックで形成される。なお、新旧の整地層の間層となる自然堆積層及び新期の整地層には手づくねかわらけを含む。新期の75整地層上で75SX1を検出しており、75整地層→75SX1の新旧関係が確認できる。整地層上面で確認された遺構は75SX1のみで、それ以外の75SD5・75SD6は整地層の上部に堆積した自然堆積層を掘り込む遺構で、12世紀以降の新しい時期の遺構である。

２時期の整地層の間層となる土層は、整地層と異なりブロック状の粘土や土を含まない土層である。整地地業の可能性は残るものの、土層の様相から自然堆積層と判断している。

遺物　75SX1を構成する柱穴から手づくねかわらけや瓦が出土しているが、いずれも細片のため図示できていない。

③北端部の様相

【概要】　遺跡の東側から北西部を便宜的に北端部として記述する（図56）。柳之御所遺跡堀内部以外の遺跡範囲との関連では、柳之御所遺跡堀外部の道路跡や掘立柱建物跡など多くの遺構が所在する区域と接する位置にあたる。北端部とした区域のうち、内側の堀の一部は41次調査の対象範囲で、この段階で一部が検出されトレンチを設定し精査されている。このトレンチ部分のうち41SD2－Bトレンチについても再調査を行っており、それ以外の後次の調査成果と合わせて記す。

北端部では遺跡を区画する遺構として、外側の堀（72SD2）と内側の堀（72SD1）のほか、79SX1とした土橋や整地層、土坑などが確認されており、それらについても２条の堀跡と関連する遺構として記す。

図56　遺跡北端部平面図（1/600）

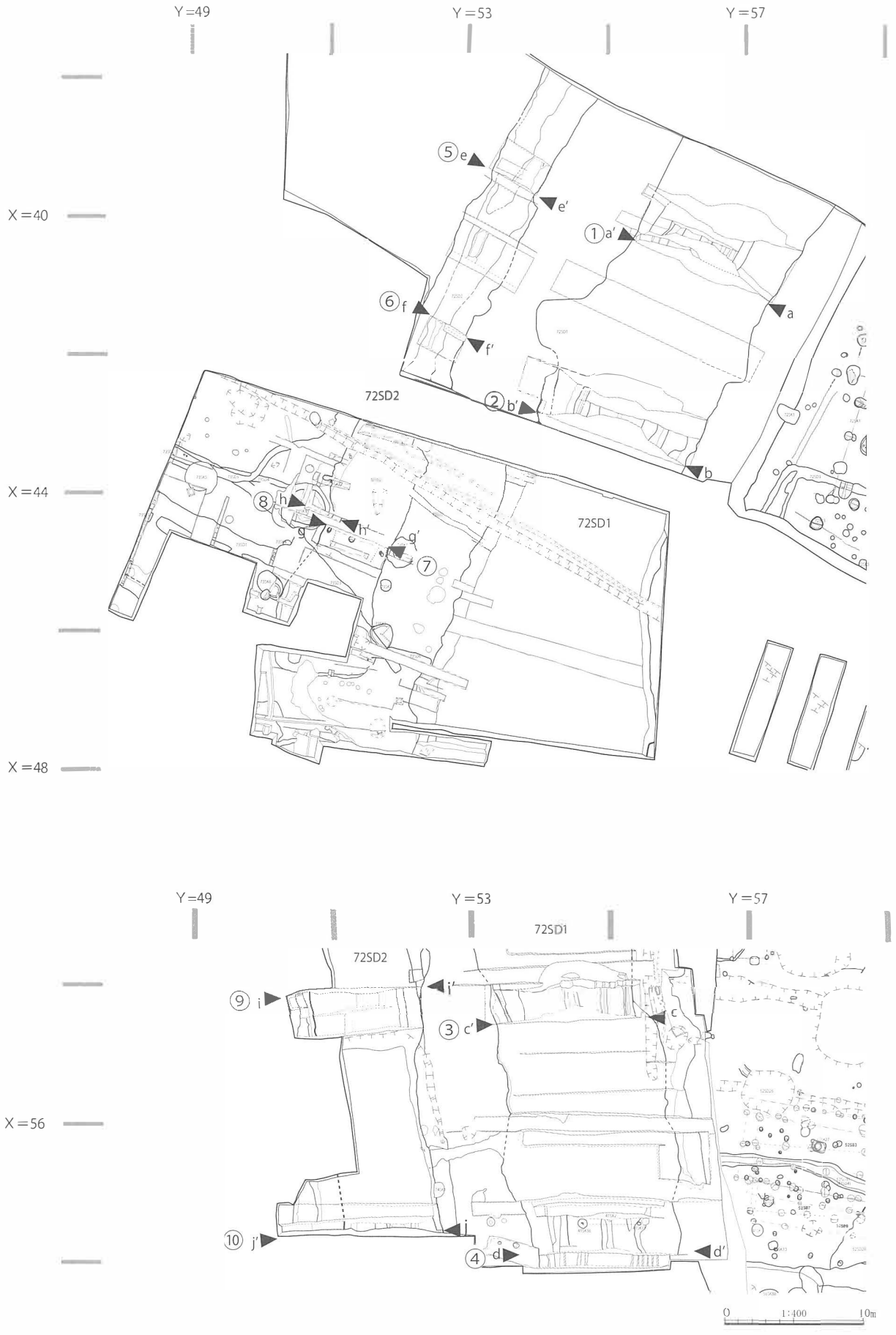


図57　遺跡北端部72SD1・72SD2平面図（1/400）

【外側の堀（21SD2・56SD39・72SD2）】

遺構　概要　外側の堀跡は遺跡を画する大規模な２条の堀のうち外側を走る堀である。遺跡が位置する段丘の中央付近に位置し、検出面はX=46～48付近を境に現況の地形で南北それぞれの方向へ向かって下がる傾斜をもつ。

X=37付近よりさらに北側の延長は河川の浸食によって失われている。堀跡は河川によって壊されており延長することは確実だが、本来の走向方向と延長は確定できない。72～74次・79次調査で検出及び一部を精査した。

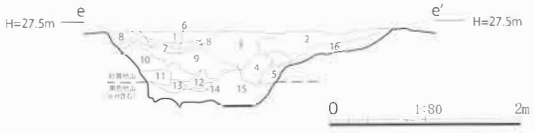
走向方向を南側から概観すると、猫間ヶ淵周辺を走る堀跡は前述した範囲内の北端の位置にあたる53－62付近から方向を南北方向に変え、北端部とした範囲に連続する。56次調査で精査した53－62付近でやや湾曲して平面形を確認しており、X=57付近で確認している位置と連続する遺構である蓋然性が高いと判断できる。51－46～48付近で南北方向を基本に、やや東に振れて走る。幅2.7～７ｍ程で、検出面からの深さはX=44付近より北側では大きく削平を受けたため１ｍ弱程である。X=44付近より南側では２ｍ弱ほどである。底面標高は位置によって異なるためそれぞれで記すが、X=46～48付近を境に南北それぞれに傾斜する。北端部では110ｍ程の延長が確認できた。以下、精査した断面を中心に調査次数に概ね沿って北側から記載する。

土層状況　53－39付近では（図57・58－断面⑤）、幅3.2ｍ程、深さ0.8ｍ程で確認している（72次調査）。底面標高は26.6ｍである。周囲の地形から上部は削平により大きく失われたと判断できる。残存での底面形状や立ち上がりから逆台形の断面形が想定できる。底面は二段に分かれて、それぞれで平坦面が構築されている。底面は若干の凹凸があるものの、関連する遺構は検出されていない。土層からは、黄褐色土や黒色土のブロックを多く含む土層で、層相も層状の堆積を示さず、埋め戻しによる人為堆積で全体が埋没している。遺物や混和物により分層しているが、人為堆積土相互には間層をはさまず、同一時の堆積とみられる。二段の平坦面についても土層の観察からは、明確な掘り直しの痕跡は把握できていない。

52－41付近では（図57・58－断面⑥）、幅2.7ｍ程、深さ0.4ｍ程で確認している（72次調査）。底面標高は27.1ｍである。周囲の地形から上部が削平により大きく失われている。残存の底面付近の形状から、逆台形の断面形状を想定できる。ただし、底面は二段になり、平坦面が構築されている。上記の53－59付近（断面⑤）及び、中間の53－40付近でも同様の形状をとり、底面が二段を呈する。掘り直し等の痕跡も想定されるが、堆積土の状況からはいずれも同一の土層によって埋め戻されており段階差をもった掘り直し等の痕跡は確認できていない。上述の53－39付近の断面状況も含め、二段の平坦面をもつ形状が、北端部周辺の外側の堀の当初の形状を反映するものと捉えている。底面は凹凸がなく、平坦に成形される。土層からは、壁面に崩落土層があるが、それ以外は黄褐色土のブロックを多く含む人為堆積土で全体が埋め戻される。堆積土は自然堆積などの間層をはさまず、人為層による埋め戻しは一連の堆積とみられる。

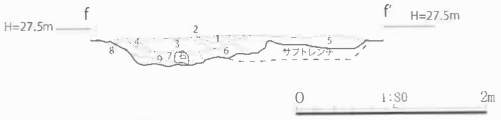
51－44付近では（図57・58－断面⑦）、幅4.7ｍ程、深さ1.7ｍ程である（73次調査）。底面を一部掘り残して精査したが、確認した位置での底面標高は27.1ｍである。精査中にピット状の土色の違いを確認しているが、明確に組み合う位置関係ではない。断面形状は逆台形をとる。土層からは、下層に自然堆積による粘性の強い一部グライ化した土層が堆積する。４～22層は灰褐色土や黄褐色土の粘土ブロックを多く含み、人為堆積層とみられる。２層は砂層で上面や一部に完形の土器類を多く含む（図版編図60）。この土層は全体に広がるものではなく、この断面の周囲で北に４ｍ程の範囲に限定して確認しており、この範囲は堀が大部分埋没した後にも一部窪んでいた可能性がある。なお、上記の

72SD2●



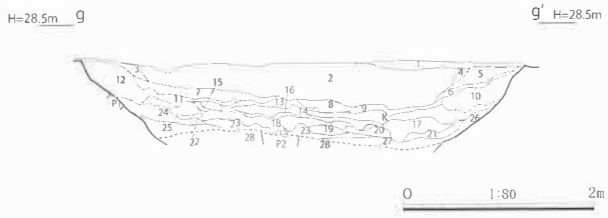
72SD2　⑤
1-2　人為堆積層
3　砂層
4-16　人為堆積層

72SD2⑥



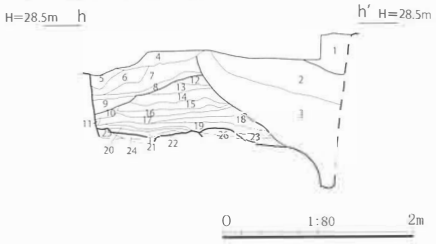
72SD2　⑥
1-7　人為堆積層
8　崩落層
9　人為堆積層

72SD2⑦



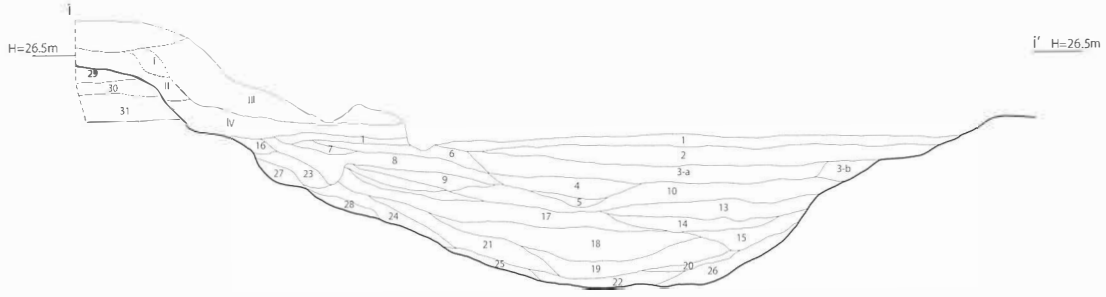
72SD2　⑦
1-3　自然堆積層
4-9　人為堆積層
10-22　人為堆積層
23-28　自然堆積層

B3 区東トレンチ⑧



B3区東トレンチ⑧
1-3　近世掘り込み埋土
4-9　72SD2埋土（人為堆積を含む）
12-23　締まりの強い人為堆積層
24・25　72SD2埋土（自然堆積土）
26　土坑埋土

72SD2⑨



72SD2⑨
Ⅰ-Ⅲ　近現代の盛土
Ⅳ　旧表土
1　水田耕作層
2-3　人為堆積層
4-5　自然堆積層
6-28　自然堆積層
29-31　74整地層1

72SD2⑩

72SD2●
Ⅰ-Ⅲ　近現代の盛土
1-4　74整地層3
5-6　人為堆積層
7-18　自然堆積層
19-23　自然堆積層
24-27　74整地層2
28　旧表土

図58　72SD2断面図

52－41付近の断面⑥との間の51－43付近でも最下層の自然堆積土を除き、多くの土層は人為堆積による。人為堆積土には完形の土器類も多く含む。全体が完全に埋め戻されたかは上部の削平により判然としない。また、断面⑧とした位置では、72SD2の埋土中の人為堆積層（４～９層）下層で水平方向の薄い人為堆積層がある（12～23層）。層厚は５cm程で、締まりが強い。一部断面のみでの確認のため、確定できないが、堀構築時もしくは機能時の修復に際して、一部の肩を精緻に地業して整形したことを想定しておきたい。

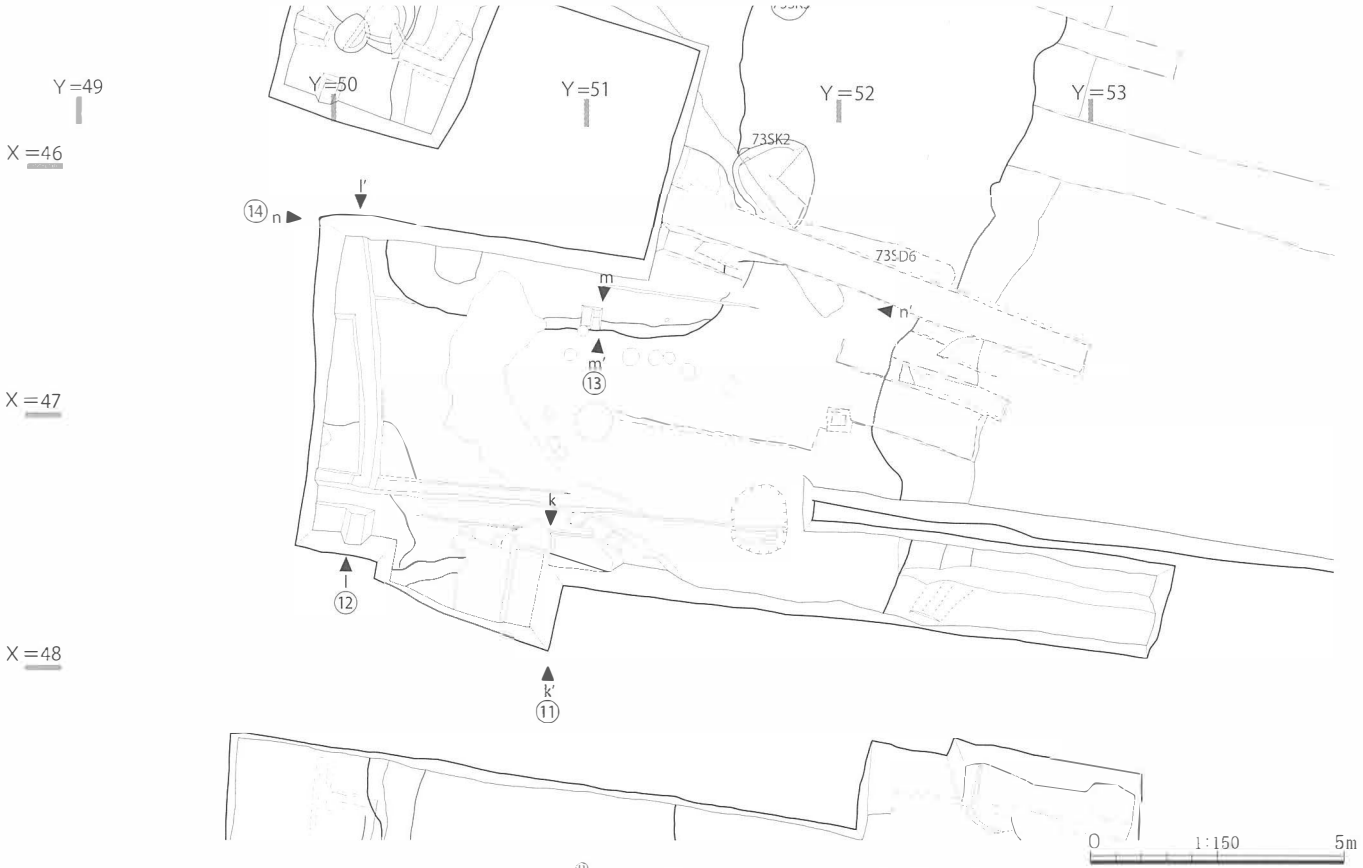
50－46付近で外側の堀が幅4.5m程の範囲で途切れる（図57・79次調査）。この位置は外側の堀の構築時に地山を掘り残しており、土橋として通路状になっていたと判断した（79SX1）。これについては関連遺構として後述する。

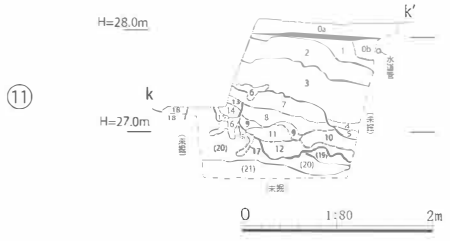
50－54付近では（図57・58－断面⑨）、幅6.5m程、深さ1.9m程で確認している（74次調査）。底面標高は24.1mである。断面形状は、底面はやや緩やかに湾曲し平坦面で水平方向の部分が狭いが、逆台形を呈する。土層からは、自然堆積による土層で埋没し、４・５層など一部で掘り直しや15層などの小規模な造作が行われる。２・３層は黄褐色土のブロックを多く含み、土器類も多く含まれることから人為堆積土により埋め戻されたと判断した。これより上層は水田耕作等の影響を受けており、本来の埋め戻し範囲は確定できない。また、堀外部にあたる西側の肩は締まりが強く黄褐色土で炭化物や石粒を含む人為層で、堀構築時の整地層（以下、74整地層１）で成形される。74整地層１は締まりが強く土質などから精緻な地業とみられるが、堀外部との連続は不明な点も残る。堀外部の35次調査では新旧の整地層が確認されている（平泉町教委1993）。後述の74整地層２を含め堀外部の整地層との時期の検討などの厳密な対応関係は堀外部を含めた再度の確認が必要であろう。

50－57付近では（図57・58－断面⑩）、幅7.3m程、深さ1.8m程で確認している（74次調査）。底面標高は23.3mである。断面形状は逆台形を呈する。土層からは、旧期の堀跡が19～23層とした自然堆積の土層で埋没し、一部が掘り直され新期の堀跡とその堆積が７～18層とした自然堆積土層である。上層は一部が５・６層とした土器類を多く含み、周囲の地山に由来する褐色土のブロックで構成される人為層で埋め戻される。これより上層は水田耕作等の影響を受けており、本来の埋め戻し範囲は確定できない。外側にあたる西側の壁は24～27層とした整地層（以下、74整地層２）で成形される。土器や炭化物を少量含む土層で、28層とした旧表土とみられる黒色土が南西方向に傾斜する状況から、平坦に造成して堀を構築したとみられる。なお、堀外部を対象とした35次調査では近接範囲で整地層が検出されている（平泉町教委1993）。連続して把握しておらず確定はできないものの、検出位置からは一連の整地と捉えうる。１～４層も人為堆積で構成され、整地層とみられる（74整地層３）。72SD2を一部覆っており、堀の廃絶に伴うと考えられる。これまで確認されている整地層との対応は隣接の位置での調査時の課題となろう。

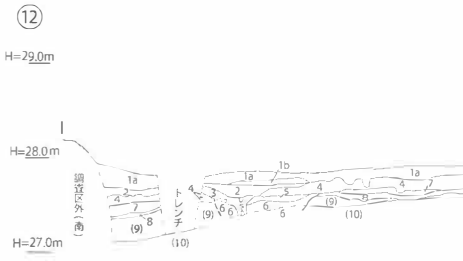
北端部における外側の堀のまとめ　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は、細部の相違は存在するものの、北端部では概ね対応する。調査が複数年次にまたがり近接する範囲でも様相の細部には差異があるため、厳密な対応は難しいが、堀の構築→自然堆積（小規模な造作）→一部の掘り直し→79SX1周辺の埋め戻し→廃絶の変遷が理解できる。いずれの地点でも自然堆積による埋没後、小規模な造作や掘り直しが行われ、その後の自然堆積を経て一部は全体が埋め戻されている。また、全体の埋め戻しか判然としない位置でも、土層には埋め戻しによる人為層が確認されている。関連する遺構として79SX1土橋と整地層がある。

関連遺構　79SX1土橋　50－46付近に位置し、外側の堀が幅4.5m程途切れる位置が確認された。堀構築時に地山を掘り残した、幅4.5m程の東西方向の土橋と捉えている（図59）。周囲の土層をみる

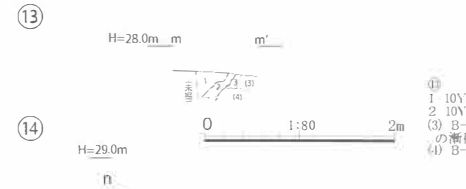




⑪
0a 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性中しまり中。凝灰礫微量。草根・山砂ブロック全体に含む。
0b 水道管敷設(埋戻し)。
1 表土層。
2 近現代造成盛土。
3 近現代遺物含む旧表土。
4 5Y3/1 オリーブ黒色 粘土質シルト 粘性強 しまりやや疎。3層漸移下面のグライ化部。
5 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂質シルト 粘性やや強 しまり中。グライ化層。地山ブロック少量含む。色調除けば8層に似る。
6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘土 粘性やや強 しまりやや密。酸化鉄小斑微量。木質部痕跡の可能性あり。
7 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト・10YR5/6 黄褐色シルトのブロック層。5~10㎜の小径ブロック主体。粘性中 しまり密。全体に砂質帯び酸化鉄の発達により赤味。
8 5Y6/1-6/2 灰 - 灰オリーブ色粘土・2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルトのブロック層。7層に比してブロック径大きくグライ化している。粘性やや強 しまり密。
9 2.5Y4/1 黄灰色 粘土 粘性やや強 しまり中。グライ化。8層下面に見られる小凹部の黒色層。木質(土留め等)の痕跡か。
10 8層に良く似る。8層との層界に平行する積み上げ単位が観察できる。
11 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。全体に酸化鉄小斑(点状)顕著で赤味帯びる。
12 5Y6/2-6/3 灰オリーブ - オリーブ黄色粘土質シルトブロック層。粘性やや強 しまりやや密。5Y6/1-5/1 灰色粘土 10-20㎜ブロック少量含む。
13 10YR4/2-3/3 灰黄褐 - 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり密。木炭粒(径2-5㎜)微量。自然堆積の旧表土か。8層に切られている。
14 10YR5/2-5/3 灰黄褐 - にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり密。全体に酸化鉄小斑(点状)顕著。
15 14層土に地山土ブロック多量。
16 10YR5/2-5/3 灰黄褐 - にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり密。地山ブロック(径2-5㎜)やや多量。14・15層が乱された部分。根撹乱か。
17 10YR5/2-5/3 灰黄褐 - にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。根撹乱か。
18 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。近接土坑埋土の一部。14層に似る。
19 10YR5/1-5/2 褐灰 - 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。20層との層界不明瞭。漸移層の可能性。
(20) 10YR7/3-7/4 にぶい黄橙色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。地山構成層。
(21) 2.5Y6/3 にぶ黄色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり中。クラック発達し間隙に5Y6/1灰色砂質シルト。



⑫
1a 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締りやや密。
1b 10YR5/2-4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締りやや密。
10YR6/2-6/3 灰黄褐 - にぶい黄橙色 粘土ブロック(径5-15㎜)やや多量。
2 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。
3 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり中。径50㎜ほどの礫を1個微量含む。
4 2.5Y6/3 にぶ黄色 粘土質シルト 粘性中 しまりやや密。全体に細砂含みやや砂質帯びる。下位7層との層界に細砂薄層。7層に良く似るが根撹乱目立ち褐りがある。
5 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密。2.5Y5/3 黄褐色粘土ブロック(径10㎜)微量。
6 2.5Y5/1 黄褐色 粘土ブロック層 粘性やや強 しまりやや密。酸化鉄斑顕著。
7 2.5Y5/3 黄褐色 粘土 粘性中 締まりやや密。全体に細砂含む。酸化鉄小斑点在。北壁断面で堀跡を埋める人為層から連続する土層。
8 10YR4/2 粘土 粘性強 締まりやや密。木炭細片(径5-10㎜)極微(上部に多い傾向)。7層土による整地直前の表土層。
(9) 10YR5/2-2.5Y5/2 灰黄褐 - 暗灰黄色 粘土 粘性やや強 締まりやや密。酸化鉄小斑点在。地山上部の漸移層。斜面下方ほど層厚増す。
(10) 10YR7/4-6/4 にぶい黄橙色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり密。地山構成層。



⑬
1 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまりやや密。木炭粒(径5㎜)極微量。クラックに沿って酸化鉄集積。
2 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまりやや密。10YR6/4 砂質シルトブロック(径10-20㎜)やや多量。クラックに沿って酸化鉄集積。
(3) B-B'の10層。10YR5/2-2.5Y5/2 灰黄褐 - 暗灰黄色 粘土 粘性やや強 締まりやや密。酸化鉄小斑点在。地山上部の漸移層。斜面下方ほど層厚増す。
(4) B-B'の11層。10YR7/4-6/4 にぶい黄橙色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり密。地山構成層。

⑭
0a 既往調査の埋め戻し土。
0b 近現代造成盛土。
1a 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締りやや密。(断面⑫の1a層に同じ)
1b 10YR5/2-4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締りやや密。10YR6/2-6/3 灰黄褐 - にぶい黄橙色粘土ブロック(径5-15㎜)やや多量。(断面⑫の1b層に同じ)
2 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密。(断面⑫の2層に同じ)
3 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや密。
4 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中 しまりやや密。9層土ブロック(径10-20㎜)少量。
5 10YR5/3-4/2 にぶい黄褐 - 灰黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや密。木炭片(径5-10㎜)微量。かわらけ等遺物細片集中。
6 10YR4/3 灰黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや密。木炭小片(径5-20㎜)やや多量(集中)。角張った木炭片が主体で、全体真っ黒な土層。
7 10YR5/3-5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり密。
8 (断面⑫の7層に同じ)。人為埋戻し土層。
9 10YR6/2-5/3 灰黄褐 - にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり密。8層に似るが僅かに暗い。木炭粒(径5㎜)極々微量。人為埋戻し土層。
(10) 10YR5/2-2.5Y5/2 灰黄褐 - 暗灰黄色 粘土 粘性やや強 締まりやや密。酸化鉄小斑点在。地山上部の漸移層。斜面下方ほど層厚増す。(断面⑫の9層に同じ)
(11) 0YR7/4-6/4 にぶい黄橙色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり密。地山構成層。(断面⑫の10層に同じ)

図59 79SX1平面・断面図

と、南北方向の断面では（図59－断面⑫）、9・10層がいわゆる地山面、８層が旧表土にあたる。これを直接覆う７層は黄褐色の土層で、人為堆積土で埋め戻し土もしくは整地層とみられる。東西方向の断面から連続し、72SD2堀跡を埋め戻した土層から連続する。６層は黄褐色土の粘土質の土層で、８層を掘り込む土層として分層した。７層との前後関係は判然とせず、当初の整地土層との見方も残る。５層もこれと関連する。４・７層は人為的な土層だが、層界に砂層が形成され時期が異なる。４層より上層が12世紀より新しい盛土等と判断した。東西方向の断面では（図59－断面⑭）、10・11層がいわゆる地山面にあたる。８層及び９層は粘土質の褐色がかった土層で人為的な埋め戻し土とみられる。８層は断面⑫の７層に連続する。埋め戻しに際して周辺部分も含めた、やや広い範囲で整地されたことがわかる。５～７層及び３・４層はこれらの上層に限定的に堆積する。５・６層は炭化物を含み、堆積の時間幅が短い可能性もある。１層及び２層は新しい段階の盛土層である。また、72SD2堀跡の南北方向の掘り込みは60～70°程度の傾斜で立ち上がる（図59－断面⑬）。堀跡の肩部分と埋め戻し土との間には自然堆積などの明瞭な間層は確認できない。これが72SD2堀跡構築後に短期間で埋め戻しが行われたためか、確認した部分が72SD2堀跡の断面上端部に限定されていることにより自然堆積層の形成が進行しなかったことによる事象なのかは明確ではない。他地点の調査成果からは外側の堀跡は掘削以降に一定の時間経過を伴う機能時が想定でき、後者の可能性が高いと思われるが、その場合でも土橋部分の周囲を一部壊しながら堀の埋め戻しが行われことは想定できよう。また、周囲ではX=45付近まで同様の整地土が堀上端で10m近く検出されており（図版編図版60・72SD2南端）、72SD2堀跡の廃絶に際して、周辺域を含めた一定の広さをもつ比較的限定された範囲に埋め戻しが行われたことが理解できる。

これらの所見から、4.5mほどの部分で72SD2堀跡が掘削されず当初から掘り残されていたことがわかる。土橋部分に接する位置での堀底面の形状及び深さは不明だが、現況での検出面での比高も１ｍほどあり、堀の底面はそれよりも下がることから、堀構築時点では堀底面から土橋部分の上面まで１ｍを超える比高があったと判断できる。南端部に設定した断面では（図59－断面⑪）、19～21層はいわゆる地山にあたり、16・17層は木の根等による攪乱と判断した。19層及び20層の上面が地山層の上面と捉えている。14・15層は人為的な堆積土、13層は自然堆積による土層である。これを切るように堆積する７～12層は地山ブロックを多く含み、人為堆積土主体の土層と捉えている。13～15層の土層が72SD2堀跡の堆積土になるか、13・14層の層界が堀跡の構築時の土層になるかは確定しがたい部分が残るが、平面での形状などから13～15層が72SD2堀跡の当初の堆積で、15層の掘り込み部分から堀跡のラインと捉えておきたい。このように南端部分は、72SD2堀跡の構築にあたって、掘り残されていた範囲にあたると捉えられる。また、この掘り残し部分の周囲は整地等の地業が頻繁に行われたと考えられる。

北端部における外側の堀のまとめ２　79SX1を含めた外側の堀の変化をまとめると、堀の構築・土橋による渡河地点の形成→自然堆積（小規模な造作）・一部の掘り直し・土橋周辺の改修（人為堆積土）→79SX1周辺の埋め戻し（渡河地点の形成）→廃絶の変遷が理解できよう。

遺物　概要　外側の堀跡（72SD2）から出土した遺物は、他地点の同遺構と同様に少ない。下層の人為層出土資料を中心に、いくつかを図示する（図60）。各層位ごとに記す。

外側の堀跡（72SD2）下層　53－39付近では（72次調査、図57・58－断面⑤）、削平のため土層の残存は良くないが底面付近からも多くの土器類が出土している（図60－１～14）。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含み、いずれかに偏る様相は認められない。ロクロかわらけ小皿は口径8.0

～8.4cm、底径4.5～6.3cm、器高1.6～2.2cmである。やや器高が高く、内湾しながら立ち上がる器形もある（図60－３）。ロクロかわらけ大皿は口径12.5～14.0cm、底径7.0～7.5cm、器高3.1～3.5cmである。手づくねかわらけ小皿は口径7.9～9.2cm、器高1.3～2.1cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.0～15.0cm程で平均14.4cm程、器高2.7～3.1cm程で平均2.9cm程である。口径が14cm前後でやや大型の器形を呈するが、器高は低く全体の大型の器形ではない。かわらけは多く含むものの、国産陶器類が少ない。図60－14は渥美産の山茶碗である。

南側に近接する52－41付近（72次調査、図57・58－断面⑥）でも同様の傾向を示す。ロクロかわらけ大皿は皿形の器形を呈するものが多い。手づくねかわらけ大皿は口径がやや大きい資料を含むものの法量値にはばらつきがあり、小型の器形の資料を含む。

51－44付近では（73次調査、図57・58－断面⑦）、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者が含まれる（図60－15～23）。破片はロクロかわらけが多く、器形が復元できる資料も同様にロクロかわらけが多い。またかわらけの出土量が一定量認められるのに対し、国産陶器類の出土は少ない。ロクロかわらけ小皿は口径8.8cm、底径6.7cm、器高1.7cmである。また口径11cmと器高の大きいロクロかわらけ小皿もある（図60－61）。ロクロかわらけ大皿は口径12.4～14.8cm程で平均13.9cm程、底径6.0～8.0cm程で平均6.8cm程、器高3.5～4.3cm程で平均4.1cm程である。やや器高が高く、椀型を呈する資料が多い。手づくねかわらけ小皿は口径8.0cm、器高1.6cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.4cm、器高2.8cmである。

北側に近接する51－43付近でも、出土土器類の傾向は同様である（73次調査）。

50－54付近では（74次調査、図57・58－断面⑨）、土器類の出土は少ない（図60－24～33）。ロクロかわらけ小皿は口径8.8～9.6cm、底径6.0～6.8cm、器高1.8cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.2～14.0cm、底径7.0～7.4cm、器高3.3～3.7cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.0～9.4cm、器高2.0cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.6～14.3cm、器高2.8～3.4cmである。口径14cmを超える器形が多い。

50－57付近では（74次調査、図57・58－断面⑩）、土器類の出土は少ない（図60－34～44）。柱状高台の底部を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.0～9.4cm程、底径5.3～6.2cm程、器高1.6～2.2cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.0～13.4cm程、底径6.0～8.6cm程、器高3.7～4.1cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径8.8～9.3cm、器高1.2～1.6cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.2～14.6cm、器高3.0～3.4cmである。やや口径が大きい器形の資料を含む。また、かわらけの出土量に比して、国産陶器は11,594g、輸入陶磁器は599gとややまとまった出土量がある。

外側の堀跡（72SD2）上層　51－43付近（73次調査、図57）では堀の上層でかわらけがまとまって出土している（図版編写真図版60、図60－45～66）。この周囲にのみ限定的に分布する、暗褐色の土層から出土している。この位置での検出面になるため一括性はやや留保すべき資料だが、分布位置が限定的で注目できる。この位置が遺構廃絶時及びそれ以降に窪みとして残存していた可能性を示唆する。ロクロかわらけ小皿は口径8.6～9.4cm程で平均9.0cm程、底径5.7～6.7cm程で平均6.3cm程、器高1.4～2.1cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.8～15.2cm程で平均13.6cm程、底径6.5～9.6cm程で平均7.5cm程、器高2.9～4.0cm程で平均3.4cm程である。器高が低い皿形を呈する資料が多い。手づくねかわらけ小皿は口径8.6～9.5cm程で平均9. 1cm程、器高1.6～2.2cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.2～15.0cm程で平均13.5cm程、器高2.3～3.4cm程で平均2.8cm程である。口径が大きい資料も多く含むものの、小型の器形の資料もありばらつきが大きい。なお、この周囲より南側10ｍ程の範囲は79SX1の項で記したように、遺構上端まで人為的な土層で埋

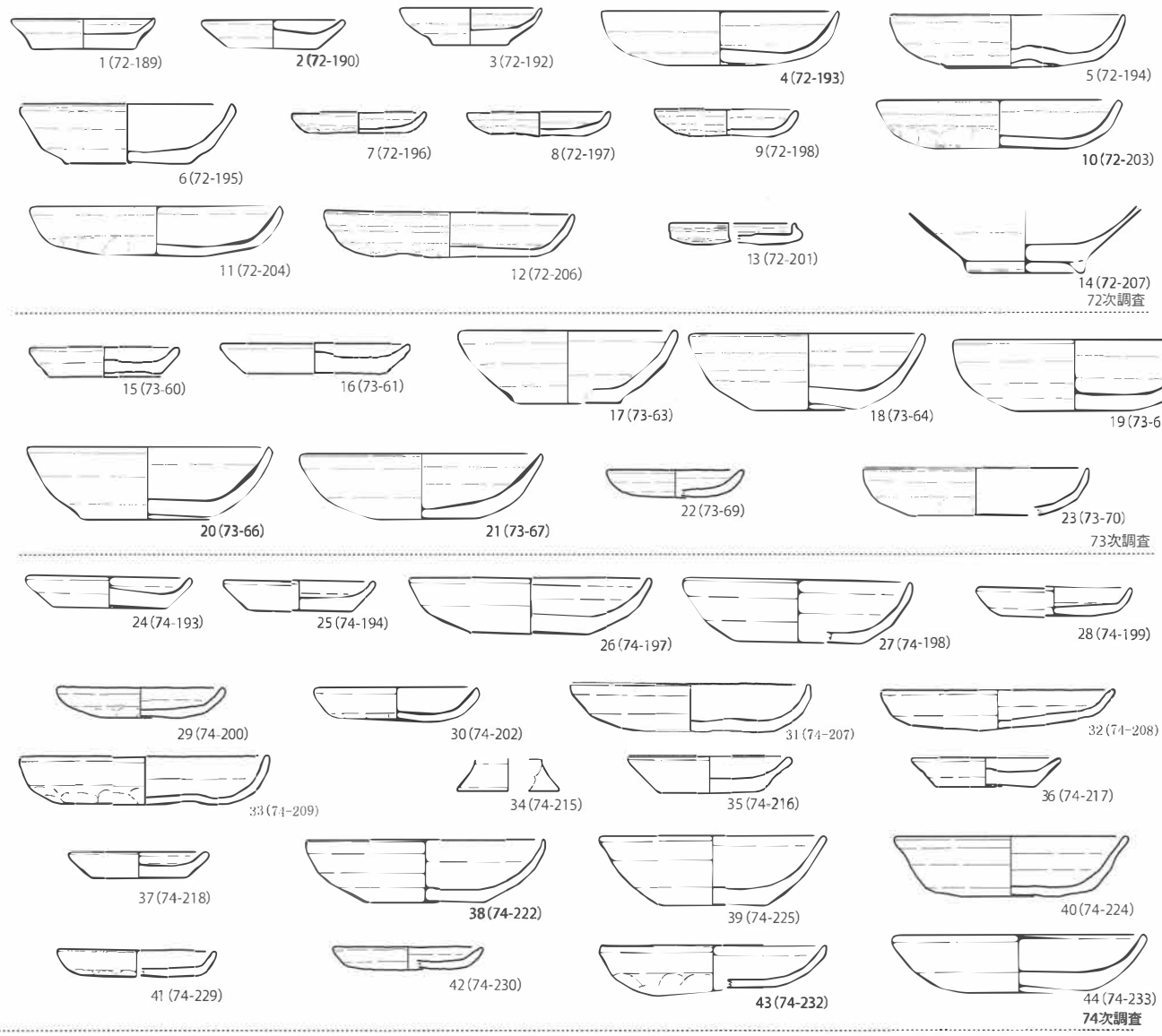


図60　72SD2出土土器類実測図

0　(1:4)　10cm

め戻しが行われている点は遺構理解の上で注意しておくべき内容である。

【内側の堀（21SD1・56SD38・72SD1）】

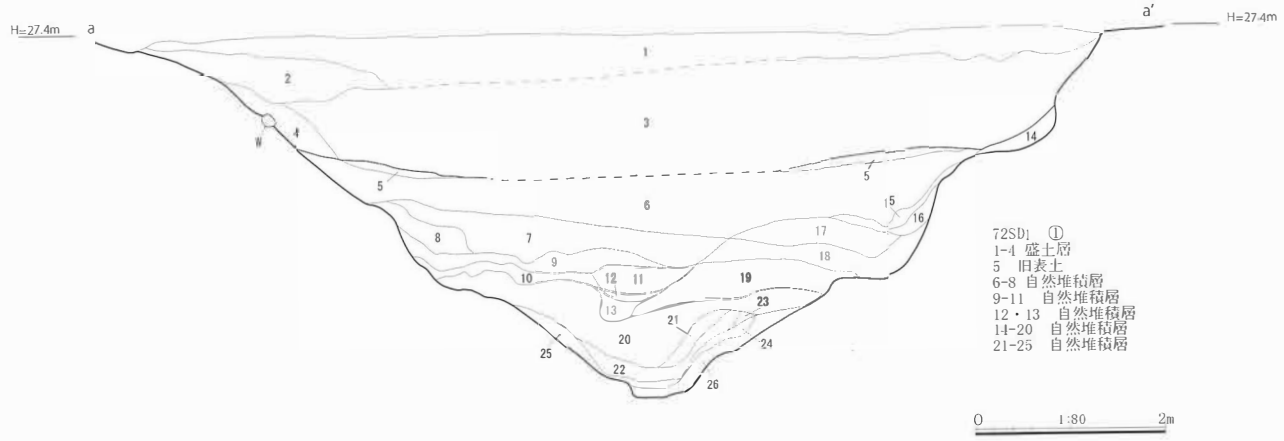
遺構　概要　内側の堀跡は遺跡を画する大規模な２条の堀のうち内側を走る堀である。遺跡が位置する段丘の中央付近に位置し、X=46～48付近を境に現況の地形で南北それぞれに傾斜をもつ。X=37付近よりさらに北側の延長は河川の浸食によって失われている。堀跡は延長することは確実だが河川によって壊されており、本来の走向方向と延長は確定できない。南側の一部を41次調査で検出し一部にトレンチを設定し精査を、72～74次・79次調査で検出及び一部を精査した。猫間ヶ淵周辺で前述したうちの北端の位置にあたる53－62付近から方向を南北方向に変え、53－48付近で南北方向を基本に東に振れて走る。幅11～12m程で、検出面からの深さは3.8m程である。底面標高は位置によって異なるためそれぞれで記すが、X=44～46付近を境に南北それぞれに傾斜して下がる。北端部では100m程の延長が確認できた。以下、精査した断面を中心に北側から記載する。

土層状況　55－44付近では（図57・61－断面①）、幅11m程、深さ3.8m程で確認している（72次調査）。底面標高は23.5mである。断面形状はＶ字型を呈する。14層や18層とした平坦面が確認できる。堆積土層の状況から掘り直し等ではなく、構築時における作業に際しての造作と判断している。土層からは１～４層は近世段階の盛土層で、それ以下との間で旧表土層にあたる５層が堆積する。近世段階まで内側の堀が窪んだ形状で残存していたものと考えられる。それ以下は自然堆積による埋没で、堀構築後に自然堆積による埋没が徐々に進行したものと捉えられる。下層の25層で土器類を多く含み、堆積のひとつの段階差を示す可能性がある。また、19層の上面で遺物が比較的まとまり、７層で炭化物や黄褐色土のブロックを含むなど、自然堆積の中でも堆積に時間的間隔が置ける可能性があるが、判然としない。また、12・13層のような雨裂とみられる小溝状の土層はあるものの、掘り直し等とみられる痕跡は確認されていない。内側の岸は削平を受けており、本来の立ち上がりの上端は失われているとみられる。また、近接した東側では72SB1が確認されているほか、そのほかの土坑なども確認されている。堀との直接的に重複する遺構は確認しえないが、残存する地形の端部まで遺構が存在することは、堀の構築時期や端部の様相を検討する上でも重要である。

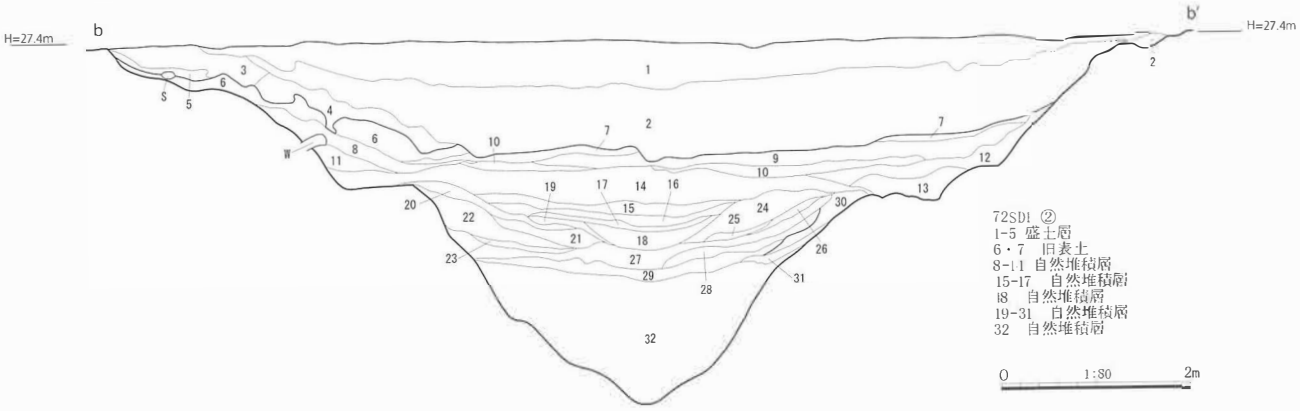
55－42付近では（図57・61－断面②）、幅11m程、深さ3.8m程で確認している（72次調査）。底面標高は23.6mである。断面形状はＶ字型を呈する。11層や12・13層とした平坦面が両肩側でそれぞれ確認できる。土層の状況から掘り直し等ではなく、構築時の作業に際しての造作と判断している。土層からは１～５層は近世段階の盛土層で、それ以下との間で旧表土層にあたる６・７層が堆積する。近世段階まで内側の堀が埋まりきらずに、窪んでいたものと考えられる。それ以下は自然堆積による埋没で、堀構築後に自然堆積による埋没が徐々に進行したものと捉えられる。下層の32層で土器類を多く含み、堆積の中での時間的な段階差を示す可能性がある。また、24・26層で遺物が比較的まとまり、14層で炭化物や黄褐色土のブロックを含むなど、自然堆積の中でも時間的な間隔が置けるとみられるが、判然としない。また、18層のような雨裂とみられる小溝状の土層はあるが、掘り直し等とみられる痕跡は確認されていない。内側の岸は削平を受けており、本来の立ち上がりの上端は失われているとみられる。また、近接する東側は平坦な地形が部分的にのこり、この位置では72SB1が確認されているほか、そのほかの土坑なども確認されている。

72SD1は、X=48付近を境に緩やかに屈曲する。なお、この間（X=48～54）は検出のみだが幅11m程で確認している（73次調査）。水田等の造成で上端部の幅が広がっている位置があるうとみられるが、走向の位置は把握されている。また、現状で確認できる堀の上端部周辺では関連する遺構は検出

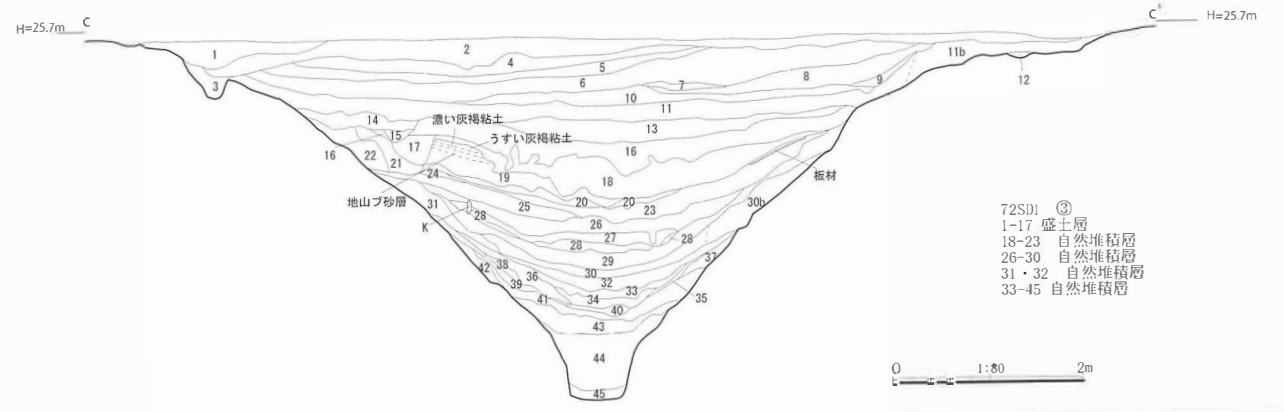
72SD1①



72SD1②



72SD1③



72SD1④

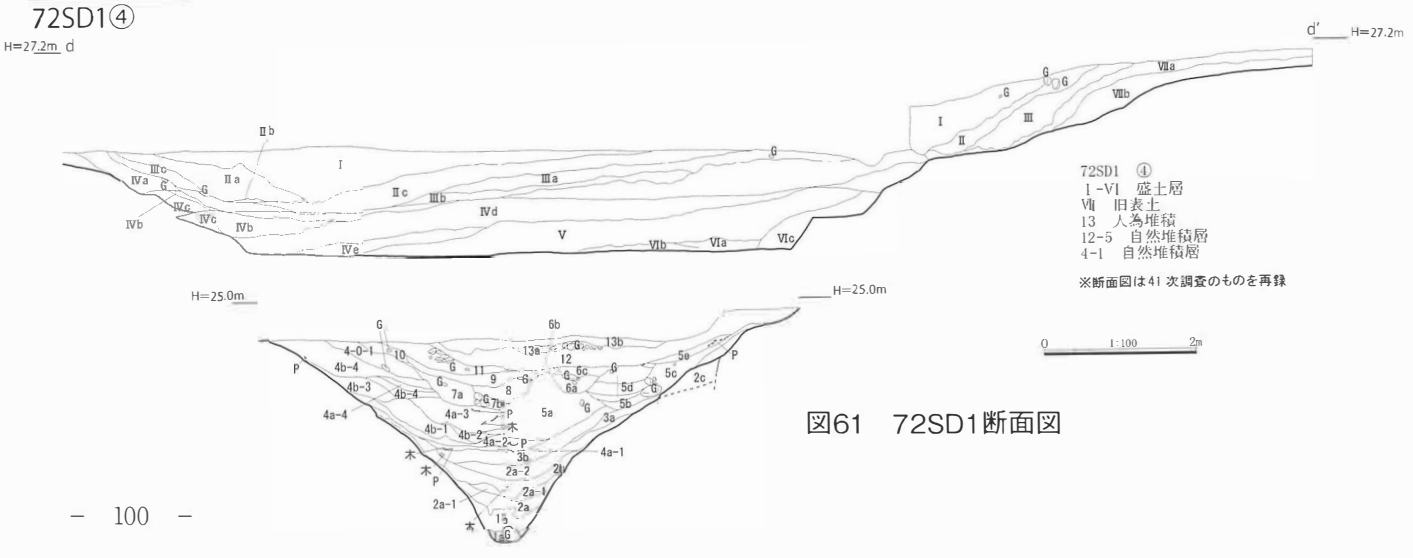


図61　72SD1断面図

されていない。関連遺構の検出には堀全体にわたる精査が必要となると判断できる。この屈曲部から南側では、周囲の現況地形は猫間ヶ淵跡に向かって南側に下って傾斜する。

53－54付近では（図57・61－断面③）、幅10.8m程、深さ3.8m程で確認している（74次調査）。底面標高は21.6mである。断面形状はＶ字型を呈し、底面付近は壁が直立に近い。一部で傾斜が緩やかになるが、明確な平坦面は形成されていない。１～17層は12世紀以降の近世を含む自然堆積層である。雨裂状の溝の掘り込みや断面の様相から、18層上面が旧表土となったと判断している。この層の下部から木製品を多く含む土層が、遺物を含まない壁面崩落土などを挟んで確認されている。18層の下部から23層は土器類や木製品類のほか炭化物を多く含む。また、遺物を含まない25層を挟んで26～30層も土器類や木製品類を多く含む。30b層を挟んで32層まで土器類や木製品類などの遺物を多く含む。33層以下は遺物が少なく、壁面の崩落土などを多く含む。35・39層は植物質の腐食もあり、旧表土となった時期が想定できよう。その場合、これより下層の底面から１m程までとそれ以上との堆積で一定の時間差が置きうる。また、木製品類などの遺物を多く含む土層が、間層を挟んで確認されている。いずれも自然堆積の土層で12世紀代の堆積層とそれ以降の堆積層を明確に分けることは難しい。堀構築後に自然堆積による埋没があり、遺跡廃絶を経て徐々に埋没が進行したと判断できる。なお、周囲に関連遺構は検出されていない。溝状に掘り込まれた３層は掘り込み面から、後世のものと判断できる。

53－58付近では（図57・61－断面④）、幅12m程、深さ3.8m程で確認している（41・74次調査）。底面標高は21.6mである。断面形状はＶ字型を呈し、底面付近は壁が直立に近い。底面から２m程の位置で平坦面が形成される。この位置で41SX2橋跡を検出している。なおこの精査位置は41次調査でBトレンチとして精査した箇所である。74次調査で南側に少し拡張したが、基本的に新たな知見は得られていない。底面から１～４層までの土器類や木製品などの遺物を多く含む層を12世紀代の堆積と捉えている。４層には炭化物を多く含む。

北端部における内側の堀のまとめ　これらの土層の堆積状況とそこから想定できる遺構の変遷は、細部の相違は存在するものの、北端部では概ね対応する。調査が複数年次にまたがり近接する範囲でも様相の細部には差異があるため、厳密な対応は難しいが、堀の構築→自然堆積（小規模な造作）→廃絶の変遷が理解できる。いずれの地点でも自然堆積による埋没後、小規模な造作の存在は留保されるものの、自然堆積により埋没する。自然堆積は遺構構築後から徐々に進行したとみられるが、木製品の集中などから遺跡廃絶時には２m程弱と推察できる。廃絶時にも大規模な堀としての形状が保たれたとみられる。断面形状はＶ字型になり、他の箇所と異なる形状を示す。また、堀の立ち上がりが急峻なためか、中途に平坦面が造成される。関連する遺構として41SX2橋跡がある。

関連遺構　41SX2橋跡　54－57付近に位置する橋跡とみられる遺構で、東西方向の桁行１間分を確認している（図62）。41次調査で確認し、74次調査で再検出している。41SK36、41SK37の柱穴で構成され、梁行方向の柱穴は検出されていない。74次調査で南側は延長２m程まで検出した結果、対になる柱穴が確認できていない。他の橋跡の事例などで把握されている柱間を勘案すれば、南側への延長は想定が難しく、延びる場合には北側に延びるとみられるが確定できない。桁行方向の延長は堀の肩を含め、関連する遺構は検出できておらず、１間のみの可能性が高い。桁行は408（13.5尺）cmである。41SK36は60×70cm程の柱穴で、柱材が残存する。柱材は径20cm程で、平面では五角形と推察される多角形である。41SK37は平坦面に位置し、掘方が20cm程の円形で、柱痕跡は15cm程度の円形である。遺跡内で確認している他の橋跡（21SX35、23SX12）に比して柱規模は小さく、組み合う柱穴も少ない。

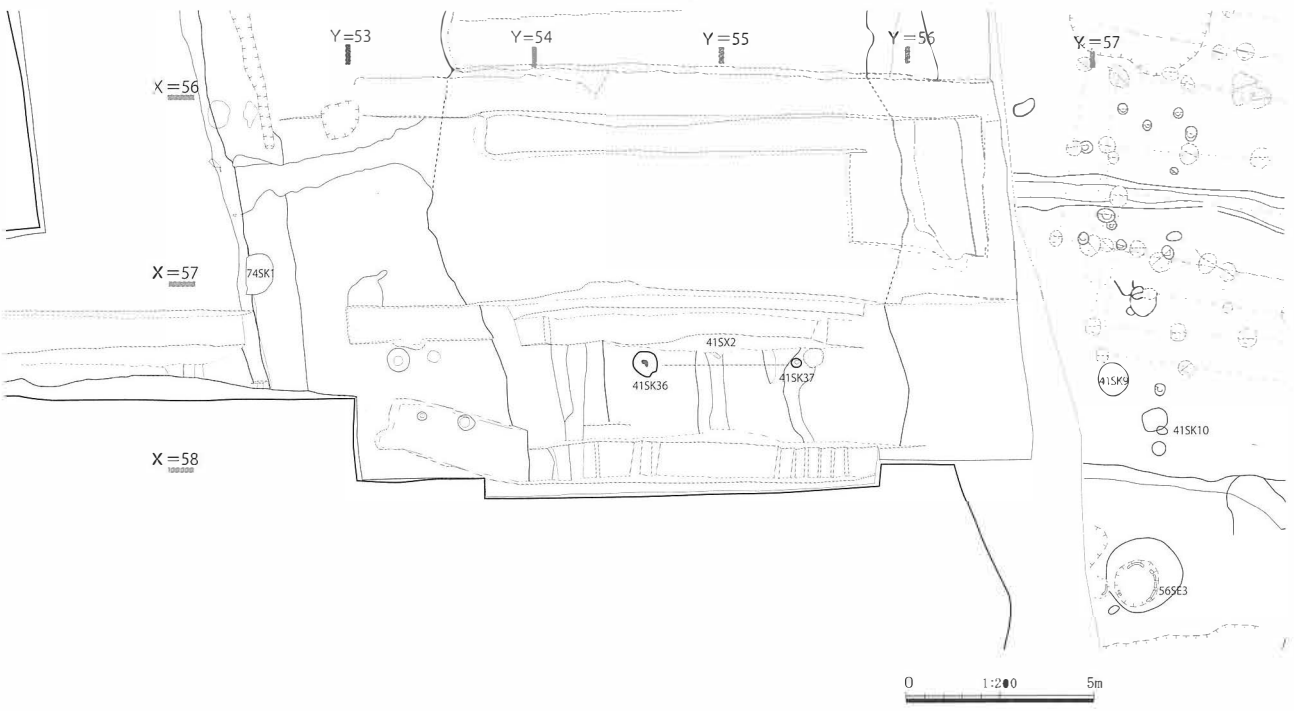


図62　41SX2平面図

遺物　概要　内側の堀跡（72SD1）から出土した遺物は、自然堆積層の土層から出土している。いくつかを図示する（図63）。北端部とした範囲はX=44～46付近を頂点に南北のそれぞれに下っていく地形とみられる。以下、それぞれ北側、南側と記す。

北側の範囲では72次調査で55－44付近（図57・61－断面①）と55－42付近（図57・61－断面②）の２ヵ所精査している。上層部に厚く堆積する近世以降の土層から出土した資料が多く、遺跡機能時やそれに近い時期とみられる土層からの出土資料は少ない。いずれの位置でも下層から最下層の土器でもロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ただし、両者の重量等での比率は、手づくねかわらけが多くを占め、ロクロかわらけが少ない。器形が復元できる資料は少ないものの、手づくねかわらけ大皿は口径13cm前後以下の小型の器形を呈する。

南側の53－54付近では（74次調査、図57・61－断面③）、中層以上の新しい時期の堆積土層からの出土が多いものの、最下層付近から土器類が出土している。ここでは層序順に下位の土層出土資料から特徴を記す。

内側の堀跡（72SD1）最下層　37層以下の最下層付近では出土点数が少ないが、ロクロかわらけ及び手づくねかわらけも細片だが出土している（図63－１～７）。ロクロかわらけ小皿は口径7.9～8.7cm程、底径4.1～6.7cm程、器高1.7～2.1cm程である。底部が小さく、体部が外反しながら立ち上がる器形を含む（図62－３・６）。ロクロかわらけ大皿は口径15.2cm、底径9.4cm、器高4.5cmである。器高が比較的高い器形を呈する。

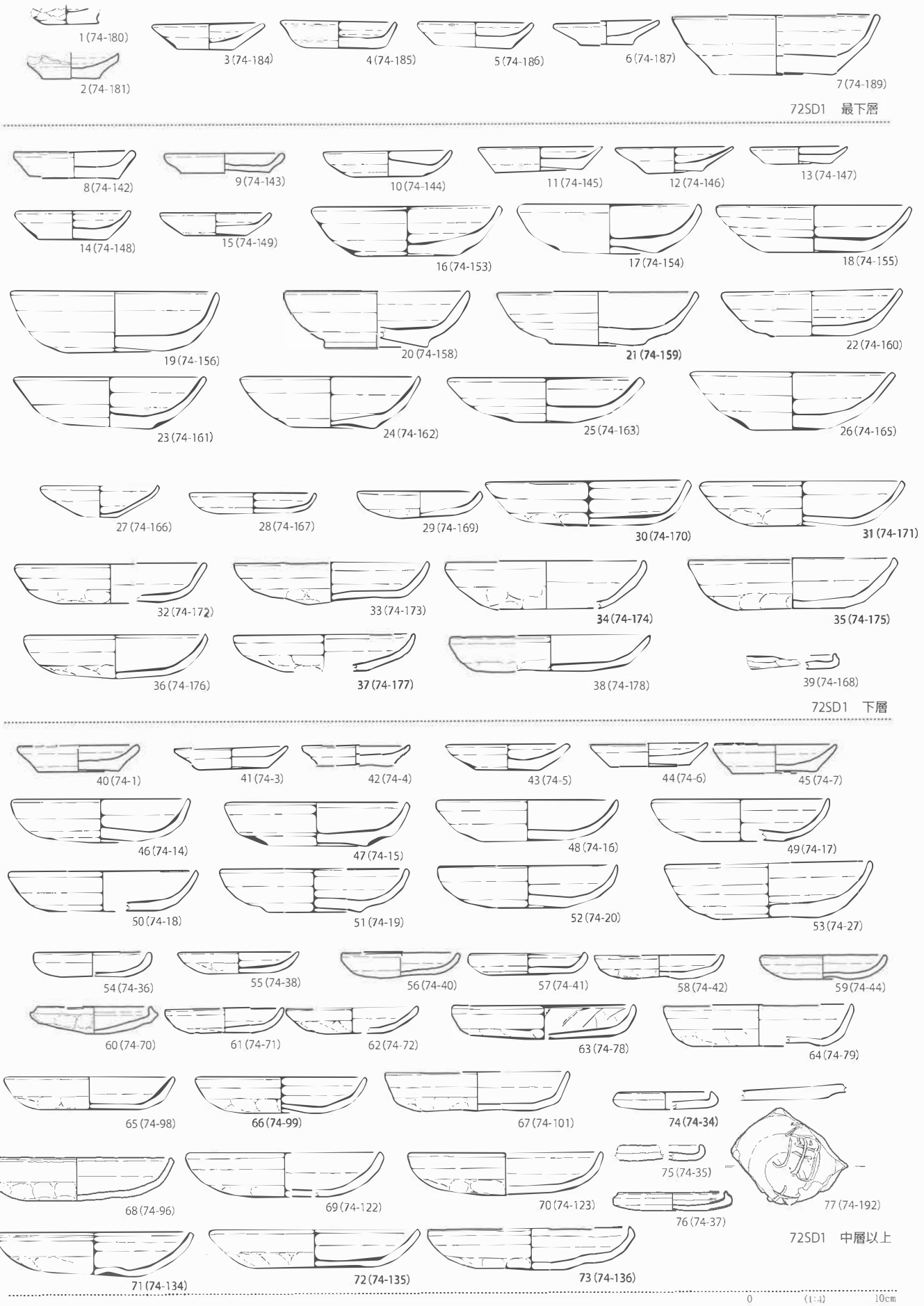


図63　72SD1出土土器類実測図

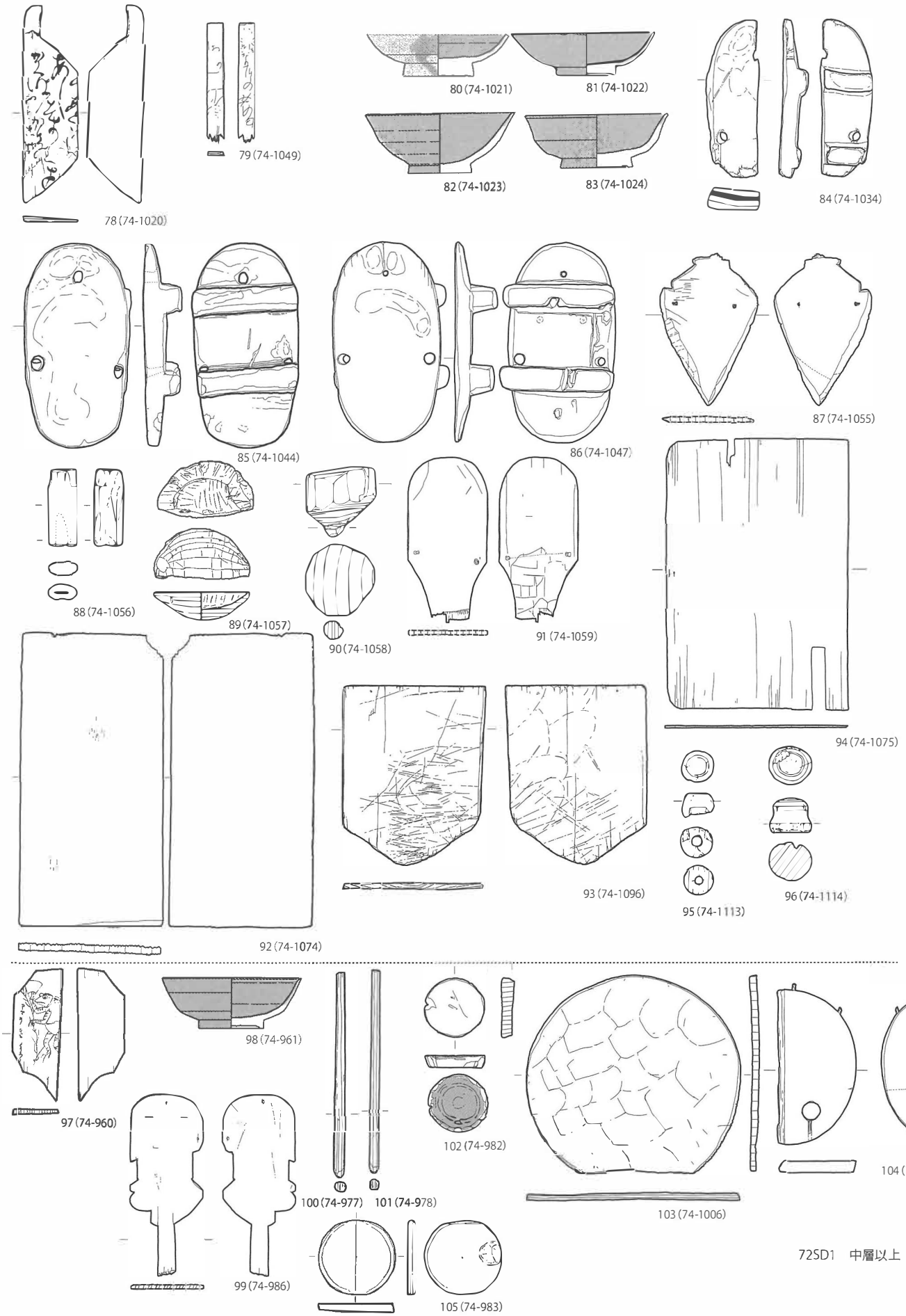


図64　72SD1出土木製品実測図

内側の堀跡（72SD1）下層　下層とした土層は26層以下の遺跡の廃絶時に近い時期の堆積とみられる自然堆積土層である（図63－8～39）。ロクロかわらけ小皿は口径7.0～10.0cm程で平均8.8cm程、底径4.6～7.0cm程で平均6.0cm程、器高1.3～2.2cm程で平均1.9cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.2～15.0cm程で平均14.3cm程、底径5.4～8.2cm程で平均7.1cm程、器高3.4～5.0cm程で平均4.0cm程である。口径が4cm以下で低く皿形の器形を呈する資料が多いものの、器高5cm前後で底径が小さい椀型を呈する器形を含む。手づくねかわらけ小皿は口径8.8～9.4cm、器高1.6～2.4cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.6～15.1cm程で平均14.6cm程、器高2.8～3.5cm程で平均3.3cm程である。口径15cm程で器高も高い器形の大きい大型の器形を含む一方で、口径13cm前後の小形の器形も含む。遺物の多くは特徴にばらつきが大きく、複数の時期の資料が混在したものとみられる。土層の状況から堀内部からの流入であることをふまえると、近接した位置に古い段階の遺構を含み、この範囲の利用が遡ることが想定できよう。

下層とした土器が出土した土層（26層以下）では木製品が多く出土している（図64）。折敷片の再加工とみられる墨書片（図64－78）や針書の刻書木片がある。このほか下駄や漆器椀、折敷片などが出土している。荒型とみられる資料（89）や独楽状の未製品（90）など多様な木製品を含む。

やや上部にあたる土層（18～23層）でも木製品が出土している。（図64）。97は折敷片とみられる木片に擬人化されたカエルの戯画が描かれる。これについてはⅣ章で記す。このほか、漆器椀や下駄のほか、多様な部材が出土している。

内側の堀跡（72SD1）中層以上　中層以上は18層から29層で出土した資料である（図63－40～77）。木製品を含む土層より上位の土層である。ロクロかわらけ大皿は器高が低い資料でほぼ占められる。手づくねかわらけ大皿は器高が低い皿形の器形を呈する資料が多い。また、41SD2－Bトレンチでは、刻書のあるロクロかわらけが出土している（図63－77）。内面に「南□（无ヵ）」と刻書されている。針書で下書きが行われた後に、ヘラで刻書されており、習書等ではない。国産陶器や輸入陶磁器は中層以上からの出土が多い。なお、上層からの出土だが、絞胎陶器片が12点とまとまって出土している。

④56SD40溝跡（内溝）（図版編図38、図65・66）

遺構　65－50付近に位置し南北方向に走る溝跡である。52次調査では52SD26の古段階としている。幅５～６m、検出面からの深さ0.8～1.2mで確認しており、底面の標高は25.4～27.1mである。平面の形状は中央付近で西側にやや緩やかに膨らみ、65m程の延長を確認している。南北ともに延長部分での調査で同様の遺構は検出されていない。端部やさらなる延長の有無に不確定な部分は残るものの、両端ともに立ち上がりが確認でき、基本的には全形が検出されていると見なすことができる。北端部は断面で立ち上がりを確認し、肩部分に北側からの自然堆積がある。南端部でも断面で立ち上がりを確認し、最下部の12層は水平方向に自然堆積があり、９～11層までは遺構の機能時での自然堆積の土層である。それらより上層はいわゆる地山ブロックを多く含む土質で、埋め戻しによる人為堆積と判断できる。遺構の廃絶にあたって全体が埋め戻されたとみられる。遺物は底面付近の自然堆積土からは出土しておらず、埋め戻しによる人為土層から少量のかわらけや国産陶器、輸入陶磁器、焼土塊等が出土しているのみである。56SD40→56SD20（41SD1・52SD26）の新旧関係があるほか、周辺のいずれの遺構よりも古い。

56SD40に重複し、それより新しい56SD20（52SD26・41SD1）は幅４m、深さ１m程で南北方向に走る溝跡である。南北を基本とするが、平面形は大きく蛇行する。南端部では内側の堀の上層に流入している。したがって内側の堀が一定程度堆積した時期の遺構と判断できる。遺構の重複から遺跡の

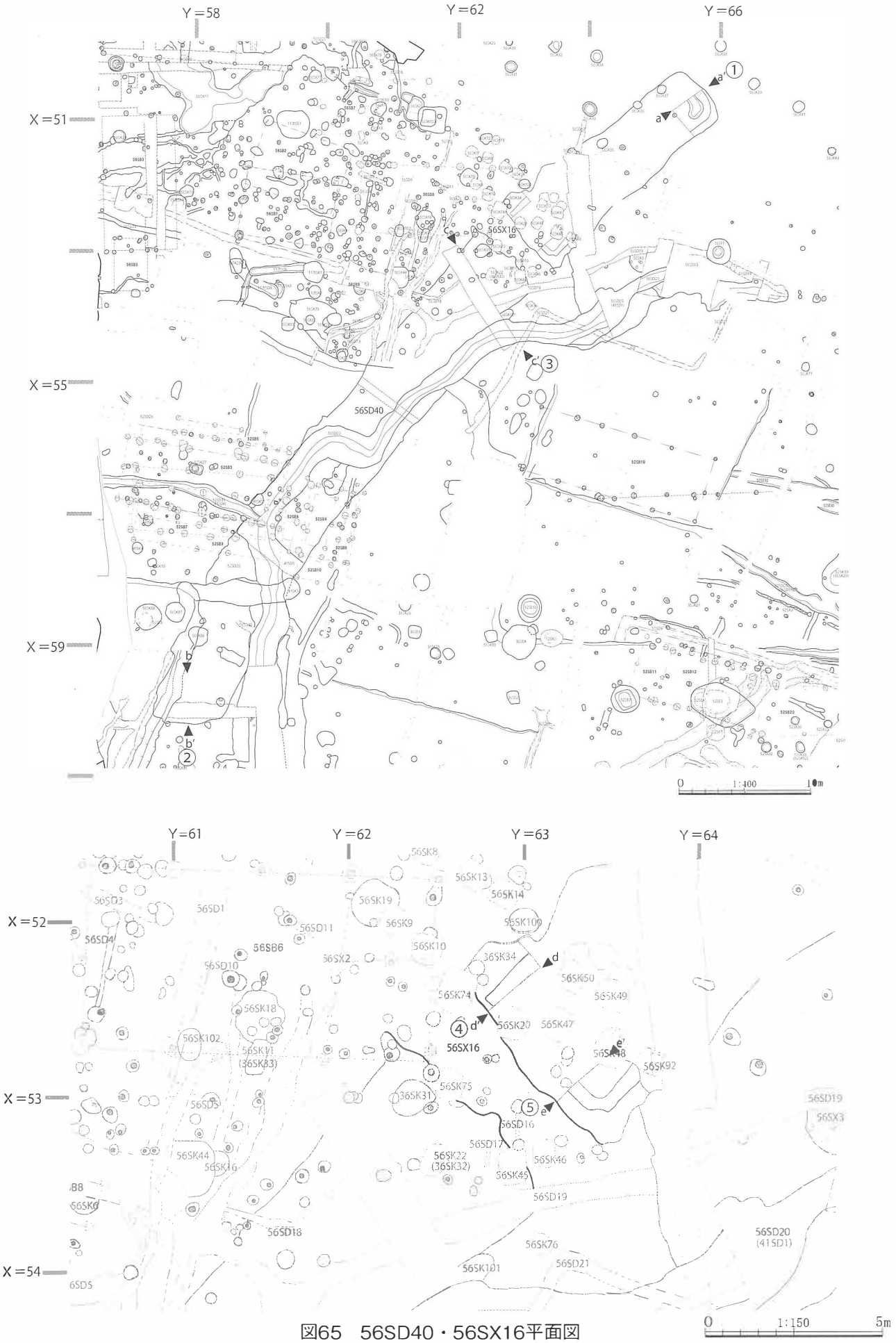
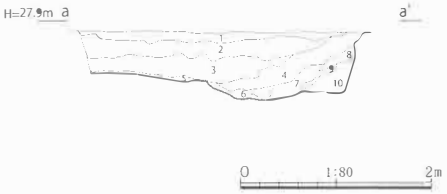


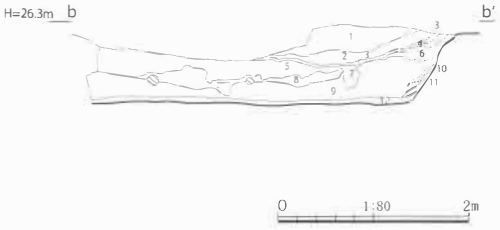
図65　56SD40・56SX16平面図

①



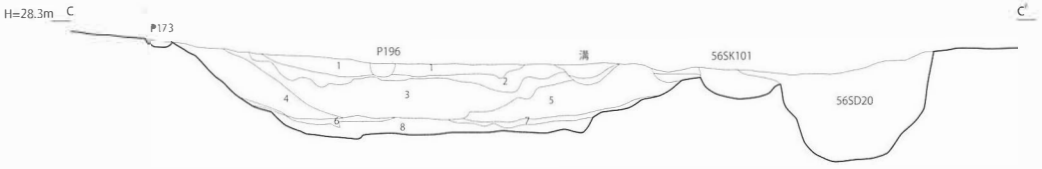
56SD40①
1　2.5Y6/6明黄褐色土　地山ブロック多量含む　粘性やや有　締まっている
2　10YR6/6明黄褐色土　地山ブロック主体　その隙間に黒褐色土が微量見られる
　粘性少し弱　締まっている
3　10YR2/1黒色土　地山ブロック（径2～15cm）多量　灰黄褐色土ブロック少量含む
　粘性少し弱　締まっている
4　2.5Y6/1黄灰色土　立ち上がる方は浅黄色を呈する（地山）　粘性やや有
　締まっている
5　7.5GY5/1緑灰色泥　地山ブロック不規則に少量含む　粘性やや有　締りやや有
6　7.5GY5/1緑灰色泥　地山ブロック不規則に少量含む　粘性やや有　締りやや有
7　2.5Y7/2灰黄色土　砂を少量含む　粘性少し弱　締まっている
8　10YR6/8明黄褐色砂質土　鉄分含む　粘性弱　締まっている
9　2.5Y7/2灰黄色粘土質土　黄灰色土ごく微量含む　粘性やや有　締まっている
10　2.5Y7/3～7/4浅黄色砂質土　鉄分含む　粘性少し弱　締まっている
※　1～3は人為堆積、4～7は自然堆積、8～10は壁の崩れ

②

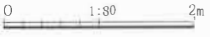


56SD40②
1　10YR7/4にぶい黄橙色砂質土　小河原石を多量に含む　粘性弱
　締まっている（人為）
2　2.5Y6/4にぶい黄色土　黒褐色土が微量含まれる　粘性やや有　締りやや有
3　10YR4/2灰黄褐色土　粘性強　締りやや有（自然）
4　2.5Y7/4浅黄色土　暗褐色土を微量含む　粘性やや有　締まっている
5　2.5Y7/4にぶい黄色土　黒褐色土を微量に含む　粘性有　締りやや有（人為）
6　10YR5/2灰黄褐色土　地山ブロックが少量混じる　粘性やや有　締りやや有
7　10YR6/3にぶい黄橙色砂質土　粘性弱　締り弱
8　5GY6/1オリーブ灰色砂　木材や種子などを含む　粘性弱い　締りやや有
9　2.5Y7/4浅黄色土　水酸化鉄斑有　粘性やや有　締まっている（壁の崩れかけか）
10　10YR5/2灰黄褐色土　粘性やや有　締りやや有（自然）
11　10YR5/2灰黄褐色土　粘性やや有　締りやや有（自然）
12　10YR3/1黒褐色土　木材や種子含む　粘性有　締り弱（自然）
※　1～2層は内堀を埋める
　5層は人為的に埋める（排土の処理なのか）
　8層は埋まりきらないこの時点で木材などが堆積した
　9～11層は埋まっていく段階

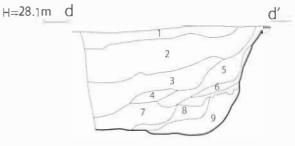
③



56SD40③
P196　10YR5/2灰黄褐　粘土質　堅く締まる　炭化物少量　黄褐色粘土微量
1　10YR7/4にぶい黄橙色粘土と10YR5/2灰黄褐色土の混合（灰黄褐色主体）　下面に炭化物少量
2　10YR6/3にぶい黄橙色粘土主体　10YR5/2灰黄褐色土　少量まだらに含む
3　10YR7/4にぶい黄橙色粘土と10YR5/2灰黄褐色土の混合　2種類ほぼ同量　まだら状
4　10YR7/4にぶい黄橙色粘土　堅く締り均衡だが灰黄褐色土を微量
5　10YR7/4にぶい黄橙色粘土　堅く締り均衡だが灰黄褐色土を微量
6　10YR6/2灰黄褐色粘土　砂粒を少量含む　水成堆積か
7　10YR6/2灰黄褐色粘土　砂粒を少量含む　水成堆積か
8　10YR7/4にぶい黄橙色粘土　堅く締り均衡だが灰黄褐色土を微量　下面に10YR6/2灰黄褐色粘土（3cm程）
※　1～3一括の人為堆積

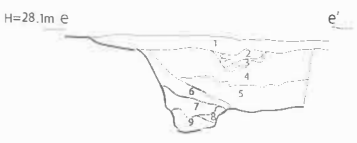


④



56SX16●
1　10YR5/4にぶい黄褐色土　地山ブロックごく微量含む　粘性やや有　締まっている
2　10YR2/2黒褐色土　地山ブロック極小～大粒を多量に含む　粘性やや有　締まっている
3　2.5Y3/1黒褐色土　地山ブロック大粒を大量に含む　粘性有　締まっている　鉄分有
4　2.5Y7/4浅黄色粘土　地山　黒褐色土ごく微量含む　粘性有　締まっている　鉄分有
5　2.5Y7/3浅黄色粘土　灰黄色土との混土　鉄分有　粘性有　締りやや有
6　2.5Y6/2灰黄色土　黒褐色土微量含む　粘性やや有　締りやや有
7　10YR2/1黒色泥　部分的に灰黄色を呈する　浅黄色地山土含む
　3～4層との境には樹皮が沈殿している　粘性やや有　締りやや有
8　2.5Y7/3浅黄色土　灰黄色土少量含む　粘性やや有　締まっている　鉄分含む
9　2.5Y8/4淡黄色粘土質土　鉄分含む　粘性有　締まっている

⑤



56SX16⑤
1　10YR6/3にぶい黄橙色粘土質　堅く締る　径3mmほどの炭化物少量
　かわらけ少量
2　10YR4/3にぶい黄橙色粘土質　堅く締る　10～20cm大の円礫を含む
　炭化物・かわらけ少量（内堀埋土中の別の遺構？）
3　10YR3/3暗褐色粘土質　堅く締る　炭化物・かわらけ片やや多く含む
　（内堀埋土中の別の遺構？）
4　10YR6/4にぶい黄橙色粘土　堅く締る　暗褐色土含む（下半にやや多い）
5　10YR6/3にぶい黄橙色粘土　緻く締る　暗褐色土含む　灰色の砂質土塊少量
6　10YR6/2灰黄褐色粘土質　堅く締る　10YR4/2灰黄褐色土含む
7　2.5Y7/3浅黄色粘土　締り有　炭化物微量　均質な土
8　10YR6/3にぶい黄橙色粘土質　締り有　灰黄褐色土塊少量
　にぶい黄色の砂質土含む
9　2.5Y6/4にぶい黄色粘土　堅く締る　炭化物ごく微量含む　均質な土
※1～9人為堆積

図66　56SD40・56SX16断面図

中でも、近世の建物跡等を除いて最終末の時期の遺構と把握できる。あわせて自然堆積による埋没であることや出土遺物の摩滅が顕著であること、遺跡機能時の他の遺構との関連性が想定できないことなどの特徴からは、遺跡廃絶に前後した時期を含むそれ以降の溝か流路等の可能性が高いと思われる。土器類が多く出土しているものの、摩滅が著しいこともその想定と整合する。

関連遺構　56SX16土橋　62－52付近で56SD40が幅1.5～2.8m程にわたって掘り残されている。この部分は堤状に残り、堀の走向と直交することからも堀を通過する土橋として掘り残されたと判断した。長さは堀の幅に対応しており６ｍで、幅２～３ｍ程の規模をもつ。遺構上面では関連する遺構などは確認されておらず、顕著な地業痕跡は確認されていない。56SD40に直交して掘り残され、軸方向はN－40°－Wである。なお、周囲から関連する遺構は検出されていない。

（２）掘立柱建物跡・竪穴遺構

①掘立柱建物跡

遺跡堀内部地区からは、143棟の建物跡が確認されている。そのうち12世紀代とみられるものは99棟である（表９）。このほか、12世紀代以降の主に近世とみられる建物跡が44棟ある（表10）。以下では50次調査以降に検出及び再調査が行われた、12世紀代の遺構について記す。また、50次以降の調査に際して再検討し、建物と認定した遺構についても記載した。なお、柳之御所遺跡の遺構名称は例言のとおり調査次数を付したものとなっているが、１・２次総括では新規に把握した建物に「HSB」の略称を付した。ここでは度重なる変更による混乱を避けるため、HSBとした遺構が多く認識された遺跡の南側の遺構については、そのまま「HSB」とした呼称を踏襲する。それ以外については例言の記載のとおりである。例えば50次調査で検出された建物については「50SB□」と記す。

表中の構造は、無庇・片庇・二面庇・三面庇・四面庇・総柱の種別で記す。また、表中の間数の記載は庇部分を含む。軸方向は南北を基準軸に、東西方向への傾きをN－□°－E等と記す。表中の重複関係のうち、土坑との重複等、本文では記していないものもある。なお、柱穴から出土したかわらけの重量の計測データは以前に報告している（岩手県教委2008）。また、柱穴埋土の断面記録等は重要と考えられた遺構を除いて残されていないものも多い。なお、各遺構の図版は、平面図は1/300、模式図は1/600を基本に作成している。また模式図中の「○」は柱穴、「◉」は柱痕跡等がある柱穴、「×」は削平等により失われたとみられる柱穴位置を示す。

図示した出土遺物は柱穴出土資料のうち器形を復元できたものに限られる。文中の記載で「多く」と記した場合は概ね1,000g以上出土しているが、破片資料のため復元図示できていない場合を多く含む。また「少量」と記した場合は概ね100g以下の出土にとどまる。

表９　12世紀代の掘立柱建物跡

遺構名	位置	構造		軸方向	遺構重複関係	備考
23SB1	83－75	無庇	5×2・7×1	N－3°－E	23SB1→23SB6。	
23SB2	87－75	無庇	7×2	N－3°－E	23SA3と空間重複。	(48SB2)
23SB3	87－80	総柱	5×2	N－4°－E	23SB7、23SA3、23SK81と空間重複。	23SA5から変更
23SB4	89－81	片庇	7×3	N－9°－E	23SA1と重複するが、新旧不明。23SB7と空間重複。	
23SB5	90－84	片庇	5×2	N－9°－E	23SK65→23SB5。 23SB8、23SB9、23SK56、23SK64と空間重複。	
23SB6	86－78	無庇	4×2	N－23°－E	23SB1→23SB6。 23SK87、23SK89と空間重複。	片庇か
23SB7	89－81	無庇	6×3	N－18°－E	23SB3、23SB4、23SA1と空間重複。	

遺構名	位置	構造		軸方向	遺構重複関係	備考
23SB8	92－83	片庇	7×3	N－11°－E	23SB8→23SB9、23SK66。 23SB5、23SK68と空間重複。	
23SB9	91－83	片／二面庇	3×2	N－12°－E	23SB8→23SB9。 23SB5、23SK66と空間重複。	
23SB10	85－85	二面庇	(4) ×3	N－2°－E		23SA7から変更
28SB1	79－68	四面庇	5×4	N－2°－E	28SB6、28SX1、28SA1→28SB1→28SE2、28SE1。 28SB2、28SK30、55柱列1、55柱列2と空間重複。	28SE1と逆の可能性
28SB2	77－69	四面庇	5×4	N－2°－E	28SB2→28SE2、28SE6。 28SB1・3・6、28SE7・8・9、28SK11、55柱列2とは空間重複。	28SE2・6と逆の可能性
28SB3	80－71	四面庇	(4) ×4	N－3°－E	28SB3→28SE9、28SK11、28SK13、28SK33、28SK34。 28SB2、28SK15、28SE8、28SE10と空間重複。	28SE9と逆の可能性
28SB4	83－67	四面庇	9×4	N－2°－E	28SB8→28SB4→28SE11、28SK14、50SB4。	
28SB5	75－68	無庇	5×2	N－1°－W	28SA1、55柱列1、28SE4、28SK4と空間重複。	
28SB6	79－67	無庇	3×2	N－7°－E	28SB6→28SB1、55SX2。 28SB2、28SE1、55SB25、55柱列1、55柱列2と空間重複。	四面庇の可能性も
28SB8	83－70	無庇	5×2	N－3°－E	28SB8→28SB4。	
31SB1	77－84	無庇	3×2	N－42°－E		
31SB2	80－86	無庇	1×1	N－38°－E		
31SB3	69－74	片／無庇	3×1 (2)	N－6°－W	31SB4、31SE3、31SK57、31SK59と空間重複。	
31SB4	70－73	無庇	4×1	N－23°－E	31SE4、31SE5→31SB4→31SE3、65SD10。 31SB3、31SK58と空間重複。	
31SB5	71－70	総柱	5×2	N－23°－E	65SA2と重複。	
31SB6	72－68	無庇	5×2	N－0°－E	31SK76→31SB6→28SA1。 52SB26と空間重複。	
31SB7	75－66	二面庇	6×2	N－0°－E	55SB20、55SB23、36SA2、31SK81と空間重複。	
31SB8	65－74	総柱	2×2	N－1°－E		
41SB1	64－72	二面庇	4×3	N－2°－E		
41SB2	66－70	無庇	3×2	N－34°－E	41SE1と空間重複。	
41SB3	61－64	無庇	3×1	N－10°－E		
48SB1	88－73	総柱	12×2	N－35°－E	49SE1、68SK21、68SK24、68SK25、68SK28、68SK29と空間重複。	
50SB3	86－64	二面庇	5×4	N－10°－E	50SB6AB、50SA2→50SB3。50SB5と空間重複。	
50SB4	84－65	総柱	8×7	N－11°－E	28SB4→50SB4。	HSB11
50SB5	87－62	四面庇	5×4	N－20°－E	50SB3、50SB6AB、50SB7、50SB22、50SA2、50SA1、50SB20と空間重複。	
50SB6A	87－61	四面庇	7×4	N－18°－E	50SB6A→50SA1、50SB6B→50SB6A→50SB3。 50SB5と空間重複。	HSB9
50SB6B	87－61	無庇	7×4	N－18°－E	50SB6B→50SB6A→50SB3。 50SA1、50SB5、50SB7と空間重複。	
50SB7	89－62	片庇	3×3	N－17°－E	50SB10→50SB7。 50SB5、50SB6B、50SB8、50SA2、50SB22、50SB20、50SB23、50SB26と空間重複。	
50SB8	89－64	無庇	5×1	N－16°－E	50SB23→50SB8→50SA1。 50SB7、50SB10、50SB20、50SB22と空間重複。	
50SB9	94－67	四面庇	6×4	N－20°－E	50SB19、50SB24、50SB25、68SK4、68SK5、68SK6、68SK7、68SK9と空間重複。	
50SB10	89－63	片庇	3×3	N－16°－E	50SB10→50SB7。 50SB8、50SB20、50SB23、50SB27と空間重複。	HSB2

遺構名	位置	構造		軸方向	遺構重複関係	備考
50SB16	89－66	無庇	3×1	N－13°－E	50SB17、50SB28と空間重複。 50SA2、50SA7と空間重複。	
50SB17	90－65	無庇	2×1	N－12°－E	50SA2、50SB16、50SB28と空間重複。	
50SB18	93－64	無庇	3×1	N－12°－E		
50SB19	95－66	無庇	5×4	N－20°－E	50SB9、50SB24、50SB25と空間重複。	
50SB20	89－63	総柱	4×2	N－18°－E	50SB7、50SB8、50SB10、50SB23と空間重複。	時期不明
50SB21	91－62	無庇	4×1	N－8°－E	50SB23、50SB26と空間重複。	時期不明
50SB22	89－62	無庇	4×1	N－20°－E	50SB22→50SA1、50SB5、50SB7、50SB8、50SB23と空間重複。	時期不明
50SB23	90－62	無庇	4×2	N－24°－E	50SB23→50SB8。 50SB7、50SB10、50SB20、50SB21、50SB22、50SB26と空間重複。	時期不明
50SB24	94－67	総柱	4×2	N－17°－E	50SB9、50SB19、50SB25と空間重複。	時期不明
50SB25	94－68	無庇	4×1	N－8°－E	50SB9、50SB19、50SB24と空間重複。	時期不明
50SB26	90－62	無庇	4×2	N－8°－W	50SB7、50SB21、50SB23と空間重複。	時期不明
50SB27	90－65	無庇	2×1	N－13°－E	50SB10と空間重複。	時期不明
50SB28	89－66	無庇	2×1	N－9°－E	50SA2、50SB16、50SB17と空間重複。	時期不明
52SB14	73－62	無庇	4×2	N－24°－E	52SB14→52SK13。 36SK23と空間重複。	
52SB18	70－63	三面庇	5×3	N－5°－E	52SB18→52SK14。	
52SB19	64－56	無庇	5×2	N－17°－E		
52SB21	70－65	無庇	4×1	N－12°－E	52SA1、52SK28、52SK30と空間重複。	
52SB25	73－59	四面庇	5×4・7×2	N－10°－E	52SE7、52SD30（52SC1）→52SB25→52SK21。 52SK37、55SK15と空間重複。	
52SB26	73－67	二面庇	4×3	N－1°－E	31SB6と空間重複。	31SA3から変更
52SB27	69－56	無庇	3（4）×2	N－9°－E	56SE2と空間重複。	
55SB5	78－52	二面庇	7×4	N－6°－E	55SK42→55SB5→55SB6。 55SB17、55SK40、55SK42と空間重複。	
55SB6	76－52	総柱	6×6	N－8°－E	55SB5→55SB6。 55SK33、55SK34、55SK37と空間重複。	
55SB8	82－58	三面庇	6×3	N－4°－E	55SB8→55SK60。	
55SB9	82－57	二面庇	4×3	N－9°－E		HSB3
55SB10	84－57	片庇	4（5）×2	N－10°－E		
55SB11	82－54	片庇	5×3	N－15°－E	55SB12、55SB13、55SB14と空間重複。	HSB6
55SB12	82－54	四面庇	6×4	N－14°－E	55SB11、55SB13、55SB14、55SK49、55SK54、55SK56と空間重複。	HSB7
55SB13	83－54	無庇	4×1	N－13°－E	55SB13→55SB14。 55SB11、55SB12と空間重複。	HSB1
55SB14	83－54	無庇	3×1	N－20°－E	55SB13→55SB14。 55SB11、55SB12と空間重複。	HSB10
55SB16	79－57	無庇	3×1	N－13°－E		
55SB17	79－54	無庇	3×1	N－7°－E	55SB17→55SK63。 55SB5と空間重複。	
55SB18	75－55	二面庇	4×3	N－8°－E	55SB18→55SK38。	
55SB19	76－63	無庇	9×2	N－8°－E	36SA2→55SB19。 55SB29と空間重複。	
55SB20	77－66	無庇	5×2	N－12°－E	55SB20→28SA1。31SB7、55柱列1と空間重複。	
55SB21	79—65	無庇	3×1（2）	N－12°－E	55SA1→55SB21。	
55SB23	75－65	無庇	4×1	N－20°－E	31SB7、36SA3、36SA4、31SK83、31SK84と空間重複。	
55SB24	77－62	無庇	3×3	N－6°－E	55SB27、55SB29と空間重複。	
55SB25	80－67	無庇	3×1	N－1°－E	55SB25→55SX2。 28SB6と空間重複。	
55SB27	76－62	無庇	3×1	N－4°－E	55SB24と空間重複。	
55SB29	77－63	無庇	4×1	N—7°－E	55SB19、55SB24と空間重複。	
56SB1	59－52	無／三面庇	3（4）×2（3）	N－7°－E	56SB2→56SB1。	11次2号建物

遺構名	位置	構造		軸方向	遺構重複関係	備考
56SB2	59－51	無／四面庇	3（5）×2（4）	N－19°－E	56SB2→56SB1。	11次1号建物
56SB3	57－51	無庇	4×3	N－2°－W	56SB5、56SK99と空間重複。	
56SB4	57－49	無庇	5×2	N－3°－E	56SK93、56SK94、56SK95、56SK96と空間重複。	
56SB5	57－53	無庇	3×1	N－2°－W	56SB3と空間重複。	
72SB1	60－41	二面庇	4×3	N－17°－E	72SA1、72SA2、72SK6と空間重複。	
HSB13	88－98	無庇	2×1	N－23°－E	HSB13→HSB14。 HSB15と空間重複。	
HSB14	88－98	無庇	3×1	N－24°－E	HSB13→HSB14。 HSB15と空間重複。	
HSB15	88－98	無庇	4×1	N－17°－E	HSB13、HSB14と空間重複。	
HSB16	88－98	無庇	2×2	N－25°－E		
HSB17	87－98	無庇	3×1	N－2°－E		
HSB18	89－100	無／片庇	3（2）×2	N－6°－E	HSB23と空間重複。	
HSB19	90－100	片庇	4×2	N－1°－W	HSB23と空間重複。	
HSB20	87－96	無庇	2×1（2）	N－3°－E		21SB1
HSB21	89－96	片庇	2×2	N－1°－E		21SB1
HSB22	86－100	無庇	3×1	N－1°－E		
HSB23	89－100	無庇	3×1	N－0°－E	HSB18、HSB19と空間重複。	
HSB24	86－93	無庇	2×1	N－20°－E		
HSB25	85－94	無庇	2×2	N－18°－E		
13次1号	69－82	無庇	3×1	N－35°－E		4B－1建物
13次2号	69－82	無庇	2×2			5B－2建物

表10　12世紀以降の掘立柱建物跡（欠番を含む）

遺構名	位置	備考
28SB5	－	23SB2に変更。
52SB13	72－62	16世紀～17世紀か
28SB7	－	柱穴が不足のため、欠番
52SB15	70－61	16世紀中葉
28SB9	－	23SB1と同一のため、欠番
52SB16	71－62	16世紀末～17世紀初頭
50SB1	87－62	17世紀末～19世紀初頭
52SB17	71－62	19世紀代か
50SB2	94－68	17世紀末～19世紀初頭
52SB20	67－60	16世紀～17世紀か
50SB11	94－64	17世紀末～19世紀初頭
52SB22	70－64	16世紀～17世紀
50SB12	94－64	17世紀末～19世紀初頭
52SB23	71－65	16世紀～17世紀
50SB13	94－64	17世紀末～19世紀初頭
52SB24	73－66	16世紀～17世紀、31SA2
50SB14	85－69	17世紀末～19世紀初頭
55SB1	74－64	17世紀中葉、31SA1
50SB15	85－69	17世紀末～19世紀初頭
55SB2	73－64	17世紀中葉
52SB1	70－61	17世紀前半
55SB3	73－64	近世か

遺構名	位置	備考
52SB2	71－62	16世紀後半
55SB4	81－65	中世末～近世初頭
52SB3	58－56	17世紀前半～中葉
55SB7	79－64	近世か
52SB4	60－57	17世紀前半～中葉
55SB15	83－57	不明
52SB5	58－56	16世紀末～17世紀初頭
55SB22	74－67	不明
52SB6	60－57	16世紀末～17世紀初頭
55SB26	80－65	中世末～近世初頭
52SB7	58－57	16世紀後半
55SB28	75－64	近世か
52SB8	59－57	16世紀後半
55SB30	72－64	近世か
52SB9	58－57	16世紀前半
55SB31	73－64	不明
52SB10	60－57	16世紀前半
56SB6	61－52	近世
52SB11	65－59	17世紀前半
56SB7	61－51	近世
52SB12	66－59	16世紀末～17世紀前半
56SB8	60－53	近世

23SB1　83－75付近に位置する、５×２間の東西棟に７×１間の南北棟が付く、無庇の掘立柱建物である（図版編図39・40・47・48・73、図67）。14次調査で一部が、その後の23・28次調査で大部分が検出され、23SB1、28SB9の2棟として理解されていた（岩手埋文1995）。59・64次調査で周囲を含めて再調査している。南北棟は１間分が西に折れており、さらに西に延びると判断できる。１間分のみの確認とどまりその延長は削平のため不明だが、さらに延長するとみられる。西側に直線的に延長した場合、平面的な位置関係からは28SB3に接続するとの推測ができるが確定できない。建物の軸方向はＮ－3°－Ｅである。23個の柱穴を検出している。東西棟の柱間寸法は桁行が251（8.3尺）cm、梁行も251（8.3尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行12.6m、梁行５ｍで、平面積は63㎡である。南北棟の柱間寸法は桁行が251（8.3尺）cm、梁行が251（8.3尺）cmの等間に復元できるが、削平された１間分のみ212（７尺）cmの柱間寸法をとるとみられる。現状での全長は桁行19.7ｍ、梁行は５ｍで、平面積は98.5㎡である。柱穴は掘方径40～60cm程の円形で、検出面からの深さは30～60cm程である。59次調査では径70cm程で検出しており、23・28次調査以降の崩落等により拡大したとみられる。９個の柱穴で礎板もしくは柱材を確認している。特に、東西棟の柱穴では８個の柱穴で礎板が確認されており、礎板が多用される。74－84PP1では断面で柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は20cm程である。それ以外の柱穴では柱痕跡は確認できず、抜き取りが行われたとみられる。抜き取り埋土はかわらけ片や粘土ブロックを含む土層で埋め戻されている。14次調査等による東西棟の北側、東から２個目の柱穴の切り合いから、23SB1→23SB6の新旧関係が想定できるものの不確かな部分が残る。
遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。ここではそのうち５点の資料を図示した。柱穴堆積土内での出土位置及び土層の性格は不明である。図示した資料はロクロかわらけ大皿のみだが、破片資料ではロクロかわらけ小皿や手づくねかわらけを含む。ロクロかわらけ大皿は口径13.4～13.8cm、底径7.0～7.2cm、器高2.6～3.5cm程である。

23SB2（48SB2）　87－75付近に位置する、７×２間で無庇の南北棟掘立柱建物である（図版編図47・70、図68）。23・28次調査で南側の柱穴を検出し、48次調査で全形を確認した。23・28次調査では一部の検出にとどまり、23SA3との位置関係や対になる柱穴から門との見方も指摘されていた（岩手埋文1995）。しかし、その後の調査で建物の全形が把握できたことで、門を想定した柱穴も含めて建物と認識できたため根拠は変更されている。建物の軸方向はＮ－3°－Ｅである。16個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が215（7.1尺）cm、梁行が303（10尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行15.1m、梁行6.1ｍで、平面積は92.11㎡である。柱穴は掘方が径55～70cm程の円形で、検出面からの深さは30～50cm程である。11個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定される柱径は25cm程である。掘方埋土は粘土ブロックを含む土層で、この土層にかわらけを含む柱穴もある。23SA3と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。建物の東側柱筋は削平のため柱穴の残存状況が良くない。
遺物　柱穴の柱痕跡及び掘方埋土から手づくね及びロクロのかわらけが少量出土している。

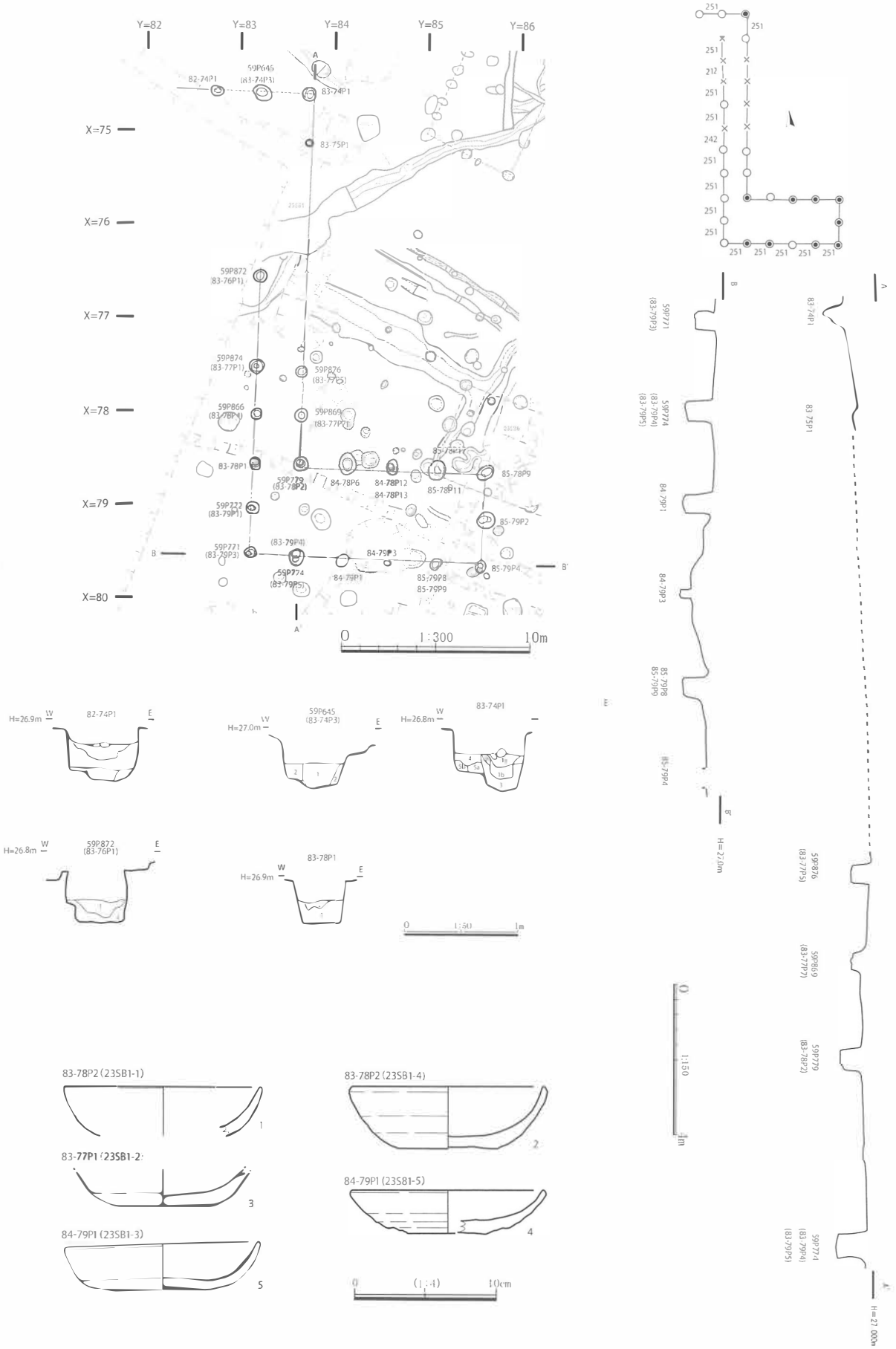


図67　23SB1詳細図

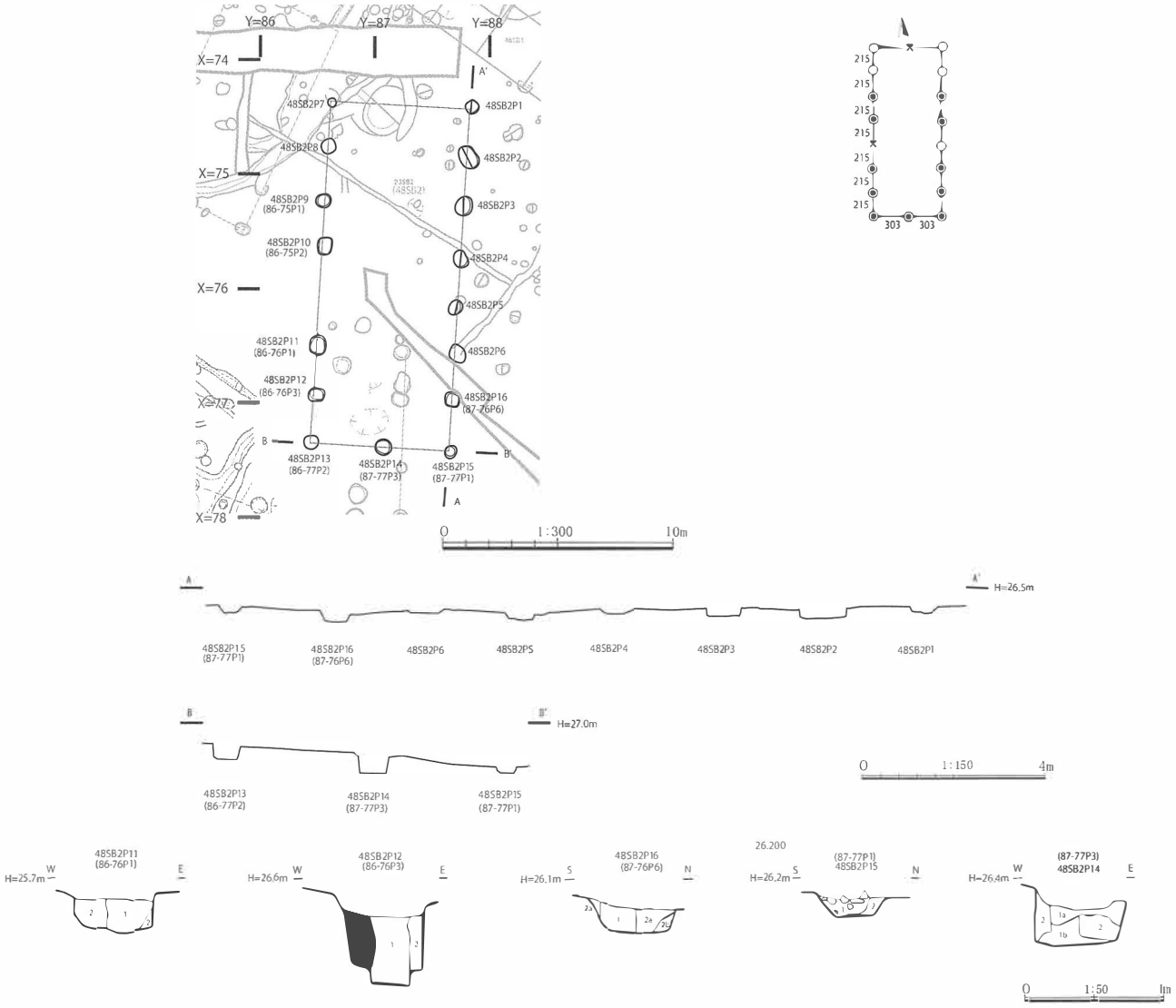


図68　23SB2詳細図

23SB3　87－80付近に位置する、５×２間で総柱の東西棟掘立柱建物である（図版編図47・48・70、図69）。14次調査で一部が検出され、23次調査で全形が検出された。23SA5とされていた遺構を含む。建物の軸方向はN－4°－Eである。17個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北側柱列で西から212・242・242・242・242cm、南側柱列で212（７尺）cmの等間に、梁行が212（７尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行11.8m、梁行4.2mで、平面積は49.56㎡である。桁行方向の柱間が南北で異なるため、柱筋が斜めにずれるものの、中央の柱穴を合わせた梁方向の柱筋は直線に並ぶ。軸自体は斜めになるものの、直線的な柱筋から柱配置は一定の規則性をもつと判断できよう。柱穴は掘方が径35～55cm程の円形で、深さは10～50cm程である。柱穴の埋土の記録は少ないが、断面図では明確な柱痕跡は確認できず、粘土ブロックなどを含む抜き取りとみられる土層である。23SB7、23SA3と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが出土している。ここでは柱穴から出土した資料３点を図示した。柱抜き取り痕跡からの出土とみられるが、柱穴堆積土内での出土位置は不明である。いずれも手づくねかわらけだが、破片ではロクロかわらけも出土している。やや口径が大きい資料も含むが（図69－２）、口径12.4～13.8cm、器高2.8～3.2cm程である。

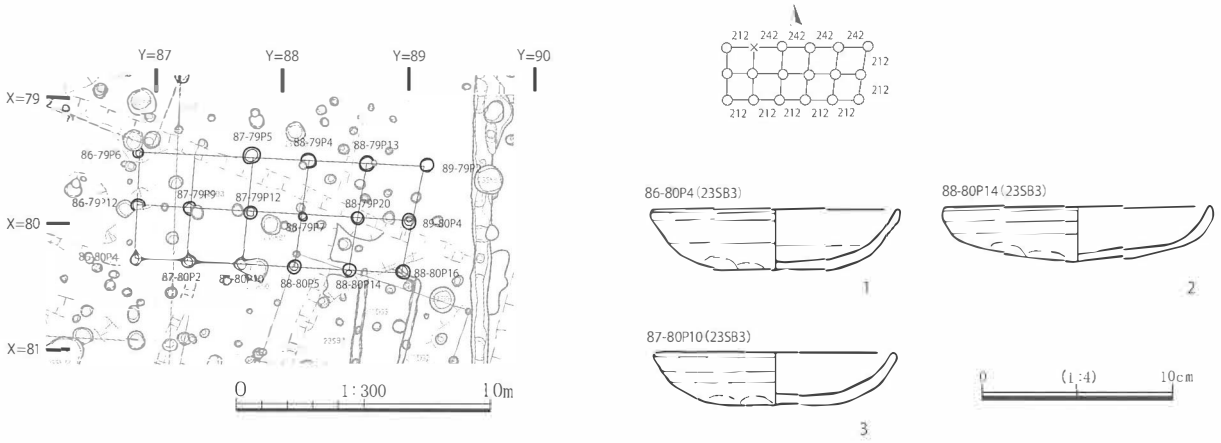


図69　23SB3詳細図

23SB4　89－81付近に位置する、７×３間で片庇の南北棟掘立柱建物である（図版編図48・70、図70）。23次調査で検出された。７×２間の身舎に、西側に１間の庇が付く。身舎の内部にも中央に小型の柱穴が３個あり、一連の建物を構成する遺構の可能性がある。建物の軸方向はN－9°－Eである。23個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（７尺）・242（８尺　）・242・242・242・242・212cm、梁行が西から212・212・242cmに復元できる。全長は桁行16.4m、梁行6.7mで、平面積は109.88㎡である。柱穴は身舎では掘方が径40～60cm程の円形で、検出面からの深さが30～60cmである。庇では掘方径25～30cm程で、検出面からの深さは10～30cm程である。底面で柱痕跡を４個の柱穴で確認しており、想定される柱径は15cm程である。

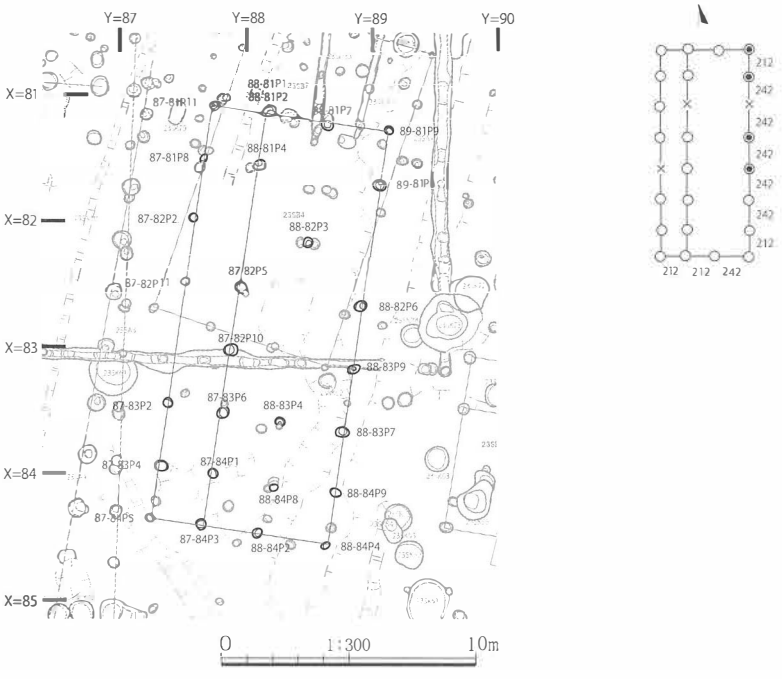


図70　23SB4平面図

柱穴の埋土の記録は少ないが、掘方埋土は緻密な粘土ブロックを含む土層である。身舎内に位置する小型の柱穴は径20～30cm程で、検出面からの深さは15～20cm程である。身舎を構成する２個の柱穴が23SA1と重複するが、過去の調査で完掘され遺構情報が不足しており新旧関係は不明である。また、23SB7と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが少量出土している。

23SB5　90－84付近に位置する、５×２間で片庇の東西棟掘立柱建物である（図版編図48・55・56、図71）。23次調査で検出された。５×１間の身舎に、北側に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－9°－Eである。15個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が242（８尺）cmの等間に、梁行が北から212（７尺）・484（１６尺）cmに復元できる。全長は桁行12.1m、梁行７mで、平面積は84.7㎡である。柱穴は身舎では掘方が径30～50cmの円形で、検出面からの深さは10～40cm程である。庇では径45cm程の円形で、検出面からの深さは40～50cm程である。底面で柱痕跡を８個の柱穴で確認しており、柱径は10～15cm程である。柱穴の埋土の記録は少ないが、掘方埋土は緻密な粘土ブロックを多く含み、黄褐色シルトが混じる。23SB8、23SB9と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。

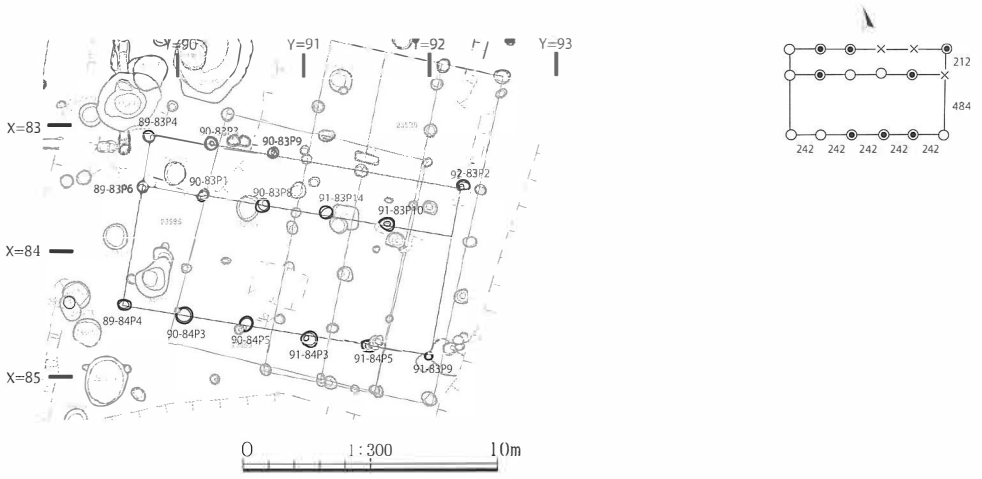
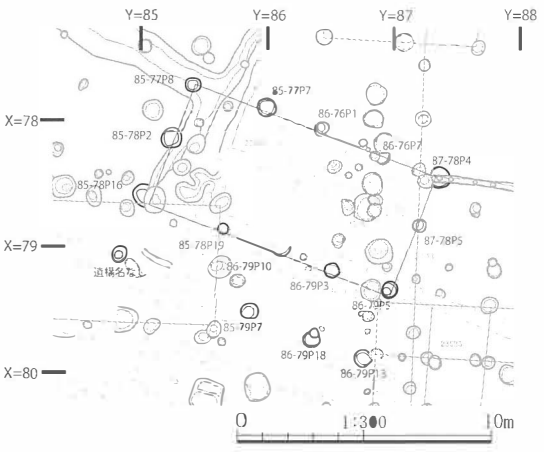


図71　23SB5平面図

23SB6　86－78付近に位置する、４×２間で無庇の東西棟掘立柱建物である（図版編図47・48・70、図72）。14次調査で検出され、23次調査で全形が確認された。南側に１間の庇が付き、片庇の建物になる可能性もある。建物の軸方向はN－23°－Eである。12個の柱穴を検出している。無庇とみた場合、柱間寸法は桁行が西から303（10尺）・242（８尺）・242・242cm、梁行が242（８尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行10.3m、梁行4.9mで、平面積は50.47㎡である。柱穴は掘方が45～60cm程の円形で、検出面からの深さは10～30cmほどである。南側に庇を想定した場合、建物の南側で確認している４個の柱穴が想定される。柱間寸法は桁行が上記と同様に、梁行が291（9.６尺）cmに復元できる。庇を想定した柱穴は掘方径50cm程の円形である。柱穴の切り合いから、23SB1→23SB6の新旧関係が想定できる。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。



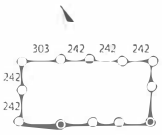
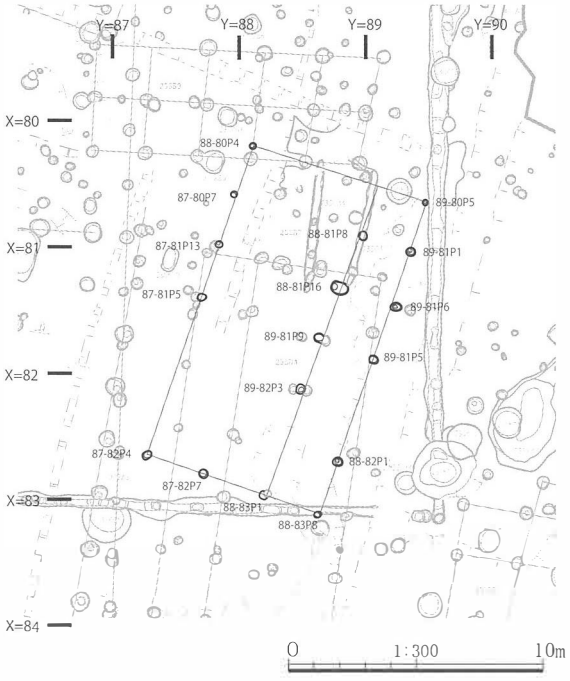


図72　23SB6平面図

23SB7　89－81付近に位置する、６×３間で無庇の南北棟掘立柱建物である（図版編図48・70、 図73）。23次調査で検出された。東の１間は建物の内部にいくつか柱穴が検出されており、これらが一連の建物の可能性もある。その場合は東側の１間は庇になり片庇の構造に復元できるが、確認できていない柱穴も多く梁行が等間に復元できることから、ここでは無庇として記載する。建物の軸方向はN－18°－Eである。17個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が212（７尺）cmの、梁行が242（８尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行12.7m、梁行7.3mで、平面積は92.71㎡である。柱穴は身舎、庇のいずれも掘方が径25～35cm程の円形で、検出面からの深さが20～40cm程である。柱痕跡から想定できる柱径は15cm程である。23SB3、23SB4、23SA1と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。



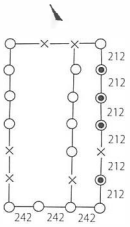
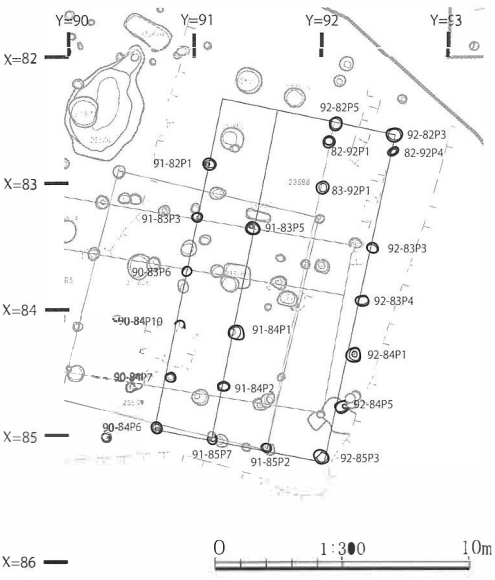


図73　23SB7平面図

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが少量出土している。



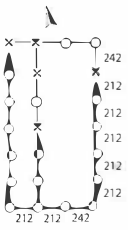


図74　23SB8平面図

23SB8　92－83付近に位置する、７×３間で片庇の南北棟掘立柱建物である（図版編 図55・56、図74)。23次調査で検出された。７×２間の身舎に、西側に１間の庇が付く。身舎北東に柱の延長に位置する柱筋にのる柱穴が２個（82－92P1、83－92P1)、身舎東桁に柱の延長に位置する柱筋にのる柱穴が１個あり（82－92P4)、一連の建物の可能性もある。桁行方向の北側で確認された柱穴２個（82－92P1、82－92P4）は、一連であれば北側に１間庇を構成する想定もできよう。その場合は二面庇を想定することとなる。建物の軸方向はN－11°－Eである。18個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から242（８尺）・212（７尺）・212・212・212・212cm、梁行が西から212・212・242cmに復元できる。全長は桁行13m、梁行6.7mで、平面積は87.1㎡である。柱穴は身舎で掘方が径45～50cm程の円形で、検出面からの深さが15～30cm程である。庇では掘方が径35cm程の円形で、検出面からの深さは20～40cm程である。底面での確認だが、柱痕跡から想定できる柱径は15～20cm程である。抜き取りとみられる埋土には円礫を含み、粘土ブロックやシルトが混じる土層である。図面の検討からは柱穴の切り合いがあり、23SB8→23SB9の新旧関係が確認できる。23SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが出土している。

23SB9　91－83付近に位置する、３×２間で北側のみの片庇もしくは二面庇の東西棟掘立柱建物である（図版編図55・56、図75)。23次調査で検出された。２×１間の身舎に、南北二面に各１間の庇が付く。想定した南側の庇は確認できていない柱穴もあり、北側の庇のみの片庇の構造となる可能性もある。建物の軸方向はN－12°－Eである。８個の柱穴を確認している。柱間寸法は桁行が393（13尺）cmの等間に、梁行が北から181（６尺)・454（15尺)・272（９尺）cmに復元できる。全長は桁行7.9m、梁行9.1mで、平面積は71.89㎡である。柱穴は身舎では掘方が25～35cm程で、検出面からの深さは10～30cm程である。柱痕跡から想定される柱径は10～15cm程である。図面の検討からは柱穴の切り合いがあり、23SB8→23SB9の新旧関係が確認できる。23SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱間寸法などからは、12世紀代より新しい時期の建物の可能性もある。

23SB10　85－85付近に位置する、４×３間で二面庇の南北棟掘立柱建物である（図版編図48、図76)。23次調査で検出された。23SA7としていた遺構を含む。南側の柱穴は失われており、柱穴の残

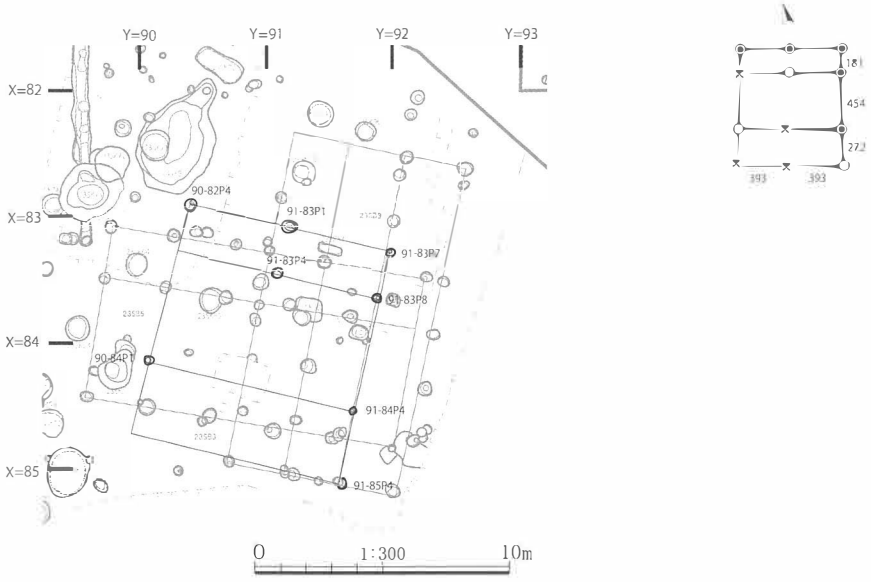


図75　23SB9平面図

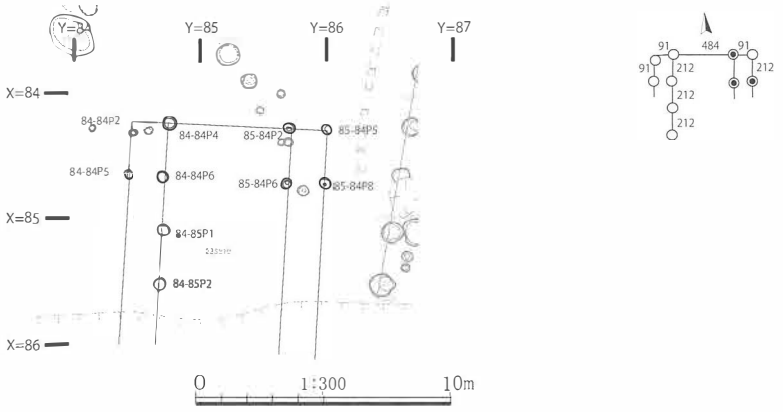
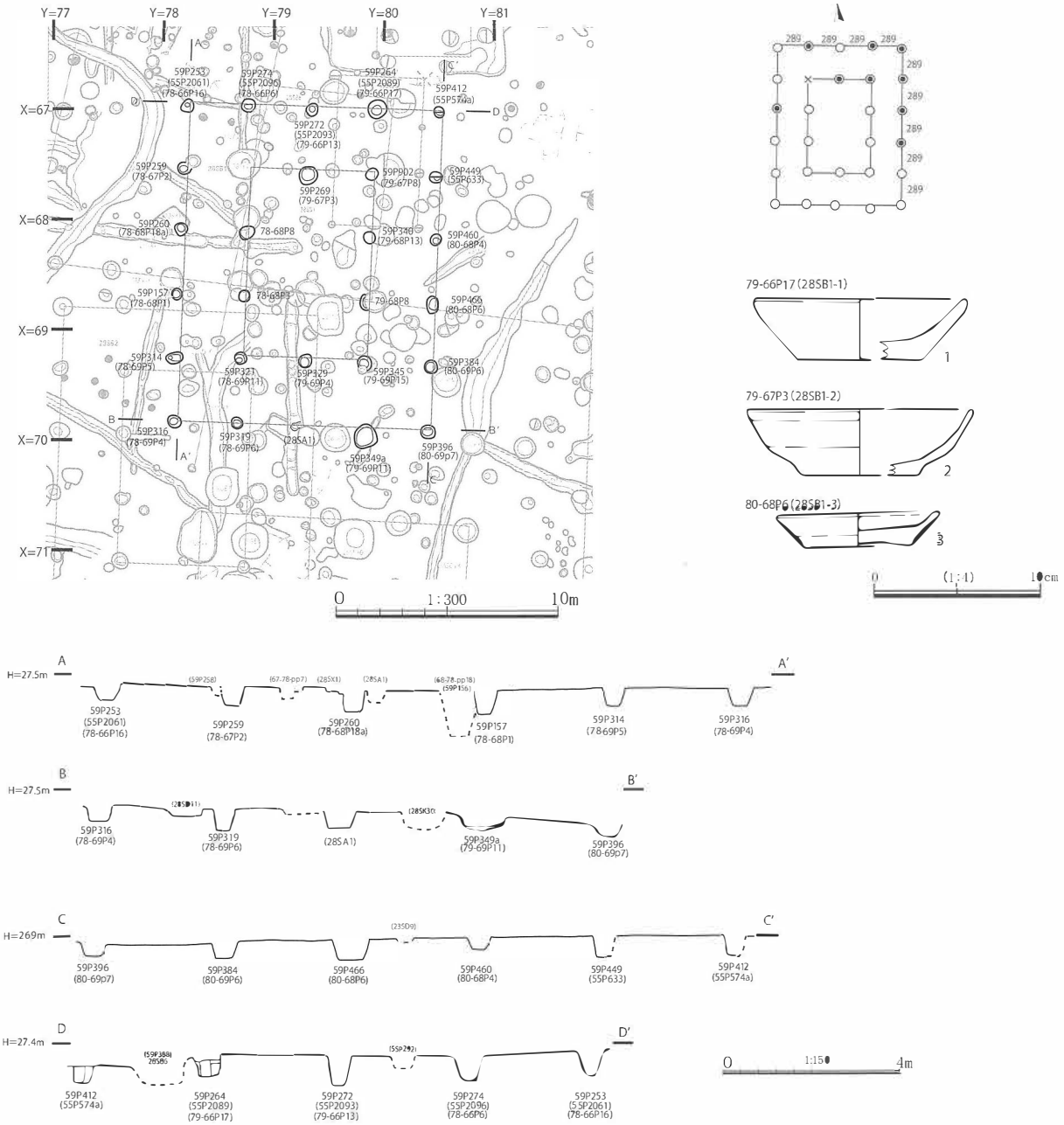


図76　23SB10平面図

りは良くないが、残存部分で４×１間の身舎に、東西二面に各１間の庇が付く。建物の軸方向はN－2°－Eである。10個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が212（７尺）cmの等間に、梁行が西から91（３尺）・484（16尺）・91（３尺）cmに復元できる。残存の全長は桁行6.4m、梁行6.7mで、平面積は42.88㎡である。柱穴は身舎では掘方が30～40cm程の円形で、検出面からの深さは20～40cm程である。庇では径が30～40cm程の円形で、検出面からの深さが15～20cm程である。

28SB1　79－68付近に位置する、５×４間で四面庇の南北棟掘立柱建物である（図版編図38・39・70・71・72、図77）。28次調査で検出された。その後、55次調査で一部を59次調査で全体を再調査している。３×２間の身舎に、四面に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－2°－Eである。26個の柱穴を確認している。柱間寸法は桁行が288（9.5尺）cmの、梁行が288（9.5尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行14.4m、梁行11.5mで、平面積は165.6㎡である。柱穴は身舎では掘方が50cm程の円形で、検出面からの深さは20～60cm程である。庇でも径50cm程で、検出面からの深さが20～60cm程である。７個の柱穴で柱痕跡が確認されていたが、その後の確認では、庇を含め９個の柱穴で柱痕跡を確



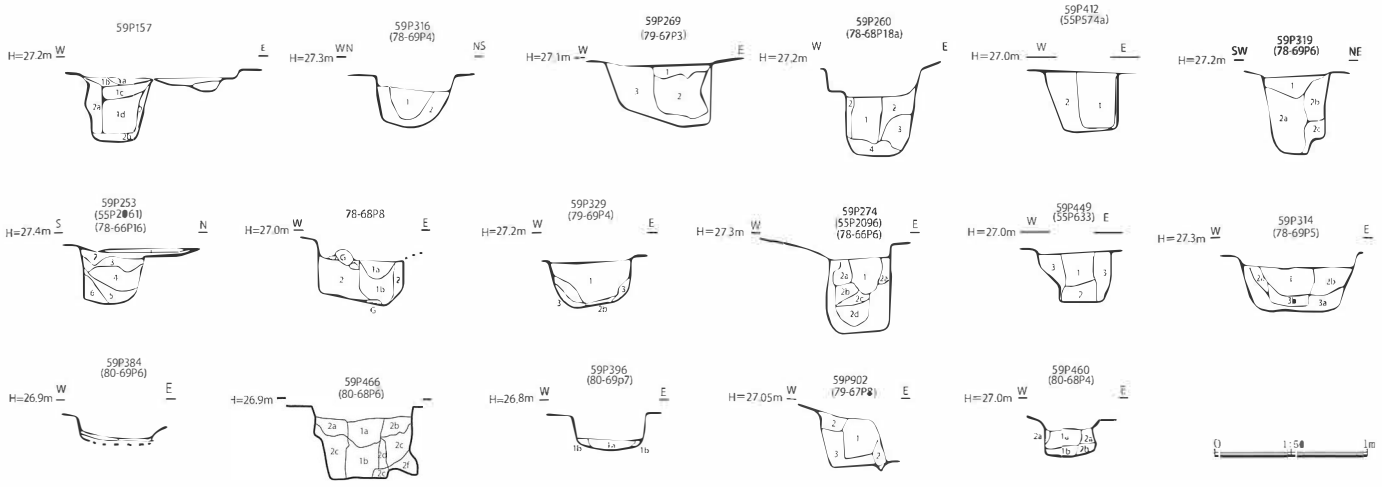


図77　28SB1詳細図

認している。断面等の記録から想定される柱径は20～25cm程である。柱痕跡が確認できる柱穴は炭化物を含む灰黄褐色土などで柱痕跡が、地山土とみられる黄褐色のブロックを含む土層で掘方埋土が確認できる。抜き取りをもつ柱穴は掘方埋土が黄褐色ブロックなどを含む土層で、抜き取り痕跡がかわらけなどを含む黄褐色土ブロックやシルトが混じる土層で埋め戻されている。28SB6、28SX1、28SA1→28SB1→28SE1、28SE2の新旧関係が確認できる。ただし、28SE1との新旧は断面図等の記載の検討から、78－67PP13が28SB1を構成する柱穴であれば逆転する（28SE1→28SB1）可能性がある（柳之御所調査事務所2005）。28SB2、28SK30、55柱列１、55柱列２と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。なお図版編において59P274の着色がうすくなっているが、本文編の着色が正である。ここで訂正する。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが出土している。ここでは柱穴から出土した資料３点を図示した。３は柱痕跡内からの出土である。図示した資料はロクロかわらけのみだが、破片資料では手づくねを含む。ロクロかわらけ大皿は口径が12～13cm前後、底径７cm前後、器高４cm前後である。ロクロかわらけ小皿は口径9.5cm、底径6.6cm、器高2.0cm程である。

28SB2　77－69付近に位置する、５×４間で四面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図38・39・70・71・72、図78）。28次調査で検出された。その後、59次調査で全体を再調査している。３×２間の身舎に、四面に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－2°－Eである。25個の柱穴を確認している。柱間寸法は、桁行が288（9.5尺）cmの、梁行が288（9.5尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行14.4m、梁行11.51mである。平面積は165.6㎡である。柱穴は身舎では掘方が径45～60cm程で、検出面からの深さが30cm程である。庇では径40～60cm程で、検出面からの深さは30～60cm程である。身舎と庇では柱穴の規模に大きな違いはない。柱痕跡は残存せず、抜き取り痕が観察される柱穴が多い。掘方埋土とみられる土層が確認できる柱穴には、かわらけや円礫が混じるものもある。抜き取り痕跡はかわらけ片や砂混じりのシルトで確認される。28SB2→28SE2、28SE6の新旧関係が確認できる。ただし、28SE2、28SE6との新旧は、断面図等の検討から、逆転する（28SE2→28SB2、28SE6→28SB2）可能性も残る（柳之御所調査事務所2005）。28SB1、28SB3、28SB6、28SE7、28SE8、28SE9、28SK11、55柱列2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが出土している。ここでは柱穴から出土した資料２点を図示した。いずれも柱穴堆積土内での位置及び出土土層の性格は不明である。

28SB3　80－71付近に位置する、現状で把握できる規模は4×4間だが、南側の庇が削平のため失われており、本来は5×4間の四面庇とみられる南北棟掘立柱建物跡である（図版編図39・70・71・72、図79）。28次調査で検出された。その後、59次調査で全体を再調査している。南側の１間分が削平のため失われているが、身舎が３×２間で、四面に１間の庇が付くと想定できる。建物の軸方向はN－3°－Eである。16個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が312（10.3尺）cmの等間に、梁行は西から276（9.1尺）・312・312・312cmに復元できる。全長は桁行が12.5m、梁行12.1mである。南側の庇を想定した場合は桁行15.6mになり、平面積は188.76㎡になる。柱穴は身舎では掘方が径75～110cm程の円形で、検出面からの深さは100cm程である。庇では掘方が径70～100cm程の円形で、検出面からの深さは40～80cm程である。掘方の平面規模は身舎と庇で大きな違いはないが、身舎の柱穴でやや深さがある。柱痕跡は確認されておらず、抜き取りとみられる柱穴が多い。柱穴の下部に柱痕跡とみられる土層が確認できるものでは、柱径15～20cmに想定できる。柱痕跡とみられる土層は黒色シルト

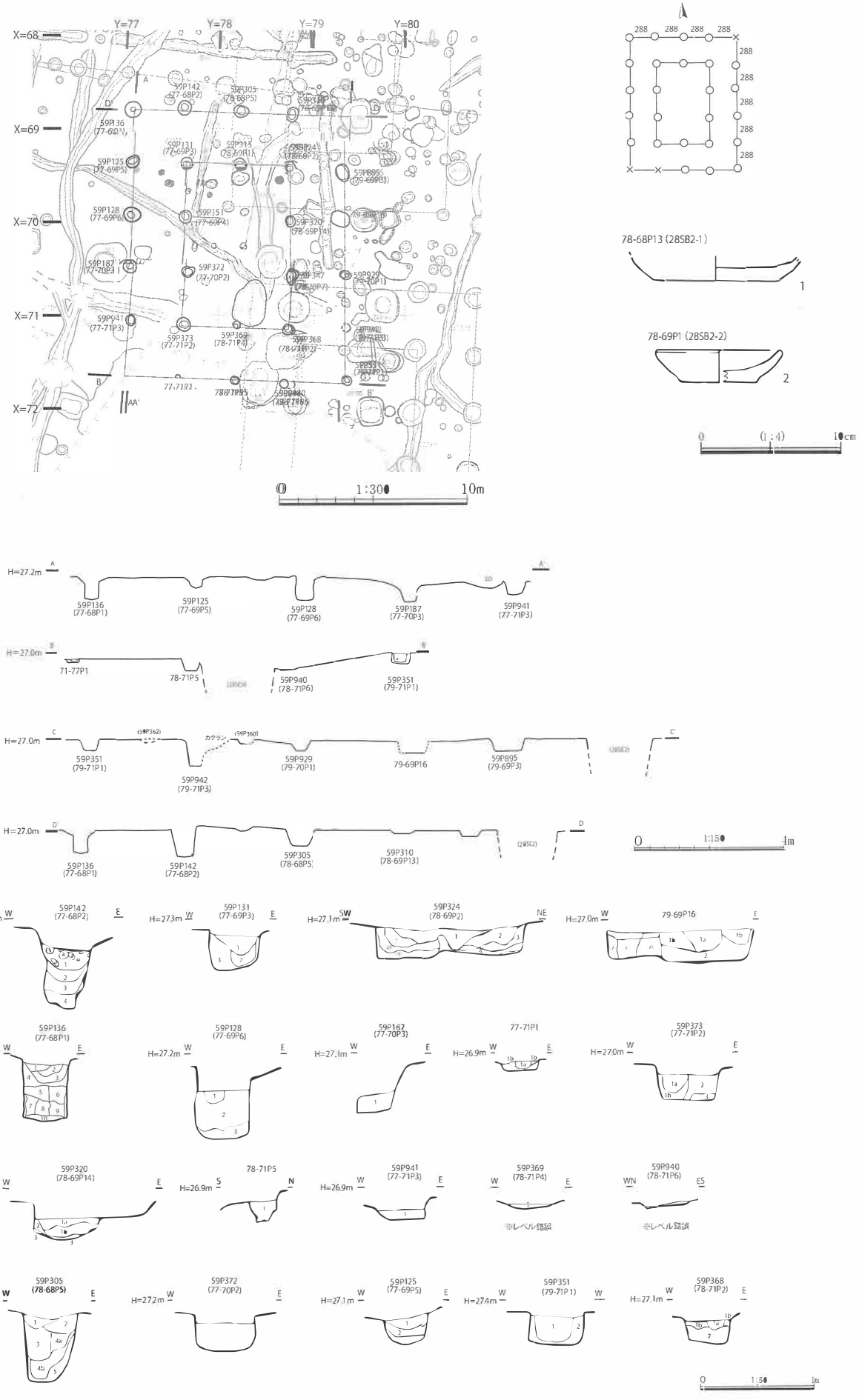
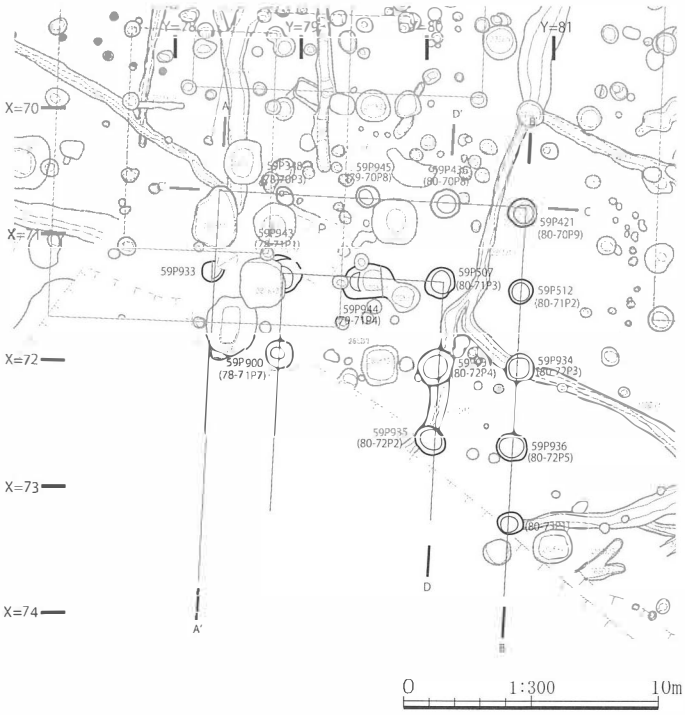
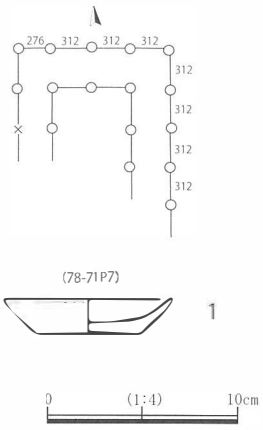
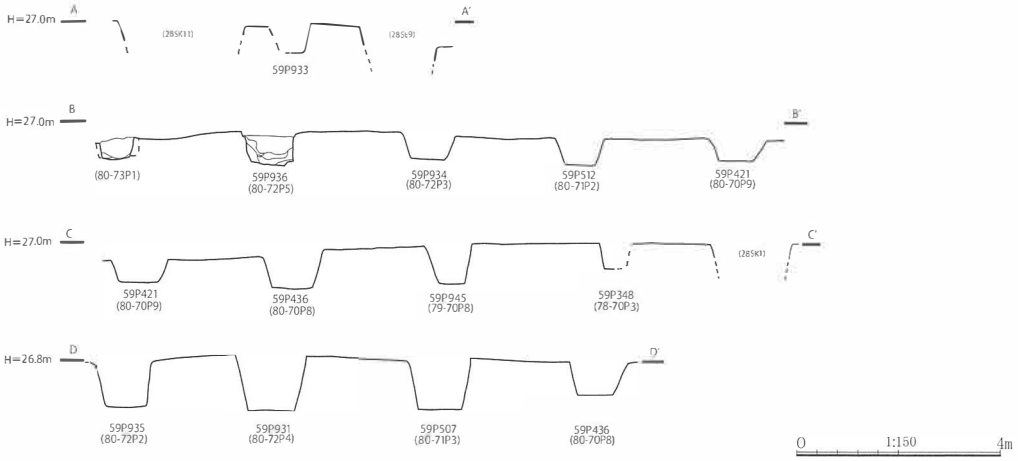


図78　28SB2詳細図







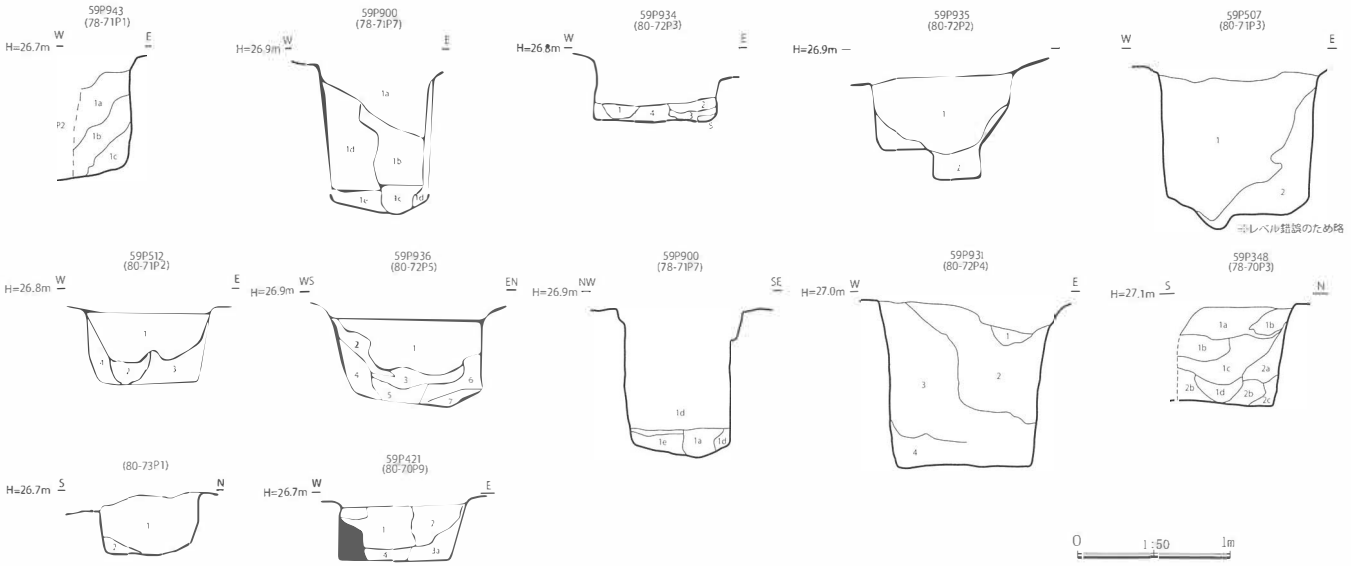


図79　28SB3詳細図

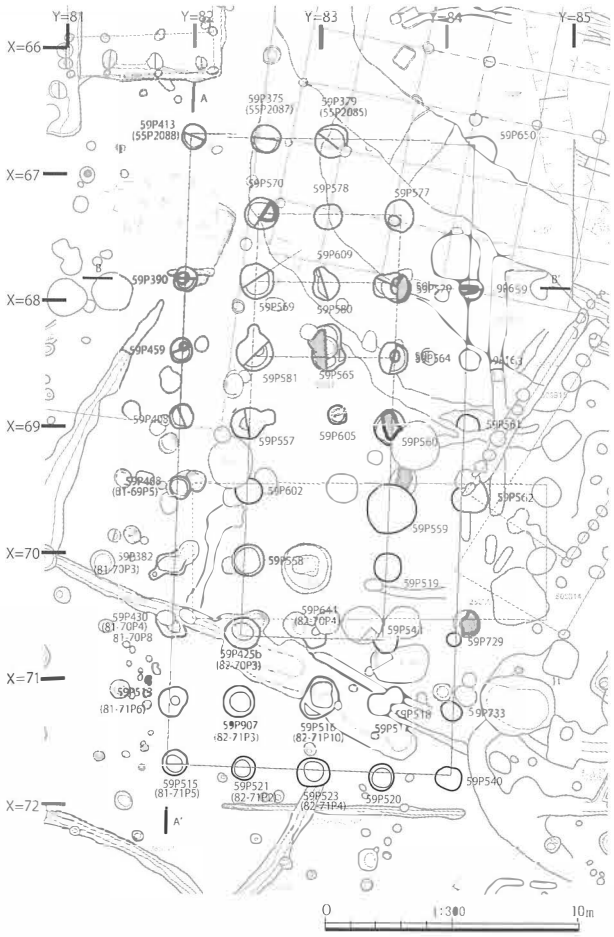
や灰褐色で確認できる。掘方埋土は地山土の黄褐色粘土のブロックを主に構成される。抜き取り痕跡が多くの柱穴で確認でき、それらはかわらけを含む黄褐色粘土ブロックなどを主にした土層で埋め戻される。28SB3→28SE9、28SK11、28SK13、28SK34の新旧関係が確認できる。28SE9との新旧は、断面図等の検討から、逆転する可能性がある（柳之御所調査事務所2006）。28SB2、28SE8、28SE10と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

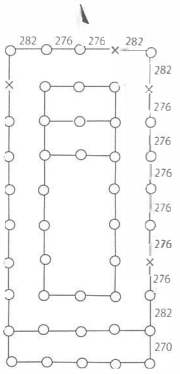
遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。ここでは柱穴から出土した資料１点を図示した。

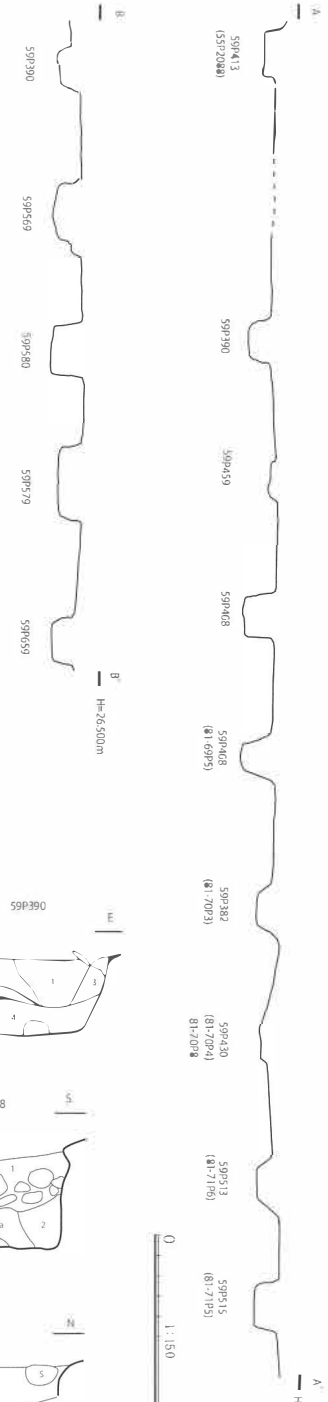
28SB4　83－67付近に位置する、9×4間で四面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図39・70・71・72、図80・81）。28・42次調査で検出された。その後、59次調査で全体を再調査している。６×２間の身舎に、四面に１間の庇が付き、さらに南面に１間の孫庇が付く構造を想定している。身舎の中央にも３個の柱穴がある（59P580、59P565、59P605）。柱筋も通り、間仕切り等の28SB4建物を構成する一連の遺構と考えられる。建物の軸方向はN－2°－Eである。43個の柱穴が検出されている。柱間寸法は桁行が北から282（9.4尺）・276（9.2尺）・276・276・276・276・276・282・270（９尺）cm、梁行が西から282・276・276・282cmに復元できる。全長は桁行24.9m、梁行11.2mで、面積は278.88㎡である。柱穴は身舎では掘方の径が120cm程で、検出面からの深さは40～60cm程である。庇では掘方の径が90cm程で、検出面からの深さは20～50cm程である。掘方の規模は身舎の方が大きい。身舎の内側には３個の柱穴があり、特に59P580と59P565は平面規模などから間仕切り等の柱穴とみられる。いずれの柱穴も柱痕跡は残存せず、抜き取り痕が柱穴の多くで確認される。底面で確認できる窪みなどの柱あたりや底面付近の柱痕跡から想定できる柱径は27cm程である。確認できる土層は抜き取り痕跡のもので、礫が多く混じり、黄褐色粘土のブロックなどを主にする土層で埋め戻されている。また、かわらけも多く含む。なお、平面図上の着色は土色の相違を示すが、基本的に抜き取り痕である。このほか、建物の周囲で人為的な土層が不規則に検出されている。残存が不良のため確定できないが、整地等の地業痕跡とも捉えうる（図版編図版41）。また、50SD8、42SD13が軸方向を合わせて平行して走り、28SB4との関連が考えられるほか、建物の南側では28SD19も軸を合わせて平行して確認されている。柱穴の重複から、28SB8→28SB4→50SB4、28SE11、28SK14の新旧関係が確認できる。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している（図81）。ここでは柱穴から出土した資料９点を図示した。出土層位は不明だが、断面状況からは抜き取り痕からの出土の可能性が高い。今回図示していない、このほかの柱穴から出土したかわらけを含めると、ロクロかわらけ大皿は口径12.0～14.9cm程で平均13.6cm程、底径5.0～8.8cm程で平均6.9cm程、器高3.0～4.4cm程で平均3.8cm程である。ロクロかわらけ小皿は口径7.8～9.2cm程で平均8.7cm程、底径5.0～6. 6cm程で平均5.8cm程、器高1.4～2.2cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.5～14.6cm程で平均13.2cm程、器高2.2～3.3cm程で平均2.8cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径7.3～10.3cm程で平均8.8cm程、器高1.4～2.1cm程で平均1.8cm程である。なお、これらはいずれも柱抜き取り痕から出土した資料及びその可能性が高い。

28SB5　75－68付近に位置する、５×２間で無庇の南北等掘立柱建物跡である（図版編図32・70・71・72、図82）。28次調査で検出された。その後、59次調査で全体を再調査している。建物の軸方向はN－1°－Wである。12個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から312（10.3尺）・242（８







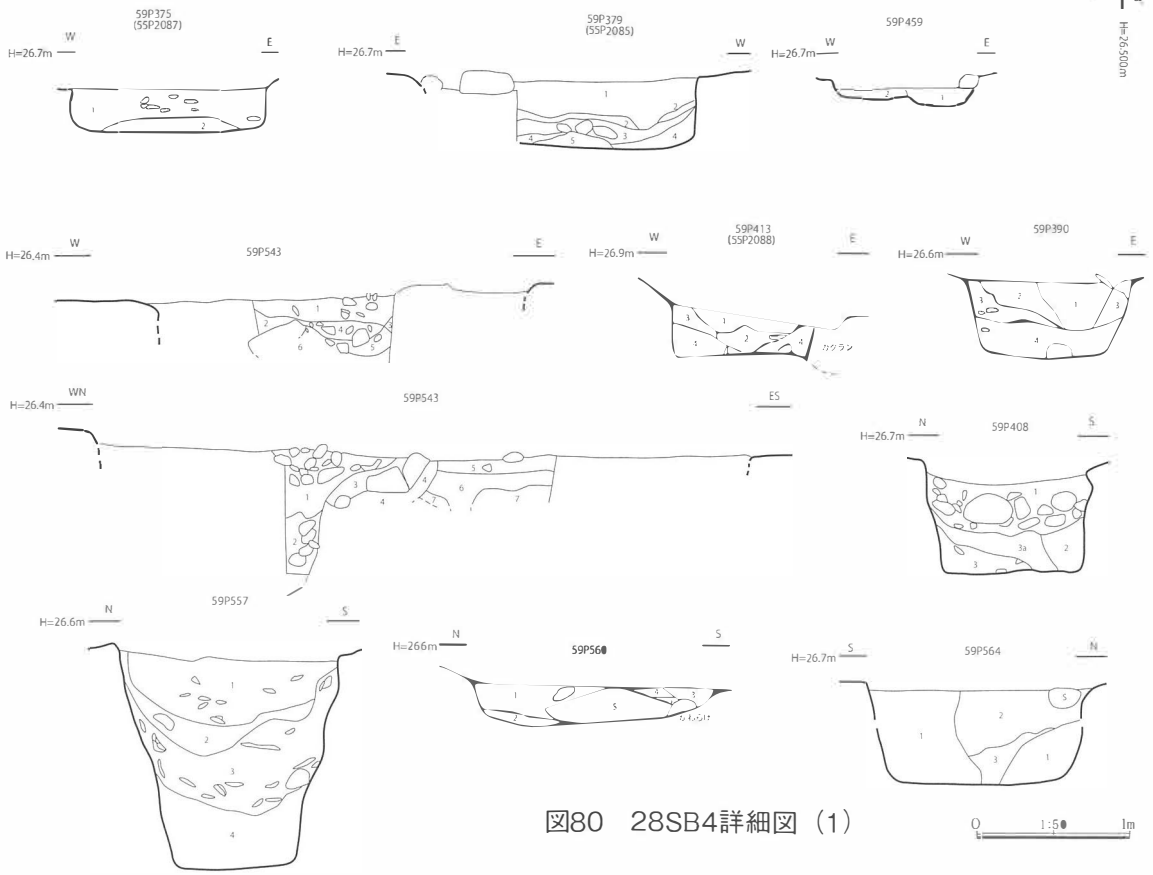
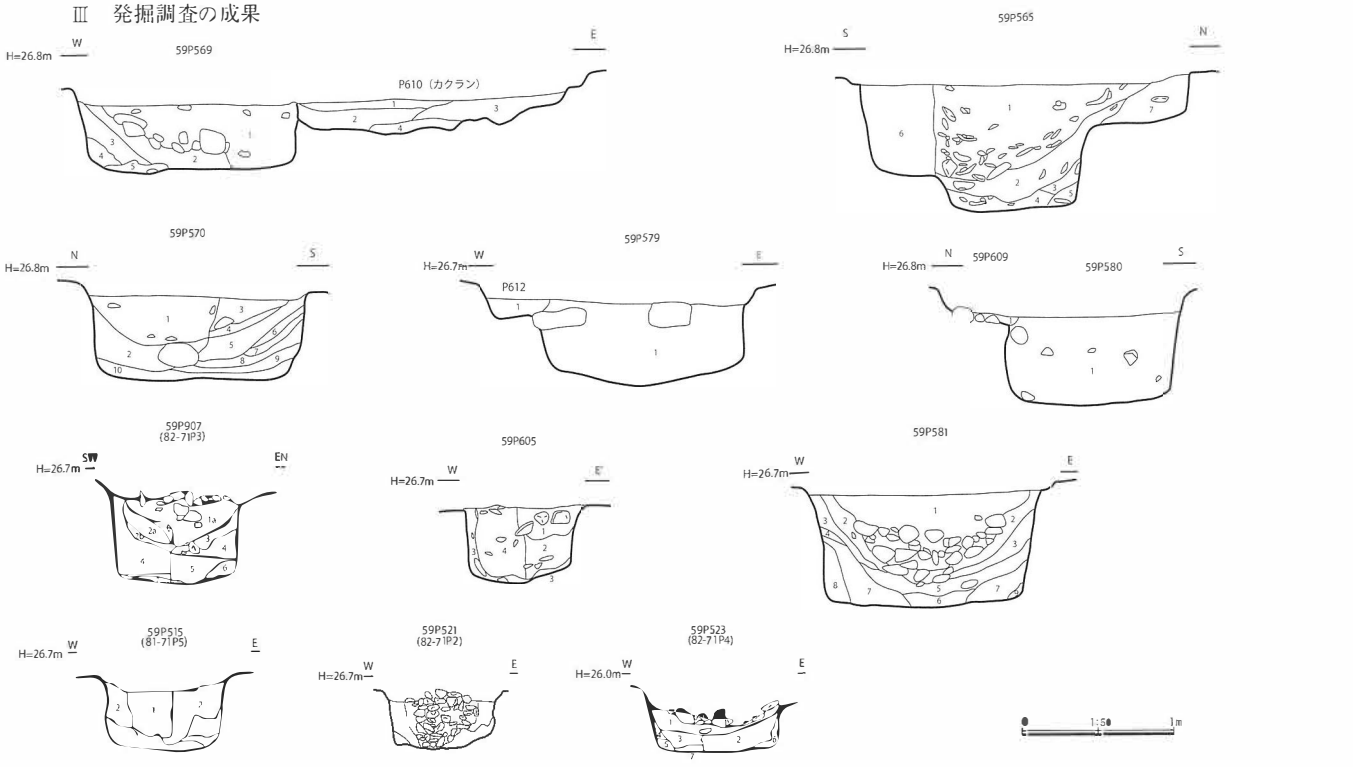


図80　28SB4詳細図（1）



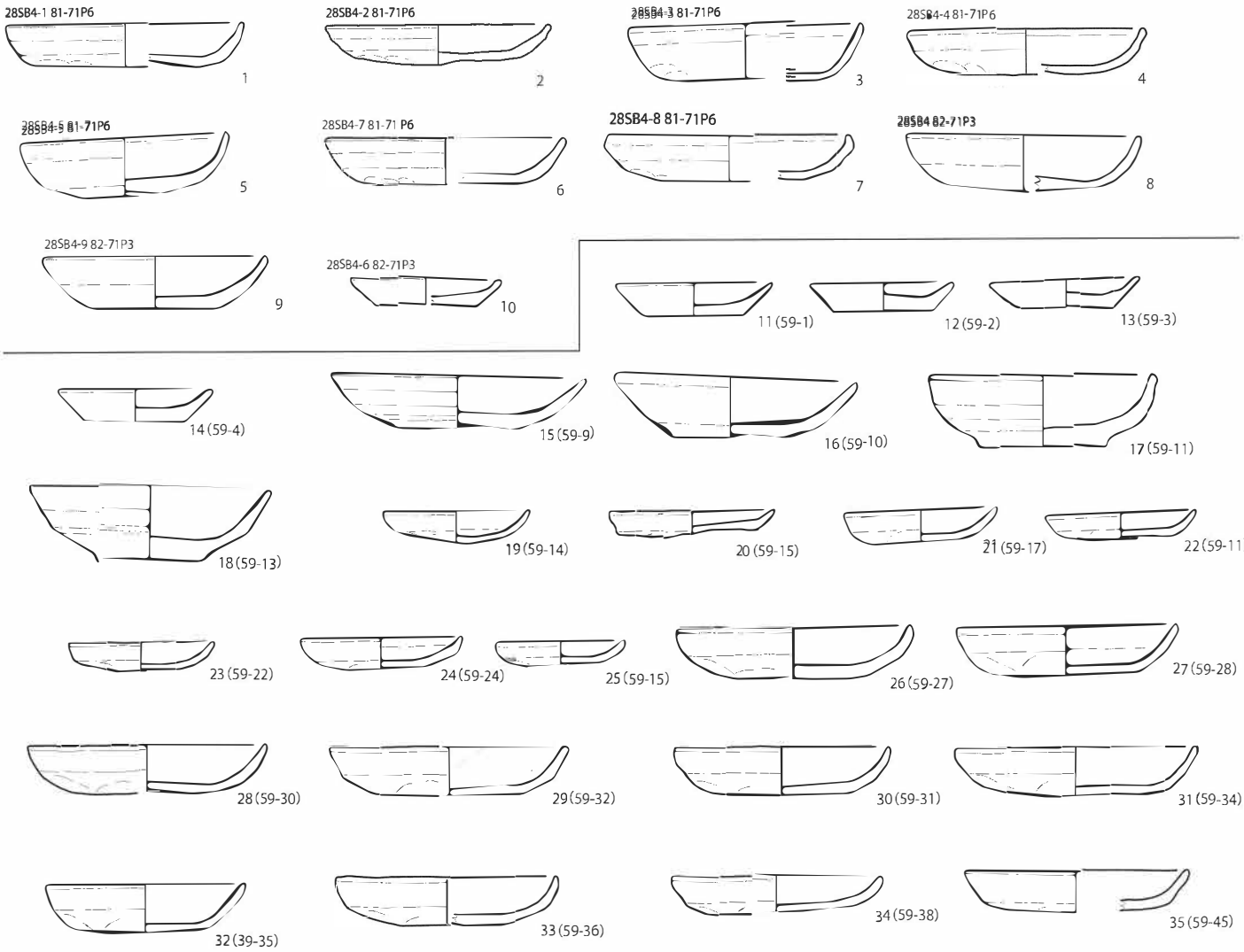


図81　28SB4詳細図（2）

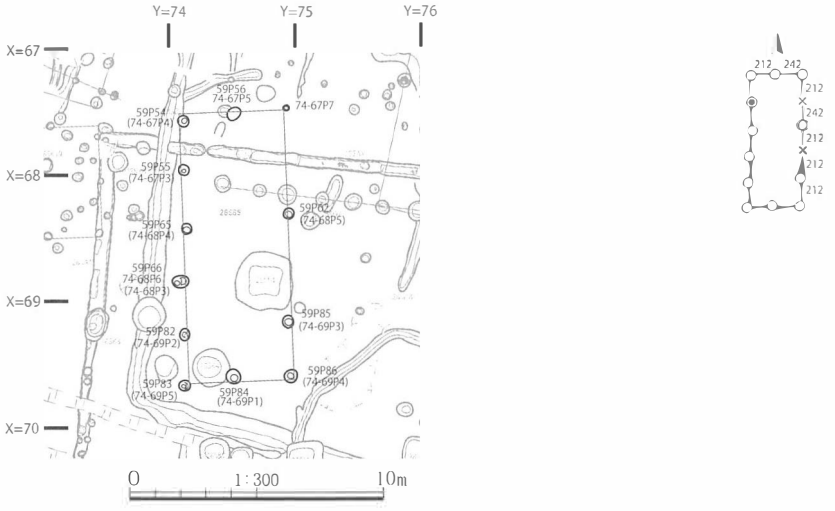
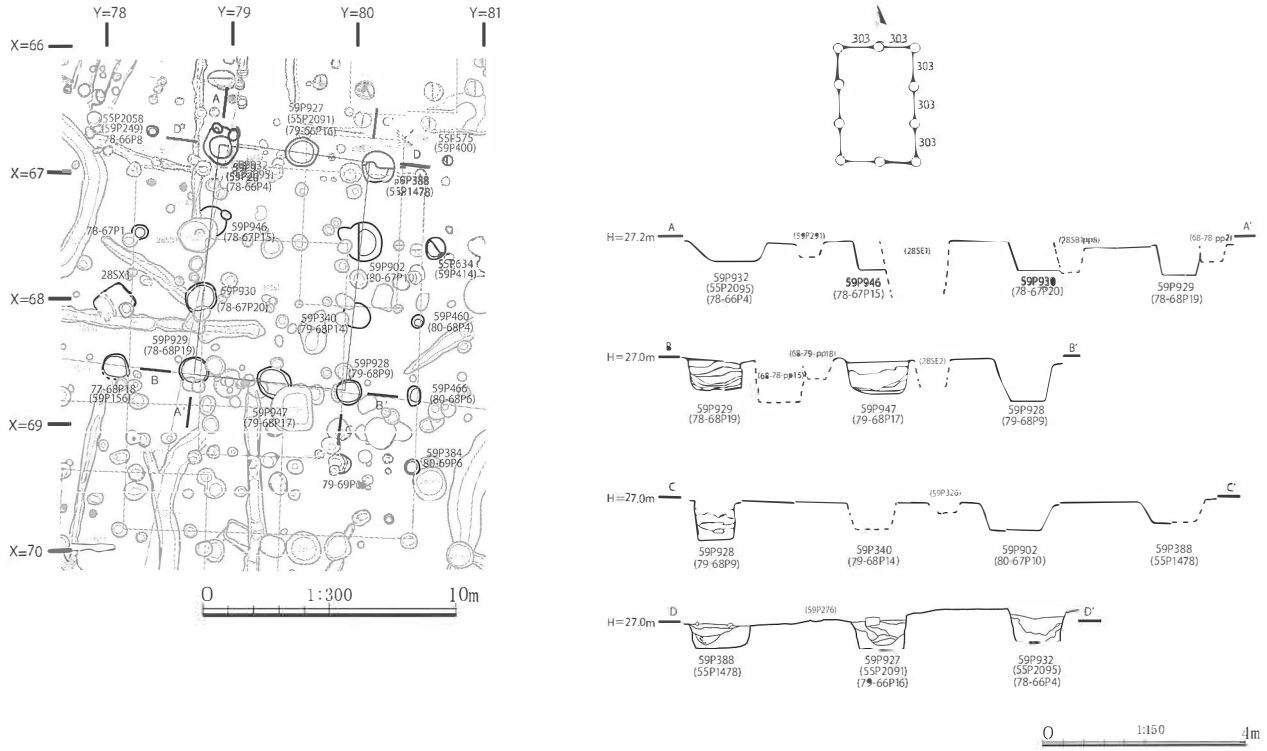


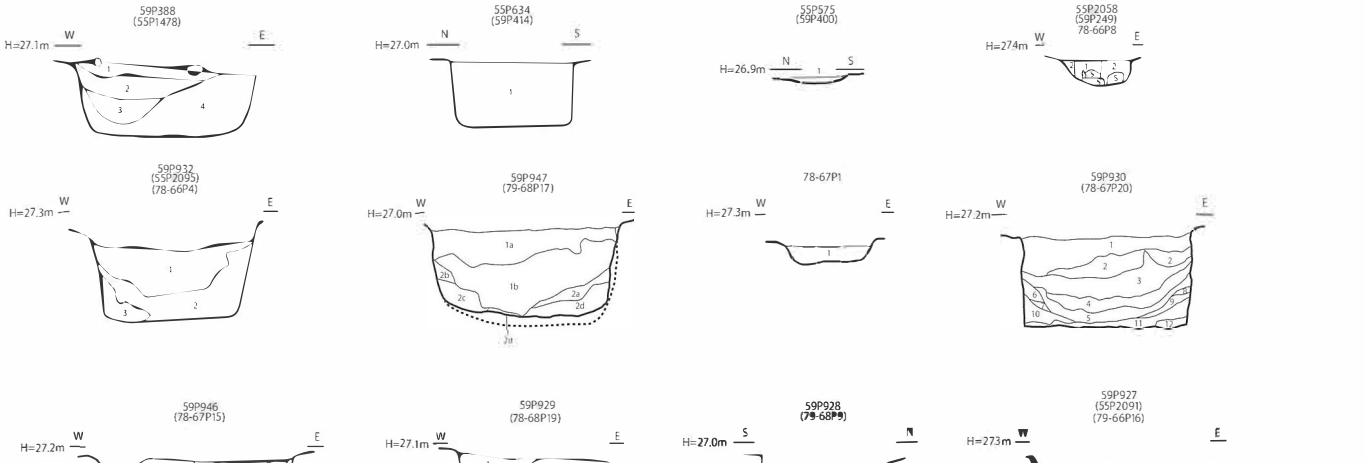
図82　28SB5平面図

尺）・212（７尺）・212・212cm、梁行が西から212・242cmに復元できる。全長は桁行11.9m、梁行4.5mで、平面積は53.55㎡である。柱穴は掘方が径30～35cm程の円形、検出面からの深さは20～60cm程である。柱は抜き取られている。柱痕跡が確認できる柱穴は１個で、想定される柱径は10cm程である。柱穴の土層は抜き取り痕跡のもので、灰褐色の砂質シルトを主体に一部黄褐色土のブロックが混じる。28SA1、55柱列１、28SE4、28SK4と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが少量出土している。

28SB6　79－67付近に位置する、３×２間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図38・39・70・71・72、図83）。28次調査で検出された。その後、59次調査で全体を再調査している。四面に各１間の庇が付く四面庇建物や東西に庇が付く二面庇建物になる可能性もあるが、柱穴の推定位置が他の建物と重複して確認できない部分や柱筋が揃わない部分も多く、ここでは無庇として記す。建物の軸方向はN－7°－Eである。10個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が303（10尺）cmの、梁行が303（10尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行9.1m、梁行6.1mで、平面積は55.51㎡である。柱穴は掘方が径100～140cmの円形で、検出面からの深さは40～70cm程である。柱痕跡は確認されておらず、断面を確認した柱穴は抜き取り痕跡が確認できる。抜き取り痕跡は黄褐色のシルトを主体に、地山土とみられる黄褐色粘土ブロックや砂が混じる土層で埋め戻されている。抜き取り痕跡に礫が混じる柱穴もある。また、柱穴の埋土からは55P1478の抜き取り痕からかわらけが出土したのみで、それ以外の柱穴からは遺物は出土していない。28SB6→28SB1、55SX2の新旧関係が確認できる。28SB2、28SE1、55SB25、55柱列1、55柱列2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。55SB25の柱穴との新旧関係は55次調査時では完掘されており、不明である。もし四面庇であれば28SB6→28SX1→28SB1の新旧関係が想定される。28SB6→55柱列2の可能性があるが、判然としない。
遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

28SB8　83－70付近に位置する、５×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図39・46・70・71・72、図84）。28次調査で検出された。その後、59次調査で全体を再調査している。建物の軸





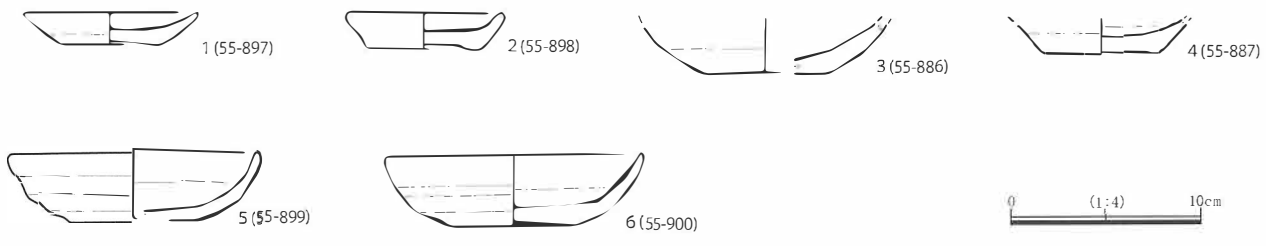


図83　28SB6詳細図

方向はN－3°－Eである。13個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から272（９尺）・303（10尺）・303・212（７尺）・303cm、梁行が287（9.5尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行13.9m、梁行5.8mで、平面積は80.62㎡である。柱穴は掘方が径70～80cm程の円形で、検出面からの深さは20～30cm程である。抜き取り痕跡は褐色シルトが主体で、埋土上面に礫が確認された柱穴が多い。精査した遺構の状況からは、抜き取り後の埋め戻し土に含まれた礫とみられる。埋土下部の柱痕跡の可能性がある土層に礫が混じるものもある。柱穴の切り合いから、28SB8→28SB4の新旧関係が確認できる。28SE11と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

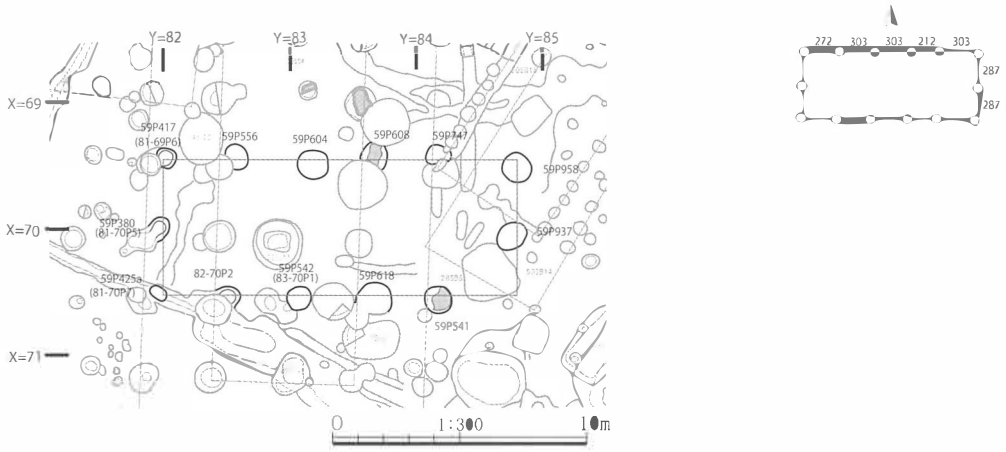


図84　28SB8平面図

31SB1　77－84付近に位置する、３×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図34・35、図85）。31次調査で検出された。建物の軸方向はN－42°－Eである。９個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・212・242（８尺）cm、梁行が北から212・242cmである。全長は桁行6.7m、梁行4.5mで、平面積は30.15㎡である。柱穴は掘方が径20～30cm程の円形で、検出面からの深さは20～30cm程である。４個の柱穴で柱痕跡が確認できる。柱痕跡とみられる土層の断面での確認では、想定できる柱径は10～15cm程である。柱痕跡は黒褐色のシルトに砂が混じる土層で確認できる。掘方埋土は黄褐色粘土のブロックと黒褐色シルトで確認できる。

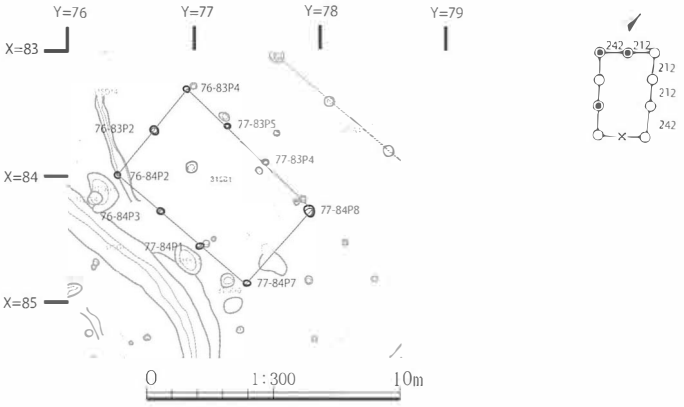


図85　31SB1平面図

遺物　精査した柱穴からはかわらけは出土していない。

31SB2　80－86付近に位置する、１×１間で無庇のほぼ正方形を呈する掘立柱建物跡である（図版編図41、図86）。31次調査で検出された。建物の軸方向はN－38°－Eである。４個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が266（8.8尺）cm、梁行が242（８尺）cmで、平面積は6.48㎡である。柱穴は掘方が径40～60cm程の円形で、検出面からの深さは10～20cm程である。いずれの柱穴も断面でも柱痕跡は確認できない。抜き取り痕跡とみられるが、柱穴の残存はいずれも良くないため確定はできない。埋土は黄褐色粘土ブロックと褐色シルトに砂が混じる。

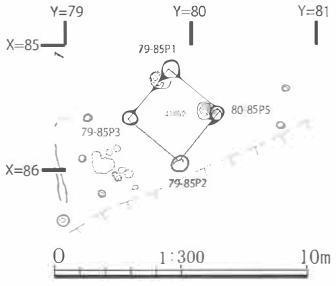
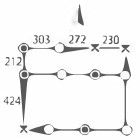


図86　31SB2平面図

31SB3　69－74付近に位置する、３×１間で無庇もしくは南側が身舎で北側に１間の庇が付く片庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図27、図87）。31次調査で検出され、65次調査でも再度確認されている。建物の軸方向はN－6°－Wである。９個の柱穴を検出している。無庇の建物とみた場合、柱間寸法は桁行が西から303（10尺）・272（９尺）・230（7.6尺）cmで、梁行が212（７尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行8.1m、梁行2.1mで、平面積は17.01㎡である。北側に１間の庇を想定した場合、梁行寸法は424cm（14尺）、梁行全長は6.4mとなる。柱穴は掘方が径26～40cm程の円形で、検出面からの深さは12～20cm程である。柱痕跡がある柱穴は３個で、想定できる柱径は12cm程である。柱痕跡は灰黄褐色シルトで確認できるものが多く、掘方埋土は浅黄色粘土もしくはシルトで確認される。柱痕跡が確認できない柱穴は、灰褐色シルトの単層である。31SB4、31SE3と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。



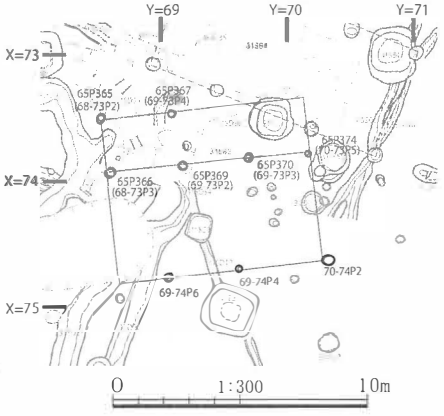
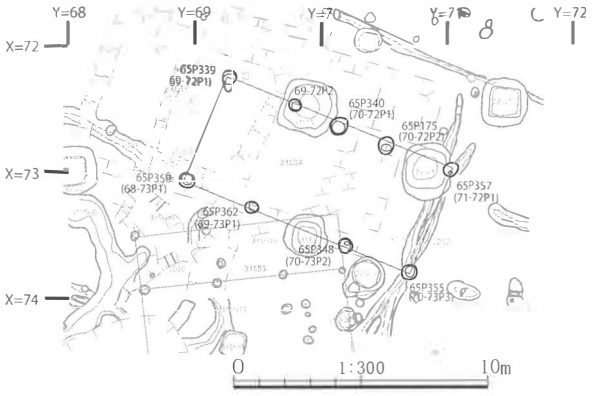


図87　31SB3平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

31SB4　70－73付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図27、図88）。31次調査で検出され、65次調査でも再度確認されている。建物の軸方向はN－23°－Eである。９個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から272（９尺）・212（７尺）・212・272cm、梁行が424（14尺）cmである。全長は桁行9.7m、梁行4.2mで、平面積は40.74㎡である。柱穴は掘方が径44～58cm程の円形で、検出面からの深さは40～60cm程である。また、底面の標高が揃うことも特徴的である。柱痕跡は４個の柱穴で、想定できる柱径は15～20cm程である。柱痕跡が確認できる柱穴で



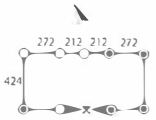


図88　31SB4平面図

は、柱痕跡は灰黄色のシルトで確認され、掘方埋土は黄褐色シルトにブロックが混じる土層で確認されている。柱痕跡と掘方埋土の層界には酸化鉄の集積が確認されている。柱痕跡が確認されていない柱穴は抜き取られた可能性がある。これらは灰黄色のシルトに黄褐色のブロックが混じる土層で堆積する。31SE4、31SE5→31SB4→31SE3、65SD10の新旧関係が確認できる。31SB3、31SK58と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。

31SB5　71－70付近に位置する、５×２間で総柱の東西棟の掘立柱建物跡である（図版編図27・70、図89)。31次調査で検出され、65次調査で９個の柱穴を新規に検出し全体が確認されている。建物の軸方向はN－23°－Eである。17個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が251（8.3尺）cmの、梁行が303（10尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行12.6m、梁行6.1mで、平面積は76.86㎡である。柱穴は掘方が長軸60～100cm（平均90cm)、検出面からの深さは30～70cmである。検出された柱痕跡は直径が約30cmである。多くは抜き取り痕が確認でき、柱痕跡が下部にのみ残るものが多く、抜き取られたと考えられる。柱痕跡は褐灰色の粘質土で確認され、掘方埋土は淡黄色の粘質土で確認されるものが多い。抜き取り痕跡は礫や黄褐色の粘土ブロックが混じる灰褐色シルトで確認されている。65SA2と65P153が重複するが、遺構として登録した65次調査の時点では既に完掘されており、新旧関係は不明である。

なお、本遺構は倉町遺跡で確認された「高屋」と想定される遺構と構造及び平面規模が類似する(平泉町教委2007)。総柱の構造と合わせて、遺構の性格を示唆する重要な特徴である。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。

31SB6　72－68付近に位置する、５×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図27・32・70・71・72、図90)。31次調査で検出され、65次調査で確認されている。建物の軸方向はN－0°－Eである。14個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・212・212・212・182（６尺）cm、桁行212（７尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行10.3m、梁行4.2mで、平面積は43.26㎡である。柱穴は掘方が径25～50cm程の円形で、検出面からの深さは20～40cm程である。８個の柱穴で柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は12～14cm程である。柱痕跡は灰黄褐色のシルトで確認されるものが多く、掘方埋土は浅黄色などのブロックを含む粘質土で確認される。平面図の検討から、31SK76→31SB6→28SA1の新旧関係が確認できる。52SB26と空間的に重複するが、遺構の切り合い

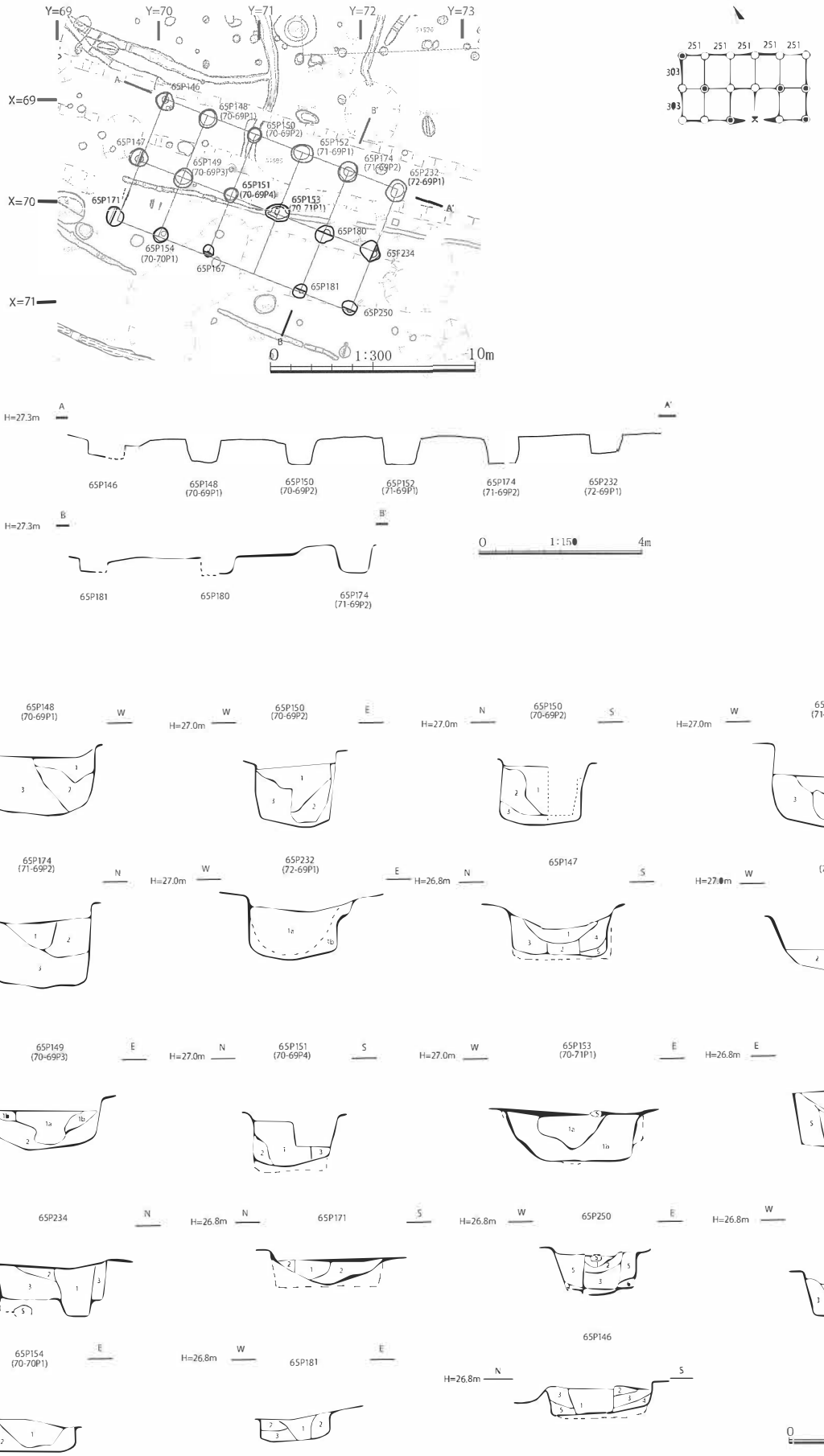
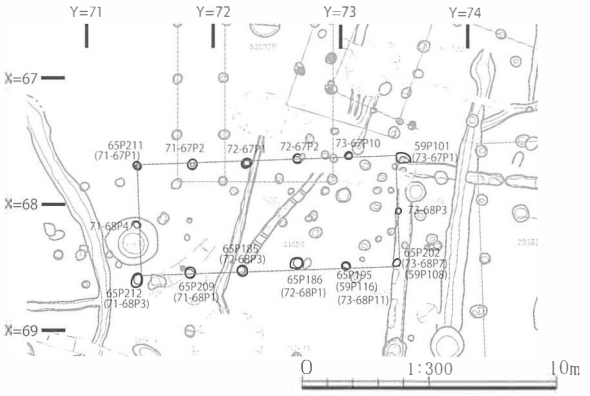


図89　31SB5詳細図

はない。

遺物　柱穴から手づくね及びロクロのかわらけが多く出土している。



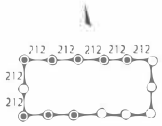
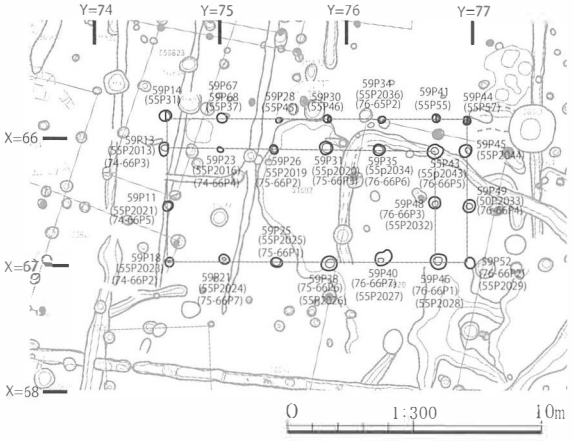


図90　31SB6平面図

31SB7　75－66付近に位置する、６×２間で二面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図32・70・71・72、図91）。31次調査で検出され、55・59次調査で確認されている。建物の軸方向はN－0°－Eである。24個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・212・212・212・212・121（４尺）cm、梁行が北から121・221（7.3尺）・221cmに復元できる。全長は桁行11.8m、梁行5.6mで、平面積は66.08㎡である。柱穴は身舎では掘方が径30～45cm程の円形で、検出面からの深さは35～60cm程である。庇では掘方が径20～40cm程の円形で、検出面からの深さが10～20cm程である。11個の柱穴で柱痕跡が確認されており、図面で確認できる10個を柱痕跡がある柱穴として図示した。想定できる柱径は18cm程である。抜き取りが確認できる柱穴も多く、柱痕跡が確認できる柱穴でも、上層部分に地山とみられる黄褐色粘土のブロックが堆積する柱穴がある。柱痕跡は灰黄褐色のシルトで、掘方埋土は浅黄色などの粘土ブロックを含む灰黄色シルトで確認されている。抜き取り痕跡が確認できるものは、地山土とみられる黄褐色粘土のブロックなどで埋め戻される。55SB20、55SB23、36SA2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。



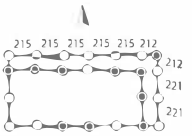
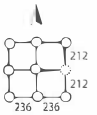


図91　31SB7平面図



31SB8　65－74付近に位置する、２×２間で総柱のほぼ正方形を呈する掘立柱建物跡である（図版編図22・70、 図92)。31次調査で検出された。建物の軸方向はN－1°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が236（7.8尺）cm、梁行が212（７尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行4.7m、梁行4.2mで、平面積は19.74㎡である。柱穴は掘方が径30cm程の円形で、検出面からの深さが10～20cm程である。なお、埋土の様相からは12世紀より新しい時期の遺構の可能性がある（岩手埋文1995)。

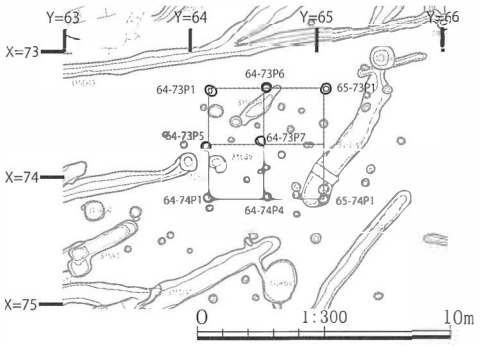
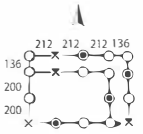


図92　31SB8平面図

41SB1　64－72付近に位置する、４×３間で二面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編 図22・70、 図93)。３×２間の身舎に、北側と東側の二面に１間の庇が付く。31・41次調査で検出され、65次調査で確認されている。建物の軸方向はN－2°－Eである。14個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・212・212・136（4.5尺）cm、梁行が北から136・200（6.6尺）・200cmで復元できる。全長は桁行7.7m、梁行5.4mで、平面積は41.58㎡である。柱穴は身舎では掘方が径30～40cm程の円形である。庇では掘方が径20～30cm程の円形である。いずれの柱穴も精査しておらず、柱穴の深さ等は不明である。平面で柱痕跡が確認できる柱穴は４個で、想定できる柱径は身舎で20cm程、庇で12cm程である。



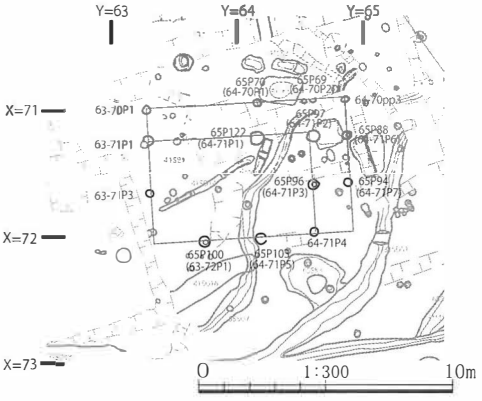


図93　41SB1平面図

41SB2　66－70付近に位置する、３×２間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図21、図94)。31・41次調査で検出された。建物の軸方向はN－34°－Eである。10個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（７尺）・182（６尺）・212cm、梁行が212cmの等間に復元できる。全長は桁行6.1m、梁行4.2mで、平面積は25.62㎡である。柱穴は掘方が径35～50cm程の円形で、検出面からの深さが８～35cm程である。柱痕跡は１個の柱穴で確認でき、想定できる柱径は18cm程である。柱痕跡は灰黄褐色の粘性の強い土層で確認される。その他の柱穴の埋土は灰黄褐色の粘性の強い土層で

地山とみられる黄褐色粘土のブロックを含む。いずれの柱穴も残存が良くないため、掘方埋土と抜き取り痕跡等は明確に区別できない。41SE1と空間的に重複する。65P31と重複し41SB2→41SE1の新旧関係の可能性があるものの、41SE1は41次調査で完掘されており遺構の切り合いは不明で、新旧関係は明確には判断できない。

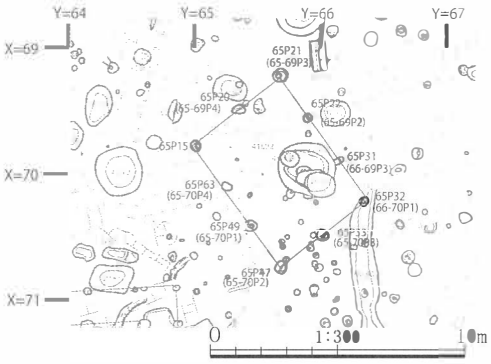


図94　41SB2平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

41SB3　61－64付近に位置する、3×1間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図20・21、図95）。41次調査で検出され、56次調査でも確認されている。建物の軸方向はN－10°－Eである。8個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北側柱列で西から163（5.4尺）・230（7.6尺）・203（6.7尺）cm、南側柱列で西から200（6.6尺）cmの等間に、梁行が西側で330（10.9尺）、東側で303cmに復元できる。全長は桁行6m、梁行3.3mで、平面積は19.8㎡である。柱穴は掘方が径25～30cm程の円形である。

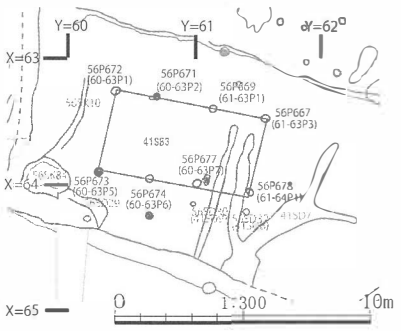


図95　41SB3平面図

48SB1　88－73付近に位置する、12×2間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図47・54・55・70、図96）。48・49次調査で検出され、68次調査でも一部を確認している。建物の軸方向はN－35°－Eである。28個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から6間目のみ273（9尺）cmでその他が242（8尺）cmに、梁行が273（9尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行29.3m、梁行5.5mで、平面積は161.2㎡である。柱穴は掘方が径60～80cmの円形で、検出面からの深さは25～50cmである。断面で柱痕跡とみられる土層が確認できる柱穴から想定できる柱径は30cm程である。柱穴の多くは抜き取り痕跡とみられる土層が堆積し、黒褐色の粘性の強い土層に明黄褐色粘土のブロックが混じる。49SE1と重複し、49SE1→48SB1と図示されている（岩手県教委1999）。ただし、井戸と柱穴の切り合い関係は判然としない部分があり、両遺構の新旧には不確定な部分が残る。柱構造や軸方向などの特徴は、他の12世紀代の建物とは相違が大きい。近接する位置に分布する近世の建物との類似も想起できる。

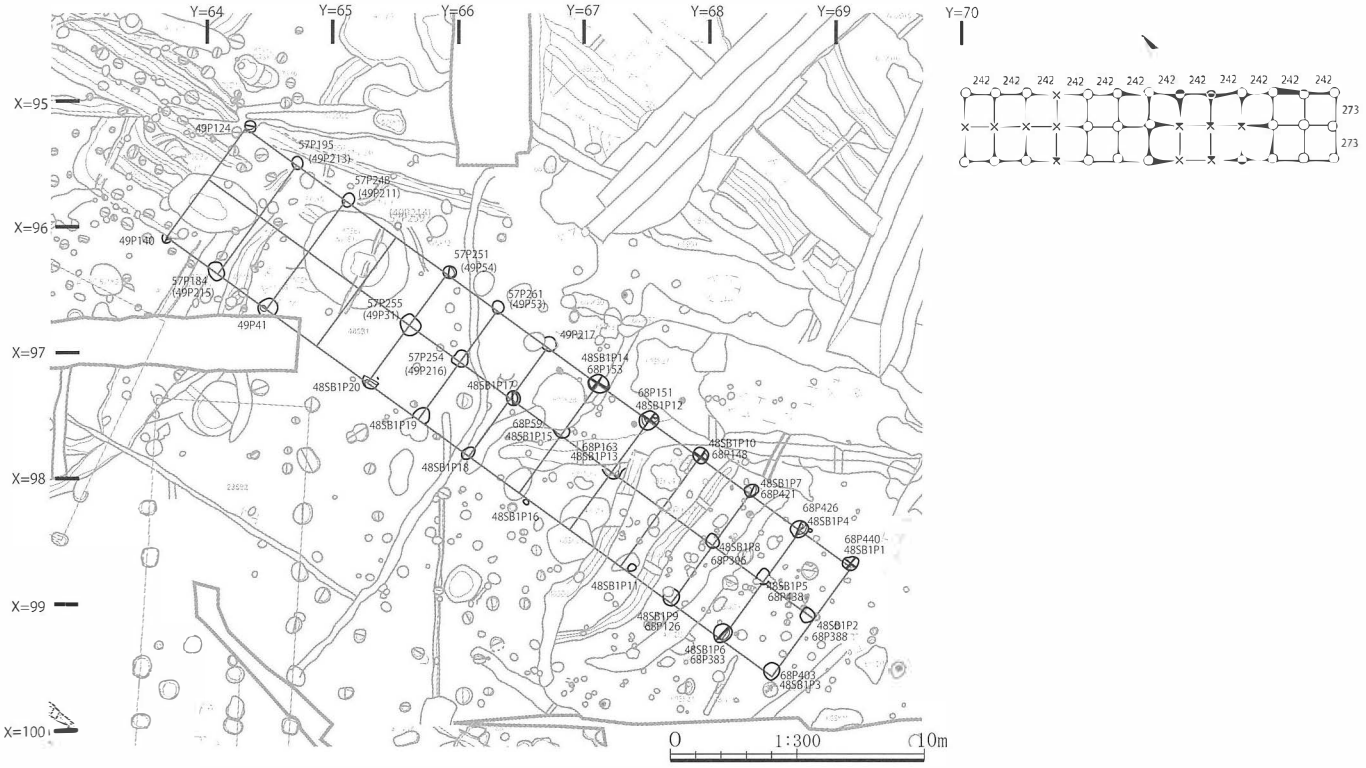


図96　48SB1平面図

50SB3　86－64付近に位置する、５×４間で二面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図46・67・68、図97）。50次調査で検出された。５×２間の身舎に、南北二面に各１間の庇が付く。建物の軸方向はN－10°－Eである。27個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から221（7.3尺）・242（８尺）・303（10尺）・242・212（７尺）、梁行が北から202（6.7尺）・212・221・221cmに復元できる。全長は桁行12.2m、梁行8.6mで、平面積は104.92㎡である。また、身舎の南側、庇内に柱穴が４個配される。柱筋が通る柱配置から、50SB3と一連の建物を構成する柱穴と考えられる。身舎の南側柱列との柱間寸法は45cm（1.5尺）である。柱穴は身舎では掘方が径35～50cm程の円形で、検出面からの深さは15～40cm程である。庇では掘方の径25～35cm程の円形で、検出面からの深さは北側の庇で10cmほど、南側の庇で25～45cm程と南側の柱が深い。庇内の４個の柱穴は掘方の径35～45cm程である。柱痕跡は13個の柱穴で確認でき、想定できる柱径は10～15cm程である。柱痕跡は褐灰色のシルトで確認され、掘方埋土は灰黄色のブロックが混じる褐灰色のシルトを主とする。掘方埋土に礫が混じる柱穴がある。また、50P9、50P94、50P23、50P86では柱痕跡の下部に礫が置かれる。柱痕跡の下部にあたる位置で確認されていることから、礎板としての機能が想定できる。50SB6B→50SB6A、50SA2→50SB3の新旧関係が確認できる。50SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが多く出土している。図示した資料は手づくねかわらけのみだが、破片ではロクロかわらけも含む。手づくねかわらけ大皿で口径13.5～14.5cm程、底径2.8～3.3cm程である。なお、手づくねかわらけは柱穴出土資料としては摩滅が少ない。

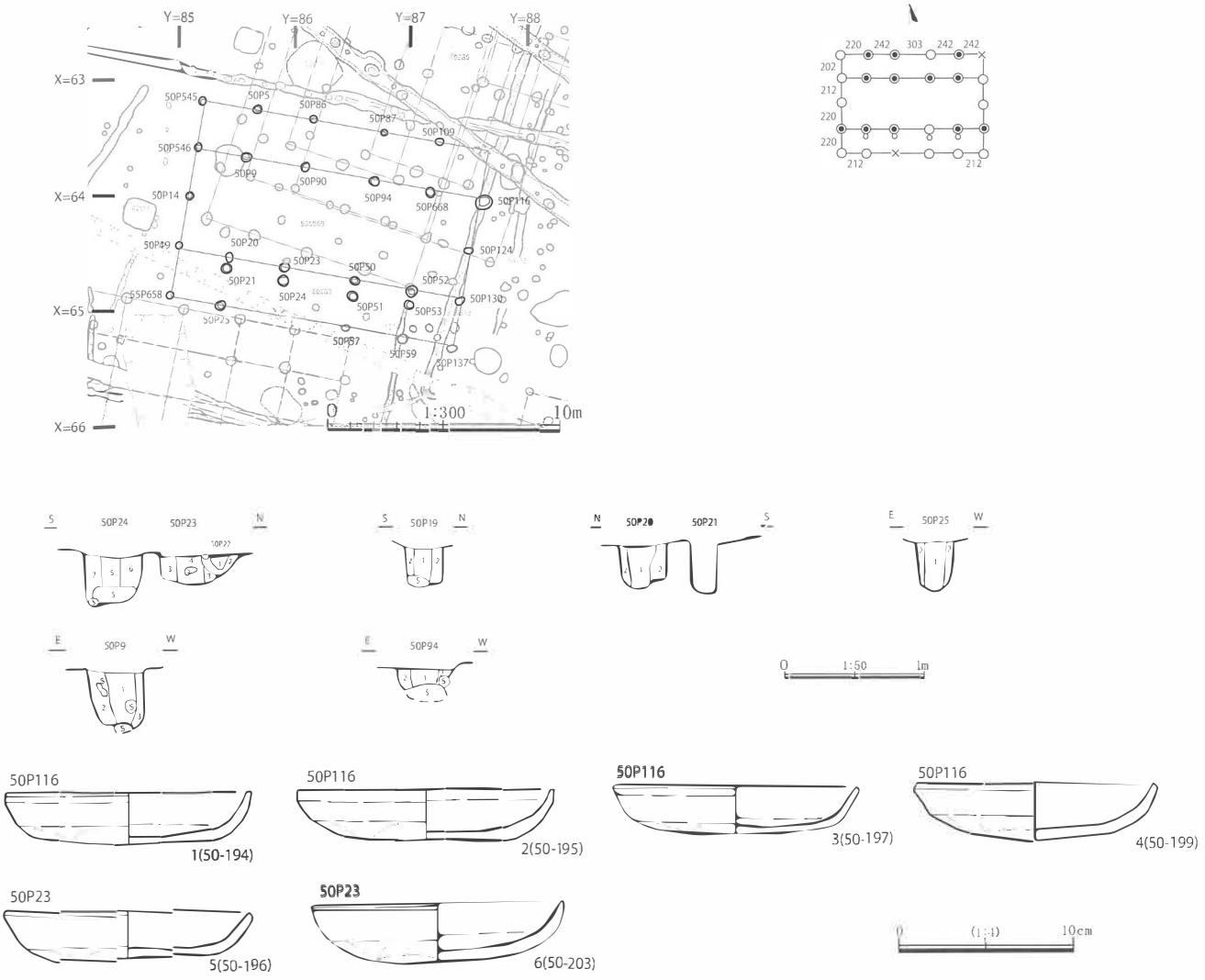


図97　50SB3詳細図

50SB4　84－65付近に位置する、８×７間で総柱の正方形に近い南北棟掘立柱建物跡である（図版編図38・46・70・71・72、図98）。50次調査で検出され、55・59次調査で確認された。50次調査概報（岩手県教委2000）、１次・２次総括（岩手県教委2004・HSB11として提示）で平面形状の復元が異なる。また、その後の59次調査でも南側の精査を行っている。本報告書ではこれらをふまえ、図に示したような１棟の総柱の建物を想定した。建物の軸方向はN－11°－Eである。40個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から188（6.2尺）・218（7.2尺）・218・218・245（8.1尺）・245・245・245cmで、梁行が西から218・248・248・248・248・248・248cmに復元できる。全長は桁行18.2m、梁行17.1mで、平面積は311.22㎡である。柱穴は掘方の径30～50cm程である。３個の柱穴で、平面で柱痕跡が確認されている。想定できる柱径は10～15cm程である。柱穴の重複から、28SB4→50SB4の新旧関係が確認できる。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが多く出土している。ここでは柱穴から出土した資料３点を図示した。いずれも北側の桁行柱筋の50P26から出土している。柱穴堆積土内の出土位置及び

土層の性格は不明である。手づくねかわらけ大皿は口径13.2cm、器高3.2cmで、やや器高が高いものの口径が小さい。ロクロかわらけ大皿は口径12.8cm、底径5.4cm、器高3.7cmである。

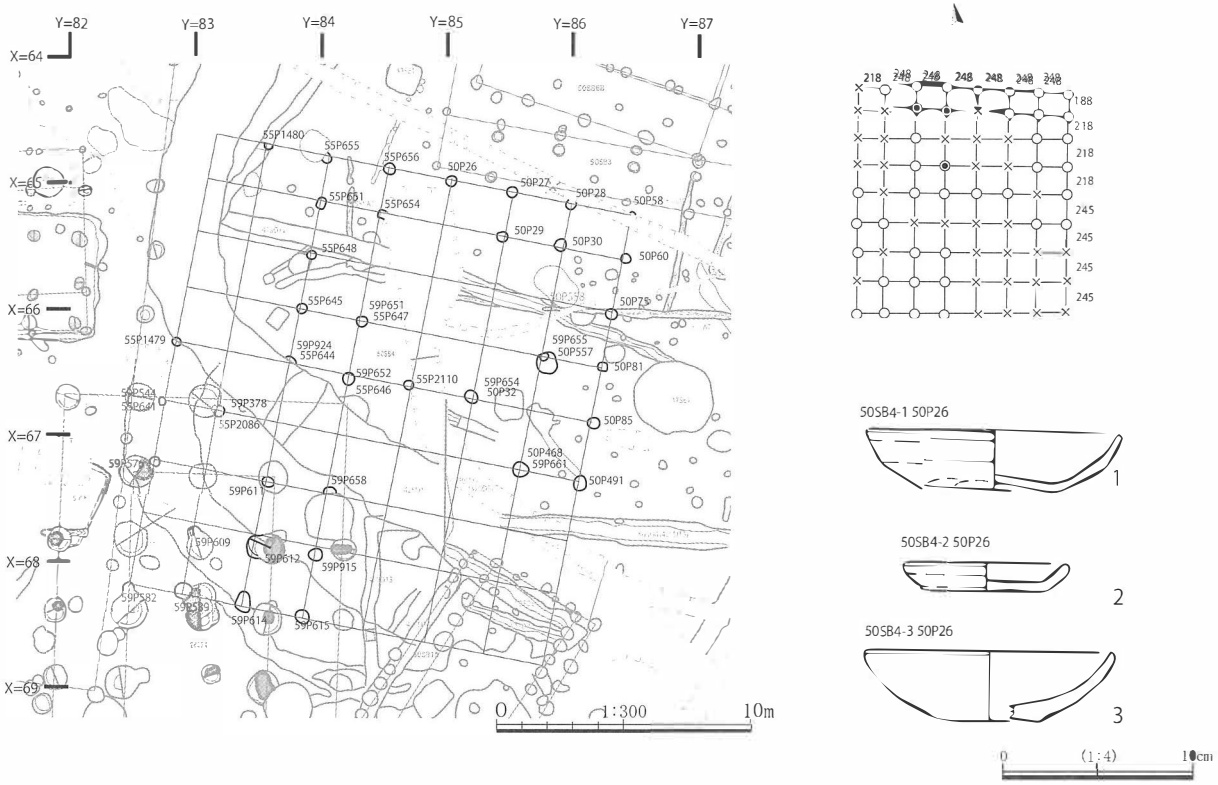


図98　50SB4詳細図

50SB5　87－62付近に位置する、5×4間で四面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図45・46・67・68、図99）。50・52次調査で検出された。3×2間の身舎に、四面に各1間の庇が付く。建物の軸方向はN－20°－Eである。23個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から242（8尺）・221（7.3尺）・221・221・242cm、梁行が西から242・221・221・212（7尺）cmに復元できる。全長は桁行11.5m、梁行8.7m、

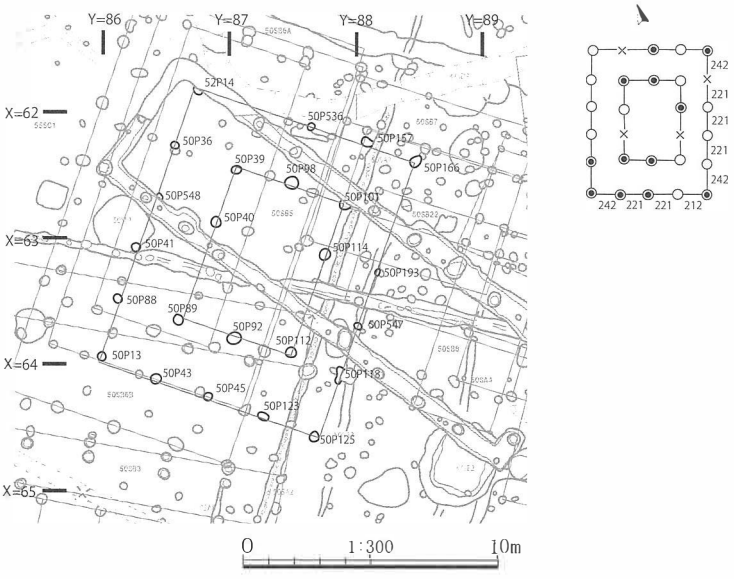


図99　50SB5平面図

平面積は100.05㎡である。柱穴は身舎では掘方の径35～50cm程の円形である。庇では掘方が径30～50cm程の円形である。12個の柱穴で柱痕跡を確認している。想定できる柱径は身舎で15～25cm程、庇で10～15cm程である。50SB3、50SB6A、50SB6B、50SB7、50SB22、50SB20、50SA1、50SA2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

50SB6A　87－61付近に位置する、7×4間で四面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図45・67・68、図100）。50次調査で検出され、その後の52次調査での調査結果から、50SB6A・Bの2棟の建物と理解された。1次・2次総括（岩手県教委2004）でHSB9として示した遺構を含む。また、5×2間の身舎に、四面に各1間の庇が付く。建物の軸方向はN－18°－Eである。28個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から121（4尺）・242（8尺）・242・242・242・242・182（6尺）cm、梁行が西から121・242・242・182cmに復元できる。全長は桁行15.1m、梁行7.9m、平面積は119.29㎡である。柱穴は身舎では掘方が径25～45cm程の円形で、庇で掘方が径25～35cm程の円形である。8個の柱穴で柱痕跡を確認している。想定できる柱径は身舎で10～15cm程、庇で12～15cm程である。50SB6A→50SA1、50SB6B→50SB6A→50SB3の新旧関係が確認できる。50SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

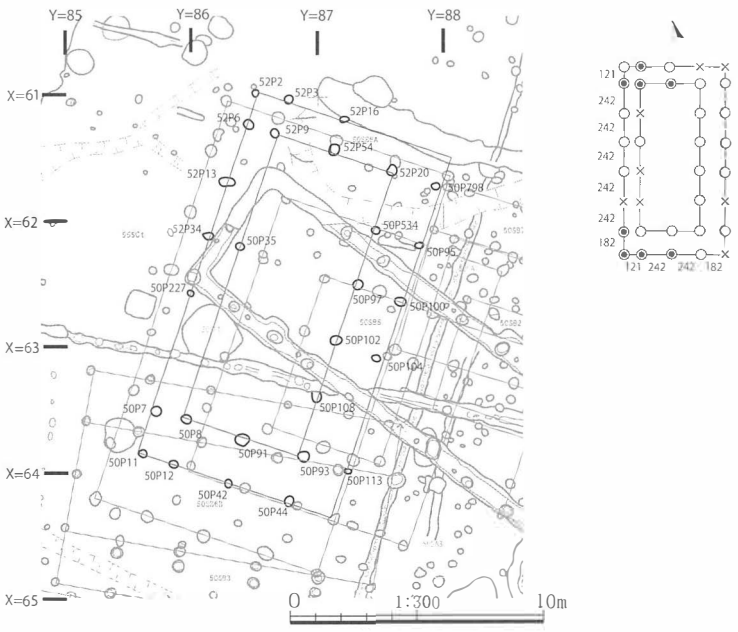


図100　50SB6A平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

50SB6B　87－61付近に位置する、7×4間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図45・67・68、図101）。50次調査で検出され、その後の52次調査での調査結果から、50SB6A・Bの2棟の建物と理解された。建物の軸方向はN－18°－Eである。19個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（7尺）・242（8尺）・242・242・242・242・242・242cm、梁行が西から212・242・242・212cmに復元できる。全長は桁行16.6m、梁行9.1mで、平面積は151.06㎡である。柱穴は掘方が径35～50cmほどの円形である。10個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は18～25cm程である。50SB6B→50SB6A→50SB3の新旧関係が確認できる。50SB5、50SB7、50SA1と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

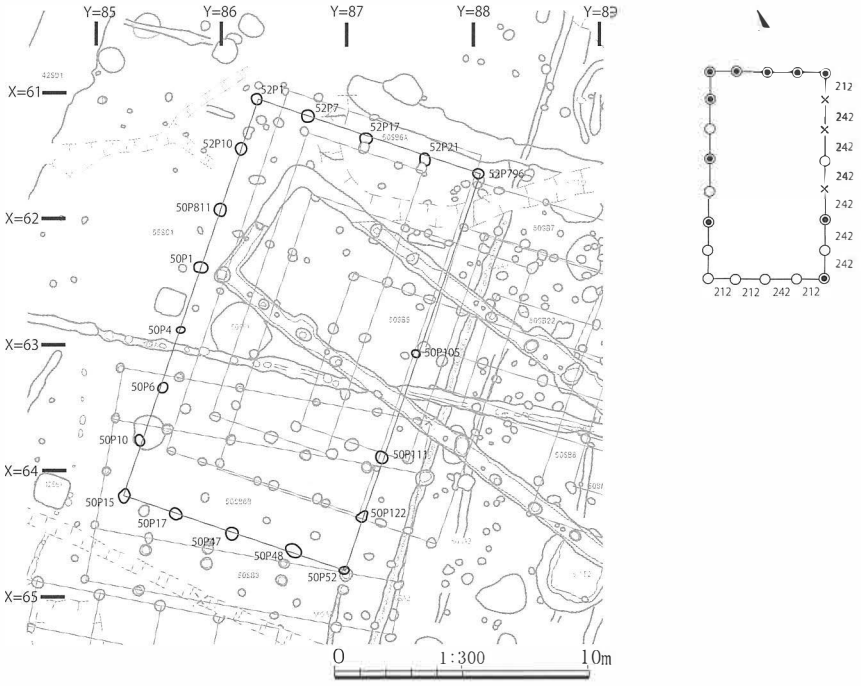


図101　50SB6B平面図

50SB7　89－62付近に位置する、３×３間で片庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図45・67・68、図102）。50次調査で検出された。３×２間の身舎に、北側に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－17°－Eである。11個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が248（８尺）cmの等間に、梁行が北から182（６尺）・242・242cmに復元できる。全長は桁行7.4m、梁行6.7mで、平面積は49.58㎡である。柱穴は身舎では掘方が径30～45cm程の円形で、庇が掘方径20～30cmほどの円形である。11個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎で18～20cm程、庇で15～20cm程である。50SB10→50SB7の新旧関係が確認できる。50SB5、50SB6B、50SB8、50SB20、50SB22、50SB23、50SB26、50SA2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

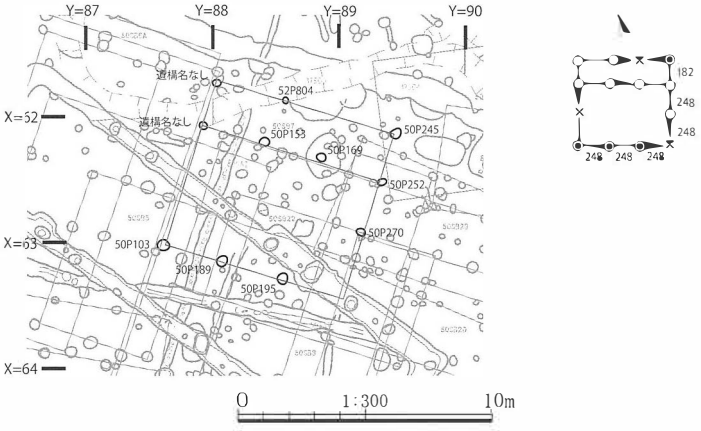


図102　50SB7平面図

50SB8　89－64付近に位置する、５×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図45・46・67・68、図103）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－16°－Eである。10個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から148（4.9尺）・248（８尺）・248・248・148cmに、梁行が330（11

尺）cmに復元できる。桁行方向で北端1間分と南端1間分の両端の柱間が狭く、他の建物跡との相違が顕著で特徴的である。全長は桁行10.4m、梁行3.3mで、平面積は34.32㎡である。柱穴は掘方が径20～35cm程の円形である。7個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は10～18cmほどである。50SB23→50SB8→50SA1の新旧関係が確認できる。50SB7、50SB10、50SB20、50SB22と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

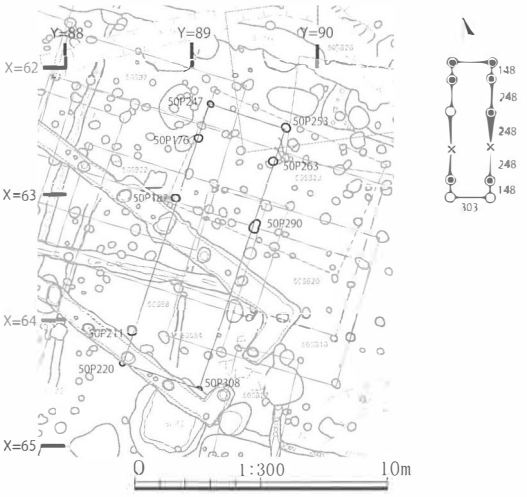


図103　50SB8平面図

50SB9　94－67付近に位置する、6×4間で四面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図53・67、図104）。50次調査で検出された。北東側は調査区外で検出されていないが、4×2間の身舎に、四面に1間の庇が付くとみられる。建物の軸方向はN－20°－Eである。15個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から182（6尺）・224（7.3尺）・224・224・224・242（8尺）cm、梁行が北から182・212（7尺）・212・182cmに復元できる。梁行方向で西側の、庇の出で柱間が狭い。全長は桁行13.2m、梁行7.9mで、平面積は104.28㎡である。柱穴は身舎では掘方が径35～60cm程の円形、庇が掘方径20～45cm程の円形である。9個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎で20cm程、庇で10～18cm程である。精査した柱穴は少ないが、柱痕跡は炭化物を少量含む黒褐色のシルトで確認され、掘方埋土は明黄褐色のシルトで確認される。抜き取り痕跡は褐灰色のシルトである。掘方の底面や埋土中には10cm程の礫が多量に含まれる。50SB19、50SB24、50SB25と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

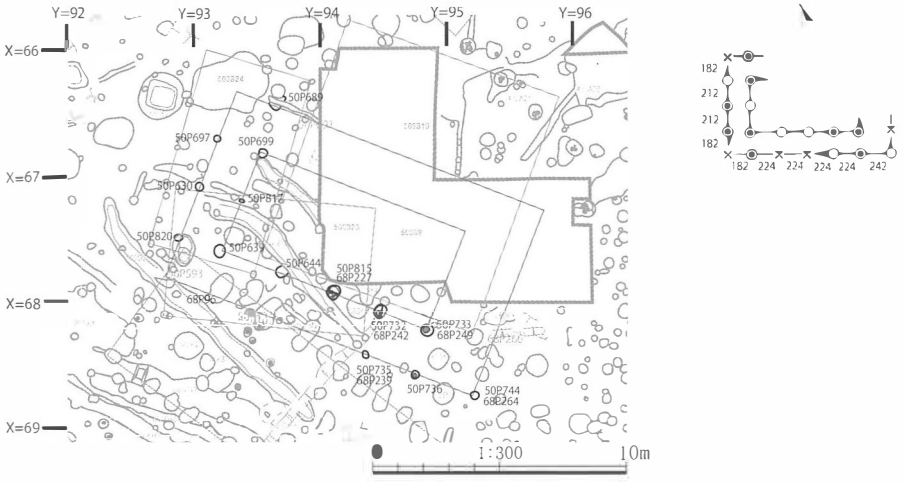


図104　50SB9平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

50SB10　89－63付近に位置する、３×３間で片庇の正方形に近い南北棟掘立柱建物跡である（図版編図45・46・67・68、図105）。50次調査で検出された。３×２間の身舎に、西側に１間の庇が付くと想定した。建物の軸方向はN－16°－Eである。11個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から218（7.2尺）・206（6.8尺）・206cm、梁行が233（7.7尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行6.3m、梁行2.3mで、平面積は14.49㎡である。柱穴は身舎では掘方が径30～45cmほどの円形、庇では掘方が径30～40cm程の円形である。７個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎で18～20cm程、庇で18～20cm程である。50SB10→50SB7の新旧関係が確認できる。50SB8、50SB20、50SB23、50SB27と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

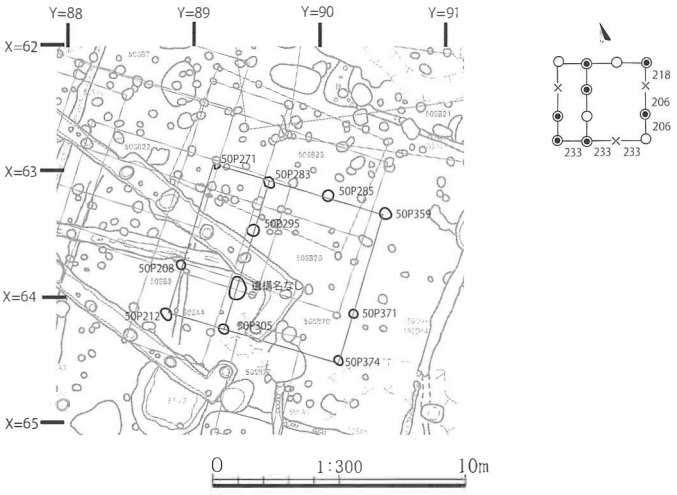


図105　50SB10平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

50SB16　89－66付近に位置する、３×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図46・67・68、図106）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－13°－Eである。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・212・187（6.2尺）cm、梁行が282（9.3尺）cmに復元できる。全長は桁行6.1m、梁行2.8mで、平面積は17.08㎡である。柱穴は掘方径25～35cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は15～20cm程である。50SB17、50SB28、50SA2、50SA7と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

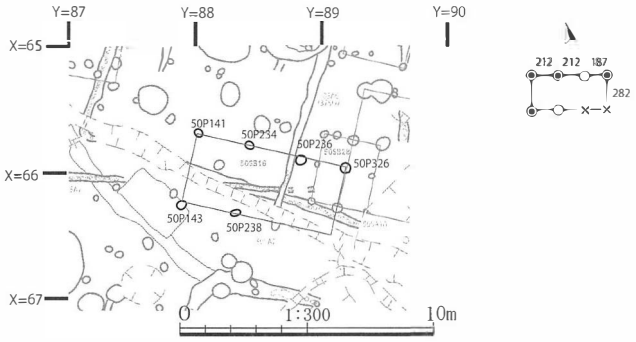


図106　50SB16平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

50SB17　90－65付近に位置する、２×１間で無庇の正方形に近い南北棟掘立柱建物跡である（図版編図46・67・68、図107）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－12°－Eである。５個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が484（16尺）cmの、梁行が242（８尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行4.8m、梁行4.8mで、平面積は23.04㎡である。柱穴は掘方径15～60cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は10～15cm程である。50SA2、50SB16、50SB28と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

50SB18　93－64付近に位置する、3×1間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図53・67、図108）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－12°－Eである。北東側の柱穴は河川による削平で失われているとみられる。5個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が242（8尺）cmの等間に、梁行が524（17.3尺）cmに復元できる。全長は桁行7.3m、梁行5.2mで、平面積は37.96㎡である。柱穴は掘方径50～60cm程の円形である。4個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は15～20cm程である。

50SB19　95－66付近に位置する、5×4間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図53・67、図109）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－20°－Eである。北東側の柱穴は失われている。8個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から167（5.5尺）・212（7尺）・212・212・167cmに、梁行が221（7.3尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行9.7m、梁行8.8mで、平面積は85.36㎡である。柱穴は掘方径45～60cm程の円形である。3個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は20cm程である。50SB9、50SB24、50SB25と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

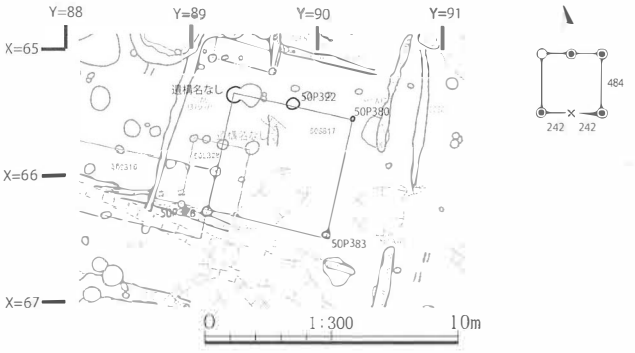


図107　50SB17平面図

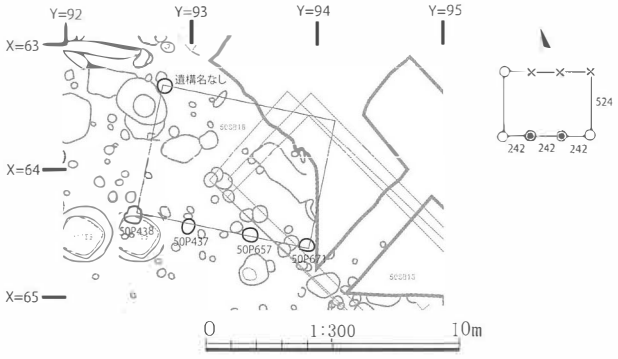


図108　50SB18平面図

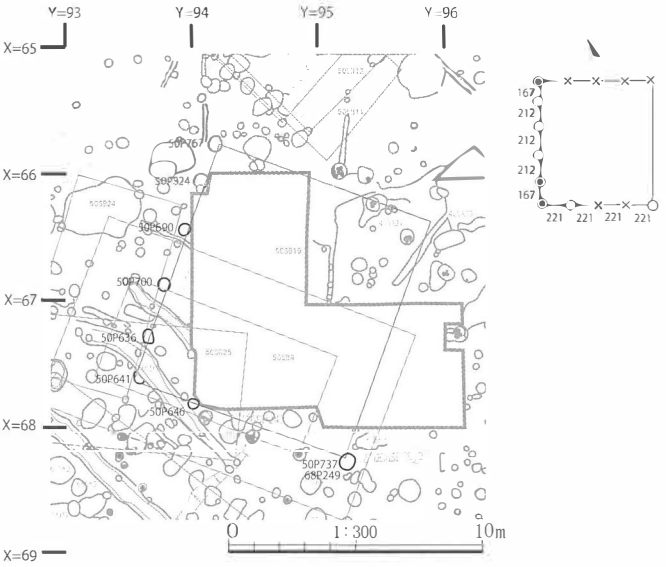


図109　50SB19平面図

50SB20　89－63付近に位置する、４×２間で総柱の東西棟掘立柱建物跡である（図版編 図45・46・53・67・68、図110）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－18°－Eである。12個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が324（10.7尺）cmの、梁行が312（10.3尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行13m、梁行6.2mで、平面積は80.6㎡である。柱穴は掘方径20～40cm程の円形である。10個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は12～18cm程である。平面図での検討からは、50SA1→50SB20の新旧関係が確認できる。50SB7、50SB8、50SB10、50SB23と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

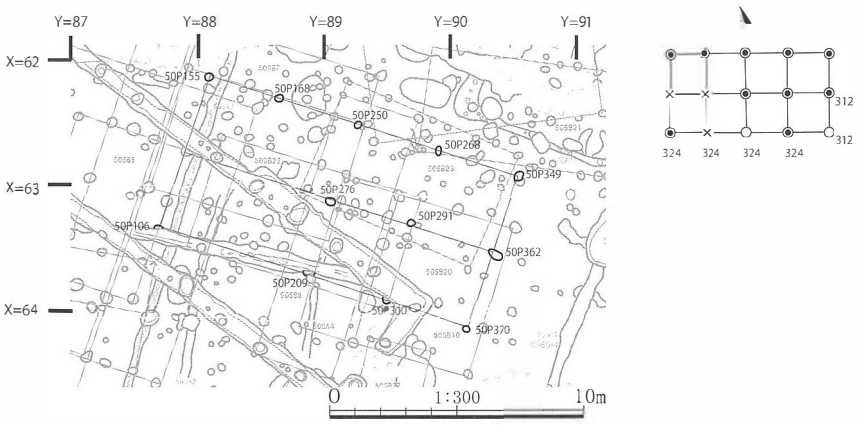


図110　50SB20平面図

50SB21　91－62付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図53・67・68、図111）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－8°－Eである。７個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・227（7.5尺）・212・242（８尺）cmに、梁行393（13尺）cmに復元できる。全長は桁行8.9m、梁行3.9mで、平面積は34.71㎡である。柱穴は掘方径35～40cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は８～18cm程である。50SB23、50SB26と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る

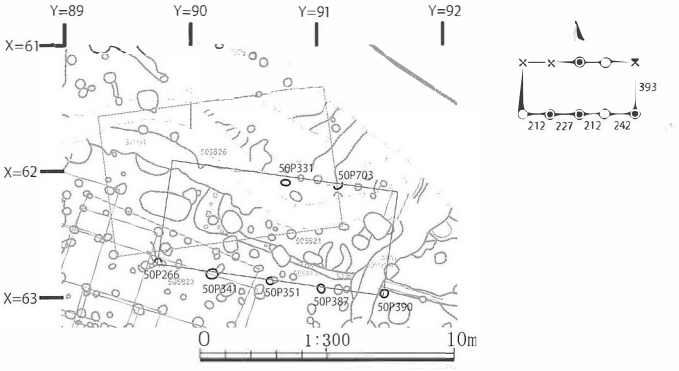


図111　50SB21平面図

50SB22　89－62付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図45・46・53・67・68、図112）。50次調査で検出された。建

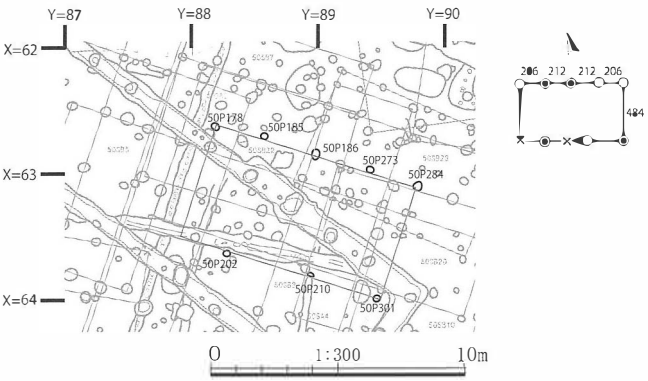


図112　50SB22平面図

物の軸方向はN－20°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から206（6.8尺）・212（７尺）・212・206cmに、梁行が484（16尺）cmに復元できる。南側の桁行柱列で東から２個目の柱穴は配置がややずれており、異なる建物の柱穴の可能性もある。全長は桁行8.4m、梁行4.8mで、平面積は40.32㎡である。柱穴は掘方径25～45cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は８～12cm程である。平面図での検討からは、50SB22→50SA1の新旧関係が確認できる。50SB5、50SB7、50SB8、50SB23と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

50SB23　90－62付近に位置する、４×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図45・46・53・67・68、図113）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－24°－Eである。12個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から191（6.3尺）・203（6.7尺）・191・191cmに、梁行が北から258（8.5尺）・251（8.3尺）cmに復元できる。南側の桁行柱列で東から３個目の柱穴は、配置がややずれる。全長は桁行7.8m、梁行5.1mで、平面積は39.78㎡である。柱穴は掘方径20～30cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は10～15cm程である。平面図での柱穴の切り合いから、50SB23→50SB8の新旧関係が確認できる。50SB7、50SB10、50SB20、50SB21、50SB22、50SB26と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

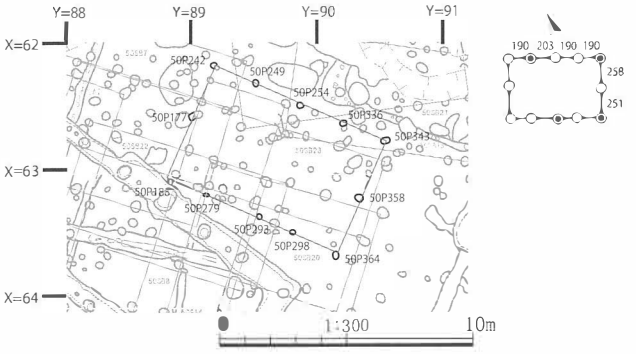


図113　50SB23平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが少量出土している。

50SB24　94－67付近に位置する、４×２間で総柱もしくは無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図53・67、図114）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－17°－Eである。13個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から197（6.5尺）・212（７尺）・197・197cmに、梁行が西から242・189cmに復元できる。全長は桁行8.1m、梁行4.3mで、平面積は34.83㎡である。柱穴は側柱で掘方径20～30cm程の円形、建物内部で掘方径25cm程の円形である。６個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は側柱で８～10cm程、建物内部で８cm程である。50SB9、50SB19、50SB25と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

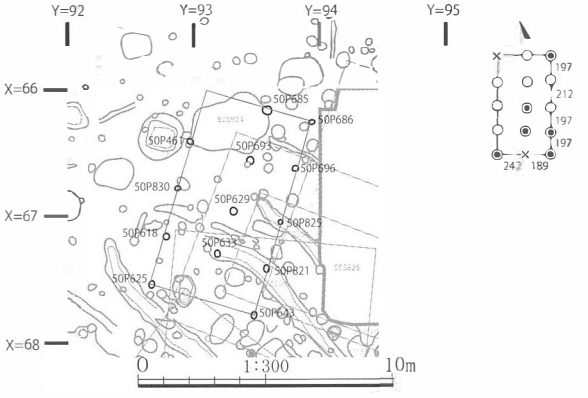


図114　50SB24平面図

50SB25　94－68付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図53・67、図115）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－8°－Eである。８個の柱穴を検出している。北東側の柱穴は失われている。柱間寸法は桁行が西から200（6.6尺）・181（６尺）・200・200cm、梁行が509（16.8尺）cmに復元できる。全長は桁行7.8m、梁行5.1mで、平面積は39.78㎡である。柱穴は掘方径30～40cm程の円形である。５個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は８～15cm程である。50SB9、50SB19、50SB24と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

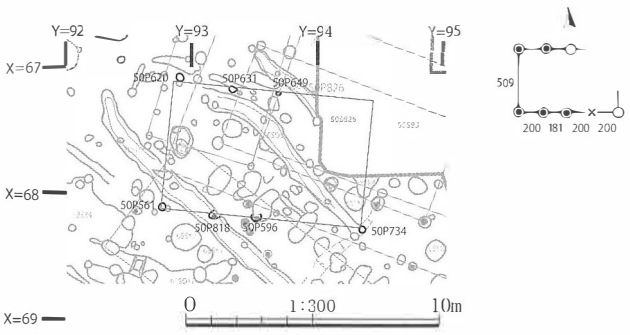


図115　50SB25平面図

50SB26　90－62付近に位置する、４×２間で無庇の東西棟建物跡である（図版編図53・67・68、図116）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－8°－Wである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・272（９尺）・242（８尺）・212cmに、梁行が北から272（９尺）・261（8.6尺）cmに復元できる。全長は桁行9.4m、梁行5.3mで、平面積は49.82㎡である。柱穴は掘方径20～60cm程の円形である。１個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は15cm程である。50SB7、50SB21、50SB23と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

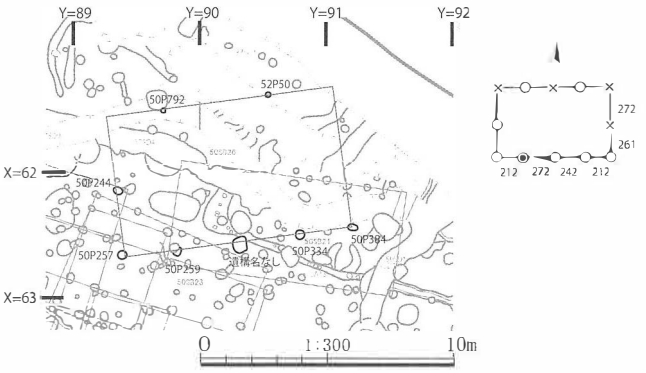


図116　50SB26平面図

50SB27　90－65付近に位置する、２×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図46・67・68、図117）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－13°－Eである。５個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が218（7.2尺）cmの等間に、梁行が251（8.3尺）cmに復元できる。全長は桁行4.4m、梁行2.5mで、平面積は11㎡である。柱穴は掘方径25cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は15cm程である。50SB10建物跡と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

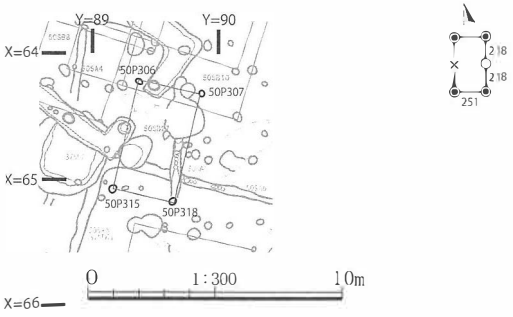


図117　50SB27平面図

50SB28　89－66付近に位置する、２×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図46・67・68、図118）。50次調査で検出された。建物の軸方向はN－9°－Eである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が136（4.5尺）cmの等間に、梁行が221（7.3尺）cmに復元できる。全長は桁行2.7m、梁行2.2mで、平面積は5.94㎡である。柱穴は掘方径15～25cm程の円形である。50SB16、50SB17、50SA2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。柱穴は精査しておらず、時期には不定な部分が残る。

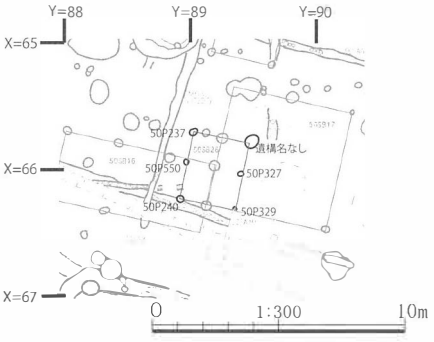
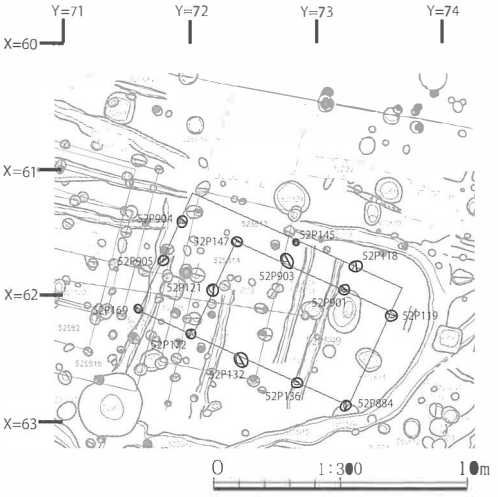


図118　50SB28平面図

52SB14　73－62付近に位置する、４×２間で無庇もしくは５×３間で二面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図31・69、図119）。２×２間の身舎に東西に庇が付く二面庇や、総柱の建物の可能性もある。また、北側で２個の柱穴が柱間寸法109（3.6尺）cmで柱筋の通る位置にあり、一連の建物を構成する可能性もある。52次調査で検出された。建物の軸方向はN－24°－Eである。14個の柱穴を検出している。４×２間の建物の場合、柱間寸法は桁行が227（7.5尺）cmの等間に、梁行が196(6.5尺)・212(７尺)cmに復元できる。北側の庇の出で柱間が狭い。全長は桁行9.1m、梁行4.1mで、平面積は37.31㎡である。柱穴は掘方径35～45cm程の円形である。６個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は22cm程である。52SB14→52SK13の新旧関係が確認できる。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが出土している。



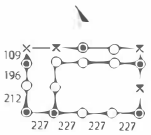
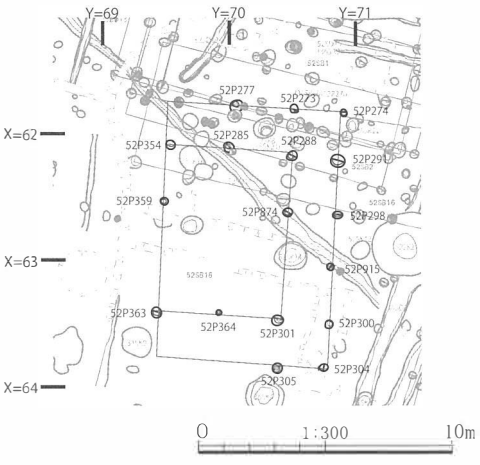


図119　52SB14平面図

52SB18　70－63付近に位置する、５×３間で三面庇の南北棟掘立柱建物跡で



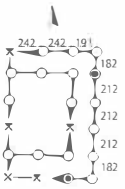


図120　52SB18平面図

ある（図版編図26・69、図120)。52次調査で検出された。３×２間の身舎に、南・北・東の三面に各１間の庇が付く。建物の軸方向はN－5°－Eである。17個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が182（６尺）・212（７尺）・212・212・182cmに、梁行が西から242（８尺）・242（８尺）・191（6.3尺）cmに復元できる。全長は桁行10m、梁行6.8mで、平面積は68㎡である。柱穴は身舎では掘方径25～45cm程の円形で、深さは10～24cm程である。庇では掘方径20～40cm程の円形で、検出面からの深さは５～25cm程である。２個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は13～18cm程である。52SB18→52SK14の新旧関係が確認できる。

52SB19　64－56付近に位置する、５×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図20、図121)。52次調査で検出された。建物の軸方向はN－17°－Eである。14個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から288（9.5尺）・212（７尺）・242（８尺）・303（10尺）・330（11尺）cmに、梁行が西側柱列で北から227（7.5尺）・272（９尺）cmに、東側柱列で北から272（９尺）・227（7.5尺）cmに復元できる。全長は桁行13.8m、梁行５mで、平面積は69㎡である。柱穴は掘方が径25～40cm程の円形で、検出面からの深さは11～48cm程である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は18～24cm程である。52SC1の延長が想定される位置と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

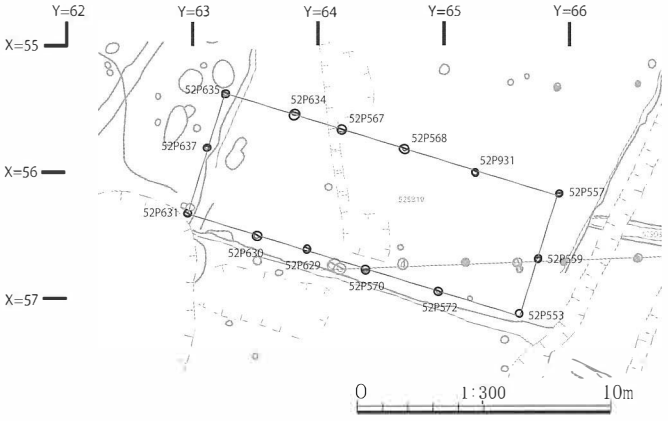


図121　52SB19平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

52SB21　70－65付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図26・69、図122)。52次調査で検出された。なお、52次概報で示した平面形の一部は55SB31の一部として別の建物を構成したため、平面形状を変更している。建物の軸方向はN－12°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から272（９尺）・212（７尺）・212・212cmに、梁行が560（18.5尺）cmに復元できる。全長は桁行9.1m、梁行5.6mで、平面積は50.96㎡である。柱穴は掘方が径20～40cm程の円形で、検出面からの深さが14～50cm程である。５個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は11～20cm程である。52SA1と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

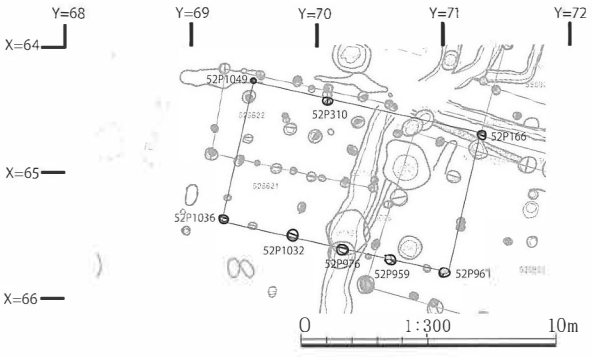


図122　52SB21平面図

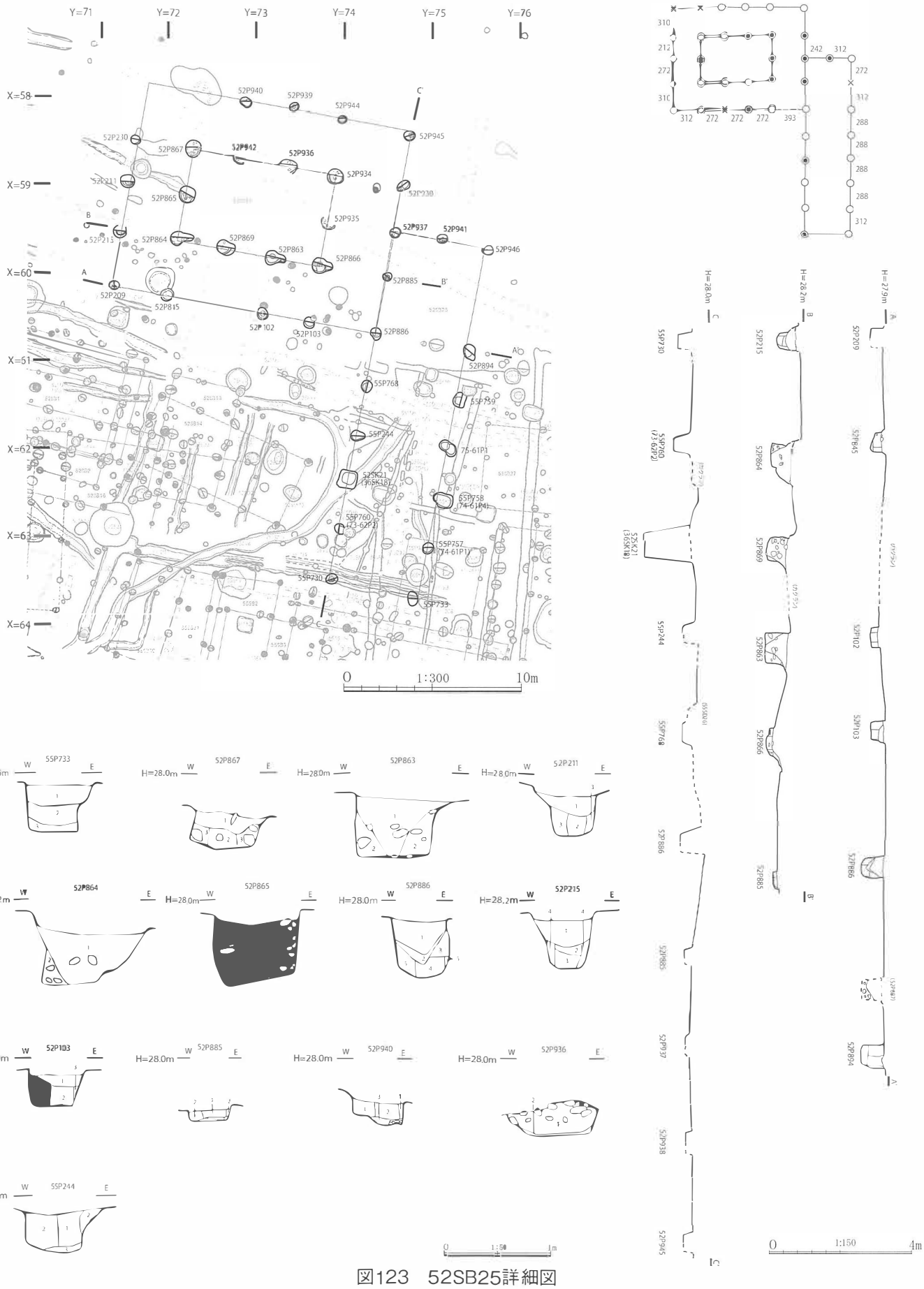


図123　52SB25詳細図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが出土している。

52SB25　73－59付近に位置する、５×４間の四面庇の東西棟掘立柱建物の東側に７×２間の南北棟掘立柱建物が付く（図版編図25・26・31・69、図123)。52・55次調査で検出された。東西棟は、３×２間の身舎に四面に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－10°－Eである。38個の柱穴を検出している。東西棟の柱間寸法は桁行が西から312（10.3尺）・272（９尺）・272・272・393（13尺）cmに、梁行は北から312・272・272・312cmに復元できる。身舎は272cmで柱間寸法に規則性があり、庇の柱間寸法がやや長い。東側の庇がもっとも柱間寸法が長い。全長は桁行15.2m、梁行11.7mで、平面積は177.84㎡である。柱穴は身舎では掘方径70～110cm程で円形もしくは抜き取りとみられる楕円形で、検出面からの深さは20～84cm程である。庇では掘方径40～60cm程で、検出面からの深さは14～66cm程である。南北棟は３個の柱穴は東西棟と共通である。柱間寸法は桁行が北から272・312・288（9.5尺）・288・288・288・312cmに、梁行が西から242（８尺）・312cmに復元できる。全長は桁行20.5m、梁行5.5mで、平面積は112.75㎡である。柱穴は掘方径40～100cm程で、検出面からの深さは25～60cm程である。身舎がやや大きい。柱痕跡が確認できる柱穴は、東西棟の身舎で柱径25～35cm程に、庇で24～30cm程に、南北棟では25～30cm程に想定できる。柱痕跡が確認できる柱穴は浅い遺構が多く、抜き取り痕の下部に残存した柱痕跡を確認できたものとみられる。いくつかの柱穴（52P936・P934・P865・P944）では礎板をもつ。柱痕跡は黒色もしくは黒褐色の粘性の強い土層で確認され、掘方埋土は黄褐色の粘土質の土層で確認される。抜き取り痕跡が確認される柱穴が多く、黒色土のブロックが混じる黄褐色の粘土で構成される。掘方埋土および抜き取り痕跡に礫を多く含む柱穴が多い。52SE7､52SD30（52SC1の北側側溝のうち旧期の遺構）→52SB25の新旧関係が確認できる。52SK37、55SK15と空間的に重複する。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが出土している。

52SB26　73－67付近に位置する、４×３間で二面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図32・70・71、図124)。31次調査で検出され31SA3と認識されていた遺構を含み、52次調査で全形が検出され建物と認定された。３×２間の身舎に、北と西の二面に１間の庇が付く。四面庇の可能性もあるが、東辺及び南辺の想定位置には柱穴が確認されていない部分が多いため、二面庇建物と想定した。建物の軸方向はN－1°－Eである。15個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から188（6.2尺）・212（７尺)・212・188cmに、梁行は西から188・212・212cmに復元できる。全長は桁行８m、梁行6.1mで、平面積は48.8㎡である。柱穴は身舎では掘方が径20～35cm程の円形で、検出面からの深さは20～50cm程である。庇では掘方の径が30～40cm程で、検出面からの深さは40～50cm程である。柱

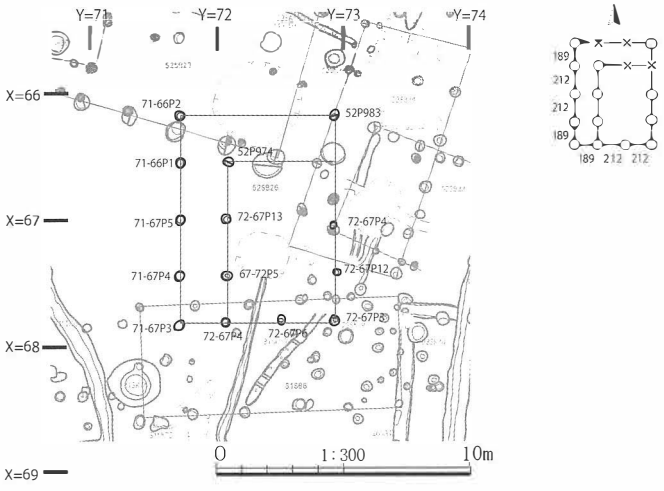


図124　52SB26平面図

痕跡は黄灰色のシルトで確認され、掘方埋土は浅黄色の粘土ブロックを主に黄灰色のシルトを含む。抜き取りが確認できる物は、暗灰黄色のシルトに浅黄色の粘土ブロックを含む土層で埋め戻される。31SB6と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

52SB27　69－56付近に位置する、３（４）×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図25、図125）。52次調査及び56次調査で検出された。建物の軸方向はN－9°－Eである。９個の柱穴を検出している。桁行の柱穴は３個の検出だが、東側の柱間寸法が長いため、一部の柱穴が失われている可能性がある。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・272（９尺）・454（15尺）cmに、梁行は242cmの等間に復元できる。全長は桁行9.4m、梁行4.8mで、平面積は45.12㎡である。柱穴は掘方径が25～50cm程の円形である。５個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は８～15cm程である。56SE2と空間的に重複する。精査しておらず、切り合いは不明確な部分が残る。

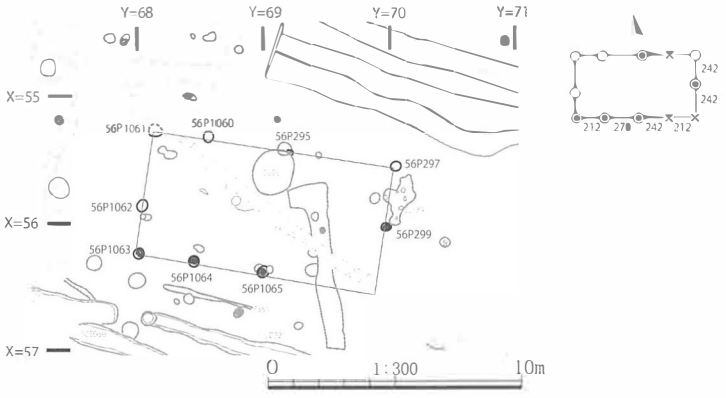


図125　52SB27平面図

55SB5　78－52付近に位置する、７×４間で二面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図30・37・65、図126）。７×２間の身舎に、東西の二面に１間の庇が付く。このほか、北から２間目の柱列には身舎内に柱穴が１個検出されている。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－6°－Eである。34個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（７尺）・242（８尺）・242・242・212・242・242cmに、梁行が西から303（10尺）・242・242・212cmに復元できる。全長は桁行16.1m、梁行10mで、平面積は161㎡である。柱穴は北側の柱列で掘方径が30～40cmとやや小型である。その他は身舎では掘方径55～70cm程、検出面からの深さは30～60cm程である。庇では掘方径50～70cm程で、検出面からの深さは10～20cmである。13個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎では20cm程、庇では15cm程である。抜き取りが確認できるものが多く、柱痕跡が確認できる柱穴も抜き取り痕等の下部に残存した柱痕跡を確認した状況とみられる。柱痕跡は黒褐色を主体に、炭化物や焼土粒、黄褐色粘土ブロックを含む土層で確認される。掘方埋土は淡黄色の粘土ブロックで確認される。柱穴の最下部に礎板の痕跡と想定できる土層が確認できる柱穴もある。抜き取り痕跡は炭化物や焼土粒を含む黄褐色土の粘土ブロックや黒褐色土で埋め戻される。55SK42→55SB5→55SB6の新旧関係が確認できる。55SB17と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からかわらけが出土している。ロクロかわらけでほぼ占められ、手づくねかわらけと判断できるのは２片のみである。柱穴から出土した資料５点を図示した。ロクロかわらけだが、いずれも細片が多く、器形を復元したものの全形は復元できていない。柱状高台を含む。

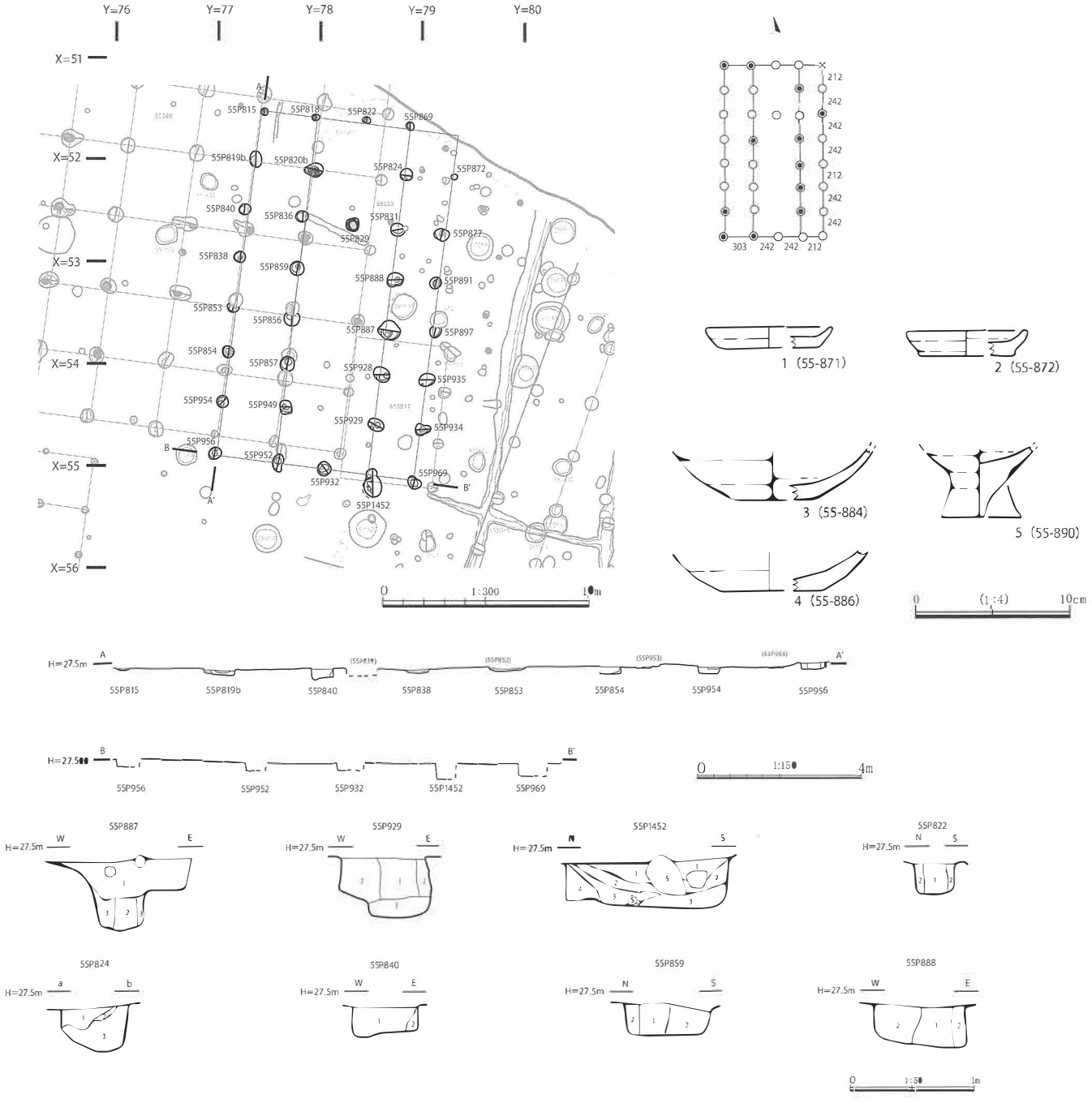
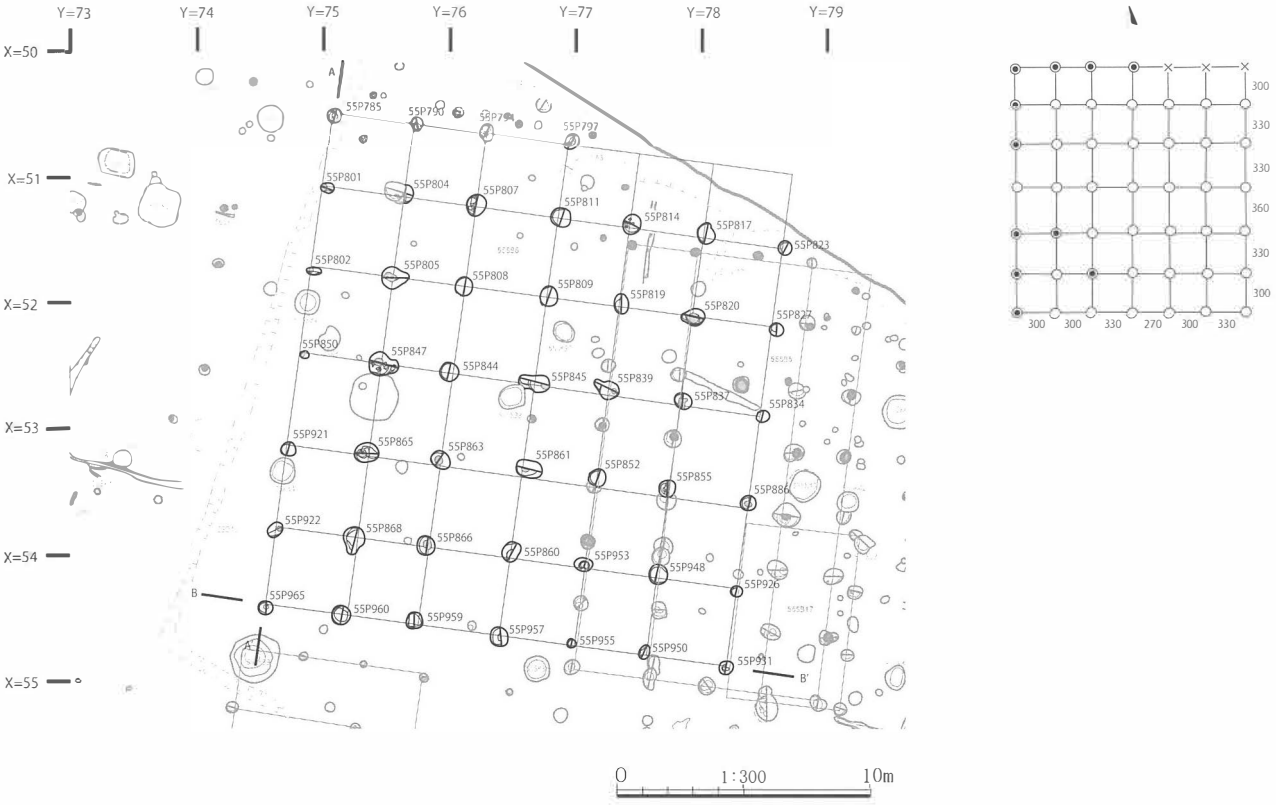
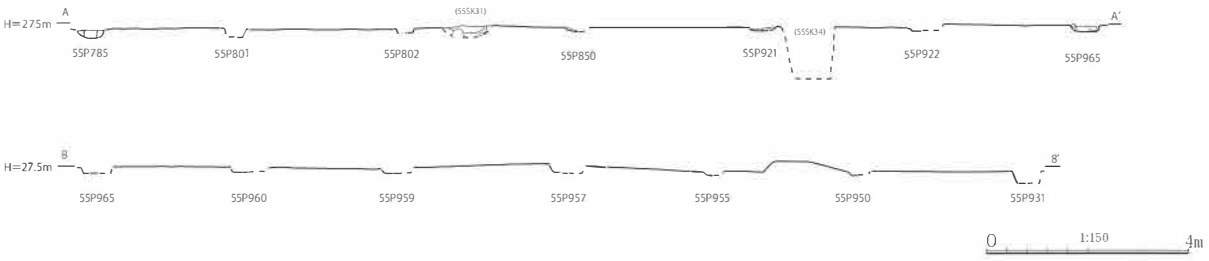
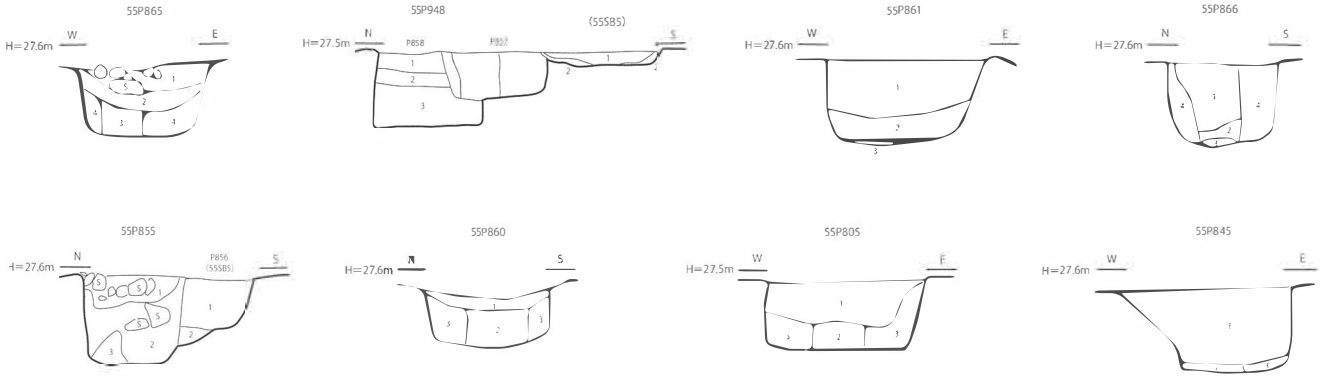


図126　55SB5詳細図

55SB6　76－52付近に位置する、６×６間で総柱のほぼ正方形の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図30・37・65、図127）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－8°－Eである。46個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から300（10尺）・330（11尺）・330・360（12尺）・330・300cmに、梁行が西から300（10尺）・300・330・270（９尺）・300・330cmに復元できる。全長は桁行19.8m、梁行18.3mで、平面積は362.34㎡である。柱穴は西端部の柱列が掘方径30～50cm程で検出面からの深さ







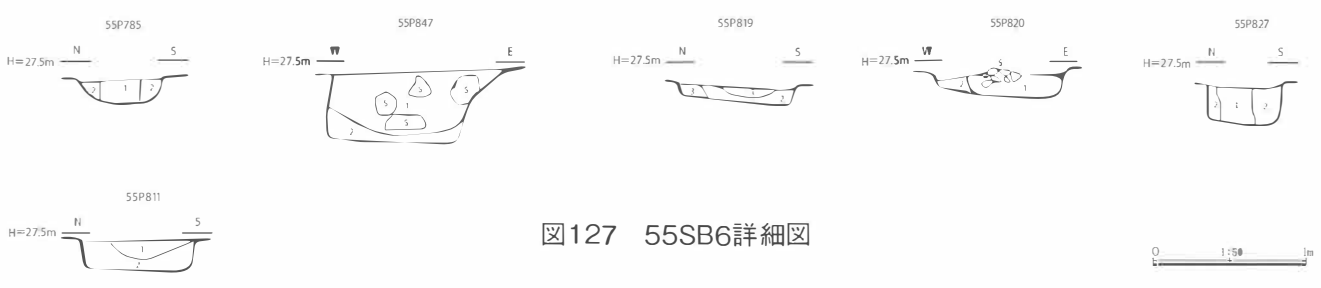


図127　55SB6詳細図

が10～20cm程とやや小型で、東端部の柱列が掘方径40～50cm程で、検出面からの深さは５～20cm程である。その他の柱穴は掘方径60～70cm程の円形で、径20～50cm程の抜き取り痕が付く。11個で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は20～30cm程である。抜き取り痕をもつものが多く、確認された柱痕跡も同様に抜き取りが行われた下部に残存した柱痕跡を確認した状況とみられる。柱痕跡は黒褐色や褐灰色のシルトに黄橙粘土のブロックが混じる土層で確認され、掘方埋土は黄橙色の粘土ブロックに炭化物や礫、黒褐色や灰褐色のシルトが混じる。抜き取り痕跡で確認できる柱穴が多いが、これらは礫や炭化物、焼土粒を含み黄橙色の粘土を主体に黒色土などのシルトブロックが混じる土層で埋め戻される。柱間寸法からは２棟程度の建物に分離する可能性もあるが、柱筋の軸方向は同一で重複もないため１棟の建物と把握した。55SB5→55SB6の新旧関係が確認できる。

遺物　柱穴からかわらけが出土している。ロクロかわらけで占められ、手づくねかわらけと判断できるのは１片のみである。いずれも細片で、摩滅が著しい資料が多い。

55SB8　82－58付近に位置する、６×３間で三面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・38・65、図128）。４×２間の身舎に、東・南・西の三面に各１間の庇が付く。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－4°－Eである。22個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から121（４尺）・197（6.5尺）・197・197・197・121cmに、梁行が北から230（7.6尺）・230・121cmに復元できる。全長は桁行10.3m、梁行5.8mで、平面積は59.74㎡である。柱穴は身舎では掘方径30～50cm程の円形で、検出面からの深さは15～50cm程である。庇では掘方径25～50cm程の円形で、検出面からの深さは20～50cm程である。10個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎で15cm程、庇で15～18cm程である。55SB8→55SK60の新旧関係が確認できる。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねのかわらけが出土している。ロクロかわらけで占められ、手づくねかわらけは少ない。ロクロかわらけ２点を図示した。

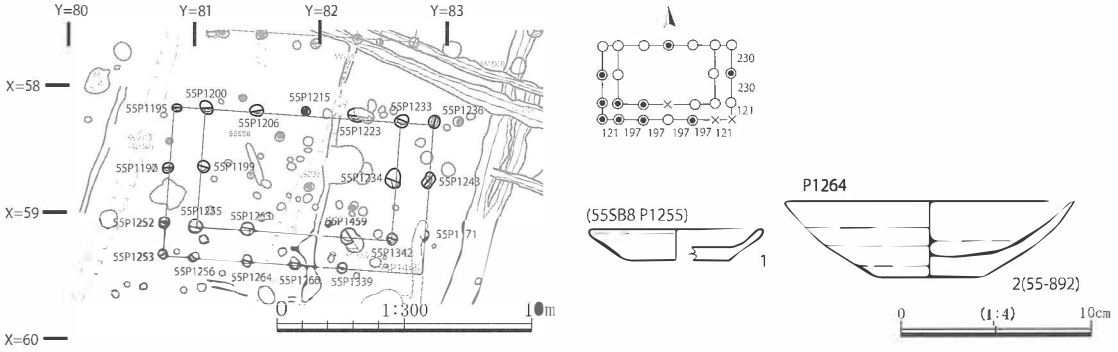


図128　55SB8平面図

55SB9　82－57付近に位置する、４×３間で二面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65、図129）。３×２間の身舎に、北・東の二面に各１間の庇が付く。55次調査で検出された。１・２次総括でHSB3とした建物を含む（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－9°－Eである。15個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から160（5.3尺）・212（７尺）・242（８尺）・121（４尺）cmに、梁行が北から121・260（8.6尺）・242cmに復元できる。全長は桁行7.4m、梁行6.2mで、平面積は45.88㎡である。柱穴は身舎では掘方が径25～35cm程の円形で、検出面からの深さは15～50cm程である。

庇では掘方が径25～40cm程の円形で、検出面からの深さは25～40cm程である。８個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎で13～18cm程、庇で10～15cm程である。

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。ロクロかわらけ１点を図示した。

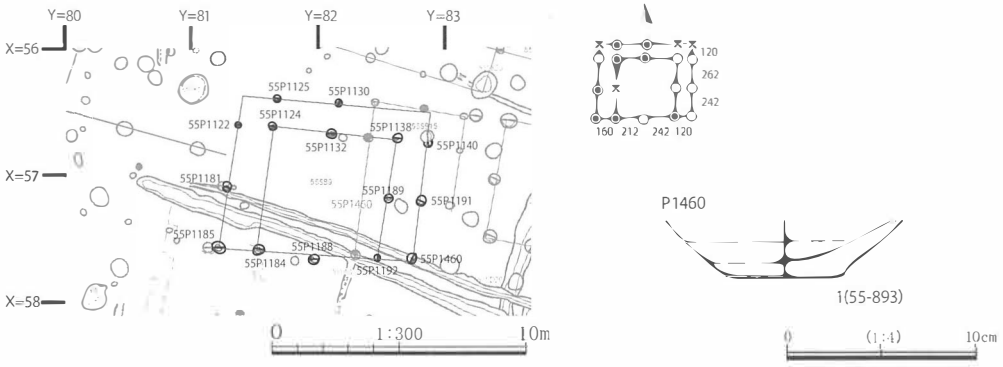


図129　55SB9平面図

55SB10　84－57付近に位置する、４（５）×２間で片庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・45・65、図130）。３×２間の身舎に、東側に１間の庇が付く。西側に１間の庇が付き二面庇になる可能性もあるが、柱穴が確認されていない箇所が多く、柱間寸法も勘案して片庇と想定した。55次調査で検出された。1・2次総括でHSB2とした遺構を含む（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－10°－Eである。12個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から197（6.5尺）・394（13尺）・197・121（４尺）cmに、梁行が北から242cm（８尺）の等間に復元できる。全長は桁行9.1m、梁行4.8mで、平面積は43.68㎡である。柱穴は掘方径30～55cm程の円形で、検出面からの深さは10～50cm程である。図面上の検討では、柱穴と重複から55SB10→55SX1の新旧関係をもつ可能性がある。

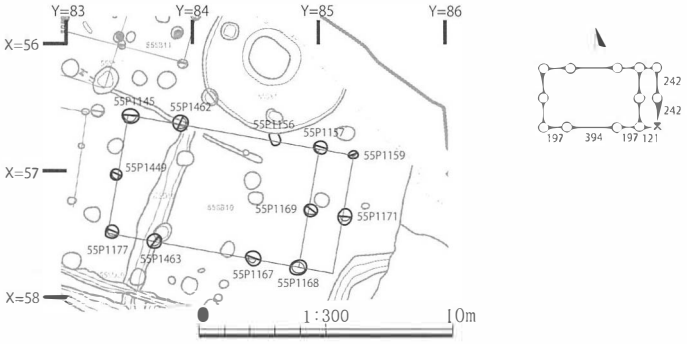


図130　55SB10平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB11　82－54付近に位置する、５×３間で片庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65・66、図131）。５×２間の身舎に、南側に１間の庇が付く。北側に建物が延びる余地があろうが、河川による削平を受けて失われている。55次調査で検出された。１・２次総括でHSB6とした遺構を含む（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－15°－Eである。13個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から242（８尺）・242・242・242・251（8.3尺）に、梁行が北から200（6.9尺）・227（7.5尺）・191（6.3

尺）cmに復元できる。全長は桁行12.2m、梁行6.2mで、平面積は75.64㎡である。柱穴は身舎では１個を除いて掘方径20～40cm程の円形で、検出面からの深さは11～12cm程である。庇では掘方径30～40cm程の円形で、検出面からの深さは6～22cm程である。55SB12、55SB13、55SB14と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

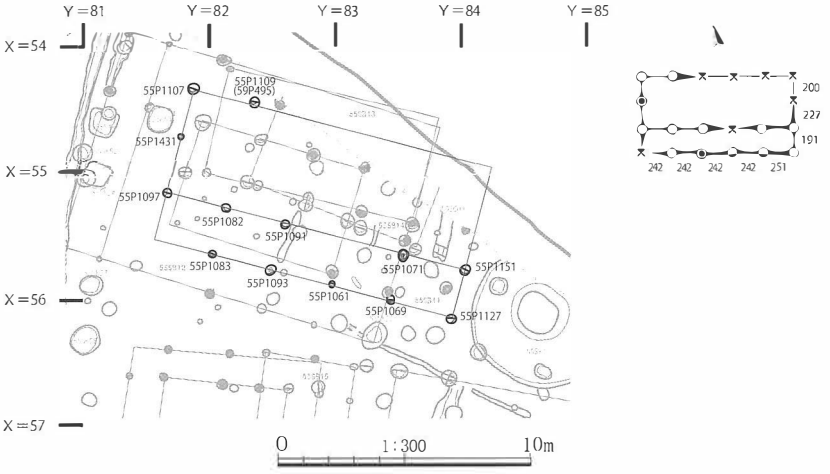


図131　55SB11平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB12　82－54付近に位置する、６×４間で四面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65・66、図132）。４×２間の身舎に、四面に各１間の庇が付き、西側にさらに１間の孫庇が付く。55次調査で検出された。１・２次総括でHSB7とした遺構を含む（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－14°－Eである。20個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から181（６尺）・212（７尺）・242（８尺）・212・212・242cmに、梁行が北から242・242・212・212cmに復元できる。全長は13m、梁行9.1mで、平面積は118.3㎡である。柱穴は身舎では掘方が径40～60cm程の円形で、検出面からの深さは10～20cm程である。庇では掘方が径35～45cm程の円形で、検出面からの深さは10～15cm程である。孫庇では掘方が径30～40cm程の円形で、検出面からの深さは25cm程である。８個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎では20cm程、庇では18cm程、孫庇では18cm程である。55SD17→55SB12→55SD18の新旧関係が確認できる。55SB11、55SB13、55SB14と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

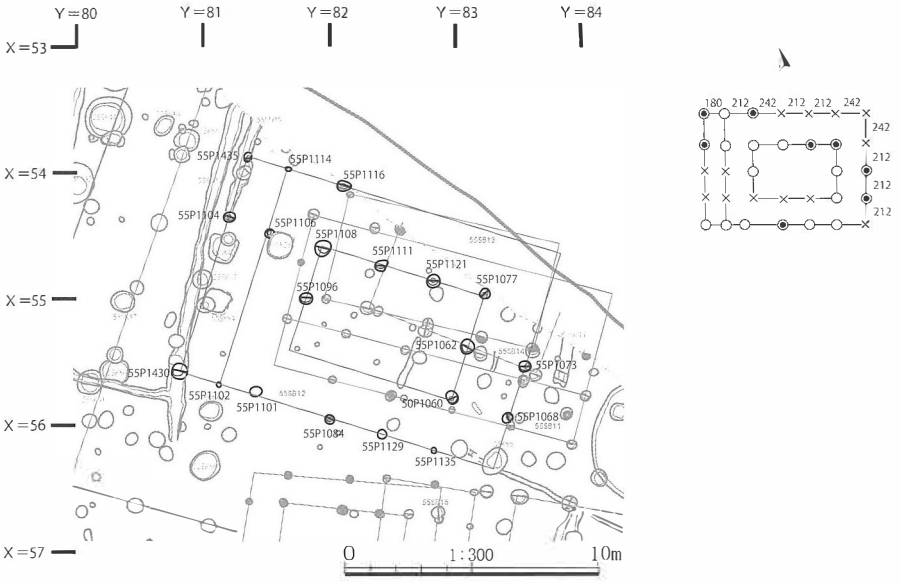


図132　55SB12平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB13　83－54付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65・66、図133）。55次調査で検出された。1・2次総括でHSB1とした遺構を含む（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－13°－Eである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が212（７尺）cmの等間に、梁行が424（14尺）cmに復元できる。全長は桁行8.5m、4.2mに、平面積は35.7㎡である。柱穴は掘方が径30～55cm程の円形で、検出面からの深さは10～30cm程である。２個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は18cm程である。55SB13→55SB14の新旧関係が確認できる。55SB11、55SB12と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

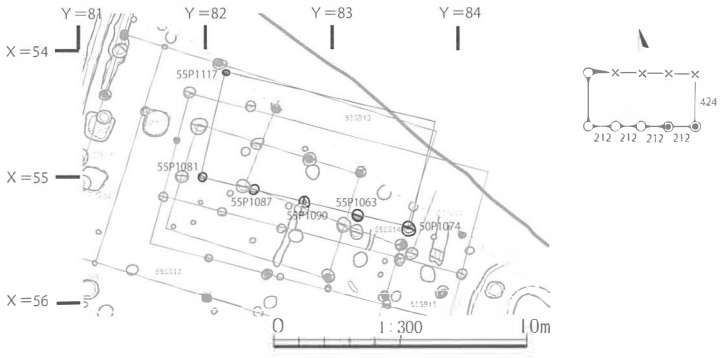


図133　55SB13平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB14　83－54付近に位置する、３×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65・66、図134）。55次調査で検出された。1・2次総括でHSB10とした遺構を含む（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－20°－Eである。５個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が242（８尺）cmの等間に、梁行が330（11尺）cmに復元できる。全長は桁行7.3m、梁行3.3mで、平面積は24.09㎡である。柱穴は掘方が径40～45cm程の円形で、検出面からの深さは13～40cm程である。１個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は20cm程である。55SB13→55SB14の新旧関係が確認できる。55SB11、55SB12と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

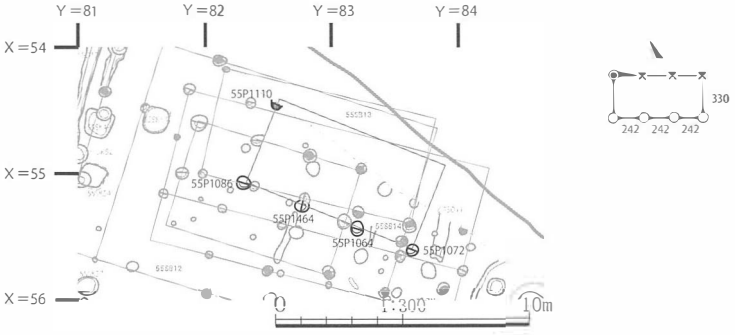


図134　55SB14平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB16　79－57付近に位置する、３×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65、図135）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－13°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から230（7.6尺）・230・212（７尺）cmに、梁行が330（11尺）cmに復元できる。全長は桁行6.7m、梁行3.3mで、平面積は22.11㎡である。柱穴は掘方が径20～60cm程の円形である。

遺物　柱穴は精査していないが、柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが少量出土している。ロクロかわらけ１点を図示した。

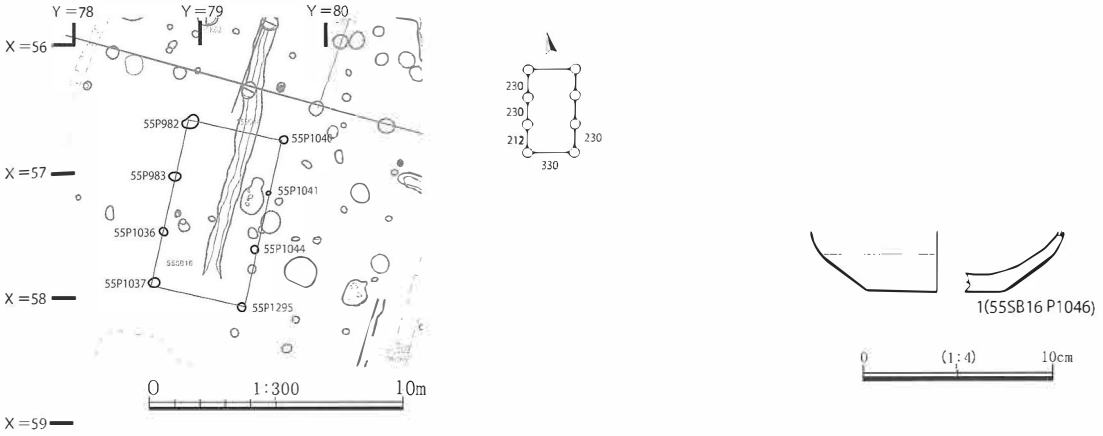


図135　55SB16平面図

55SB17　79－54付近に位置する、３×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図37・65、図136）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－7°－Eである。４個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から230（7.6尺）・242（８尺）・212（７尺）cmに、梁行が454（15尺）cmに復元できる。全長は桁行6.8m、梁行4.5mで、平面積は30.6㎡である。柱穴は掘方が径40～65cm程の円形で、検出面からの深さが７～20cm程である。55SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが少量出土している。

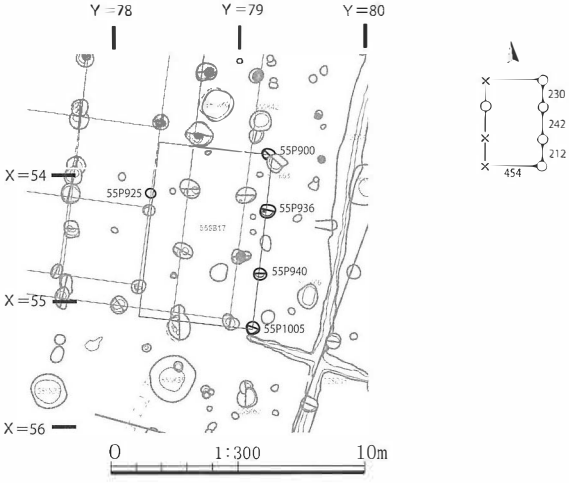


図136　55SB17平面図

55SB18　75－55付近に位置する、４×３間で二面庇の南北が長軸となる東西棟掘立柱建物跡である（図版編図30・31・65、図137）。南北が東西より長いが、身舎の柱配置から東西軸として記す。55次調査で検出され

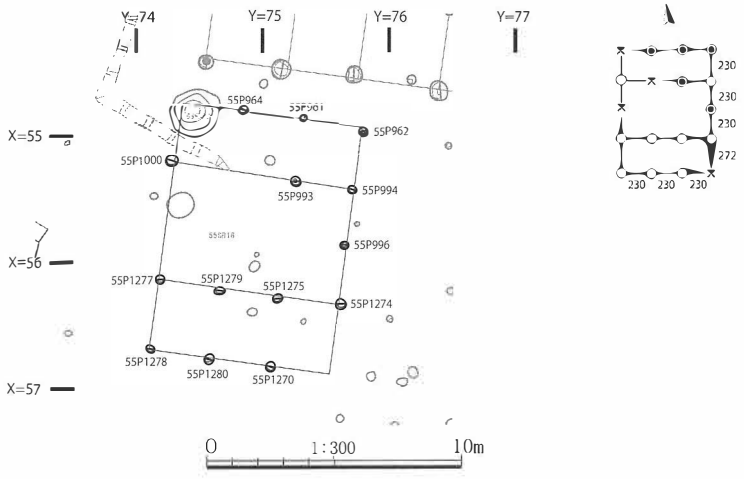


図137　55SB18平面図

た。建物の軸方向はN－8°－Eである。14個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が230（7.6尺）cmの等間に、梁行が北から230・230・230・270（9尺）cmに復元できる。全長は桁行6.9m、梁行9.6mで、平面積は66.24㎡である。柱穴は身舎では掘方が径25～40cm程の円形で、検出面からの深さは5～15cm程である。庇では掘方が径25～35cm程の円形で、検出面からの深さは6～20cm程である。4個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は身舎で15cm程、庇で15cm程である。55SB18→55SK38の新旧関係が確認できる。

55SB19　76－63付近に位置する、9×2間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図32・69、図138）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－8°－Eである。20個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から121（4尺）・121・91（3尺）・121・91・91・121・121・212（7尺）cmに、梁行が西から272（9尺）・242（8尺）cmに復元できる。桁行方向の柱間が狭く、規則性が弱い。全長は桁行10.9m、梁行4.8mで、平面積は52.32㎡である。柱穴は40～45cm程の円形で、検出面からの深さは5～35cm程である。柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は18～25cm程である。抜き取りの痕跡が1個の柱穴で確認できる（55P205）。また、5個の柱穴（55P125・141・143・185・202）で平瓦が底面に置かれ、瓦による礎板が確認できる。瓦は平瓦1類としたものである。柱痕跡は灰黄褐色シルトに、黄橙色粘土ブロックを少量含む土層で確認され、掘方埋土は黄橙色の粘土を主に褐灰色や灰黄褐色のシルトブロックを含む土層で確認される。抜き取り痕跡は黄橙色の粘土ブロックを含む土層で埋め戻される。36SA2→55SB19の新旧関係が確認できる。55SB29と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが少量出土している。ロクロかわらけ1点を図示した。

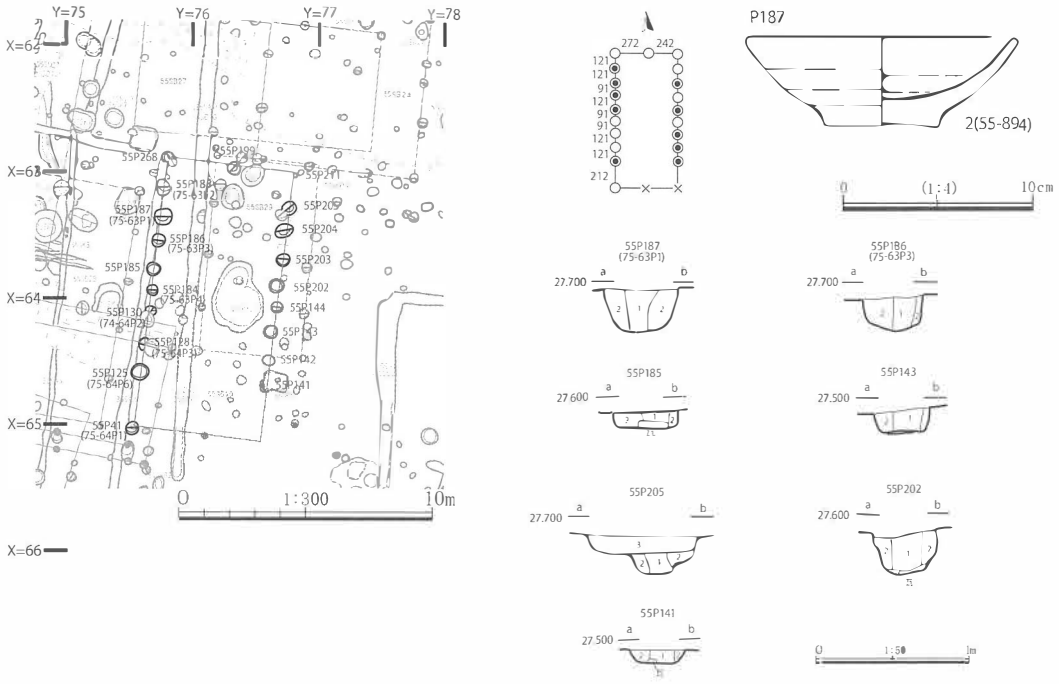


図138　55SB19詳細図

55SB20　77－66付近に位置する、5×2間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図32・71・

72、図139)。28・55次調査で検出され、59次調査で再度確認された。建物の軸方向はN－12°－Eである。13個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から242（８尺）・230（7.6尺 ）・242・242・242cmに、 梁行が西から281（9.3尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行12m、梁行5.6mで、平面積は67.2㎡である。柱穴は掘方が径45～60cm程の円形で、検出面からの深さは10～35cm程である。柱痕跡は灰黄色シルトで、掘方埋土は地山とみられる黄褐色粘土で確認される。抜き取り痕跡は灰黄褐色シルトを主体に、黄褐色粘土ブロックを多く含む土層で埋め戻される。55SB20→28SA1の新旧関係が確認できるが、図面の記載からは判然としない部分が残る。31SB7、55柱列１と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

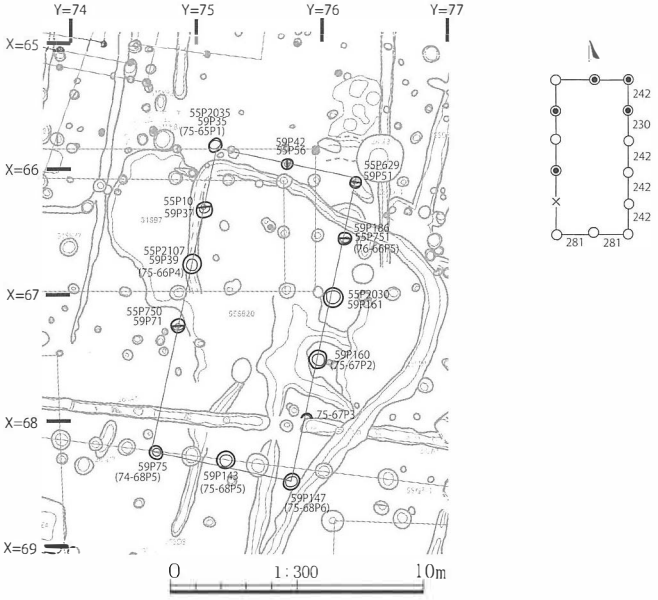


図139　55SB20平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

55SB21　79－65付近に位置する、３×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図38・71・72、図140)。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－12°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（７尺）・230（7.6尺)・230cmに、梁行が242（８尺）cmに復元できる。全長は桁行6.7m、梁行2.4mで、平面積は16.08㎡である。南側の梁行柱列は２間の可能性もある。柱穴は掘方が径40～45cm程の円形で、検出面からの深さは10～24cm程である。平面図での記載からは55SA1→55SB21の新旧関係が確認できる。55SB21と55柱列2が平行し、55SA1→55柱列2の新旧関係とみられることからも、55SA1→55SB21の新旧関係が窺える。55SB21と55柱列2は軸方向が一致しており、関連が想起される。

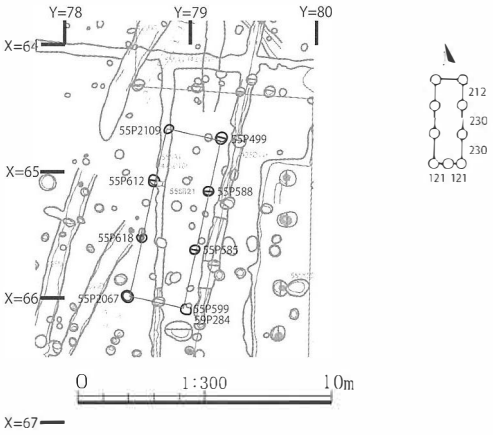


図140　55SB21平面図

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB23　75－65付近に位置する、４×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図32・69、図141)。28・55次調査で検出され、59次調査で再度確認された。建物の軸方向はN－20°－Eである。９個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から272（９尺）・182（６尺）・182・182cmに、梁行が288（9.5尺）cmに復元できる。全長は桁行8.2m、梁行2.9mで、平面積は23.78㎡である。柱穴

は掘方が径25～45cm程の円形で、検出面からの深さは10～20cm程である。31SB7、36SA3、36SA4と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

55SB24　77－62付近に位置する、３×３間で無庇のほぼ正方形を呈する掘立柱建物跡である（図版編図31・69、図142）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－6°－Eである。12個の柱穴で検出している。柱間寸法は、便宜的に南北方向の桁行が212（７尺）cmの等間に、東西方向の梁行が212（７尺）cmの等間に復元できる。全長は桁行6.4m、梁行6.4mで、平面積は40.96㎡である。柱穴は掘方が径30～40cm程の円形で、検出面からの深さは10～28cm程である。５個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は12～20cm程である。55SB27、55SB29と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

55SB25　80－67付近に位置する、３×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図38・39・70・71、図143）。28・55次調査で検出され、59次調査で再度確認された。建物の軸方向はN－1°－Eである。７個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（７尺）・212・242（８尺）cmに、梁行が393（13尺）cmに復元できる。全長は桁行6.7m、梁行3.9mで、平面積は26.13㎡である。柱穴は掘方が径20～50cm程の円形で、検出面からの深さは5～30cm程である。２個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は10cm程である。55SB25→55SX2の新旧関係が確認できる。28SB6と空間的に重複するが遺構の切り合いは少なく、55次調査時で既に完掘されており新旧は不明である。

遺物　柱穴からロクロ及び手づくねかわらけが出土している。

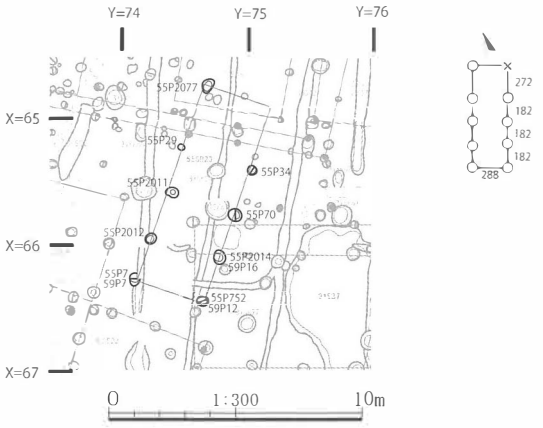


図141　55SB23平面図

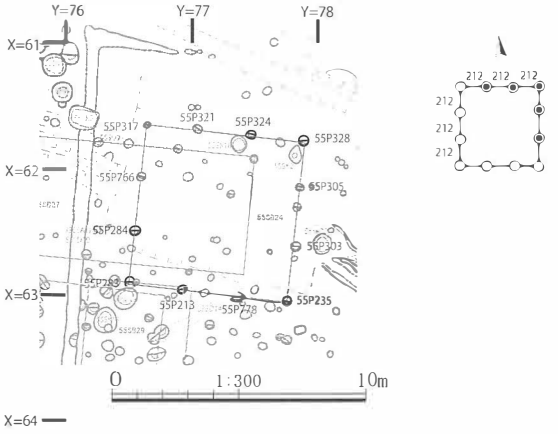


図142　55SB24平面図

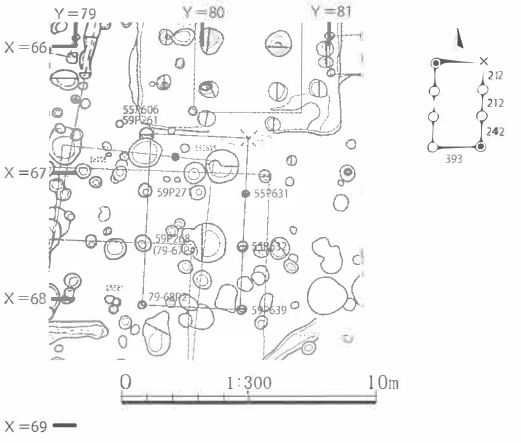


図143　55SB25平面図

55SB27　76－62付近に位置する、３×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図31・69、図144）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－4°－Eである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が318（10.5尺）cmの等間に、梁行が484（16尺）cmに復元できる。全長は桁行9.5m、梁行4.8mで、平面積は45.6㎡である。柱穴は掘方が径25～30cm程の円形で、検出面からの深さは10～22cm程である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は13～20cm程である。55SB24と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

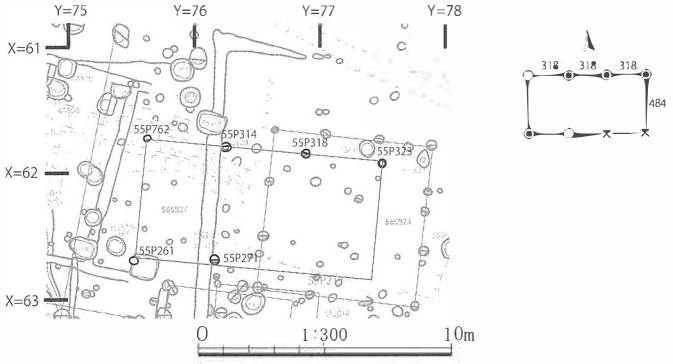


図144　55SB27平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

55SB29　77－63付近に位置する、４×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図31・32・69、図145）。55次調査で検出された。建物の軸方向はN－7°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から182（６尺）・212（７尺）・212・182cmに、梁行が409（13.5尺）cmに復元できる。全長は桁行7.9m、梁行4.1mで、平面積は32.39㎡である。柱穴は掘方が径20～30cm程の円形で、検出面からの深さは10～22cm程である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は10cm程である。55SB19、55SB24と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

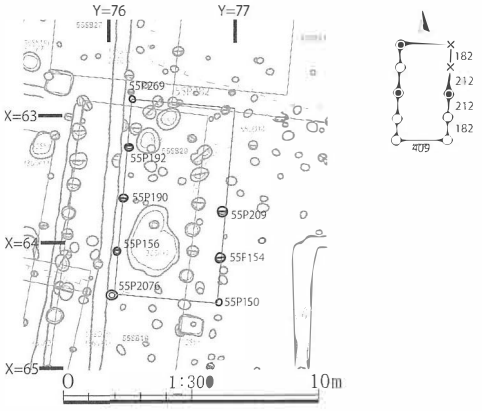


図145　55SB29平面図

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

56SB1　59－52付近に位置する、３（４）×２（３）間で無庇もしくは三面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図14、図146）。３×２間の無庇の建物もしくは３×２間の身舎に西・北・東の三面に各１間の庇が付く三面庇の建物と想定できる。身舎と庇で柱穴の規模が大きく異なり、確認されていない場所も複数

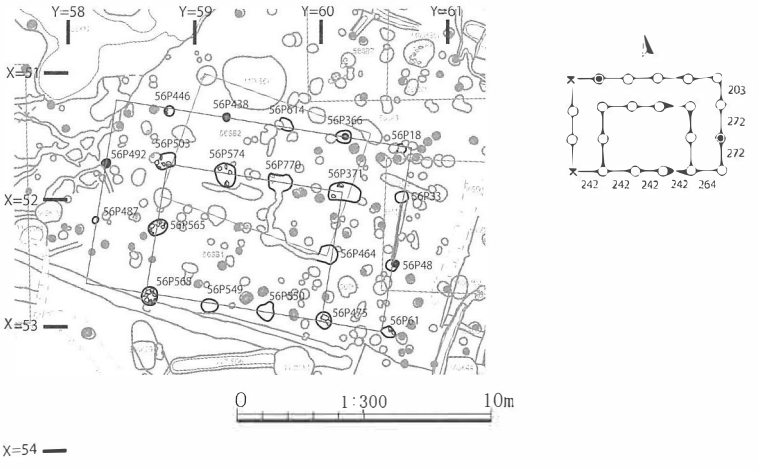


図146　56SB1平面図

みられる。規模などからは南側にも庇が付く四面庇の形状も想定できるが、後世の溝により柱穴の想定位置が失われており確定できない。11次調査で検出され（11次２号建物）、56次調査で再度確認された。建物の軸方向はN－7°－Eである。20個の柱穴を検出している。三面庇建物とみた場合、柱間寸法は桁行が西から242（８尺）・242・242・242・264（8.7尺）cmに、梁行が北から203（6.7尺）・272（９尺）・272cmに復元できる。全長は9.9m、梁行7.5mで、平面積は74.25㎡である。無庇とみた場合、柱間寸法は桁行が242cm、梁行が272cmの等間に復元でき、全長は桁行7.3m、梁行5.4mで、平面積39.42㎡である。柱穴は身舎では掘方が55～80cm程の楕円形、庇では30～40cm程の円形である。２個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は15～20cm程である。56SB2→56SB1の新旧関係が確認できる。

56SB2　59－51付近に位置する、３（５）×２（４）間で無庇もしくは四面庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図14、図147）。３×２間の無庇建物もしくは３×２間の身舎に四面に各１間の庇が付く四面庇建物が想定できる。四面庇とみた場合に、身舎と庇の軸方向がやや異なる。11次調査で検出され（11次１号建物）、56次調査で再度確認された。建物の軸方向は身舎部分で、N－19°－Eである。25個の柱穴を検出している。四面庇建物とみた場合、柱間寸法は桁行が西から242（８尺）・230・242・230・242cmに、梁行が北から242・242・242・272（９尺）cmに復元できる。全長は桁行11.9m、梁行10mで、平面積は119㎡である。無庇とみた場合、柱間寸法は桁行が230・242・230cm、梁行が242cmの等間に復元でき、全長は桁行７m、梁行4.8mで平面積33.6㎡である。柱穴は身舎では掘方が径60～80cm程の楕円形で、一部に長軸120cm程の規模をもつ柱穴がある。庇では掘方が径50～75cm程の円形で、一部が25cm程と小型である。３個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は15～25cm程である。56SB2→56SB1の新旧関係が確認できる。

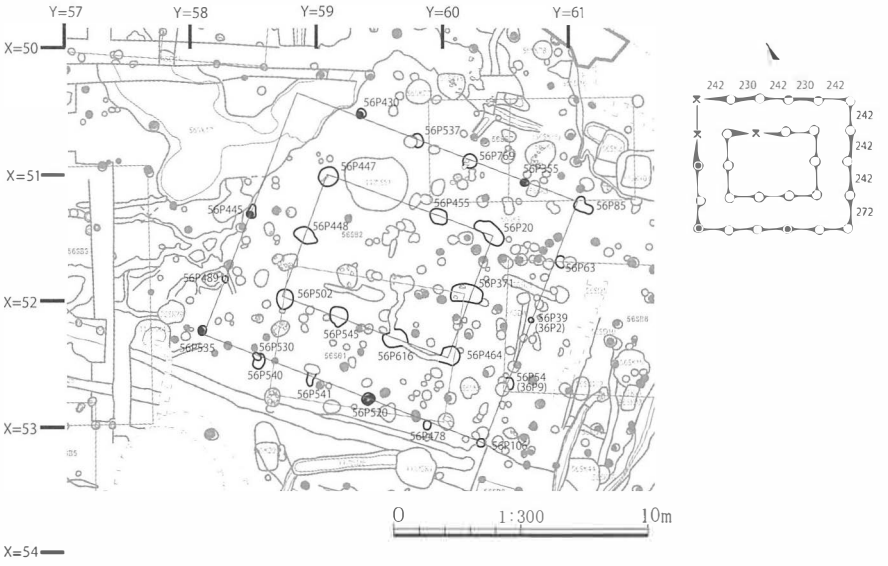


図147　56SB2平面図

56SB3　57－51付近に位置する、４×３間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図14、図148）。56次調査で検出された。建物の軸方向はN－2°－Wである。10個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から242（８尺）・242・242・303（10尺）cmに、梁行が西から191（6.3尺）・191・152（５尺）cmに復元できる。全長は桁行10.3m、梁行5.3mで、平面積は54.59㎡である。柱穴は掘方が径35～40cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡を確認しており、想定できる柱径は12～15cm程である。周囲に分布する整地層（56整地層）より新しい。56SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合い

はない。

56SB4　57－49付近に位置する、５×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図14、図149）。56次調査で検出された。建物の軸方向はN－3°－Eである。13個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から242（８尺）・182（６尺）・182・212（７尺）・191（6.3尺）cmに、梁行が北から212・230（7.6尺）cmに復元できる。身舎の内部に柱穴が１個確認でき、一連の建物跡とみられる。全長は桁行10.1m、梁行4.4mで、平面積は44.44㎡である。柱穴は掘方が径20～40cm程の円形である。４個の柱穴で柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は10～20cm程である。周囲に分布する整地層（56整地層）より新しい。

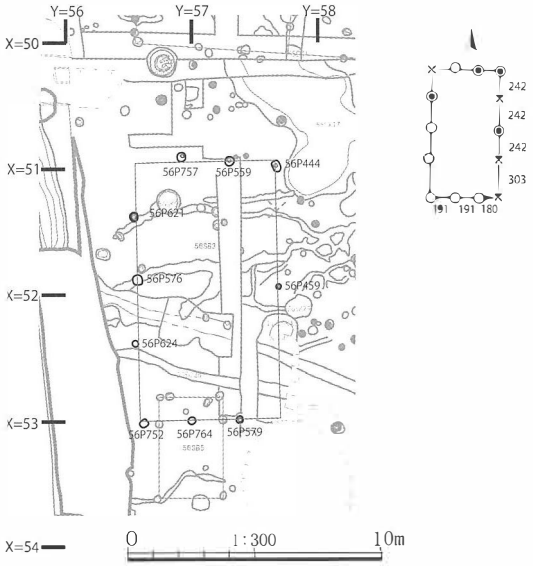


図148　56SB3平面図

56SB5　57－53付近に位置する、３×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図14、図150）。56次調査で検出された。建物の軸方向はN－2°－Wである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から106（3.5尺）・303（10尺）cmに、梁行が242（８尺）cmに復元できる。全長は桁行4.1m、梁行2.4mで、平面積9.84㎡である。柱穴は掘方が径20～25cm程の円形である。１個の柱穴で柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は10cm程である。56SB3と空間的に重複するが遺構の切り合いはない。

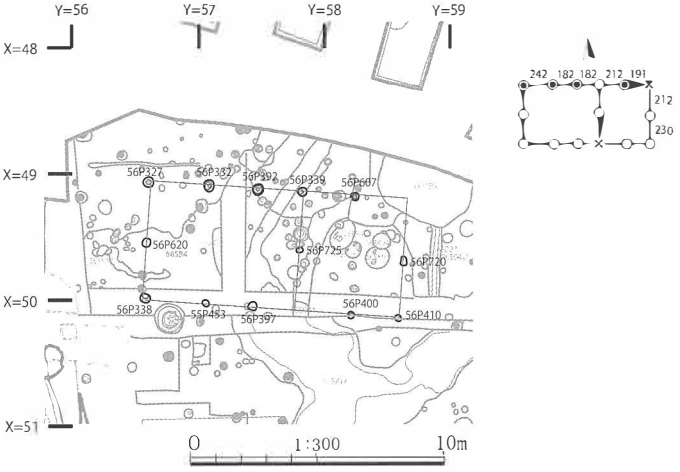


図149　56SB4平面図

72SB1　60－41付近に位置する、４×３間で二面庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図13・18、図151）。72次調査で検出された。平泉遺跡調査会による10次調査で３×３間以上の大型の建物が想定されていた遺構である。建物の軸方向はN－17°－Eである。17個の柱穴を検出している。３×２間の身舎に、西・南の二面に１間の庇が付く。柱間寸法は桁行が242（８尺）の、梁行が242（８尺）の等間に復元できる。全長は桁行9.7m、梁行7.3mで、平面積

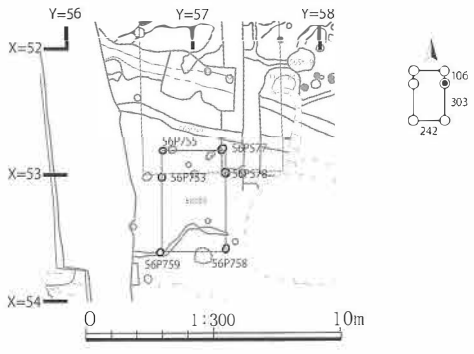


図150　56SB5平面図

は70.81㎡である。柱穴は身舎では掘方が径85～100cm程の円形で、検出面からの深さが44cm程である。庇では掘方が径100cm程の円形で、検出面からの深さが27～38cm程である。11個の柱穴で柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は30cm程である。柱痕跡は炭化物を含み、灰黄褐色シルトに地山とみられる黄褐色粘土ブロックが混じる。掘方埋土は炭化物を少量含む黄橙色シルトと灰褐色シルトが混じる土層で確認される。72SA1、72SA2と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　柱穴からかわらけが少量出土している。

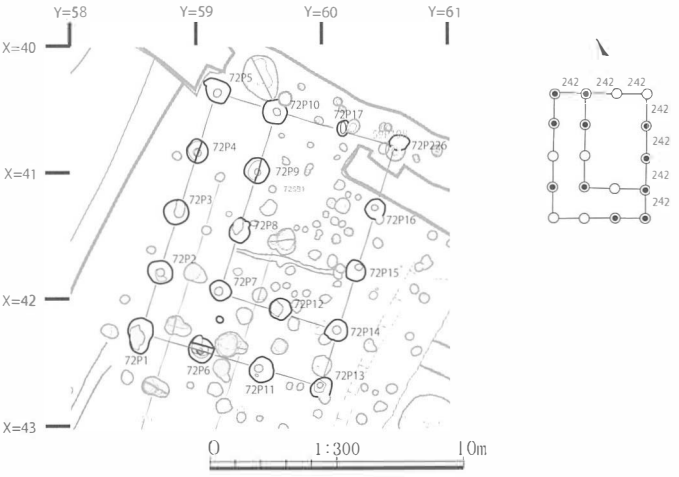


図151　72SB1平面図

HSB13　88－98付近に位置する、２×１間で無庇のほぼ正方形に近い東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図152）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－23°－Eである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から203（6.7尺）cmの等間に、梁行が450（14.8尺）cmに復元できる。全長は桁行4.1m、梁行4.5mで、平面積は18.45㎡である。柱穴は掘方が径35～50cm程の円形で、検出面からの深さは16～40cm程である。HSB13→HSB14の新旧関係が確認できる。HSB15と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

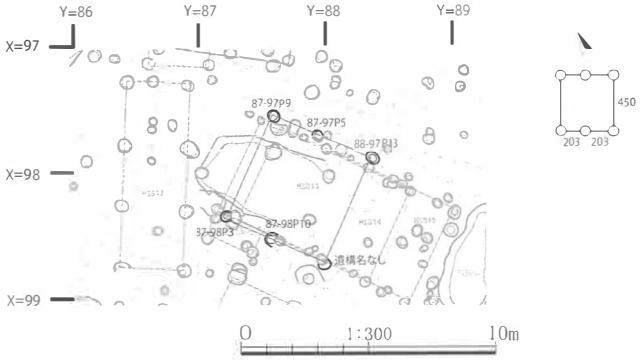


図152　HSB13平面図

HSB14　88－98付近に位置する、３×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図153）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－24°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・182（６尺）・182cmに、梁行

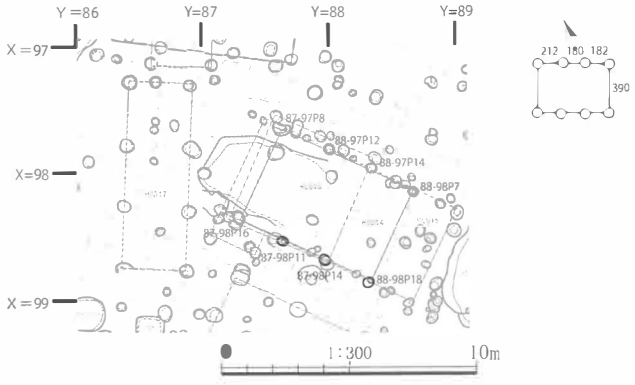


図153　HSB14平面図

が390（12.9尺）cmに復元できる。全長は桁行5.8m、梁行3.9mで、平面積は22.62㎡である。柱穴は掘方が径30～40cm程の円形で、検出面からの深さは40cm程である。HSB13→HSB14の新旧関係が確認できる。HSB15と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

HSB15　88－98付近に位置する、４×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図154）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。南西端に１×１間の建物が付くと想定した。建物の軸方向はN－17°－Eである。11個の柱穴を検出している。主要部の柱間寸法は桁行が西から182（６尺）・182・189（6.2尺）・242（８尺）cmに、梁行が400（13.2尺）cmに復元できる。全長は桁行7.9m、梁行４mで、平面積は31.6㎡である。柱穴は掘方が径20～40cm程の円形で、検出面からの深さは17～44cm程である。HSB13、HSB14と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

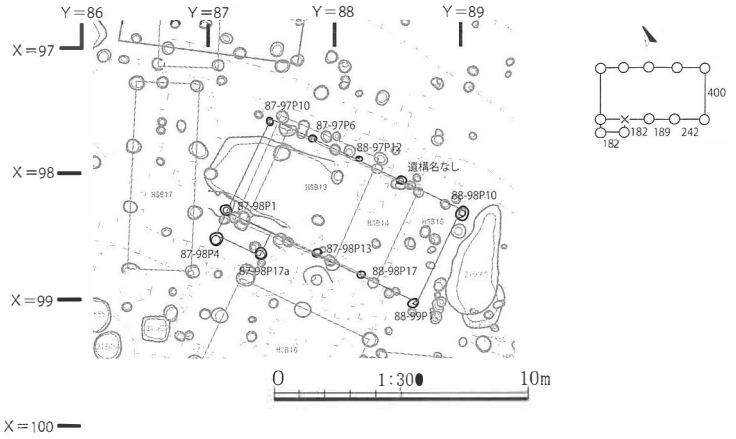


図154　HSB15平面図

HSB16　88－98付近に位置する、２×２間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図155）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－25°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が281（9.3尺）の等間に、梁行が北から181（６尺）・212（７尺）cmに復元できる。全長は桁行5.6m、梁行3.9mで、平面積は21.84㎡である。柱穴は掘方が径45～60cm程の円形で、検出面からの深さは25～70cm程である。８個の柱穴いずれも柱痕跡を確認しており、一部の柱穴では材も残存する。想定できる柱径は10～20cm程である。平面での確認では半円形などの形状がある。柱痕跡は黒色及び黒褐色シルトで確認され、掘方埋土は暗褐色や明黄褐色のシルトが混じる土層で確認される。

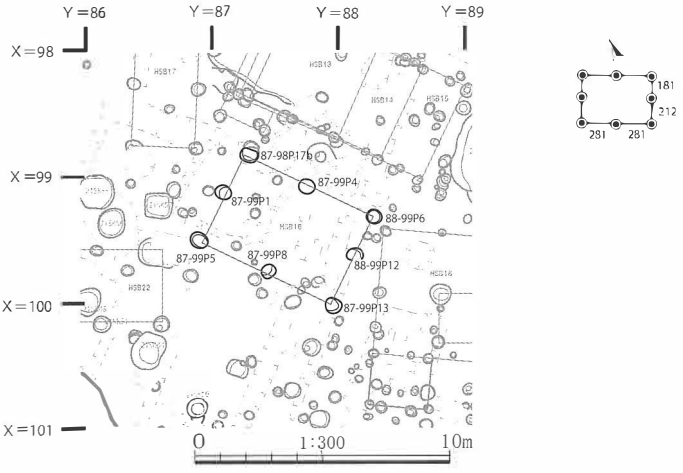


図155　HSB16平面図

HSB17　87－98付近に位置する、３×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図

156)。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004)。建物の軸方向はN－2°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が242（８尺）cmの等間に、梁行が251(8.3尺)cmに復元できる。全長は7.3m、梁行2.5mで、平面積は18.25㎡である。柱穴は掘方が径45～55cm程の円形で、検出面からの深さは10～25cm程である。断面で柱痕跡が確認できるものが５個あり、想定できる柱径は10～15cmほどである。柱穴の底面で礫が確認された柱穴もある。

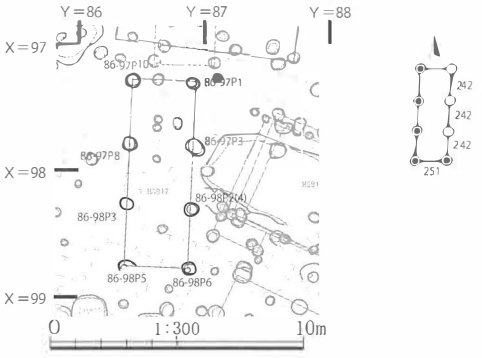


図156　HSB17平面図

HSB18　89－100付近に位置する、３（２）×２間で無庇もしくは片庇の南北棟建物跡である（図版編図50、図157)。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004)。２×２間の無庇建物に１×１間の建物が付くもしくは２×２間の身舎に南に１間の庇が付くと想定した。建物の軸方向はN－6°－Eである。９個の柱穴を検出している。片庇の建物とみた場合、柱間寸法は桁行が242（８尺)・242・203（6.7尺）cmに、梁行が230（7.6尺）の等間に復元できる。全長は桁行6.9m、梁行2.3mで、平面積は15.87㎡である。柱穴は掘方が径30～45cm程の円形で、検出面からの深さは10～29cm程である。HSB23と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

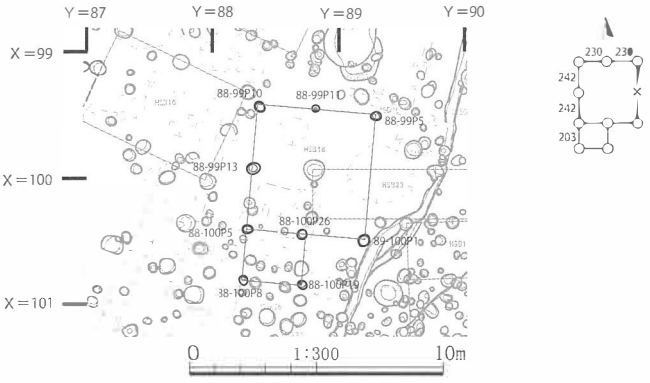


図157　HSB18平面図

HSB19　90－100付近に位置する、４×２間で片庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図158)。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004)。３×２間の身舎に、北側に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－1°－Wである。12個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北から212（７尺)・203（6.7尺)・188（6.2尺)・212cmに、梁行が182（６尺)・212（７尺）cmに復元できる。全長は桁行8.2m、梁行3.9mで、平面積は31.98㎡である。柱穴は掘方が径25～50cm程の円形で、検出面から

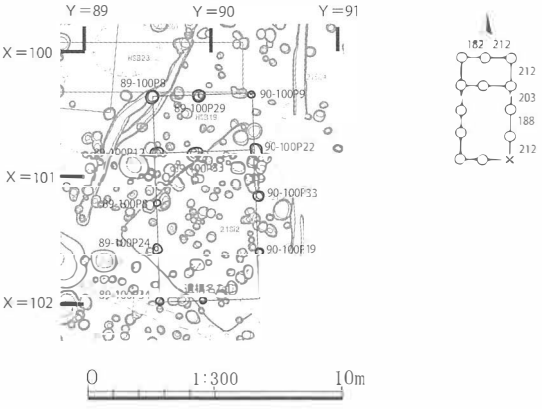


図158　HSB19平面図

の深さが30～50cm程である。HSB23と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

HSB20　87－96付近に位置する、２×１間で無庇の南北棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図159)。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004)。埋文報告で21SB1とした建物の一部を含む（岩手県埋蔵文化財センター1995)。建物の軸方向はN－3°－Eである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が312（10.3尺）の等間に、梁行が242（８尺）cmに復元できる。全長は桁行6.2m、梁行2.4mで、平面積は14.88㎡である。柱穴は掘方が径25cm程の１個を除き、径40～45cm程の円形で、検出面からの深さは15～40cm程である。

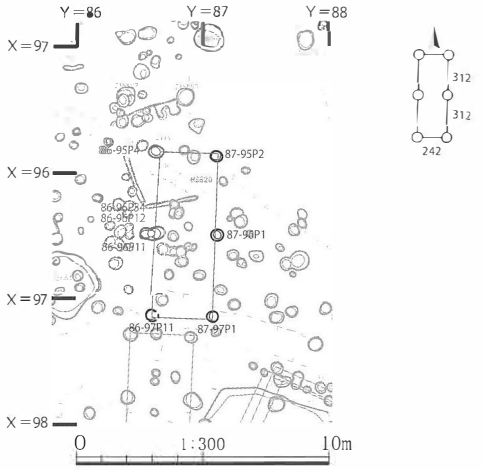


図159　HSB20平面図

HSB21　89－96付近に位置する、２×２間で片庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図160)。23次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004)。埋文報告で21SB1とした建物の一部を含む（岩手埋文1995)。２×１間の身舎に、北側に１間の庇が付く。建物の軸方向はN－1°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が251（8.3尺）の等間に、梁行が北から121(４尺)・330（11尺）cmに復元できる。全長は桁行５m、梁行4.2mで、平面積は21㎡である。柱穴は身舎では掘方が径20～50cm程の円形で、検出面からの深さが16～44cm程である。庇では掘方が径40～45cm程の円形で、検出面からの深さは15～35cm程である。１個の柱穴で柱痕跡が確認でき、想定できる柱径は15cm程である。

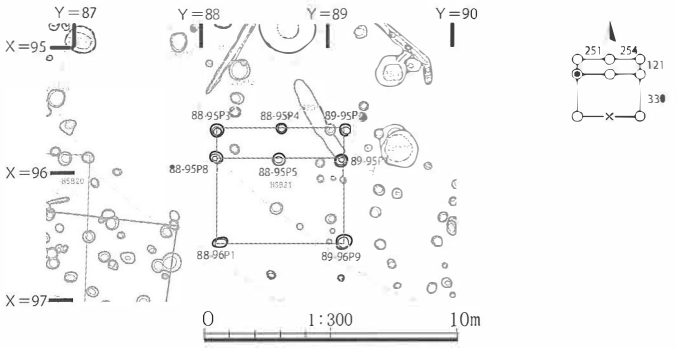


図160　HSB21平面図

HSB22　86－100付近に位置する、３×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図161)。21次調査範囲に位置し、1・2次総括で建物として報告した（岩手県教委2004)。建物の軸方向はN－1°－Eである。６個の柱穴を検出してい

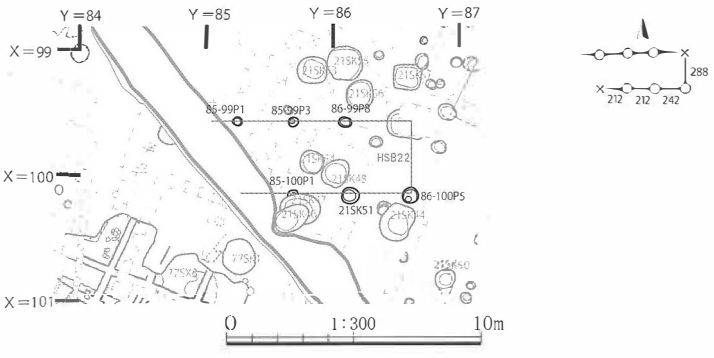


図161　HSB22平面図

る。柱間寸法は桁行が西から212（７尺）・212・242（８尺）cmに、梁行が288（9.5尺）cmに復元できる。全長は桁行6.7m、梁行2.9mで、平面積は19.43㎡である。さらに西に延びる可能性も残るが、周辺の調査状況からは想定は難しい。柱穴は掘方が径30～60cm程の円形で、検出面からの深さは5～30cm程である。断面で柱痕跡が確認できる柱穴が１個あり、想定できる柱径は20cm程である。柱痕跡は黒褐色シルトで確認され、掘方埋土は明黄褐色シルトと褐色シルトが混じる土層で確認される。

HSB23　89－100付近に位置する、３×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図50、図162）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－0°－Eである。７個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が西から270（8.9尺）・212（７尺）・212cmに、梁行が203（6.7尺）cmに復元できる。全長は桁行6.9m、梁行２mで、平面積は13.8㎡である。柱穴は掘方が径35～60cm程の円形で、検出面からの深さは17～20cm程である。HSB18、HSB19と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

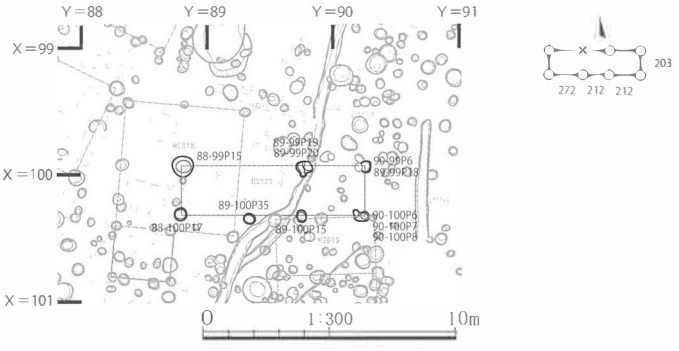


図162　HSB23平面図

HSB24　86－93付近に位置する、２×１間で無庇の東西棟掘立柱建物跡である（図版編図49、図163）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－20°－Eである。６個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が北側柱列で西から242（８尺）・182（６尺）cm、南側柱列で西から242・212（７尺）cmに、梁行が西側柱列で330（11尺）cm、東側柱列で303（10尺）cmに復元できる。全長は桁行4.5m、梁行3.3mで、平面積は14.85㎡である。柱穴は掘方が径25～50cm程の円形で、検出面からの深さは19～51cm程である。

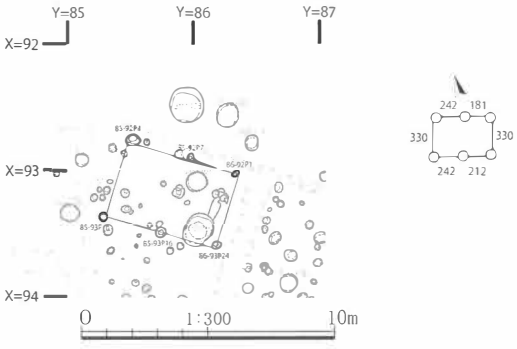


図163　HSB24平面図

HSB25　85－94付近に位置する、２×２間で無庇の正方形に近い東西棟掘立柱建物跡である（図版編図49、図164）。21次調査範囲に位置し、１・２次総括で建物として報告した（岩手県教委2004）。建物の軸方向はN－18°－Eである。８個の柱穴を検出している。柱間寸法は桁行が189（6.2尺）・182（６尺）cmに、梁行が182cmの等間

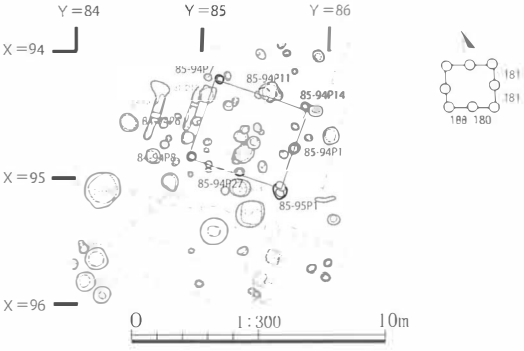


図164　HSB25平面図

に復元できる。全長は3.7m、梁行3.6mで、平面積は13.32㎡である。柱穴は掘方が径35～50cm程の円形で、検出面からの深さは17～55cm程である。

②竪穴遺構

【55SX2竪穴建物】

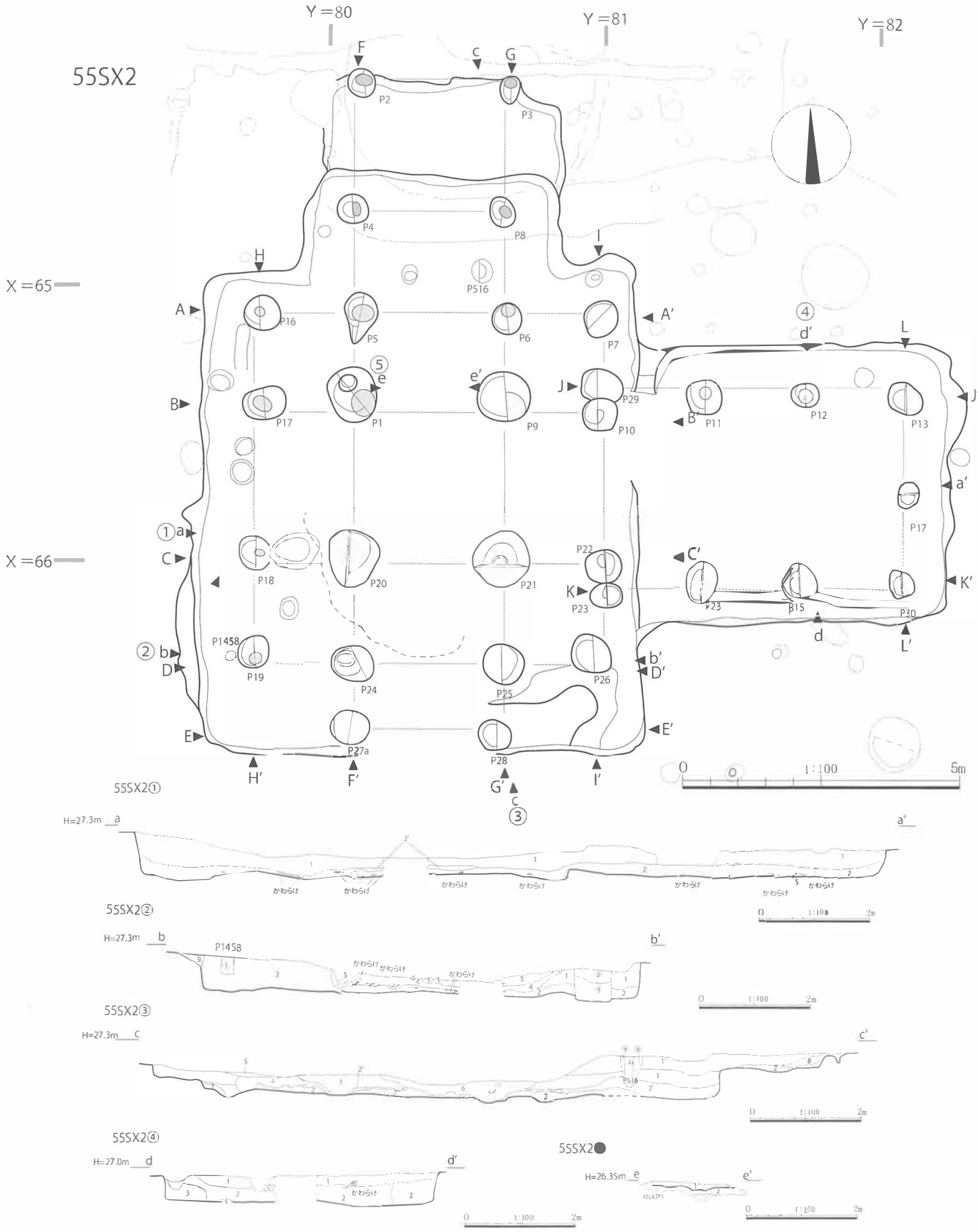
概要　80－64付近に位置する（図版編図38、図165・166）、南北12.5m、東西13.4mの竪穴建物である。42・55・65次調査で調査されている。42次調査で検出し、一部にトレンチを設定し内容確認を行った。55次調査で全体を精査し全体の形状や土層状況の検討を行い、65次調査で55次調査の補足として柱穴の精査や断面状況の再検討を行った。

遺構　平面形8.5×7.7m程の方形に北側に4.5×1.7m程の張り出しをもつ凸型の竪穴に、北側に1.5m程の張り出しと、東側に６×５m程の方形の張り出し部分が組み合わさる。検出面からの深さは凸型の部分で80cm程である。北側の張り出しは凸型の部分より浅く、検出面から30cm程の深さである。北側の張り出し部と凸型部とは段差をもつ。東側の張り出し部分も検出面からの深さは50～70cm程で凸型の部分よりやや浅く、凸型部とは段差をもち一段高くなる。軸方位は床面の柱穴の軸方向を基準にするとN－2°－Eである。

堆積土層はブロック土の構成や色調により分層できるが、全体が黄褐色土のブロックで構成される人為層である。遺構全体が人為的に埋め戻されたとみられる。間層に黄褐色土ブロックのほか炭化物や土器類を含む層を挟む位置もある。底面付近で多量に土器類が出土しているほか、人為層にも土器類が多く含まれる。底面付近から出土した土器類も調査当時の写真や（図版編図版31・32）、断面の土層観察の状況からは、底面である床付近で出土した遺物を含むものの、人為的な埋め戻し土に含まれていた資料が多いとみられる。床面は中央部が緩やかに窪むなどやや凹凸のあるものの、平坦を基調とした状況で検出している。床面付近の裁ち割り断面の観察から、遺物を包含する灰褐色土のブロックで構成され、柱穴がこの土層を掘り込むことから貼り床が行われたと判断している。そのため、貼り床が行われるものの、平坦面を基調とした凹凸がある状況の床面と捉えられる。

床面には柱穴が計32個あり、総柱状に配置される。柱配置から凸形部中央に配置され規模が大きい４個の大型柱穴を主柱穴と推定できる（P1、P9、P20、P21）。また、柱穴の重複が２箇所で確認される（P29→P10、P22・P23）。柱穴の平面形はいずれも円形～楕円形を呈する。このうち、主柱穴とみられる柱穴（P1、P9、P20、P21）が長径100～110cmで、床面からの深さが100～110cmである。その他の柱穴は長径50～70cmで深さが60～80cmとなり、主柱穴とみたものよりやや小さい。南北方向の柱間寸法は西から2番目のP3・P8・P6・P9・P21・P25・P28の柱列で、北から242・182・182・272・182・121cmである。東西方向の柱間寸法は北から４番目のP17・P1・P9・P10・P11・P12・P13の柱列で、西から182・272・182・182・182・182cmである。主柱穴間が272（９尺）cmとやや大きく、その他の柱間では182（６尺）cmの柱間寸法を多用すると捉えられる。東西と南北の柱筋の総長は1,182cm（39尺）と等しい。柱痕跡は主柱穴とみられる柱穴では断面で30～40cm、平面で約50cm、その他の柱穴では約20cmとなる。柱痕跡が確認できるものが多いが、P1・P15・P20・P26・P27・P28では確認できない。底面標高は主柱穴とみた４個の柱穴が25.2m、その他が25.5m前後でまとまりを示す。既述のとおり北側の張り出し部は一段浅くなり、底面標高は26.5mである。55SB6→55SXの新旧関係が確認できる。55SA1と重複もしくは近接するが、削平もあり、新旧関係は判断できない。

遺構のまとめ　これらの柱穴の底面状況や重複、床面の状況から、55SX2竪穴建物の形状は凸形の部分に北と東に張り出しが付く構造とみられる。また、東部の張り出しは柱穴の新旧関係から、拡張に



55SX2
1　2.5Y7/8黄色ローム　10YR5/2灰黄褐色土縞状に少量混入　かわらけ片、礫を含む　人為的に埋めた土
2　10YR5/2灰黄褐色土　2.5Y7/8黄色ロームまだらに多量混入　炭化物粒、かわらけ片（完形も多い）多量混入
2′　10YR7/1灰白色土　水成層か
3　10YR7/8黄橙色ローム　10YR5/2灰黄褐色土ブロックで少量混入　10YR7/8黄橙色ロームまだら少量混入　柱痕
4　10YR4/1褐灰色土　かわらけ細片非常に多量に混入　炭化物粒多量に混入
5　2.5Y7/8黄色ローム　10YR5/2灰黄褐色土縞状に少量混入　かわらけ細片礫を含む　1層に類似する
6　10YR5/1褐灰色土　砂が縞状に入る　かわらけ細片多量混入　55SX2の埋土ではなく55SK1の埋土の残存か
7　10YR2/1黒色土　10YR7/8黄橙色ロームまだら多量混入
8　10YR6/1褐灰色土　かわらけ細片多量混入あまりしまりがない　板平の抜き取り痕か
9　10YR1.7/1黒色土　炭化物粒多量混入　しまりなし

P1458
①10YR3/2黒褐土　炭化物粒多量混入

55SX2を切る別個の土坑か
②　10YR7/4にぶい黄褐色ローム　炭化物粒少量混入
③　10YR6/2灰黄褐色土　炭化物粒少量混入

P516
④　10YR5/2灰黄褐色土　礫少量混入　柱痕
⑤　10YR7/8黄橙色ローム　10YR5/2灰黄褐色土まだら少量混入
掘方の土

55SX2サブトレ
1　2.5Y7/3浅黄色粘土と7.5YR5/8明褐色粘土の混合土
かわらけ片混入　層全体が塊状
2　地山

図165　55SX2詳細図（1）

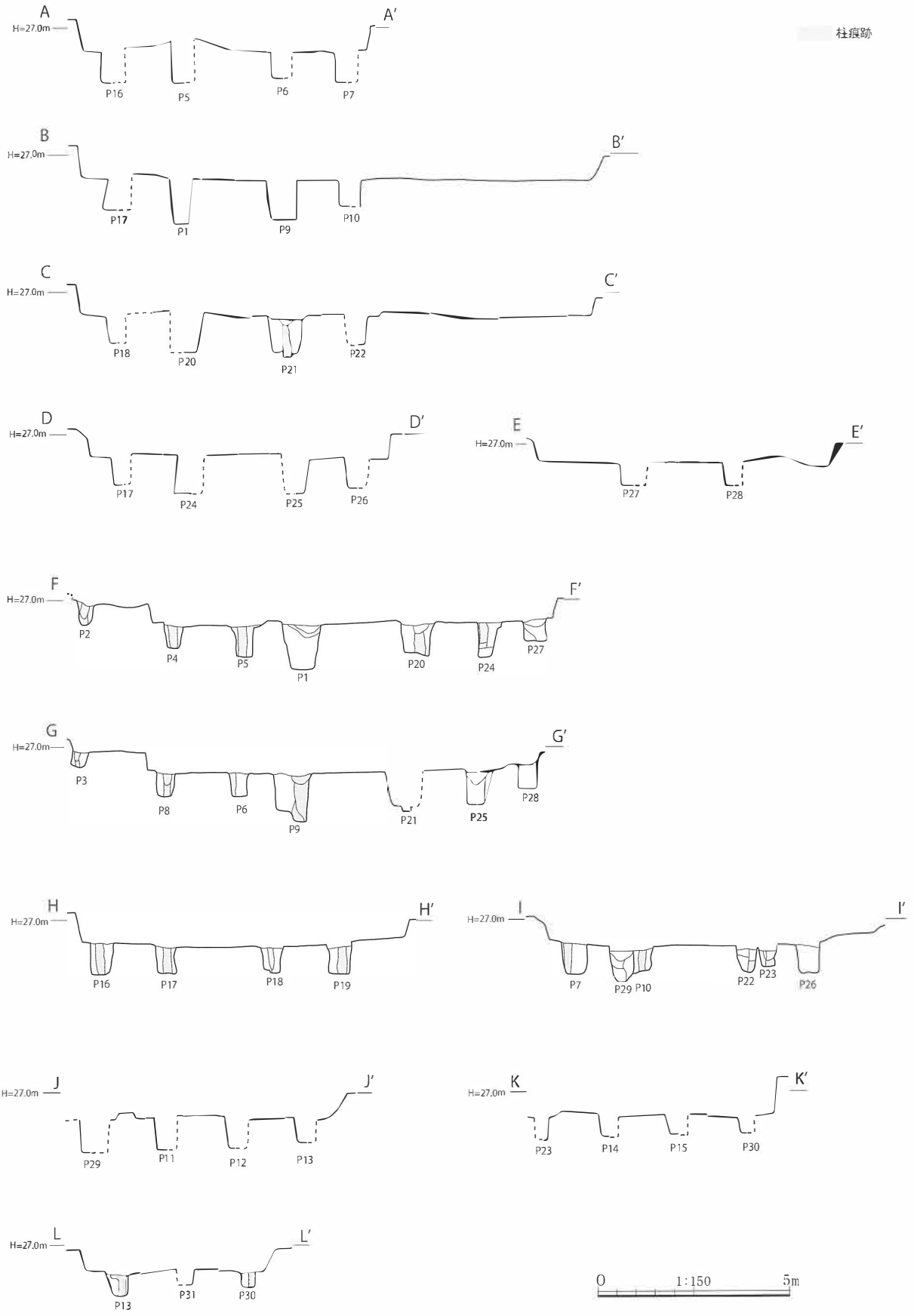


図166　55SX2詳細図（2）

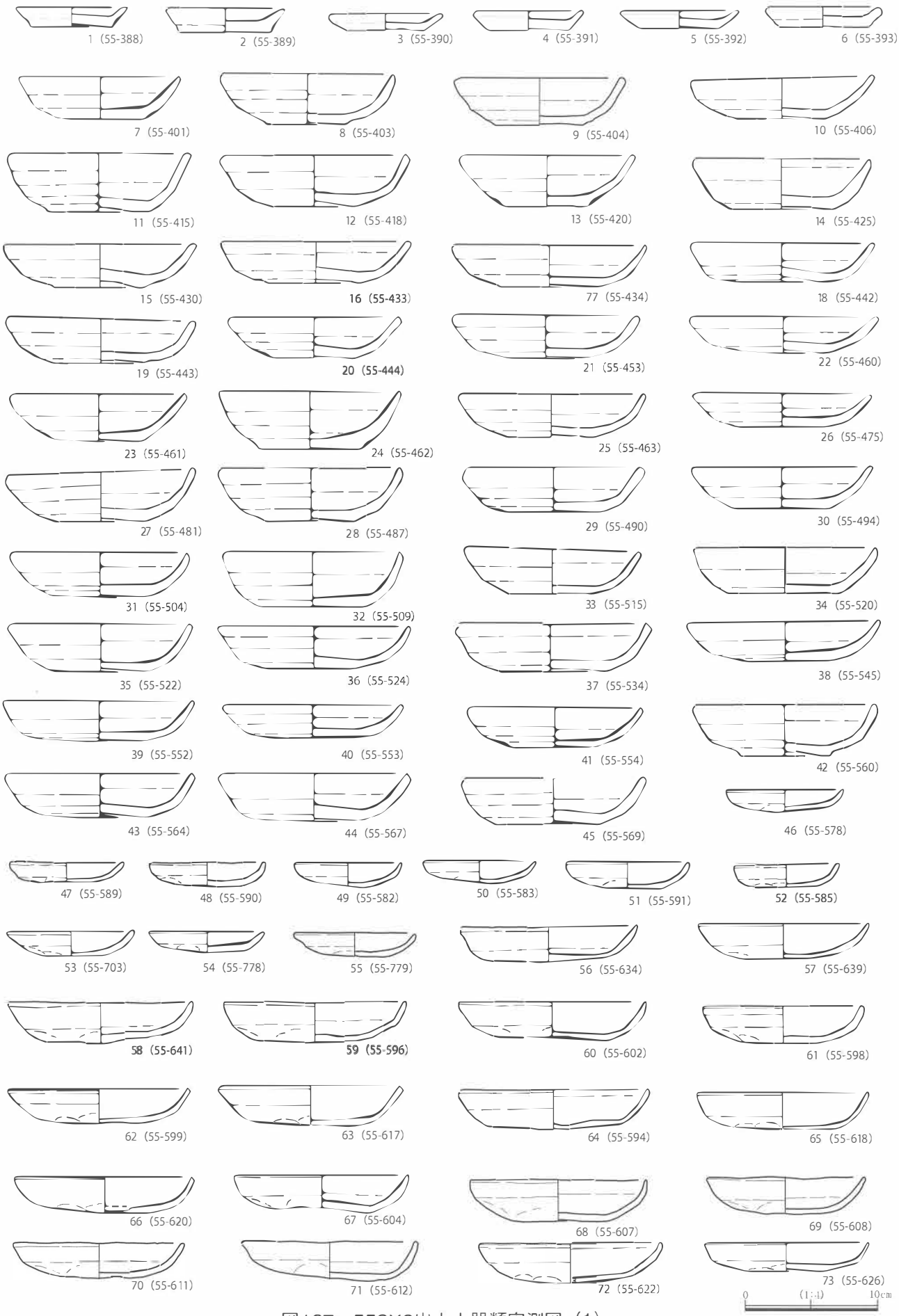


図167　55SX2出土土器類実測図（1）

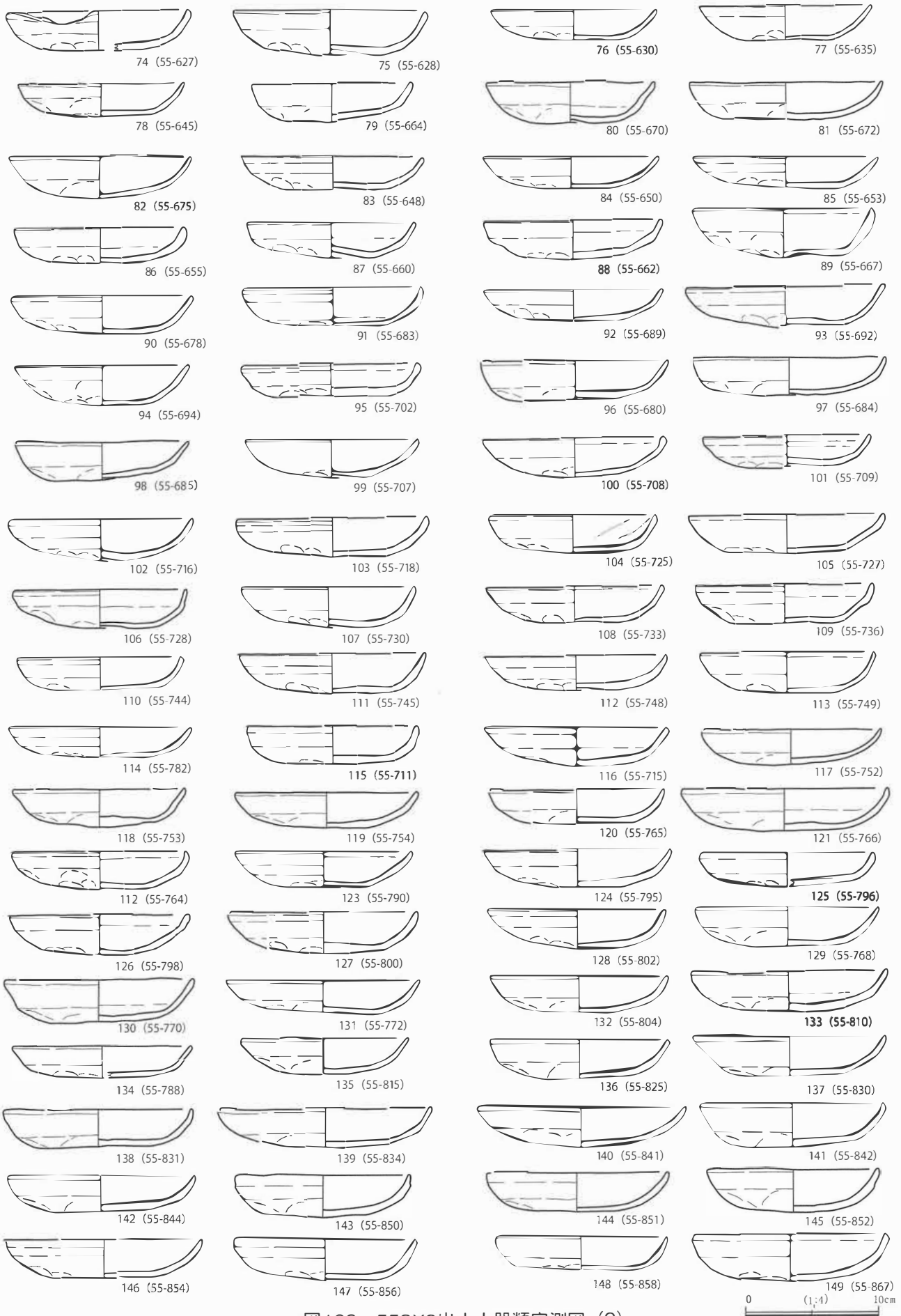


図168　55SX2出土土器類実測図（2）

伴う張り出しとの判断があり得る。底面全体や周囲を含めて、壁構造等の痕跡は残されていないが、４本の主柱穴を中心とした構造が想定できる。柱穴の多くは柱痕跡が残るものの、いくつかの柱穴は抜き取りの可能性があり、埋土は全体に人為的に埋め戻しが行われている。多量の土器類が出土しており、一部は床面に近く重なった状態のものも含まれるが、土器類の多くは埋め戻し土に伴うとみられる。

遺物　調査では多量の遺物が出土している。かわらけ546,570gと多量に出土した。そのほかの出土資料は国産陶器198g、瓦1,272gである。出土量全体に占めるかわらけの量がきわめて大きいことが特徴のひとつである。その他の遺物がきわめて少なく、遺跡内の他の遺構からの出土傾向とは異なる様相と捉えられる。遺構の性格と結びつく内容であるかは即断できないが、注目できる。

出土状況は上述したとおりである。床面付近から多くの土器が出土しているほか、人為的な堆積土中に含まれて床面から接さない状態の遺物もまとまって出土している（図版編－図版31・32）。かわらけは重なった状態のものもあり、一括の廃棄等に伴うものとみられる。

ここでは一部を図示した（図167・168）。図示してない資料を含めると、ロクロかわらけでは小皿は口径7.8～9.0cm程で平均8.5cm程、底径5.0～7.0cm程で平均6.1cm程、器高1.2～2.3cm程で平均1.6cm程である。図示資料にみられるように、体部は直線的に立ち上がる。ロクロかわらけ大皿は口径12.0～16.0cm程で平均13.8cm程、底径5.2～9.0cm程で平均7.1cm程、器高2.5～4.4cm程で平均3.4cm程である。図示資料にみられるように、器高の低い皿形の器形の資料が多い。手づくねかわらけでは小皿は口径8.0～9.8cm程で平均8.7cm程、器高1.7～2.5cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.6～16.0cm程で平均13.8cm程、器高2.1～4.3cm程で平均3.1cm程である。15cm程の大型の器形から12cm以下程の小型の器形まである。口径はややばらつきが大きいものの図示資料にみられるように、大型の器形は少なく小形の器形が主となる。器高も低いものが多い。

【その他の竪穴遺構】

この他に７棟の竪穴遺構が検出されている（表11）。多くは古代の竪穴遺構で、カマドをもち竪穴住居跡とみられる。これらの竪穴遺構は、堀内部の平坦地のうち猫間ヶ淵などの低地に近い位置に多く分布する。出土した土器はロクロ土師器坏、須恵器坏が多い。９世紀後半から10世紀初頭の特徴をもつ資料が多く、この時期の遺構が多いとみられる。なお、遺跡内で確認される遺構に伴わない破片資料では９世紀から10世紀代の土器が散見される。

表11　その他の竪穴遺構

遺構名	位置	備考
21SI1	88－104	古代。
21SI2	90－101	古代。
21SI3	86－96	古代。
23SI1	82－84	12世紀代か。
52SI1	68－60	近現代。
52SI2	69－57	12世紀代か。
77SI1	83－107	古代。77T1の断面での確認。

23SI1　82－84に位置する、方形の竪穴遺構である（図版編図41）。隅丸の方形で長軸302cm×短軸290cm程で、深さは32cm程である。底面は平坦で、柱穴等は検出されていない。堆積土はシルト質の土層が主体となる。遺物は少ないが、堆積土からはかわらけが少量出土している。

52SI2　69－57に位置する、不整形の竪穴遺構である（図版編図25、図169）。隅丸の長方形で長軸560cm×短軸332cm程で、深さは40cm程である。底面は平坦で、北西側に柱穴状の窪みがある。堆積土は全て埋め戻しによる人為的な土層である。出土遺物はかわらけは590gで、破片は小さいもの

が多いが、ロクロかわらけと推察される。52SC1と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

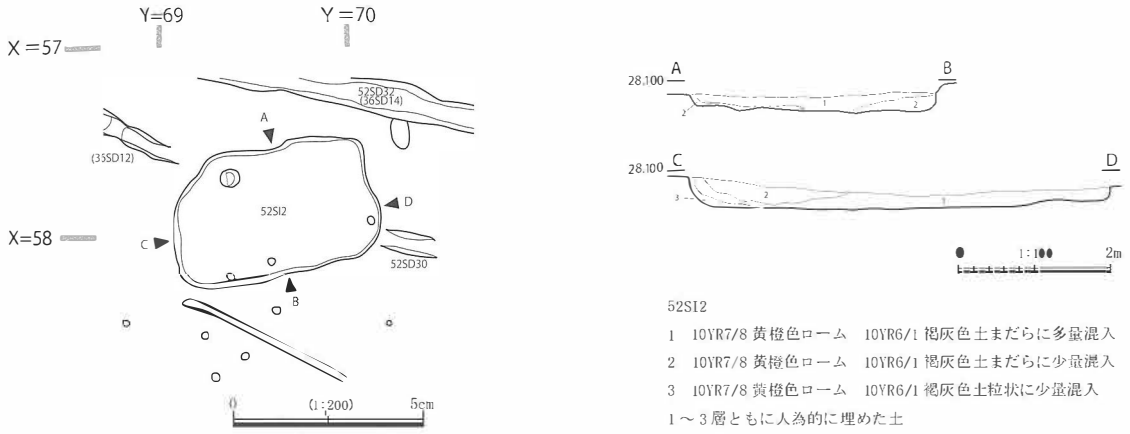


図169　52SI2平面・断面図

（3）池跡

①池跡の概要

遺跡の中央部の23SG1池跡である。23SG1池跡は23・28・31・57・59・64次で調査が行われている。23・28・31次調査で全体の精査を行った。その後、57次・59次調査でトレンチを設定し精査を行ったほか、64次調査では全体の検出と一部の精査を実施した。全体を通したトレンチが少なく、またⅢ期の遺構を除いて平面的な検出が限定されるため理解が難しい部分が生じている。以下では各トレンチの土層状況を概観し、そこから把握できる各時期の池跡の状況と出土遺物の概略を示す。Ⅲ期とした溝などの埋土及びそれより上層の堆積土層は23・28次調査に際して完掘されており、新たな知見は得られていない。また、そのためⅢ期にあたる遺構が多い複数の溝については、溝同士の新旧関係などには不明な点が残されている。

表12　池跡の対応

本報告	埋文報告
Ⅰ期池	Ⅰ期
Ⅱ期池	Ⅱ期（景石など一部）
Ⅲ期	Ⅱ期（溝などの遺構） Ⅱ期以降

池跡は大きく２時期の変遷が確認されている。ここまで述べたようにⅠ期、Ⅱ期、それ以降のⅢ期と呼称するが、この範囲は再調査による成果も多く、遺構変遷及び呼称は埋文報告（岩手県埋蔵文化財センター1995）での呼称とは異なる。また、土層についてはそれぞれの時期の構築時の盛土などを□期造成土、それぞれの時期の機能時に堆積した自然堆積層などを□期堆積土と呼称する。

なお、池跡の西岸は遺跡全体の中でも削平が著しい範囲で、池の立ち上がりが明確ではない部分もある。調査時では微細な変化から池の規模を検討した。

②各トレンチでの土層の所見と状況

トレンチは池の各所に17本設定した（図170・171・172）。池の南東部、池の北東部、池の北西部の順にトレンチ内の土層状況を確認する。最後に、削平により残存が少ない池の南西部の状況を記す。

【池南東部】

59T1a（図170・171）　59T1aは75－81付近の池の南東部に、埋文報告のM－M'断面を活かして設

図170　23SG1平面図

定した。Ⅰ期池の堆積土とみた14・16層は、底面は小さな凹凸はあるものの平坦で、東側が緩やかに立ち上がる。9～12層はⅠ期以前の溝と想定しているものの、部分的な確認のため全体は判然としない。Ⅱ期池の造成土とみた7・8・15層は明褐色および暗褐色土のブロックで構成され、締まりが強い土層である。Ⅱ期の堆積土とみた6層は自然堆積の土層である。13層も同様に粘性が強く礫が含まれる。Ⅱ期の堆積土もしくは、Ⅱ期池の造成土の可能性も残る。Ⅲ期以降の造成とみた5層は砂と泥で構成され、土器の小片や礫を含む。人為的な土層か自然堆積か判断が難しい土層だが、人為的な埋め土と判断した。なお、埋文報告においても同様の見解が示されている（岩手埋文1995、136頁）。1～4層は溝で埋土はⅢ期以降の自然堆積土である。

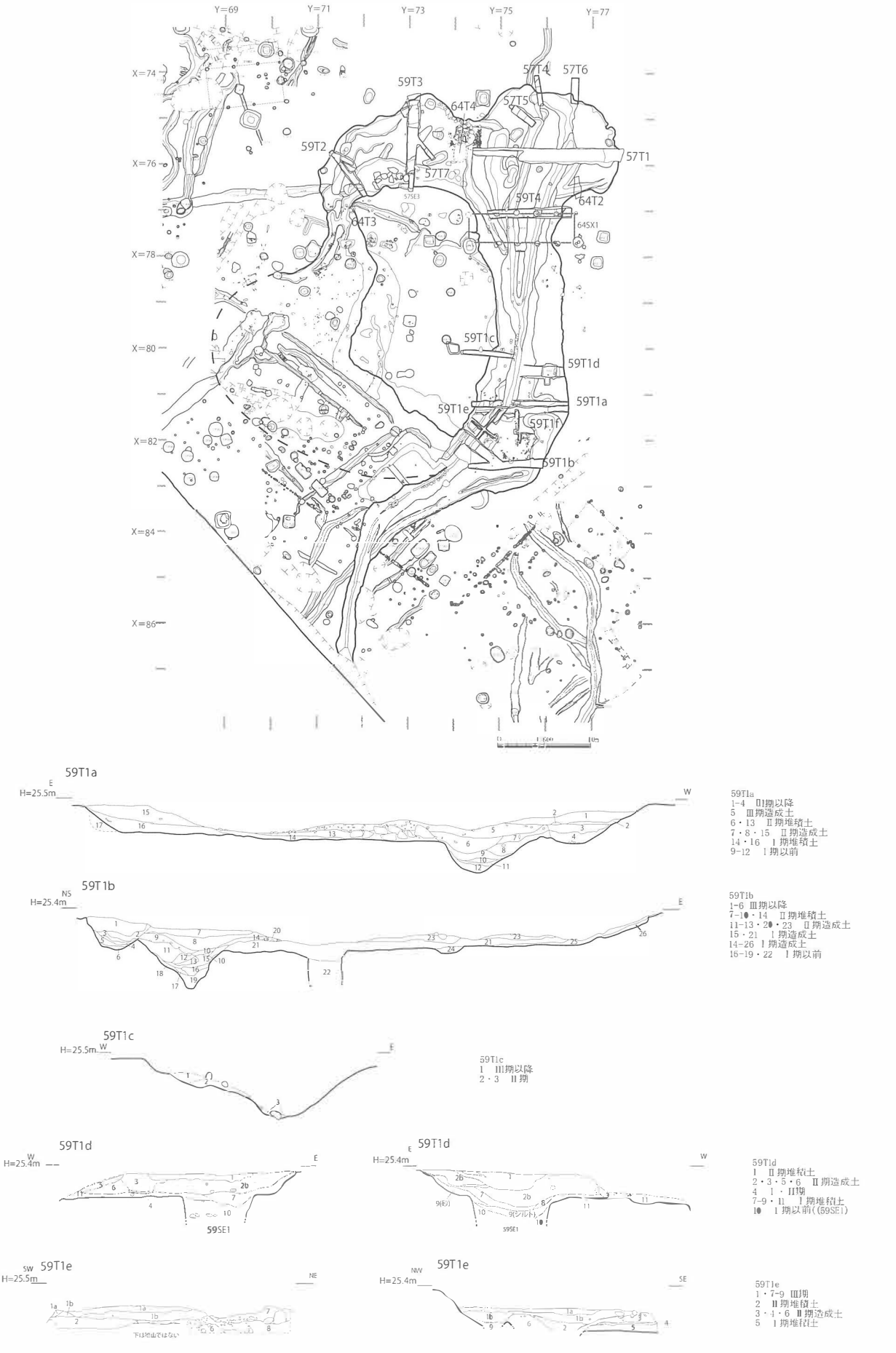
59T1b（図170・171）　59T1bは74－82付近の池の南東部に設定した。16～19層はⅠ期以前の溝とみている。22層はⅠ期以前の土坑埋土で、トイレ状土坑である。24～26層は締まりが強く人為的な盛土で、Ⅰ期池の造成土と判断している。Ⅰ期池の堆積土とみた15層は自然堆積土である。21層はⅠ期池の堆積土とみているが、ⅠもしくはⅡ期池の造成土の可能性も残る。黄褐色土のブロックで構成される11～13層や20・23層はⅡ期池の造成土と判断した。10cm程度の河原石が表面に散在する。7～10・14層は水成堆積でⅡ期池の堆積土とみている。1～6層はⅢ期以降の溝の堆積土である。なお、このトレンチよりさらに南西側で31SD59溝跡が確認されている。埋文報告では溝の延長としていたが、遺構は直接連続せず不明な点が残る。完掘しており、新たな知見は得られていない。

59T1c（図170・171）　59T1cは74－80付近の池の南東部に、59T1aの北側5m程に設定した。59T1aで確認されたⅢ期以降の溝の延長を確認している。1層がⅢ期以降の溝の埋土である。2～3層は池の堆積土にあたるが、時期等は判断できない。なお、溝の延長はこのトレンチの北側で浅くなり、失われる。

59T1d（図170・171）　59T1dは75－80付近の池の南東部に、59T1aの北側4m程に設定した。10層はⅠ期以前の遺構埋土で、井戸跡である（59SE1）。11層は泥質の、7～9層は砂質の自然堆積土である。7～9層は園池の東側の岸から流入し、土器類を含む。11・7～9層はⅠ期池の堆積土と判断している。2・3・5・6層は黄褐色のブロック土で構成され、Ⅱ期池の造成土と判断している。4層はⅡ期池の造成に際して形成された自然堆積土層とみている。1層は自然堆積土層で、Ⅱ期池の堆積土と判断している。

59T1e（図170・171）　59T1eは74－81付近の池の南東部に、59T1aと59T1bの間に設定した。5層は自然堆積土で、Ⅰ期池の堆積土と判断している。3・4・6層は黄褐色土のブロックを多く含み、Ⅱ期の造成土とみている。2層は自然堆積の土層で、Ⅱ期池の堆積土である。1a・1b・9層は自然堆積土層で、Ⅲ期以降の堆積土である。7・8層は土器類を含む人為的な土層で、Ⅲ期以降の人為的な埋め土とみている。

59T1f（図170・172）　59T1fは74－81付近の池の南東部に、59T1eの東側に設定した。このトレンチではⅠ期池の底面まで掘削していない。このトレンチでの底面での土質がⅠ期池の埋土とみている。黄褐色土のブロックを含む4・5層は人為的な堆積土で、Ⅱ期池の造成土と判断している。河原石が表面に付く。1～3・6層は自然堆積の土層で、Ⅱ期池の堆積土とみている。7層はⅢ期以降の人為的な埋め土とみている。



59T1a
1-4　Ⅱ期以降
5　Ⅲ期造成土
6・13　Ⅱ期堆積土
7・8・15　Ⅱ期造成土
14・16　Ⅰ期堆積土
9-12　Ⅰ期以前

59T1b
1-6　Ⅲ期以降
7-10・14　Ⅱ期堆積土
11-13・20・23　Ⅱ期造成土
15・21　Ⅰ期造成土
14-26　Ⅰ期造成土
16-19・22　Ⅰ期以前

59T1c
1　Ⅲ期以降
2・3　Ⅱ期

59T1d
1　Ⅱ期堆積土
2・3・5・6　Ⅱ期造成土
4　Ⅰ・Ⅱ期
7-9・11　Ⅰ期堆積土
10　Ⅰ期以前((59SE1)

59T1e
1・7-9　Ⅲ期
2　Ⅱ期堆積土
3・4・6　Ⅱ期造成土
5　Ⅰ期堆積土

図171　23SG1断面図（1）

【池北東部（１）】

57T1（図170・172）　57T1は74－76付近の池の北東部に、埋文報告のトレンチ1を活かして設定しＡ－Ａ'断面とは逆を図示した。12層はブロック土を主に河原石を含む人為的な堆積土で、Ⅰ期池の造成土と判断した。11層は自然堆積で泥が互層に堆積する水成堆積の自然堆積土で、Ⅰ期池の堆積土と判断した。５～９層は人為的な土層で、Ⅱ期池の造成土と判断した。10層は残存が良くないが、Ⅱ期池の造成土とみている。Ⅱ期池造成土の上面には河原石などを貼り付けている。１～４層はⅢ期以降の堆積土である。また、より上層のⅢ期に対応する土層は完掘されている。

57T4（図170・172）　57T4は75－74付近の池の北東部に設定した。６層はブロック土を多く含み締まりが強い人為的な土層で、Ⅰ期池の造成土と判断している。１～４層は黄褐色土や暗褐色土のブロックを含み人為的な土層で、Ⅱ期池の造成土と判断した。５層は下部がグライ化しているが、黄褐色土のブロックを多く含む人為的な土層で、池の造成土とみられる。Ⅰ期池の可能性も残るが、Ⅱ期池の造成土との間に自然堆積などの間層を挟まず、Ⅰ期池造成土とみられる土層と平面的に離れることからⅡ期池造成時に池を拡張し、人為的に造成したものと判断した。Ⅱ期池の造成土には上面に礫が多く貼り付けられている。

57T5（図170・172）　57T5は75－75付近の池の北東部に設定した。４層はブロックで構成され締まりが強い人為的な土層で、Ⅰ期池の造成土と判断した。2･3層は自然堆積の土層で、Ⅰ期池の堆積土と判断した。１層は下部がグライ化しているものの、黄褐色土のブロックを多く含み炭粒も入る締まりの強い人為堆積土である。Ⅱ期池の造成土とみており、上面には河原石などの礫が貼り付けられている。

57T6（図170・172）　57T6は77－73付近の池の北東部に設定した。１層はブロック土で構成される人為的な土層で、表面には礫が貼り付けられている。Ⅱ期池の造成土と判断している。Ⅰ期池の段階では池の範囲外にあたるとみられる。

【池北東部（２）】

59T4（図170・172）　59T4は75－77付近の池の北東部に、57T1の南側４ｍ程に設定した。４層は人為堆積で、Ⅰ期池の造成土とみている。５層は自然堆積の可能性が高いと判断している。Ⅰ期池造成時の土層でⅠ期池の平面形を掘り込んだ際の流入などによるものとみているが、４層と同様に人為堆積による盛土とみる余地もある。このトレンチの底面でⅠ期池に伴う柱穴を４個検出している。配置などから橋跡（64SX1）と考えており、遺構の詳細については後述する。2･3層は自然堆積による土層で、Ⅰ期池の堆積土と判断した。１層は黄褐色土のブロックを主体に河原石などを含む人為堆積土で、Ⅱ期池の造成土と判断した。上面に河原石が配され、盛土の残存からは、起伏をもつ形状が想定できる。６層はⅢ期に伴う土層とみている。また、Ⅲ期の溝が大きくⅡ期池を掘り込むことがわかるが、Ⅲ期の土層の多くは完掘されて失われている。

64T1（図170・172）　64T1は74－78付近の池の中央東側に、64SX1の検出を目的に59T4の南側３ｍ程に設定した。３層は自然堆積でⅠ期池の堆積土である。１・２層は黄褐色土のブロックを主体とする人為堆積で、Ⅱ期池の造成土と判断している。上面に河原石を配置している。59T4の１層に対応する。３層の下層で柱穴を検出しており、64SX1として後述する。

64T2（図170・172）　64T2は76－76付近の池の北東部に、64SX1の延長の有無を把握するため59T4の東側に設定した。64SX1の北側の延長は検出されていない。６層は自然堆積で、Ⅰ期池の堆積土と判断した。Ⅰ期池の造成土や河原石などは確認されていない。６層の底面は平坦な箇所から緩

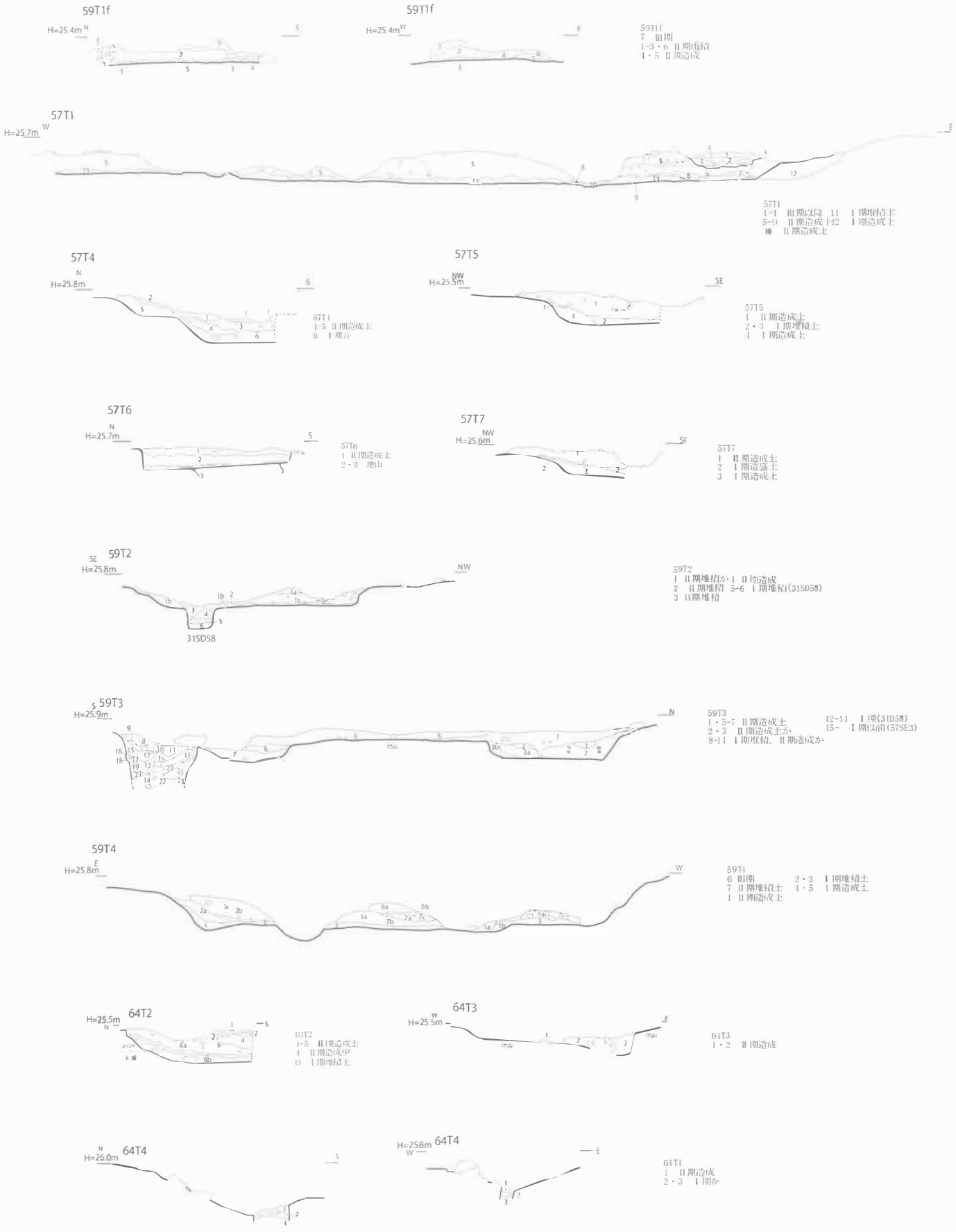


図172　23SG1断面図（2）

やかに岸に立ち上がる。人為的な堆積土の５層はⅡ期池の造成土とみられる。４層は自然堆積土で、１～３層は人為的な土層と判断しているが、自然堆積の可能性も残る。１～４層がⅡ期池の堆積土ともみられるが、Ⅱ期池の造成時に自然堆積土が間層となった可能性もあり、確定が難しい。

【池北西部】

59T2（図170・172）　59T2は71－76付近の池の北西部に、57次調査での57T3Aと57T3Bを拡張して設定した。31SD58溝跡を検出している。なお、31SD58は28m程の延長が確認できているが、西端は削平等により失われており、本来の延長は確認できない。31SD58は側面が板材で構築され、５・６層の自然堆積土層で埋没する。２層は自然堆積とみている。Ⅰ期の堆積土もしくはⅡ期の造成の途中に形成されたとみることができるが、判然としない。Ⅰ期段階の堆積でもⅠ期池の平面範囲内での堆積土とみた場合は、池の範囲に含まれることになり31SD58が池底面での排水溝となり、やや不自然な位置となろう。1a・1b・4層は人為堆積で、Ⅱ期池の造成土と判断した。57T1の５層と同様の土層である。自然堆積による３層は、Ⅱ期の堆積土とみている。

59T3（図170・172）　59T3は73－75付近の池の北西部に、57次調査での57T2A・B・Cを拡張して設定した。15～23層はⅠ期池以前の遺構埋土で、井戸跡（57SE3）である。井戸跡は人為堆積により埋め戻されている。12～14層は31SD58の埋土である。このトレンチ内が31SD58の東端に近いとみているが、意匠や構築物は検出されていない。８～11層はⅠ期堆積土もしくはⅡ期造成、１・５～７層はⅡ期池の造成土とみている。５層は59T2の1a、1b層に対応する人為堆積土である。６・７層はⅠ期池の造成土の可能性も残る。また、北側の１～３層は溝状の掘り込みを埋め戻している。Ⅱ期池の造成に伴うものとみているが、帰属する時期や性格は明確でない。

57T7（図170・172）　57T7は73－75付近の池の北側中央部に設定した。59T3と接する。３層は粘土を主体に砂質土を含む締まりが強い人為的な堆積土である。Ⅰ期池の造成土と判断している。２層は自然堆積土で、Ⅰ期池の堆積土とみている。１層は黄褐色土のブロックを主体に、炭粒や河原石を少量含む人為的な堆積土である。Ⅱ期池の造成土と判断している。上面に河原石などが貼り付けられている。

64T3（図170・172）　64T3は72－77付近の池の北西部に、橋跡の有無や関連遺構として礎石などが確認できるか検討するため59T2の南側に設定した。関連する遺構は検出できておらず、トレンチ内の石は礎石ではなくⅡ期池の景石のひとつと判断している。なお、周囲も含めて礎石やその痕跡は検出されていない。

64T4（図170・172）　64T4は74－76付近の池の北側中央部に、59T3と57T1の間に設定した。石組みの周囲で湧水が周囲からみられる箇所に設定した。池の造成に伴う土層は確認できず、石組みの周囲から湧水していた可能性があるものの、確定できていない。

【池南西部】

池の南西部は大きく削平を受けており、当初の調査時から全容の把握が難しいことが指摘されていた。64次調査では平面的に検出を行い、立ち上がりの有無や土質の観察を行った。その結果、10cm程度の標高の違いを把握できた。また、それに沿って、池底と推定できるグライ化した範囲とⅡ期池の造成土と類似した黄褐色粘土と黒褐色粘土の分布を確認している。これらからⅡ期池の南西の範囲を想定している。

③時期ごとの遺構と遺物の特徴

【Ⅰ期池以前の遺構】

遺構　各トレンチにおいて池跡の下層から複数の遺構が検出されている。59T1a及び59T1bで確認された南北方向の溝、59T1bで確認されたトイレ状土坑、59T1dで確認された59SE1、59T3で確認された57SE3などがある。いずれも断面での確認などにとどまり、遺構の全容は把握できていない。これらの遺構からは遺物は出土していない。

また、池跡内及び池跡の想定位置と重複する遺構に28SE14、28SE18、28SK21、28SK23、28SK25、28SK29、31SK34、31SK35、31SK36、31SK38、64SK1、64SK2がある。いずれも池跡との新旧関係は遺構の切り合いが判然としないため確定できないが、井戸跡などの上層は人為的に埋め戻されている。多くは池跡より古い段階の遺構と想定される。

遺物　Ⅰ期池以前の遺構については精査しておらず遺物も少ない。ここではⅠ期池の造成に際して埋め戻された57SE3及び59SE1の、２つの井戸跡から出土したかわらけを図示した。図174－1は57SE3（57T2C）から出土したロクロかわらけ大皿である。図174－2は59SE1の上面から出土した手づくねかわらけ大皿である。ここで図示したが、59SE1は検出にとどめておりⅠ期池の構築に伴う遺物と捉えられる。口径13.6cm、器高2.5cmである。

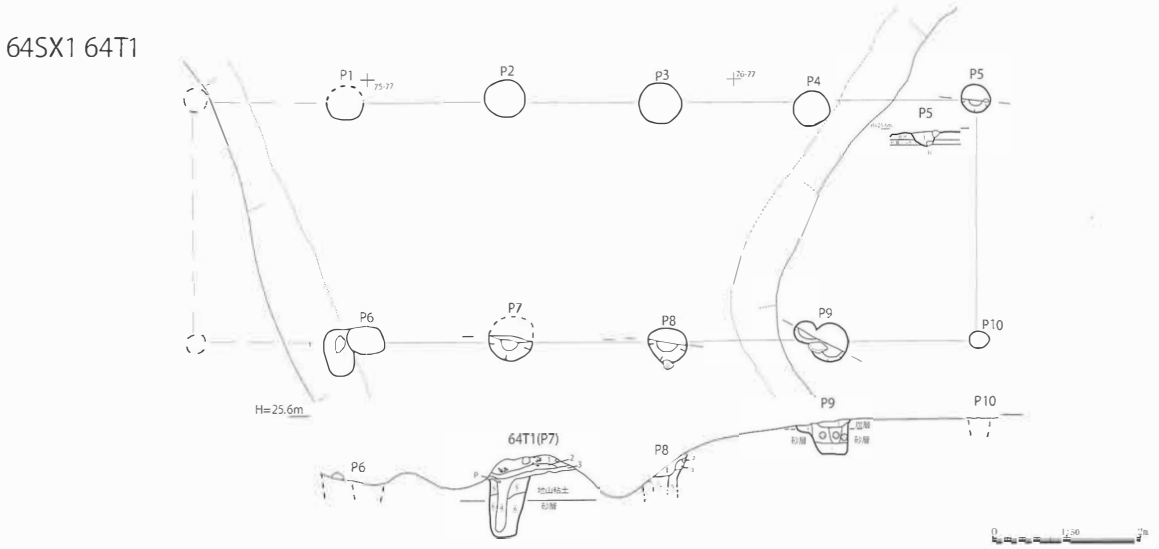
【Ⅰ期池】

遺構　Ⅰ期池はトレンチ調査による部分的な把握が主となっており、全容が判明しているわけではない。各トレンチでの確認状況から池の東部で確認しているものの、西部では確認されていない範囲が多い。また、排水溝として、31SD58が連結するとみられる。現在の検出状況から、南北に細長い形状で、全長42m、最大幅23mで中島を有さない形状と推察している。池の底面標高は24.8～25.1mで、24.9m程を平均とする。西側では一部に時期が特定できていない自然堆積土層もあり、現在の想定よりさらに拡大する可能性もある。Ⅰ期の園池は基本的には地山を掘り込んで成形されるが、汀線付近では盛土地業が行われている。池底は地山面を平坦に成形し、その上に部分的に薄くⅠ期池の造成土があるほか、機能時の堆積土が確認できる。Ⅰ期池には景石や礫敷きの痕跡は確認されていない。西側に排水溝31SD58が連結し、現状では西側に30m程延びる。幅は１m、深さは最大0.7mの掘方に、側板を幅0.5mに据えて暗渠としている。

関連遺構　64SX1橋跡　Ⅰ期池は現状では中島を把握できていないが、Ⅱ期池で中島が所在する方向へと向かう方向の橋跡（64SX1）が検出されている（図173）。64SX1は75－77付近に位置し、59T1で検出され、64T1で延長を確認している。４×１間で、西端の柱穴１間分が削平により失われたものとみられ、本来は５×１間とみられる。東西方向を向き、軸方位はN－0°－Eである。柱間寸法は、桁行が212cm、梁行が330cm程で、梁行が11尺、桁行が７尺等間に復元できる。全長は検出では桁行で8.5m、１間分を想定すると10.6m程である。柱穴は掘方が径50～60cm程で、柱痕跡は平面及び断面での確認で21～28cm程である。柱穴の深さは池底のP７・８では40cm以上になり、P９で34cm、P５で20cmである。Ⅰ期池に伴う遺構で、Ⅱ期池の構築に際して埋め戻されており廃棄されている。

遺物　57T1　57T1の底面付近からかわらけが出土している（図174－３・４）。手づくねかわらけ大皿は口径13.4～13.5cm、器高2.4～2.8cmである。

59T1d　59T1dではⅠ期池の埋土に廃棄された状態で多くの遺物が出土した。手づくねかわらけ小皿は口径7.7～9.5cm程で平均8.8cm程、器高1.6～1.9cm程で平均1.7cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.1～14.7cm程で平均13.3cm程、器高2.0～3.1cm程で平均2.6cm程である。口径が小さい器形



64T1・64SX1(P7)
1　2.5Y7/4浅黄色土ブロック主体　灰黄色砂・かわらけ片・中小の礫を少量含む
　粘性ややあ　締っている（人為　Ⅱ期池周隧土）
2　10YR3/3暗褐色砂　10YR4/3にぶい黄褐色砂質土との混土
　炭粒・地山ブロック・かわらけ細片を微量含む
　粘性・締りややあ（人為　Ⅱ期池築土）
3　5Y5/1灰色泥　粘性ややあ　締っている　Ⅰ期池埋土
4　10YR1.1灰色泥　粘性・締りややあ　住痕
5　5Y8/1淡黄色土　灰色泥をブロック少量含む　粘性ややあ　締っている
6　10GY6/1緑灰色土　グライ化（浅黄色土の）個色の粘土及び砂と混合
　粘性・締りややあ　細かな植物片を含む

64SX1(P8)
1　10YR5/1灰色土　地山ブロック多量含む
　炭粒・かわらけ細片をごく微量含む
　粘性ややあ　締っている（Ⅱ期池埋土）
2　10YR6/1灰色土　地山ブロック小粒少量含む　粘性・締りややあ
3　2.5Y7/4浅黄色土　粘性有　締りややあ
4　7.5Y5/1灰色土　地山ブロック微量含む　粘性・締りややあ
5　2.5Y7/3浅黄色砂　粘性なし　締りややあ

64SX1(P9)
1　2.5Y8/1淡黄色土　酸化鉄が全ての層に不規則に入る　褐灰色土微量含む
　粘性ややあ　締っている
2a　2.5Y8/4淡黄色粘土　褐灰色土少量含む
2b　褐灰色土が少し多い感じがする　粘性ややあ　締っている
3　2.5Y7/4浅黄色粘土　同砂質土の混土　褐灰色土ごく微量含む
　粘性弱　締っている
4　2.5Y7/2灰黄色粘土質土　粘性有　締っている

図173　64SX1平面・断面図

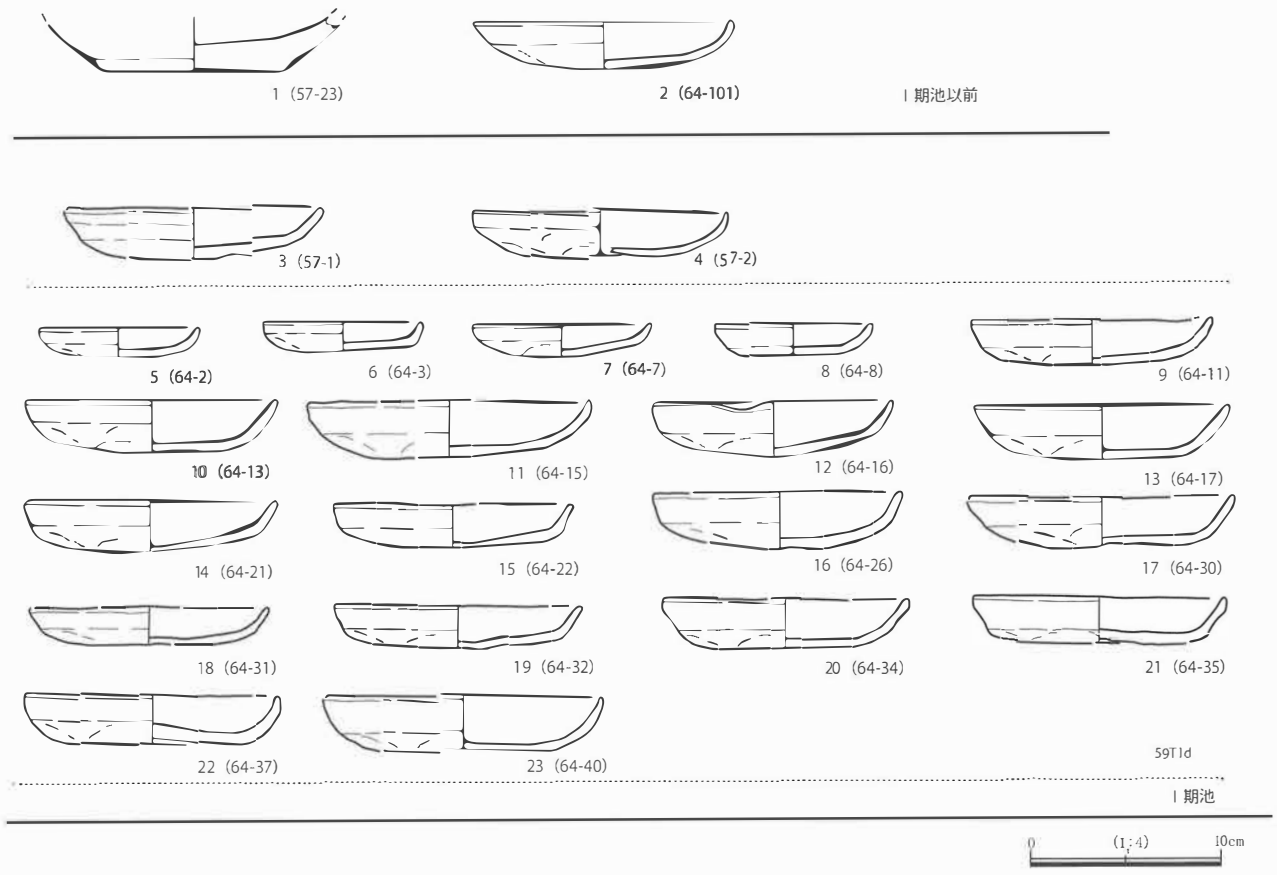


図174　23SG1出土土器類実測図（1）

の資料が多く、体部のナデ調整も一段のみである。

出土遺物の特徴からは12世紀後半の年代が想定ができる。

【Ⅱ期池】

遺構　Ⅱ期池は、平面形は南北に細長く、全長42m、最大幅35m程の中央部に中島を有する池跡である。園池南西部は後世の削平によって大きく失われており、現状では明確な遺構としては残存していない。部分的な盛土の痕跡や、地山の変化、一部に岸の立ち上がりなどが確認できることから平面形状では楕円形に滞水部が全周する園池と想定している。Ⅰ期池の堆積土の直上に盛土を行い、基盤を造成している。

Ⅱ期池の造成土には表面に河原石等の円礫が貼り付けられていた。礫は位置により径10～70cmほどと大小様々で、Ⅲ期以降の溝により原位置を保たないものが多い。これらの円礫は調査時には部分的に残っていた。本来は池跡に広く分布し、全面に石が葺かれていたものと推定できる。特に東岸付近は10cm程の河原石が、比較的径が揃う状況で確認されており、州浜を呈していたと推察できる。また、景石が中島の北側を中心に配されている。景石は池の北側の中央から西部にかけて、いくつかのまとまりをもって確認できる（図176）。西から石組１、石組２、石組３とする。石組１は中島の北岸に沿って、100cm程の円礫が複数まとまる。直立せず、斜めに倒れた状態だが、抜き取り等の痕跡は確認されていない。石組２は池の北岸に沿って径70cm程の円礫が複数まとまる。直立するように並ぶものもある。石組３は石組２の南の中島に沿って確認できる。径50～90cm程の円礫が並ぶ。抜き取り等がないことから、原位置を保つ景石が多いとみられる。この他、池底にはいくつかの石組がある。石組２の南に方形を呈して石組が確認できる。64T4を設定した位置にあたり、確定できないものの周囲の状況からは湧水等の関係も推察できよう。底面標高は深いところでは24.8～24.9mである。

なお、中島は長軸25m程、短軸12m程で平面積が約290㎡に復元できる。池の規模と比しても比較的大きく一定の面積をもつと捉えられるが、Ⅱ期池に明確に伴う遺構は確認されていない。Ⅰ期池で付設された橋もⅡ期段階には埋め戻されており、同種の遺構は確認されていない。

関連遺構　南西側に延びる31SD59溝跡が排水溝として機能した可能性があるが、取り付き部分が不明のため確定できない。

遺物　59T2（57T3A）　59T2（57次調査・57T3A）ではⅡ期池の造成土及び造成時の土層からかわらけが出土している。図示した資料（図175－１）はロクロかわらけ大皿で口径13.1cm、底径7.0cm、器高3.2cmである。図示指定しない資料も含めて器高は３cm前後の低い器形を呈する。この他に手づくねかわらけが多く出土しており（図175－39・40）、手づくねかわらけ大皿では口径12.6～14.4cm程で平均13.4cm程、器高2.7～3.3cm程で平均3.1cm程である。口径13cm前後の器形が多い。

59T2（57T3B）　59T2（57次調査・57T3B）ではⅡ期池の造成土からかわらけが出土している。図した資料（図175－２・３）はロクロかわらけ小皿と大皿である。ロクロかわらけ小皿は口径8.3cm、底径5.6cm、器高1.5cmで、ロクロかわらけ大皿は口径14.0cm、底径8.0cm、器高3.1cmである。この他に手づくねかわらけが多く出土しており（図175－41）、手づくねかわらけ大皿では口径13.0～14.6cm程で平均13.9cm程、器高2.5～3.3cm程で平均2.9cm程である。

59T2　59T2（59次調査）ではⅡ期池の造成土からかわらけが出土した（図175－27～38）。ロクロかわらけ小皿は口径8.9～10.0cmで平均9.3cm、底径5.7～6.4cmで平均6.0cm、器高1.6～1.8cmで平均1.7cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.6～9.2cmで平均9.0cm、器高1.5～1.8cmで平均1.7cmで

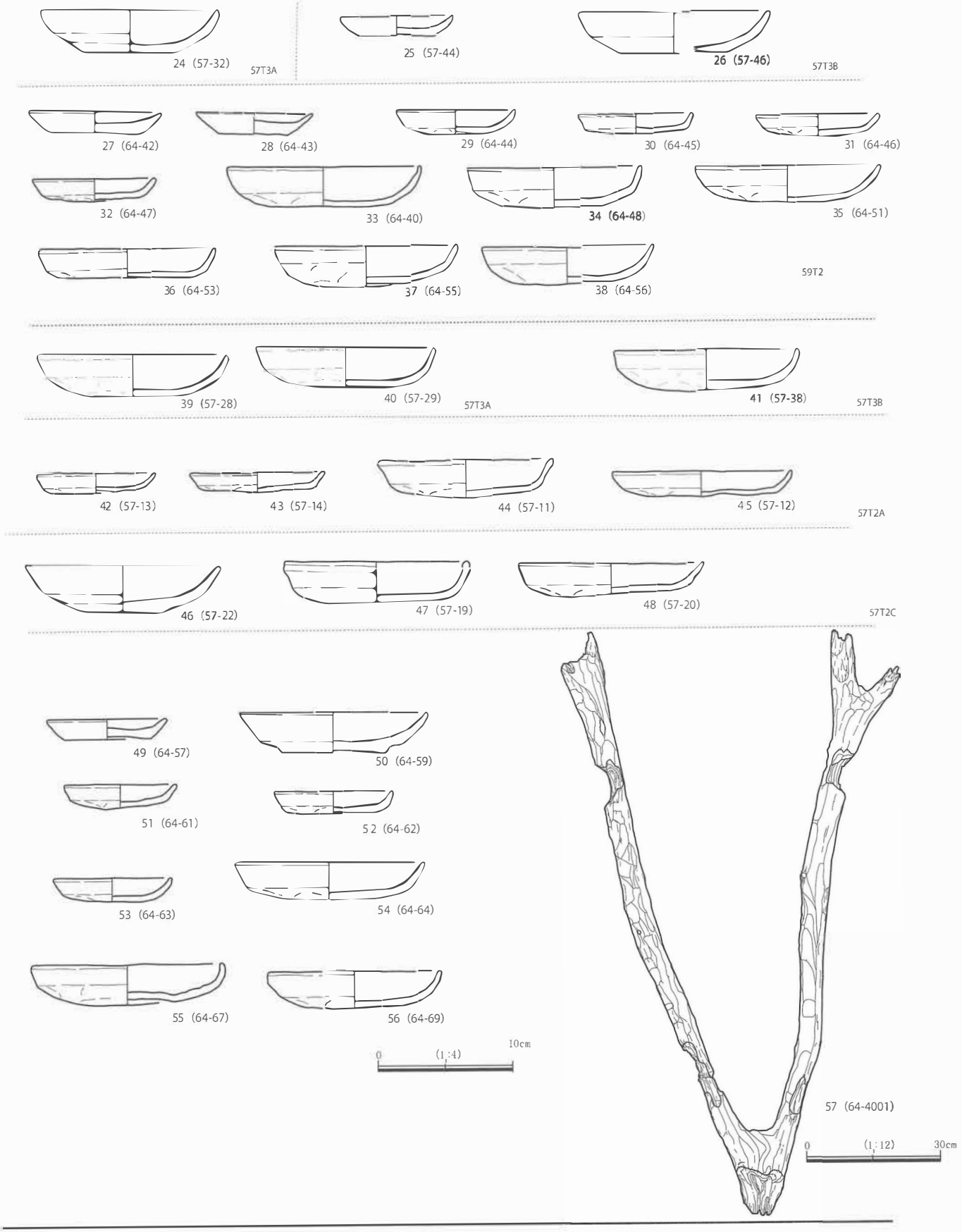
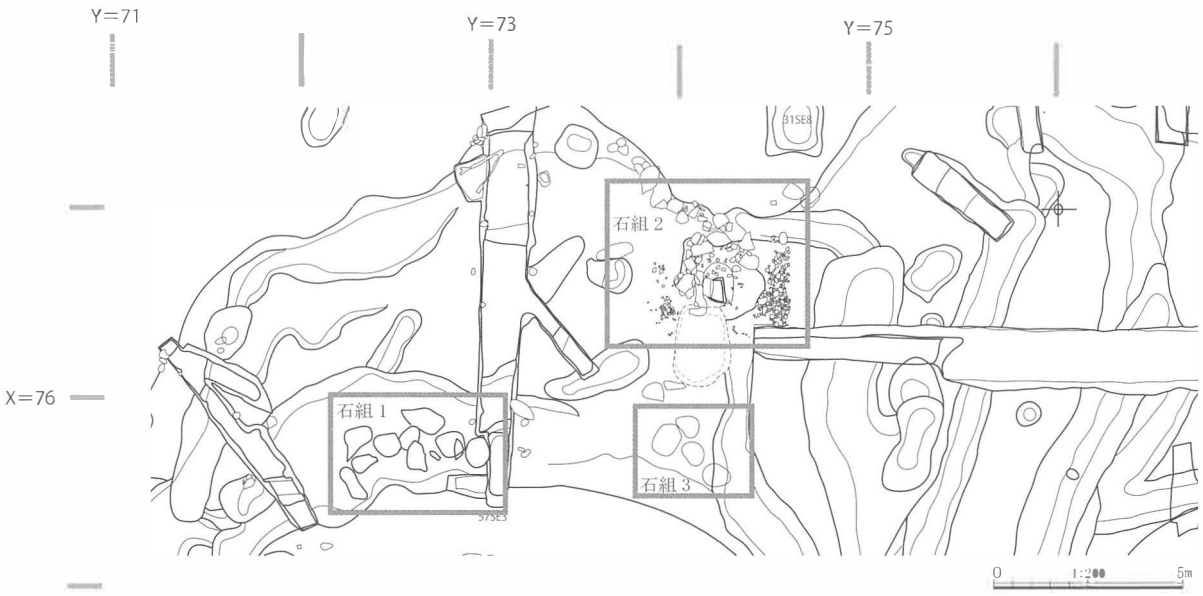
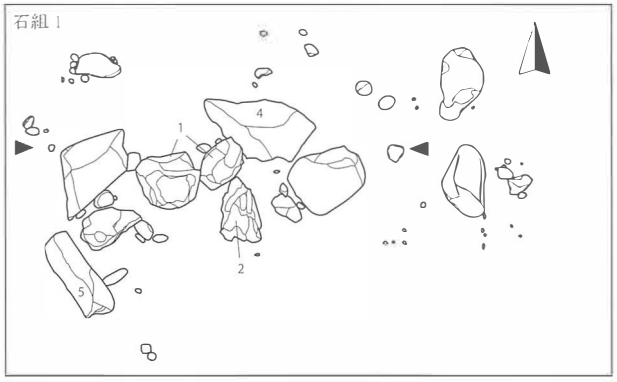
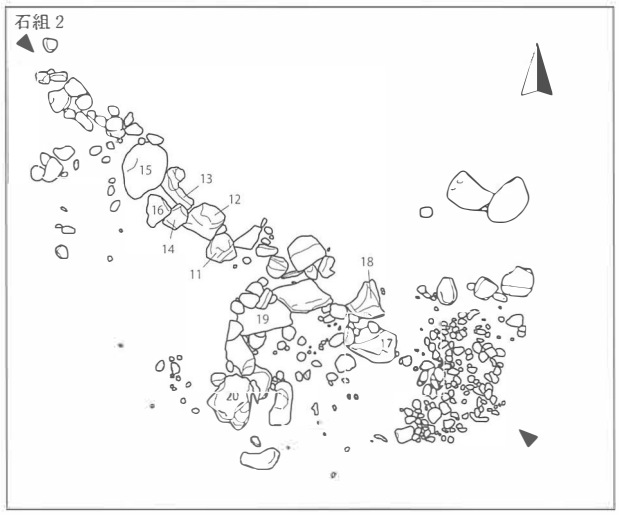
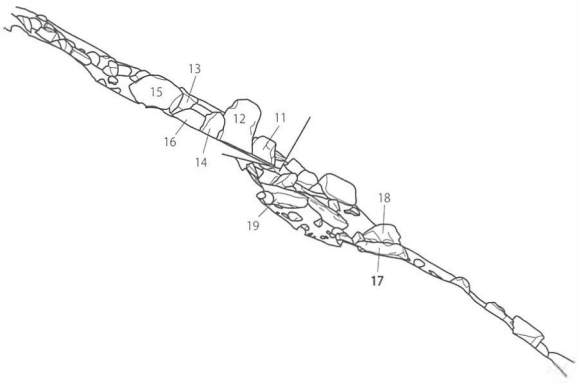


図175　23SG1出土土器類実測図（2）









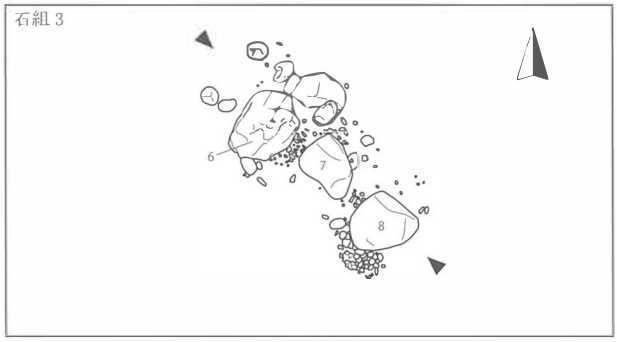


図176　23SG1石組周辺平面図

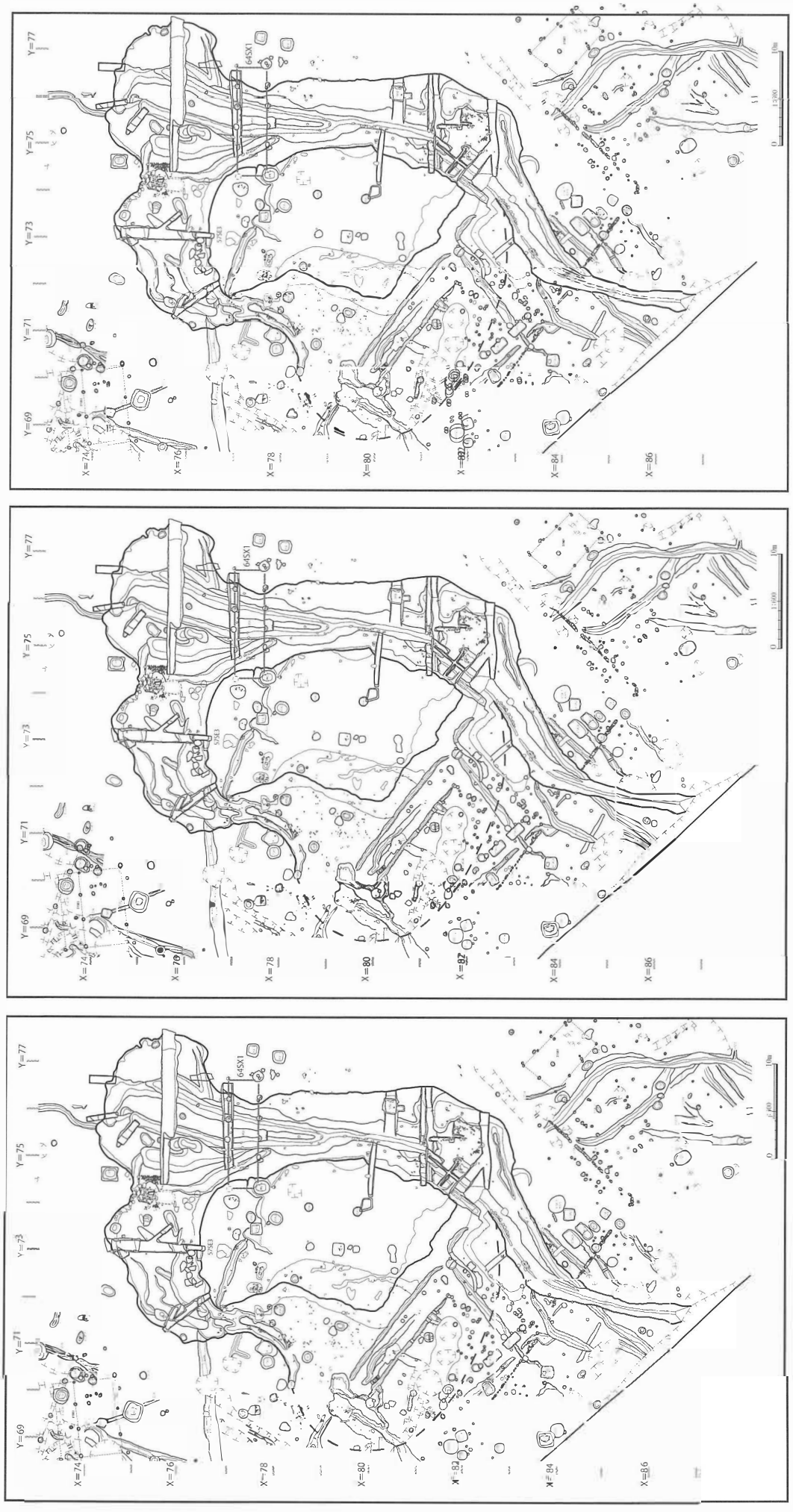


図177　23SG1変遷図

ある。手づくねかわらけ大皿は口径12.8～13.8cm程で平均13.3cm程、器高2.6～3.1cm程で平均2.9cm程である。口径13cm前後以下の口径が小さい器形を呈する。

59T3（57T2A）　59T3（57次調査・57T2A）ではⅡ期池の造成土からかわらけが出土している（図175－42～45）。手づくねかわらけ小皿は口径8.8～10.0cmで平均9.3cm、器高1.5～1.8ｃｍで平均1.7cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.0～13.6cm程で平均13.4cm程、器高1.9～3.0cm程で平均2.7cm程である。口径13cm前後以下と小形の器形を呈する。

59T3（57T2C）　59T3（57次調査・57T2C）ではⅡ期池の造成土からかわらけが出土している（図175－46～49）。ロクロかわらけ大皿は口径14.4cm、底径6.0cm、器高3.5cmで、器高の低い器形を呈する。手づくねかわらけ大皿は口径13.2～13.5cm、器高2.7～3.0cmである。

59T3　59T3（59次調査）ではⅡ期池の造成土からかわらけが出土している（図175－49～56）。ロクロかわらけ小皿で口径8.4～9.0cmで平均8.9cm、底径6.6～6.8cmで平均6.7cm、器高1.2～1.8cmで平均1.4cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.3～14.1cmで平均13.6cm、底径6.8～8.0cmで平均7.4cm、器高3.4～3.5cmで平均3.5cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.4～9.6cm程で平均8.7cm程、器高1.7～2.0cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.8～14.2cm程で平均13.5cm程、器高1.8～3.1cm程で平均2.7cm程である。また、修羅とみられる木製品が出土している（図175－58）。Ⅱ期池の造成土とみられる２層から出土した。最大長140cm、最大幅76cmである。径5.5cm程のクリ材である。抉りが対になる位置にそれぞれ２カ所行われている。

出土遺物の特徴からは12世紀後半の年代が想定ができる。

【Ⅲ期】

Ⅱ期池の廃絶後の状況をⅢ期とした。Ⅱ期池の東部に蛇行しながら南北に走る複数の溝が形成される。埋文報告ではこの段階の遺構とその広がりを平面的に検出したことになろう。Ⅲ期の堆積土は多くは掘削されているため不明な点が残るが、水成堆積によるラミナ状の堆積で、砂と泥が互層となる。また、59T1a付近で確認したように南部で溝を堰き止められている。人為的な土層の範囲は６×６ｍ程の範囲で顕著である。Ⅲ期とした溝の多くは自然の流路等と想定しているが、人為的な堰き止めの時期や性格などに不明な点が残る。

④埋文報告との対応

最後に埋文報告段階との対応や遺構の理解が変更された内容をまとめる。

【Ⅰ期池】埋文報告では、不明な点が多いものの滞水性の池で、31SD58を排水溝に想定している。この段階に対する見解は大きな相違はない。池に架かる橋跡として64SX1が発見されたこと、池の形状を推察した点が追加された。

【Ⅱ期池】埋文報告ではⅡ期池を大小の景石と複数の溝で形成される「流れを重視する形式」と捉え、形状については馬蹄形と把握した。この段階の遺構の把握は大きく変化した。その後の調査で、この段階と把握していた複数の溝が池の堆積土等を掘り込むことが確認された。そのため、池と理解していた遺構の時期と異なることが把握され、これをⅢ期とした。形状についても中島をもつ楕円形の形状を想定した。

【Ⅲ期】埋文報告では「Ⅱ期以降」として報告した内容である。池の南東部で溝が堰き止められ、水成堆積した状況とされている。上述のとおり、その後の調査でⅡ期池と捉えていた溝がⅡ期池の盛土や堆積土を切り、Ⅱ期池より後出のものと把握された。そのためⅡ期池を構成する要素とされたこれ

らの複数の溝がこの段階に位置づけられた。

【関連遺構】 28SD1を導水溝となる見方もあるが、根拠は少ないとされていた。その見解に変更はない。導水溝については確認されておらず、湧水等を利用したと想定している。

排水溝についてⅠ期池での排水溝を31SD58とみる見解も変更はない。Ⅱ期池での排水溝を31SD59とみる可能性についても、未確定なままであるものの大きな見解の変更はない。

（4）井戸跡

遺跡内では88基の井戸を検出している。このうち、12世紀代と位置づけられる井戸跡は74基である（表12）。それ以外の井戸跡は表13のとおりである。

以下では本報告書の主たる対象である50次以降の調査で精査した遺構について先に記す。50次以前の調査で調査された井戸跡については報告がなされており（岩手埋文1995）、基本的な属性に関して新たな知見は得られていない。それらについては特徴的な遺物が出土した遺構や建物との重複がある遺構などを対象に概要のみを記す。

表13　12世紀代の井戸跡

遺構名	位置	長軸・短軸・深さ	底面標高(m)	遺構重複関係	備考
21SE1	87－102	390・360・572	19.24		規模数値を訂正
21SE2	82－95	203・194・547	20.29		
21SE3	81－92	152・148・378	21.16		
21SE4	83－89	－・200・－	－		
21SK14	88－103	242・205・182	23.13		報告書断面図の標高訂正
21SK21	88－104	300・296・200	23.48		
21SK23	87－101	322・322・264	22.74		
28SE1	78－67	145・135・219	24.98	28SB6、28SB1、28SA2→28SE1。	28SB1と逆の可能性。
28SE2	79－68	190・155・396	23.03	28SB2→28SE2。	寝殿造墨画 28SB2と逆の可能性
28SE3	77－65	160・155・242	24.94	55SA1→28SE3。	
28SE4	74－68	223・218・455	22.54	28SB5と空間重複。	人面墨書かわらけ
28SE5	75－70	153・146・367	22.80		
28SE6	76－70	223・203・529	21.40	28SB2→28SE6。	28SB2と逆の可能性
28SE7	78－70	172・140・254	24.44	28SB2と空間重複。	
28SE8	78－70	182・152・334	23.53	28SB2、28SB3と空間重複。	
28SE9	78－71	238・195・432	22.29	28SB3、28SK13→28SE9。 28SB2と空間重複。	28SB3と逆の可能性
28SE10	79－70	182・182・188	24.96	28SB3と空間重複。	
28SE11	82－70	180・176・437	21.99	28SB4→28SE11。	
28SE12	77－77	130・125・193	23.53		
28SE13	77－78	132・128・256	23.07		
28SE14	74－77	176・144・361	21.58		
28SE15	71－72	192・184・195	24.37	65SA1と重複。新旧は不明。	
28SE16	75－72	168・148・322	23.31		「人々給絹日記」 紡織具が多い。
28SE17	81－73	156・130・233	24.33		
28SE18	73－77	124・118・287	22.71		
31SE1	79－82	200・188・615	19.41		
31SE2	69－74	204・193・365	22.25		
31SE3	69－73	176・164・212	23.96	31SB4→31SE3。	
31SE4	70－72	228・180・340	22.87	31SE4→31SB4。	
31SE5	69－72	220・208・170	24.38	31SE5→31SB4。	
31SE6	68－72	180・176・333	22.62		
31SE7	67－71	236・176・580	20.20		

遺構名	位置	長軸・短軸・深さ	底面標高(m)	遺構重複関係	備考
31SE8	74－74	168・148・255	23.43		
31SE9	69－84	140・137・125	23.07	31SE9→31SE10。	
31SE10	69－83	178・165・180	22.78	31SE9→31SE10。	
31SE11	67－80	164・156・152	22.92		
36SE2	62－59	108・96・290	24.00		
36SE3	61－58	88・84・286	23.91		
36SE4	63－59	－	－	－	－
41SE1	65－69	220・200・333	22.49	41SB2と空間重複。	
41SE2	64－69	200・180・112	24.66		井戸ではない可能性
41SE3	65－68	215・200・131	24.98		
41SE4	65－67	200・188・310	23.40		
37SE1	87－67	－	－	－	
37SE2	88－64	355・295・223	23.75	50SA6→37SE2。	
42SE1	85－64	－			
49SE1	88－73	440・380・290	22.24	48SB1と空間重複。	57SE1と同
50SE2	93－66	185・175・125	24.46		
50SE3	92－64	237・225・298	22.72		銅印「磐前村」
52SE1	70－60	205・182・360	24.15		
52SE7	72－60	160・139・160	26.50	52SE7→52SB25。	
52SE8	68－66	210・190・390	23.07		41SE5と同
52SE9	64－60	220・210・390	23.14		
52SE10	63－58	220・188・235	25.11		
55SE1	73－65	315・260・845	18.95		36SE1と同
55SK38	74－54	200・185・240	25.07	55SB18→55SK38。	
55SK43	80－54	160・125・265	24.75		
55SK44	80－53	180・170・315	24.20		
56SE1	66－53	195・185・240	25.30		
56SE2	69－56	176・158・－	－	52SB27と空間重複。	未精査。
56SE3	57－58	198・185・－	－		
56SK80	57－50	120・120・165	26.56		
57SE2	73－48	180・－・201	25.55		
57SE3	73－76	－・－・－	－	57SE3→23SG1。	182頁に記載
59SE1	76－80	－・－・－	－	59SE1→23SG1。	178頁に記載
70SE1	70－49	152・146・211	25.5		
70SE2	66－47	208・164・－	－		未精査
70SE3	61－48	261・248・382	24.35		
72SE1	61－43	240・232・－	－		未精査
77SK1	85－100	140・140・138	23.8		
以下参考					
11SE1	59－51	－	－		11次・1号井戸
13SK2	68－82	－	－		13次・4C－2土坑
13SE4	68－82	－	－		13次・5C－4井戸
13SE5	68－82	－	－		13次・5C－5井戸

※遺構名太字は本文中で記述

表14　近世以降の井戸跡（欠番含む）

遺構名	位置	備考
36SE1	73－65	55SE1に変更、欠番
41SE5	68－66	52SE8に変更、欠番
41SE6	56－60	17世紀頃か
42SE2	80－63	55SK24に変更、欠番
42SE3	81－66	55次で、欠番
42SE4	80－66	
42SE5	83－69	59次でp603に変更、欠番
42SE6	84－71	59次でp619に変更、欠番

遺構名	位置	備考
50SE1	86－63	井戸ではなく、土坑（251頁に記載）
52SE2	64－61	近世
52SE3	66－59	近世
52SE4	66－59	近世
52SE5	63－63	近世
52SE6	66－61	近世

【50次調査以降（本書の主な対象調査）で調査・検討した井戸跡】

37SE2　遺構　88－64に位置する、検出面での径355・295cm程の隅丸方形の井戸跡である（図版編図46、図178）。深さ223cm程で、底面は径150cm程の方形を呈する。底面標高は23.75mである。堆積土層は多くの土層が粘土を含み人為堆積とみられ、全体が埋め戻されている。６・８層は礫を多く含み、５層は部材、１・２層は円礫を多く含む。４層は粘土層で埋め戻され、井戸の周囲をめぐるように確認できる。50SA6→37SE2の新旧関係が確認できる。

遺物　底面付近から多くの土器類が出土しているほか、２層にも多くの土器類を含む。かわらけが26,406.5g出土している。ここでは底面付近からのかわらけを図示した。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径8.3cm程、底径6.0cm程、器高1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.6～14.3cm程で平均13.6cm程、底径6.0～7.4cm程で平均7.0cm程、器高2.6～4.5cm程で平均3.7cm程である。器高が低い資料が多く、皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径9.6～10.0cm程で平均9.8cm程、器高1.7～2.0cm程で平均1.8cm程である。大皿は口径12.7～16.4cm程で平均14.5cm程、器高2.3～3.6cm程で平均2.1cm程である。口径が15cmを超える大型の器形もみられるが、12cm台～15cm程とばらつきがある。図178－20（50－1188）は国産陶器で水沼産とみられる片口鉢である。このほか、国産陶器や瓦片が少量出土している。

50SE2　遺構　93－66に位置する、検出面での径185・175cm程の円形の井戸跡である（図版編図53、図179）。深さ125cm程で、底面は径85cm程の方形を呈する。他の井戸跡と比して浅いため、土坑の可能性もある。底面標高は24.46mである。堆積土層は、２層はブロック土が多く人為堆積の可能性がある。そのほか、３～５層は黄褐色粘土と褐灰色土が混じり人為堆積の可能性がある、その下層の６・７層は遺物・炭化物の出土が少なく、自然堆積であろうか。８層は黄褐色粘土と褐灰色土、砂が混じる。いずれの土層も遺物の混入が少ない。

遺物　遺物は井戸としては少なく、かわらけが1,390.5g出土している。

50SE3　遺構　92－64に位置する、検出面での径237・225cm程の円形の井戸跡である（図版編図53、図180・181）。深さ298cm程で、底面は径155cm程の隅丸方形を呈する。底面標高は22.72mである。堆積土層は、下層から４・５層は遺物の出土が少ないが粘土質の土層である。３層は遺物が多く有機質の土質で間層に自然堆積層を薄く挟むが、多くは人為的に埋め戻された土層と判断した。後述の白磁四耳壺は3a層から、銅印は3d層から出土している。２層は礫を多く含む粘土質の土層、１層は礫とブロック土を含む土層で、いずれも遺物の混入は少ないが人為的に埋め戻されたとみている。

遺物　３層から土器類など多くの遺物が出土している。かわらけが36,914.8g出土している。ここでは３層から出土したかわらけを図示した。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径8.9～9.2cm程で平均9.1cm程、底径5.8～6.2cm程で平均6.0cm程、器高1.6～2.2cm程で平均2.6cm程である。大皿は口径13.8～15.2cm程で平均14.3cm程、底径6.2～9.0cm程で平均6.9cm程、器高2.4～3.8cm程で平均3.3cm程である。器高が低い皿形の器形を呈する資料が多数を占める。手づくねかわらけ小皿は口径8.2～9.3cm程で平均8.9cm程、器高1.6～2.3cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.7～15.5cm程で平均14.3cm程、器高2.6～3.4cm程で平均3.0cm程である。口径14cm以上の資料が多く、15cm前後の大型の器形が多数を占める。体部のナデ調整も２段にわたるものが多い。銅印（図180－31）は4.7cm程の印面で、持ち手を含めた高さは3.7cmである。方形の印面に陽刻で「磐前村印」と記される。持ち手側に「上」の陰刻がある。白磁四耳壺（図180－30）はほぼ完形で、高

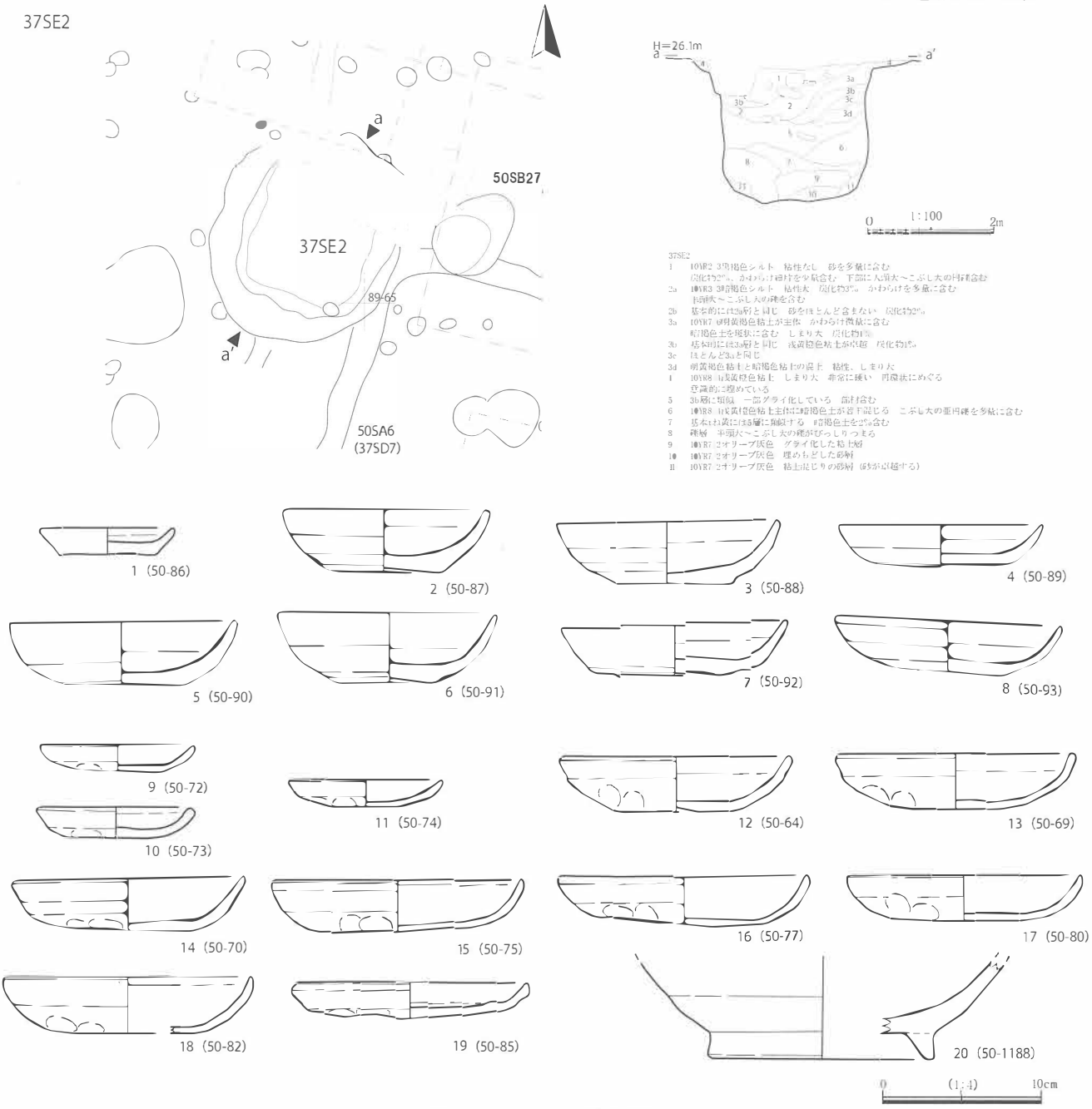


図178　37SE2詳細図

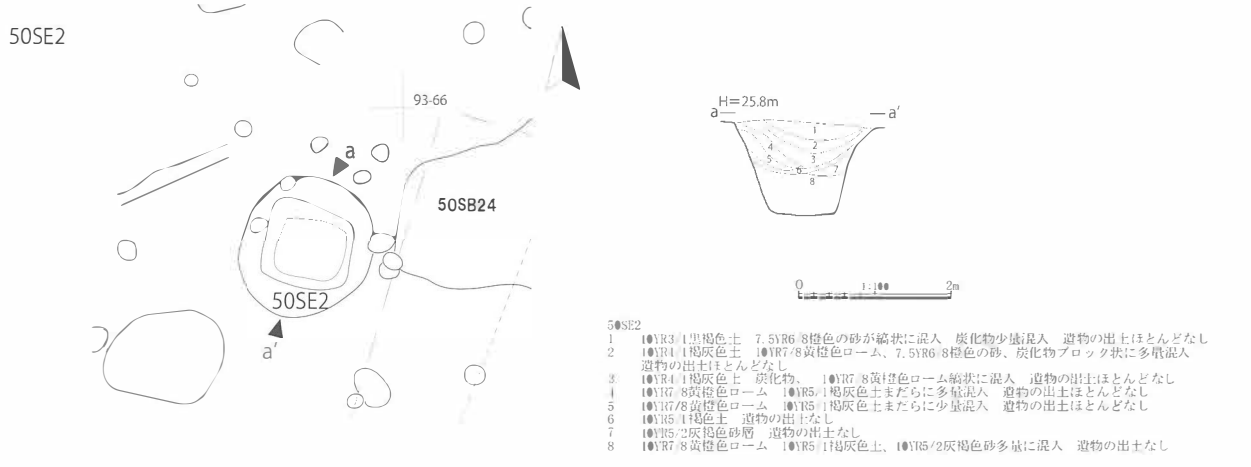


図179　50SE2平面・断面図

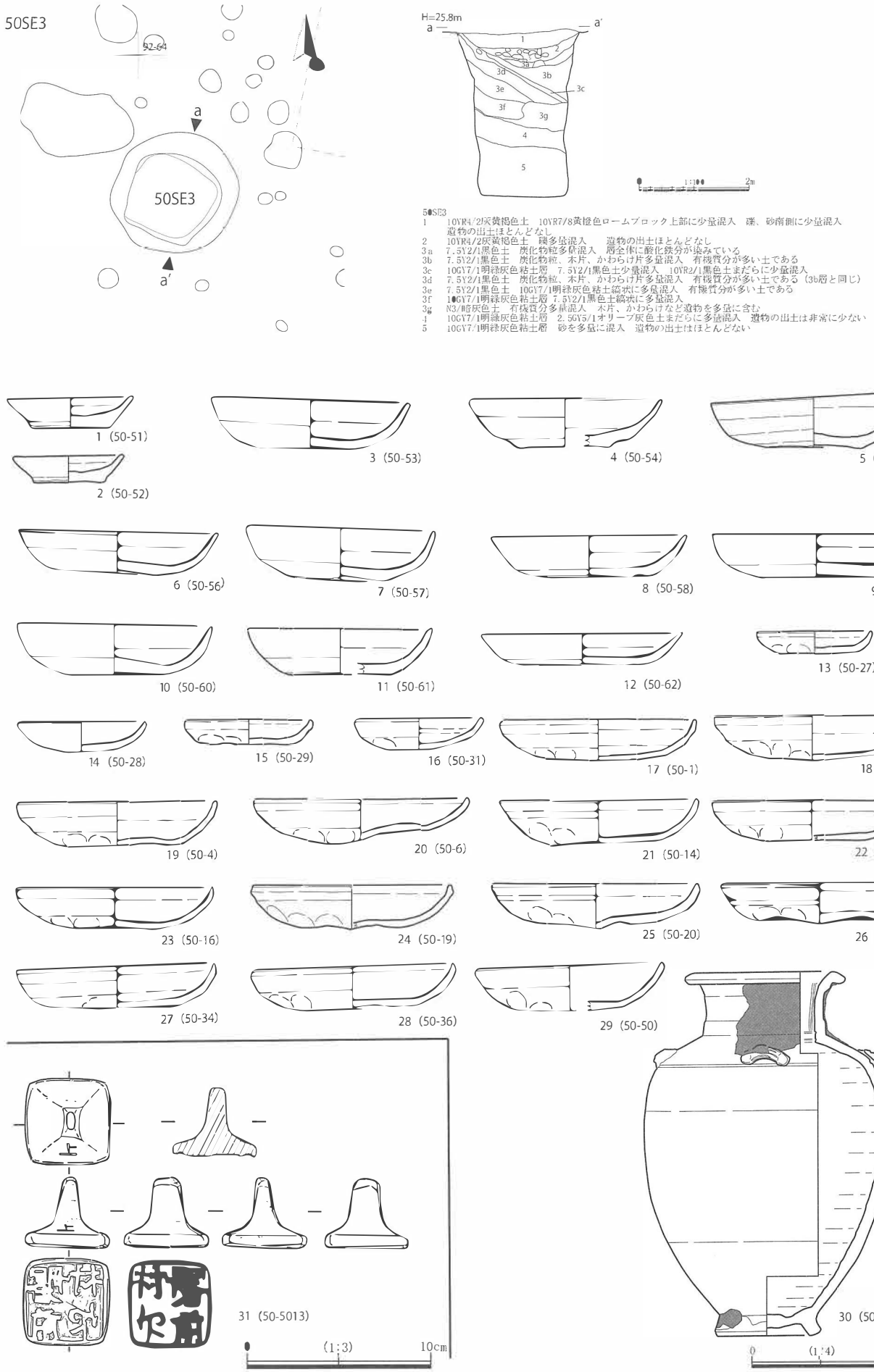


図180　50SE3詳細図

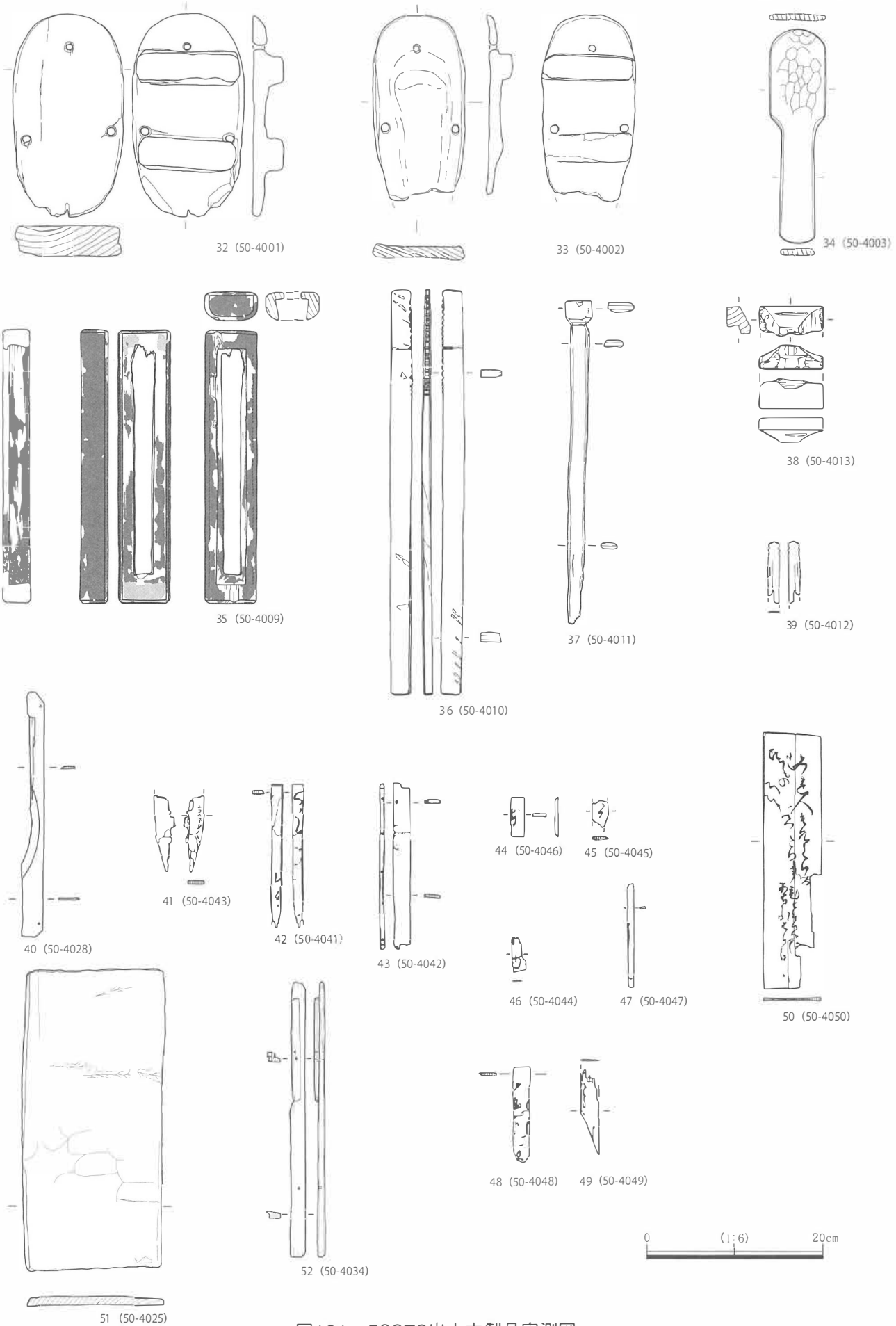


図181　50SE3出土木製品実測図

さ26.5cm程、口径10.1cm程、底径6.8cm程である。なお、この資料は既報告では高さ26cm程となっていたが若干の差異ではあるが訂正する。頸部から体部上半及び底面付近に漆が染みこんだ麻布が付着する。本来は器形の全体が覆われていたと推察される。大宰府分類でⅢ類とされる資料である。福建省産とみられる。

このほか木製品も３層から多く出土している。連歯下駄が２点（図181－32・33）、杓子が１点（図181－34）出土している。漆塗りの部材（図181－35）や鋸歯縁状の木製品（図181－36）、宝塔（図181－38）や笹塔婆（図181－39）も含む。図示していないが箸も８点出土している（50－4015～4023）。折敷は桟の破片や完形に近い資料、再加工品（図181－40）と多く出土している。また、墨書木片や折敷片など文字資料も含む。

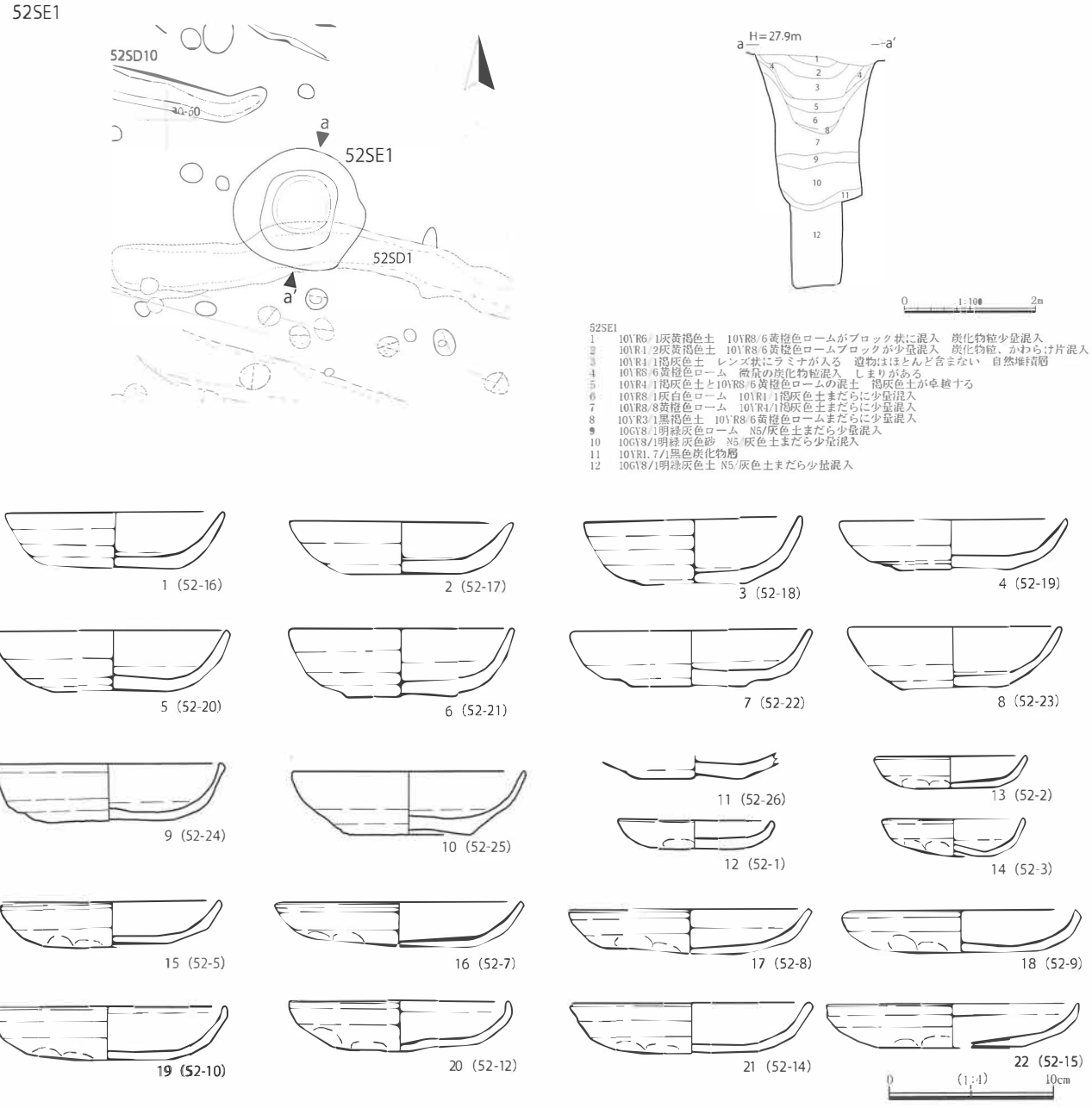
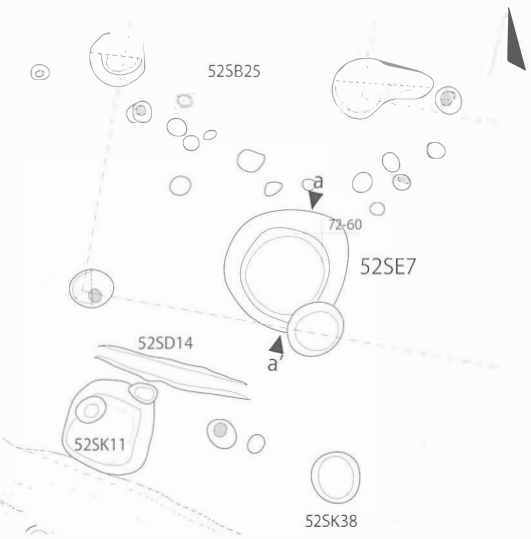
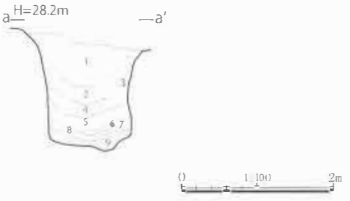


図182　52SE1詳細図

52SE7





52SE7
1　10YR6/1褐灰色土　10YR7/8黄橙色ロームブロック多量混入　炭化物粒多量混入　かわらけ片微量混入
2　10YR1.1褐灰色土　炭化物粒多量混入　完形のロクロかわらけ多量に混入
3　10YR7/8黄橙色ローム　10YR1/1褐灰色土まだらに少量混入
4　10YR5/2灰黄褐色土　炭化物粒少量混入
5　10YR5/1褐灰色土　10YR7/8黄橙色ロームブロック多量混入　炭化物粒多量混入
6　10YR1.7/1黒色土　10YR5/1褐灰色土まだらに多量混入
7　10YR7/8黄橙色ローム　炭化物粒多量混入
8　10GY7/1明緑灰色土　酸化鉄分多量に混入
9　10YR5/1褐灰色土　炭化物粒多量混入

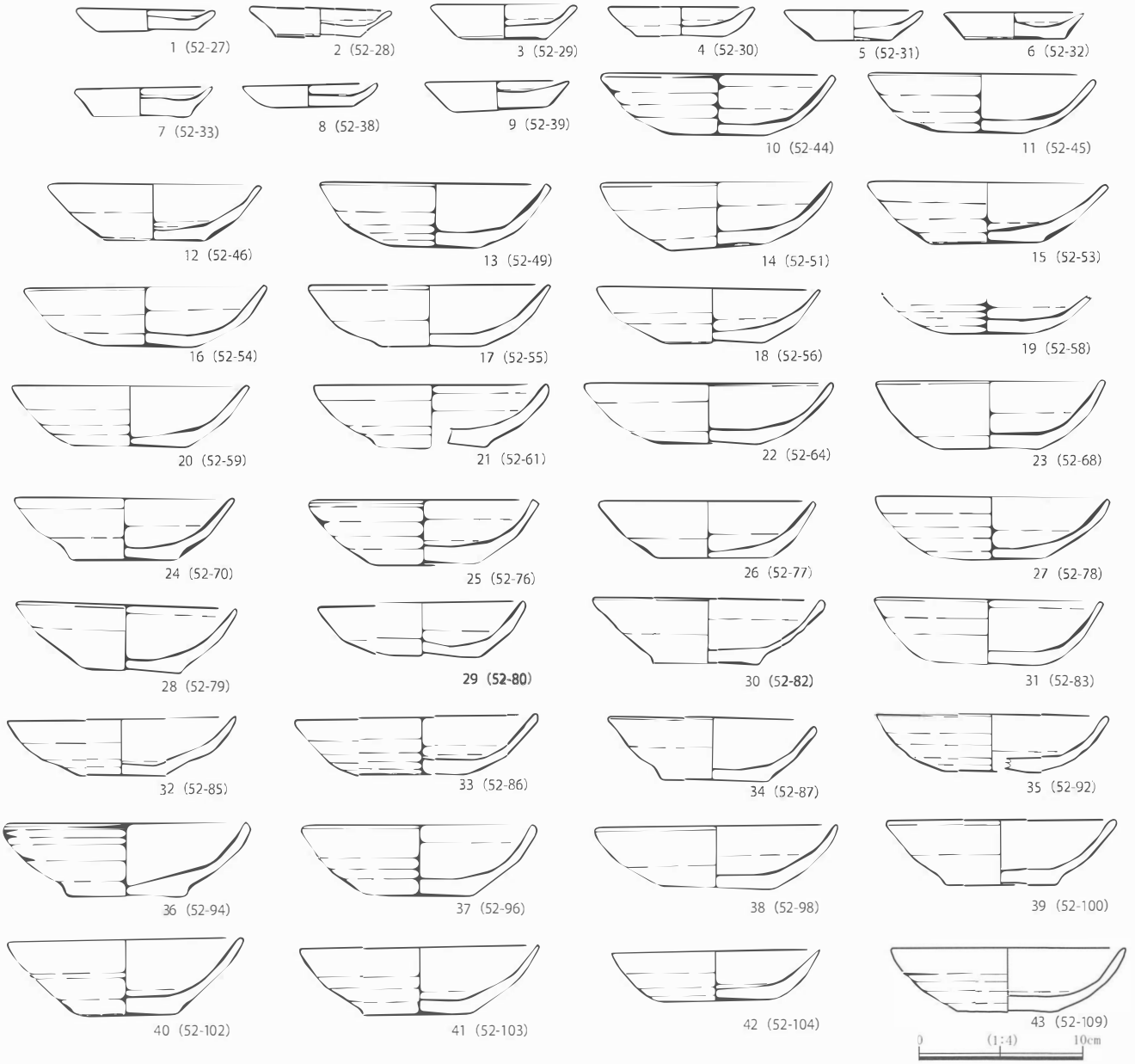


図183　52SE7詳細図

52SE1　遺構　70－60に位置する、検出面での径205・182cm程の円形の井戸跡である（図版編図26、図182）。深さ360cm程で、深さ200cm程までは隅丸方形の掘方で、それ以下は円形に小さくなり底面は径75cm程の円形を呈する。底面標高は24.15mである。堆積土層は最下層の平面形が円形で径が縮小した部分が人為堆積とみられる12層である。黄褐色粘土を含む、７・９～11層までは近い時期に堆積した土層と判断している。その後、１～６・８層が堆積する。自然堆積とみられる４・５層の上層に、土器類を多く含む人為堆積とみられる２層、黄褐色粘土ブロック土を含む１層が堆積する。

遺物　かわらけが12,120g、国産陶器が1,170g、輸入陶磁器が65g出土している。２層から多くの遺物が出土している。ここでは２層から出土したかわらけを中心に図示した。ロクロかわらけ大皿は口径13.1～14.8cm程で平均13.9cm程、底径6.4～7.7cm程で平均7.2cm程、器高3.0～4.2cm程で平均3.6cm程である。器高が低く、皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径8.6～9.3cm程で平均9.0cm程、器高1.7～2.3cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径13.1～15.2cm程で平均14.1cm程、器高1.3～3.3cm程で平均2. 7cm程である。口径は14cm以下の資料が多く、小型の器形が多数を占める。最下層の12層からは渥美産の片口鉢や中国陶器、ロクロかわらけが出土している。このほか、木製品や平瓦、丸瓦、穿孔のある円形の石などが出土している。

52SE7　遺構　72－60に位置する、検出面での径160・139cm程の円形の井戸跡である（図版編図26、図183）。深さ160cm程で、底面は径105cm程の円形を呈する。他の井戸跡と比して浅いため、土坑の可能性もある。底面標高は26.50mである。堆積土層は、４～９層は炭化物やブロック土を多く含む土層を間層に挟み、人為的な様相と目される土層と自然堆積の土層が互層となって形成される。２層は土器類や炭化物を多く含む。１層は人為的な土層で、ブロック土や炭化物を多く含み、埋め戻されたと判断している。52SE7→52SB25の新旧関係が確認できる。また52SC1と空間的に重複するとみられるが、遺構の切り合いはない。

遺物　かわらけが13,570g、国産陶器が148g出土している。２層から多くの遺物が出土している。ここでは２層から出土したかわらけを図示した。ロクロかわらけで占められ手づくねかわらけは小片を極めて少量含むのみである。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径7.8～9.4cm程で平均8.6cm程、底径4.7～6.5cm程で平均5.5cm程、器高1.3～2.1cm程で平均1.6cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.3～15.4cm程で平均14.1cm程、底径5.0～7.8cm程で平均6.5cm程、器高2.4～4.6cm程で平均3.7cm程である。器高の低い皿形の器形も含まれるものの、器高が高い椀形の器形を呈するものを含む。

52SE8　遺構　68－66に位置する、検出面での径210・190cm程の円形の井戸跡である（図版編図26、図184・185）。深さ390cm程で、底面は径130cm程の円形を呈する。断面では下部がやや広がる。底面標高は23.07mである。堆積土層は、いずれの土層も遺物を多く含み、人為的な土層で埋め戻される。9・10層は木製品や木屑、土器類を多く含み、人為的に埋め戻される。７・８層からは板材や部材、６層からは焼けた土壁が多く出土している。５・６層では出土土器類の多くも比熱の痕跡がある。１～４層も礫や炭化物を多く含み、人為的に埋め戻された土層と判断している。

遺物　かわらけが84,325g出土している。各層から多くの遺物が出土している。出土したかわらけはほぼ手づくねかわらけで占められる。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径9.2cm、底径5.8cm、器高1.5cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.2～14.2cm程で平均13.7cm、底径6.2～6.8cm程で平均6.6cm程、器高2.9～3.3cm程で平均3.1cm程である。ロクロかわらけは出土量がき

わめて少ない。混入の可能性も指摘されているが、出土層位は他の手づくねかわらけと同様である。手づくねかわらけ小皿は口径7.4～11.0cm程で平均9.0cm程、器高0.9～2.9cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.8～15.2cm程で平均13.4cm程、器高1.8～3.8cm程で平均2.7cm程である。口径13cm以下の小型の器形が多数を占める。内折れかわらけを含む。なお、平泉で出土するかわらけは、ロクロかわらけの胎土に夾雑物が多いのに対し、手づくねかわらけは石粒などがあまり混じらず夾雑物の少ない精緻な胎土であることが知られており、成形の相違が胎土の差と相関することが指摘されている。一方で、この遺構から出土した手づくねかわらけではロクロかわらけと類似した胎土の資料が含まれている。この事象の含意は確定できないものの注目される特徴である。

このほか、国産陶器や輸入陶磁器、瓦が出土している。国産陶器は渥美、常滑の体部片などが多く、3.398g出土している。輸入陶磁器はⅡ類・Ⅲ類の白磁壺類や緑釉陶器などが227g出土している。木製品も多く出土している。折敷片のほか、漆器椀（図185－64）、扇骨（図185－68）、横櫛（図185－70・71）などがある。72・73は鞘と柄木である。建築部材やその他の部材も出土している。なお、９層出土の折敷（図185－66）は年輪年代で伐採年1186年の値が示されている。文字資料も含まれ、墨書木片や墨書かわらけが１点ある。

また、５層から穴あき石、瓦器片などが出土している。６層からは焼けた壁土が21,860gと多く出土している。

52SE9　遺構　64－60に位置する、検出面での径220・210cm程の円形の井戸跡である（図版編図20、図186）。深さ390cm程、底面は径75cm程の方形を呈する。底面標高は23.14mである。堆積土層は、９・10層は土器類や木製品を含みブロック土を少量含む。７・８層は遺物をほとんど含まないが、地山土を含む土層である。６層は土器類を多く含み地山土とみられる粘土を多く含む。５層は炭化物や礫を多く含む。１～４層は礫を多く含むが、遺構埋没後の流入と判断している。

遺物　かわらけが15,800g出土している。６層から多くの土器類が出土している。ロクロかわらけが大半を占める。図示していない資料を含むと、10層から出土した資料ではロクロかわらけ小皿は口径8.9～9.0cm程で平均9.1cm程、底径5.9～7.2cm程で平均6.4cm程、器高1.5～1.9cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径14.7cm、底径7.2cm、器高3.8cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.6cm、器高1.9cmで、手づくねかわらけ大皿は口径15.5cmである。

６～10層の遺構出土資料全体の傾向では、ロクロかわらけ小皿は口径8.9～9.6cm程で平均9.1cm程、底径5.9～7.2cm程で平均6.4cm程、器高1．5～1.9cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径14.0～15.9cm程で平均15.1cm程、底径6.7～8.4cm程で平均7.2cm程、器高3.5～4.4cm程で平均3.9cm程である。器高の低い皿形の器形を呈するものが多い。手づくねかわらけ大皿は口径14.5～15.5cm程で平均15.0cm程、器高2.2～2.9cm程で平均2.6cm程である。

国産陶器は埋土上部の１～４層から多く出土している。輸入陶磁器では白磁壺片、平瓦片が出土している。木製品は９～10層から少量出土している。円形曲物が含まれる。

52SE10　遺構　63－58に位置する、検出面での径220・188cm程の円形の井戸跡である（図版編図20、図187）。深さ235cm程で、底面は径100cmの円形を呈する。底面標高は25.11mである。堆積土層は、９層は木屑を混入し炭化物を多く含む土層として分層されている。７・８層は人為的に埋め戻された土層で、ブロック土を多く含む。５層は多くの土器類を含み、粘土ブロックを少量含む土層である。４層はブロック土を多く含む。１～３層は炭化物や焼土、ブロック土を含む土層である。

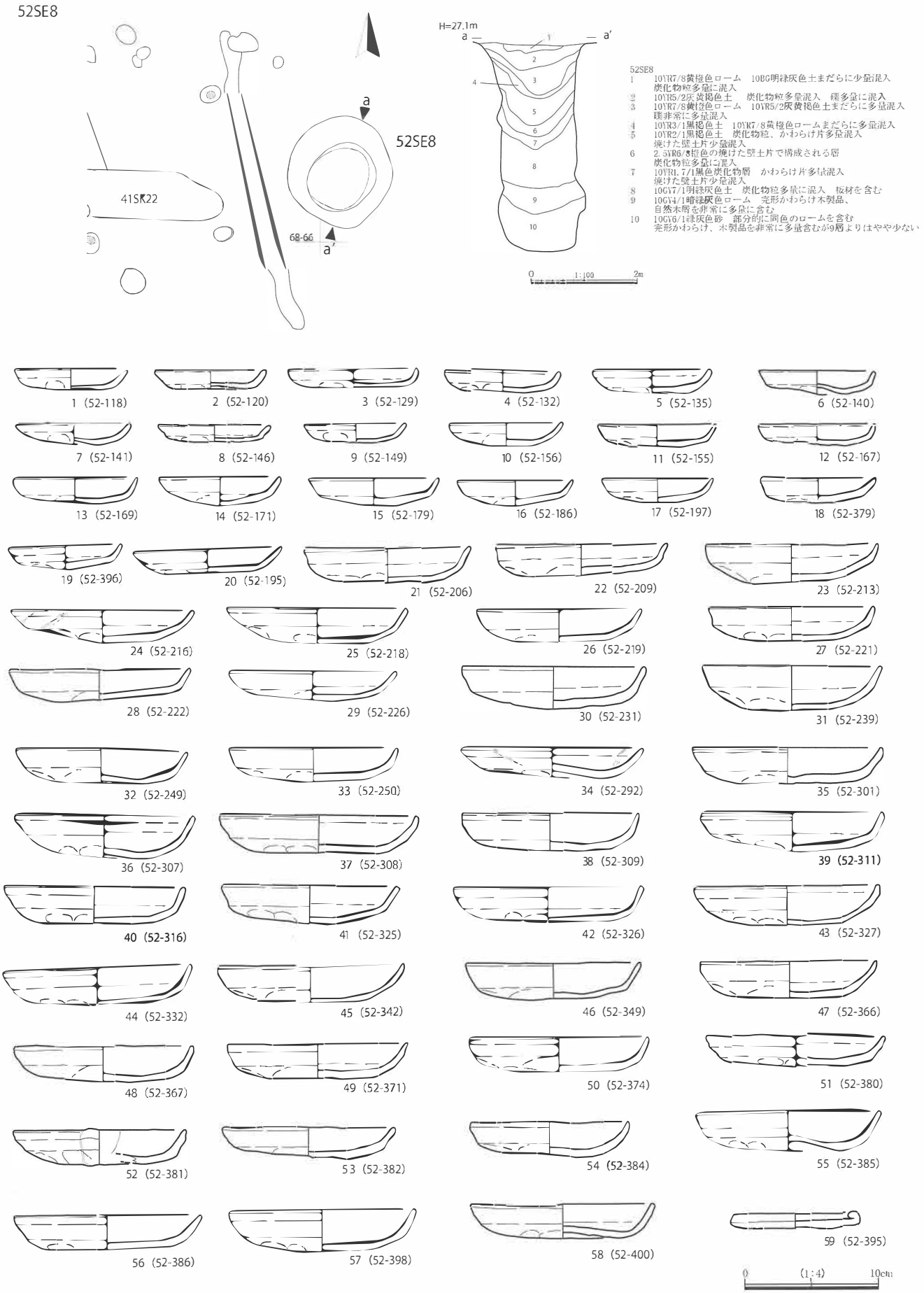


図184　52SE8詳細図

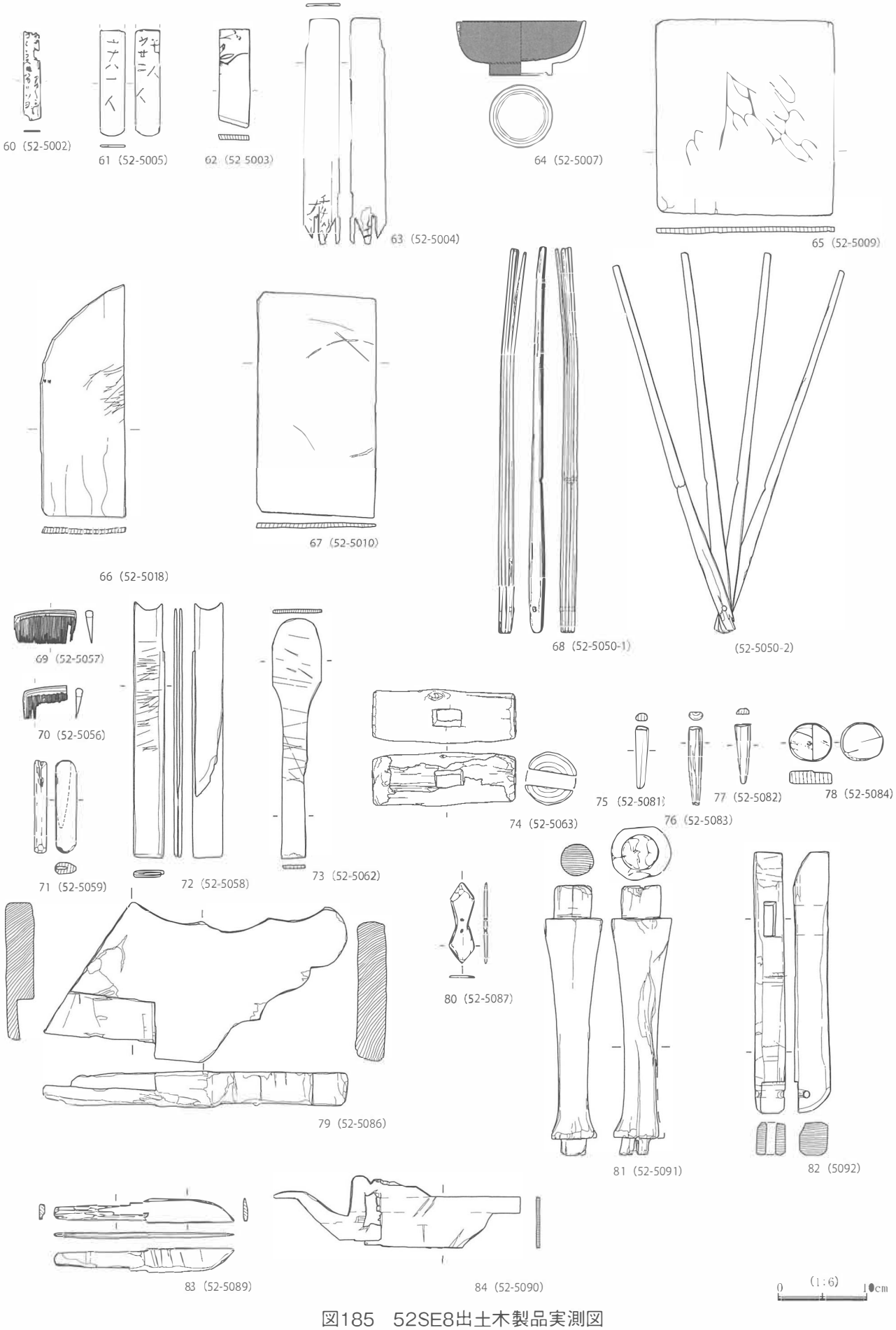


図185　52SE8出土木製品実測図

遺物　かわらけが10,915ｇ出土している。５層から多くの土器類が出土している。ロクロかわらけのみで構成される。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径7.2～9.9cm程で平均8.3cm程、底径4.5～6.9cm程で平均5.7cm程、器高1.7～3.6cm程で平均2.6cm程である。口径と底径の値が近似し、差が少ない。器形的にも広い底径から立ち上がる特徴的な器形を呈する。大皿は口径11.8～14.4cm程で平均13.4cm程、底径4.8～6.6cm程で平均5.6cm程、器高4.4～5.3cm程で平均5.0cm程である。底径が小さく器高の高い、椀形の器形を呈するものが多い。また、器種組成として小皿が大皿より多い点が特徴となる（器形が復元できる資料で小皿74点、大皿15点）。柱状高台はいずれも柱実で、体部が横に広がる器形とやや深みをもつ器形がある。26は柱状高台と高坏の中間的な器形と値を示す。高坏は台部が柱実で高く、体部は直線的に立ち上がる深い器形を呈する。口縁部は薄く成形される。口径19.9～21.3cm程で平均20.6cm程、台部底径10.3～12.0cm程で平均11.0cm程、器高8.6～10.5cm程で平均9.5cm程である。

坩堝が５層から出土しているほか（図187－31）、９層から箸が１点出土している。

55SE1　遺構　73－65に位置する、検出面での径315・260cm程の円形の井戸跡である（図版編図32、

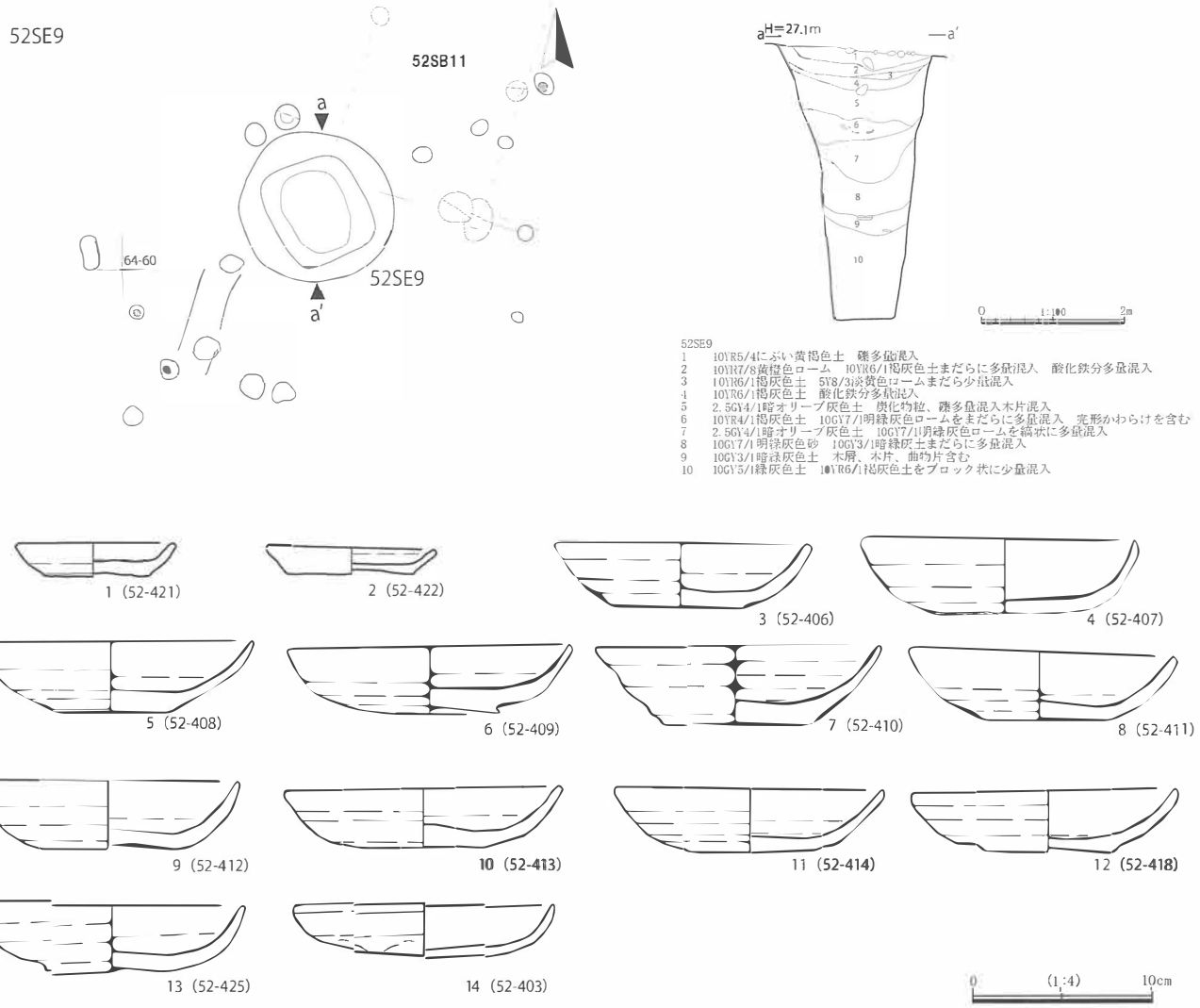
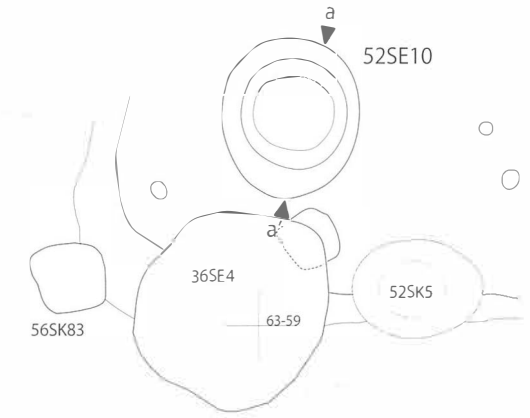
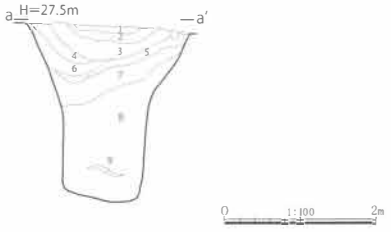


図186　52SE9詳細図

52SE10





52SE10
1　10YR5/2灰黄褐色土　炭化物粒、焼土粒少量混入
2　10YR7/8黄橙色ローム　炭化物粒、10YR5/2灰黄褐色土まだらに少量混入
3　5Y5/1灰色土　焼土ブロック、炭化物粒多量混入　10YR7/8黄橙色ロームブロック少量混入
4　10YR7/8黄橙色ローム　5Y5/1灰色土ブロック多量混入
5　7.5Y5/1灰色土　10YR7/8黄橙色ロームブロック少量混入　完形かわらけ（柱状高台など）多量に含む
6　5Y8/3淡黄色ローム　7.5Y5/1灰色土まだらに多量混入
7　5Y8/2灰色ローム　酸化鉄分少量混入　7.5Y5/1灰色土縞状に少量混入
8　5Y8/2灰色土（砂っぽい）　7.5Y5/1灰色土ブロック状に少量混入　炭化物粒少量混入
9　10YR3/1黒褐色土　木屑多量含む

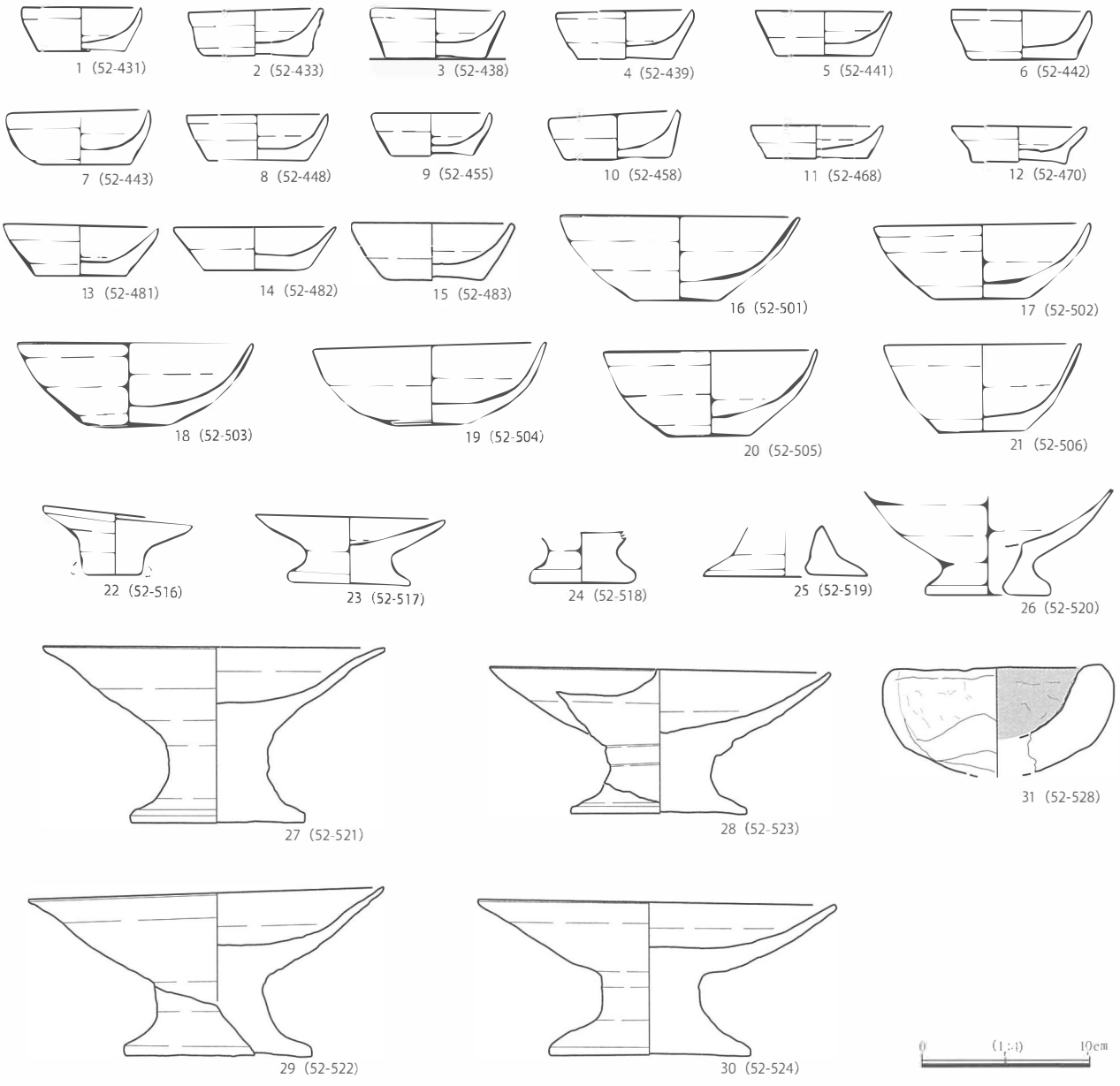
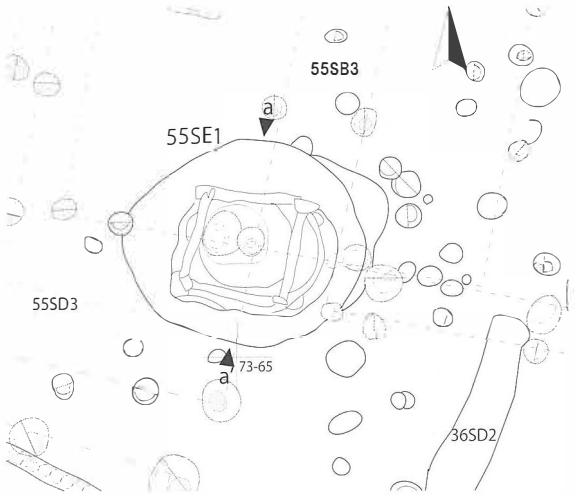
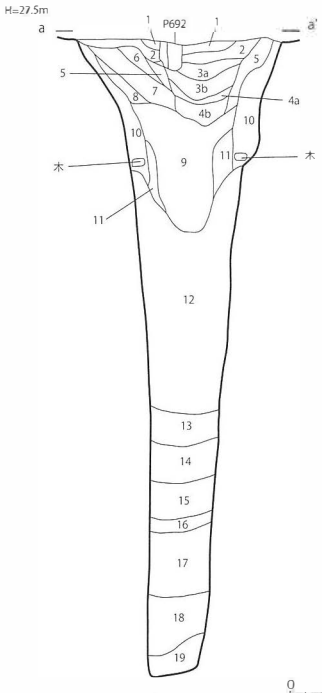


図187　52SE10詳細図

55SE1





0　1:100　2m

55SE1
1　10YR2/3黒褐色土　礫多量混入　国産陶器片を含む
2　10YR6/2灰黄褐色砂　かわらけ細片微量混入
3a　10YR4/2灰黄褐色土　炭化物粒、かわらけ細片多量混入 大型のかわらけ片もある
3b　10YR3/1黒褐色土　かわらけ（ほぼ完形）を含む
4a　10YR3/2黒褐色土　かわらけ（ほぼ完形）を含む
4b　10Y3/2オリーブ黒色土　かわらけ（ほぼ完形）を含む 木屑を多量に含む
5　10YR4/2灰黄褐色土　10YR7/8黄橙色ローム縞状に少量混入する
6　10YR7/8黄橙色ローム　10YR4/2灰黄褐色土縞状に多量混入
7　2.5YR4/4淡黄色ローム　10YR7/2にぶい黄橙色ロームまだらに多量混入
8　10YR7/8黄橙色ローム　10YR4/1褐灰色土ブロック状に少量混入
9　7.5GY7/1明緑灰色土　10YR1.7/1黒色土ブロック状に混入　5GY6/1オリーブ灰色まだら少量混入 礫、木片を含む
10　2.5Y7/8黄色ローム　10YR6/1褐灰色ローム縞状に少量混入
11　5GY6/1オリーブ灰色ローム　10YR1.7/1黒色土少量混入
12　5G7/1明緑灰色ローム　10GY3/1暗緑灰色土縞状に混入
13　5BG2/1青黒色土　有機質分多量混入　木屑多量混入
14　5G7/1明緑灰色ローム　有機質分少量混入　礫、かわらけ片含む
15　N3/暗灰色土　5G7/1明緑灰色ローム縞状に混入　木片、木屑多量混入
16　10GY7/1暗緑灰色土　N3/暗灰色土まだら少量混入　木片、木屑をほとんど含まない
17　N3/暗灰色土　10G7/1暗緑灰色ローム霜降り状に少量混入　木屑多量に含む
18　5Y7/6黄色ローム　N3/暗灰色土まだら多量混入　木片、木屑少量含む　井戸枠材を含む
19　7.5GY8/1明緑灰色ローム　砂っぽい部分もある　礫混入　部分的にN3/暗灰色土をブロック状に含む 木屑をごく稀に含む　底面は礫層で酸化鉄分が沈殿して皮膜をなす

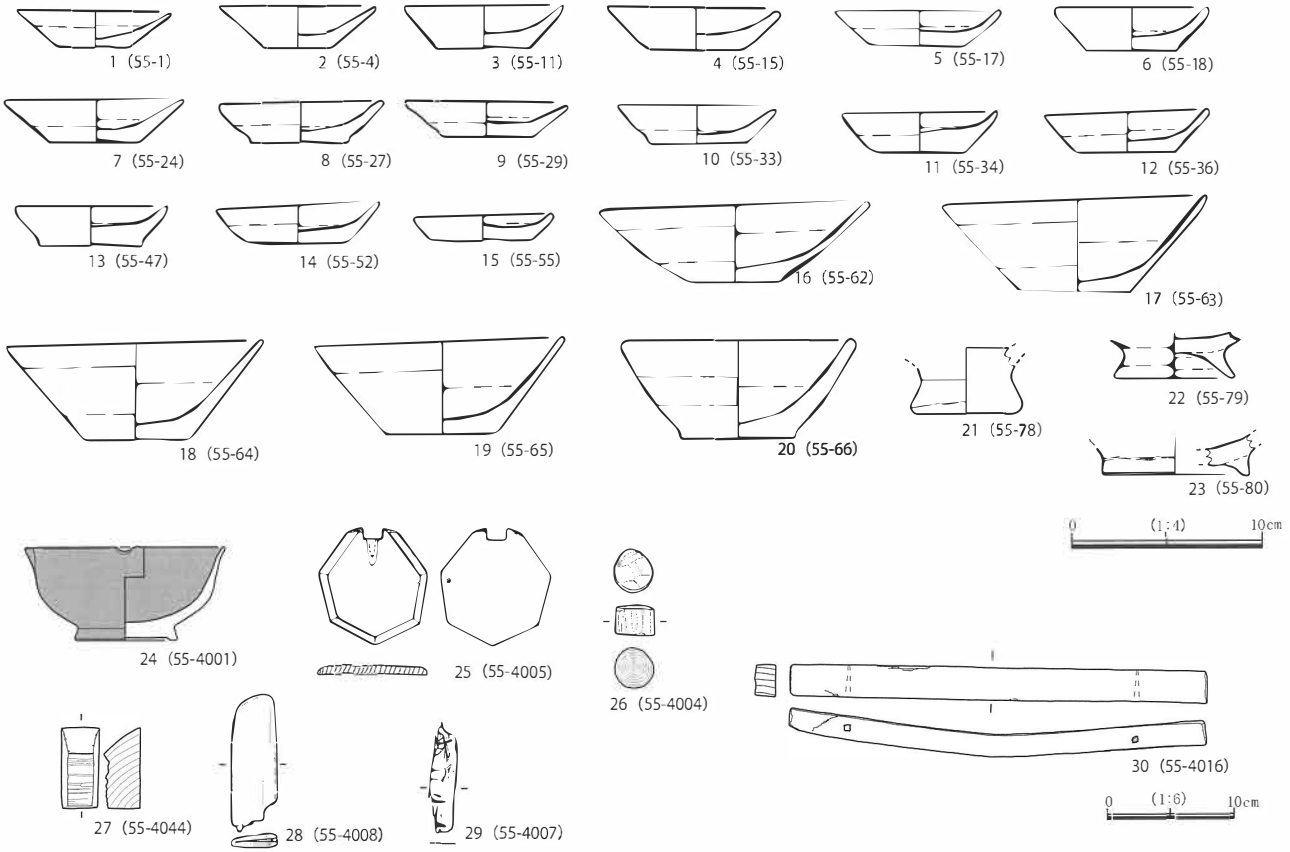


図188　55SE1詳細図

55SK38

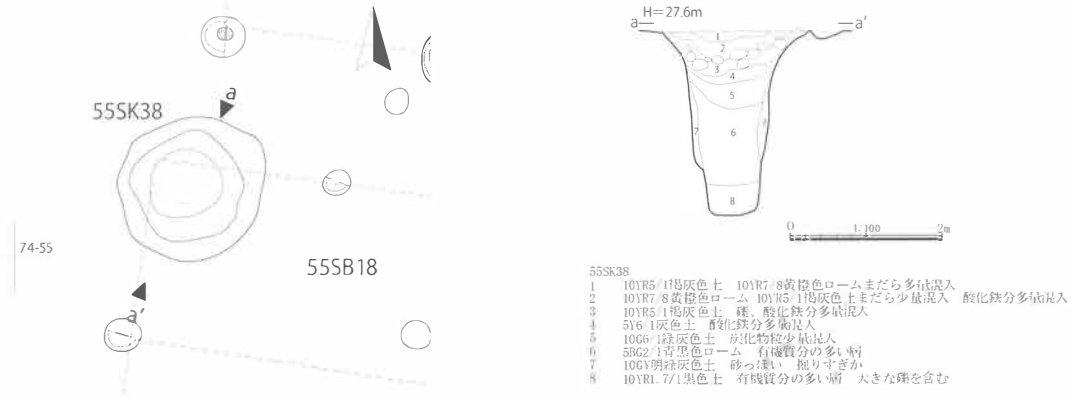


図189　55SK38平面・断面図

図188)。深さ845cm程で、底面は径65cm程の円形を呈する。底面標高は18.95mである。検出面から160cm程の深さでは方形の井戸枠が残存する。井戸枠は４本の横木と縦方向の４本の隅柱でその他の井戸部材は抜き取られたものとみられる。堆積土の様相と合わせ、井戸枠より上層の１～９・11層は抜き取り穴への堆積と判断できる。堆積土層は、井戸枠より下層の12～19層では遺物を含む土層を間に挟みながら埋没したとみられる。堆積土の様相と合わせ、井戸枠より上層では、10層は掘方埋土との見方もできる。黄褐色土の地山土で構成される。９・11層はグライ化しているが、黒色土や褐灰色土を含む。５～８層は地山土を多く含む土層である。３・４層は黒褐色の土層で、土器類を多く含む。１層は礫を多く含む土層で、２層以下の堆積土で埋め戻された井戸跡が窪んだ部分に再度堆積したとみられる。

遺物　かわらけが22,410g出土している。３・４層から多くの土器類が出土している。かわらけは後の埋没と判断できる１層を除いて、ロクロかわらけのみで構成される。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径6.6～9.6cm程で平均8.5cm程、底径3.5～7.0cm程で平均5.0cm程、器高1.1～2.3cm程で平均2.0cm程である。底径が４cm前後以下と小さく、体部が外反しながら立ち上がる器形（図188－１～３）と、他の遺構出土のロクロかわらけ小皿と同様の器形がある。ロクロかわらけ大皿は口径12.4～14.2cm程で平均13.5cm程、底径4.8～6.0cm程で平均5.7cm程、器高4.1～5.2cm程で平均4.8cm程である。底径が小さく、器高の高い椀型の器形を呈する。柱状高台は柱実の台部のみである。このほか体部形状は不明だが、高台杯等の高台部片がある。このほか、国産陶器類や木製品も出土している。木製品では漆器椀が３点、鞘、扇の骨、箸、格子などが出土している。

55SK38　遺構　74－54に位置する、検出面での径200・185cm程の円形の井戸跡である（図版編図30・31、図189)。深さ240cm程で、底面は径60cm程の円形を呈する。底面標高は25.07mである。堆積土層は、６・８層は有機質の多い土層で、８層には礫を含む。４・５層はグライ化している。２・３層は礫を多く含み、１層は地山土を多く含む土層で、埋め戻しの可能性がある。55SB18→55SK38の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけが452.8g出土している。

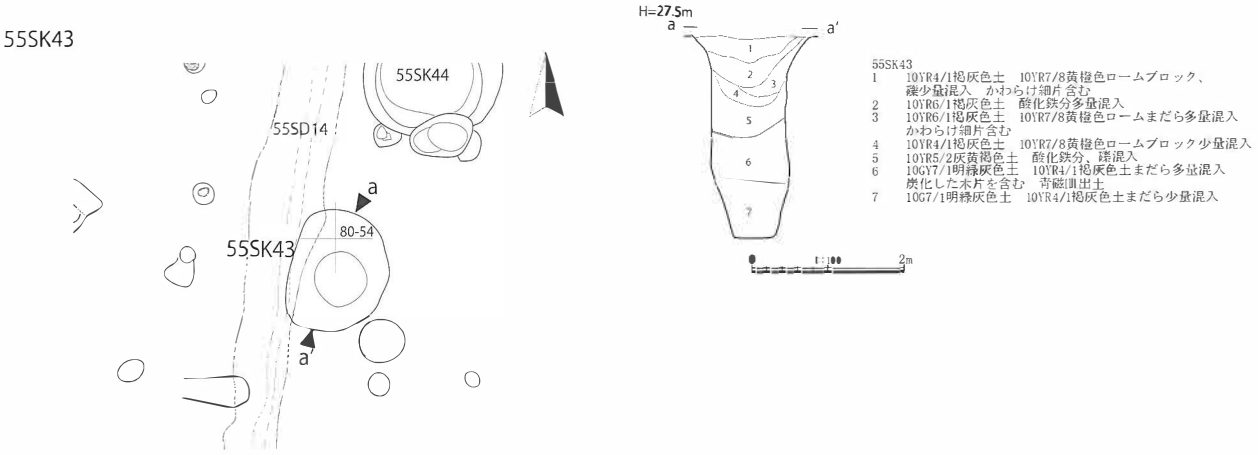


図190　55SK43平面・断面図

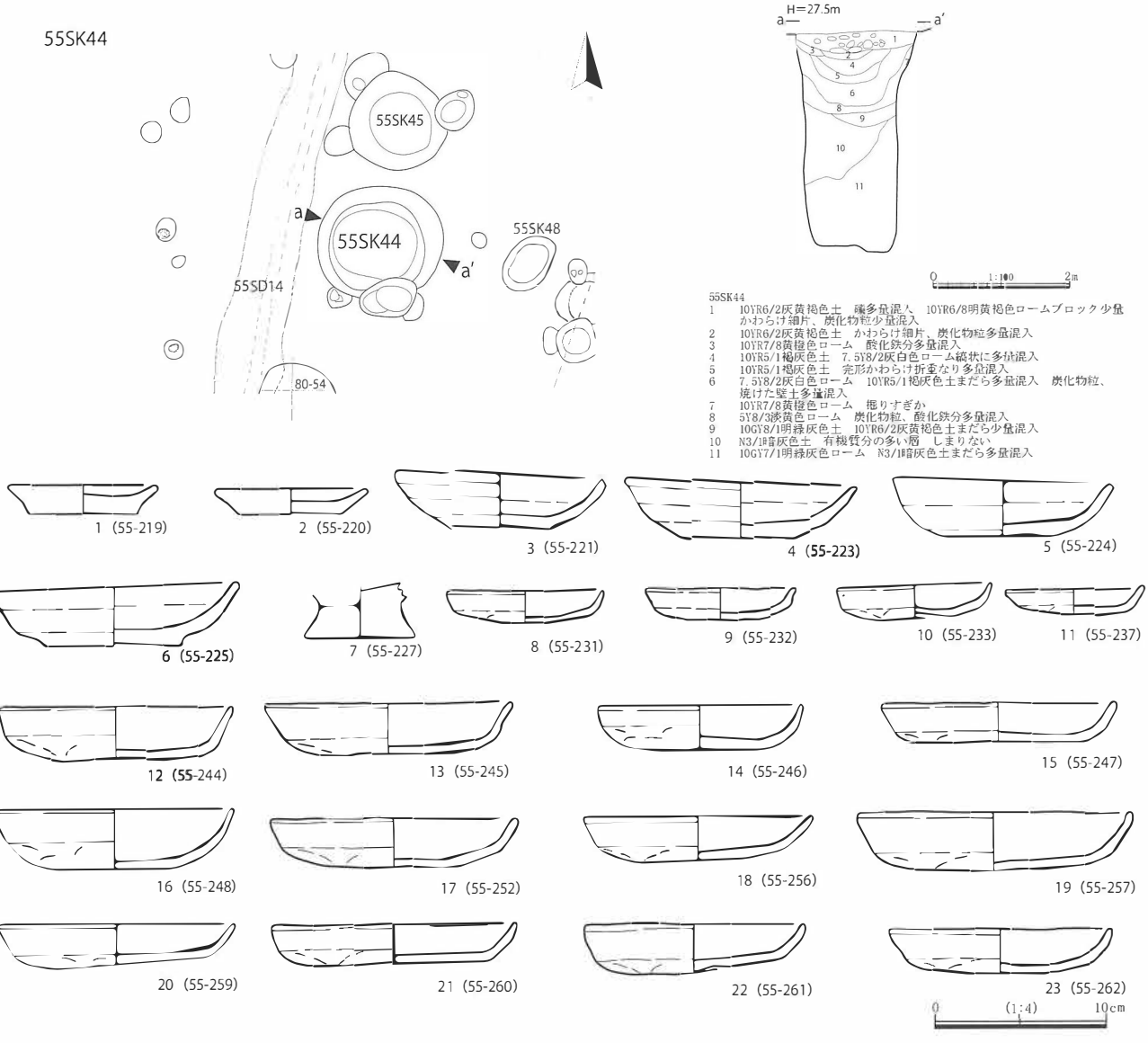


図191　55SK44詳細図

55SK43　遺構　80－54に位置する、検出面での径160・125cm程の楕円形の井戸跡である（図版編図37、図190）。深さ265cm程で、底面は径55cm程の円形を呈する。底面標高は24.75mである。堆積土層は、６・７層はグライ化し礫や木材を含む。３・４層は地山土とみられる黄褐色土を含む。２層は褐灰色で混和物が多い。１層は礫や黄褐色土を含む。

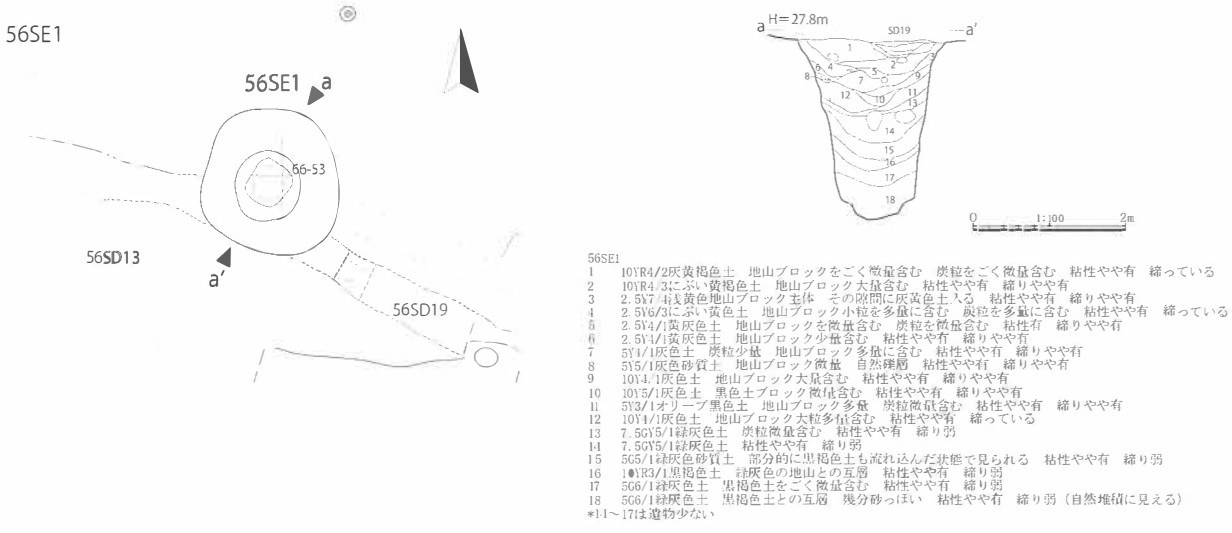
遺物　かわらけが5441g出土している。

55SK44　遺構　80－53に位置する、検出面での径180・170cm程の円形の井戸跡である（図版編図37、図191）。深さ315cm程で、底面は径115cmの円形を呈する。底面標高は24.20mである。堆積土層は、11層はグライ化した土層で、10層は有機質の多い土層である。１～６層は礫や土器類、炭化物を多く含む土層で、人為的に埋め戻されたとみられる。

遺物　かわらけが59,720.5g出土している。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径8.8～9.0cm程で平均8.9cm程、底径6.0～6.4cm程で平均6.2cm程、器高1.5～1.7cm程で平均1.6cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.4～14.3cm程で平均13.4cm程、底径5.8～8.0cm程で平均6.7cm程、器高3.2～3.8cm程で平均3.5cm程である。大皿は器高が低く、皿型の器形を呈する。柱状高台は台部のみ出土している。手づくねかわらけ小皿は口径8.0～9.2cm程で平均8.7cm程、器高1.2～2.0cm程で平均1.7cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.6～16.0cm程で平均13.6cm程、器高2.4～4.0cm程で平均2.9cm程である。口径が13cm前後以下の小型の器形が多く、少量だが口径が14cm以上の大型の器形が混じる。このほか、国産陶器類や輸入陶磁器類が出土している。

56SE1　遺構　66－53に位置する、検出面での径195・185cm程の円形の井戸跡である（図版編図25、図192）。深さ240cm程で、底面は径90cm程の円形を呈し、一部が径60cm程の円形にさらに一段掘り下げられている。底面標高は25.30mである。堆積土層は、15～18層は黒褐色土や地山土が流入する締まりの弱い土層である。自然堆積による堆積の可能性が高い。１～14層は地山ブロックを含む人為堆積の土層と判断している。

遺物　１層及び16層から出土している。かわらけが3,100g出土しており、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者が含まれる。このほか、国産陶器が11点、白磁が１点、木製品類が出土している。



56SE1
1　10YR4/2灰黄褐色土　地山ブロックをごく微量含む　炭粒をごく微量含む　粘性やや有　締っている
2　10YR4/3にぶい黄褐色土　地山ブロック大量含む　粘性やや有　締りやや有
3　2.5Y7/4浅黄色地山ブロック主体　その隙間に灰黄色土入る　粘性やや有　締りやや有
4　2.5Y6/3にぶい黄色土　地山ブロック小粒を多量に含む　炭粒を多量に含む　粘性やや有　締っている
5　2.5Y4/1黄灰色土　地山ブロックを微量含む　炭粒を微量含む　粘性有　締りやや有
6　2.5Y4/1黄灰色土　地山ブロック少量含む　粘性やや有　締りやや有
7　5Y4/1灰色土　炭粒少量　地山ブロック多量に含む　粘性やや有　締りやや有
8　5Y5/1灰色砂質土　地山ブロック微量　自然堆積層　粘性やや有　締りやや有
9　10Y4/1灰色土　地山ブロック大量含む　粘性やや有　締りやや有
10　10Y5/1灰色土　黒色土ブロック微量含む　粘性やや有　締りやや有
11　5Y3/1オリーブ黒色土　地山ブロック多量　炭粒微量含む　粘性やや有　締りやや有
12　10Y4/1灰色土　地山ブロック大粒多量含む　粘性やや有　締っている
13　7.5GY5/1緑灰色土　炭粒微量含む　粘性やや有　締り弱
14　7.5GY5/1緑灰色土　粘性やや有　締り弱
15　5G5/1緑灰色砂質土　部分的に黒褐色土も流れ込んだ状態で見られる　粘性やや有　締り弱
16　10YR3/1黒褐色土　緑灰色の地山との互層　粘性やや有　締り弱
17　5G6/1緑灰色土　黒褐色土をごく微量含む　粘性やや有　締り弱
18　5G6/1緑灰色土　黒褐色土との互層　幾分砂っぽい　粘性やや有　締り弱（自然堆積に見える）
*14～17は遺物少ない

図192　56SE1平面・断面図

56SE3　遺構　57－58に位置する、検出面での径198・185cm程の円形の井戸跡である（図版編図15、図193）。掘削は底面まで行っておらず、深さ260cm程までにとどめた。その時点で径95cm程の円形を呈する。上部の１～３層は近現代の水桶で、これによって井戸跡の上部が壊されている。７～９層は壁が垂直に落ち、礫や地山ブロックを含み人為堆積による土層とみられる。４～６層から上は肩が広がり、下層と同様に人為堆積による埋め戻しとみられる。

遺物　かわらけは細片が少量出土したのみで、石製品（石鉢）が出土している。

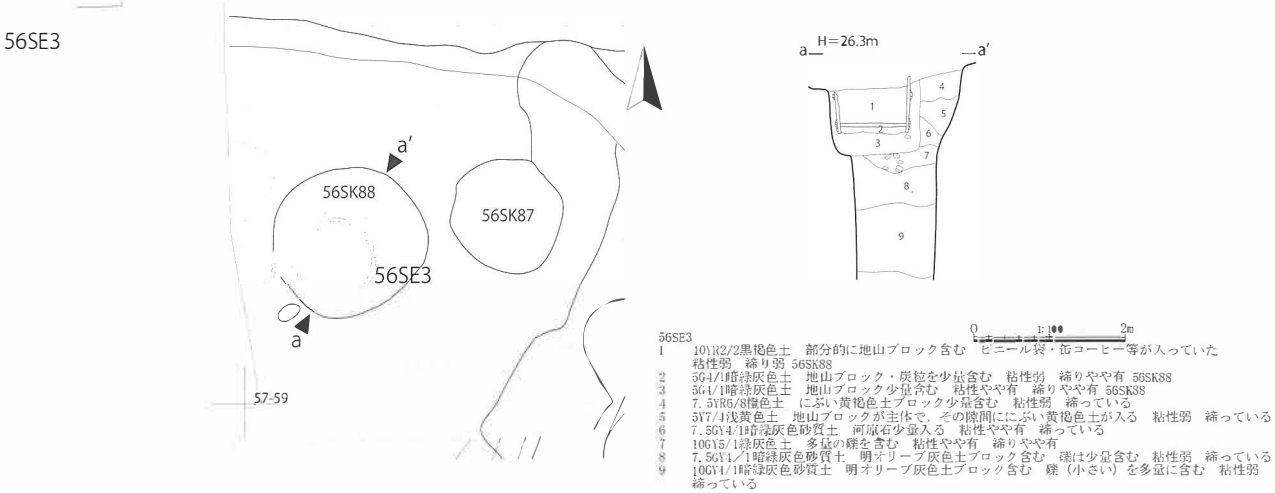


図193　56SE3平面・断面図

56SK80　遺構　57－50に位置する、検出面での径120・120cm程の円形の井戸跡である（図版編図14、図194）。深さ165cm程で、底面は径90cm程の円形を呈する。底面標高は26.56mである。堆積土層は一部が調査時の崩落のため失われているが、４～６層はグライ化した土層で、１・２層は地山ブロックや炭化物、自然石を多く含む人為堆積による土層とみられる。特に１層には人頭大の河原石を含む。56整地層を掘り込んで構築されており、56整地層→56SK80の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけが3,700g出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.6～9.0cm程で平均8.8cm程、底径5.8～6.4cm程で平均6.1cm程、器高1.4～1.8cm程で平均1.6cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径14.3cm、底径6.2cm、器高3.7cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.2cm、器高1.1～1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径13.4～14.8cm程で平均14.2cm程、器高2.4～3.1cm程で平均2.8cm程である。このほか、国産陶器が２点、焼土塊、鉄製品が出土している。

57SE2　遺構　73－48に位置する、検出面での径180cm程で円形とみられる井戸跡である（図版編図30、図195）。河川による影響を受け、南半部のみの検出にとどまっている。深さ201cm程で、底面は径90cm程の円形を呈する。底面標高は25.55mである。堆積土層は人為堆積による堆積が主と判断している。11・12層からは遺物がほとんど出土していない。８層は炭化物を多く含み、これより上層の土層は粘土ブロックを多く含み、炭化物を一部に含む。特に、２・４・６層は炭化物を多く含み、４層では土器類がまとまって出土している。

遺物　かわらけが3,505.3g出土している。

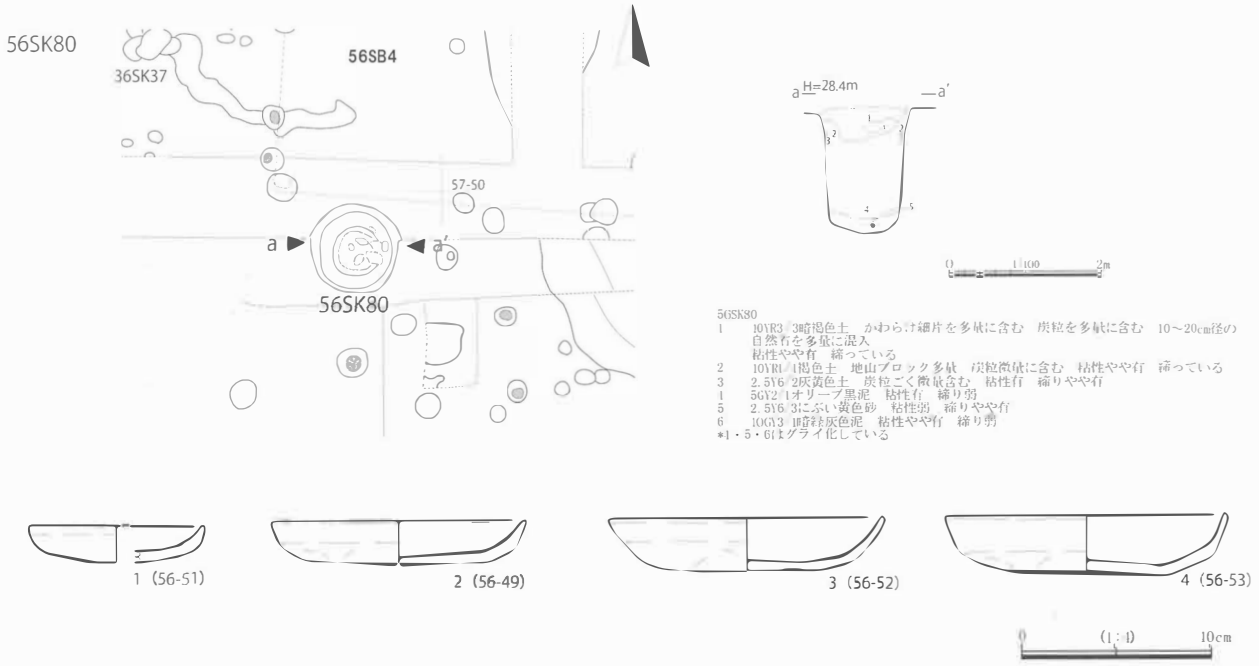


図194　56SK80詳細図

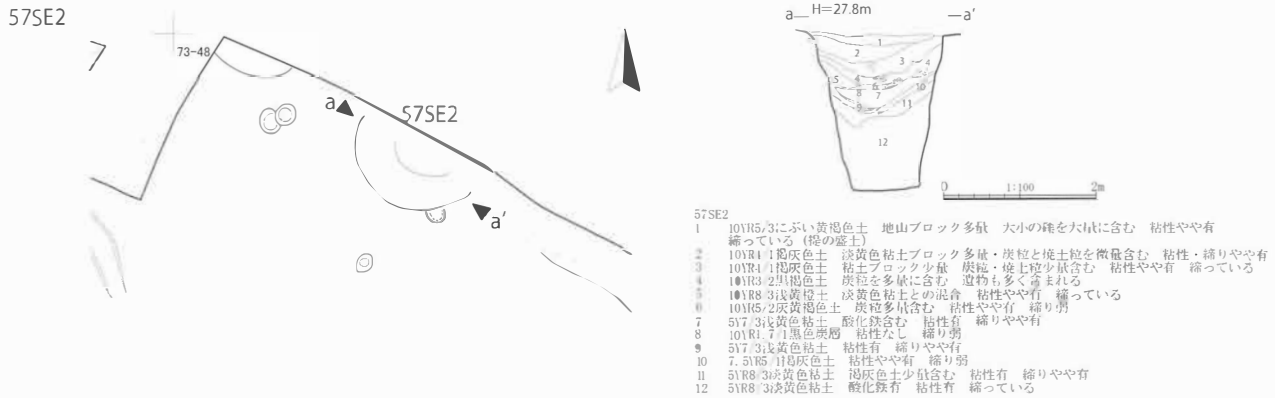


図195　57SE2平面・断面図

70SE1　遺構　70－49に位置する、検出面での径152・146cm程の円形の井戸跡である（図版編図24、図196）。深さ211cm程で、底面は径75cm程の隅丸方形を呈する。底面標高は25.5mである。堆積土層は11～13層では壁が垂直に落ち、粘性の強いグライ化した土層である。自然堆積によるとみている。４～10層は少量の地山ブロックを含むが、崩落による流入で自然堆積による埋没と判断した。１～３層は地山ブロックを多く含み、土器類を多く出土している。人為堆積による埋め戻しと判断した。なお、壁面に確認される地山層は堆積土で１～12層の深さまでは基本土層でⅨ層とした黄褐色粘土の地山層だが、13層付近から下層の深さでは木片などを含む暗褐色土になる。

遺物　１～３層の人為堆積層から出土している。かわらけが5,095g出土している。ロクロかわらけが多く、手づくねかわらけは数量も少なく小破片のみである。ロクロかわらけ小皿は口径7.9cm、底径4.5cm、器高1.5cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.0～15.0cm程で平均13.7cm程、底径6.0～

8.4cm程で平均7.2cm程、器高3.0～4.5cm程で平均3.6cm程である。椀型の器形と皿形の器形の両者が含まれる。柱状高台が１点出土している。

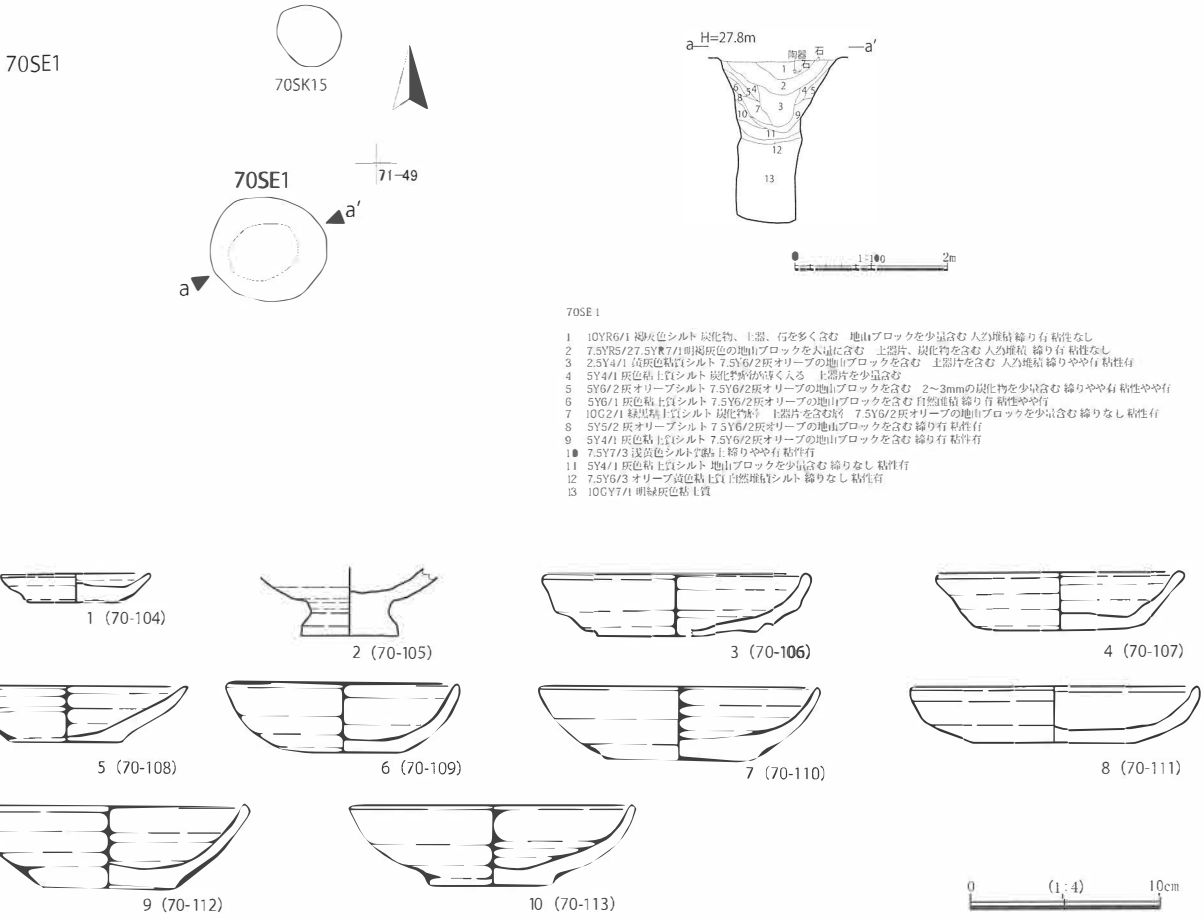


図196　70SE1詳細図

70SE3　遺構　61－48に位置する、検出面での径261・248cmほどの円形の井戸跡である（図版編図24、図197）。深さ382cm程で、底面は径85cm程の隅丸方形を呈する。底面標高は24.35mである。堆積土層は、17層以下は壁が垂直に落ちる。16層以下は水平に堆積した粘性が強くグライ化した土層である。遺物はほとんど出土していない。13～15層は地山ブロックや遺物を少量含むが、斜方向の堆積で壁面の崩落による自然堆積の埋没とみている。これより上層では壁が斜めに広がる。11・12層は土器片を含む、地山ブロックを多く含む土層で人為堆積による埋め戻しと判断している。９・10層は地山ブロックを含むものの、遺物はほとんど出土していない。３～８層は遺物を含み、地山ブロックを多く含む人為堆積による土層と判断している。

遺物　４～12層から遺物が出土しかわらけや国産陶器、木製品が出土している。かわらけが21,905g出土している。ロクロかわらけ小皿は口径7.4～10.0cm程で平均8.6cm程、底径4.8～7.6cm程で平均6.0cm程、器高1.4～2.3cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.6～15.0cm程で平均13.9cm程、底径5.5～8.2cm程で平均7.1cm程、器高3.3～4.6cm程で平均3.8cm程である。器高の高い椀型の器形と、器高の低い皿型の器形を呈する両者がある。手づくねかわらけ小皿は口径9.4cm、器高1.7cmである。手づくね大皿は口径12.6～16.2cm程で平均14.9cm程、器高2.4～4.0cm程で平均3.2cm程

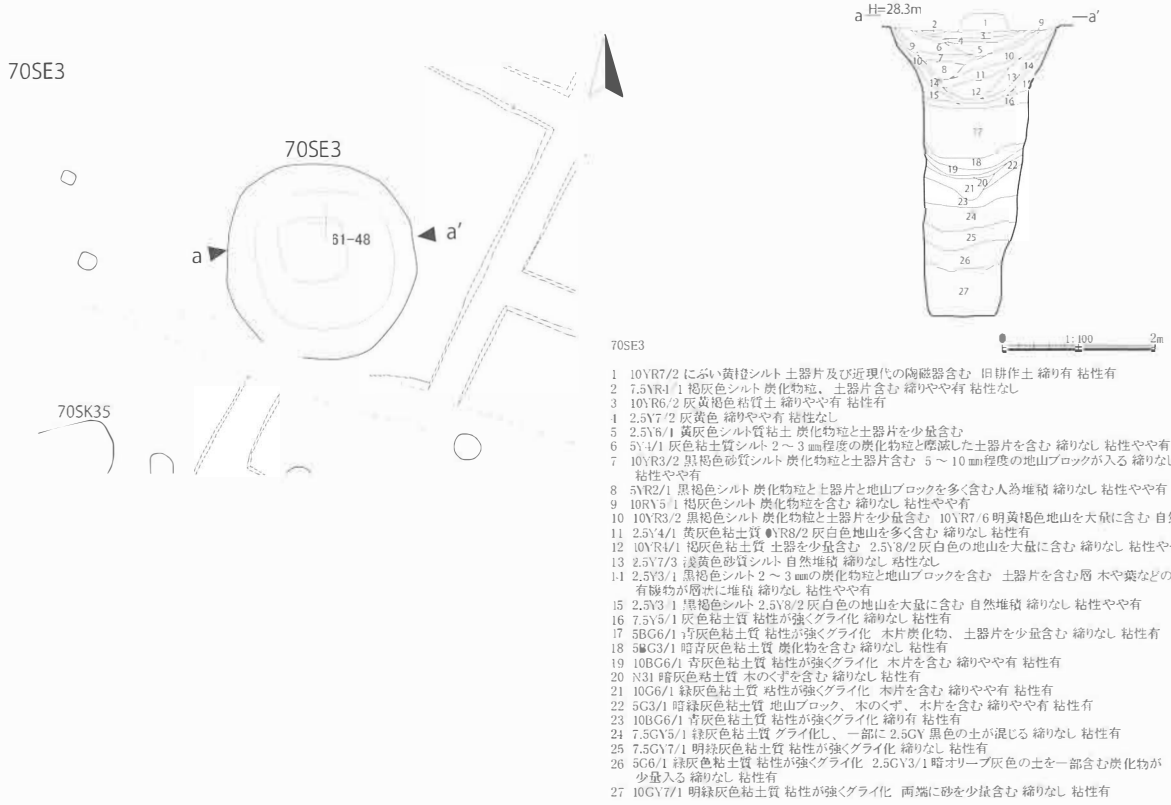


図197　70SE3詳細図

である。口径が14cm以上の大型の器形と13cm以下の小型の器形があり、前者が多い。このほか国産陶器、輸入陶磁器、木製品が出土している。木製品は漆器椀や折敷片が出土している。

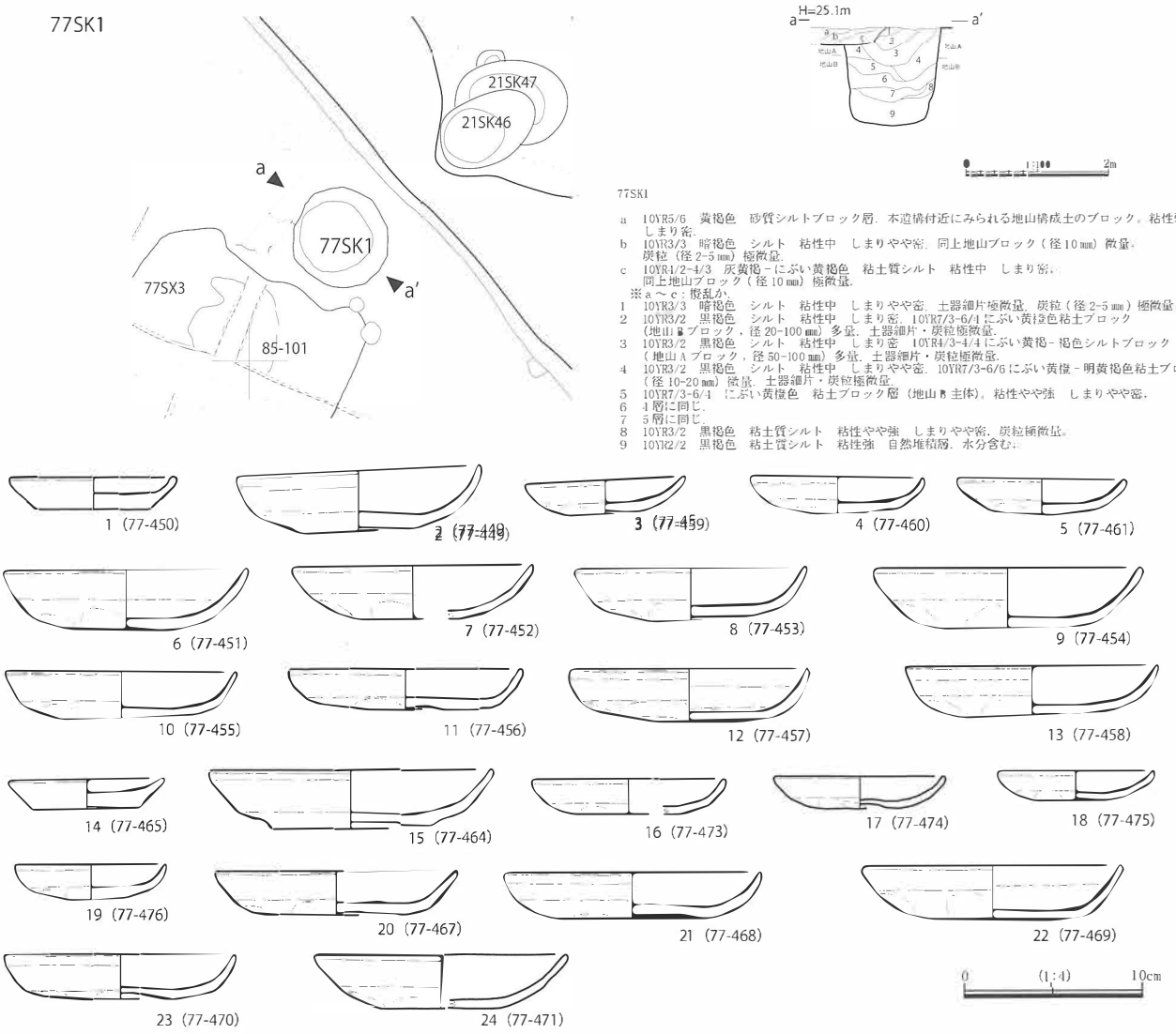


図198　77SK1詳細図

77SK1　遺構　85－100に位置する、検出面での径140・140cm程の円形の遺構である（図版編図50、図197）。深さ138cm程で、底面は径100cm程の円形を呈する。形状や土層から井戸跡として報告する。底面標高は23.8mである。堆積土層は、９層は粘性の強い水分を多く含む土層で、この層の上面から関係の土器類や木質の遺物が出土している。１～８層は土器類の出土は少量だが、地山ブロックを多く含む土層で、人為堆積による埋め戻しと判断している。上部を近現代の攪乱で壊されている。

遺物　かわらけが11,598g出土している。図197－1～13は９層から出土している。ロクロかわらけ小皿は口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.8cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.5cm、底径6.8cm、器高3.4cmである。器高の低い皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径8.8～9.6cm程で平均9.3cm程、器高1.9～2.1cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.8～14.0cm程で平均13.6cm程、器高2.3～3.4cm程で平均3.0cm程である。13cm前後の口径の資料が多い。14～24は上層の人為層から出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.6cm、底径6.1cm、器高1.7cmである。ロクロかわらけ大皿は口径15.6cm、底径9.0cm、器高3.3cmである。器高の低い皿形の器形を呈する。手

づくねかわらけ小皿は口径8.4～9.8cm程で平均8.9cm程、器高1.7～2.0cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.9～14.4cm程で平均13.9cm程、器高2.5～3.0cm程で平均2.7cm程である。

【50次以前の調査で調査・検討した井戸跡の概要】

21SE1　遺構　87－102に位置する、径390・360cm程・深さ572cm程の井戸跡である（図版編図50、図199）。断面形状は上層部分では外に広がり、中下層部分から垂直に壁が落ちる。埋文報告の本文記載から深さを訂正している。平面形は検出面で円形、底面でも円形を呈する。

遺物　かわらけが48,461g出土している。かわらけはロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含むが、ロクロかわらけが多くを占める。ロクロかわらけ小皿は口径8.2～9.7cm程で平均8.9cm程、底径5.7～7.0cm程で平均6.3cm程、器高1.6～2.2cm程で平均2.0cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.4～15.3cm程で平均13.3cm程、底径6.1～7.0cm程で平均6.5cm程、器高3.2～5.0cm程で平均3.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は、器高が低い器形も含むものの、器高が高い椀型の器形を呈するものが多い。手づくねかわらけ小皿は口径8.9～10.5cm程で平均9.7cm程、器高1.9～3.0cm程で平均2.2cm程である。手づくねかわらけ大皿は点数が少ないが、口径14.4～15.4cm、器高2.9～3.6cmである。手づくねかわらけは口径が14cm以上と大きく、器高も高い。輸入陶磁器類などの土器類のほか木製品などが出土している。木製品では完形の曲物、漆器椀が出土している。このほか、漆塗りの弓弭や土製円盤、刀子などが出土している。鉄製品も出土しており、鉄滓も含む。

21SE2　遺構　82－95に位置する、径203・194cm・深さ547cmの井戸跡である（図版編図42、図199）。断面形状は上層が台形状に広がり、1.10m程の深さに井戸枠の桟が残る。井戸枠より下層は垂直に壁が落ちる。桟より上の土層は人為堆積によるとみられ、人為層下部に礫がまとまる。底面付近の最下層にも礫が入る。平面形は検出面で円形、底面で楕円形を呈する。

遺物　かわらけが41,771g出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.2～9.8cm程で平均9.1cm程、底径1.6～2.7cm程で平均2.1cm程、器高5.2～6.3cm程で平均6.0cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径15.6cm、底径4.6cm、器高6.3cmである。ロクロかわらけ大皿は器高が高く、椀型の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径8.9～10.3cm程で平均9.4cm程、器高1.9～2.4cm程で平均2.1cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径15.2cm、器高3.9～4.2cmである。手づくねかわらけ大皿は口径が大きく、器高も高い大型の器形を呈す。国産陶器類や輸入陶磁器などの土器類のほか木製品も出土している。木製品は漆器小皿・椀、刀子柄、下駄のほか、墨書木片も出土している。文字資料は「如」、「如法」の墨書がある。胡桃や桃、ウリ科の種子が出土している。

21SE3　遺構　81－92に位置する、径152・148cm・深さ378cmの井戸跡である（図版編図42、図199）。上層部分は人為堆積によるとみられる。平面形は検出面で円形、底面でも円形を呈する。

遺物　かわらけが434,669g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者が含まれる。ロクロかわらけ小皿は口径7.8～10.0cm程で平均8.7cm程、底径5.0～7.4cm程で平均5.9cm程、器高1.1～2.5cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.4～15.4cm程で平均13.8cm程、底径4.9～9.0cm程で平均7.2cm程、器高2.8～4.5cm程で平均3.6cm程である。ロクロかわらけ大皿は器高の低い皿形の器形を呈する資料が多い。手づくねかわらけ小皿は口径8.2～10.2cm程で平均9.0cm程、器高1.7～3.1cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.6～15.7cm程で平均14.3cm程、器高2.4～3.8cm程で平均3.2cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径が14cm以上の大型の器形を多

く含むが、13cm以下の小さい器形の資料を含む。墨書かわらけや穿孔のあるかわらけも含まれる。木製品では折敷片や箸などが出土している。鉄製品も出土しており、鉄滓も含む。

21SE4　遺構　83－89に位置する、残存径200cmの井戸跡である（図版編図41・42）。精査は南半部のみに留まっており、底面まで精査していない。井戸側の一部が検出されている。平面形は隅丸方形を呈する。土層はいずれも人為堆積により、埋め戻されたとみられる。井戸枠の部材とみられる材が確認されており、11層以下に縦板が2枚並び、横桟が３本確認されている。
遺物　かわらけが93,303g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含むが、手づくねかわらけが多数を占める。ロクロかわらけ小皿は口径8.4～8.6cmで平均8.5cm、底径5.8～6.7cmで平均6.3cm、器高2.0cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.5～13.7cmで平均13.6cm、底径6.9～7.4cmで平均7.2cm、器高3.2～3.9cmで平均3.6cmである。ロクロかわらけは少ないため特徴の把握は難しいが、器高の低い器形である。手づくねかわらけ小皿は口径8.2～11.0cm程で平均9.2cm程、器高1.5～2.5cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.9～15.0cm程で平均13.6cm程、器高2.5～3.8cm程で平均3.0cm程である。手づくねかわらけの大皿は口径が小さい資料が多い。国産陶器類などの土器類が多く出土しており、そのほかに瓦などが出土している。国産陶器では渥美産の四耳壺が、輸入時期では白磁四耳壺が体部のみだが器形を復元できる。軒丸瓦では剣頭文＋巴文の瓦当文様をもつ。桃の種、ウリ科の種子が出土している。

28SE1　遺構　78－67に位置する、径145・135cm・深さ219cmの井戸跡である（図版編図39、図199）。平面形は検出面で円形、底面でもほぼ円形を呈する。最上層の１層は自然堆積とみているが、それ以下の層はいずれも人為堆積とみている。28SB6、28SB1、28SA2→28SE1の新旧関係が確認されている。ただし、断面図の検討から28SE1を掘り込む柱穴があり、28SB1との新旧は逆転する可能性がある（柳之御所調査事務所2005）。
遺物　遺物量は井戸跡としては少ない。かわらけが1,672g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含むが、ロクロかわらけが多い。手づくねかわらけは破片が少量出土したのみである。ロクロかわらけ小皿は口径7.8～9.1cm程で平均8.2cm程、底径5.3～6.0cm程で平均5.6cm程、器高1.8～2.2cm程で平均2.0cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径15.0cm、底径6.8cm、器高4.7cmである。点数は少ないものの、ロクロかわらけの大皿は椀型を呈する。

28SE2　遺構　79－68に位置する、径190・155cm・深さ396cmの井戸跡である（図版編図39、図199）。平面形は検出面では円形、中層から底面にかけて方形を呈する。上層の１～４層は人為堆積による埋め戻しとみられる。下層の５・６層は自然堆積とみられる。28SB2→28SE2の新旧関係が確認できる。ただし、断面図の検討から28SE2を掘り込む遺構が存在する可能性があり、新旧が逆転する可能性がある（柳之御所調査事務所2005）。
遺物　かわらけが113,876g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.7～10.0cm程で平均9.3cm程、底径4.7～7.2cm程で平均6.2cm程、器高1.5～2.3cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.8～15.1cm程で平均14.4cm程、底径6.0～8.9m程で平均7.3cm程、器高3.2～4.4cm程で平均3.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は椀型の器形と皿形の器形のいずれも含み、皿形の器形を呈する資料が多い。手づくねかわらけ小皿は口径9.5～10.7cm程で平均9.8cm程、器高1.8～2.5cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径14.0

～16.5cm程で平均14.9cm程、器高2.6～4.5cm程で平均3.1cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径が大きい資料が多い。柱状高台の台部が出土している。国産陶器や輸入磁器が含む土器類が多く出土しているほか、木製品が出土している。木製品は折敷片や箸、墨書折敷も多く出土している。寝殿造の建物が描かれた墨画折敷や平仮名とみられる墨書折敷も出土している。瓦や比熱した壁土も出土している。６層から年輪年代で1130年、1141年の辺材を残す折敷が出土している。また墨画折敷は1051年の測定結果が得られている。

28SE3　遺構　77－65に位置する、径160・155cm・深さ242cmの井戸跡である（図版編図32、図199）。１・２層は遺物をほとんど含まないものの、礫を多く含む人為堆積土層である。３層は遺物を多く含む人為堆積土層である。平面形は検出面で隅丸方形、底面でも隅丸方形を呈する。55SA1→28SE3の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけが約39,000g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.7～9.1cm程で平均8.9cm程、底径5.5～6.2cm程で平均5.9cm程、器高1.7～2.2cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.5～15.1cm程で平均14.1cm程、底径6.9～8.7cm程で平均7.7cm程、器高3.3～4.0cm程で平均3.6cm程である。ロクロかわらけ大皿は器高が低く、皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ小皿は口径8.2～9.3cm程で平均8.7cm程、器高1.4～2.0cm程で平均1.7cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.2～14.6cm程で平均13.7cm程、器高2.6～3.4cm程で平均2.9cm程である。手づくねかわらけの大皿は口径が小さい資料が多い。木製品では宝塔が１点のほか、折敷が出土している。軒平瓦を含む瓦も出土している。年輪年代で1175年の辺材を残す折敷が出土している。壁土も多く出土している。

28SE4　遺構　74－68に位置する、径223・218cm・深さ455cmの井戸跡である（図版編図32、図199）。平面形は検出面で隅丸方形、途中から底面にかけて方形を呈する。16層以下は12世紀代の人為堆積土とみられる。特に19層以下の人為堆積土では土器類や木製品を多く含む。上層の１～15層は13層で近世の磁器が出土したと記載され、12世紀代より新しい時期に堆積したものと見なされている。ただし、上層の土層にもブロック土を多く含む人為堆積土とみられる土層があり、埋文報告において近世とされた磁器も含め不明な点が多い。28SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いには不明な点が残る。

遺物　かわらけが151,579g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径7.7～9.3cm程で平均8.8cm程、底径4.2～6.9cm程で平均5.7cm程、器高1.2～2.3cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.2～15.6cm程で平均14.2cm程、底径6.1～9.0cm程で平均7.4cm程、器高3.0～4.7cm程で平均3.7cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径8.0～10.3cm程で平均9.6cm程、器高1.5～2.4cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径13.8～16.4cm程で平均15.0cm程、器高2.5～4.4cm程で平均3.3cm程である。ロクロかわらけ大皿は器高の高い椀型の器形と低い皿形の器形が含まれる。手づくねかわらけ大皿は口径の大きい器形が多い。土器類のほか、木製品を多く含む。木製品は完形の方形曲物や折敷片、箸、部材が出土している。人面墨書かわらけを含む、墨書かわらけが出土している。年輪年代で1124年の辺材を残す折敷が21層から出土している。

28SE5　遺構　75－70に位置する、径153・146cm・深さ367cmの井戸跡である（図版編図32、図

199)。平面形は検出面で方形、底面でも方形を呈する。最下層の4層から多くの遺物が出土している。ブロック土を含む土質で人為的な埋め戻しの可能性があるものの、判然としない。2a・b層は遺物の包含は少ないものの、地山粘土で構成され人為堆積とみられる。

遺物　かわらけが39,389g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.3～9.0cm程で平均8.6cm程、底径4.7～7.1cm程で平均5.7cm程、器高1.4～2.1cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.6～14.3cm程で平均13.9cm程、底径7.2～8.6cm程で平均7.7cm程、器高3.7～3.9cm程で平均3.8cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径9.8cm、器高1.9cmである。手づくねかわらけ大皿は口径15.1cm、器高3.3cm程である。ロクロかわらけ大皿は椀型の器形で、手づくねかわらけ大皿は口径の大きい資料である。柱状高台が１点、墨書かわらけも含まれる。被熱した磁器片が多く含まれているほか、木製品が出土している。

28SE6　遺構　76－70に位置する、径223・203cm・深さ529㎝の井戸跡である（図版編図32、図199)。平面形は検出面で隅丸方形、途中で方形になり、底面で円形を呈する。断面形状でも検出面で広く、中途で狭まり、下部で再度広がる。10層の上面で礫が面的に広がる。28SB2→28SE6の新旧関係が確認されているが、28SE6の最上層は後世の堆積の可能性があり（岩手埋文1995)、新旧が逆転する可能性がある（柳之御所調査事務所2005)。

遺物　遺物量は少ないが、かわらけが7,201g出土している。土器類や瓦、木製品が出土している。かわらけはロクロかわらけで占められる。ロクロかわらけ小皿は口径7.6～8.1cmで平均7.9cm、底径5.4～6.7cmで平均6.1cm、器高1.6～1.7cmで平均1.7cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.0～13.5cmで平均13.3cm、底径7.0～7.8cmで平均7.4cm、器高3.6～3.9cmで平均3.8cmである。木製品では箸が出土している。

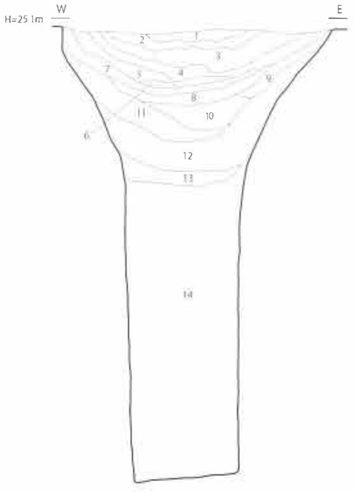
28SE7　遺構　78－70に位置する、径172・140cm・深さ254㎝の井戸跡である（図版編図39、図200)。平面形は検出面で隅丸方形、底面では円形を呈する。下層の24・25層は人為堆積とみられる。24層は水平に層状に堆積する礫を含む。１～23層は自然堆積とみられる。28SB2と空間重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　遺物量は少ない。かわらけが14,441g出土している。ロクロかわらけで多くが占められ、手づくねかわらけは細片のみである。ロクロかわらけ小皿は口径7.5～8.4cm程で平均8.1cm程、底径5.2～6.1cm程で平均5.7cm程、器高1.5～2.0cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.5～14.7cm程で平均14.1cm程、底径3.4～4.7cm程で平均4.0cm程、器高5.0～7.6cm程で平均6.6cm程である。ロクロかわらけ大皿は器高が高く底径の小さい椀型の器形を含む。陶器類や木製品を含む。

28SE8　遺構　78－70に位置する、径182・152cm・深さ334㎝の井戸跡である（図版編図39、図200)。平面形は検出面で楕円形、底面では不整円形を呈する。堆積土の多くは人為堆積による埋め戻しとみられる。28SB3との切り合いは、平面図等からやや不明確である。28SB2、28SB3と空間重複するが、遺構の切り合いはない。

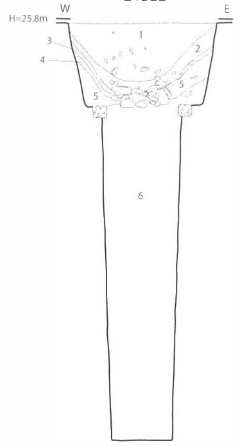
遺物　遺物量は少ないが、穿孔かわらけを１点含む。かわらけが1,708g出土している。ロクロかわらけのみで占められる。。ロクロかわらけ小皿は口径8.1～8.4cm程で平均8.3cm程、底径5.3～5.8cm程で平均5.6cm程、器高1.9cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径15.1cm、底径8.2cm、器高3.1cmである。小型で打ち欠きが行われる資料もある。

21SE1



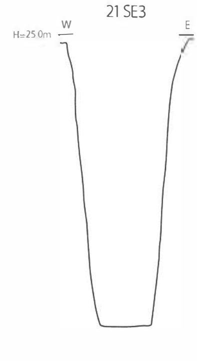
21SE1
1　黒褐色シルト主体　炭化物、かわらけ片含む
2　黒褐色土　にぶい黄褐色土　シルトのブロック、炭化物、かわらけ片含む
3　黒色シルト主体　炭化物、かわらけ片、焼土塊含む
4　黒褐色シルト主体　炭化物、かわらけ片を含む
5　黒褐色粘土混じりシルト　炭化物、かわらけ片含む
6　暗褐色土　焼土層が入る　炭化物含む
7　黒褐色粘土混じりシルト
8　黒褐色粘土　かわらけ片、礫、木製品含む
9　黒褐色粘土混じりシルト
10　黒色粘土混じりシルト　礫、木製品、骨片含む
11　黒色粘土混じりシルト　炭化物、木製品を含む
12　黒色粘土混じりシルト　炭化物、骨片含む
13　灰色粘土混じりシルト
14　黒色粘土混じりシルト　骨片含む

21SE2



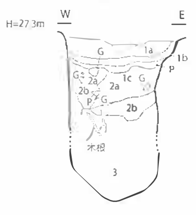
21SE2
1　黒褐色シルト　炭化物、かわらけ片、焼土粒、礫含む
2　黒褐色粘土質シルト　炭化物、焼土粒含む
3　灰黄褐色シルト　炭化物含む
4　黒色シルト　炭化物含む
5　にぶい黄橙色シルト
6　灰黄褐色粘土質シルト　炭化物含む

21SE3



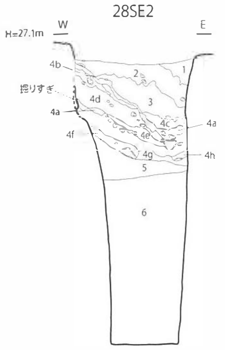
21SE3
崩落のため土層注記なし

28SE1



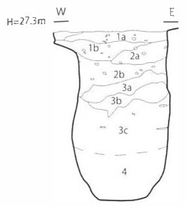
28SE1
1a　10YR4/3シルト（自然堆積）
1b　10YR4/2シルト（自然堆積）
1c　10RY4/1シルト（自然堆積）
2a　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック
10YR4/2黄褐色粘土ブロック（人為堆積）
2b　10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりシルトが主
径3cm以下の扁平な円礫含む（人為堆積）
3　7.5YR4/1灰色砂混じりシルト
かわらけ（完形）、ウリ科の種子など出土
最下部（底面より6～7cm上から）は暗緑灰色シルト

28SE2



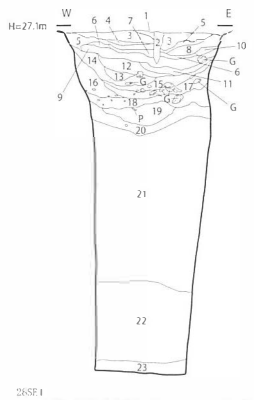
28SE2
1　2.5Y7/4浅黄色粘土ブロックが主　10YR4/2灰黄褐色粘土混じりシルト大ブロック僅か　かわらけ片少量（人為堆積）
2　10YR4/2灰黄褐色シルトが主　地山粘土大小ブロック20%前後含む　多量のかわらけ片含む　炭化物片多量　径10cm以下の亜円礫点在（人為堆積）
3　2.5Y7/4浅黄色粘土ブロックが主　汚れ少ない灰白色粘土が小斑状に散在　かわらけ片少量　緊密（人為堆積）
4a　2.5Y7/4浅黄色粘土ブロック　3層に類似（人為堆積）
4b　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト　径1～10cm以下の礫含む（人為堆積）
4c　10YR5/1褐灰色シルト混じり粘土ブロック　炭化物片散在（人為堆積）
4d　10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりシルトが主　地山粘土ブロック点在　径5cm以下を主体に多量の礫（一部、径10cm以上）を含む（人為堆積）
4e　2.5Y7/2灰黄色粘土が卓越
4f　4dに見られる10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルトに地山粘土ブロックが入る　径5cm以下の礫が多く入る
4g　4eとほぼ同じ
4h　4dとほぼ同じ
5　5Y7/2灰白色シルト混じり粘土ブロック（人為堆積）
6　暗オリーブ灰色シルト混じり粘土が主　2.5Y7/4浅黄色粘土ブロック（径4cm以下）僅か、かわらけ（完形品等）、折敷含む（人為堆積）

28SE3



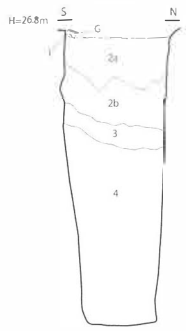
28SE3
1a　10YR2/3黒褐色砂混じりシルト　かわらけ細片含む　礫多量（人為堆積）
1b　10YR2/3黒褐色砂混じりシルト　10YR6/8明褐色砂約2%含む　礫多量（人為堆積）
2a　10YR4/6褐色粗砂主体　10YR6/6明黄褐色粘土ブロック約2%含む　かわらけ細片含む　炭化物片約2%（人為堆積）
2b　10YR5/3にぶい黄褐色砂主体　かわらけ細片含む（人為堆積）
3a　10YR3/3暗褐色シルト　炭化物片約7%　径5cm前後の焼壁土塊を多量含む（人為堆積）
3b　10YR3/3暗褐色シルト　3a層に類似　3a層に比べ焼壁土塊の混入が多い（人為堆積）
3c　10YR3/3暗褐色シルト　3a層に類似　焼壁土塊は多いが、3a層に比較し炭化物混入の割合が多い　大量の木炭片、かわらけ片が捨てられている（人為堆積）
4　緑灰色粘土　炭化材多数出土　人頭大の亜円礫（熱を受けている）を含む
*3～4層は廃棄物で構成された層か

28SE4



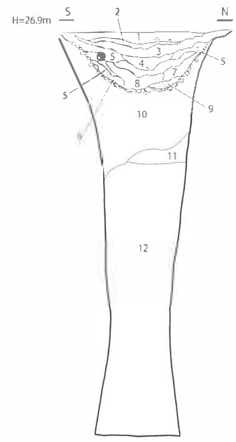
28SE4
1　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト　かわらけ細片少量
2　10YR3/3暗褐色シルト　かわらけ細片含む　炭化物片約2%
3　10YR3/3暗褐色シルト　粗砂多量　かわらけ細片含む
4　10YR3/4暗褐色砂混じりシルト　かわらけ細片含む　柔らかい
5　10YR3/2黒褐色シルト　砂多い　炭化物片約2%
6　10YR2/3黒褐色粘土　炭化物片約2%
7　10YR4/3にぶい黄褐色粘土混じり砂
8　10YR4/3にぶい黄褐色砂が主　2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロック約1～2%含む
9　10YR3/3暗褐色シルトが主　2.5Y7/6明黄褐色粘土小ブロック約7%含む　炭化物約2%　かわらけ片含む
10　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト　炭化物片約2%
11　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト
12　10YR3/2黒褐色砂混じりシルトが主
2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロック約15%（人為堆積）
13　10YR3/2黒褐色砂混じりシルトが主
2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロック約20%（人為堆積）
14　10YR3/2黒褐色砂混じりシルトが主
2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロックが約20%（人為堆積）
15　10YR3/2黒褐色粘土
16　10YR7/6明黄褐色粘土ブロック　壁の崩落土
17　10YR5/2灰黄褐色粘土
18　10YR3/2黒褐色粘土が主　10YR6/8明黄褐色粘土ブロック約2%　炭化物片約2%

28SE5



28SE5
1　灰褐色砂混じりシルト
2a　浅黄色粘土ブロック　微量の炭化物含む　遺物ほとんど含まず（人為堆積）
2b　2aとほぼ似る
3　緑灰色砂
4　灰色粘土　緑灰色粘土ブロック含む　かわらけ片多量　木製品含む　焼けた白磁、青磁、青白磁片多量

28SE6



28SE6
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルトが主　2.5Y7/6明黄褐色粘土ブロック約5～7%　炭化物片微量　かわらけ細片少量
2　10YR4/4褐色砂混じりシルト
3　10YR4/4褐色砂混じりシルト
4　10YR4/4褐色砂混じりシルトが主　10YR7/6明黄褐色粘土ブロック含む　炭化物片微量
5　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト
10YR6/8明黄褐色粘土ブロック50%以上（人為堆積）
6　10YR4/4褐色砂混じりシルトが主　10YR7/6明黄褐色粘土ブロック約7%
7　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト　10YR6/8明黄褐色粘土ブロック約80%以上
8　10YR4/2灰黄褐色砂
9　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルトが主　10YR7/6明黄褐色粘土ブロック約5～7%
10　2.5Y6/4にぶい黄色粘土
11　5GY5/1緑灰色粘土
12　5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト
*6層下部、8層に砂の集積が顕著

0　1:100　2m

図199　井戸跡断面図（1）

28SE9　遺構　78－71に位置する、径238・195cm・深さ432㎝の井戸跡である（図版編図39、図200）。平面形は検出面で楕円形、底面でも楕円形を呈する。堆積土の多くは人為堆積による埋め戻しとみられ、一部が自然堆積と人為堆積の互層とみられる。28SB3、28SK13→28SE9の新旧関係が確認できる。ただし、28SB3の柱穴は遺存状態が良くないとの調査当時の認識もあり、28SB3との新旧は逆になる可能性もある（柳之御所調査事務所2006）。また、28SB2と空間重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　かわらけが18,646g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含むが、特に下部の堆積土層ではロクロかわらけを主体とする。ロクロかわらけ小皿は口径6.3～9.8cm程で平均8.7cm程、底径5.4～6.5cm程で平均5.9cm程、器高1.5～2.4cm程で平均2.0cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.7～15.9cm程で平均14.3cm程、底径5.9～9.3cm程で平均7.0cm程、器高3.3～4.6cm程で平均4.0cm程である。ロクロかわらけは器高の高い椀型の器形が多い。手づくねかわらけ大皿は口径14.0cm、器高2.8cm程である。国産陶器類や輸入磁器などの土器類のほか、瓦片や木製品、八稜鏡が出土している。

28SE11　遺構　82－70に位置する、径180・176cm・深さ437㎝の井戸跡である（図版編図39、図200）。平面形は検出面で楕円形、底面では隅丸方形を呈する。最下層の15層は遺物を多く含み、粘土ブロックも含む土層で人為堆積とみられる。1～14層は礫を含む人為堆積と自然堆積による砂層とが互層となる。28SB4→28SE11の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけが40,870g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.3～9.3cm程で平均8.8cm程、底径5.6～6.9cm程で平均6.4cm程、器高1.4～2.3cm程で平均1.9cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.4～15.3cm程で平均14.2cm程、底径6.5～8.4cm程で平均7.5cm程、器高2.8～3.6cm程で平均3.3cm程である。ロクロかわらけ大皿は器高の低い皿形の器形を呈する。手づくねかわらけ大皿は口径13.2～15.0cm程で平均14.1cm程、器高2.4～3.3cm程で平均2.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は器高が低く、口径も小さい資料が多い。陶器片は少ないものの土器類が多く出土し、折敷や刀子の鞘などの木製品、轡や杏葉などの金属製品も含まれる。墨書のある木片を含むほか、焼け壁土も出土している。年輪年代で1119年、1180年の辺材を残す折敷が出土している。

28SE13　遺構　77－78に位置する、径132・128cm・深さ256cmの井戸跡である（図版編図33）。平面形は検出面で隅丸方形、底面でも方形を呈する。堆積層はいずれの土層も人為堆積層とみられ、遺物は1層からやや多く、下層からも出土している。

遺物　かわらけが7,356g出土している。4層からはロクロかわらけのみ出土し、最上層の資料には手づくねかわらけ片も含まれる。ロクロかわらけ小皿は口径6.6～9.0cm程で平均8.0cm程、底径4.0～6.0cm程で平均5.1cm程、器高1.2～2.1cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径14.2cm、底径5.8cm、器高3.8cmである。底径が小さく椀型の器形を呈する。口縁部打ち欠きのロクロかわらけ小皿が複数含まれる。

28SE14　遺構　74－77に位置する、径176・144cm・深さ361㎝の井戸跡である（図版編図33、図200）。平面形は検出面で楕円形、底面でも楕円形を呈する。堆積層の状況は判然としないが、下層か

ら人為堆積、自然堆積、礫を含む土層の順に堆積する。
遺物　かわらけが2,321g出土している。ロクロかわらけ小皿は口径6.6cm、底径5.0cm、器高1.8cmである。手づくねかわらけ大皿は口径15.0cm、器高3.6cmである。刀子状の木製品や白磁四耳壺などが出土している。

28SE15　遺構　71－72に位置する、径192・184cm・深さ195cmの井戸跡である（図版編図27）。平面形は検出面で隅丸方形、底面で正方形を呈する。10層は粘土層で多くのかわらけを含む。1～9層は粘土ブロックを含み、人為堆積による土層とみられる。9層と10層の層界には礫が面的に広がる。
遺物　かわらけが232,453g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.0～10.3cm程で平均9.0cm程、底径4.7～7.8cm程で平均6.1cm程、器高1.3～2.4cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.7～15.9cm程で平均14.1cm程、底径6.0～9.0cm程で平均7.2cm程、器高3.0～4.8cm程で平均3.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は皿形の器形を呈する資料が多いが、椀型の器形も含まれる。手づくねかわらけ小皿は口径8.4～10.5cm程で平均9.5cm程、器高1.4～2.3cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径14.2～16.4cm程で平均15.1cm程、器高2.4～3.9cm程で平均3.3cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径の大きい資料も含まれる。金鉱石が出土している。

28SE16　遺構　75－72に位置する、径168・148cm・深さ322cmの井戸跡である（図版編図33、図200）。平面形は検出面で隅丸方形、底面では方形を呈する。堆積層は、1層は自然堆積と見なされているものの、上面に礫が置かれていたと記録されている。2層は粘土ブロックを含む人為堆積層である。3層は人為堆積とみられ、礫が多く密に含まれ、かわらけや木製品類も多く出土している。4・5層は粘土層である。
遺物　かわらけが41,466g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者が含まれる。ロクロかわらけ小皿は口径8.1～9.6cm程で平均8.8cm程、底径4.4～7.2cm程で平均5.9cm程、器高1.5～2.3cm程で平均1.9cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.5～15.8cm程で平均14.4cm程、底径6.3～9.2cm程で平均7.4cm程、器高3.1～4.3cm程で平均3.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は大型の器形が多く、器高や底径から椀型の器形と皿形の器形のいずれもが含まれる。手づくねかわらけ小皿は口径8.1～10.2cm程で平均9.3cm程、器高1.4～2.5cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径14.1～15.8cm程で平均15.2cm程、器高2.9～4.1cm程で平均3.3cm程である。手づくねかわらけ大皿は大型の器形が多い。土器類が多く出土し、木製品も多く出土している。糸巻の、枠木と横木のいずれもが多く出土している。折敷や刀子の柄・鞘、刷毛、物差しなどの木製品も含まれる。墨書折敷も出土しており、Ⅳ章で記すいわゆる「人々給絹日記」などが出土している。呪符も含まれる。年輪年代で1158年の辺材を残す折敷が出土しているほか、1138年の年代が得られている。

28SE17　遺構　81－73に位置する、径156・130cm・深さ233cmの井戸跡である（図版編図39、図200）。平面形は楕円形、底面も楕円形を呈する。底面の一部が掘り窪められている。9層は人為堆積層である。6層上面で瓦片が面的に広がる。2・3層も人為堆積層で土器類や礫を含む。1層は礫が中央に集中して堅く締まり、人為堆積とみられる。
遺物　かわらけが11,619g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は、口径8.2～8.7cm程で平均8.5cm程、底径5.4～6.4cm程で平均5.8cm程、器高1.6～

1.8cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は、口径13.2～13.9cm程で平均13.6cm程、底径6.6～7.5cm程で平均7.0cm程、器高3.3～3.8cm程で平均3.6cm程である。手づくねかわらけ大皿は、口径12.9～15.9cm程で平均14.0cm程、器高2.7～4.2cm程で平均3.3cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径の小さい資料が多い。９層から扇骨が６点出土している。平瓦片が23点とややまとまる。

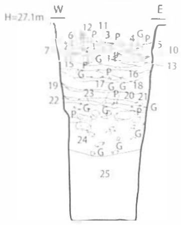
28SE18　遺構　73－77に位置する、径124・118cm・深さ287cmの井戸跡である（図版編図33、図201）。平面形は検出面で正方形、底面でも正方形を呈する。１・２層は人為堆積とみられ、粘土ブロックが多く含まれる。３層は粘土層で、底面から木の削屑が多量に出土した。
遺物　かわらけが468g出土している。土器類が少量出土し、ロクロかわらけ大皿は口径14.0～14.2cmで平均14.1cm程、底径6.1～7.1cm程で平均6.6cm程、器高3.3～4.0cm程で平均3.7cm程である。角材や板片、木の削り屑が底面付近から出土している。

31SE1　遺構　79－82に位置する、径200・188cm・深さ615cmの井戸跡である（図版編図40、図201）。平面形は検出面で正方形、底面でも正方形を呈する。最上層の１層は自然堆積とみられるが、それより下層は人為堆積による埋め戻しとみられる。底面付近で部材や大型の杓子が出土している。
遺物　かわらけが250g出土している。木製品が多く出土している。木製品は漆器椀のほか、建築部材とみられる木製品、大型の杓子がある。これらの部材にはロクロかわらけ小皿が伴う。ロクロかわらけ小皿は口径9.0cm、底径5.3cm、器高2.2cmである。

31SE2　遺構　69－74に位置する、径204・193cm・深さ365cmの井戸跡である（図版編図27、図201）。平面形は検出面で隅丸方形、底面でも隅丸方形を呈する。最下層の11層は粘土でが構成され、松双鶴鏡が出土している。周囲に炭化物が薄く広がる。その上部の9層は建築部材が多く含まれる人為堆積層である。それより上部の堆積層も人為堆積による土層とみられる。
遺物　かわらけが20,062g出土している。ロクロかわらけで多くが占められ、手づくねかわらけは破片が含まれるのみである。ロクロかわらけ小皿は口径6.8～9.3cm程で平均8.3cm程、底径3.8～7.9cm程で平均5.5cm程、器高1.2～2.5cm程で平均1.9cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.2～14.2cmで平均13.7cm、底径5.4cm、器高4.3～4.5cmで平均4.4cmである。ロクロかわらけは大皿では底径が小さく器高の高い椀型の器形である。建築部材とみられる木製品が多く出土している。木製品は刀子柄や糸巻き、折敷のほか、破風板や屋根材とみられる板材、断面形が長方形の柱材などの大型の建築部材を含む。松双鶴鏡や硯も出土している。

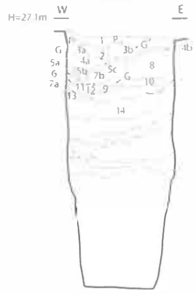
31SE3　遺構　69－73に位置する、径176・164cm・深さ212cmの井戸跡である（図版編図27、図201）。平面形は検出面で不整円形、底面では隅丸方形を呈する。５・６層は水分を含む土層である。４層はかわらけを多く含む土層である。１～３層は人為堆積による土層とみられる。31SB4→31SE3の新旧関係が確認できる。
遺物　かわらけが40,327g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。手づくねかわらけが多くを占める。ロクロかわらけ小皿は口径9.0cm、底径6.0cm、器高1.8cmである。ロクロかわらけ大皿は口径14.0～14.5cmで平均14.3cm、底径7.0cm、器高4.1cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.3～9.6cm程で平均8.9cm程、器高1.7～2.6cm程で平均2.2cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径13.3～15.8cm程で平均14.3cm程、器高3.1～4.0cm程で平均3.4cm程である。ロクロかわら

28SE7



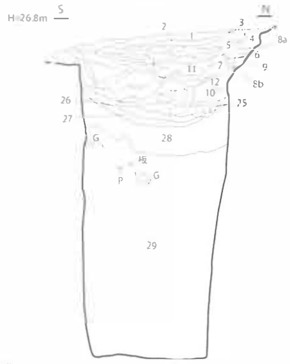
28SE7
1　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト、粗粒砂が主　小礫（径2～3ｃｍ）多量　丸みをおびたかわらけ細片含む
2　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトが主　粗粒砂、小礫をわずかに含む
3　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト、粗粒砂が主　小礫をわずかに含む
4　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトが主　粗粒砂を含む
5　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトが主
6　10YR5 8黄褐色粗粒砂
7　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト
8　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト、粗粒砂　小礫（径2～3ｃｍ以下）多量　丸みをおびたかわらけ細片含む
9　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、粗粒砂が主　10YR5 2灰黄褐色シルト含む
10　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト
11　8層に同じ
12　8層に同じ
13　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト
14　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトが主　粗粒砂、小礫、炭化物をわずかに含む
15　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトが主　粗粒砂、炭化物をわずかに含む
16　10YR5 4にぶい黄褐色粗粒砂が主　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトを含む
17　10YR5 2灰黄褐色砂、シルトが主　粗粒砂を含む
18　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト
19　10YR5 8黄褐色粗粒砂
20　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルト
21　8層に同じ
22　8層に同じ
23　10YR5 2灰黄褐色細粒砂、シルトが主　粗粒砂、礫を含む
24　10YR5 8黄褐色粗粒砂、10YR5 4にぶい黄褐色粗粒砂が主　小礫（径2～3ｃｍ以下）
円礫（径5～8ｃｍ）、2ｃｍ×2ｃｍ×10ｃｍほどの円礫（川原石）を層状に含む　ほぼ水平に堆積している　板材片を含む
25　灰白色粘土層
*1～23層は自然堆積　24層以下は人為堆積層

28SE8



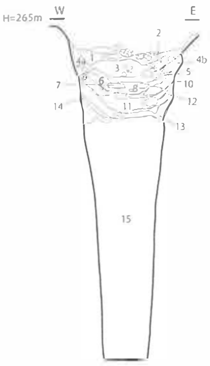
28SE8
1　10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径3ｃｍ[illegible]）が主　10YR4 2灰黄褐色シルト　砂が約10％含む　締りなし　かわらけ細片少量含む
2　10YR6 3にぶい黄色、　10YR5 2灰黄褐色粘土、シルト、砂が主　わずかに2.5Y7 4浅黄色粘土粒含む　かわらけ細片を少量含む
径10ｃｍ以下の円礫8％ほど含む　締りなし
3a　2.5Y5 2暗灰黄色シルト、砂が主　2.5Y6 3にぶい黄褐色粘土、シルトブロック
2.5Y7 3～7 4浅黄色シルト、粘土ブロック約25％含む　締りなし　炭化物少量含む
3b　2.5Y7 3～7 4浅黄色シルト、粘土ブロックが主　径1ｃｍ以下の小円礫、砂、かわらけ細片含む　炭化物少量含む　計10ｃｍ[illegible]円礫少量
4a　2.5Y5 2暗灰黄色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック約10％
炭化物、かわらけ細片少量含む　締りなし
4b　2.5Y5 2暗灰黄色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック約10％含む
5a　10YR4 2灰黄褐色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック約2％含む
5b　10YR4 2灰黄褐色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック（径2ｃｍ以下）約10％　径1ｃｍ[illegible]の円礫が2％ほど含む
5c　10YR4 2灰黄褐色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック（径1ｃｍ以下）約50％含む　かわらけ細片少量含む
6　10YR4 2灰黄褐色シルト、多量の砂が主　2.5Y7 4浅黄色粘土粒をわずかに含む
7a　2.5Y7 4粘土、シルト、砂が主　わずかに10YR4 2灰黄褐色シルト、砂を含む
7b　10YR6 6明黄褐色粘土、シルト、砂が主（2.5Y7 4浅黄色粘土が酸化したもの）
8　2.5Y7 3～7 4浅黄色粘土、シルトブロックが主　砂が混じる
ブロックごとにぼろぼろに分かれる　締りなし
9　10YR3 2黒褐色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土粒わずかに含む
10　10YR4 2灰黄褐色シルト、砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック約30％含む
11　10YR5 1褐灰色シルト、細粒砂が主　2.5Y7 4浅黄色シルト、粘土ブロック約30％含む
12　10YR4 1シルト、粗～細粒砂が主　炭化粒、かわらけ細片少量含む　締りなし
13　2.5YR7 3～7 4浅黄色粘土シルトブロック、細粒砂が主　ごくわずかに10YR4 2シルト含む
14　以下記録をとる前に崩落　2.5Y7 4浅黄色粘土、シルトが主　人為堆積

28SE9



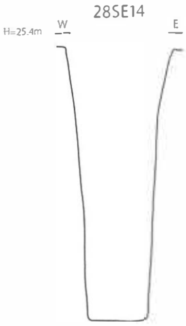
28SE9
1　10YR4 3にぶい黄褐色砂混じりシルト　かわらけ細片含む
2　10YR3 1シルト混じり粗砂　かわらけ細片含む
3　10YR3 1黒褐色細砂混じりシルト　10YR7 6明黄褐色粘土ブロック
4　10YR4 3中粒砂混じりシルト　かわらけ細片比較的多い
5　10YR4 1褐灰色砂混じりシルト
6　2.5Y5 3黄褐色砂混じりシルト　2.5Y7 4浅黄色粘土ブロック
7　10YR3 1黒褐色砂混じりシルト　2.5Y7 4浅黄色粘土ブロック少量
8a　2.5Y8 2灰白色粘土ブロックが主　10YR3 1黒褐色砂混じりシルト
8b　2.5Y8 2灰白色粘土ブロックが主　10YR3 1黒褐色砂混じりシルト
8c　2.5Y8 2灰白色粘土ブロックが主　10YR3 1黒褐色砂混じりシルト
9　10YR3 1黒褐色砂混じりシルト（粗砂多い）
*8～9は、71-78 PP3の埋土
10　10YR6 1・10YR3 1黒褐色砂混じりシルトが主　10YR7 8明黄褐色、2.5Y7 4浅黄色粘土ブロックがほぼ同量ずつ混じる
11　2.5Y8 2灰白色粘土ブロックが主　10YR3 1黒褐色混じりシルト
12　10YR2 2黒褐色細砂混じりシルト　2.5Y7 4浅黄色粘土ブロック含む　かわらけ細片わずか
*上部堆積層の他の部分は崩落したため、記録なし　ただし、大方の部分は10YR3 1黒褐色シルトに2.5Y7 4浅黄色粘土ブロックが混じる土である　以下25層までは人為的に埋められた粘土主体層　かわらけが比較的多く入る
26　黒褐色土
27　記入もれ
28　オリーブ黒色土
29　灰色粘土主体　粘土層や砂層、黒色土層の互層が途中にある
底面付近は砂の多い粘土であり、木の葉やカヤが多量に入る

28SE11



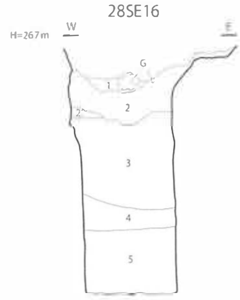
28SE11
1　10YR5 3にぶい黄褐色砂混じりシルトが主　上部には、中～巨礫多数含まれる　礎石だったのではないかと思わせる、径10ｃｍほどの円礫も一個ある　扁円礫多い
2　10YR5 3にぶい黄褐色砂混じりシルトに、2.5Y7 3浅黄色粘土ブロック（径3～5ｃｍ）60％
3　10YR5 3にぶい黄褐色粗砂　部分的にラミネーション発達　自然堆積か
2.5Y7 3浅黄色粘土ブロック（径5ｃｍほど）が散在
4a　2.5Y5 3黄褐色粘土ラミネーション発達　薄いシルト層もあり　自然堆積
4b　4aと同じ土だが4aよりも粘土が多い　自然堆積　緊密
5　1と似た土に2.5Y7 3粘土ブロック（径1ｃｍぐらい）や粗砂が混じる
6　10YR3 3暗褐色粘土、砂混じり土　混入物なし
7　2.5Y7 3粘土ブロック（径5ｃｍほど[illegible]）
8　10YR2 2黒褐色粘土、シルト、砂混じり土　大礫（径7～15ｃｍ）多数　巨礫も一個ある
9　10YR5 3にぶい黄褐色粘土、シルト、砂混じり土　層状に堆積している　中に2.5Y7 3浅黄色粘土の薄い層が入る
10　10YR5 2灰黄褐色粘土、2.5Y7 3浅黄色粘土ブロック（径3ｃｍ）　かわらけ細片含む　層状に2.5Y7 3粘土、砂の層も薄く入る
11　10YR3 3暗褐色粘土、シルト、砂　締りは悪い
12　10YR4 2灰黄褐色粘土、砂混じり土　締りあり
13　10YR4 2灰黄褐色粘土、シルト、砂混じり土　2.5Y7 3浅黄色粘土、シルト、砂混じり土が層状に入る　締りあり
14　注記もれ
15　腐植質土が多い　この中から完形かわらけ、折敷などが出土　オリーブ灰色に変色した粘土ブロック（径3～5ｃｍ）もいくつか入る

28SE14



28SE14
土層注記なし

28SE16

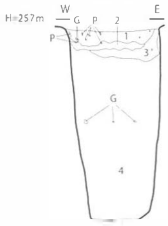


28SE16
1　10YR4 3にぶい黄褐色シルト、締りあり　1％の炭化物、酸化鉄含む　巨礫（角）、大礫（亜円～亜角）を含む
2　10YR5 3、10YR6 6明黄褐色粘土が主体　砂も混じる　1％前後の炭化物混入　人為的に投棄されたものであろう
2'　10GY4 1暗緑灰色、砂質粘土部分的に入る程度
3　10YR5 1褐灰色、礫層（中～拳大程度の礫がびっしり入る　人為堆積）　多量のかわらけ細片が入る
4　灰色粘土が主　緑灰色粘土、砂混じりシルトブロックが入る
5　10YR3 1オリーブ黒～緑灰色粘土

28SE17

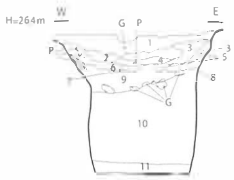
28SE17
1　10YR5 3にぶい黄褐色シルト、粘土、砂混じり土　円礫、角礫が入る
2a　10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径5cmほど）　隙間に10YR4 2灰黄褐色シルト、砂混じり土が入る　粘土ブロック中には砂、10YR5 3にぶい黄褐色砂混じりシルトも3％ほど入る　かわらけ細片が極小数入る　非常に締まる
2b　10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径3cmほど）の10YR5 2灰黄褐色砂混じりシルトが半々　大礫、かわらけ片数点入る　しまりあり
3a　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルト　角礫、円礫が層状に入っている　粘板岩、角礫片も数点入る　かわらけ片少量含まれる
3b　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルトが主　10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径1cmほど）が2～3％混じる　しまりなし　かわらけ片少量含まれる
3c　10YR5 2灰黄褐色シルト、多量の粗砂を含む　かわらけ片多数、角・円礫も層状に含む　10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径1cm以下）が5％ほど含まれる　しまりなし
3d　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルト　3cに酷似　かわらけ片少量含
10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径1cmほど）が2～3％混じる　しまりなし
4　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルト　粗砂多い　10YR6 6明黄褐色粘土ブロック（径3cmほど）が2％ほど含まれる　しまりなし　角・円礫、かわらけ片少量含まれる
5　10YR6 6明黄褐色、2.5Y7 3浅黄色粘土ブロック（径5cmほど）
10YR5 2灰黄褐色砂混じりシルト、10YR5 3にぶい黄褐色砂混じりシルトが10％ほど混じる　しまりなし　かわらけ片少量含まれる
6　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルト1％ほど含む　2.5Y7 3浅黄色粘土ブロック（径2～5cm）が主　砂やシルトも混じる　かわらけ片は数点のみ含まれる　下では5Y8 2灰白色粘土ブロックも多くなる
10GY6 1緑灰白色粘土ブロック（径1cmほど）が1％含まれる
7　10YR1.7 1黒色砂混じりシルト　尾片が数点、礫が数個　木片が数十点入る
8　10YR2 1黒色砂混じりシルト　10GY6 1緑灰色粘土、7.5GY6 1緑灰色粘土がブロック状に約5％入る
9　ウリ科種子が入る　8層上の10に木片が多い

28SE13



28SE13
1　10YR4 2～5 2灰黄褐色粘土混じりシルト、粘土小ブロック散在（5％）　炭化物片点在　かわらけ片も多い
2　10YR4 2灰黄褐色、粘土質（ほとんどシルト混じり粘土）、径10mm前後の地山粘土ブロック点在（3％以下）　炭化物片、かわらけ片とも1に比べ少ない
3　10YR3 1黒褐色シルト混じり粘土　炭化物片は壁際寄りに多く、1層程度の量　かわらけ片は1、2より少ない
4　10YR3 1黒褐色シルト混じり粘土　灰白色粘土の大小ブロック（径50mm以下）[illegible]ほど散在　礫わずか　かわらけ片少量　木片や種子類含む

28SE15



28SE15
1　2.5Y7 4浅黄色砂混じりシルト　しまりあり　かわらけ微細片、炭化物1％ほど混入　中礫少量含まれる　斑状に酸化
2　2.5Y7 4浅黄色砂混じりシルト　10YR7 8黄橙粘土質シルトがブロック状に10％ほど入る
3　10YR5 2灰黄褐色シルト混じり粘土　粗砂混じり　1％前後の炭化物含む　10YR7 8黄橙粘土ブロック状に入る　斑状に酸化
4　2.5Y6 3にぶい黄色シルト混じり粘土　斑状に酸化　2.5Y6 6明黄褐色粘土ブロック状に2％含む　かわらけ片含む　拳～頭大の礫が入る　礫より上部は自然堆積
5　10YR5 3にぶい黄褐色粘土質シルト　斑状に酸化
6　10Y5 1灰色粘土　斑状に酸化（1％前後）　2.5Y6 6明黄褐色シルト混じり粘土がブロック状に入る
7　10Y5 1灰色砂質粘土　斑状に酸化　しまりあり
8　10Y5 1灰色砂質粘土主体に2.5Y6 6明黄褐色粘土が30％以上ブロック状に入る
9　10Y5 1灰色砂質粘土　かわらけ片含む　2.5Y6 6明黄褐色粘土がブロック状に入る
10　10YR4 1褐灰色粘土　かわらけの完形品を多数含む
11　10GY5 1緑灰色粘土

0　1:100　2m

図200　井戸跡断面図（2）

けは皿形の器形を呈する。手づくねかわらけは小形の器形が多い。このほか、対になるとみられる連歯下駄が２個、鉄滓が出土している。

31SE6　遺構　68－72に位置する、径180・176cm・深さ333㎝の井戸跡である（図版編図27、図201）。平面形は検出面で隅丸方形、底面では方形を呈する。５～８層は水分を含む粘土、シルト層で木炭や焼け壁土が５・７層から出土している。３・４層は人為堆積とみられ、かわらけや多くの礫を含む。１・２層は自然堆積とみられる。

遺物　かわらけが34,436g出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.7～10.1cm程で平均9.0cm程、底径4.5～6.6cm程で平均5.7cm程、器高1.8～2.6cm程で平均2.1cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.6cm、底径7.0cm、器高3.1cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.0～9.8cm程で平均8.8cm程、器高1.4～2.5cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.8～15.1cm程で平均13.9cm程、器高2.4～3.6cm程で平均3.1cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径の小さい資料が多い。柱状高台が１点出土している。被熱した壁土が多く出土しており、２層から100g、３層から50g、４層から50g、５層から7,900g、６層から650g、７層から43,650gが報告されている。白土が塗布される壁土も含まれる。

31SE7　遺構　67－71に位置する、径236・176cm・深さ580㎝の井戸跡である（図版編図27、図201）。平面形は検出面で楕円形、底面では隅丸方形を呈する。４～７層は水分を含む粘土とシルトで構成される自然堆積層である。２・３層は人為堆積とみられる土層で、かわらけや炭化物片を含む。１層は支援堆積層とみられる。

遺物　かわらけが161,368g出土している。かわらけはロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径7.7～9.7cm程で平均8.8cm程、底径5.0～6.9cm程で平均6.0cm程、器高1.4～2.2cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径11.6～14.8cm程で平均13.6cm程、底径6.7～8.2cm程で平均6.9cm程、器高2.7～4.0cm程で平均3.4cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径7.2～9.9cm程で平均8.9cm程、器高1.1～2.6cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.5～16.0cm程で平均13.7cm程、器高1.8～3.6cm程で平均2.8cm程である。手づくねかわらけは口径の小さい資料が多い。被熱した資料が多く含まれる。木製品も多く出土し、箸が5層から多量に出土しており、414点が出土した。両端が判明するものは110点である。そのほか、折敷片や格子が多く出土している。

31SE8　遺構　74－74に位置する、径168・148cm・深さ255㎝の井戸跡である（図版編図33、図201）。平面形は検出面で正方形、底面では方形を呈する。５層は自然堆積層で、水分を含む土層である。遺物の多くはここから出土している。２～４層は粘土ブロックを多く含み、人為堆積とみられる。1層は自然堆積とみられるが、上部は削平を受けている。

遺物　かわらけが967g出土している。ロクロかわらけ小皿と柱状高台が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径7.6～9.1cm程で平均8.4cm程、底径3.8～5.6cm程で平均5.1cm程、器高2.1～2.6cm程で平均2.4cm程である。木製品が多く出土しており、折敷片のほか紡織具を含む。糸巻きは枠木と横木が多く出土しているほか、そのほかにも紡織具の可能性がある資料がある（前川2015）。なお、精査時には獣骨片の混入が観察されている。

36SE2　遺構　62－59に位置する、径108・96cm・深さ290cmの井戸跡である（図版編図20）。平面形は検出面で方形、底面で円形を呈する。３層は自然堆積で水分を含む粘性の強い土層である。遺物を含む土層である。２層は粘土ブロックを多く含み、人為堆積とみられる。１層は自然堆積と観察されているが、上部には礫が密に堆積する。
遺物　かわらけが2,773g出土している。ロクロかわらけ小皿がある。ロクロかわらけ小皿は口径8.9～9.8cm程で平均9.3cm程、底径5.5～7.0cm程で平均6.4cm程、器高1.3～2.3cm程で平均1.9cm程である。国産陶器類のほか、木製品が出土している。木製品は箸や刀型の形代のほか、20×30×８cm程で断面形が方形を呈する角材が出土している。

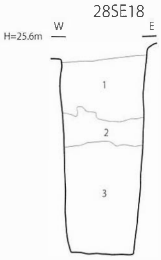
36SE3　遺構　61－58に位置する、径88・84cm・深さ286cmの井戸跡である（図版編図20）。平面形は検出面で方形、底面で円形を呈する。６層は自然堆積で、水分を含む粘土とシルトで構成される土層である。遺物が含まれる。１～５層は粘土ブロックを多く含み、人為堆積とみられる。
遺物　かわらけが1,436g出土している。ロクロかわらけ大皿・小皿のほか柱状高台が含まれる。ロクロかわらけ小皿は口径7.2～9.4cm程で平均8.5cm程、底径5.8～7.0cm程で平均6.3cm程、器高1.7～2.5cm程で平均2.0cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.9cm、底径6.3cm、器高4.8cmである。木製品が出土しており、曲物、箸、火きり杵、部材が含まれる。部材は端部の片側は平坦に、もう片側には手斧痕が残る。また、木の削屑がまとまって出土している。

41SE1　遺構　65－69に位置する、径220・200cm・深さ333cmの井戸跡である（図版編図21、図202）。平面形は検出面で楕円形、底面で長方形を呈する。底面中央が径50cm程で掘り窪められている。人為堆積とみられる３層から井戸部材がとみられる資料を含む多くの部材が出土している。壁際から、節を抜かれた竹が底面に届く状態で出土している。４層も人為堆積の可能性があり、３層との層界に植物質遺体が面的に広がる。41SB2と空間重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　かわらけが167g出土している。部材が多く出土しており、ほぞ穴をもつ材があり、井戸枠とみられる。

41SE4　遺構　65－67に位置する、径200・188cm・深さ310cmの井戸跡である（図版編図21、図202）。平面形は検出面で円形、底面で円形を呈する。全体が地山ブロックを多く含み、人為堆積とみられる。
遺物　かわらけが500g程出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.1cm、底径6.2cm、器高1.4cmである。木製品では下駄、箸などが出土しており、呪符が１点含まれる。

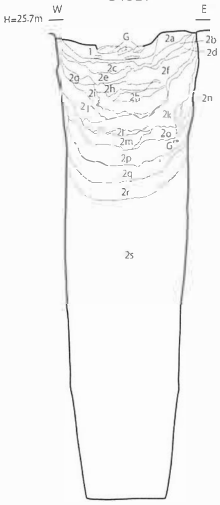
49SE1　遺構　88－73に位置する、径440・380cm・深さ290cmの井戸跡である（図版編図47、図202）。平面形は検出面で円形、底面で円形を呈する。49SE1と重複し、49SE1→48SB1と図示されている（岩手県教委1999）。ただし、井戸と柱穴の切り合い関係には判然としない部分があり、不確定な部分が残る。
遺物　かわらけが多量に出土している。ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者を含む。ロクロかわらけ小皿は口径7.0～10.0cm程で平均8.6cm程、底径4.5～7.7cm程で平均5.8cm程、器高1.2～2.2cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.1～17.0cm程で平均14.5cm程、底径5.1～11.1cm程で平均7.4cm程、器高2.7～4.4cm程で平均3.6cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径8.1

28SE18



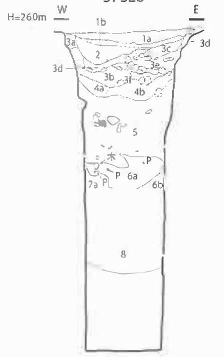
28SE18
1　5Y8 1淡黄色地山粘土大ブロック（径50mm）卓越2.5Y6 3にぶい黄褐色～2.5Y5 3黄褐色、砂質土が混じる　全体に酸化著しい　きわめて緊密
2　5Y7 3浅黄色粗砂がやや卓越し、5Y8 1淡黄粘土ブロック（わずかに明緑灰色がかる）混入　少量の木が出土
3　10GY6 1緑灰色粘土　上部は砂をわずかに含む　一部に黒褐色土ブロックを混入

31SE1



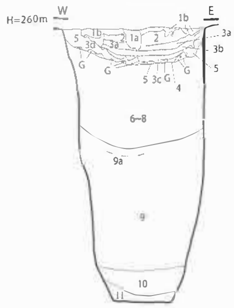
31SE1
1　2.5Y5 2暗灰黄色シルト、上部に砂が混じる　粘土も多い　自然堆積層　水成層　大礫が入れられている　また、最下部に漆器皿が一枚入っていた　陶器大片が2点入っていた　この層は別の遺構とすべきであろうか
2a　10YR1.7 1黒色砂混じりシルトが主　中に地山起源の5Y7 4浅黄色粘土砂混じりシルトブロックが30%ほど含まれる　ブロックは径1～3cm　漆器椀が1点出土
2b　2aと同じ性質の土　ただ、こちらの方が5Y7 4浅黄色粘土、シルト、砂混じりブロックが多い（70%ほど）
2c　5Y7 4浅黄色粘土ブロック
2d　2aと同じ性質の土　5Y7 4浅黄色粘土ブロックが50%ほど含まれる　ブロックの径は1～4cm
2e　10YR1.7 1黒色砂混じりシルトが主　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルトブロック（径2～3cm）5Y7 4浅黄色粘土、シルト、砂混じり土ブロック（径3～4cm）が20%ほど含まれる
2f　2cと同じ
2g　10YR4 2灰黄褐色シルト、砂混じり土ブロック（径1～8cm）が主　10YR1.7 1黒色砂混じりシルトブロックが40%ほど　この中には1cm以下の小礫も含まれる
2h　10YR1.7 1黒色砂混じりシルトブロックが60%ほど　この中には径1cm以下の小礫も入る　5Y7 4浅黄色粘土、シルト、砂混じり土ブロックが40%ほど　ブロックの大きさは1～5cm
2i　2gと同じ性質の土　10YR4 2灰黄褐色砂混じりシルトブロックが主　10YR1.7 1黒色砂混じりシルトブロックが20%ほど
2j　2gと同じ性質の土
2k　2hと同じ性質の土
2l　10YR1.7 1黒色砂混じりシルト　小礫（径1cm以下）も入る
2m　5Y7 4浅黄色粘土ブロック（地山起源）
2n　10YR1.7 1黒色砂混じりシルト　小礫（径1cm以下）も入る
2o　5Y7 4浅黄色粘土ブロックが主　10YR1.7 1黒色砂混じりシルト（径約1cm以下）の小礫も含む（50%ほど）
2p　5Y7 4浅黄色粘土ブロック
2q　10YR1.7 1黒色砂混じりシルト　この中にはかわらけ片が1点入っていた
2r　10YR1.7 1黒色砂混じりシルトに5Y7 4浅黄色粘土ブロック（砂ブロックも少しあり）が混じる
2s　5Y7 4浅黄色粘土ブロックが主　砂ブロックもある

31SE6



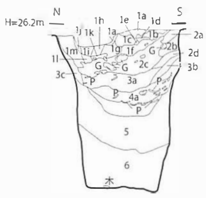
31SE6
1a　2.5Y4 2・5 2暗灰黄色・2.5Y5 1黄灰色シルト、東端と西端寄りの部分には地山粘土の不定形大小ブロックが混入するが少ない　炭化物片微量点在　緊密だが軟質
1b　2.5Y5 1黄灰色1aに似たシルト
＊1層はかわらけ片少量
2　2.5Y4 2暗灰黄色～2.5Y6 6明黄褐色粗粒砂が卓越する砂層　一部酸化　かわらけ片極小量　やわらかい
3a　10YR3 2灰黄褐色シルト　かわらけ細片、炭化物片微量分布
3b　10YR3/2黒褐色シルト　大型の礫（径6～23cm、亜円礫主体、若干の亜角、円礫）を多量に含む　かわらけ片多い
3c　10YR5 2灰黄褐色シルト　一部に粗粒砂ブロックが見られる　円礫に含まれる　緊密だが軟質
3d　10YR4 1褐灰色粘土混じりシルト　かわらけ片多い　炭化物片少量散在
3e　10YR3 1黒褐色粘土混じりシルト　円礫多い
3f　10YR4 2灰黄褐色粘土混じりシルト　円礫を多量含む　炭化物片少量散在　緊密だが軟質
4a　2.5Y4 1黄灰色粘土混じりシルトが主　地山起源浅黄色粘土や砂質土がブロック状に入るが割合は低い　軟質　炭化物片少量点在
4b　2.5Y5 1黄灰色粘土混じりシルトが主　4aよりは多く地山起源粘土や砂質土を含むが10%以下　かわらけ片やや多く、炭化物片も少量散在
5　灰色味の強い黒色であり、オリーブ黒色土系黒色シルト混じり粘土　水分多く軟質　円礫も多い　有機物、木製品等を包含し、かわらけ片も多い　明緑灰色土、大きな斑状に見られるが多くはない
6a　5Y3 1オリーブ黒色～5Y2 1黒色砂混じりシルト　径0.5cm礫等も含む
6b　10G1 1暗緑灰色砂を含む粘土混じりシルト　径1cm礫も含む
7a　2.5GY5 1オリーブ灰色粘土　7層下部には大量の焼けた壁土片と大小の木炭が含まれるが、かわらけ片は少ない
8　上部は明緑灰色卓越層にオリーブ黒色系の土が混じっていたが　すぐに10GY7 2明緑灰色粘土、砂混じり粘土のほぼ純粋な層になり、部分的にブロック的に10YR1.7 1黒色粘土混じりシルトが混じる　木製品（折敷他）が若干含まれる　かわらけ片少量含む

31SE2



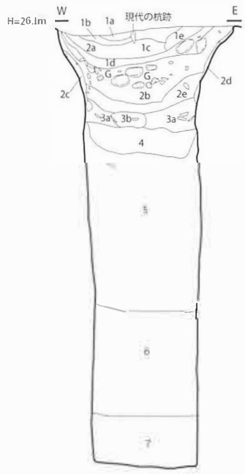
31SE2
1a　2.5Y5 3黄褐色、北へ延びる撹乱
1b　2.5Y5 3黄褐色シルト　緊密
2　2.5Y4 2暗灰黄色シルト　炭化物片微量点在　緊密
3a　2.5Y5 2暗灰黄色シルト　緊密であるが軟質
3b　10YR5 2灰黄褐色、10YR8 1灰白色シルト　下部に灰白色シルトのラミナ1枚　計9枚のラミナ　緊密だが軟質
3c　2.5Y4 1黄灰色シルト　上位二層と比べると粘性強い
3d　2.5Y5 2暗灰黄色シルト　2・3a・3bは3a・3bに似る
4　2.5Y5 4黄褐色シルト　緊密だが軟質
5　2.5Y6 6明黄褐色、2.5Y7 4浅黄色ほか、地山起源　2.5Y4 2暗灰黄色シルトが斑状に見られる
＊6～9層上部は記録を取る前に雨により崩壊
9a　木版の削りかすで構成される層
9　2.5Y3 1黒褐色泥土（粘質土）　加工材、自然木、草本類の出土が多い　破風板等　建築部材が多量に含まれる　下部には、明緑灰色土ブロックが混じっている
10　5Y3 1オリーブ黒色粘土が卓越　7.5GY6 1緑灰色シルトや粘土ブロックが混入　かわらけ片　木製品も少ない　ウリ科を主体とする種子が多く混入し、一部はまとまってブロック状に出土する　種子は主に10Y3 2のオリーブ黒色土に入る　L=22.455m付近からは緑灰色シルトが多くなる
11　5G6 1オリーブ灰色の粘土（地山起源）、砂がほとんど　10G6 1緑灰色粘土部分もあり　遺物含まず　この遺構（井戸か？）を使用しなくなった後,地山粘土を用いて井戸底部を埋め、平らな状態の上面に鏡を置いたのか　鏡の上部周辺には黒色の腐植土が多い

31SE3



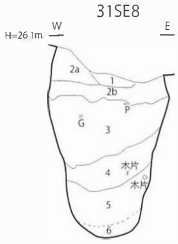
31SE3
1a　2.5Y4 2暗灰黄色シルト
1b　2.5Y7 4浅黄色地山粘土ブロック卓越　1a類似の暗灰黄色シルト含む
1c　2.5Y5 2暗灰黄色粘土混じりシルトが主　径30mm以下の地山粘土ブロック約10%含む　炭化物微量点在　緊密
1d　2.5Y4 1黄灰色シルト　やわらかい
1e　2.5Y4 2暗灰黄色シルトブロック
1f　2.5Y6 1黄灰色～2.5Y4 2暗灰黄色粘土混じりシルト　緊密　炭化物片微量点在
1g　2.5Y4 2暗灰黄色、1fに似る　径30mm以下の地山粘土ブロックが点在（2～3%）
1h　2.5Y5 2暗灰黄色粘土混じりシルト
1i　2.5Y5 1黄灰色粘土混じりシルト
1j　2.5Y5 1黄灰色（1iより暗い）
1k　2.5Y4 1黄灰色シルト
1l　2.5Y黄灰色シルト　径1cm前後の地山粘土ブロックが少量混じる　炭化物片点在
1m　2.5Y5 1黄灰色シルト　地山粘土小ブロック（径1cm以下）点在　かわらけ片少量　炭化物片点在
2a　2.5Y4 1～2.5Y3 2黒褐色シルト　かわらけ細片多い
2b　2.5Y4 2粘土混じりシルト　炭化物片少量散在　緊密
2c　10YR4 2灰黄褐色～10YR4 1褐灰色シルト　大型礫、かわらけ片、炭化物片多く含む　地山起源粘土ブロックを少量、部分的に含む
2d　2.5Y4 2暗灰黄色　2cに似るが粘土ブロックはない
3a　2.5Y5 1・4 1黄灰色、2.5Y4 2暗灰黄色シルト　地山粘土ブロック（径5cm以下）が5%　炭化物片が全体に散在　かわらけ片多量
3b　ほぼ3aに似るが、かわらけ片多い
3c　2.5Y4 1黄灰色粘土混じりシルト　炭化物微量点在
4a　2.5Y5 2暗黄灰色シルト　粘性強い　かわらけ完形品含む　多量のかわらけ形含む
5　2.5Y2 1黒色粘土が卓越　南壁際10YR7 1明緑灰色粘土、砂質粘土が入るが全体の割合は少ない
6　10YR7 1明緑灰色粘土　ブロック状に7.5Y5 1灰色粘土や5層同様の黒色粘土が含まれるものの割合は小さい　木片含む　かわらけ少量

31SE7



31SE7
1a　2.5Y4 2暗灰黄色シルト　炭化物片微量　自然堆積
1b　2.5Y6 3にぶい黄色シルト　炭化物片微量（部分的）　自然堆積
1c　2.5Y4 2暗灰黄色シルト　1aによく似る　炭化物が多いが、3%ほど　自然堆積
1d　2.5Y7 1灰白色、2.5Y6 1黄灰色のシルトと粘土混じりシルト　ラミナ発達　東壁際には径25cmの巨礫とともに少量のかわらけ片を含む　炭化物微量　自然堆積
1e　2.5Y5 3黄褐色あるいは2.5Y3 2黒褐色シルトと細砂　炭化物片（約5%）のほか、かわらけ細片少量　自然堆積
2a　2.5Y5/2暗黄褐色シルト
2b　2.5Y3/1黒褐色シルト　多量の炭化物片　かわらけ片少量　少量の焼壁土塊含まれる（径10～25cm）　礫も多い　礫は亜円主体　土の起源は当時の表土層
2c　2.5Y4 1黄灰色あるいは2.5Y3 1黒褐色シルト　炭化物片を多く含む部分は黒色味が強い　かわらけ片少量
2d　2.5Y4 1黄灰色粘土　2cに似るが、炭化物片ほとんど含まない
2e　2.5Y4 1黄灰色粘土混じりシルトに、地山起源5Y7 3浅黄色砂混じりシルト大ブロックがはいる（約15%）　炭化物片、かわらけ片が多い　礫が若干まばらに含まれる
3a　2.5Y4 1黄灰色あるいは2.5Y3 1黒褐色シルト　かわらけ完形品少量　かわらけ片多い　下面には礫群が面的に広がる　極めてやわらかい
3b　2.5Y4/1黄灰色あるいは10Y7 6明黄褐色、土性は3aと同じだが、地山起源の酸化した粘土ブロックが卓越　やわらかい　かわらけ片少ない
4　黒色泥土　井戸状土坑に特有のもの　かわらけ片少ない
5　2.5Y3 1黒褐色シルト、粘土　上部には混入物少ない　それより下からは再び木製品、かわらけ片、焼土壁塊が出土　また、有機物（草本類ほか）も多量に混入する
6　明緑灰色砂混じりシルト　砂混じりシルトとオリーブ黒色系（5Y3 1）粘土混じりシルトが混在　有機物の混入は少ない　かわらけ片を含むが5層よりは少ない　焼土壁塊含む　これは5層より多い
7　明緑灰色粘土、粗砂　オリーブ黒色系の土がブロックで入り、種子が混じる　かわらけ片は少ない

31SE8



31SE8
1　2.5Y6 2灰黄色、2.5Y5 2暗灰黄色粘土混じりシルト、ラミナ発達　大きくは4枚　その中に層厚1cm以下のラミネーション　18～19枚
2a　2.5Y4/3オリーブ褐色が混入（30%＋α＜40%）　炭化物片点在
2b　2.5Y4 2暗灰黄色粘土混じりシルトが主　10cm以下に大小ブロック混入（30～40%）　やや多い炭化物片が全体に散在　特に西半に多い　全体に酸化著しい　緊密
3　5Y3 1オリーブ黒色シルト混じり粘土が主　10GY6 1緑灰色地山粘土ブロック（10cm以下）の大小ブロック混入（約10%）　木片等少量　かわらけ片少量　炭化物片少量　緊密だが軟質
4　10GY6 1緑灰色粘土が卓越　特に上半に多い　5Y3 1オリーブ黒色は3層のものと同様　小量の木片、かわらけ片微量
5　10GY6 1緑灰色砂混じり粘土が卓越するが、黒色や5Y4 1灰色の粘土の大ブロックも混じり、有機物や骨など入る　糸巻等出土

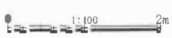


図201　井戸跡断面図（3）

～10.4cm程で平均9.4cm程、器高1.3～2.3cm程で平均1.7cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.4～16.0cm程で平均14.5cm程、器高2.3～3.5cm程で平均2.9cm程である。ロクロかわらけ大皿は皿形の器形で、手づくねかわらけ大皿は口径の小さい資料が多い。口縁部が打ち欠きのロクロかわらけ小皿や、羽状の刻画がある手づくねかわらけが含まれる。木製品では折敷片や形代、刷毛が出土している。そのほか、付札状の墨書資料や木偶が含まれる。刀子が出土している。

13SE2　遺構　68－82に位置する、径150・深さ295cmの井戸跡である（図版編図28、図202）。平泉町教育委員会による13次調査で精査された遺構である。下部で井戸枠が検出されており、四隅に隅柱を置き、縦板組の構造である。横木が２本あり、隅柱とほぞで組み合う。２層には瓦が廃棄されて、

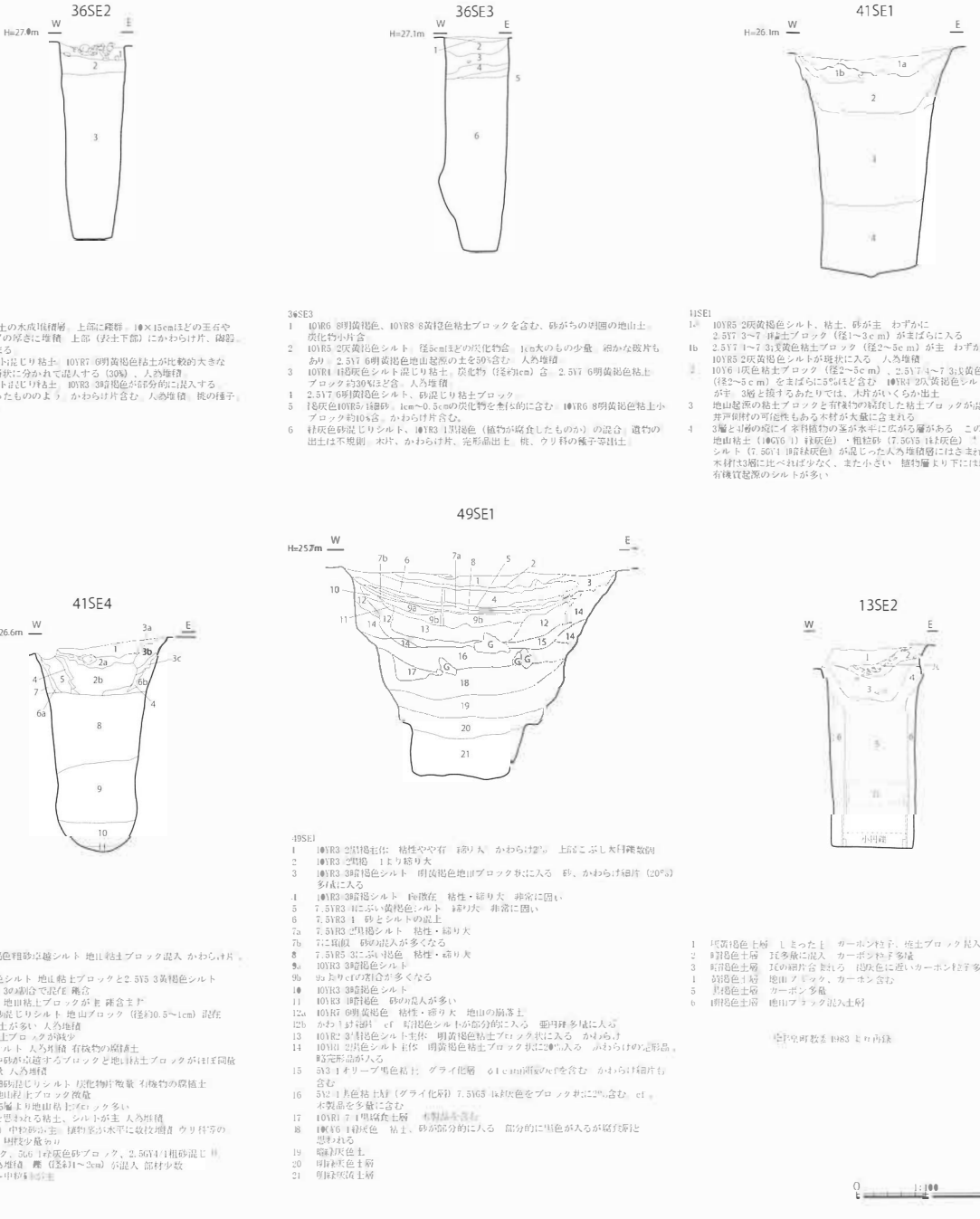


図202　井戸跡断面図（4）

大量に出土した。

遺物　瓦が大量に出土している。軒丸瓦、軒平瓦のほか、丸瓦、平瓦も出土している。軒丸瓦は巴文のみの文様、巴文と剣頭文が組み合う文様がある。軒平瓦は小型の巴文のみの文様、巴文と剣頭文が組み合う文様がある。

（5）土坑

遺跡内では多くの土坑を検出しているが、遺構番号が付されたものは771個である（表15・16）。このうち、12世紀代及び精査していないが当該時期の遺構と推測される土坑は402個である（表15）。土坑にはちゅう木を多く含み、種子などを含む排泄物等に由来すると推測できる土質などの特徴からトイレ状土坑と認識できる遺構がある。トイレ状土坑は遺跡内で推察されるものを含め、97基検出されている。

以下では50次以降の調査で精査した土坑のうち、トイレ状土坑のほか、文字資料などの特徴的な遺物が出土した遺構など特徴的な遺構について記す。

50次以前の調査で調査された土坑については、調査報告がなされており（岩手埋文1995）、ここでは文字資料などの特徴的な遺物が出土した遺構を対象に概要のみを記す。

表15　12世紀代の土坑（想定のものを含む。）

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
21SK13	89－104	108・96・66		○	12世紀
21SK16	88－103	95・82・127		○	トイレ状か
21SK17	89－103	110・108・88		○	12世紀
21SK18	89－103	75・72・116	21SK19→21SK18。	○	12世紀
21SK19	89－103	92・92・56	21SK19→21SK18。	○	12世紀
21SK20	89－103	106・104・65		○	12世紀
21SK25	88－101	135・119・55		○	
21SK26	88－101	68・60・42		○	
21SK33	89－101	112・101・124		○	
21SK35	93－104	98・91・38		○	
21SK36	93－104	60・58・48		○	
21SK37	92－103	125・116・68		○	
21SK38	92－103	112・94・74	21SK38→21SD7（21SC1）。	○	
21SK43	93－101	131・120・100		○	トイレ状
21SK46	85－100	134・94・159	21SK47→21SK46。	○	トイレ状
21SK47	85－100	152・120・156	21SK47→21SK46。	○	
21SK48	85－100	112・95・142		○	トイレ状
21SK49	86－100	150・117・134		○	トイレ状
21SK50	86－100	82・74・39		○	
21SK52	87－101	80・68・72		○	長軸を訂正
21SK53	85－99	112・106・156		○	トイレ状
21SK54	85－99	90・88・166		○	トイレ状
21SK55	86－99	138・132・155		○	
21SK56	86－99	103・98・144		○	
21SK63	90－98	84・76・72		○	
21SK74	83－97	96・94・62		○	
21SK75	83－97	85・84・35		○	
21SK76	84－97	76・47・70		○	トイレ状
21SK78	83－96	96・82・86		○	
21SK80	83－97	124・122・88		○	トイレ状
21SK81	84－96	88・87・112		○	トイレ状
21SK82	85－97	224・(80)・87		○	
21SK84	85－96	106・93・126		○	
21SK88	83－94	82・78・32		○	
21SK91	84－95	73・71・54		○	

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
21SK92	84－95	85・84・38		○	
21SK93	84－96	70・63・56		○	
21SK94	85－95	79・74・33		○	
21SK95	85－95	108・104・108		○	トイレ状
21SK96	85－95	104・99・150		○	トイレ状
21SK97	85－94	80・70・22		○	
21SK99	86－95	(68)・－・40		○	
21SK101	86－93	80・73・8		○	
21SK104	85－93	74・65・96		○	トイレ状
21SK105	85－92	131・130・50		○	
21SK106	86－92	93・80・90		○	
21SK107	86－92	58・48・54		○	
21SK108	79－91	223・155・141		○	
21SK109	93－105	94・84・48		○	
21SK111	93－105	99・90・72		○	
21SK115	90－105	104・104・76	21SK115→21SD4（21SC1）。	○	
21SK123	91－104	96・78・16		○	
21SK124	91－104	78・77・34		○	
21SK125	90－103	85・78・56		○	
21SK126	92－101	174・172・66	21SK126→21SD7（21SC1）。	○	
21SK127	92－100	62・60・70		○	
23SK9	90－95	89・89・65		○	
23SK10	89－96	189・139・76		○	
23SK11	89－95	120・117・89		○	
23SK12	88－95	74・73・22		○	
23SK13	89－95	221・210・93		○	
23SK29	93－94	86・77・79		○	
23SK31	93－93	137・124・27		○	縄文か
23SK32	94－93	71・46・26		○	縄文か
23SK33	94－93	(90)・90・24	23SK33→23SK34。	○	縄文か
23SK34	94－93	(80)・(80)・50	23SK33→23SK34。	○	縄文か
23SK35	93－93	－・－・30		○	縄文か
23SK45	86－85	88・87・38		○	23SA4
23SK46	86－85	81・76・66		○	23SA4
23SK48	86－85	107・88・23		○	
23SK49	87－85	187・120・90		○	23SA3
23SK50	89－85	98・92・65		○	
23SK51	89－85	200・156・28		○	
23SK52	89－85	108・102・72		○	
23SK55	89－84	132・114・57		○	トイレ状
23SK56	90－84	194・132・100	23SB5と空間重複。	○	古代か
23SK59	85－83	89・80・18		○	
23SK60	85－83	110・110・42	23SK60→23SA1。	○	
23SK61	87－83	193・193・24	23SK61→23SA1。	○	
23SK63	89－83	96・89・111		○	
23SK64	90－83	90・79・66	23SB5と空間重複。	○	
23SK65	90－83	100・88・130	23SK65→23SB5。	○	
23SK66	91－83	99・86・49	23SB8→23SK66。 23SB9と空間重複。	○	
23SK68	91－82	88・75・－	23SB8と空間重複。	○	
23SK69	91－82	102・99・99		○	
23SK70	90－81	190・87・27		○	
23SK72	89－83	142・134・103		○	
23SK74	89－83	86・82・135		○	トイレ状
23SK79	87－81	94・54・39		○	
23SK80	87－80	94・81・72		○	トイレ状
23SK81	87－79	74・74・27	23SB3と空間重複。	○	トイレ状
23SK83	89－79	105・98・89	23SK83→23SA1。	○	トイレ状
23SK84	89－79	92・72・47	23SA1と空間重複。	○	
23SK87	87－79	116・106・56	23SB6と空間重複。	○	

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
23SK89	86－78	92・79・68	23SB6と空間重複。	○	
23SK96	91－82	74・72・26		○	
23SK97	83－78	114・100・88		○	
28SK4	74－69	143・142・95	28SB5と空間重複。	○	
28SK6	80－69	125・123・59		○	
28SK7	74－70	120・114・125		○	
28SK9	76－70	132・118・80		○	
28SK11	78－70	247・169・60	28SB3→28SK11。	○	
28SK13	78－71	202・185・115	28SB3→28SK13→28SE9。	○	
28SK14	83－71	122・114・155	28SB4→28SK14。	○	
28SK15	79－72	132・113・134	28SB3と空間重複。	○	
28SK16	82－73	130・123・153		○	
28SK17	82－73	136・128・158		○	
28SK18	84－75	112・83・164		○	
28SK21	73－77	124・96・80		○	
28SK22	73－77	－	28SK22→28SE18。	○	
28SK23	73－78	150・136・73		○	トイレ状
28SK24	73－79	102・94・60		○	
28SK25	74－78	118・116・138		○	
28SK29	71－78	118・116・132		○	
28SK33	79－71	99・97・119	28SB3→28SK33→28SK34。	○	
28SK34	80－71	123・112・174	28SK33→28SK34。	○	
31SK2	77－88	101・95・32		○	
31SK6	78－86	83・79・40		○	
31SK7	76－86	105・85・10		○	
31SK8	76－86	104・90・78		○	
31SK9	75－86	176・126・52		○	
31SK10	77－84	80・59・17		○	
31SK12	76－84	88・45・32		○	
31SK18	73－85	108・94・140		○	
31SK23	73－84	124・119・68		○	
31SK25	72－84	64・57・14		○	
31SK27	79－83	113・92・166		○	トイレ状
31SK28	70－83	138・125・121		○	
31SK33	70－82	150・117・160		○	
31SK36	71－79	124・99・35		○	
31SK38	71－79	125・109・25		○	
31SK39	70－77	140・138・185		○	
31SK40	70－78	118・110・135		○	トイレ状
31SK41	69－77	77・74・152		○	トイレ状
31SK42	69－77	99・92・131		○	
31SK43	68－78	193・172・103		○	
31SK44	67－78	121・100・119		○	
31SK46	66－78	110・110・148		○	トイレ状
31SK47	67－77	85・78・94		○	
31SK54	68－75	100・95・62		○	
31SK55	64－75	68・67・32		○	
31SK57	70－74	88・74・24	31SB3と空間重複。	○	
31SK58	70－73	180・140・123		○	トイレ状
31SK59	69－74	119・93・33	31SB3と空間重複。	○	
31SK60	67－74	98・85・106		○	
31SK62	66－74	85・85・45		○	
31SK64	63－74	72・71・21		○	
31SK70	68－71	170・159・132		○	トイレ状
31SK71	71－71	104・93・25		○	
31SK72	68－70	122・120・62		○	
31SK76	71－68	200・197・119	31SB6→31SK76。	○	
31SK79	70－67	148・136・140		○	
31SK80	70－66	109・108・158		○	トイレ状
31SK81	75－65	89・72・43	31SB7と空間重複。	○	

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
31SK82	75－65	74・69・53		○	
31SK83	74－65	84・82・44	36SA3、55SB23と空間重複。	○	
31SK84	74－65	72・66・33	36SA3、55SB23と空間重複。	○	
31SK85	74－65	96・90・90	36SA4と空間重複。	○	
31SK87	73－64	116・93・124		○	トイレ状
31SK89	68－77	97・61・68		○	
36SK8	69－63	132・130・166		○	トイレ状
36SK9	74－63	128・128・114		○	トイレ状
36SK23	72－62	84・83・18	52SB14と空間重複。	○	
36SK25	61－59	88・82・81		○	
36SK29	58－53	116・88・15		○	
41SK2	64－70	134・44・16		○	
41SK3	66－70	118・98・52		○	
41SK4	65－69	66・66・18		○	
41SK5	66－69	120・92・74		○	
41SK6	65－69	118・95・10		○	
41SK7	58－63	119・101・128		○	トイレ状
50SK1	91－68	136・110・72		○	
50SK2	91－63	250・230・122		○	
50SK3	91－67	224・196・36		○	
50SE1	86－62	220・204・6		○	
52SK1	68－60	80・55・50		○	
52SK9	65－61	130・95・80		○	トイレ状
52SK10	69－60	100・100・195		○	トイレ状
52SK11	71－60	120・120・185		○	トイレ状
52SK12	71－62	75・50・55		○	
52SK13	73－63	110・85・115	52SB14→52SK13。	○	トイレ状
52SK14	70－63	130・105・115	52SB18→52SK14。	○	トイレ状
52SK21	74－62	105・100・130	52SB25→52SK21。	○	トイレ状、36SK18から変更
52SK22	71－64	85・75・85	52SA1→52SK22。	○	トイレ状、36P1から変更
52SK24	73－61	140・135・190		○	トイレ状
52SK25	71－62	100・80・85		○	トイレ状
52SK28	71－65	220・180・25	52SB21と空間重複。	○	36SK5から変更
52SK29	73－66	70・70・85		○	
52SK30	71－66	90・90・70	52SB21と空間重複。	○	
52SK31	67－60	60・50・15		○	
52SK32	67－60	80・70・15		○	
52SK33	67－60	85・60・70		○	41SK12から変更。
52SK35	68－60	65・55・10		○	
52SK36	67－60	55・55・55		○	
52SK37	71－58	115・105・155	52SB25と空間重複。	○	トイレ状。
52SK38	72－60	55・55・55		○	
55SK11	76－61	80・75・55		○	
55SK15	75－62	120・75・70	52SB25と空間重複。	○	
55SK16	76－62	70・60・100		○	
55SK17	75－63	90・80・20		○	36SK10から変更。
55SK21	79－63	120・110・90		○	
55SK22	78－62	85・60・90		○	
55SK23	80－64	125・110・165		○	
55SK25	80－63	80・65・50		○	
55SK29	80－63	165・160・220		○	
55SK33	76－52	115・90・155	55SB6と空間重複。	○	
55SK34	74－53	105・95・105	55SB6と空間重複。	○	トイレ状
55SK35	78－55	180・175・155		○	
55SK36	77－54	100・95・45		○	
55SK37	77－52	90・75・45	55SB6と空間重複。	○	
55SK39	77－55	140・125・55		○	
55SK40	79－53	130・115・－	55SB5と空間重複。		トイレ状
55SK41	79－52	135・130・150		○	トイレ状
55SK42	79－53	85・80・25	55SB5と空間重複。	○	

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
55SK45	80－53	145・135・95		○	
55SK46	79－54	95・85・30		○	
55SK47	80－55	90・80・70		○	
55SK49	81－54	115・105・75	55SB12と空間重複。	○	
55SK50	80－55	110・100・75	55SK50→55SK51。	○	
55SK51	80－55	100・95・350	55SK50→55SK51。	○	トイレ状
55SK53	82－54	105・100・150		○	トイレ状
55SK54	81－55	95・90・190	55SB12と空間重複。	○	トイレ状
55SK55	81－54	90・90・70		○	
55SK56	83－56	110・80・80	55SB12と空間重複。	○	
55SK57	81－56	95・85・95		○	
55SK58	81－56	120・110・55		○	
55SK59	80－66	85・70・85		○	
55SK60	82－59	80・70・60	55SB8→55SK60。	○	概報の本文記載を修正
55SK62	79－56	80・75・30		○	
55SK63	79－54	70・65・30	55SB17→55SK63。	○	
55SK64	81－60	100・90・40	55柱列1→55SK64。	○	概報の本文記載を修正
56SK1	61－51	130・110・－		×	36SK36から変更
56SK3	60－51	70・40・－		×	
56SK6	60－53	90・－・－		×	36P5から変更
56SK12	60－54	84・－・－		×	
56SK15	59－53			×	36SK30から変更
56SK19	62－51	145・140・－		×	36SK35から変更
56SK24	60－54	68・－・－		×	
56SK25	62－49	90・65・5		○	
56SK26	63－49	100・85・85		○	トイレ状
56SK27	63－48	95・95・80		○	トイレ状
56SK28	63－49	80・80・210		○	トイレ状
56SK29	63－48	70・65・45		○	トイレ状
56SK30	62－49	50・50・10		○	
56SK31	63－50	75・65・90		○	トイレ状
56SK32	63－49	80・60・15		○	トイレ状
56SK33	64－50	100・100・380		○	トイレ状
56SK34	64－50	95・90・175		○	トイレ状
56SK35	64－51	90・70・－		×	トイレ状
56SK36	65－50	70・60・－		×	トイレ状
56SK37	65－50	65・65・－		×	トイレ状
56SK38	66－50	90・90・－		×	トイレ状
56SK39	66－50	90・80・－		×	トイレ状
56SK40	67－49	90・82・12		○	トイレ状
56SK41	67－51	90・80・－		×	トイレ状
56SK42	68－50	80・80・－		×	トイレ状
56SK43	67－51	65・55・20		○	
56SK51	74－49	140・130・－		×	トイレ状
56SK52	72－50	118・112・17		○	トイレ状
56SK53	73－50	140・105・120		○	トイレ状
56SK54	73－51	115・90・－		×	トイレ状
56SK55	74－51	155・155・－		×	トイレ状
56SK56	74－50	105・105・－		×	トイレ状
56SK57	74－50	65・65・－		×	トイレ状
56SK58	72－52	85・80・－		×	トイレ状
56SK59	73－53	75・70・－		×	トイレ状
56SK60	71－51	100・74・－		×	トイレ状
56SK62	72－54	115・85・－		×	トイレ状
56SK63	72－54	110・80・－		×	トイレ状
56SK64	72－54	85・70・－		×	トイレ状
56SK65	72－54	90・75・－		×	トイレ状
56SK66	71－52	100・90・－		×	トイレ状
56SK67	71－52	100・85・170		○	トイレ状
56SK68	71－52	105・100・－		×	トイレ状

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
56SK69	71－54	72・(50)・－		×	トイレ状
56SK70	70－51	105・70・－		×	トイレ状
56SK72	62－51	90・85・－		×	
56SK77	59－50	100・95・－		×	
56SK84	59－64	182・146・28		○	
56SK85	58—64	110・60・－		×	
56SK87	57－58	150・150・－		×	
56SK89	59－65	(90)・84・－		×	
56SK90	59－68	110・(38)・－		×	
56SK91	58－61	76・(42)・－		×	
56SK93	58－49	95・90・－	56SB4と空間重複。	×	
56SK94	58－49	70・60・－	56SB4と空間重複。	×	
56SK95	58－49	62・58・－	56SB4と空間重複。	×	
56SK96	58－49	135・95・－	56SB4と空間重複。	×	
56SK97	57－49	200・(34)・－		×	
56SK99	57－51	95・90・35	56SB3と空間重複。	○	
56SK101	63－54	(90)・68・－		×	
59SK5	80－52	120・120・80		○	
64SK1	68－77	110・100・－		×	
64SK2	72－82	110・110・28		○	
65SK2	64－69	62・－・94		○	
65SK5	63－68	118・48・－		×	
65SK6	63－69	90・70・28		○	
65SK7	67－71	85・60・－		×	
65SK8	64－69	120・100・80		○	
65SK11	70－68	200・84・40		○	
65SK12	70－67	120・(62)・－		×	
65SK14	69－70	90・80・50		○	
65SK18	69－70	190・150・60		○	
65SK19	69－70	120・110・46		○	
65SK21	71－73	98・60・40		○	
68SK2	92－68	116・106・－		×	
68SK3	93－68	70・59・－		×	
68SK4	94－67	106・(88)・－	50SB9と空間重複。	×	
68SK5	94－67	90・80・－	50SB9と空間重複。	×	
68SK6	94－68	84・80・－	50SB9と空間重複。	×	
68SK7	94－68	84・82・－	50SB9と空間重複。	×	
68SK8	94－69	116・40・－		×	
68SK9	95－68	(86)・80・－	50SB9と空間重複。	×	
68SK10	95－69	114・90・－		×	
68SK11	95－69	112・(90)・－		×	
68SK12	95－71	146・128・－		×	
68SK13	96－71	(60)・(30)・－		×	
68SK14	94－70	84・80・－		×	
68SK15	93－70	(226)・194・－		×	
68SK16	92－70	104・100・－		×	
68SK17	92－70	116・(76)・－		×	
68SK18	91－76	180・(112)・－		×	
68SK19	92－76	154・128・－		×	
68SK20	93－75	68・42・－		×	
68SK21	91－75	58・36・－	48SB1と空間重複。	×	
68SK22	90－76	85・52・－		×	
68SK23	90－76	70・60・－		×	
68SK24	90－74	130・98・－	48SB1と空間重複。	×	
68SK25	89－75	174・(110)・－	48SB1と空間重複。	×	
68SK26	89－75	78・36・－		×	
68SK27	90－73	(458)・286・－		×	
68SK28	89－74	220・(172)・－	48SB1と空間重複。	×	
68SK29	90－74	80・25・－	48SB1と空間重複。	×	
68SK30	89－73	(154)・86・－		×	

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
68SK31	90－73	120・70・－		×	
68SK32	90－73	122・70・－		×	
68SK33	89－72	78・48・－		×	
68SK34	91－69	154・(44)・－		×	
68SK35	91－68	340・312・180	50SA10→68SK35。	○	
68SK36	91－668	76・42・－		×	
68SK37	91－68	(100)・(70)・－		×	
68SK38	94－72	98・56・－		×	
70SK1	64－45	78・78・－		×	
70SK2	63－45	98・84・－		×	
70SK3	63－45	35・27・－		×	
70SK5	62－46	250・80・－		×	トイレ状
70SK6	62－46	57・39・－		×	
70SK7	64－45	79・75・－		×	
70SK8	63－47	49・49・－		×	
70SK9	62－47	55・54・－		×	
70SK10	60－47	57・56・－		×	
70SK11	60－46	187・114・－		×	
70SK12	59－48	199・113・－		×	
70SK13	60－49	112・52・－		×	
70SK14	70－48	79・70・－		×	
70SK15	70－48	89・79・－		×	トイレ状
70SK16	72－48	61・55・－		×	トイレ状
70SK17	71－50	88・83・－		×	トイレ状
70SK18	68－48	85・57・－		×	トイレ状
70SK19	71－48	75・74・－		×	トイレ状
70SK20	68－48	65・62・54		○	トイレ状
70SK21	68－49	79・68・－		×	トイレ状
70SK22	67－47	94・82・290		○	トイレ状
70SK23	67－47	71・68・－		×	トイレ状
70SK24	67－47	86・82・63		○	トイレ状
70SK25	68－46	91・91・－		×	トイレ状
70SK26	67－46	71・72・－		×	トイレ状
70SK27	68－47	92・80・－		×	トイレ状
70SK28	67－49	82・74・－		×	トイレ状
70SK29	68－49	66・53・－		×	トイレ状
70SK30	65－48	151・145・－		×	トイレ状
70SK31	64－43	65・58・－		×	
70SK32	62－47	61・46・－		×	
70SK33	62－48	50・46・－		×	
70SK34	61－49	82・67・－		×	
70SK35	60－48	107・59・－		×	
72SK1	57－42	181・123・－		×	
72SK2	61－43	93・87・－		×	
72SK3	58－44	94・96・88		○	
72SK4	62－-43	260・205・－		×	
72SK5	58－44	99・62・－		×	
72SK6	59－41	109・78・29	72SA2→72SK6。 72SB1と空間重複。	○	
72P47	59－42	134·102·－	72SA2→72P47	○	
73SK1	52－44	215・210・82		○	
73SK2	52－46	180・156・55		○	
73SK3	51－45	80・76・－		×	
73SK4	5045	58・(30)・－		×	
73SK6	50－4	210・145・65		○	
74SK1	52－57	110・(74)・－		×	
76SK1	82－103	41・36・－		×	
76SK2	83－104	40・36・－		×	
76SK3	83－104	34・31・－		×	
77SK2	86－103	90・80・85		○	71頁に記載。

遺構名	位置	長・短軸・深さ	遺構重複関係	精査	備考
77SK3	85－103	110・110・110		○	71頁に記載。
78SK1				○	
11次SK1	60－53	－		－	
11次SK4・5	57－52	－		－	
11次SK7	59－53	－		－	
13次SK1	67－82	－		－	
13次SK3	68－82	－		－	
13次SK4	68－82	－		－	
13次SK6	68－82	－		－	

※遺構名太字は本文中で記述。

表16　12世紀以降の土坑（欠番を含む）

遺構名	位置	備考
21SK1	90－108	21SX35（67頁）
21SK2	90－108	
21SK3	91－108	21SX35（67頁）
21SK4	91－108	
21SK5	90－107	21SX35（67頁）
21SK6	90－107	21SX35（67頁）
21SK7	91－107	21SX35（67頁）
21SK8	91－105	21SX35（67頁）
21SK9	91－1005	
21SK10	91－105	
21SK11	91－1006	21SX35（67頁）
21SK12	91－106	
21SK14	88－103	井戸に変更。
21SK15	93－104	近世か。
21SK21	90－104	井戸に変更。
21SK22	90－103	
21SK23	97－101	井戸に変更。
21SK24	89－101	
21SK27	88－101	
21SK28	89－101	
21SK29	88－101	
21SK30	89－101	
21SK31	90－101	
21SK32	89－101	
21SK34	93－104	21SX37（71頁）
21SK39	93－104	
21SK40	93－104	21SX37（71頁）
21SK41	93－104	
21SK42	(92－102)	欠番
21SK44	93－100	
21SK45	92－100	
21SK51	86－100	HSB22
21SK57	86－99	
21SK58	86－100	
21SK59	89－99	近世か、
21SK60	89－99	
21SK61	90－100	近世か。
21SK62	90－99	近世か。
21SK64	90－100	
21SK65	91－98	時期不明。
21SK66	91－98	時期不明。
21SK67	90－98	近世か。
21SK68	89－99	近世か。
21SK69	90－98	近世か。
21SK70	88－98	

遺構名	位置	備考
21SK71	85－98	
21SK72		欠番。
21SK73	85－98	
21SK77	83－97	
21SK79	83－96	
21SK83	86－97	
21SK85	86－96	
21SK86	83－95	
21SK87	83－95	
21SK89	85－95	
21SK90	84－95	
21SK98	87－95	
21SK100	87－94	
21SK102	86－93	
21SK103	87－94	
21SK110	93－105	
21SK112	92－105	
21SK113	92－105	21SX36（71頁）
21SK114	92－105	21SX36（71頁）
21SK116	93－105	21SX37（71頁）
21SK117	91－105	21SX36（71頁）
21SK118	91－105	21SX36（71頁）
21SK119	91－105	21SX36（71頁）
21SK120	91－105	21SX36（71頁）
21SK121	90－105	
21SK122	93－105	21SX37（71頁）
23SK1	94－99	
23SK2	94－98	
23SK3	91－98	
23SK4	93－97	
23SK5	93－97	
23SK6	94－97	
23SK7	93－97	
23SK8	90－96	
23SK14	88－95	
23SK15	88－95	
23SK16	96－95	23SX12（67頁）
23SK17	96－95	23SX12（67頁）
23SK18	96－95	23SX12（67頁）
23SK19	96－95	23SX12（67頁）
23SK20	96－94	23SX12（67頁）
23SK21	96－95	23SX12（67頁）
23SK22	95－94	23SX12（67頁）
23SK23	95－94	23SX12（67頁）
23SK24	95－94	

遺構名	位置	備考
23SK25	95－94	23SX12（67頁）
23SK26	95－94	23SX12（67頁）
23SK27	95－94	23SX12（67頁）
23SK28	93－94	
23SK30	93－94	
23SK36	93－93	
23SK37	91－93	
23SK38	92－91	
23SK39	91－91	
23SK40	89－91	
23SK41	91－90	
23SK42	91－90	
23SK43	93－91	
23SK44	94－90	
23SK47	(86－85)	欠番
23SK53	89－84	
23SK54	89－84	
23SK57	82－84	
23SK58	84－84	
23SK62	88－83	
23SK67	91－83	
23SK71	90－82	
23SK73	89－83	
23SK75	83－81	
23SK76	85－81	
23SK77	86－82	
23SK78	86－81	
23SK82	89－81	
23SK85	88－79	
23SK86	87－79	
23SK88	86－78	
23SK90	87－78	
23SK91	87－78	
23SK92		欠番
23SK93	86－80	
23SK94	85－80	
23SK95	84－81	
28SK1		欠番
28SK2		欠番
28SK3	73－69	
28SK5		欠番
28SK8	74－70	
28SK10		欠番
28SK12	81－70	
28SK19		位置不明

遺構名	位置	備考
28SK20		位置不明
28SK26		欠番
28SK27		欠番
28SK28		欠番
28SK30	80－70	
28SK31	79－67	
28SK32	85－74	
28SK35		位置不明。
28SK36		位置不明
28SK37		欠番
28SK38	74－68	
28SK39	73－67	
31SK1	75－91	
31SK3	75－88	
31SK4	75－87	
31SK5	78－86	
31SK11	77－84	
31SK13		欠番
31SK14	76－84	
31SK15	76－84	
31SK16	76－85	
31SK17	74－84	
31SK19	74－85	
31SK20	73－85	
31SK21	73－85	
31SK22	73－85	
31SK24	73－84	
31SK26	69－84	
31SK29	72－78	
31SK30	71－83	
31SK31	71－82	
31SK32	70－82	
31SK34	70－81	
31SK35	70－81	
31SK37		欠番
31SK45	68－78	
31SK48	68－77	
31SK49	68－77	
31SK50	67－77	
31SK51	67－77	
31SK52		欠番
31SK53	70－75	
31SK56	63－75	
31SK61	67－74	
31SK63	64－75	
31SK64	63－74	
31SK66	67－74	
31SK67	64－74	
31SK68	65－73	
31SK69	66－72	
31SK73	72－69	
31SK74	71－69	
31SK75	71－68	
31SK77	75－66	
31SK78	72－66	
31SK86	74－65	55P2080に。
31SK88		欠番
36SK1	69－67	
36SK2	69－67	

遺構名	位置	備考
36SK3	70－65	
36SK4	70－64	
36SK5	71－65	52SK28に。
36SK6	72－65	
36SK7	73－63	
36SK10	75－63	55SK17に。
36SK11	75－63	55SK4に。
36SK12	76－64	
36SK13	68－62	
36SK13	68－62	
36SK14	70－62	
36SK15		欠番
36SK16	72－62	
36SK17	73－62	55P746に。
36SK18	74－62	52SK21に
36SK19	75－63	55SK7に。
36SK20	71－62	52P270に。
36SK21	70－62	52SK8に。
36SK22	71－62	
36SK24	74－61	52SK16に。
36SK26	61－58	
36SK27	65－58	
36SK28	68－58	52SK39に。
36SK30	60－64	56SK15に。
36SK31	62－53	
36SK32	62－53	56SK22に。
36SK33	61－53	56SK11に。
36SK34	63－52	
36SK35	62－52	56SK9に。
36SK36	61－51	56SK1に。
36SK37	56－49	
41SK1	64－71	
41SK8	57－57	
41SK9	56－57	
41SK10	57－58	
41SK11	59－56	
41SK12	67－60	52SK33に。
41SK13	66－62	
41SK14	66－62	
41SK15	67－62	
41SK16	67－62	
41SK17	68－62	
41SK18	67－64	欠番
41SK19	63－64	
41SK20	67－64	57P115に。
41SK21	67－66	
41SK22	67－66	
41SK23		欠番
41SK24	66－66	
41SK25	63－67	
41SK26	64－67	
41SK27	65－68	65SK16に。
41SK28	63－68	
41SK29	63－68	
41SK30	65－71	
41SK31		欠番
41SK32		欠番
41SK33		欠番
41SK34	59－58	
41SK35		欠番

遺構名	位置	備考
41SK36	54－57	41SX2（101頁）
41SK37	55－57	41SX2（101頁）
42SK1	100－75	
42SK2	82－65	
47SK1	97－83	
47SK2	97－84	
47SK3	97－84	
47SK4	98－83	
47SK5	95－81	
47SK6	93－81	
47SK7	93－80	
47SK8	93－80	
47SK9	95－82	
47SK10	96－81	
47SK11		欠番
47SK12	94－80	
47SK13	95－81	
47SK14	97－81	
49SK1	90－77	
49SK2	89－77	
49SK3	89－77	
49SK8	89－77	
49SK14	90－77	
49SK15	89－77	
49SK16	85－71	
49SK17	86－71	
49SK20	86－71	
49SK21	86－71	
49SK22	86－70	
49SK23	85－72	
52SK2	91－63	
52SK3	91－67	
52SK4	65－60	
52SK5	63－59	
52SK6	65－61	
52SK7	66－60	
52SK8	70－62	（36SK21）
52SK15	71－64	
52SK16	74－61	
52SK17	71－64	
52SK18	73－62	
52SK19	73－61	
52SK20	73－62	
52SK23	71－65	52SB23
52SK26	57－56	
52SK27	58－56	
52SK34	70－59	
52SK39	67－58	36SK28から
55SK1	80－66	
55SK2	73－64	
55SK3	73－63	
55SK4	75－63	36SK11から。
55SK5	76－64	
55SK6	75－61	
55SK7	75－62	36SK19
55SK8	75－61	
55SK9	76－61	
55SK10	75－61	
55SK12	73－63	
55SK13	76－63	

遺構名	位置	備考
55SK14	76－63	
55SK18	77－61	
55SK19	76－60	
55SK20	80－63	
55SK24	80－63	42SE2から。
55SK26	81－63	
55SK27	78－61	
55SK28	81－64	
55SK30		欠番
55SK31	74－51	
55SK32	75－52	
55SK38	74－54	井戸に変更。
55SK43	80－54	井戸に変更
55SK44	80－53	井戸に変更。
55SK48	80－53	
55SK52	81－54	
55SK61		欠番
56SK2	61－51	
56SK4	60－52	
56SK5	61－51	
56SK7	62－51	近世墓
56SK8	63－51	近世墓
56SK9	62－52	近世墓
56SK10	62－52	近世墓
56SK11	61－53	36SK33から。
56SK13	62－51	近世墓
56SK14	63－51	近世墓
56SK16	61－53	
56SK17	60－54	
56SK18	61－52	

遺構名	位置	備考
56SK20	63－53	
56SK21	63－51	
56SK22	62－53	36SK32から。
56SK23	60－54	
56SK44	61－53	
56SK45	62－53	
56SK46	63－53	
56SK47	63－52	
56SK48	63－53	
56SK49	63－52	
56SK50	63－52	
56SK61		欠番
56SK71	67－54	
56SK73	62－51	
56SK74	62－52	
56SK75	63－53	
56SK76	63－54	
56SK78	61－50	
56SK79	57－52	
56SK80	57－50	井戸に変更。
56SK81	59－54	
56SK82	59－54	
56SK83	63－59	
56SK86	58－58	
56SK88		欠番
56SK92	63－53	
56SK98		欠番
56SK100	63－52	
56SK102	61－53	
56SK103	61－51	

遺構名	位置	備考
57SK1		欠番
57SK2		欠番
57SK3	86－73	49P33
57SK4	86－71	49SK22
57SK5	86－72	49P84
57SK6	87－61	49SK21
57SK7		欠番
57SK8	87－74	
57SK9	88－74	
57SK10		欠番
57SK11	88－71	
59SK1	59－40	
59SK2	67－44	
59SK3		欠番
59SK4	80－68	
59SK6	82－67	
65SK1	65－70	
65SK3	64－72	
65SK4	65－68	
65SK9	64－69	
65SK10	67－71	
65SK13	63－68	
65SK15	66－68	
65SK16	65－67	
65SK17	71－74	
65SK20	73－71	
68SK1		欠番
70SK4		欠番
73SK5	49－44	

【トイレ状土坑】

52SK9　遺構　65－61に位置する、検出面での径130・95cm程の楕円形の土坑である（図版編図20、図203）。深さ80cm程で、底面は60cmほどの円形を呈する。堆積土層は、２層はウリ科の種子を含む黒色土、１層は黄橙色土のブロックを多く含む。人為的に埋められた土層で、トイレ状土坑と判断している。

遺物　遺物は出土していない。

図203　52SK9平面・断面図

52SK10　遺構　69－60に位置する、検出面での径100・100cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図26、図204）。深さ195cm程で、底面は径80cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は、６層は有機質分が多く、炭化物を多く含む。６層からはちゅう木も出土している。３～５層は炭化物を多く含み、１・２層は地山ブロックを多く含む人為的に埋められた土層である。土質から、トイレ状土坑と判断している。

遺物　多量のちゅう木のほか、国産陶器類が出土している。

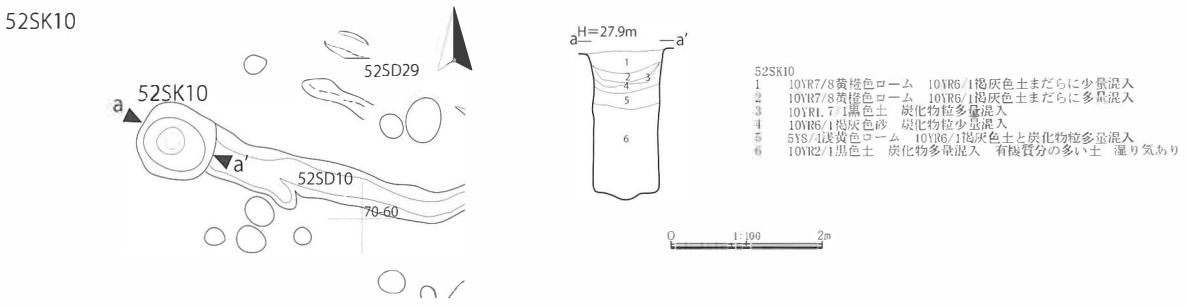


図204　52SK10平面・断面図

52SK11　遺構　71－60に位置する、検出面での径120・120cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図26、図205）。深さ185cm程で、底面は径70cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は６層の上面に種子類がまとまり、５層からはちゅう木がまとまって出土している。４・５層は炭化物を、２・３層は地山ブロックを、１層は炭化物を多く含むことから人為的に埋められた土層とみられる。有機質の多い土層は確認されていないが、ちゅう木や種子類の出土からトイレ状土坑と判断している。

遺物　かわらけ（5,755g）や国産陶器類などの土器類のほか、瓦も含む。ロクロかわらけは小皿が口径8.0～8.2cm、底径5.7～6.2cm、器高1.5～1.6cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.4～14.5cmで平均14.1cm、底径6.4～7.6cmで平均7.1cm、器高3.0～3.7cmで平均3.3cmである。手づくねかわらけは口径14.2cm、器高3.5cmである。ここでは手づくねかわらけ大皿を１点図示した。５層から多量のちゅう木が出土している。ちゅう木は刃物痕が残るものや漆塗り製品の再利用もある。また、漆製品も出土している。

52SK13　遺構　73－63に位置する、検出面での径110・85cm程の楕円形の土坑である（図版編図32、図206）。深さ115cm程で、底面は径70cm程の楕円形を呈する。堆積土層は５層からちゅう木が出土し、４層には種子を含む。土層の状況から、トイレ状土坑と判断している。52SB14→52SK13の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけ（2,110g）や国産陶器類が出土している。手づくねかわらけ大皿は口径15.4cm、器高4.0cmである。

52SK14　遺構　70－63に位置する、検出面での径130・105cm程の円形の土坑である（図版編図26、図207）。深さ115cm程で、底面は径50cm程の方形を呈する。トイレ状土坑の可能性があるが、堆積土層の特徴などからは確定できない。52SB18→52SK14の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけ（1,180g）が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径7.6cm、底径5.4cm、器高

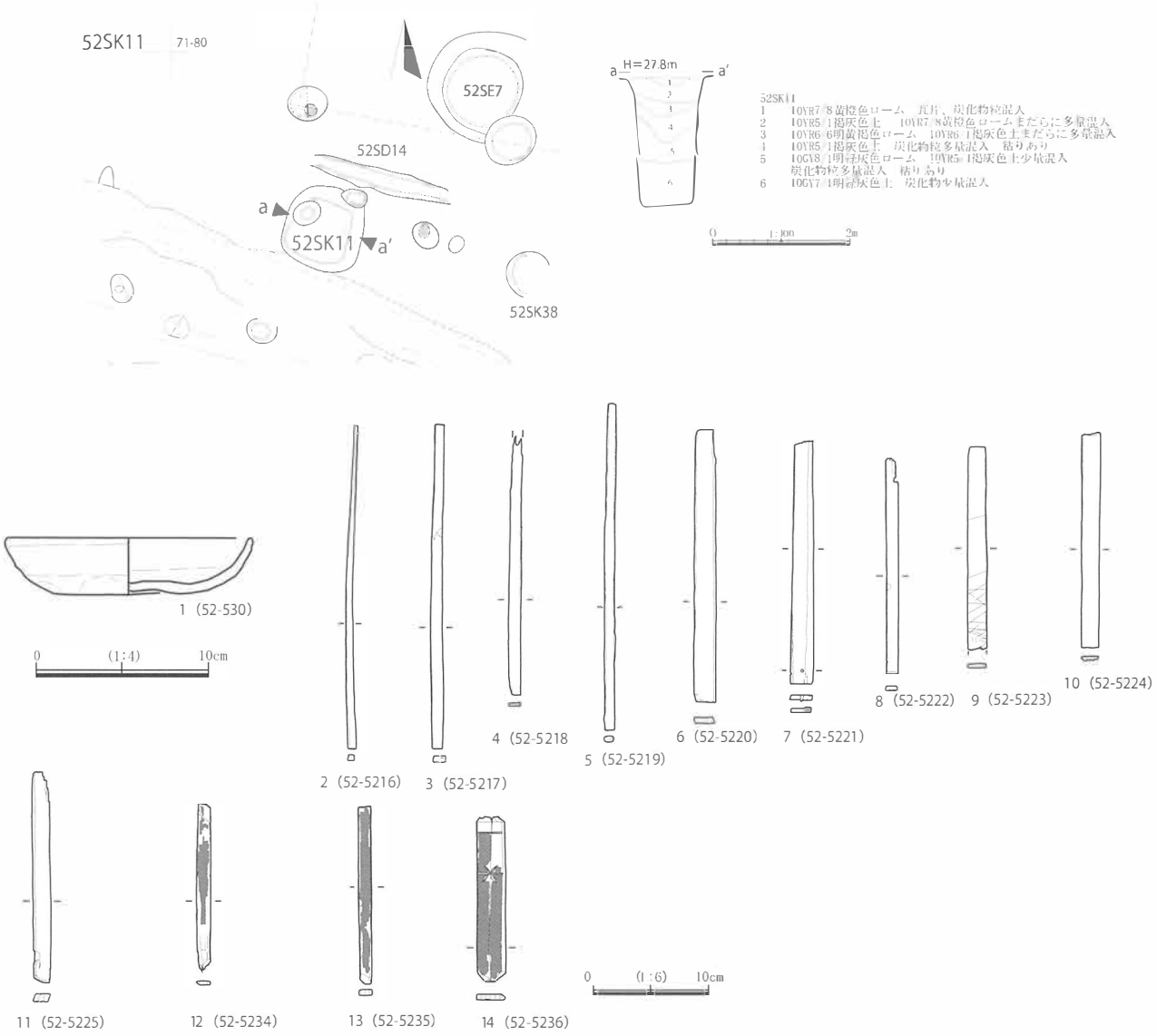


図205　52SK11詳細図

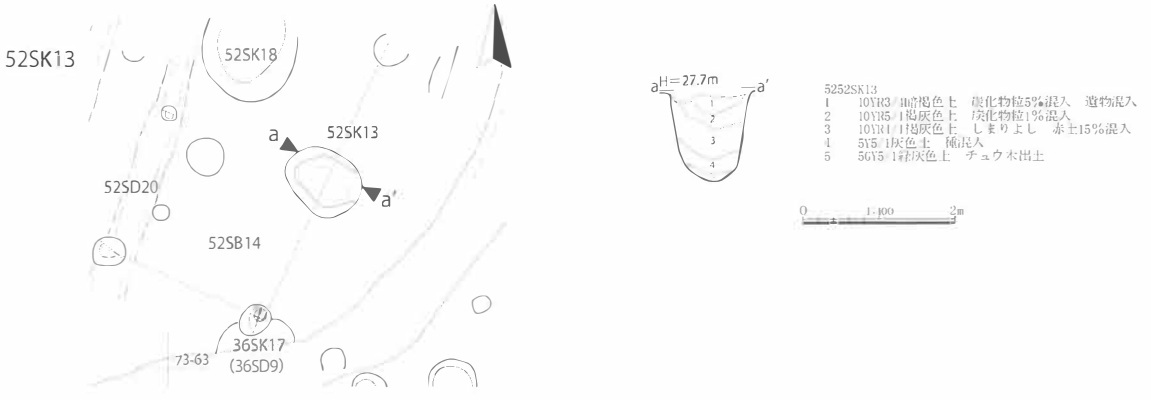


図206　52SK13平面・断面図

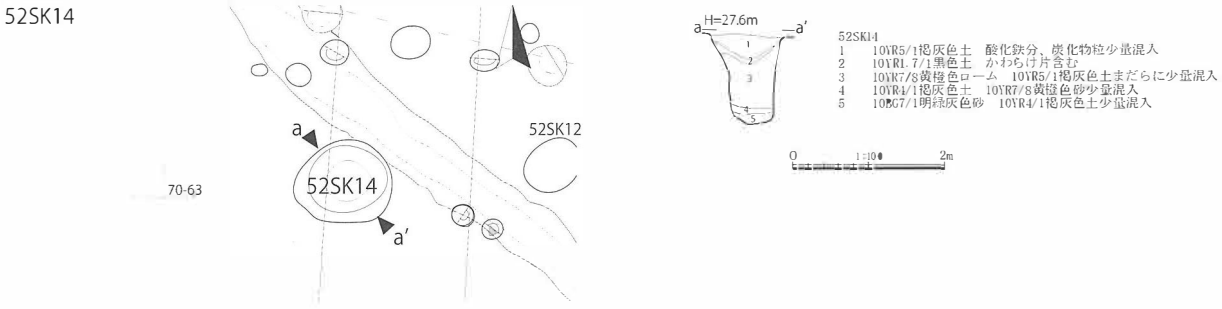


図207　52SK14平面・断面図

1.6cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.8～15.4cmで平均14.3cm、底径6.2～8.5cmで平均7.4cm、器高3.7～4.0cmで平均3.9cmである。

52SK21　遺構　74－62に位置する、検出面での径105・100cm程の方形の土坑である（図版編図31、図208）。深さ130cm程で、底面は径75cm程の方形を呈する。堆積土層は、２層は有機質の多い土質で、１層は炭化物が多く人為的に埋められた土層とみられる。土質から、トイレ状土坑と判断できる。52SB25（南北棟部分）→52SK21の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけ（10,740g）や国産陶器類、輸入陶器類の土器類が出土している。ロクロかわらけ小皿で口径6.8～9.0cm、底径4.9～6.8cm、器高1.5～1.9cmである。手づくねかわらけ小皿で口径8.6cm、器高1.9cmである。

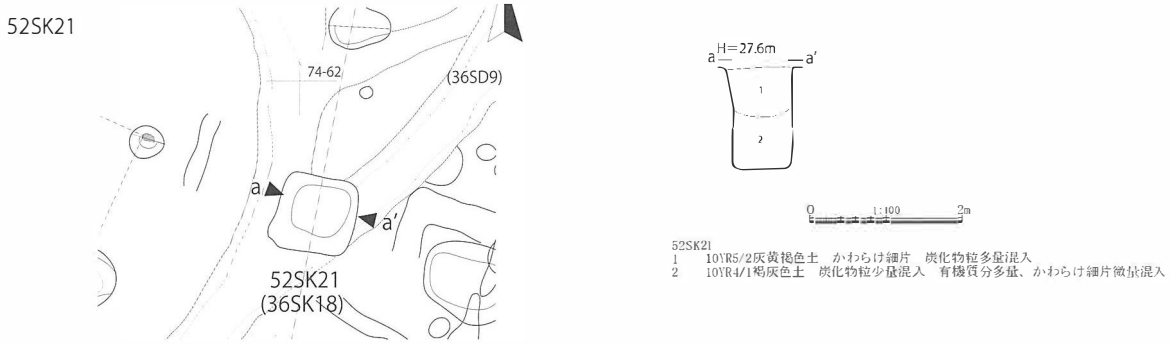


図208　52SK21平面・断面図

52SK22　遺構　71－64に位置する、検出面での径85・75cm程の円形の土坑である（図版編図26、図209）。深さ85cm程で、底面は径50cm程の楕円形を呈する。堆積土層は、３層は炭化物層で、１・２層は人為的に埋められた土層とみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑の可能性が高い。52SA1→52SK22→52SB23（近世建物）の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけ（1,490g）が出土している。ロクロかわらけ大皿で口径14.1cm、底径7.1cm、器高3.4cmである。

52SK24　遺構　73－61に位置する、検出面での径140・135cm程の楕円形の土坑である（図版編図31、図210）。深さ190cm程で、底面は径110cm程の楕円形を呈する。堆積土層は、６～８層は有機質分

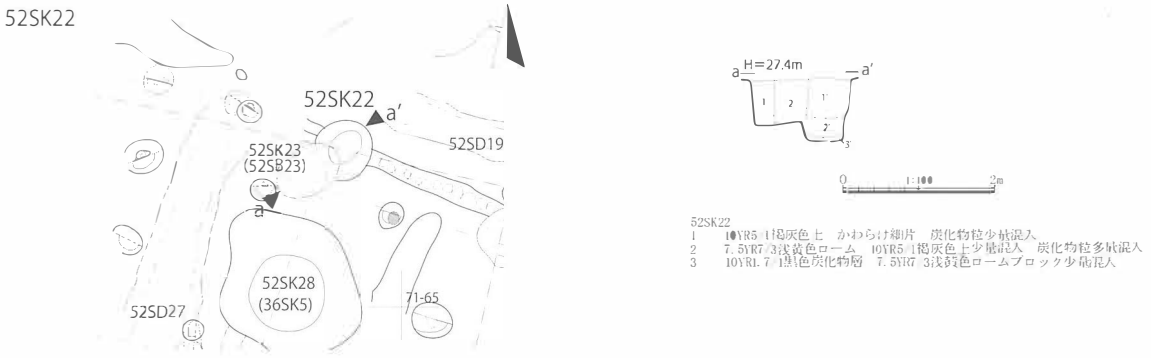
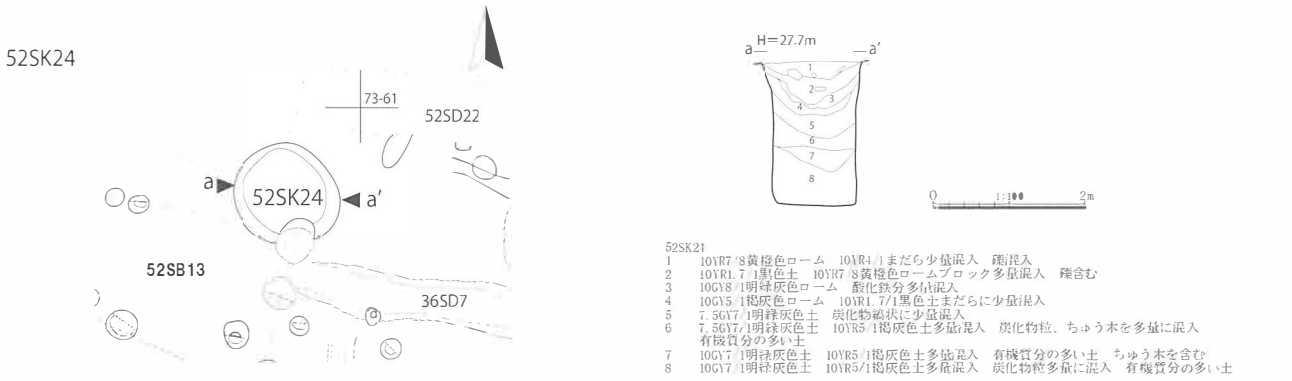


図209　52SK22平面・断面図



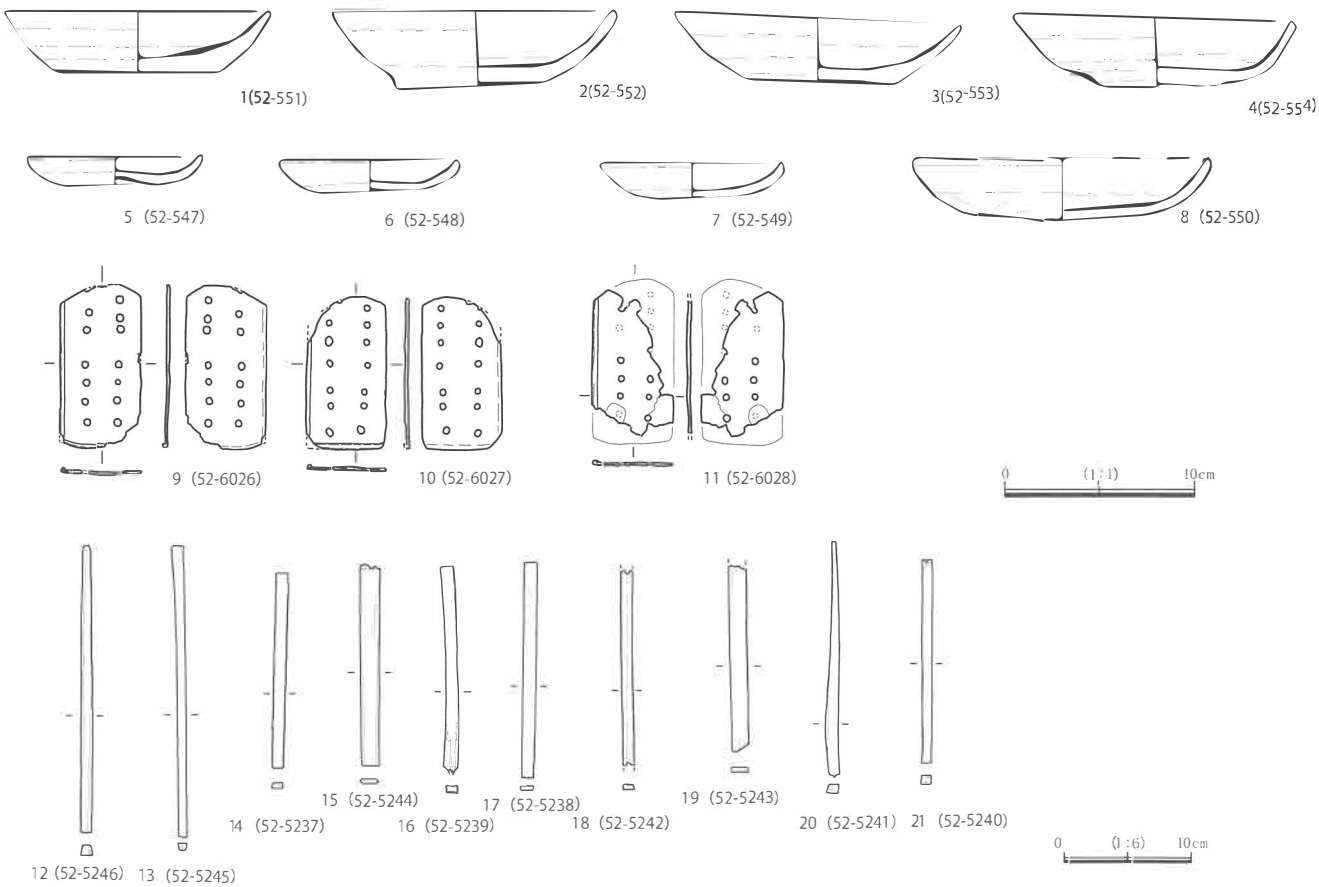


図210　52SK24詳細図

が多く、ちゅう木や炭化物を含む土層である。１～４層は人為的に埋められた土層とみられる。出土遺物や土質から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（8,095g）や国産陶器類などの土器類のほか、ちゅう木も出土している。６層から小札が３点出土している。ロクロかわらけ大皿は口径14.0～15.1cmで平均14．8cm、底径6.1～8.8cmで平均7.8cm、器高3.2～3.9cmで平均3.5cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.3～9.8cmで平均9.6cm、器高1.9～2.5cmで平均2.0cmである。手づくねかわらけ大皿は口径15.9cm、器高2.5cmである。小札は8×4cm程で厚さ0.8cm程である。７個×２列の穿孔がある。黒漆が塗布されている。

52SK25　遺構　71－62に位置する、検出面での径100・80cm程の楕円形の土坑である（図版編図26、図211）。深さ85cm程で、底面は径75cm程の楕円形を呈する。堆積土層は、４層が炭化物や種子を含む有機質分の多い土層である。２層は炭化物が多く、１層は炭化物や地山ブロックを含む。土質から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（420g）が出土している。ロクロかわらけ小皿で口径8.0cm、底径5.8cm、器高1.5cmである。

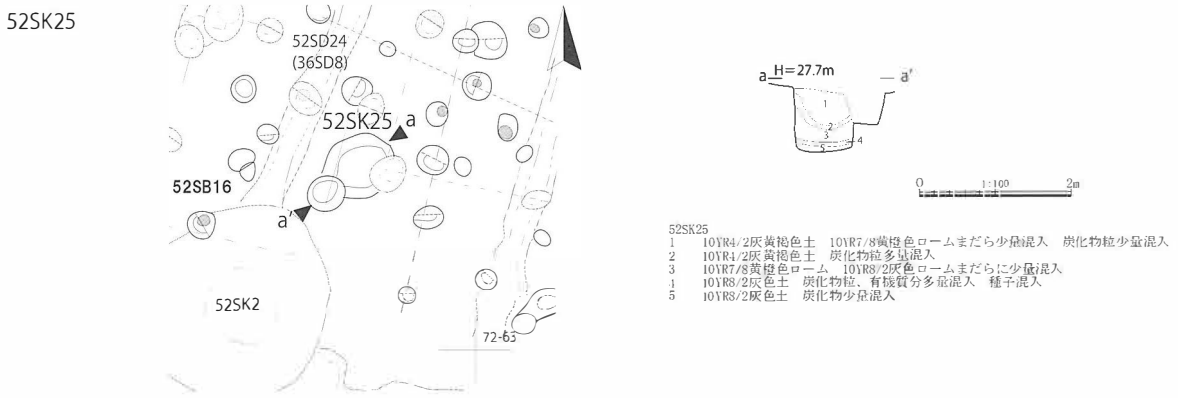


図211　52SK25平面・断面図

52SK37　遺構　71－58に位置する、検出面での径115・105cm程の円形の土坑である（図版編図25、図212）。深さ155cm程で、底面は径55cm程の円形を呈する。堆積土層は、２・３層は礫を多く含み、１層は炭化物を多く含む。いずれも人為的に埋められたとみられる。土坑の形状からはトイレ状土坑の可能性がある。52SC1道路跡を構成する52SD30と重複するが、52SD30の残存も悪く新旧は確認で

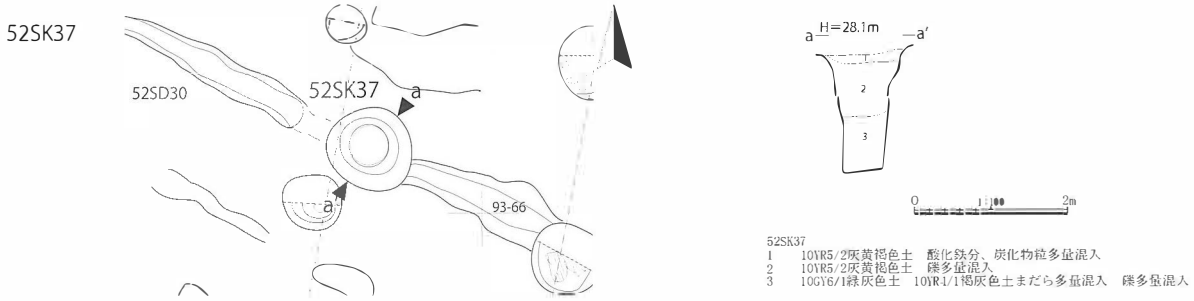


図212　52SK37平面・断面図

きていない。また、52SB25と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　かわらけ（520g）が出土している。ロクロかわらけ小皿で口径8.4～8.5cm、底径4.7～5.0cm、器高1.8～2.0cmである。

55SK34　遺構　74－53に位置する、検出面での径105・95cm程の円形の土坑である（図版編図30、図213）。深さ105cm程で、底面は径65cm程の円形を呈する。堆積土層は８層に木片や木屑を多く含む。２層は炭化物や焼けた壁土が入り、１層は土器類を含む。土層の特徴などから、トイレ状土坑の可能性がある。55SB6と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　かわらけや国産陶器類のほか、ちゅう木も出土している。

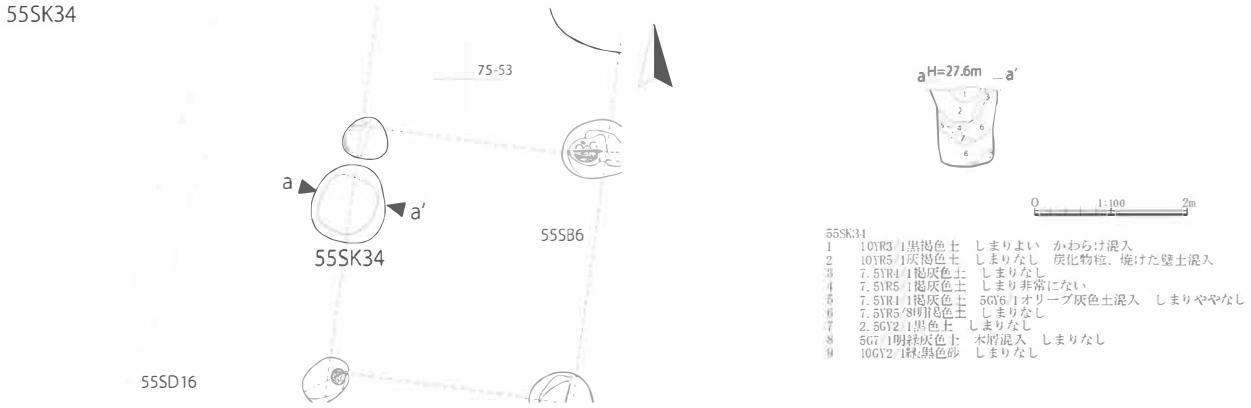


図213　55SK34平面・断面図

55SK40　遺構　79－53に位置する、検出面での径130・115cm程の円形の土坑である（図版編図37、図214）。崩落のため底面まで精査を行っていないが、垂直に壁が落ち、120cm程の円形を呈する。堆積土層は、７層は完形の土器類を含む有機質分の多い土層である。１～６層はかわらけや炭化物を含み、人為的に埋められた土層の可能性がある。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。55SB5と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　かわらけや国産陶器類のほか、木製品が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.1～8.8cmで平均8.4cm、底径5.0～5.8cmで平均5.4cm、器高1.6～1.9cmで平均1.7cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.3～14.2cmで平均13.2cm、底径6.2～7.3cmで平均6.9cm、器高2.9～4.5ｃｍで平均3.3cmである。やや器高が高い器形を含むが、皿形の器形が主となる。手づくねかわらけ小皿は口径8.6～9.0cm、器高1.5～1.8cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.4～16.0cmで平均13.7cm、器高2.2～3.6cmで平均2.8cmである。

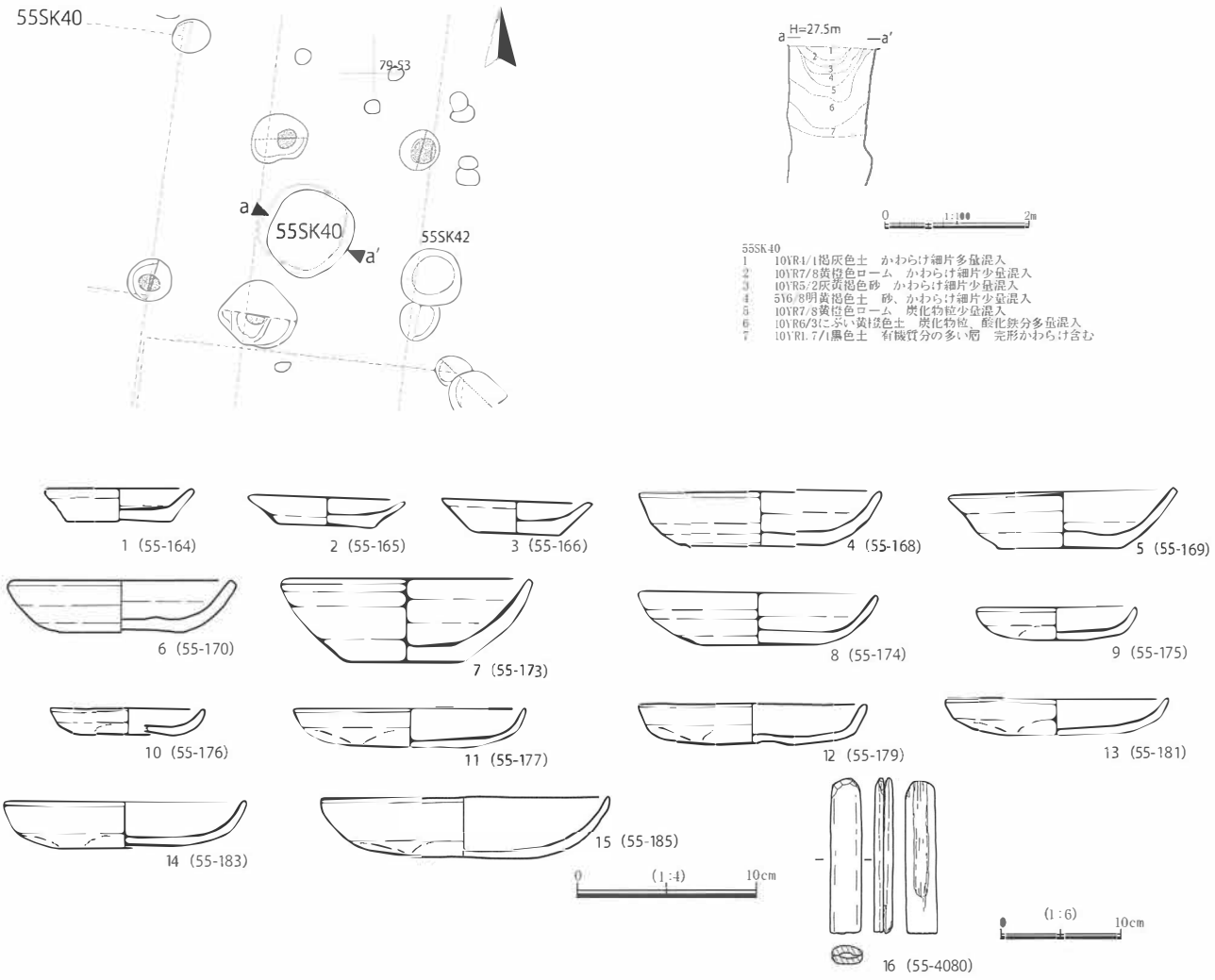


図214　55SK40詳細図

55SK41　遺構　79－52に位置する、検出面での径135・130cm程の円形の土坑である（図版編図37、図215）。深さ150cm程で、底面は径110cm程の円形を呈する。堆積土層は、５層は土器類や種子、炭化物を多く含む有機質分の多い土層である。１～４層は地山土のブロックや炭化物を含み、人為的に埋められた土層の可能性がある。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけや国産陶器類が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.2～9.0cm程で平均8.5cm程、底径5.2～5.5cm程で平均5.4cm程、器高1.3～1.9cm程で平均1.7cm程である。口径は小皿に近いものの器高の高い資料もある（図215－４）。ロクロかわらけ大皿は12.2～13.6cm程で平均13.1cm程、底径5.2～6.8cm程で平均6.5cm程、器高3.1～3.8cm程で平均3.4cm程である。器高の低い皿形を呈する資料が多い。手づくねかわらけ小皿は口径9.4～10.0cm、器高2.0～2.5cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.6～14.4cmで平均13.8cm、器高2.6～3.2cmで平均2.9cmである。

55SK51　遺構　80－55に位置する、検出面での径100・95cm程の円形の土坑である（図版編図37、図216）。深さ350cm程で、底面は径60cm程の円形を呈する。堆積土層は、７層は有機質分の多い土層で、６層は礫を含む土層、４・５層は有機質分の多い土層である。１～３層は土器類や地山土を含む

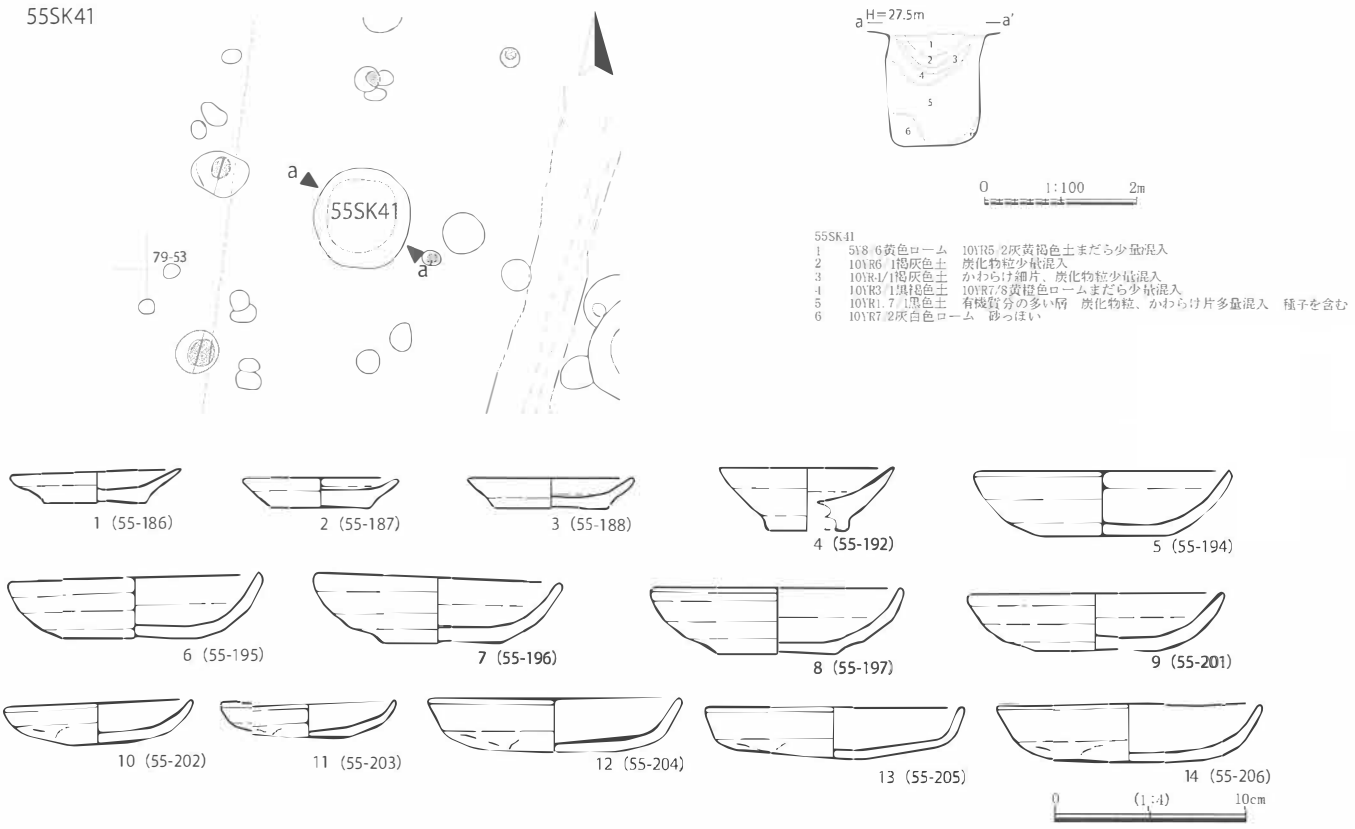


図215　55SK41詳細図

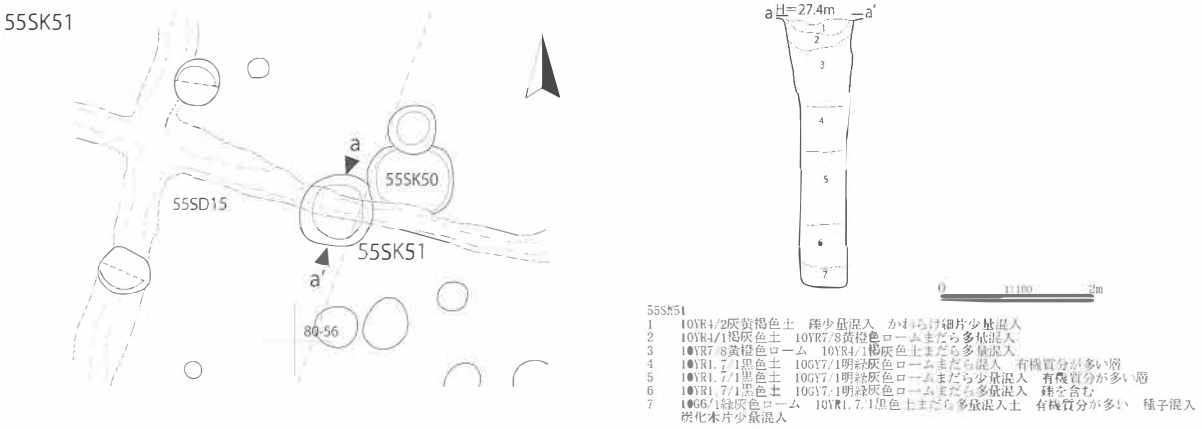


図216　55SK51平面・断面図

土層で人為的に埋められた可能性がある。土層の特徴から、トイレ状土坑の可能性が高い。他のトイレ状土坑に比して深い土坑のため、井戸等として利用された後のトイレ状土坑への転用が想定できる。平面的な直接の切り合いは少ないが、55SK50→55SK51の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけや国産陶器類などの土器類のほか、木製品も出土している。ロクロかわらけ大皿は口径14.0～15.0cm、底径6.7～8．0cm、器高3.7cmである。

55SK53　遺構　82－54に位置する、検出面での径105・100cm程の円形の土坑である（図版編図37、図217）。深さ150cm程、底面は径90cm程の円形を呈する。堆積土層は、地山土等を含む埋められた土層の可能性がある。トイレ状土坑の可能性があるものの、確定できない。

遺物　かわらけや国産陶器類が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.3～9.2cm、底径5.7～6.2cm、器高1.8～2.1cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.6～14.4cm、底径6.5～7.0cm、器高2.9～3.6cmである。手づくねかわらけ大皿は口径14.0～16.0cm、器高2.8～3.9cmである。

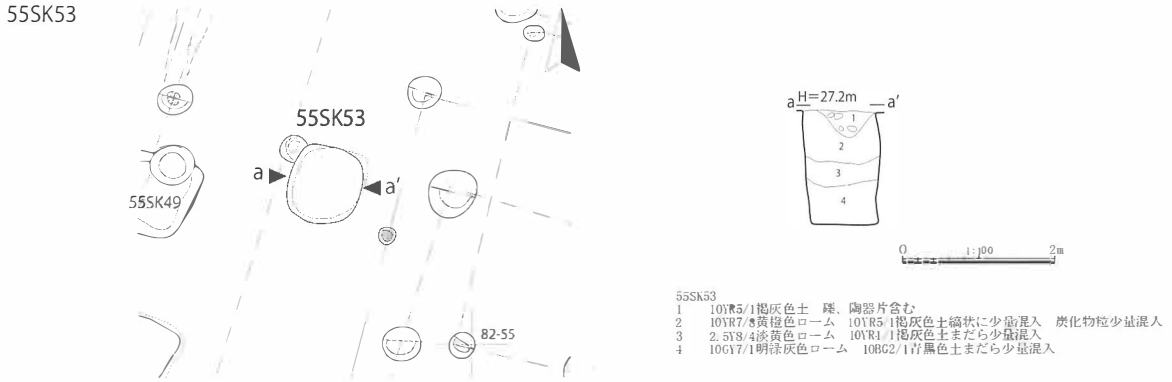


図217　55SK53平面・断面図

55SK54　遺構　81－55に位置する、検出面での径95・90cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図37、図218）。深さ190cm程で、底面は径100cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は、炭化物や土器類を含み人為的に埋められた土層とみられる。トイレ状土坑の可能性があるものの、確定できない。55SB12と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　かわらけや国産陶器類が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径9.0cm、底径5.2cm、器高2.1cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.0cm、器高1.6cmである。手づくねかわらけ大皿は口径14.0cm、器高2.7cmである。

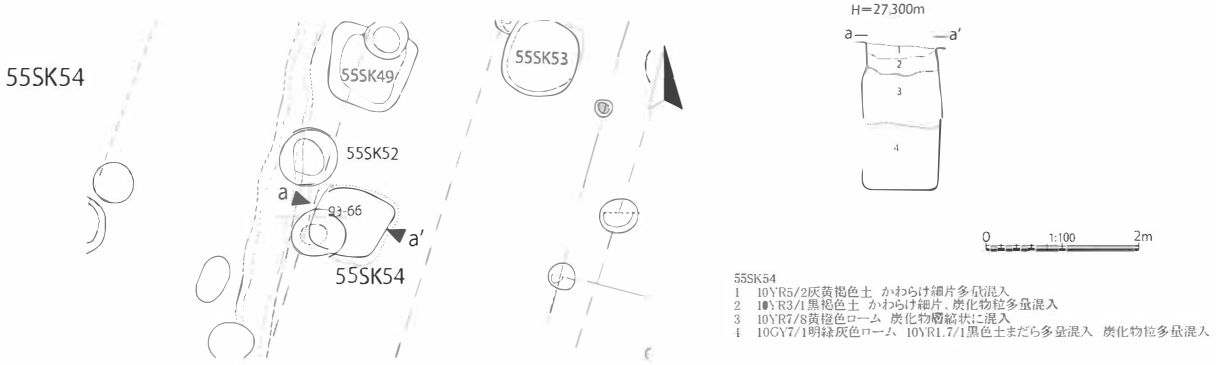


図218　55SK54平面・断面図

56SK26　遺構　63－49に位置する、検出面での径100・85cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図19、図219）。深さ85cm程で、底面は径90cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は、粘性の強い土質で種子等を含む。1・2層は地山土が混じり、埋め戻されたとみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（2,319g）や木製品が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径9.0～9.6cm、底径6.0～6.3cm、器高1.5～1.8cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.8cm、器高1.6cmである。

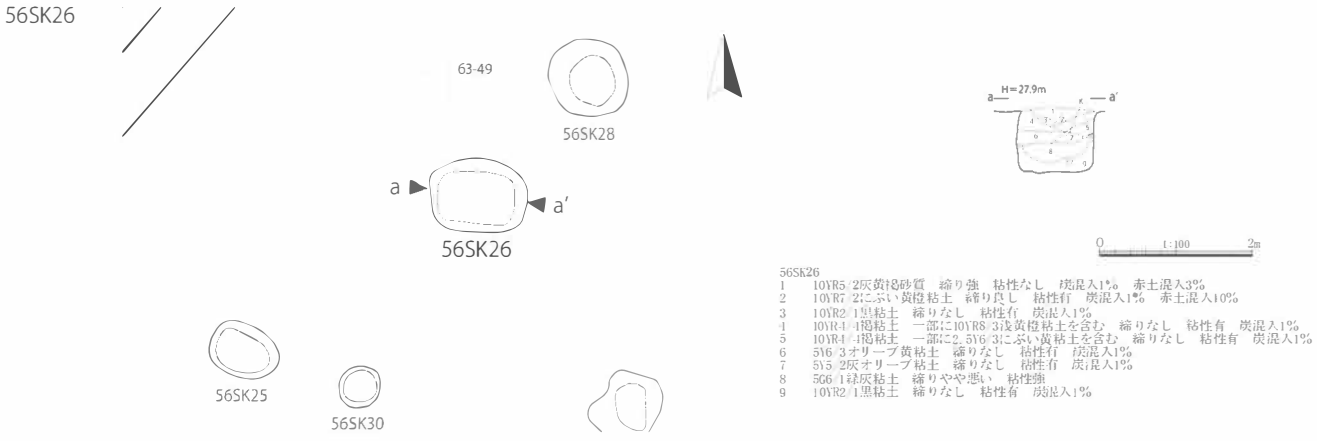


図219　56SK26平面・断面図

56SK27　遺構　63－48に位置する、検出面での径95・95cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図19、図220）。深さ80cm程で、底面は径80cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は粘性の強い土質で、種子等を含む。1～9層は地山土が混じり、埋め戻されたとみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（1,590g）や木製品が出土している。ロクロかわらけ大皿は口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.7cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.0cm、器高2.1cmである。

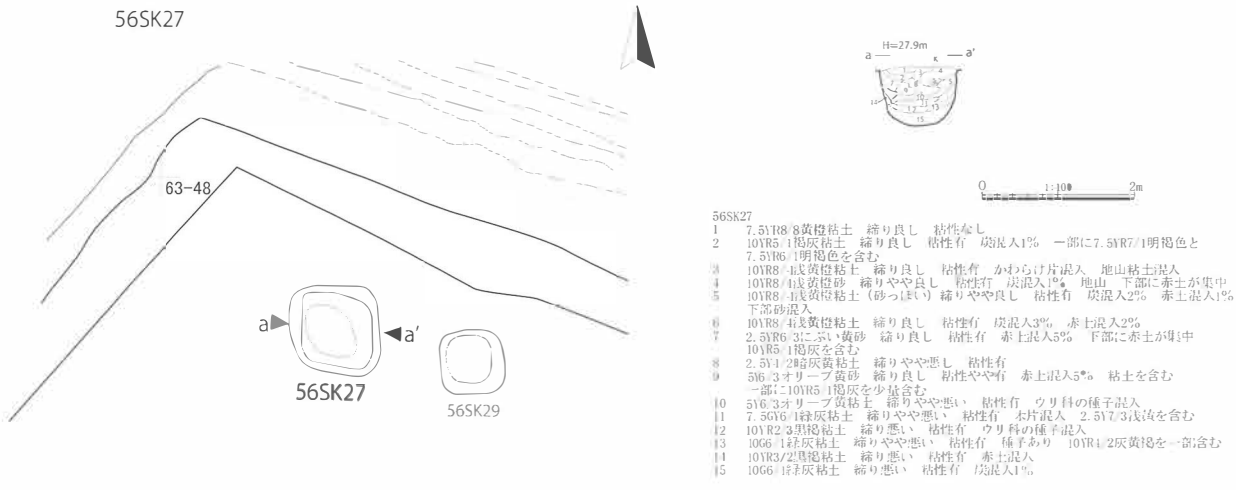


図220　56SK27平面・断面図

56SK28　遺構　63－49に位置する、検出面での径80・80cm程の円形の土坑である（図版編図19、図221）。深さ210cm程で、底面は径60cm程の円形を呈する。堆積土層は、18層は自然堆積による埋没とみられる。13～16層は人為堆積とみられ、種子等を多く含む土層である。上層の１～７層は地山土を多く含み、人為堆積による埋め戻しとみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。他のトイレ状土坑に比して深い土坑のため、井戸等として利用された後のトイレ状土坑への転用が想定できる。

遺物　かわらけ（2,700g）や国産陶器類などの土器類のほか、木製品が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径9.0～9.4cm、底径6.1～6.5cm、器高1.7～2.3cmである。手づくねかわらけ小皿は口径9.0cm、器高1.8cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.4～16.0cmで平均14.5cm、器高2.6～4.2cmで平均3.3cmである。内折れかわらけを含む。

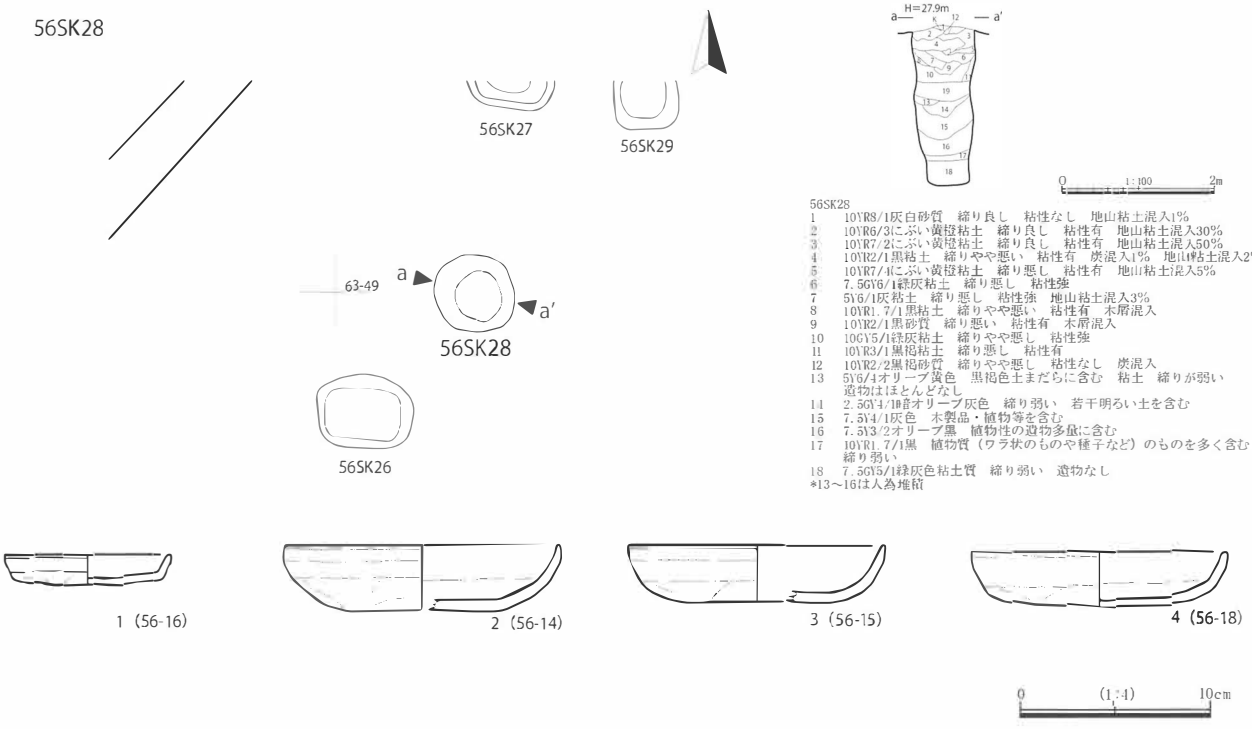


図221　56SK28平面・断面図

56SK29　遺構　63－48に位置する、検出面での径70・65cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図19、図222）。深さ45cm程で、底面は径50cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は粘性の強い、種子や炭化物、遺物を含む土層である。１層は地山土を含み、埋め戻された土層とみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（2,100g）や国産陶器類などの土器類のほか、木製品が出土している。ロクロかわらけ大皿は口径13.8cmである。手づくねかわらけ大皿は口径14.0～～15.2cm、器高2.8～3.5cmである。

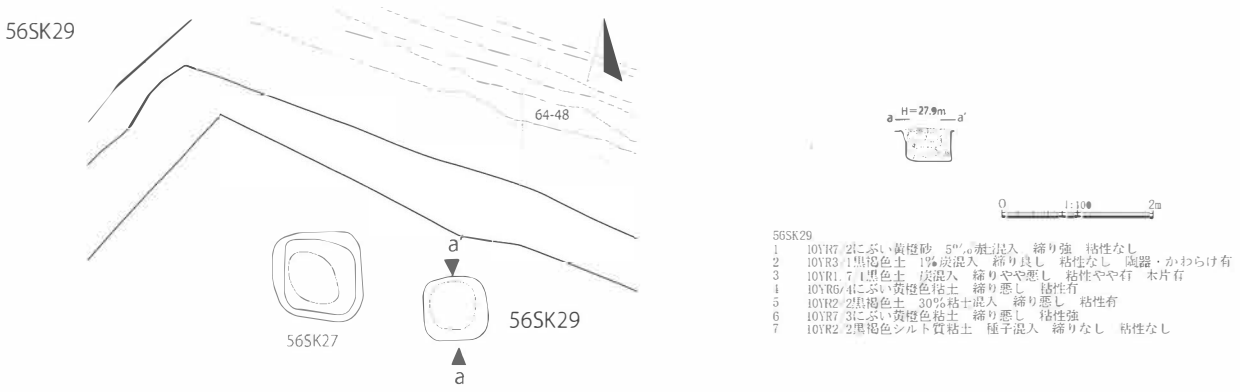


図222　56SK29平断面図

56SK31　遺構　63－50に位置する、検出面での径75・65cm程の円形の土坑である（図版編図19、図223）。深さ90cm程で、底面は径75cm程の円形を呈する。堆積土層は遺物や地山土を含む土層で、人為的に埋め戻されたとみられる。種子や有機質分の多い土層は確認されていないが、形状等からはトイレ状土坑の可能性がある。

遺物　かわらけ（780g）や国産陶器類、輸入陶磁器などの土器類のほか、木製品が出土している。手づくねかわらけ大皿は口径15.6cm、器高2.8cmである。輸入陶器には吉州窯産とみられる製品がある。

図223　56SK31平断面図

56SK33　遺構　64－50に位置する、検出面での径100・100cm程の円形の土坑である（図版編図19、図224）。深さ380cm程で、底面は径75cm程の円形を呈する。堆積土層は地山土を含み粘性の強い土質で、土器類、炭化物、木製品を含む。１・２層は地山土を含み、埋め戻しによる土層とみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。他のトイレ状土坑に比して深い土坑のため、井戸等として利用された後のトイレ状土坑への転用が想定できる。

遺物　かわらけ（8,070g）や国産陶器類、輸入陶磁器などの土器類のほか、平瓦片や鉄滓、木製品が出土している。木製品にはちゅう木や漆器椀を含む。ロクロかわらけ小皿は口径8.0～9.2cm程で平均8.4cm、底径5.0～6.0cmで平均5.5cm、器高1.5～1.9cmで平均1.7cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.4～9.6cmで平均9.1cm、器高1.6～1.9cmで平均1.7cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.0～14.1cmで平均13.8cm、器高2.6～3.0cmで平均2.9cmである。

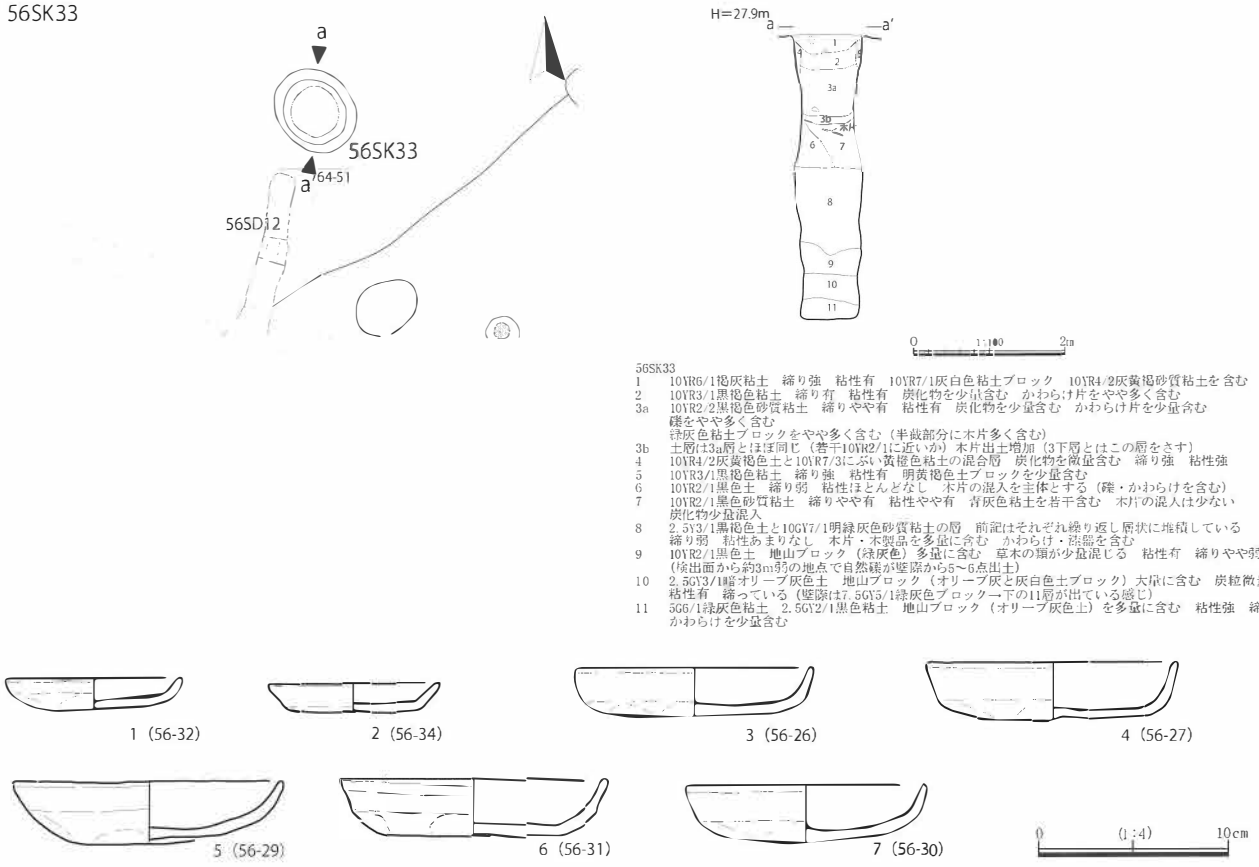


図224　56SK33詳細図

56SK34　遺構　64－50に位置する、検出面での径95・90cm程の円形の土坑である（図版編図19、図225）。深さ175cm程で、底面は径70cm程の円形を呈する。堆積土層は地山土を多く含み、人為的に埋め戻された土層とみられる。トイレ状土坑の可能性があるものの、確定できない。

遺物　かわらけ（1,420g）や国産陶器類が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.4～9.2cm、底径6.0～6.2cm、器高1.8～1.9cmである。手づくねかわらけ大皿は口径14.0cm、器高3.3cmである。

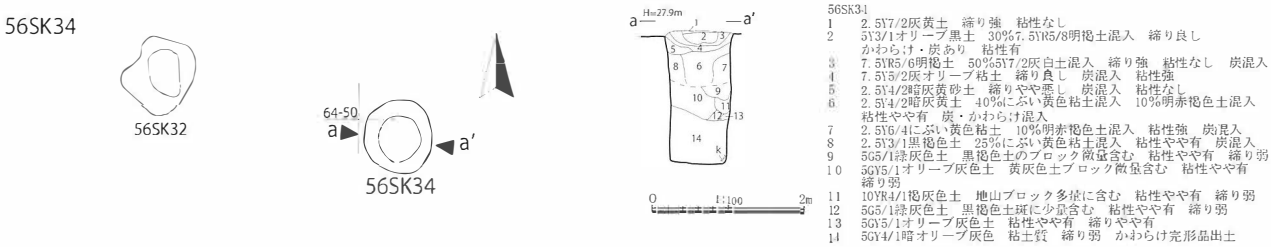


図225　56SK34平面・断面図

56SK53　遺構　73－50に位置する、検出面での径140・105cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図30、図226）。深さ120cm程で、底面は径85cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は、７層以下では地山土のほか、土器類や炭化物、植物種子を多く含み粘性の強い土質である。１～６層は地山土や炭化物

を含み埋め戻された土層とみられる。堆積土の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（3,330g）や国産陶器類のほか、ちゅう木が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.5cm、底径5.1cm、器高2.0cmである。ロクロかわらけ大皿は口径13.6～16.4cm、底径7.6～7.8cm、器高3.7～3.8cmである。手づくねかわらけ大皿は口径14.4cmである。

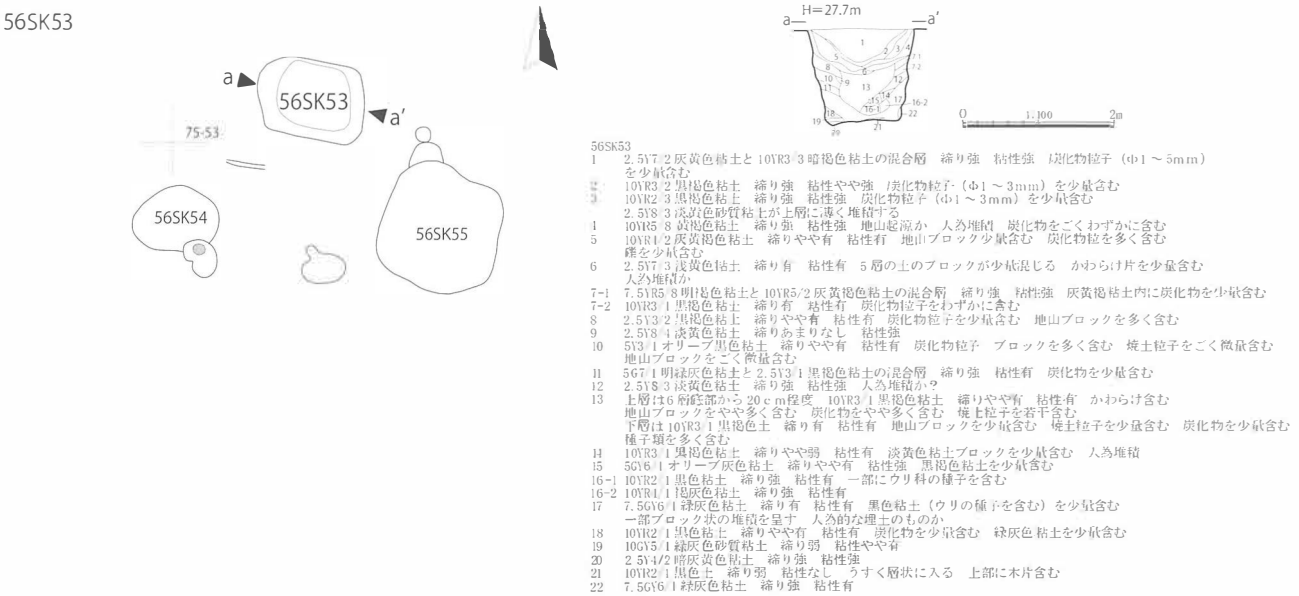
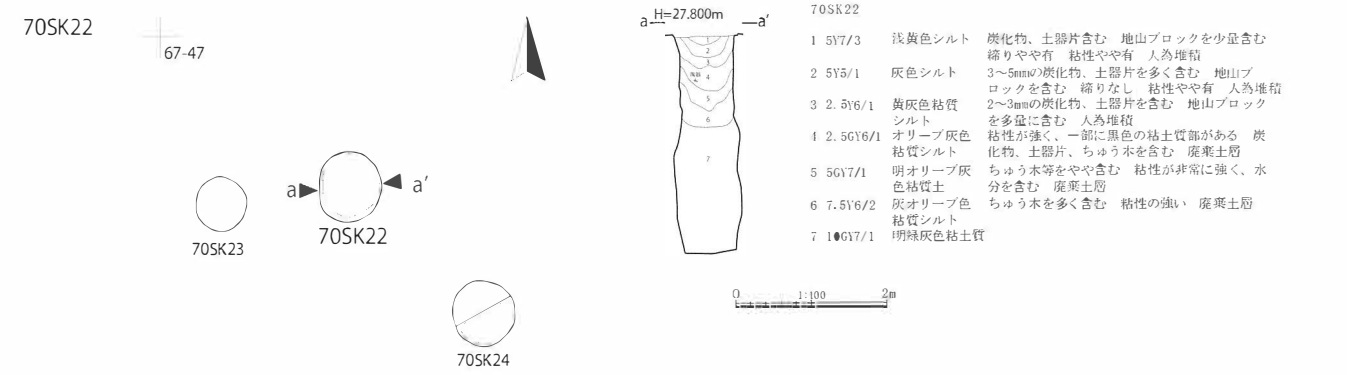


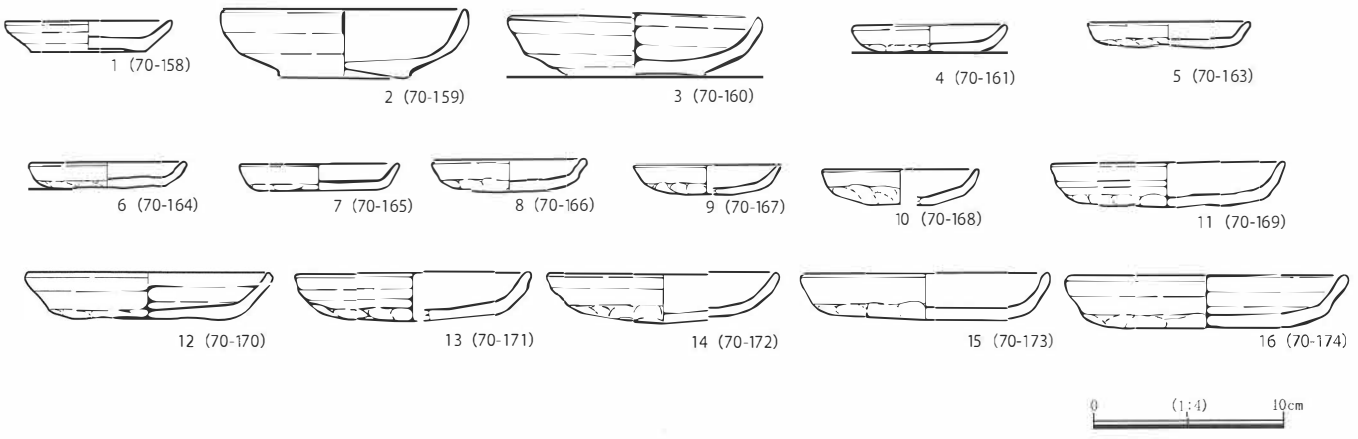
図226　56SK53平面・断面図

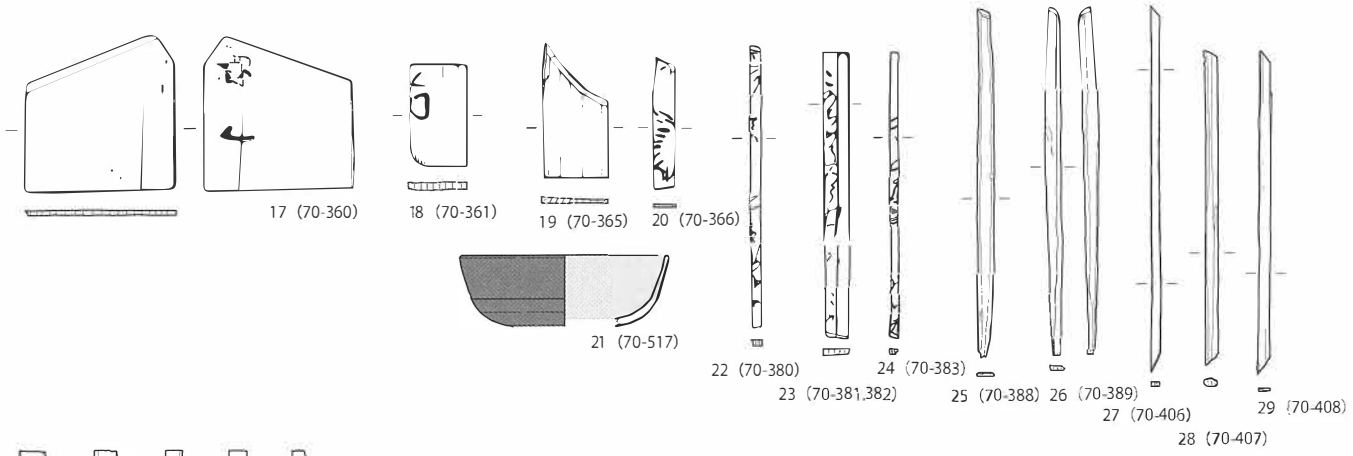
70SK20　遺構　65－48に位置する、検出面での径65・62cm程の円形の土坑である（図版編図24、図227）。深さ54cm程で、底面は径55cm程の円形を呈する。堆積土層は、４層は自然堆積とみられる土層である。２・３層は粘性が強く有機質分の多い土層である。ちゅう木は含まず土器類の出土も少ないものの、土質はトイレ状土坑の堆積層に類似する。１層は地山ブロックや土器類を多く含み、人為堆積による埋め戻しとみられる。土層の特徴から、ちゅう木は含まないものの、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（265g）や国産陶器類が出土している。

図227　70SK20平面・断面図







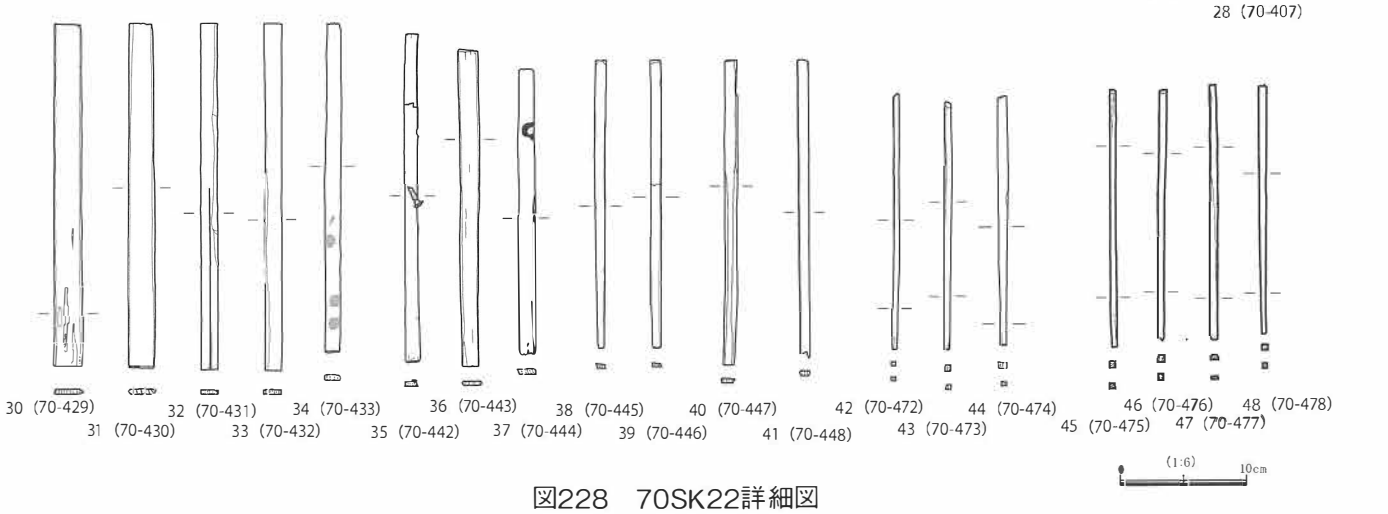


図228　70SK22詳細図

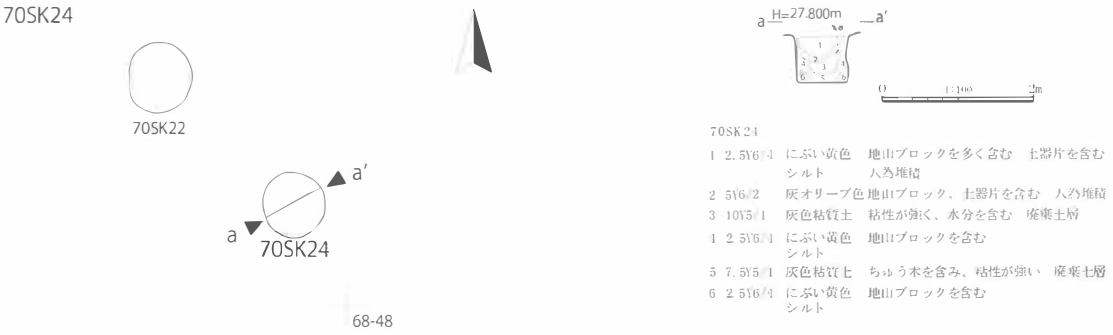


図229　70SK24平面・断面図

70SK22　遺構　67－47に位置する、検出面での径94・82cm程の円形の土坑である（図版編図24、図228）。深さ290cm程で、底面は径80cm程の円形を呈する。堆積土層は、７層はグライ化した粘性の強い自然堆積による土層で井戸跡のなどの土層と類似する。６層からちゅう木や土器類が多く出土し、4～6層は粘性が強く有機質分と水分を多く含む土層である。１～３層は地山ブロックを含み、土器類や炭化物を含む、人為堆積とみられる土層である。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。他のトイレ状土坑に比して深い土坑のため、井戸等として利用された後のトイレ状土坑への転用が想定できる。

遺物　かわらけ（13,617g）や国産陶器類などの土器類のほか、ちゅう木や漆器椀を含む木製品が出土している。なお、井戸跡と類似する７層からは遺物の出土は少ない。ちゅう木では墨書のある資料があり、接合する資料もある。ロクロかわらけ小皿は口径8.6cm、底径5.8cm、器高1.7cmである。ロクロかわらけ大皿は口径12.6～13.2cm、底径7.2～7.3cm、器高3.3～3.7cmである。手づくねかわらけ小皿は口径7.6～8.4cm程で平均8.1cm程、器高1.2～1.9cm程で平均1.5cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径11.8～14.5cm程で平均12.7cm程、器高2.4～2.8cmで平均2.6cm程である。

70SK24　遺構　67－47に位置する、検出面での径86・82cm程の円形の土坑である（図版編図24、図229）。深さ63cm程で、底面は径78cm程の円形を呈する。堆積土層は壁面の崩落とみられる６層の上層に粘性が強く有機質分を多く含む５層が堆積する。壁面の崩落とみられる４層を挟んで、粘性が強く有機質分の多い３層が堆積する。１・２層は地山ブロックを多く含み、土器類の出土も多い。人為堆積による埋め戻しとみられる。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（557g）や国産陶器類、輸入陶磁器が出土している。

【その他の特徴的な土坑】

50SE1　遺構　86－62に位置する、検出面での径220・204cm程の円形の土坑である（図版編図45、図230）。深さ６cm程と極めて浅い。堆積土層は締まりが強く、黄橙色土と暗褐色土が混じる人為的な土層で、土器類を多く含む。

遺物　かわらけがまとまって出土しており、特にロクロかわらけが多い。ロクロかわらけ小皿は口径7.7～10.6cm程で平均9.3cm程、底径5.2～7.3cm程で平均6.5cm程、器高1.6～2.2cm程で平均1.8cm程である。ロクロかわらけ大皿は13.8～16.0cm程で平均14.9cm程、底径6.0～8.7cm程で平均7.4cm程、器高3.0～4.4cm程で平均3.5cm程である。

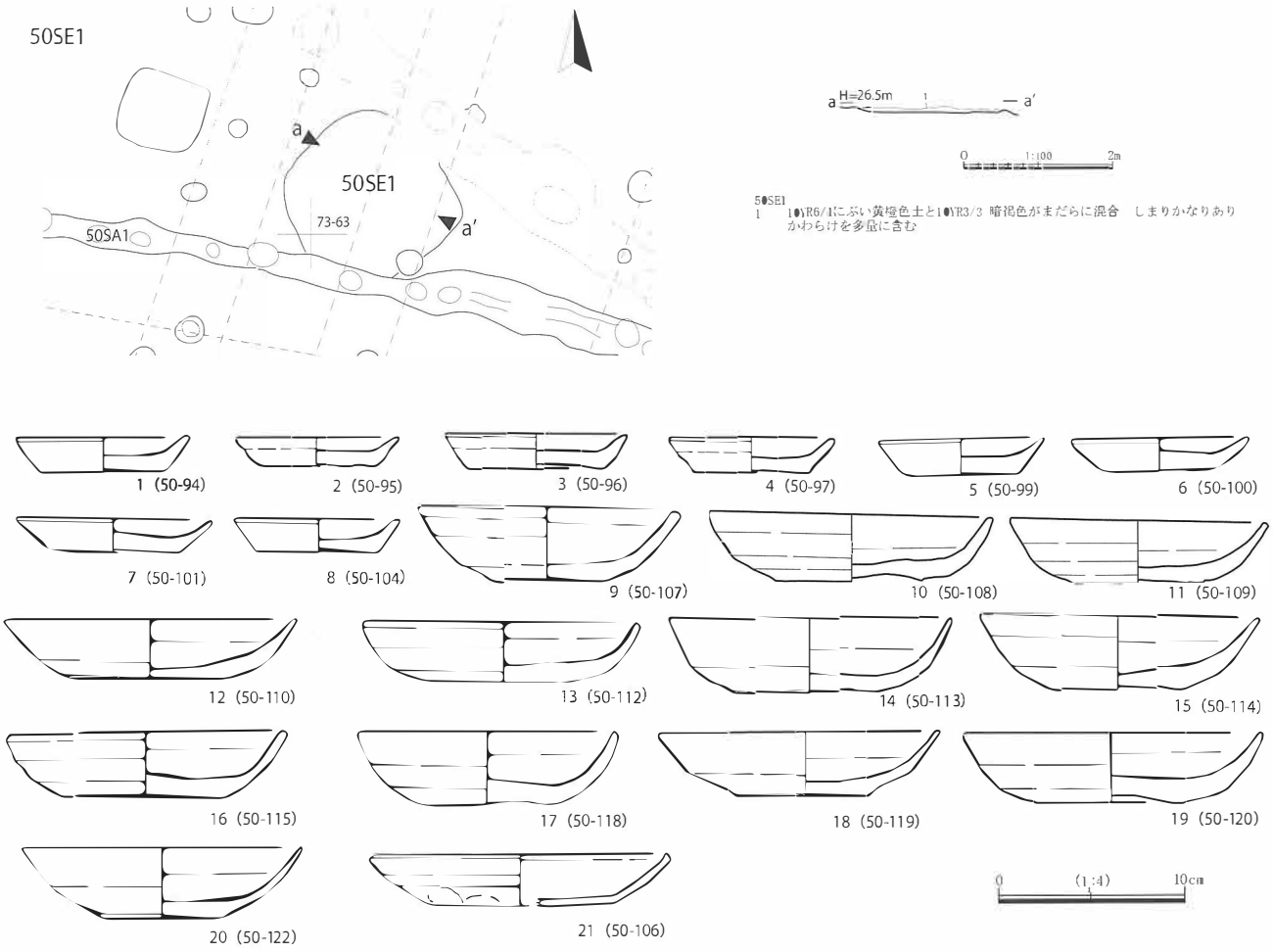


図230　50SE1詳細図

手づくねかわらけ大皿は口径15.8cm、器高2.8cmである。

55SK29　遺構　80－63に位置する、検出面での径165・160cm程の円形の土坑である（図版編図38、図231）。深さ220cm程で、底面は径70cm程の円形を呈する。堆積土層は地山土を含み、炭化物等が混じる。

遺物　かわらけや国産陶器類のほか、木製品が出土している。木製品には墨書のある木片を含む。ロクロかわらけ小皿は口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.3cmである。手づくねかわらけ小皿は8.4～9.8cm程で平均9.0cm程、器高1.6～2.3cm程で平均2.0cm程である。手づくねかわらけ大皿は12.4～14.1cm程で平均13.5cm程、器高2.4～3.6cm程で平均2.9cm程である。

55SK33　遺構　76－52に位置する、検出面での径115・90cm程の楕円形の土坑である（図版編図30、図232）。深さ155cm程で、底面は径85cm程の楕円形を呈する。堆積土層は５・６層では地山土が縞状に入り、６層では完形の土器類、５層では礫を多く含む。４層は礫で構成される。55SB6と空間的に重複する。遺構の切り合いは少ないが、55SB6→55SK33の可能性がある。

遺物　かわらけや国産陶器のほか、木製品が出土している。ロクロかわらけ大皿は口径13.4～

14.6cm、底径6.0～7.2cm、器高2.8～3.7cmである。手づくねかわらけ小皿は口径8.7～9.2cmで平均8.9cm、器高1.8～2.2cmで平均2.0cmである。手づくねかわらけ大皿は口径12.6～14.8cm程で平均13.9cm程、器高2.9～3.5cm程で平均3.2cm程である。口径15cm前後の資料を含むものの、14cm前後の資料が多い。

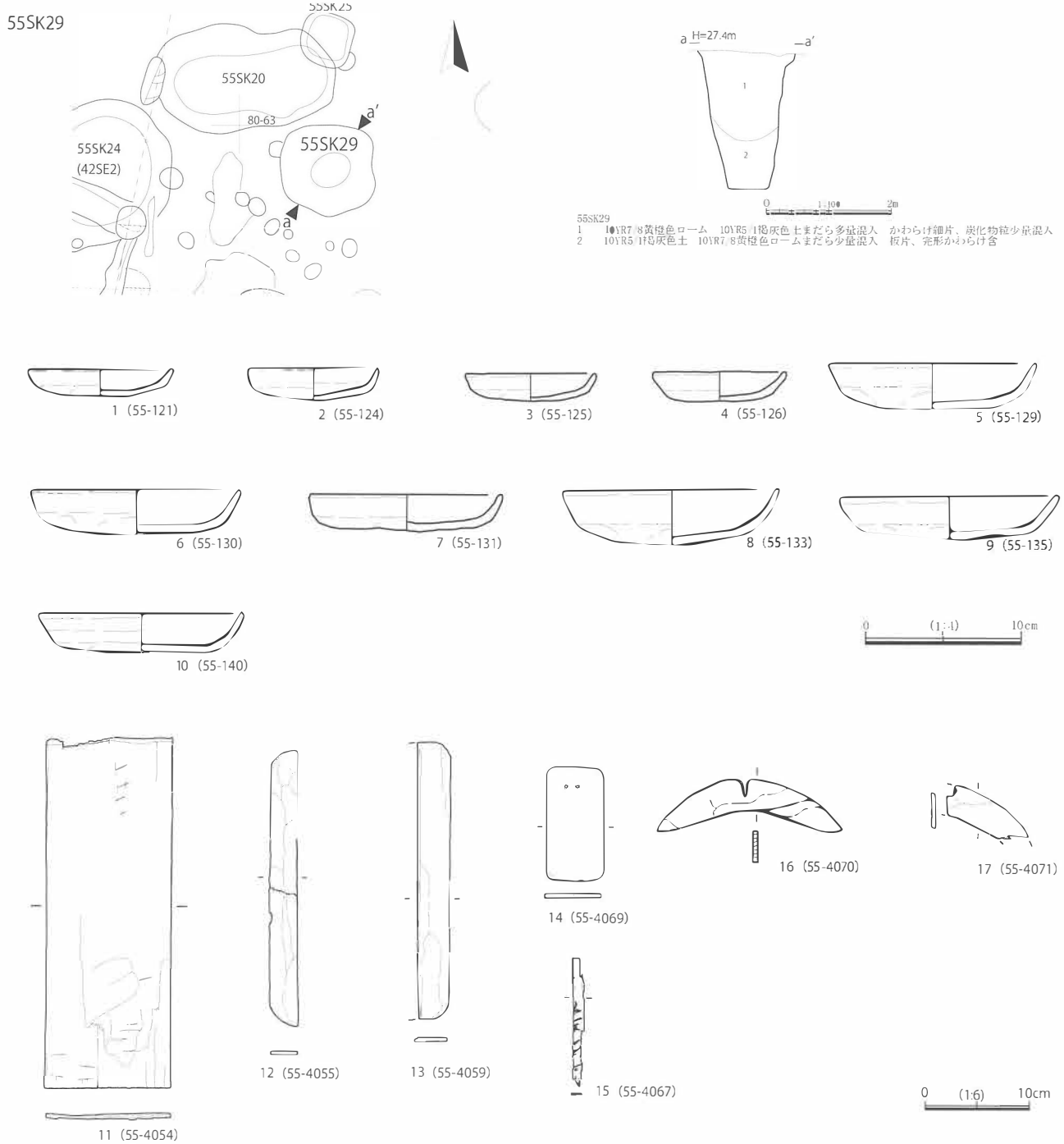


図231　55SK29詳細図

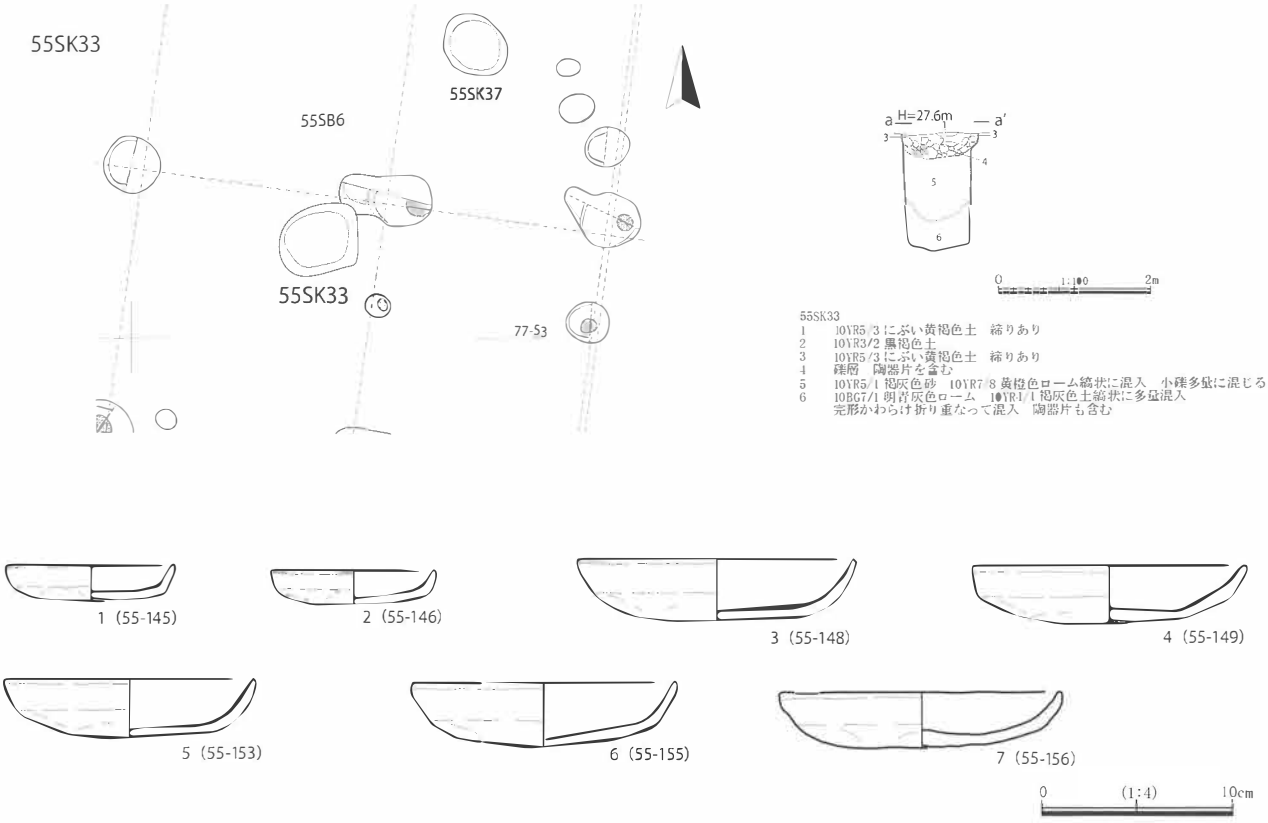


図232　55SK33詳細図

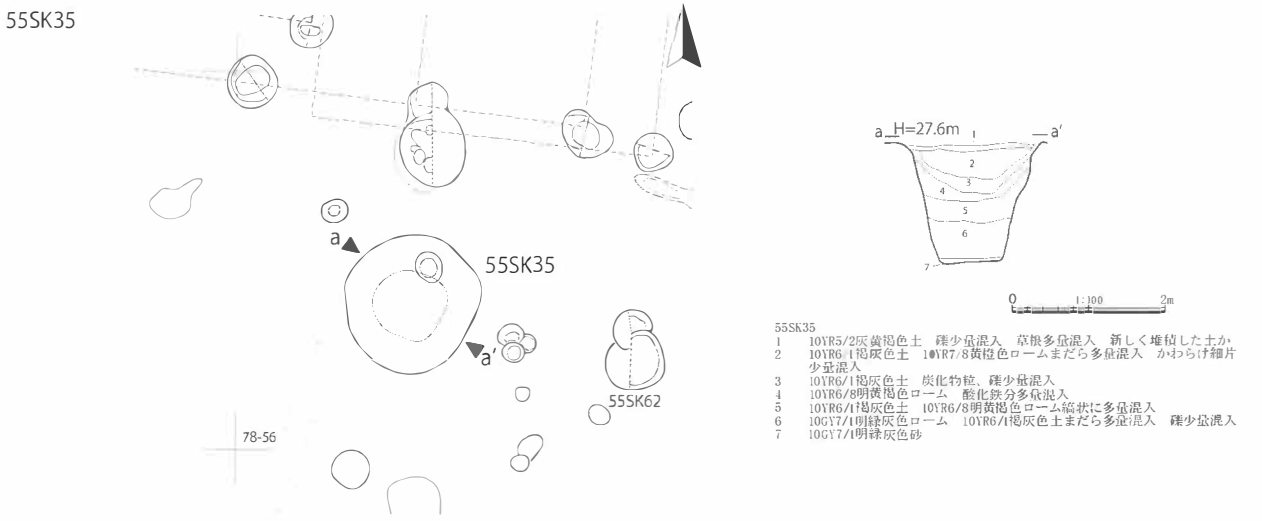


図233　55SK35平面・断面図

55SK35　遺構　78－55に位置する、検出面での径180・175cm程の円形の土坑である（図版編図37、図233)。深さ155cm程で、底面は径85cm程の楕円形を呈する。堆積土層は最下層の７層は砂層で、６層以上では地山土が混入する土層が多い。井戸跡の可能性があるが、確定できない。
遺物　かわらけや国産陶器類が出土している。

55SK50　遺構　80－55に位置する、検出面での径110・100cm程の円形の土坑である（図版編図37、図234)。深さ75cm程で、底面は径100cm程の円形を呈する。堆積土層は、２層は土器類や地山土を含み、人為的に埋め戻された土層とみられる。１層は地山土を多く含む。55SK50→55SK51の新旧関係が確認できる。
遺物　かわらけや国産陶器類が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径8.0cm、底径5.2cm、器高1.2cmである。手づくねかわらけ大皿は口径13.6cm、器高3.0cmである。

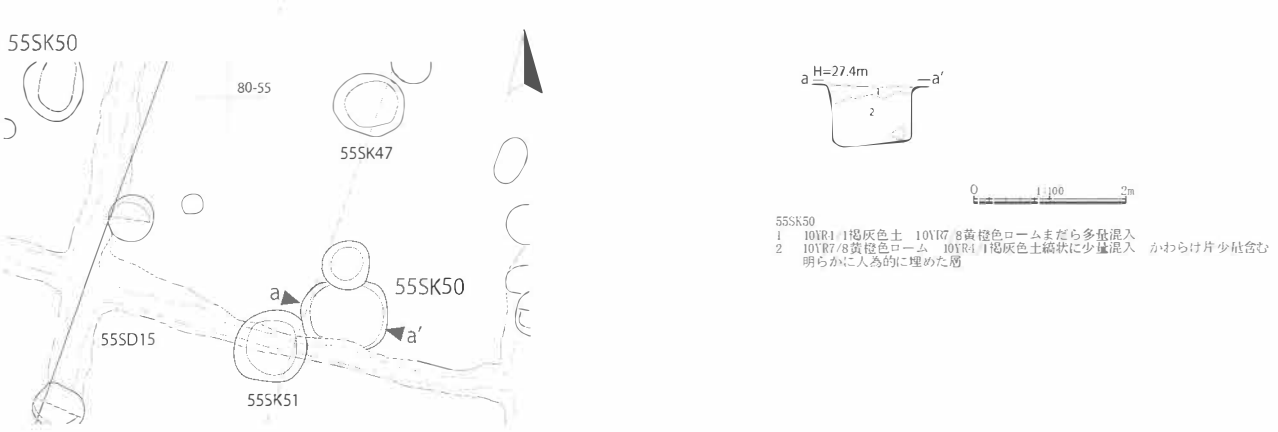


図234　55SK50平面・断面図

56SK32　遺構　63－49に位置する、検出面での径80・60cm程の円形の土坑である（図版編図19、図235)。深さ15cm程で、底面は径70cm程の円形を呈する。堆積土層は、粘性が強く地山土の混じる２層と、人為堆積とみられる１層である。堆積土層の特徴から、トイレ状土坑の可能性があるものの浅い土坑のため確定できない。
遺物　かわらけが少量出土している（30g)。

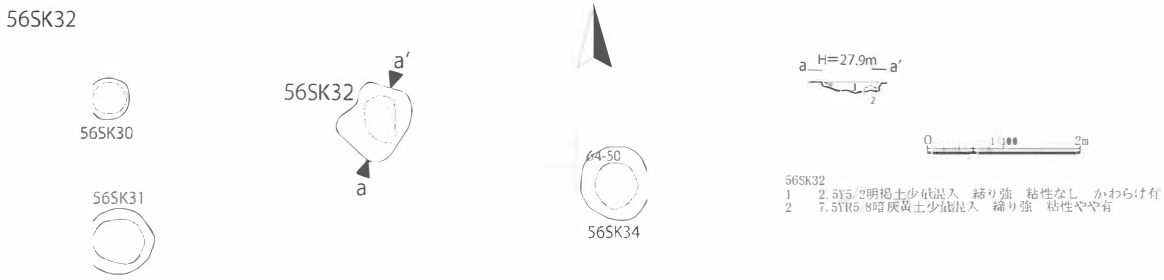


図235　56SK32平面・断面図

56SK40　遺構　67－49に位置する、検出面での径90・82cm程の円形の土坑である（図版編図24、図236）。深さ12cm程で、底面は径70cm程の円形を呈する。56次調査で検出し、70次調査で精査した。周囲にトイレ状土坑が分布することから、トイレ状土坑となりうると想定し精査したが、堆積土層は自然堆積による埋没で土層の特徴は異なる。

遺物　かわらけ（161g）や国産陶器類が出土しているものの、小破片が多い。

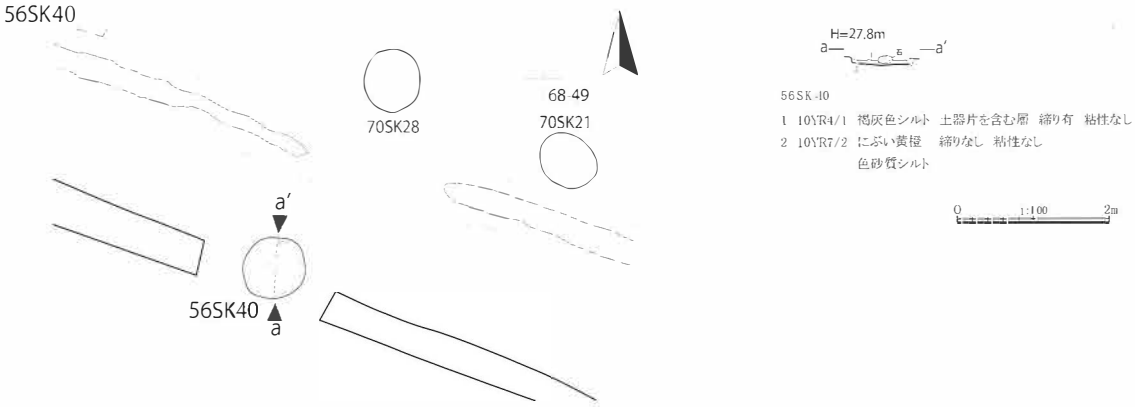


図236　56SK40平面・断面図

56SK52　遺構　72－50に位置する、検出面での径118・112cm程の円形の土坑である（図版編図24、図237）。深さ17cm程で、底面は径95cm程の円形を呈する。堆積土層は１～３層は遺物や地山ブロックを含むものの、締まりが弱く、自然堆積による埋没とみられる。56次調査で検出し、70次調査で精査した。周囲にトイレ状土坑が分布することから、トイレ状土坑の可能性があるものと考え精査したが、堆積土層は自然堆積による埋没で土層の特徴は異なる。

遺物　かわらけ（579g）や国産陶器類が出土しているものの、小破片が多い。

図237　56SK52平面・断面図

65SK2　遺構　64－69に位置する、検出面での径62cm程の円形の土坑である（図版編図21、図238）。深さ94cm程で、底面は径94cm程の円形を呈する。堆積土層は、最下層の４層は有機質分の強い土層で炭化物を含む。１層は人為堆積とみられ、礫を多く含む。土質からはトイレ状土坑の可能性があるが、自然科学分析では寄生虫等は検出されておらず、確定できない。

遺物　かわらけ（548g）が出土している。ロクロかわらけ大皿は口径13.2cm、底径4.5cm、器高4.7cmである。

図238　65SK2平面・断面図

65SK14　遺構　69－70に位置する、検出面での径90・80cm程の円形の土坑である（図版編図27、図239）。深さ50cm程で、底面は径50cm程の円形を呈する。堆積土層は、２・３層は遺物を多く含むが、自然堆積による埋没とみている。

遺物　かわらけ（1,843g）が出土している。ロクロかわらけ大皿は口径12.6～14.4cm程で平均13.5cm程、底径5.2～7.2cm程で平均6.1cm程、器高3.2～4.1cm程で平均3.7cm程である。

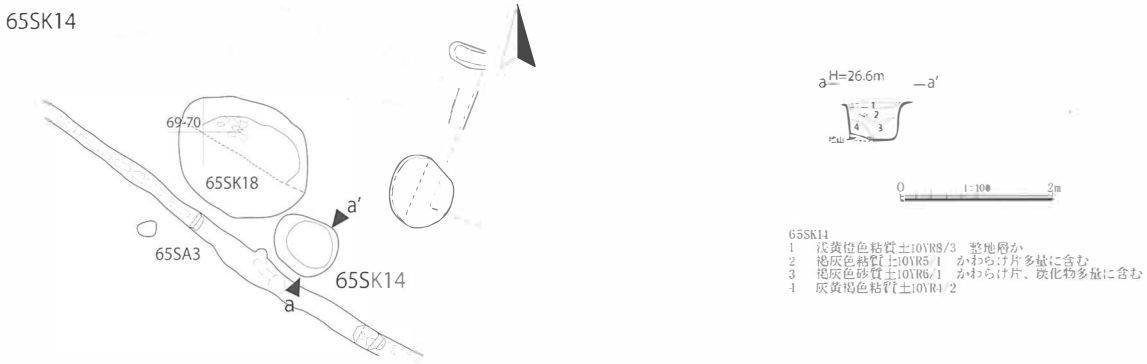


図239　65SK14平面・断面図

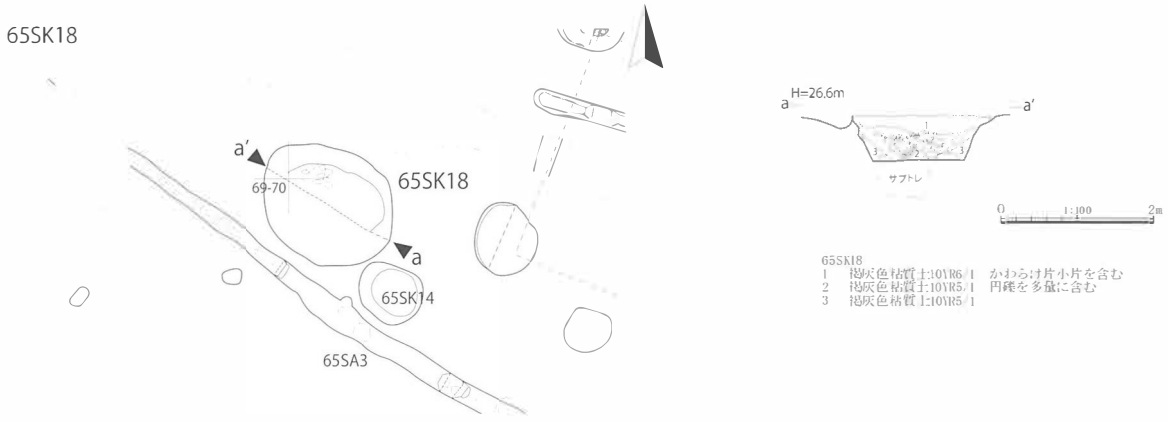


図240　65SK18平面・断面図

65SK18　遺構　69－70に位置する、検出面での径190・150cm程の円形の土坑である（図版編図27、図240）。深さ60cm程で、底面は径50cm程の円形を呈する。堆積土層は、２層に円礫を多く含む。
遺物　かわらけ（882g）や国産陶器類、中国産陶器が出土している。ロクロかわらけ小皿は口径9.5cm、底径6.7cm、器高1.6cmである。

68SK35　遺構　91－68に位置する、検出面での径340・312cm程の円形の土坑である（図版編図54、

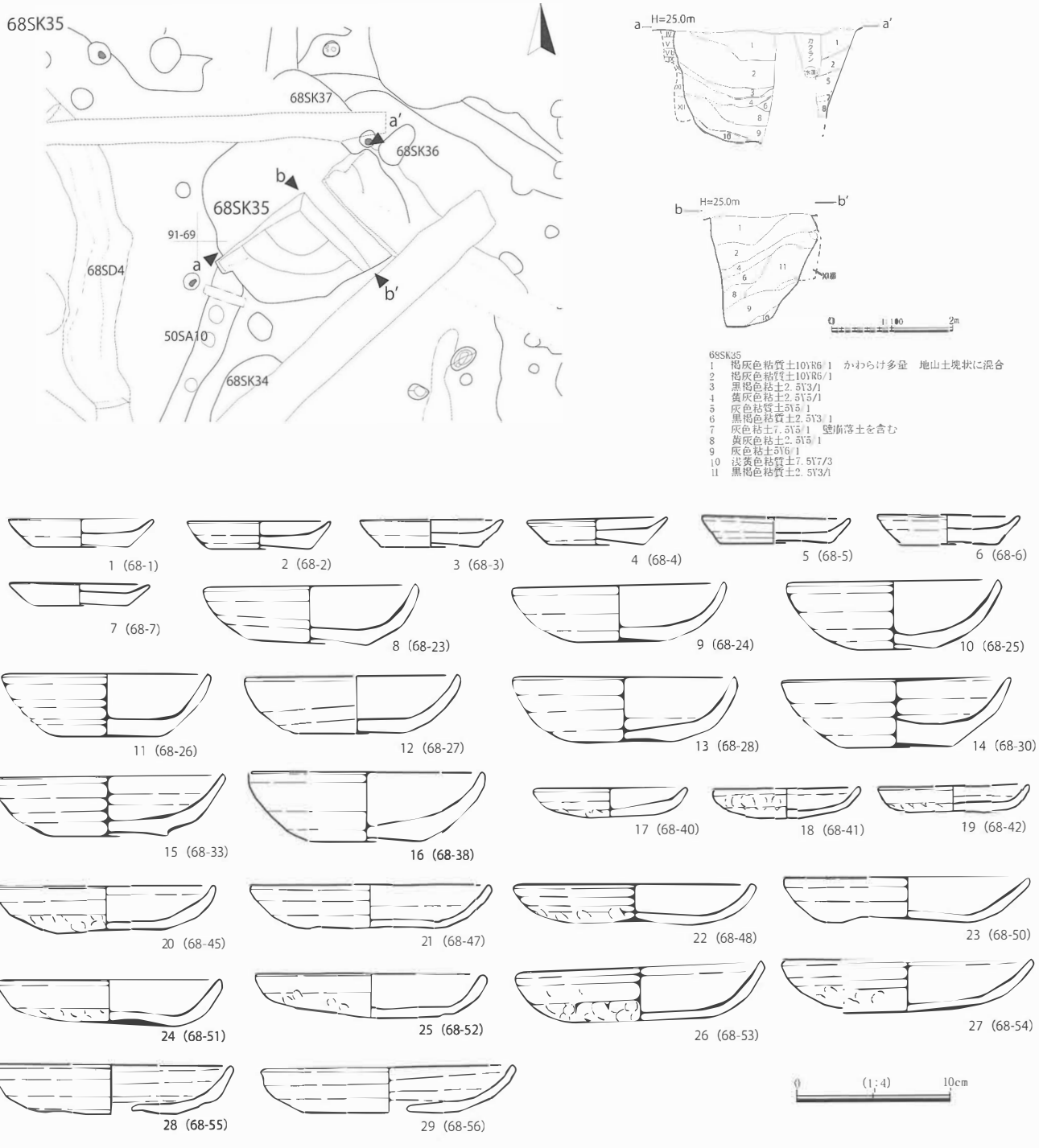


図241　68SK35詳細図

図241)。深さ180cm程、径200cm程の円形を呈する位置まで精査したが、底面まで達していない。堆積土層は６～９層は自然堆積に、１～５層は地山ブロックを多く含む人為堆積によるとみられる。１層から完形の土器類がまとまって出土している。遺構の形状や径などからは井戸跡との見方も残るが、確定できない。68整地層の上層に堆積する自然堆積層を掘り込んでおり、68整地層→68SK35の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけが1,730gと多く出土している。ここでは１層から出土した資料を図示した。図示していない資料を含むと、ロクロかわらけ小皿は口径8.7～9.9cm程で平均9.2cm程、底径6.0～7.3cm程で平均6.5cm程、器高1.6～2.1cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径13.4～16.5cm程で平均14.6cm程、底径5.5～8.8cm程で平均7.3cm程、器高3.4～4.8cm程で平均4.3cm程である。ロクロかわらけは器高の高い椀型の器形と器高の低い皿形の器形が含まれる。手づくねかわらけ小皿は口径9.4～10.1cm程で平均9.8cm程、器高1.7～2.1cm程で平均1.9cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径13.9～16.2cm程で平均15.1cm程、器高2.7～3.7cm程で平均3.1cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径15cm以上の口径の大きい資料が多い。手づくねかわらけ大皿には底部の穿孔が２点ある。

72P47　遺構　59－42に位置する、検出面での径134・102cm程の円形の柱穴である（図版編図13、図242)。130cm程の深さまで精査を行っているが、底面には達していない。精査位置で、径67･55cm程で円形を呈する。柱痕跡で確認できる柱径は32cm程である。堆積土層は、柱穴状の堆積部分（P47a）と土坑状の堆積部分（P47b）に分かれる。P47ｂとみた9・10・12層は、締まりは弱いものの地山ブロックを多く含み、10層には炭化物を多く含む。人為堆積によるものと判断できる。1～8層はP47aにあたる。２層は柱痕跡で、締まりが弱い。３～５・７・８層は柱掘方の埋土である。１層は柱抜き取り後の堆積土とみられる。72SA2（P28）→72P47の新旧関係が確認できる。

遺物　かわらけ（409g）や国産陶器が出土している。

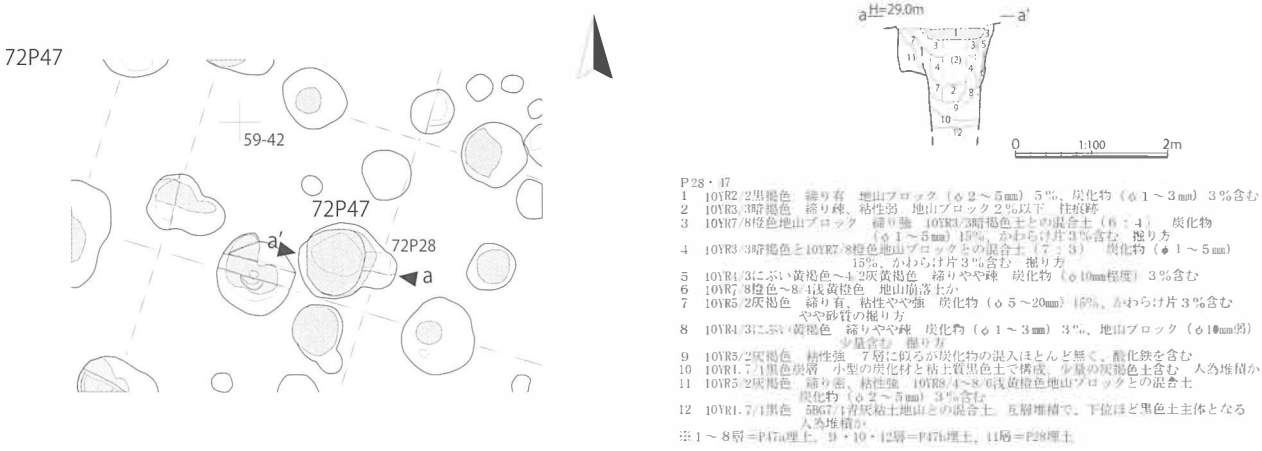


図242　72P47平面・断面図

【50次以前の調査で調査・検討した土坑の概要】

○トイレ状土坑

21SK53　遺構　85－99に位置する、検出面での径112・106cm程・深さ156cm程の円形の土坑である（図版編図50、図243）。底面は径80cm程の円形を呈する。堆積土層は、最下層が粘性の強い種子やちゅう木、土器類を多く含む土層である。上層は人為的な土層で埋め戻されている。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけが多く出土し（7,185g）、ちゅう木などの木製品も出土している。

23SK83　遺構　89－79に位置する、検出面での径105・98cm程・深さ89cm程の円形の土坑である（図版編図48、図243）。底面は径80cm程の円形を呈する。堆積土層は最下層の３層は黒褐色シルトの混じる粘土で、ちゅう木や種子が含まれる。上層の１・２層は人為堆積で埋め戻されている。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけ（7,305g）や輸入磁器などの土器類のほか、ちゅう木などの木製品や鉄鈴が出土している。

31SK80　遺構　70－66に位置する、検出面での径109・108cm程・深さ158cm程の円形の土坑である（図版編図26、図243）。底面は径70cm程の円形を呈する。堆積土層は、最下層の４層は水分の多い土層で種子やちゅう木を含む。２層は人為堆積で埋め戻されている。最上層の１層は自然堆積と観察されている。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

遺物　かわらけが多く出土し（3,219g）、折敷片やちゅう木などの木製品も出土している。ちゅう木は種子などとともに、面的に検出された。

36SK8　遺構　69－63に位置する、検出面での径132・130cm程・深さ166cm程の円形の土坑である（図版編図26、図243）。底面は径130cm程の円形を呈する。堆積土層は、下層の３層は種子やちゅう木などを含む土層である。最上層の１層は粘土で構成される。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

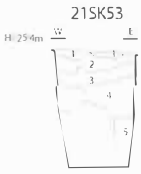
遺物　かわらけのほか（4,016g）、折敷片やちゅう木などの木製品も出土している。

36SK9　遺構　74－63に位置する、検出面での128・128cm程・深さ114cm程の不整形の隅丸方形の土坑である（図版編図32、図243）。底面は径65cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は、６層は種子や有機質遺物を含む。５層は土器類を多く含み人為的な土層である。上面に礫が広がる。上層の１～４層は人為的に埋め戻されている。土層の特徴から、トイレ状土坑と判断できる。

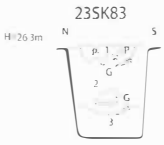
遺物　かわらけが多く出土している（2,2648g）。

41SK7　遺構　58－63に位置する、検出面での119・101cm程・深さ128cm程の方形の土坑である（図版編図16、図244）。底面は径100cm程の方形を呈する。ちゅう木が出土しており、トイレ状土坑と推察できる。

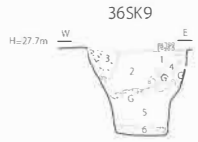
遺物　かわらけのほか、鉄斧や墨書木片が出土している。



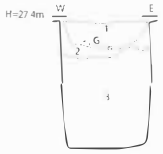
21SK53
1　10YR6/8明黄褐色粘土　かわらけ片含む
2　10YR5/2灰黄褐色砂混じりシルトと10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが混在　炭化物片含む
3　7.5YR6/8橙色粘土　褐灰色砂混じりシルトブロック含む
4　10YR3/1オリーブ黒色粘土、7.5YR5/2灰褐色粘土砂混じりシルトが混在　炭化物片約1～3%　かわらけ片含む
5　10YR4/1暗褐色粘土　木製品、植物種子多量



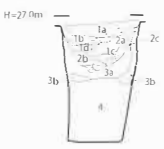
23SK83
1　10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルトが主
10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック僅か
炭化物片含む　かわらけ片大破片含む
2　10YR5/2灰黄褐色砂混じりシルトと2.5Y7/3浅黄色粘土ブロックが混在　炭化物片含む　かわらけ大破片含む
巨礫いくつか含む（人為堆積土）
3　10YR2/2黒褐色土　シルト質粘土、ちゅう木を多量に含む



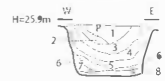
36SK9
1　10YR7/8黄橙色シルト、粘土ブロックが主（径3～5cm）
かわらけ小片少量
2　10YR3/2黒褐色、10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト（粗砂多）が主　緊密　小礫（径約5cm以下）数個　かわらけ小片微量
3　かわらけ片多量層　かわらけ片の中には1/4個体ぐらいの大破片はほぼ完形品も少量含むが、たいていは小片　ふく上れている土は10YR4/2灰黄褐色
4　埋土は3層に似るが、かわらけ片は少ない　10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト
5　かわらけ片を比較的多く含む　10YR4/2灰黄褐色シルト、粘土砂を少量含む
6　有機質の土が多い　2.5Y4/1黄灰色粘土、シルトが主
7.5GY7/1明緑灰色粘土ブロック（径4cm以下）　植物種子などを多く含む
7　6と同じだが6より有機質物が少ない
7.5GY7/1明緑灰色粘土ブロック（径4cm以下）が主



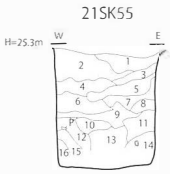
36SK8
1　2.5Y6/2灰黄色粘土が主　シルト、砂も部分的に混じる
水成堆積　小円礫微量
2　10YR4/1褐灰色粗砂混じりシルト
3　緑灰色粘土、シルト、砂混じり土ブロック
ブロック中にウリ科、ナスの種子などが入る
かわらけ片少量　折敷等、加工材含む



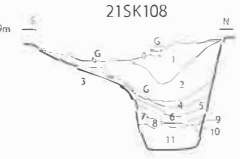
31SK80
1a　10YR4/2灰黄褐色シルト、砂混じり土が主体
かわらけ片、かわらけ細片を比較的多く含む
水成堆積であろう　当時の表土が入ったのか
1b　10YR3/2黒褐色シルト、2.5Y7/3浅黄色粘土ブロックが少量含まれる　水成堆積
1c　成分は1bと同じ　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック（径1cmほど）が3%ほど散在
1d　2.5Y5/2暗灰黄色粘土　水成堆積
2a　10YR4/2灰黄褐色シルトと2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック（径1～3cmほど）が半々
人為堆積　かわらけ片はほとんど含まれない　大礫（径10～20cm）が数個下部に入る　緊密
2b　10YR4/1褐灰色粘土が主体　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック（径2～3cm）が数%散在　下部に礫が入れられている　かわらけ片ほとんど含まれない　緊密
2c　2aとほぼ同じ
3a　ほとんどが地山起源粘土　シルト、砂で構成されている
自然堆積層　かわらけ片わずかに含む　緊密
3b　記入もれ
4　緑灰色シルト、粗砂　かわらけ片少量含む　有機物もいくらか含む



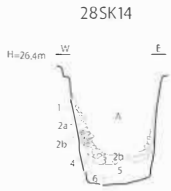
21SK37
1　10YR4/2灰黄褐色砂混じりシルト　灰色ブロック含　かわらけ片含　固い
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト　炭化物片1～3%
3　10YR5/3にぶい黄褐色砂混じりシルト　礫を複数含　固い
4　10YR2/3黒褐色砂混じりシルト　灰白色粘土ブロック含　炭化物片1%　1～3%よりも柔らかい
5　10YR4/1褐灰色砂混じりシルト　柔らかい
6　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト　柔らかい
7　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト　6層よりも水分を多く含む
炭化物片含
8　10YR5/1褐灰色砂混じりシルト　水分を多く含む



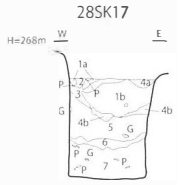
21SK55
1　10YR6/2褐灰色砂混じりシルト、10YR6/8明黄褐色粘土ブロック、10YR6/1褐灰色砂混じりシルトブロックが混在　炭化物片約3%
2　10YR6/8明黄褐色粘土ブロック、10YR6/1褐灰色砂混じりシルト、10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルトが混在　炭化物片約2～3%
3　10YR4/1褐灰色砂混じりシルトが主　10YR6/8黄褐色粘土ブロック
7.5Y6/2オリーブ色粘土ブロックが混在　炭化物片約1%
4　10YR4/1褐灰色砂混じりシルトが主　10YR6/1褐灰色砂混じりシルトブロック、10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが混在
5　10YR3/1黒褐色砂混じりシルト、10YR6/1褐灰色砂混じりシルト、10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが混在　炭化物片約1%
6　10YR4/1褐灰色砂混じりシルト、10YR3/1黒褐色砂混じりシルト、7.5Y6/8明黄褐色粘土ブロックが混在
7　10YR5/1褐灰色砂混じりシルト、10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが混在　炭化物片約1%
8　10YR5/1褐灰色砂混じりシルト、10YR6/8明黄褐色粘土ブロック、5G6/1緑灰色粘土ブロックが混在
9　5G5/1緑灰色粘土ブロック、10YR4/1灰色粘土ブロック、10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが混在
10　5G5/1緑灰色粘土ブロック、10YR4/1粘土ブロックが混在　木製品含む
11　10YR5/1黄褐色粘土ブロック、10YR4/1暗緑灰色粘土ブロックが混在
12　5G6/1緑灰色粘土ブロック、10YR6/2オリーブ灰色粘土が混在
13　5G6/1緑灰色粘土、10Y5/1灰色粘土が混在
14　7.5YR2/2黒褐色粘土ブロック、10GY6/1緑灰色粘土ブロックが混在
15　10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが主　10YR5/1灰色粘土ブロック含む
16　5G6/1緑灰色粘土ブロック、10Y5/1灰色粘土ブロック、10YR6/8明黄褐色粘土ブロックが混在



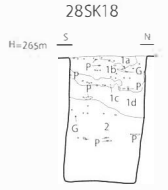
21SK108
1　10YR2/2黒褐色砂混じりシルト　緊密　拳大～頭大の礫含む
2　10YR3/1黒褐色砂混じりシルト　10YR8/6黄橙色粘土ブロック主ばら　腐積葉多量　緊密だが柔らかい
3　10YR4/1褐色砂
4　10YR4/1褐色砂混じりシルト　緊密だが柔らかい
5　10YR5/2灰黄褐色砂混じりシルトが主　10YR8/1浅黄色粘土ブロック（径5cm）少量
6　10YR6/3にぶい黄橙色粘土　緊密だが柔らかい
7　5Y8/3浅黄色粘土　緊密だが柔らかい
8　7.5GY5/1オリーブ灰色粘土　緊密だが柔らかい
9　10GY5/1緑灰色粘土　緊密だが柔らかい
10　7.5Yオリーブ黄色粘土　緊密だが柔らかい
11　10GY7/1明緑灰色粘土　緊密だが柔らかい



28SK14
A　礫層　人為的に入れられたもの
1　2.5Y7/3浅黄色砂混じり粘土ブロックが主　大礫が数個入る　拳さ1cm以下の10YR5/2灰黄褐色シルトが薄状に数本入る
2a　2.5Y6/3にぶい黄色砂混じりシルト　礫りあり
2b　大礫が密に入る
3　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック　周囲が崩壊したもの
4　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロックのかなりきれいな大ブロック　周囲が崩壊したもの
5　5Y4/1灰色粘土～砂が主　礫含む　オリーブ灰色粘土ブロックが少量入る　かわらけ片含む
6　5G6/1緑灰色粘土ブロックが80%以上　5層に似る



28SK17
1a　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック　炭化物片微量
1b　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロックが主　褐灰色粘土砂混じりシルトブロック約10%　かわらけ片多量　炭化物片散在
2　10YR5/1褐灰色粘土砂混じりシルトと2.5Y7/3浅黄色シルト混じり粘土ブロックが半々　炭化物片微量
3　10YR5/1褐灰色粘土混じりシルトが主　浅黄色シルト混じり粘土ブロック（径3cm以下）僅か　かわらけ細片　炭化物片散在
4a　10YR5/1褐灰色粘土混じりシルトが主　浅黄色シルト混じり粘土ブロック含む　かわらけ細片　炭化物片含む
4b　10YR5/1褐灰色粘土混じりシルトが主　浅黄色シルト混じり粘土ブロック含む　4aよりもかわらけ片多量　炭化物片含む
5　2.5Y7/3浅黄色シルト混じり粘土ブロック　炭化物片散在　かわらけ片少量
6　2.5Y7/3浅黄色シルト混じり粘土ブロック
7　10YR4/1褐灰色粘土混じりシルト　かわらけ片多量（完形品多い）



28SK18（すべて人為堆積）
1a　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック（径約5cm）が主　少量の10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルトにかわらけ片が少量混じる
1b　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルトが主　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック（径1～5cm）約10%　かわらけ細片多量　炭化物片約1%
1c　2.5Y7/3浅黄色粘土ブロック（径約2cm）が主　10YR4/3にぶい黄褐色砂混じりシルト約5%　かわらけ細片多量
1d　2.5Y7/3浅黄色砂、粘土ブロックが主　かわらけ片少量
2　10YR5/3にぶい黄褐色粗砂　かわらけ片多量　炭化物片少量

図243　土坑実測図（1）

○その他の特徴的な土坑

21SK37　遺構　92－103に位置する、検出面での径125・116cm程・深さ68cm程の円形の土坑である（図版編図58、図243）。底面は径80cm程の円形を呈する。

遺物　かわらけが出土しており（775g）、刻書をもつかわらけを含む。

21SK55　遺構　86－99に位置する、検出面での径138・132cm程・深さ155cm程の円形の土坑である（図版編図50、図243）。底面は径120cm程の円形を呈する。堆積土層は人為堆積の土層で埋め戻されている。

遺物　かわらけが多く出土し（7,775g）、曲物や折敷などの木製品も出土している。墨書をもつ木片を含む。

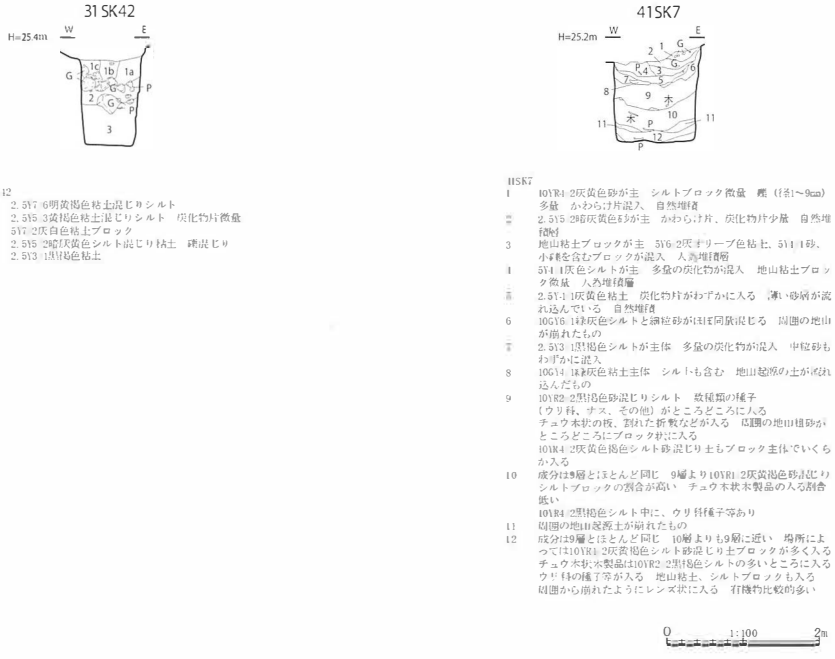
21SK78　遺構　83－96に位置する、検出面での96・82cm程・深さ86程cmの楕円形の土坑である（図版編図42、図243）。底面は径90cm程の楕円形を呈する。堆積土層は人為堆積による土層で埋め戻されている。

遺物　かわらけが多く出土し（1,245g）、国産陶器や輸入磁器も出土している。底面から木箱に入った状態の温石が出土している。

21SK108　遺構　79－91に位置する、検出面での223・155cm程・深さ141cm程の不整形の楕円形の土坑である（図版編図41、図243）。底面は径70cm程の楕円形を呈する。11層中位から火舎と花瓶が出土している。火舎は内面を上に正位で、その少し上に花瓶が確認された。

遺物　かわらけ（6,727g）や国産陶器などの土器類が出土している。埋土最下層から火舎と花瓶が出土している。

28SK14　遺構　83－71に位置する、検出面での122・114cm程・深さ155cm程の方形の土坑である



31SK42
1a　2.5Y7/6明黄褐色粘土混じりシルト
1b　2.5Y5/3黄褐色粘土混じりシルト　炭化物片微量
1c　5Y7/2灰白色粘土ブロック
2　2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり粘土　礫混じり
3　2.5Y3/1黒褐色粘土

41SK7
1　10YR4/2灰黄色砂が主　シルトブロック微量　礫（径1～9cm）多量　かわらけ片混入　自然堆積
2　2.5Y5/2暗灰黄色砂が主　かわらけ片、炭化物片少量　自然堆積層
3　地山粘土ブロックが主　5Y6/2灰オリーブ色粘土、5Y4/1砂、小礫を含むブロックが混入　人為堆積層
4　5Y4/1灰色シルトが主　多量の炭化物が混入　地山粘土ブロック微量　人為堆積層
5　2.5Y5/1灰黄色粘土　炭化物片がわずかに入る　薄い砂層が流れ込んでいる　自然堆積
6　10GY6/1緑灰色シルトと細粒砂がほぼ同質混じる　周囲の地山が崩れたもの
7　2.5Y3/1黒褐色シルトが主体　多量の炭化物が混入　中粒砂もわずかに混入
8　10G4/1緑灰色粘土主体　シルトも含む　地山起源の土が流れ込んだもの
9　10YR2/2黒褐色砂混じりシルト　数種類の種子（ウリ科、ナス、その他）がところどころに入る　チュウ木状の板、割れた折敷などが入る　周囲の地山粒砂がところどころにブロック状に入る
10　10YR4/2灰黄色褐色シルト砂混じり土もブロック主体でいくらか入る　成分は9層とほとんど同じ　9層より10YR3/2灰黄褐色砂混じりシルトブロックの割合が高い　チュウ木状木製品の入る割合低い
11　10YR4/2黒褐色シルト中に、ウリ科種子等あり　周囲の地山起源土が崩れたもの
12　成分は9層とほとんど同じ　10層よりも9層に近い　場所によっては10YR4/2灰黄褐色シルト砂混じり土ブロックが多く入るチュウ木状木製品は10YR2/2黒褐色シルトの多いところに入るウリ科の種子等が入る　地山粘土、シルトブロックも入る　周囲から崩れたようにレンズ状に入る　有機物比較的多い

図244　土坑実測図（2）

（図版編図39、図243）。底面は径80cm程の方形を呈する。堆積土層は人為的に埋め戻された土層で、上層から3/4程の深さまでは礫で構成される。底面から金槌と鑿が対面するように出土している。
遺物　かわらけが出土しているほか（6,220g）、底面で金槌と鑿が出土している。

28SK17　遺構　82－73に位置する、検出面での136・128cm程・深さ158cm程の隅丸方形の土坑である（図版編図39、図243）。底面は径100cm程の隅丸方形を呈する。堆積土層は上層が人為的な土層で埋め戻されている。
遺物　かわらけ（20,051g）や国産陶器、輸入磁器が出土している。墨書かわらけ１点を含む。

28SK18　遺構　84－75に位置する、検出面での112・83cm程・深さ164cm程の方形の土坑である（図版編図47、図243）。底面は径90・70cmの方形を呈する。堆積土層は人為的に埋め戻されている。
遺物　かわらけが多く出土し（33,197g）、土壁や水晶が出土している。穿孔かわらけや墨書かわらけを含む。墨書かわらけはひらがなが記される。

31SK42　遺構　69－77に位置する、検出面での99・92cm程・深さ131cm程の円形の土坑である（図版編図28、図244）。底面は径95cm程の円形を呈する。堆積土層は人為的に埋め戻されている。
遺物　かわらけのほか（1,236g）、完形の石硯が出土している。

（６）塀跡

遺跡内では、34条の塀跡を検出している（表17）。直線的な溝跡や、柱列として確認されている。なお、表中の構造は、溝状の布掘りをもたず柱列で構成される「掘立柱塀」・溝状の布掘りをもち掘方内に板材を並べた「縦板塀」・溝状の布掘りをもち掘方内に角材や柱を並べた「材木塀」の種別で示す。布掘りをもつが抜き取り等の要因などにより材が検出できていないものは便宜的に「布掘り塀」として表中に示し、そのほか縦板塀で支柱をもつなどの細部は本文に記す。軸方向は南北を基準軸に、東西方向への傾きをN－□°－E等とし、一連の塀跡が軸方向を大きく変えて走る場合は、両方の軸方向を記す。

表16　12世紀代の塀跡

遺構名	位置	構造	軸方向	遺構重複関係	備考
23SA1	85－83	材木塀	N－0°－E	23SA3、23SA4、23SK60、23SK61、23SK62、23SK83→23SA1。 23SB4、23SK84、23SB7と空間重複。	
23SA2	88－79	布掘り塀	N－9°－E		
23SA3	87－83	掘立柱塀	N－2°－E	23SA3→23SA4→23SA1。 23SB3と空間重複。	
23SA4	87－83	掘立柱塀	N－9°－E	23SA3→23SA4→23SA1。	
23SA6	86－81	掘立柱塀	N－0°－E		
28SA1	73－69	材木塀	N－4°－E	28SA1→28SX1→28SB1。31SB6→28SA1。 28SB5、55SB20、65SA2と空間重複。	
31SA4	78－83	掘立柱塀	N－40°－E		
36SA2	75－65	布掘り塀	N－10°－E	36SA2→55SB19。 31SB7と空間重複。	
36SA3	75－65	縦板塀	N－7°－E	55SB23、31SK83、31SK84と空間重複。	
36SA4	74－65	布掘り塀	N－4°－E	36SA5、55SB23、31SK85と空間重複。	
36SA5	74－63	布掘り塀	N－25°－E	36SA4と空間重複。	
42SA20	95－67	－	N－5°－E		

遺構名	位置	構造	軸方向	遺構重複関係	備考
50SA1	85－63	材木塀	N－11°－E	50SA2、55柱列1、50SB6B→50SA1。50SB20、50SB22→50SA1。 50SB5、50SB6A、50SB8、50SB10と空間重複。	42SD4
50SA2	88－62	材木塀	N－17°－E	50SA2→50SA1、50SB3。 50SA2→50SA6、50SA7。 50SA10、50SB5、50SB7、50SB16、50SB17、50SB28と空間重複。	
50SA5	89－65	材木塀	N－3°－E	50SA6→50SA5だが、明確ではない。	
50SA6	89－65	材木塀	N－15°－E	50SA6→37SE2、50SA2、50SA7。 50SA6→50SA5だが、明確ではない。	
50SA7	86－66	縦板塀	N－3°－E	50SA2、50SA8→50SA7→50SA6。50SB16と空間重複。	
50SA8	86－66	縦板塀	N－9°－E	50SA8→50SA7。	
50SA10	89－67	材木塀	N－15°－E	50SA10→68SK35。	
50SA12	90－65	材木塀	N－10°－E		
50SA13	90－62	布掘り塀	N－14°－E		
52SA1	71－65	材木塀	N－17°－E	52SB21、52SK22と空間重複。	
52SA2	67－58	縦板塀	N－17°－E		
55柱列1	82－62	掘立柱塀	N－6°－E	55柱列1→28SA1。 28SB1、28SB5、28SB6、55SB20、55柱列2、55SK64と空間重複。	28SA3
55柱列2	80－63	材木塀	N－11°－E	55柱列2→55SA1。28SB1、28SB2、55柱列1、28SB6と空間重複。	
55SA1	78－64	布掘り塀	N－0°－E	55柱列2→55SA1→55SB21、28SE3。 55柱列1と空間重複。	
55SA2	84－65	縦板塀	N－0°－E		
55SA3	82－59	縦板塀	N－11°－E		
55SA4	82－58	縦板塀	N－11°－E		
65SA1	67－60	布掘り塀	N－25°－E	28SE15と空間重複。新旧不明。	
65SA2	69－69	縦板塀	N－11°－E	31SB5、28SA1と空間重複。	
65SA3	68－69	縦板塀	N－27°－E		
72SA1	59－42	掘立柱塀	N－17°－E	72SB1と空間重複。	
72SA2	59－43	掘立柱塀	N－17°－E	72SA2→72SK6。 72SB1と空間重複。	

※遺構名太字は本文中で記述。

表18　近世以降の塀跡（遺構名称が変更になったものを含む）

遺構名	位置	備考
23SA5	－	23SB3に変更。
23SA7	－	23SB10に変更。
28SA2	－	55SA1に変更。
28SA3	－	55柱列1に変更。
28SA4	－	55SA1に変更。
31SA1	－	55SB1に変更。
31SA2	－	
31SA3	－	52SB26に変更。
31SA5	76－85	時期不詳
36SA1	－	50SD10に変更。
36SA6	－	52SD21に変更。
36SA7	－	52SD23に変更。
36SA8	－	52SD24に変更。
36SA9	－	52SD15に変更。

遺構名	位置	備考
36SA10	－	
41SA1	66－63	
42SA20		後の調査で欠。
42SA21		42SA20に変更。
37SA1	－	50SA2に変更。
37SA2	－	50SA8に変更。
37SA3	－	59SD6に変更。
49SA1	90－71	
49SA2	85－72	57SD8。
50SA11	－	
50SA3	88－64	
50SA4	89－64	
50SA9	90－68	

【50次以降の調査で調査・検討した塀跡】

50SA1　遺構　85－63付近に位置し、東西方向に47m程延びる材木塀である（図版編図38・45、図245・246・247）。軸方向はN－11°－Eである。幅30～60cmの溝状の掘方に、径20～30cm程の円形の柱材が並ぶ。確認された部分では柱材の間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶとみられる。50SA2、

55柱列１、50SB6B→50SA1、50SB20、50SB22→50SA1の新旧関係が確認できる。また、50SB5、50SB6A、50SB8、50SB10と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　埋土からかわらけ、国産陶器が出土している（図252－６～10）。

50SA2　遺構　88－62付近に位置し、南北方向に31ｍ程、東西方向に26m程延びる材木塀である（図版編図45・46・53、図245）。軸方向はＮ－17°－Ｅである。幅30cmの溝状の掘方に、径10～15cm程の円形の柱材が並ぶ。柱材の間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶとみられる。50SA2→50SA1、50SB3の新旧関係、50SA2→50SA6、50SA7の新旧関係が確認できる。また、50SA10、50SB5、50SB7、50SB16、50SB28、50SB17と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。
遺物　埋土からかわらけが出土している。

50SA5　遺構　89－65付近に位置し、南北方向に5.4m程延びる材木塀である（図版編図45・46、図245）。軸方向はＮ－3°－Ｅである。幅35cm程の溝状の掘方に、径15cm程の円形の柱材が並ぶ。柱材の間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶとみられる。50SA6→50SA5の新旧関係が確認できるが、明確ではない。

50SA6　遺構　89－65付近に位置し、南北方向に8.6ｍ程、東西方向に6.9ｍ程延びる材木塀である（図版編図46・53、図245）。軸方向はＮ－15°－Ｅである。幅20～40cm程の溝状の掘方に、径10～15cm程の円形の柱材が並ぶ。柱材の痕跡は不明瞭な部分が多いが、確認できる部分での間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶと推察できる。50SA6→37SE2、50SA2、50SA7の新旧関係が確認できる。また、50SA6→50SA5の新旧関係が確認できるが、明確ではない。

50SA7　遺構　86－66付近に位置し、東西方向に19.7ｍ程延びる縦板塀である（図版編図46、図245）。軸方向はＮ－3°－Ｅである。幅20cm程の溝状の掘方に、３～５×15～20cm程の板材が並ぶ。50SA2、50SA8→50SA7→50SA6の新旧関係が確認できる。50SB16と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

50SA8　遺構　86－66付近に位置し、南北方向に5.4m程延びる縦板塀である（図版編図46、図245）。軸方向はＮ－9°－Ｅである。幅20cmの溝状の掘方に、３～５×10～15cm程の板材が並ぶ。50SA8→50SA7の新旧関係が確認できる。

50SA10　遺構　89－67付近に位置し、西から平面形をみると南北方向に2.4m程、東西方向で折れて西に16.5m程、南北方向に折れて南に9.7ｍ程延びる材木塀である（図版編図46・53・54、図245）。さらに、東西方向部分の中央付近で南北方向に分岐して北に4.5m程延びる。軸方向はＮ－15°－Ｅである。幅30cm程の溝状の掘方に、径10cm程の円形の柱材が並ぶ。柱材の痕跡は不明瞭な部分が多いが、確認できる部分での間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶと推察できる。南北方向の分岐は別遺構の可能性もあるが、検出・精査時に同一の遺構として把握している。50SA10→68SK35の新旧関係が確認できる。
遺物　埋土からかわらけが出土している。

50SA12　遺構　90－65付近に位置し、南北方向に６ｍ程延びる材木塀である（図版編図53、図245）。軸方向はＮ－10°－Ｅである。幅30cm程の溝状の掘方に、径15cm程の円形の柱材が並ぶ。柱材の痕跡は不明瞭な部分が多いが、確認できる部分での間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶと推察できる。

50SA13　遺構　90－62付近に位置し、西から平面形をみると南北方向に1.6ｍ程、東西方向に折れて西に13.1ｍ程延びる布掘り塀である（図版編図53、図245）。軸方向はＮ－14°－Ｅである。幅30～35cm程の溝状の掘方に、径15cm程の円形の柱材が並ぶと推察できる。柱材の痕跡は不明瞭な部分が多いが、確認できる部分での間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶ可能性がある。
遺物　埋土から輸入磁器が出土している。

52SA1　遺構　71－65付近に位置し、東西方向に13.2ｍ程延びる材木塀である（図版編図26・32、図245）。軸方向はＮ－17°－Ｅである。幅20～30cm程の溝状の掘方に、径10cm程の円形の柱材が並ぶ。柱材の間隔はせまく、柱材が間断なく並ぶとみられる。52SB21、52SK22と空間重複するが、遺構の切り合いはないもしくは不明である。位置は20m程離れるものの、52SA2と平行する。
遺物　埋土からかわらけが出土している（図251－11）。

52SA2　遺構　67－58付近に位置し、東西方向に46ｍ程延びる縦板塀である（図版編図25・26、図245）。軸方向はＮ－17°－Ｅである。残存が不良のため、間隔をもって検出された。幅10～20cm程の溝状の掘方に、５×15cm程の板材が並ぶ。52SC1を構成する52SD29と平行し、52SD14は52SA2と一連の可能性がある。52SA1と平行するほか、36SA5の延長と同一の軸方向を示す。

55柱列１　遺構　82－62付近に位置し、北西から平面形をみると東西方向で東に12.6ｍ程、83－61付近で南北方向に折れ南に41ｍ程延びると想定した掘立柱塀である（図版編図32・38・39、図245・246）。さらに、82－69付近で東西方向に折れ西に39.4ｍ程延びると想定できる。軸方向はＮ－6°－Ｅである。径70cm程の柱穴が連続し、北西から５×16×15間分が確認できる。柱間寸法は272cm（９尺）を基本に復元できる。55柱列1→28SA1の新旧関係が確認できる。28SB1、28SB5、28SB6、55SB20、55柱列2、55SK64と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。28SB6とは柱列がそろうようにして近接する。28SB6→55柱列1の可能性もあるが、明確ではない。
遺物　遺物は出土していない。

55柱列２　遺構　80－63付近に位置し、南西から平面形をみると南北方向で北に51ｍ程、80－60付近で東西方向に折れ東に19.8ｍ程延びる材木塀である（図版編図38・39・45、図245・246）。軸方向はＮ－11°－Ｅである。一部で掘方とみられる幅50～60cm程の溝が検出されており（Ｙ=80、Ｘ=62～66付近）、本来の構造は溝状の掘方に径20～50cm程の柱材が並ぶ材木塀と推察できる。柱材の間隔は240～260cm前後を基本とする。柱材の間には板材が並ぶ可能性がある。28SB6→55柱列2の新旧関係の可能性があるが、判然としない。55柱列2→55SA1の新旧関係が確認できる。28SB1、28SB2、55柱列1と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

55SA1　遺構　78－64付近に位置し、南西から平面形をみると南北方向で北に14.1ｍ程、78－64付近で東西方向に折れ西に19.4ｍ程延びる布掘り塀である（図版編図32・38、図245・246）。さらに、東

Y=50 54 58 62 66 70 74 78 82 86 90 94 98

X=38 42 46 50 54 58 62 66 70 74 78 82 86 90 94 98 102 106 110 114

図245 堀跡分布図

西方向の西から６ｍ程の79－64付近で南北方向に分岐して南に20.1ｍ程延びる。軸方向はＮ－0°－Ｅである。幅20～50cm程の溝状の掘方のみの確訳である。溝内に材が並ぶと想定できるが、材の痕跡は確認できない。55柱列2→55SA1→55SB21、28SE3の新旧関係が確認できる。55柱列１と空間重複するが、遺構の切り合いはない。55SX2と重複もしくは近接するが、削平もあり、新旧関係は判断できない。

55SA2　遺構　84－65付近に位置し、南北方向に３ｍ程延びる布掘り塀である（図版編図46、図245）。軸方向はＮ－0°－Ｅである。幅20cm程の溝状の掘方に、３～５×10cm程の板材が並ぶとみられる。

55SA3　遺構　82－59付近に位置し、東西方向に27ｍ程延びる縦板塀である（図版編図37・38・45、図245）。軸方向はＮ－11°－Ｅである。幅20cm程の溝状の掘方に、３～５×10～20cm程の板材が並ぶ。

55SA4　遺構　82－58付近に位置し、南北方向に10ｍ程延びる縦板塀である（図版編図37、図245）。軸方向はＮ－11°－Ｅである。幅20～30cm程の溝状の掘方に、３×15cm程の板材が並ぶ。

65SA1　遺構　67－60付近に位置し、南北方向に26ｍ程延びる布掘り塀である（図版編図27・33、図245・251）。軸方向はＮ－25°－Ｅである。幅40cm程の溝状の掘方のみの検出で、材の痕跡は確認されていない。28SE15と空間重複するが、遺構の切り合いは不明である。
遺物　遺物は出土していない。

65SA2　遺構　69－69付近に位置し、南北方向に18.2ｍ程延びる縦板塀である（図版編図27・32・33、図245・251）。軸方向はＮ－11°－Ｅである。幅25cm程の溝状の掘方のみの検出で、材の痕跡は確認されていない。31SB5、28SA1と空間重複するが、遺構の切り合いは不明である。
遺物　遺物は出土していない。

65SA3　遺構　68－69付近に位置し、南北方向に20.5ｍ程延びる縦板塀である（図版編図27・32・33、図245・251）。軸方向はＮ－27°－Ｅである。幅18cmの溝状の掘方に、５×20cm程の板材が並ぶ。
遺物　遺物は出土していない。

72SA1　遺構　59－42付近に位置し、南北方向に15．9ｍ程延びる掘立柱塀である（図版編図13、図245・247）。軸方向はＮ－17°－Ｅである。長軸径38～115cm程の柱穴が８個並び、７間分確認できる。柱間寸法は北から212・181・220・255・255・242・242cmに復元できるが、柱間は統一されていない。柱穴のうちP20、P21は平面形が楕円形で、P22とP23でみられるように２個の柱穴が並ぶ遺構があることから、同一位置での作り替えが想定される。72SB1と空間重複するが、遺構の切り合いはない。72SA2と2.8ｍ程離れて平行する。
遺物　遺物はP21、P24でかわらけ細片が出土しているのみである。

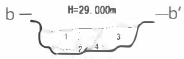
図246　55SA1周辺平面図（1/300）

72SA1

P22・23

P22・23
1　10YR6/2灰黄褐色と10YR7/8黄橙色の混合土（7：3）
　締り密、粘性非常に強　中～下位に炭化物（φ5mm程度）2%
　と赤色粒子（酸化鉄か、φ1～2mm）3%含む　P22堆積土
2　10YR4/2灰黄褐色　締り密、粘性やや強　P23堆積土

P21



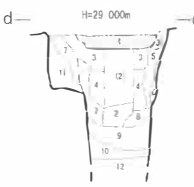
P21
1　10YR3/2黒褐色　締り、粘性共に中
　地山ブロック（φ2～50mm）30%含む　後世の掘乱？
2　10YR7/8黄橙色と10YR6/2灰黄褐色の混合土　締り密、
　粘性強　炭化物（φ1～5mm）5%含む　地山由来のほりかた？
3　2層とほぼ同じだが炭化物2%しか含まない
4　10YR7/8～8/8黄橙色　締り密、粘性非常に強
　灰黄　色土ほとんど含まず

P20

P20
1　10YR3/2黒褐色　締り、粘性共に中
　地山ブロック（φ2～5mm）30%含む
2　10YR6/2灰黄褐色と10YR7/8黄橙色の混合土（7：3）
　締り密、粘性非常に強　炭化物（φ2～10mm）5%
　酸化鉄10%含む

72SA2

P28・47



P28・47
1　10YR3/2黒褐色　締り有　地山ブロック（φ2～5mm）5%
　炭化物（φ1～3mm）3%含む
2　10YR4/3暗褐色　締り疎、粘性弱　地山ブロック2%以下　住蔵跡
3　10YR7/8橙色地山ブロック　締り強　10YR3/3暗褐色上との混合土（6：4）
　炭化物（φ1～5mm）15%、かわらけ片3%含む　掘り方
4　10YR3/3暗褐色と10YR7/8橙色地山ブロックとの混合土（7：3）
　炭化物（φ1～5mm）15%、かわらけ片3%含む　掘り方
5　10YR4/3にぶい黄　色～4/2灰黄褐色　締りやや疎　炭化物（φ10mm程度）
　3%含む
6　10YR7/8橙色～8/1浅黄橙色　地山崩落土か
7　10YR5/2灰褐色　締り有、粘性やや強　炭化物（φ5～20mm）15%、
　かわらけ片3%含む　やや砂質の掘り方
8　10YR4/3にぶい黄褐色　締りやや疎　炭化物（φ1～3mm）3%
　地山ブロック（φ10mm弱）少量含む　掘り方
9　10YR5/2灰褐色　粘性強　7層に似るが炭化物の混ちはとんど無く、
　酸化鉄を含む
10　10YR4/1黒色炭層　小型の炭化材と粘土質黒色土で構成
　少量の灰褐色土含む　人為堆積か
11　10YR5/2灰褐色　締り密、粘性強　10YR8/4～8/6浅黄橙色地山ブロック
　との混合土　炭化物（φ2～5mm）3%含む
12　10YR4/1黒色　部分1青灰粘土地山との混合土　互層堆積で、
　下位ほど黒色土主体となる　人為堆積か
※1～8層＝P17a理土、9・10・12層＝P17b理土、11層＝P28理土

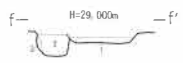
72SA2

P27

P27
1　10YR6/1褐灰色　締り密　炭化物（φ2～5mm）
　酸化鉄各10%含む
2　10YR7/8黄橙色と10YR6/2灰黄褐色の混合土（8：2）
　締り密、粘性強　炭化物（φ1～2mm）2%含む
　地山由来の掘り方

72SA2

72SK6・P18



72SK6・P18
1　10YR3/2黒褐色　締り密　地山ブロック（φ2～10mm）5%、
　炭化物（φ2～5mm）　赤色粒子（かわらけ片？）各2%含む
2　10YR5/2灰黄褐色　締り密、粘性中
　地山ブロック（φ2～15mm）5%、炭化物（φ1～2mm）
　2%含む
3　10YR7/8黄橙色と10YR6/2灰黄褐色の混合土
　締りやや密　頭部崩落土または掘り過ぎ

図247　72SA1・72SA2平面・断面図

0　1:80　2m

72SA2　遺構　59－43付近に位置し、南北方向に14m程延びる掘立柱塀である（図版編図13、図245・246・248）。軸方向はN－17°－Eである。径50cm程の円形の柱穴が7個並び、6間分確認できる。柱間寸法は北から220・220・242・242・260・220cmと72SA1と比して等間隔に近いが、一定ではない。72SA2→72SK6、72P47の新旧関係が確認できる。また、72SB1と空間重複するが、遺構の切り合いはない。72SA1とは2.8m程離れて平行する。

関連遺構　72P47　59－42に位置する、径134×102cmの円形の柱穴である（図版編図13、図242）。土層は259頁で既述した。柱痕跡で確認できる柱径は32cm程で、深さ130cm程まで精査を行ったが、完掘していない。72SA2（P28）→72P47の新旧関係が確認できる。72SA1・2と近接するが周囲に関連する遺構は確認されておらず、単独の柱穴とみられる。深さ等に特徴があるものの、性格は不明である。

【50次以前の調査で調査・検討した塀跡の概要】

23SA1　遺構　85－83付近に位置し、西から平面形をみると東西方向で東に45m程、89－83付近で南北方向に折れ北に22m程延びる材木塀である（図版編図40・41・48・、図245・248・249）。なお、23次調査時には北側にさらに延長する可能性が想定されていた。北側の延長部分は低地になり、延長が推測できる範囲を対象に49次・68次調査を実施しているが、23SA1の延長は検出されていない。軸方向はN－0°－Eである。幅30～70cmの溝状の掘方に、東西方向部分は10～16×20～30cm程の角材が、南北方向は16～20×20～30cm程の角材が並ぶ。いずれの辺でも材の痕跡は連続して確認されており、掘方に間断なく材が並ぶと推察できる。23SA3、23SK60、23SK61、23SK62、23SK83→23SA1の新旧関係が確認できる。23SSA4との新旧は、23SA4→23SA1として記されているものの（岩手埋文1995）、図面等の記録からはやや不確定な部分が残るように思われる。また、23SB4、23SK84と空間重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　埋土からかわらけが出土している（図251－1・2）。

23SA3　遺構　87－83付近に位置し、南北方向に43.6m程延びる掘立柱塀である（図版編図47・48、図245・246・248・249）。軸方向はN－2°－Eである。径35～50cm程の円形の柱穴が20個並び、他遺構との重複から20間分確認できる。柱間寸法は200cm程で、203cm（6.7尺）に復元できる。23SA3→23SA4、23SA3→23SA1の新旧関係が確認できる。また、23SB3と空間重複するが、遺構の切り合いはない。23SB2との関連が指摘されていたが、空間重複しており別時期の遺構と理解できる。

23SA4　遺構　87－83付近に位置し、南北方向に24m程延びる掘立柱塀である（図版編図48、図245・248・249）。軸方向はN－9°－Eである。径40～80cmの円形の柱穴が12個並び、11間分確認できる。柱間寸法は200～215cm程で、212cm（7尺）に復元できる。23SA3→23SA4→23SA1の新旧関係が確認できる。

28SA1　遺構　73－69付近に位置し、南西から平面形をみると南北方向で北に18.8m程、73－68付近で東西方向に折れ西に28.8m程延びる掘立柱塀である（図版編図32・33・39、図245・246・250）。軸方向はN－4°－Eである。さらに、79－68付近で南北方向に折れ、2m程間隔があくものの南に11.2m程延びる。ただし、この等辺は軸方向がN－1°－Wで、他辺とやや異なる。幅50cmの溝状の掘方に、15～20cm程の柱材痕跡が確認できる。28SA1→28SX1→28SB1の新旧関係が確認できる。28SB5、

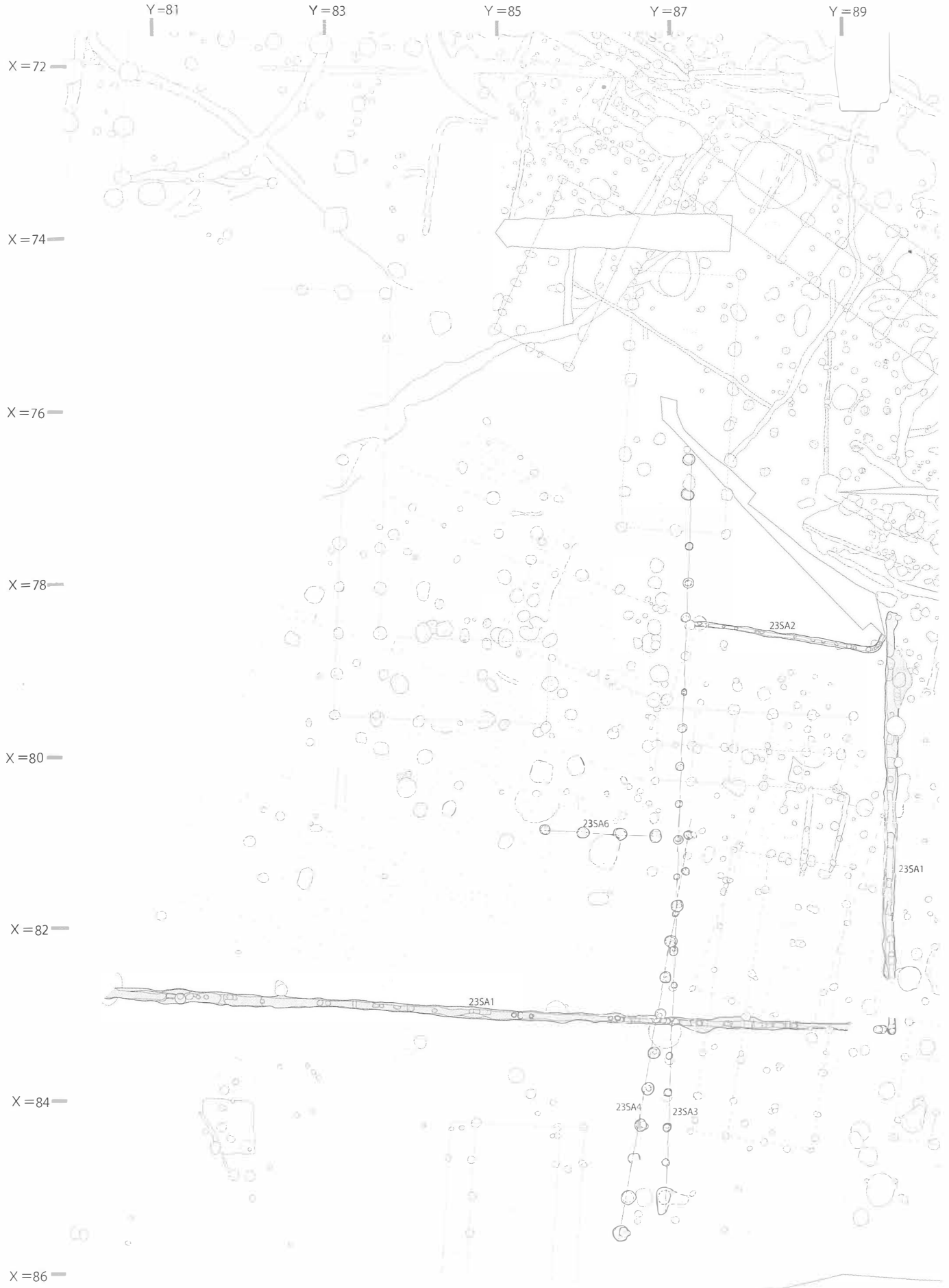


図248　23SA1周辺平面図（1/300）

a　H=26.4m　a′

1　10YR5/1褐灰色シルト混じり粘土が主体。
地山粘土の大小ブロックが混入する。
かわらけ片少量含む。
2　10YR3/1褐灰色シルト混じり粘土。
炭化物片がやや含まれる。
3　10YR4/2灰黄褐色～10YR5/2褐灰色シルト
混じり粘土が主体。地山粘土小ブロックが散在する。
炭化物片、かわらけ片多量。
4　地山粘土ブロック主体。掘り方埋土。

b　H=26.4m　b′

1　10YR5/1褐灰色シルト混じり粘土が主体。
地山粘土の大小ブロックが混入する。
炭化物片、かわらけ片が少量含まれる。
2　10YR3/1褐灰色シルト混じり粘土。炭化物片点在。
3　10YR5/2灰黄褐色～10YR4/1褐灰色シルト混じり粘土が主体。
斜化の著しい地山粘土ブロックが約30%含まれる。
かわらけ片がやや多い。
4　5Y7/2淡黄色～10YR7/6明黄褐色のほとんど汚れていない
地山粘土。酸化している。
5　2.5Y7/2淡黄色～10YR7/6明黄褐色地山粗砂混じり
粘土ブロックが卓越する。炭化物片微量。
6　2.5Y7/2淡黄色～10YR7/6明黄褐色地山粗砂混じり
粘土ブロックが卓越する。
5に似るが灰黄褐色荒砂が混じるなどわずかに汚れている。
炭化物片、かわらけ片が少量含まれる。

c　H=27.0m　c′

0　現代の盛り土。
1　基本層位Ⅰ層。
1　10YR4/2灰黄褐色、粘土質、緻密。
2　10YR5/2灰黄褐色シルト混じり粘土。緻密。
炭化物片がⅠより多く、全体に散在する。
かわらけ片少量。
3　2.5Y5/1黄灰色シルト混じり粘土。緻密だが軟質。
炭化物片少量。
4　10YR4/2灰黄褐色粘土が上半を占める。
下半部は10YR6/6明黄褐色粘土が占める。
層理面不明瞭。炭化物片点在。撹拌の埋土である。
5　10YR4/2灰黄褐色粘土混じりシルト。緻密。
粘土ブロックが不定期に混入する。炭化物が点在。
上部にはかわらけ細片がある。撹拌の埋土である。

d　H=27.0m　d′

1　10YR5/2灰黄褐色シルト混じり粘土。
緻密。炭化物片がⅠより多く、
全体に散在する。
かわらけ片少量。
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト。緻密。
炭化物片が極少量。

e　H=27.0m　e′

1　10YR5/2灰黄褐色シルト混じり粘土。緻密
炭化物片がⅠより多く、全体に散在する。
かわらけ片少量。
2　2.5Y5/1黄灰色シルト混じり粘土。
緻密だが軟質。炭化物片少量。
3　5Y6/1灰色粘土　材柱痕である。
4　10YR4/3にぶい黄褐色シルト。緻密。
炭化物片が極少量。

f　H=27.0m　f′

1　10YR5/3にぶい黄褐色地山粘土。緻密。炭化物片多量
かわらけ細片散在。
2　10YR5/2灰黄褐色シルト混じり粘土。緻密。
炭化物片がⅠより多く、全体に散在する。かわらけ片少量。
3　2.5Y5/1黄灰色シルト混じり粘土。緻密だが軟質。
炭化物片少量。
4　2.5Y6/1にぶい黄色地山粘土。かわらけ細片極少量。
掘り方の埋土である。
5　10YR5/3にぶい黄褐色粘土混じりシルト。緻密。
炭化物片極少量。地山粘土ブロック混入。
掘り方の埋土である。

g　H=27.0m　g′

1　10YR5/3にぶい黄褐色地山粘土。緻密。炭化物片多量
かわらけ細片散在
2　10YR5/2灰黄褐色シルト混じり粘土。緻密。
炭化物片がⅠより多く、全体に散在する。かわらけ片少量。
3　2.5Y5/1黄灰色シルト混じり粘土。緻密だが軟質。
炭化物少量。

0　1:60　2m

図249　23SA1平面・断面図

65SA1

65SA1
1　にぶい黄褐色粘質土10YR4/3

65SA1
1　黒褐色粘質土10YR3/2
かわらけ片含む

28SA1

1　10YR6/3にぶい黄橙色地山粘土ブロック
2　10YR6/3にぶい黄橙色地山粘土ブロック
かわらけ細片含まれる
3　10YR5/3にぶい黄褐色シルトが主体
10YR7/8黄橙色地山粘土ブロック
4　1層に類似する
5　10YR6/3にぶい黄橙粘土混じりシルトに
10YR7/8黄褐色粘土ブロックが入る
6　2.5Y7/1浅黄色地山粘土ブロックが主体

1　10YR5/2灰黄褐色粘土混じりシルト主体
板痕跡である
10YR6/8明黄褐色地山粘土が散在する
炭化物片約2%、かわらけ細片を含む
2　10YR5/8黄褐色地山粘土が主体
灰黄褐色土が部分的に入る　緊密
掘形の埋土である　拳大の亜円礫入る
3　10YR4/1褐灰色粘土混じりシルトが主体
10YR5/8黄褐色地山粘土ブロックが入る
緊密　かわらけ、炭化物を数%含む

1　10YR5/4にぶい黄褐色シルト
炭化物片を約1%含む
かわらけ細片を少量含む
亜円礫（径約5cm）を複数含む
2　10YR5/6黄褐色シルト　緊密
3　10YR6/8明黄褐色粘土混じりシルト　緊密
4　10YR6/8明黄褐色粘土　3層と類似する
緊密
5　10YR3/2黒褐色シルト　材痕跡と推測できる
6　10YR7/8黄橙色地山粘土ブロック

1　10YR7/8黄橙色地山粘土ブロックが主体
10YR4/2灰黄褐色シルトが隙間入る
かわらけ片含まれる
2　10YR5/8にぶい黄褐色シルトが主体
10YR7/8黄橙色地山粘土ブロック（径約1cm）
が約7%入る
3　10YR5/2灰黄褐色シルトが主体
炭化物片約1%混在
4　10YR4/2灰黄褐色シルトが主体
10YR7/8黄橙色地山粘土ブロックを10%含む
かわらけ細片含む
5　10YR7/8黄橙色地山粘土ブロック
6　10YR4/1褐色シルトが主体
※1～3は材の痕跡の可能性がある

1　10YR8/5にぶい黄褐色シルトが主体
10YR7/8黄橙色地山粘土ブロック（径約1cm）
が約7%入る
2　10YR4/2灰黄褐色シルトが主体
10YR7/8黄橙色地山粘土ブロックを10%含む
かわらけ細片含む
3　10YR7/8黄橙色地山粘土ブロック
4　不明
5　2.5YR7/1浅黄色地山粘土ブロックが主体
10YR4/2灰黄褐色シルトが少量混在
6　2.5Y5/1黄褐色粘土

図250　28SA1平面・断面図

55SB20、65SA2と空間重複するが、遺構の切り合いはないもしくは不明である。55SB20→28SA1の新旧関係が図面からは読み取れるが、記載は判然としない。

遺物　埋土からかわらけが出土している（図251－３～５）。

（７）道路跡

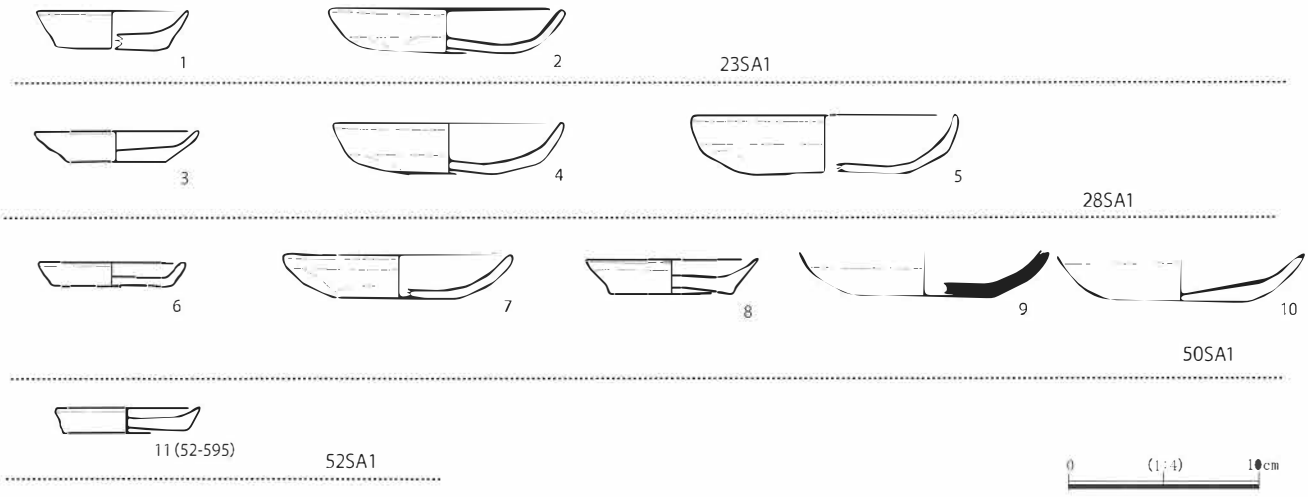


図251　塀跡出土土器類実測図

遺跡内では５条の道路跡が確認されている（表19)。いずれも平行する２条の溝跡等として検出された。

表19　12世紀代の道路跡

遺構名	構成（関連）遺構	位置	軸方向	遺構重複関係	備考
21SC1	西：21SD4・23SD10 東:21SD7・23SD13	91－95	N－2°－E N－4°－E	21SK38、21SK115、21SK126→21SC1	
52SC1	北:52SD30→52SD32 南:52SD29・52SD10・52SD14	67－56	N－60°－W N－65°－W	52SC1→52SB25	
55SC1	北:55SA3・37SD4(52SD32) 南:50SA1（52SD10・52SD14）・(西:50SA5)	81－61	N－79°－W N－79°－W	55柱列1→50SA1	
65SC1	北:65SA3 南:65SA1	68－70	N－70°－W		
73SC1	北:73SD4 南:73SD7	49－44	N－76°－W		

【50次以降の調査で調査・検討した道路跡】

52SC1　遺構　67－56付近に位置し、東西方向に断続的に30m程延びる道路跡である（図版編図25・26・31、図252・253・254）。北側側溝は52SD30、52SD32で構成され、52SD30→52SD32の新旧関係が確認できる。南側側溝は52SD29、52SD10、52SD14で構成され、52SA2が平行する。52SD14は52SA2と一連の可能性がある。52SD29と52SD10は平行して位置し、やや角度が異なる。直接的な重複はないが、道路側溝の造り替えが想定できる可能性がある。52SD10の走向方向は、北側側溝の新期の遺構である52SD32の走向方向と近似する。これから道路遺構の軸方向は、北側側溝が2条の溝の重複を造り替えとみた場合、北側側溝の旧期（52SD30）でN－60°－W・北側側溝の新期（52SD32）でN－75°－Wである。南側側溝の旧期で（52SD29）でN－65°－W、新期（52SD10）でN－85°－Wで、時期によりやや異なることとなる。ただし、旧期の道路（52SD29・52SD30）に比べて新期とみた道路は、遺構の検出も少なく、位置関係からも不確かな部分が多い。その場合、旧期とみた道路のみが道路としての位置づけが可能となることが想定される。幅は溝の間の路面幅で6.7m程、溝の芯芯で7.4m程である。新期をみた場合の幅は路面幅で12m程、溝の芯芯で13m程である。溝の底面は一定ではなく、10～15cm程深い位置が部分的に散見される。この底面の特徴は南北の溝（52SD30と52SD29）の両者で確認され、位置が概ね対応する。側溝とした溝はいずれも断面形状は方形で、地山土などを含む堆積土である52SC1→52SB25の新旧関係が確認できる。また、52SE7、52SI2、52SK39と空間的に重複するが、遺構の切り合いはない。

遺物　旧期の南北両側溝である52SD29、52SD30の埋土からかわらけが出土している（図256－13～17）。新期の北側側溝である52SD32の埋土からかわらけが出土している（図256－18・19）。

55SC1　遺構　81－61付近に位置し、東西方向に断続的に30m程延びる道路跡である（図版編図25・26・31、図252・253・254）。1・2次総括で、平行して検出された50SA1と55SA3との間を道路と想定している（岩手県教委2004）。軸方向はN－79°－Wである。52SC1と類似した方向を示すが、やや角度が異なる。特に52SC1として既述した溝のうち、新期の道路遺構ともみられる52SD32や、直接的な重複はなく新旧には不確定な部分があるが52SD10は、55SC1の延長方向と近接した位置や軸方向を示している。平面的に大きく離れていることや直線につながらないなどの不確実な要素が多く残るため確定できないが、これらの52SC1の新期や50SA5との関連を推察できる余地がある。なお、1・2次総括では52SC1の新期も合わせて55SC1として提示した。55柱列1→50SA1の新旧関係が確認できる。

遺物　50SA1の埋土からはかわらけが出土している。

65SC1　遺構　68－70付近に位置し、東西方向に26m程延びる道路跡である（図版編図27・32・33、図252）。平行して検出された65SA1と65SA3の間を道路と想定している。軸方向はN－70°－Wである。2本の塀間の幅は4m程である。28SE15、31SB5、28SA1と空間重複するが、遺構の切り合いは不明である。

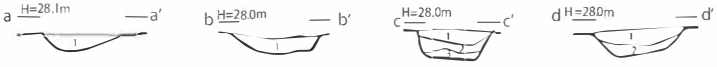
73SC1　遺構　49－44付近に位置し、東西方向に8m程延びる道路跡である（図版編図10）。堀の外側にあたり、堀外部の遺構とすべきだが調査次（73次）の関連上ここで示す。構成する2条の溝には50cm程の底面標高の差があり、道路と明確になるかは周囲の調査成果を待つ必要があるが、道路の可能性がある遺構として提示しておく。平行して確認された73SD4と73SD7をそれぞれ南北の側溝と

Y=66
70
74
78
82
86
90
94
98
X=58
62
66
70
74
78
82
86
90
94
98
102
52SC1
55SC1
21SC1
0
(1:1000)
50m

図252　道路跡分布図

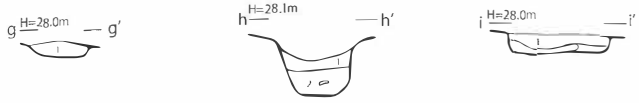
図253　52SC1・55SC1平面図

52SD32



52SD32(共通)
1　10YR6/1褐灰色土　酸化鉄分多量混入　礫、陶器片混入
2　10YR4/1褐灰色土　炭化物粒少量混入　10YR7/8黄橙色ロームまだら混入
3　10YR7/8黄橙色ローム　10YR5/2灰黄褐色土まだら少量混入

52SD29

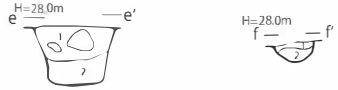


1　10YR5/2灰黄褐色土
炭化物粒、酸化鉄分微量混入

1　10YR5/2灰黄褐色土
炭化物粒微量混入
10YR7/8黄橙色ロームまだら多量混入
礫少量含む
2　10YR4/1褐色土　10YR6/8黄橙色ローム
まだら多量　ほぼ完形のかわらけ含む

1　10YR6/2灰黄褐色土
炭化物粒微量混入
2　10YR4/1褐色土　10YR7/8黄橙色ローム
まだら少量混入　礫少量含む

52SD30



1　10YR5/1褐灰色土
礫、酸化鉄分多量混入
2　10YR7/8黄橙色ローム　炭化物粒、
10YR4/1褐色土縞状に多量混入
かわらけ片混入

1　10YR6/3にぶい黄橙色土
2　10YR7/8黄橙色ローム　炭化物粒
10YR5/2灰黄褐色土まだら少量混入

52SD14

1　10YR5/1褐灰色土
10YR7/8黄橙色ロームまだら少量混入

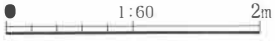


図254　52SC1・55SC1平面・断面図

23SD10

a H=25.4m a′

1　10YR3/2黒褐色粘土混じりシルト
炭化物片、撹土粒が少量入る
かわらけ片を含む

21SD4

b H=25.1m b′

1　10YR2/3黒褐色粘土混じりシルト
炭化物片とかわらけ細片を含む
2　10YR3/2黒褐色粘土混じりシルト
炭化物片とかわらけ細片多量に含む

21SD4

c H=24.7m c′

1　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト
炭化物片、かわらけ片を含む　堅密
2　10YR2/3黒褐色粘土混じりシルト
3　10YR2/3黒褐色粘土混じりシルト
炭化物片を含む

21SD4

d H=25.0m d′

1　10YR3/2黒褐色砂混じりシルト
炭化物片とかわらけ片を多量に含む
2　10YR2/3黒褐色砂
3　10YR2/3黒褐色砂混じりシルト
2.5YR/2灰白色地山粘土ブロックが約90%含まれる

23SD13

e H=25.1m e′

1　10YR3/2黒褐色粘土混じりシルトが主体
砂が混じる、炭化物片、かわらけ片、礫が多い
2　10YR4/2灰黄褐色粘土混じりシルト
かわらけ片が入る
3　10YR4/1褐色粘土混じりシルト

21SD7

f H=25.9m f′

1　10YR4/1褐灰色シルト
炭化物片を多く含む
2　10YR4/2灰黄褐色シルト

21SD7

g H=26.0m g′

1　10YR4/1褐灰色シルト
炭化物片を少量含む

0　1:60　2m

図255　21SC1平面・断面図

して、２条の溝の間を道路と想定している。溝の間の路面幅で９ｍ程、溝の芯芯で9.5m程である。

【50次以前の調査で調査・検討した道路跡の概要】

21SC1　91－95付近に位置し、南北方向に57ｍ程延びる道路跡である（図版編図252・255）。西側側溝は21SD4、23SD10で、東側側溝は21SD7、23SD13で構成される。軸方向はいずれも正方位に近い南北方向だが、西側側溝がN－2°－E、東側側溝がN－4°－Eである。道路の幅は、北端部では路面幅で8.5～９ｍ程、側溝の芯芯で８～8.5m程、南端部では路面幅で７ｍ程、側溝芯芯で7.5m程である。側溝はいずれも断面形状は方形で、底面もほぼ平坦に整形される。堆積土からは土器類が多く出土し、人為的に埋め戻された土層と判断されている。ただし土層の所見からは埋め戻しの様相は積極的には看取できない。また、北側端部の立ち上がりが垂直に近いことから、本来の側溝自体が現況で検出された箇所で途切れていたと推察されている。21SX36、21SK115→整地層→21SC1の新旧関係が指摘されている。ただし、近接する77次調査での77SK2・77SK3の整地層と堆積土の観察成果を勘案すると整地層と土坑群の新旧関係の認定は難しい部分もあったことが推察できる（71～74頁に記載）。また、整地層と道路は明確な時期差としてのみ考えるより、工程の差などを含め整地層上に道路が構築されたと捉えられることが自然であろう。

遺物　埋土から多量のかわらけが出土している（図256－１～12）。

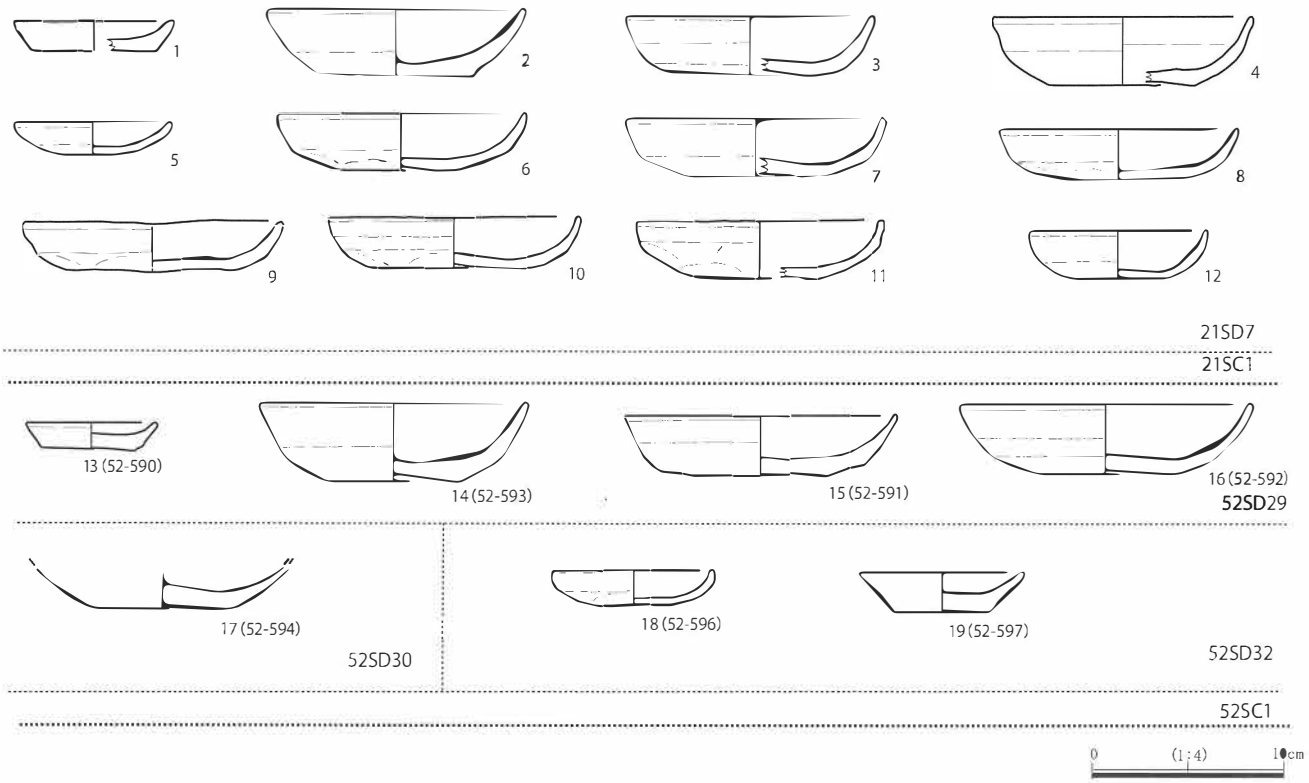


図256　道路跡出土土器類実測図

（8）その他の遺構

①性格不明・祭祀遺構

祭祀遺構と推定された遺構のほか、性格不明遺構として登録された遺構がある（表20）。

表20　性格不明遺構等

遺構名	位置	備考
21SX1	90－110	
21SX2	97－103	
21SX3	90－112	
21SX4	90—108	堀跡（52頁）で記載。
21SX5	84－98	
21SX6	84－98	
21SX7	84－98	
21SX8	84－99	
21SX9	85－99	
21SX10	84－99	
21SX11	84－98	近世墓
21SX12	85－98	近世墓
21SX13	85－98	近世墓
21SX14	84－98	近世墓
21SX15	94－104	
21SX16	85－97	近世墓
21SX17	85－97	近世墓
21SX18	85－97	近世墓
21SX19	85－97	近世墓
21SX20	85－97	近世墓
21SX21	85－97	近世墓
21SX22	85－96	近世墓
21SX23	85－96	近世墓
21SX24	85－97	近世墓
21SX25	85－96	近世墓
21SX26	85－96	近世墓
21SX27	85－97	近世墓
21SX28	85－97	近世墓
21SX29	85－97	近世墓
21SX30	85－96	近世墓
21SX31	85－96	近世墓
21SX32	85－96	近世墓
21SX33	85－96	近世墓
21SX34	85－98	21SK72
21SX35		橋（67頁）で記載。
21SX36		71頁で記載。
21SX37	93－105	71頁で記載。
23SX1	94－97	
23SX2	94－92	
23SX3	93－97	
23SX4	90－90	
23SX5	92－91	
23SX6	91－89	
23SX7	90－93	近世
23SX8	90－82	
233SX9	83－84	近世
23SX10	86－81	
23SX11	88－81	
23SX12		橋（67頁）で記載。
28SX1	78－68	290頁で記載。
31SX1	78－68	83頁で記載。

遺構名	位置	備考
31SX2	63－64	83頁で記載。
36SX1	75－64	
36SX2	62－52	
41SX1		欠番
41SX2		橋（101頁）で記載。
48SX1	89－75	
49SX1	89－75	57SX6
49SX2	87－72	57SX7
49SX3	86－71	57SX3
49SX8	89－78	
49SX9	88－71	
49SX10	89－77	
55SX1	85－56	285頁で記載。
55SX2	80－65	竪穴建物（170頁）で記載
56SX1	70－56	
56SX2	71－56	
56SX3	64－53	
56SX4	68－53	
56SX5	74－51	
56SX6	73－54	
56SX7	73－54	
56SX8	73－54	
56SX9	70－55	
56SX10	60－63	
56SX11	60－66	
56SX12	58－61	
56SX13	58－61	
56SX14		欠番
56SX15	60－50	
56SX16	63－53	土橋（108頁）で記載。
56SX17	58－50	
57SX1		欠番
57SX2		欠番
57SX3	86－71	49SX3
57SX4		欠番
57SX5		欠番
57SX6	88－71	49SX1
57SX7	87－72	49SX2
57SX8		欠番
57SX9		欠番
57SX10		欠番
57SX11		欠番
57SX12	89－73	49P49
64SX1	76－77	23SG1に架かる橋（183頁）で記載。
68SX1	91－69	
68SX2	89－68	
68SX3	91－68	
68SX4	91－68	
68SX5	92－69	
68SX6	90－75	
69SX1	90－75	溝（77頁）で記載。

遺構名	位置	備考
69SX2	89－112	69SX1と同一と判断。欠番。
69SX3	87－110	土坑状（51頁）で記載。
70SX1	71－50	284頁で記載。56P282。
72SX1	58－43	
73SX1	50－44	

遺構名	位置	備考
75SX1	56－77	89頁で記載。
77SX1	83－108	51頁で記載。
77SX2	82－108	52頁で記載。
77SX3	84－101	不整形の掘り込み。
79SX1	50－46	橋（94頁）で記載。

※遺構名太字は本文中で記述。

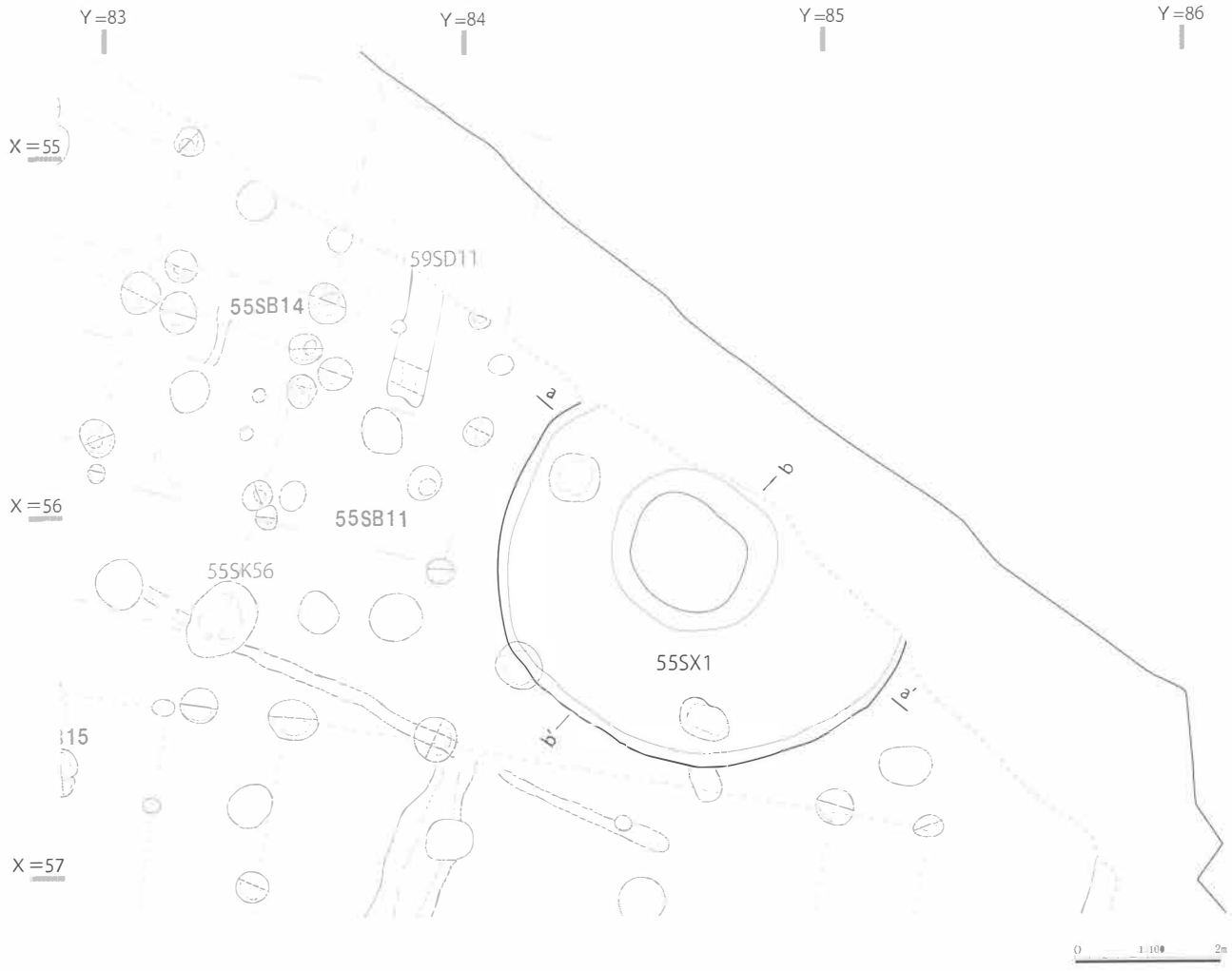
【性格不明・祭祀遺構】

55SX1　遺構　85－56に位置する、径６ｍ程の円形の遺構である（図版編図45・65・66、図257・258）。北側は河川の浸食によって失われているが、本来の平面形は正円形とみられる。中央部が上面の径170cm程、底径230cm程の円形で掘り残され、周囲が深さ0.8cm程で周溝状に掘削される。円径部への立ち上がり表面は平滑に成形される。また、外周への立ち上がりも表面は平滑である。中央の円形部分は遺跡の基盤となる地山土で構成され、盛土等は行われていない。上部は削平により失われたとみられ、本来の形状は不明である。埋土は底面が黒色土で、その他の土層は埋め戻しによる人為堆積土層である。埋土中には遺物を多く含む。底面付近に密に分布するほか、埋土の上位から穿孔かわらけが出土している。性格は判然としないが、祭祀等に係わる遺構とみられる。多賀城市市川橋遺跡伏石地区の不整形落ち込みとされる遺構に似るようにも思われるが、平面形状等に相違も多い（多賀城市教委1983）。

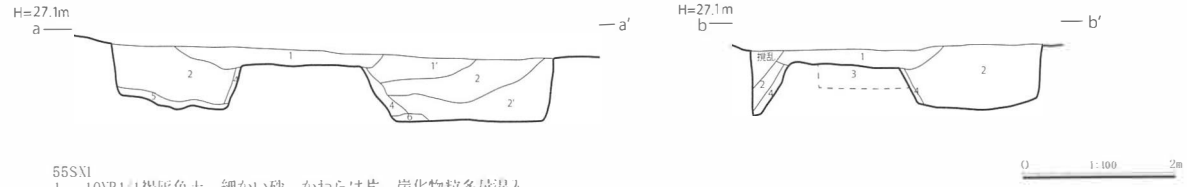
遺物　埋土からかわらけが27,440gと多く出土している。底部に穿孔をもつ資料が含まれる。これらの穿孔かわらけは埋土の上部から２個ずつ合わせ口の状態でまとまって出土している。いずれも手づくねかわらけの小皿である。図示していない資料を含めると、ロクロかわらけ小皿は口径8.4～9.6cm程で平均9.1cm程、底径6.0～7.4cm程で平均6.5cm程、器高1.5～1.9cm程で平均1.7cm程である。ロクロかわらけ大皿は口径12.6～14.4cm程で平均13.9cm程、底径6.4～8.8cm程で平均7.3cm程、器高2．8～3.6cm程で平均3.3cm程である。手づくねかわらけ小皿は口径7.7～9.7cm程で平均9.0cm程、器高1.4～2.2cm程で平均1.8cm程である。手づくねかわらけ大皿は口径12.8～14.6cm程で平均13.7cm程、器高2.3～3.4cm程で平均2.9cm程である。口径の小さい資料が多い。器形の特徴から、12世紀後半とみられる。このほか、国産陶器や土玉、砥石が出土している。

70SX1　遺構　71－50付近に位置する、径200×155cm程で楕円形状の不整形な遺構である（図版編図24、図259）。表土直下で検出しており、遺構埋土も10cm程度と薄く、本来の遺構の大部分は削平され、遺構底部の一部のみが残存した状況とみられる。土層はいずれの土層もかわらけ細片や地山ブロックを含み、人為堆積土層とみられる。３層上面で、ほぼ完形の渥美壺が倒れた状態で出土している（図259）。周囲ではかわらけも出土した。完形の壺の出土や人為的な埋土からは祭祀等に係わる遺構の性格が想起されるが、遺構の残存も不良で、詳細は判然としない。

遺物　渥美壺は口縁部を欠くが、頸部から底部にかけて残る。打ち欠き等の痕跡はなく、口縁部も削平等により失われたとみられる。器高は残存高で23.6cm、底径9.1cm、胴部最大径20.1cmである。頸部から底部までほぼ全面に施釉される。周囲から出土したかわらけは、ロクロかわらけ大皿は口径13.8～14.4cm、底径6.6～7.5cm、器高3.3～3.9cmである。手づくねかわらけ大皿は口径15.1cmと、口径の大きい器形である。特に、図259－１・４は渥美壺の口縁部付近から出土している。



55SX1



55SX1
1　10YR4/1褐灰色土　細かい砂、かわらけ片、炭化物粒多量混入
1'　10YR4/1褐灰色土　10YR7/8黄橙色ロームまだら多量混入　新しい遺構か
2　10YR8/3浅黄橙色ローム　10YR5/1褐灰色土まだら少量混入　かわらけ（破片、完形）を含む
2'　10YR8/3浅黄橙色ローム　10YR5/1褐灰色土まだら多量混入　かわらけ（破片、完形）を含む
3　10YR8/3浅黄橙色ローム　砂っぽい　地山層
4　10YR6/1褐灰色土　炭化物粒微量混入
5　10YR2/1黒色土　かわらけ（破片、完形）を含む
6　10YR5/1褐灰色土　10YR8/3浅黄橙色ロームまだら少量混入

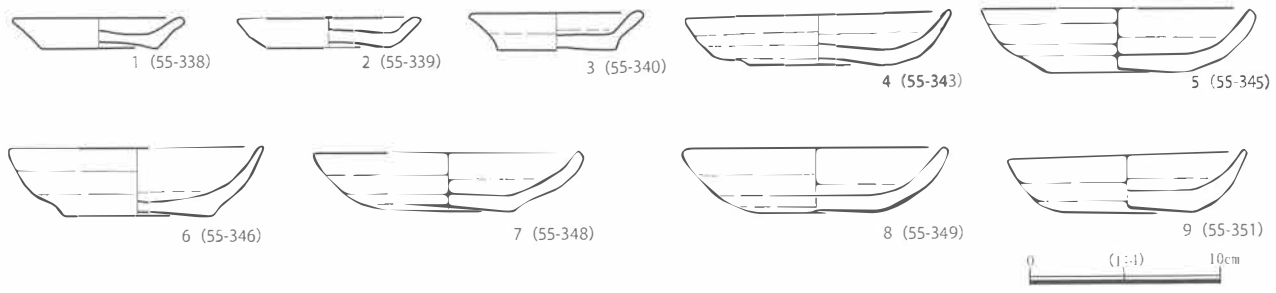


図257　55SX1詳細図

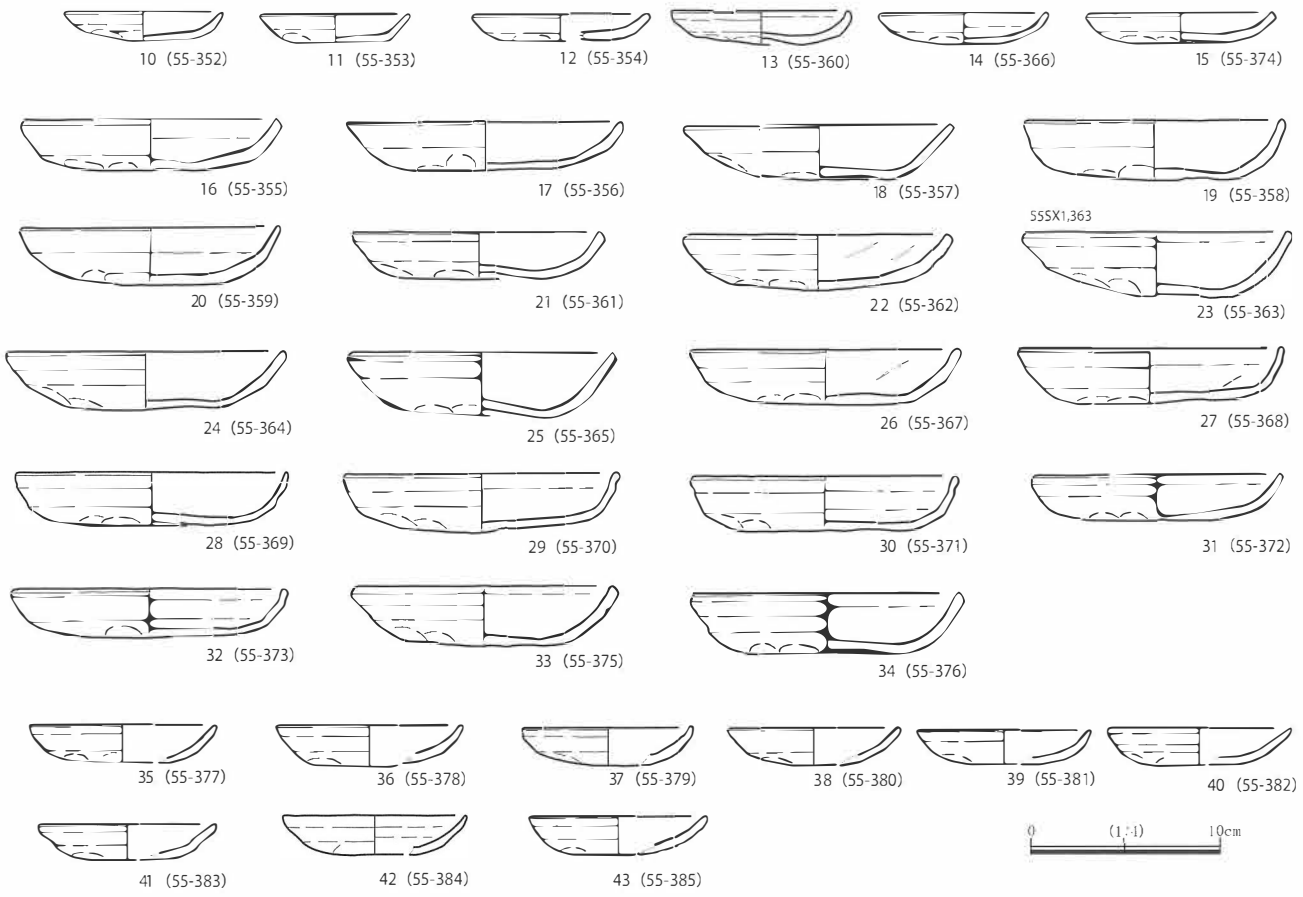


図258　55SX１出土土器類実測図

【整地地業】

56整地層　Y=56～59・X=49～52付近に位置する、上下２層の整地層である。整地範囲の詳細は判然としないが、ここでは断面等で確認できる概ねの範囲を示す（図版編図14・15、図260）。整地層は下層が灰黄褐色土に炭粒や遺物片を含む土層、焼土層を挟んで上層が黒褐色土に炭化物片や遺物片を多く含む土層である。これらの整地は大きな時間差は存在しないものと判断されている。遺跡の縁辺部に位置し、低地に向かって傾斜する範囲を対象に雨裂溝などの凹凸部を平坦に整地したものと考えられる。56整地層→56SK80、56SK99の新旧関係が確認できる。56SK93、56SK94、56SK95、56SK96は整地層の下層で検出しているが、埋土が整地土と類似しており新旧関係は明確ではない。整地層中からは上部を中心に、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者が出土している。手づくねかわらけ大皿は口径が大きい器形を呈する。

68整地層　Y=89～95・X=67～75付近に位置する整地層である（図版編図46、図260）。この範囲では上下２枚の整地層が確認されているが、12世紀代と確定できる下層整地と、12世紀代の可能性が残るが、確定できていない上層整地がある。下層整地は黄褐色土の地山ブロックを主体とする。整地層より下層は植物質を多く含む土層で、周囲の地山層より窪んでおり整地以前には草本類が茂る環境で沢状に下がる地形と推察できる。下層整地の上層は自然堆積が堆積する。砂層を含む流水による堆積

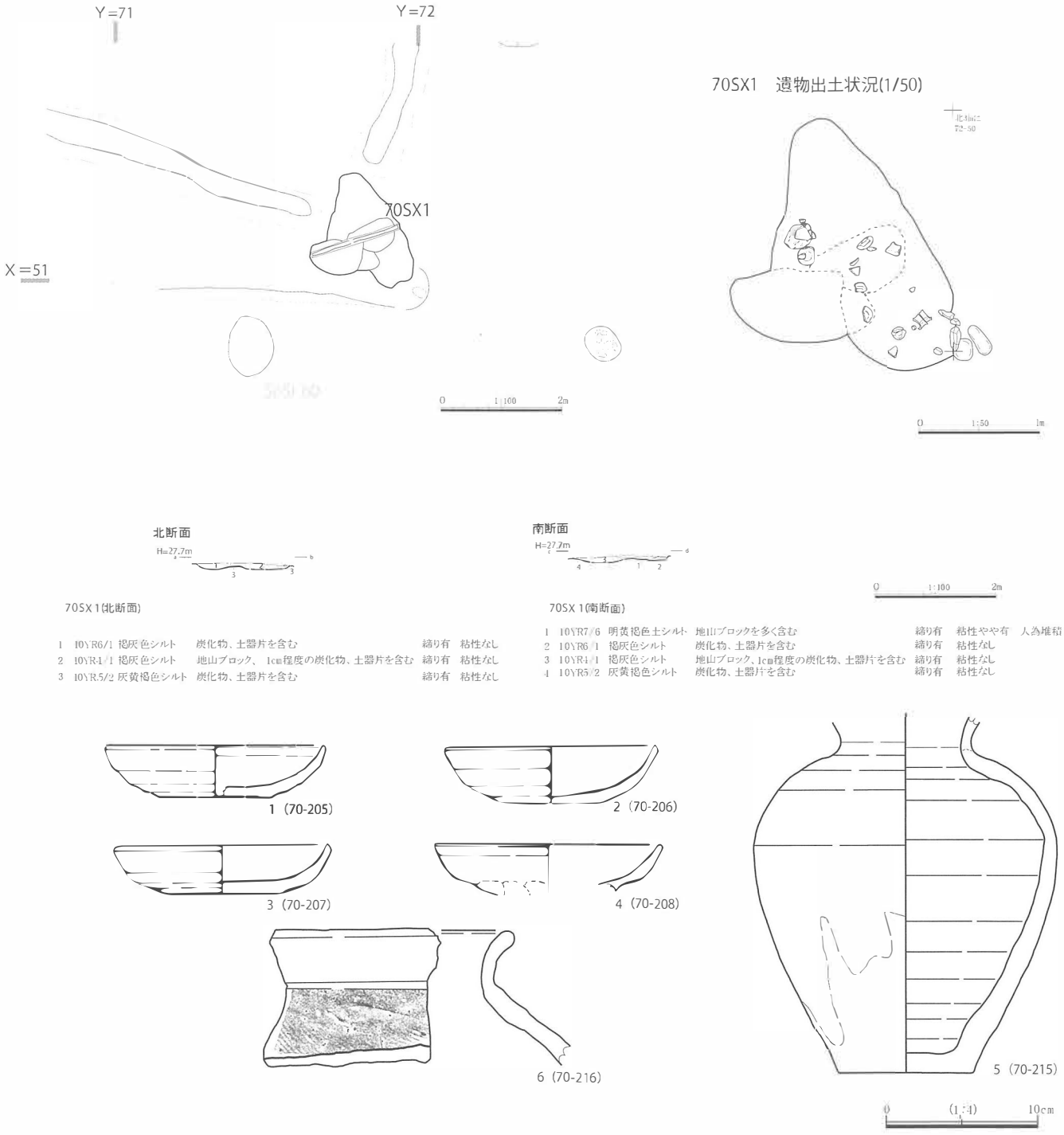
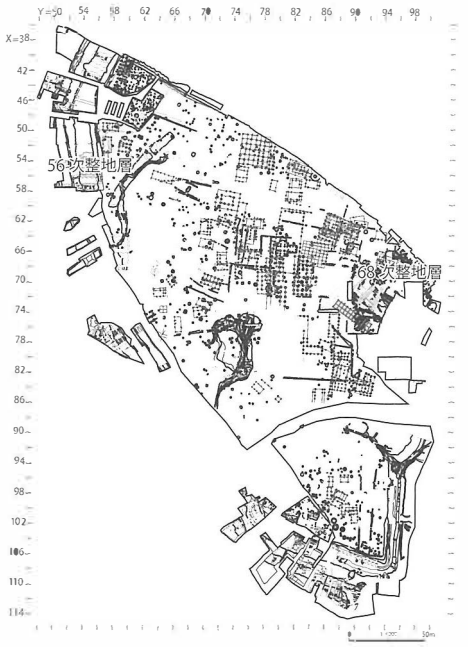
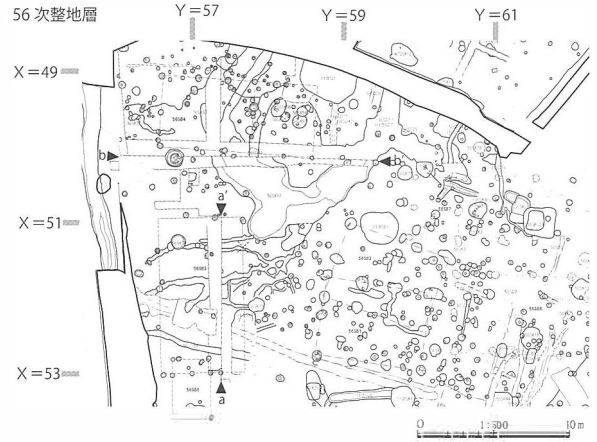


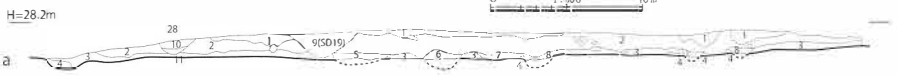
図259　70SX1詳細図

とみられる。この層を68SK35が掘り込んでおり、68整地層（下層）→68SK35の新旧関係が確認できる。上層整地とした土層は黄褐色土の地山ブロックで構成される。

これらから68整地層の状況をまとめる。周囲は12世紀代に低地になっていた範囲で、下層整地により地業が行われる。下層整地段階でも周囲より窪んだ状態だったと推察される。その後、68SK35などの遺構が構築される。上層整地と68SK35の新旧関係は不明だが、68SK35の遺構構築に前後して上層整地が行われたことがわかる。68SK35から出土した土器群は12世紀中葉と想定され（図241）、下

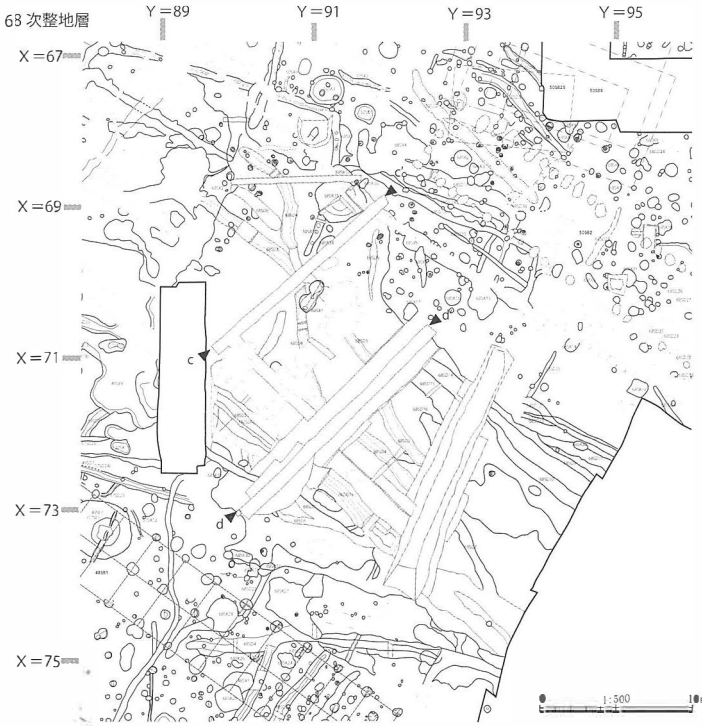






1 10YR3/2黒褐色土 炭粒・小石（径1～2cm）及びかわらけ細片を多量に含む 粘性やや有 締まりやや有
2 10YR4/2灰黄褐色土 浅黄橙色土（地山）や炭粒・小石（径1～2cm）・かわらけ細片を多量に含む 粘性やや有 締まりやや有 浅黄橙色土は層をなして堆積している
3 10YR3/2黒褐色土 粘性やや有 締まっている
4 10YR6/3にぶい黄橙色土 地山 粘性弱 締まっている
5 10YR1/2灰黄褐色土 黒褐色土・浅黄橙色地山ブロックを多量に含む 粘性やや有 締まりやや有
6 10YR2/3黒褐色土 灰黄褐色土ブロック かわらけ細片を多量に含む 粘性やや有 締まりやや有
7 10YR1/2灰黄褐色土 地山ブロック多量に含む 粘性やや有 締まっている
8 10YR3/2 地山ブロック微量 炭粒多量に含む 粘性やや有 締まりやや有
9 10YR3/3暗褐色土 黒褐色土ブロック微量 炭粒微量 かわらけ細片を多量に含む 粘性弱 締まりやや有(56SD19・11次5号溝の埋土) 人為堆積か
10 10YR5/2灰黄褐色土 炭粒・かわらけ細片・地山ブロックを不規則に含む 粘性弱 締まっている
11 10YR7/1灰白色土 粘性弱 締まっている

1 土坑埋土 10YR1/2灰黄褐 粘性弱 締まり有
2 柱穴（P399） 10YR6/3にぶい黄橙 粘性弱 締まり有 砂質 8層とほぼ同様の土
3 柱穴（P400） 10YR4/2灰黄褐 粘性弱 締まり有 1cm以下の炭化物 焼土粒含む
4 柱穴 10YR5/2灰黄褐 粘土質 堅く締る にぶい黄褐色の粘土質のまだらに含む 炭化物含む
5 柱穴（P410） 10YR4/3にぶい黄褐 炭化物多く含む かわらけ小片多く含む
6 10YR5/2灰黄褐 やや摩滅したかわらけ小片（手づくね等）含む 炭化物（5mm径）少量 にぶい黄褐色土塊を含む ※人為堆積
7 10YR1/3にぶい黄褐 粘性有 堅く締る 黄褐色粘土塊・炭化物・かわらけ小片を多く含む
8 10YR6/3にぶい黄橙 締り有 やや砂質 かわらけ片やや多い 炭化物含む
9 10YR3/3暗褐 粘土質 締り弱 炭化物多い にぶい黄褐色の粘土質土塊少し
10 10YR5/3にぶい黄褐 やや砂質 8層に類似
11 10YR4/2灰黄褐 粘土質 締り有 黄褐色粘土をまだらに多く含む
12 10YR4/2灰黄褐 堅く締る にぶい黄褐色粘土塊まだらに少し含む 炭化物少量 かわらけ小片少量（溝の埋土）
13 2.5Y6/3にぶい黄 砂質 締り弱 均質な土 遺物含まない 土坑の東側下面に炭化物を多く含む
14 2.5Y5/3黄褐 砂質 締り弱 13と1連のもの 下半はやや明るく粘土質 全体として均質な色調
15 10YR3/3暗褐色 土師器・縄文を微量
16 10YR5/3にぶい黄褐 粘土 地山の上部
17 10YR4/2灰黄褐色土 小～中礫を微量 炭粒・かわらけ細片を多量に含む 粘性弱 締っている 人為か（11次3号）



2層 灰褐色粘質土7.5YR4/2 多量のかわらけ
3層 黄橙色粘質土10YR8/6 第1整地層
4層 褐灰色粘質土10YR4/1 多量の炭化物
5層 褐灰色粘質土10YR4/1 炭化物少量
6層 褐灰色粘質土7.5YR4/1
6'層 暗褐色粘質土10YR3/3 植物遺存体層
6b層 褐灰色砂質土10YR5/1
7層 褐灰色粘質土5YR4/1 植物遺体層
8層 浅黄橙色粘質土10YR8/4 地山起源のブロック土主体の人為堆積層 第2整地層
8b層 褐灰色粘質土10YR6/1
9層 黒色粘質土10YR7/1 植物遺体層
10層 褐灰色粘質土10YR6/1 上位に灰白色（10YR8/2）火山灰2次堆積層を含む
10b層 褐灰色砂質土10YR6/1 グライ化した砂層と植物遺存体層の混合
11層 褐灰色粘質土5YR4/1 沢跡の岸側のみに存在
12層 浅黄橙色シルト10YR8/4 地山

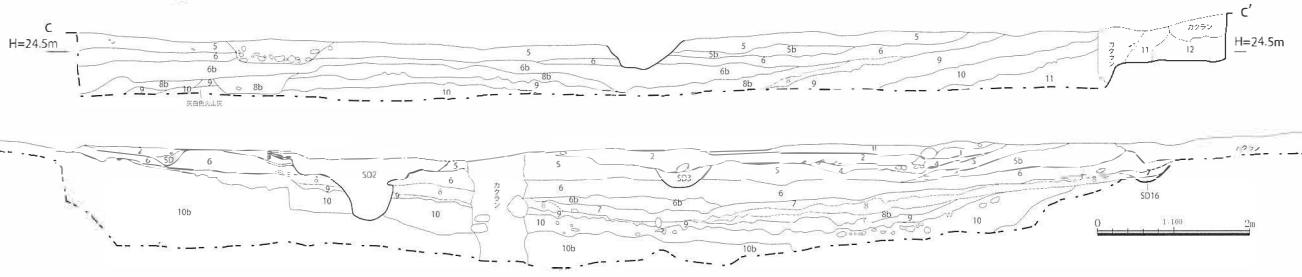


図260 整地平面・断面図

層整地は12世紀前半から中葉と考えられる。上層整地の時期は、下限は不明なものの、12世紀中葉以降と考えられる。

その他の整地層

その他の整地層については関連遺構の記載に際して既述した。ここでは一覧だけ示す。いずれも堀との関連が推察される位置で確認されている。

21整地層　Y=88～102・X=99～105付近に位置する（本文編74頁）、21SD1の内側の遺跡の縁辺部を造成した整地層である。

69整地層　Y=88～90・X=110～113付近に位置する（本文編45頁）、21SD2を覆う整地層である。

77整地層１　81－101付近に位置する（本文編71頁）、21SD1の内側で遺跡の縁辺部を造成した整地層である。

77整地層２　85－103付近に位置する（本文編71頁）、21SD1の内側で遺跡の縁辺部を造成した整地層である。

77整地層３　83－107付近に位置する（本文編52頁）、21SD1と21SD2の間で確認した整地層である。

75整地層　55－75付近に位置する（本文編89頁）、外側の堀の外側の整地層である。上下２枚の整地層を確認している。

【50次以前の調査で調査・検討した遺構の概要】

28SX1　遺構78－68に位置する、長方形の土坑である（図版編図39、図261）。西側の深い部分と東側の浅い部分とに分かれる。以下では分かれて示す場合には、それぞれa・bとして記載する。28SX1a・bを１個の土坑とみた場合、長軸280cm、短軸220cmである。28SX1aは長軸192cm、短軸120cmで、検出面からの深さは30cmである。遺構の軸方向はN－30°－Wである。埋土は人為堆積の土層で、埋め戻されたとみられる。底面には中央付近に輪宝とその中心に橛が刺され、南側にはかわらけ小皿７点が置かれていた。輪宝と橛がかわらけに先行して置かれたとみられる。かわらけは北から2点、3点、2点と並ぶ。このほかに１点が東側から出土しており、かわらけは８点となる可能性もある。遺構の重複から、28SA1→28SX1→28SB1の新旧関係が確認できる。また、28SX1bが28SB6を構成する柱穴であれば、28SB6→28SX1の新旧関係をもつ可能性がある。

遺物　かわらけ、輪宝、橛が出土している。かわらけはいずれも手づくねかわらけ小皿で、口径8.2～9.0cm、器高1.6～2.1cmである。輪宝は銅製で、残存長は10cm程で幅３cm程である。外径は20cm弱程度に復元できようが、残存部位は少ない。橛は鉄製で、長軸27cm程で幅2.2cm程である。

②溝跡

遺跡内で確認された溝跡は一覧として示す（表21）。堀跡など12世紀代の遺構で主要なものは既述した。溝の多くは時期、性格が不明な遺構である。

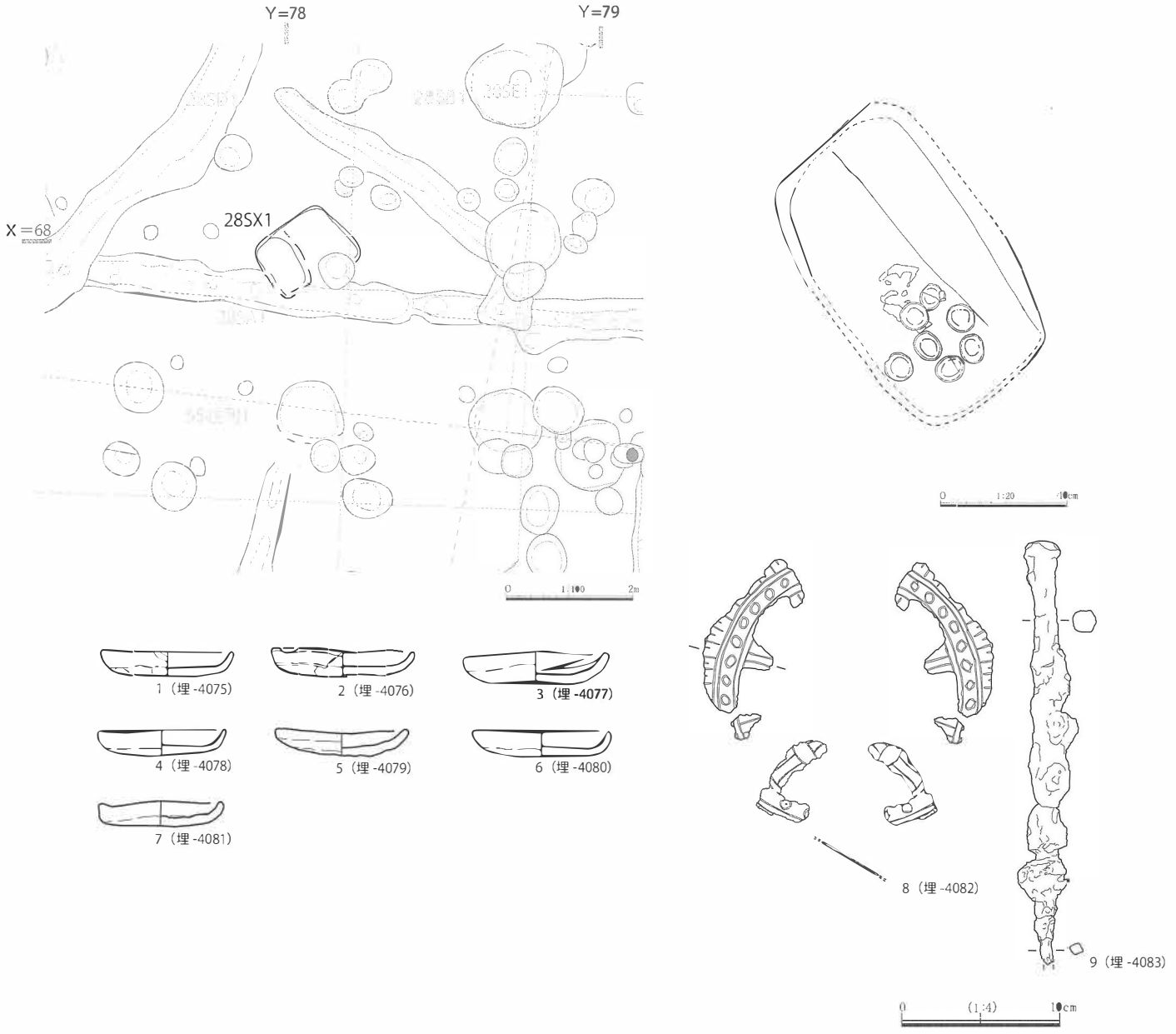


図261　28SX1詳細図

表21　溝跡

遺構名	位置	備考
21SD1		a・bあり。内側の堀
21SD2		外側の堀
21SD3	90－104	
21SD4	91－100	21SC1
21SD5	90－102	
21SD6	90－102	
21SD7	92－101	21SC1
21SD8	90－99	
21SD9	90－99	
21SD10	89－99	近現代
21SD11	82－95	
21SD12	82－96	
21SD13	84－96	
21SD14	85－94	
21SD15	85－94	
21SD16	92－108	
23SD1	92－97	
23SD2	92－97	
23SD3	93－97	
23SD4	92－96	
23SD5	91－96	
23SD6	92－996	
23SD7	91－96	
23SD8	94－96	
23SD9	90－96	
23SD10	91－95	21SC1
23SD11	89－96	
23SD12	90－95	
23SD13	93－95	21SC1
23SD14	95－94	
23SD15	88－94	
23SD16	88－94	
23SD17	88－94	
23SD18	90－95	
23SD19	90－95	
23SD20	93－93	
23SD21	90－93	
23SD22	93－92	
23SD23	89－90	近現代
23SD24	94－91	
23SD25	94－90	
23SD26	92－89	
23SD27	93－90	
23SD28	88－90	
23SD29	89－90	
23SD30	90－89	
23SD31	89－89	
23SD32	89－81	
23SD33	89－81	
23SD34		21SD1と重複
23SD35		21SD1と重複
28SD1	77－68	
28SD2	77－65	55SA1に変更。
28SD3	78－65	
28SD4	78－66	
28SD5	78－67	
28SD6	76－71	
28SD7	75－68	
28SD8	76－68	
28SD9	81－68	
28SD10	78－69	
28SD11	79－69	
28SD12	74－70	
28SD13	80－71	近世。
28SD14	81－70	
28SD15	80－72	
28SD16	75－72	
28SD17	76－72	
28SD18	83－72	
28SD19	83－72	42SD15
28SD20	82－73	
28SD21	82－73	
28SD22	81－74	
28SD23	81－74	
28SD24	84－73	
28SD25	84－73	
28SD26	85－75	
28SD27	76－84	31SD2
28SD28	77－70	
31SD1	76－84	
31SD2	76－85	
31SD3	77－88	
31SD4	76－88	
31SD5	77－87	
31SD6	75－86	
31SD7	77－86	近現代
31SD8	77－87	
31SD9	76－87	
31SD10	76－87	
31SD11	79－86	
31SD12		欠番
31SD13		欠番
31SD14	76－84	
31SD15	73－85	
31SD16	75－83	
31SD17	71－84	
31SD18	66－79	
31SD19	69－75	
31SD20	69－75	
31SD21	68－75	
31SD22	68－76	
31SD23	68－75	
31SD24	67－76	
31SD25	66－77	
31SD26	65－77	
31SD27	65－76	
31SD28	65－75	
31SD29	67－75	
31SD30	67－75	
31SD31	66－75	
31SD32	66－74	
31SD33	64－75	
31SD34	69－73	近現代
31SD35	69－73	近現代
31SD36	69－74	近現代
31SD37	69－73	
31SD38	69－73	近現代
31SD39	68－74	
31SD40	68－73	
31SD41	69－72	近現代
31SD42	67－72	
31SD43	67－73	
31SD44	67－73	
31SD45	67－73	
31SD46	67－74	
31SD47	65－74	
31SD48	64－74	
31SD49	62－73	
31SD50	65－73	
31SD51	65－72	
31SD52	72－68	
31SD53	71－68	
31SD54	70－69	
31SD55		欠番
31SD56		欠番
31SD57		欠番
31SD58	70－77	
31SD59	72－85	
36SD1	72－65	52SA1
36SD2	73－65	
36SD3	69－64	
36SD4	73－63	近現代
36SD5	74－64	55SD1・近現代
36SD6	71－63	近現代
36SD7	74－62	
36SD8	75－62	55SD6・近現代
36SD9	75－62	52SD18・近現代
36SD10	75－62	55SD11・近現代
36SD11	67－58	52SD29・近現代
36SD12	68－57	52SD30・近現代
36SD13		欠番
36SD14	68－57	52SD32
36SD15		欠番
36SD16	61－500	
36SD17	59－49	11次SD7
36SD18	61－50	56SD24
41SD1	60－55	
41SD2		内側の堀
41SD3	60－68	
41SD4	57－56	52SD31
41SD5	59－57	
41SD6		欠番
41SD7	62－64	
41SD8	61－64	56SD32・近現代
41SD9	61－64	56SD30・近現代
41SD10	62－64	
41SD11	68－666	

遺構名	位置	備考
41SD12	64－67	
41SD13	63－68	
41SD14	64－71	
41SD15	64－72	
41SD16	64－72	
41SD17		欠番
41SD18	62－73	
37SD1	88－63	
37SD2		欠番
37SD3	90－61	攪乱。
37SD4	89－62	
37SD5		欠番
37SD6		欠番
37SD7	89－66	50SA6
37SD8	85－67	50SD5・近現代
37SD9	91－62	近世
37SD10	84－58	
42SD1	83－64	近世
42SD2	81－58	55SD23・ 68SD2・近現代
42SD3	81－60	55SD22
42SD4	81－62	50SA1
42SD5	81－63	攪乱
42SD6	78－62	
42SD7	78－63	
42SD8	79－64	
42SD9	79－64	55SA1
42SD10	79－64	55SA1
42SD11	79－65	55柱列2
42SD12	84－65	近世
42SD13	84－68	50SD8
42SD14	84－69	
42SD15	83－72	28SD19
42SD16		欠番
42SD17		欠番
42SD18		欠番
42SD19		欠番
42SD20	96－66	
42SD21	97－69	
42SD22	67－69	
42SD23	99－72	
42SD24	99－73	
47SD1	97－83	
47SD2	97－84	
47SD3	98－83	
47SD4	96－83	
47SD5	95－80	
47SD6	95－80	
47SD7	95－80	
47SD8	94－80	
47SD9		欠番
47SD10	93－80	
47SD11	93－81	
47SD12	96－82	
47SD13	94－80	
47SD14	94－80	
48SD1		欠番
48SD2	90－75	
48SD3	91－75	
48SD4	89－75	

遺構名	位置	備考
49SD1		欠番
49SD2		欠番
49SD3	87－74	57SD10
49SD4	87－74	
49SD5		欠番
49SD6		欠番
49SD7	88－73	57SD24
49SD8		欠番
49SD9	89－77	
49SD10	89－78	
49SD11	87－70	
49SD12		欠番
49SD13		欠番
49SD14		欠番
49SD15	86－70	57SD2
49SD16		欠番
49SD17	85－72	57SD5
49SD18		欠番
49SD19	86－71	
49SD20		欠番
49SD21		欠番
49SD22	85－72	
49SD23		欠番
49SD24	85－71	
49SD25	86－71	
49SD26	86－72	
49SD27	86－72	
49SD28	86－73	
49SD29		欠番
49SD30		欠番
49SD31	88－72	
49SD32		欠番
49SD33	88－71	
49SD34	87－71	
49SD35	87－71	
49SD36	87－73	
49SD37		欠番
49SD38		欠番
49SD39		欠番
49SD40	86－72	
49SD41	87－73	
50SD1	91－65	59SD14
50SD2	92－67	近世
50SD3	93－67	近世
50SD4	94－67	近世
50SD5	85－67	近世
50SD6	85－68	近世
50SD7	85－68	近世
50SD8	85－68	42SD13
52SD1	69－60	近世
52SD2	71－61	近世
52SD3	63－61	近世
52SD4	65－61	近世
52SD5	64－63	近世
52SD6	64－64	近世
52SD7	65－62	近世
52SD8	66－61	近世
52SD9	65－59	近世
52SD10	70－60	
52SD11	69－61	近世

遺構名	位置	備考
52SD12	70－61	近世
52SD13	69－61	近世
52SD14	72－60	
52SD15	71－61	36SA9・近世
52SD16	70－62	近世
52SD17	71－64	近世
52SD18	71－64	36SD9
52SD19	71－65	近世
52SD20	73－62	近世
52SD21	73－62	36SA6・近世
52SD22	73－61	
52SD23	72－62	36SA7・近世
52SD24	72－62	36SA8・近世
52SD25	72－64	
52SD26	59－59	41SD1・ 56SD20
52SD27	70－65	近世
52SD28	71－65	近世
52SD29	67－58	52SC1
52SD30	68－57	52SC1
52SD31	59－57	41SD4
52SD32	69－57	36SD14
55SD1	74－64	36SD5・近世
55SD2	72－64	近世
55SD3	72－65	近世
55SD4	77－63	近世
55SD5	76－62	近世
55SD6	75－62	36SD8・近世
55SD7	75－63	近世
55SD8	74－63	近世
55SD9	76－62	近世
55SD10	76－62	36SA1・近世
55SD11	75－62	36SD10・近世
55SD12	74－63	近世
55SD13	78－57	近世
55SD14	80－53	近世
55SD15	80－56	近世
55SD16	74－54	近世
55SD17	81－54	59SD9・近世
55SD18	81－54	59SD10・近世
55SD19	83－58	近世
55SD20	83－58	近世
55SD21	84－59	
55SD22	81－60	42SD3・近世
55SD23	81－58	42SD2・近世
55SD24	82－59	近世
56SD1	61－52	近世か
56SSD2	62－52	近世か
56SD3	60－52	近世か
56SD4	61－52	
56SD5	60－54	近世か
56SD6	60－54	近世か
56SD7	60－54	近世か
56SD8	60－54	近世か
56SD9	61－53	近世か
56SD10	61－52	近世か
56SD11	61－52	近世か
56SD12	63－52	近世か
56SD13	63－52	近世か
56SD14		欠番

遺構名	位置	備考
56SD15	61－53	近世か
56SD16	62－53	近世か
56SD17	62－54	近世か
56SD18	61－54	近世か
56SD19	65－53	近世か
56SD20	63－54	41SD1・52SD26
56SD21	63－55	近世か
56SD22	72－54	近世か
56SD23	73－53	近世か
56SD24	60－50	36SD18
56SD25	660－49	近世か
56SD26	59－49	近世か
56SD27	59－50	36SD42・近世か
56SD28	57－52	
56SD29	60－64	近世か
56SD30	61－64	近世か
56SD31	58－60	近世か
56SD32	61－64	近世か
56SD33	58－64	近世か
56SD34	59－61	近世か
56SD35	60－63	近世か
56SD36		欠番
56SD37	65－54	
56SD38	58－66	41SD2・内側の堀
56SD39	54－66	外側の堀
56SD40	64－52	内側の溝
56SD41	58－50	
56SD42	59－50	56SD27
57SD1		欠番
57SD2	86－71	49SD15
57SD3		欠番
57SD4		欠番
57SD5	85－72	49SD17
57SD6	85－72	49SD22
57SD7		欠番
57SD8	85－43	49SA2
57SD9		欠番
57SD10	87－74	49SD3
57SD11	87－72	
57SD12		欠番
57SD13		欠番
57SD14		欠番
57SD15		欠番
57SD16		欠番
57SD17		欠番
57SD18		欠番

遺構名	位置	備考
57SD19		欠番
57SD20	88－70	
57SD21	88－70	
57SD22		欠番
57SD23		欠番
57SD24	88－73	49SD7
57SD25	88－73	
57SD26	88－72	
59SD1	63－42	
59SD2	63－42	
59SD3	63－42	
59SD4	67－44	
59SD5	75－50	
59SD6	77－51	37SA3
59SD7	78－52	
59SD8		欠番
59SD9	81－54	55SD17
59SD10	81－54	55SD18
59SD11	84－55	
59SD12		欠番
59SD13	89－60	
59SD14	92－62	50SD1
59SD15		欠番
59SD16		欠番
59SD17	78－51	近現代
65SD1	63－67	
65SD2	64－68	近現代
65SD3	66－71	
65SD4	63－69	
65SD5		欠番
65SD6		欠番
65SD7	64－73	
65SD8	72－73	
65SD9	71－74	近世
65SD10	71－74	近世
65SD11	68－67	
65SD12		欠番
65SD13		欠番
65SD14	63－67	41SD12
65SD15	66－73	31SD50
65SD16	66－73	
65SD17	66－73	
68SD1	90－73	近世
68SD2	90－71	42SD1・近世
68SD3	90－69	近世以降か
68SD4	90－69	近世以降か
68SD5	91－－69	近世以降か
68SD6	90－68	近世以降か
68SD7	92－73	時期不明

遺構名	位置	備考
68SD9	93－71	時期不明
68SD10	93－71	時期不明
68SD11	94－72	時期不明
68SD12	93－71	時期不明
68SD13	93－71	時期不明
68SD14	92－70	
68SD15	92－70	
68SD16	92－71	
68SD17	93－68	不明
68SD18	92－68	不明
68SD19	92－68	不明
68SD20	93－69	不明
68SD21	91－76	不明
68SD22	91－76	不明
68SD23	90－73	不明
68SD24	95－68	不明
68SD25	95－69	近現代
68SD26	96－69	近現代
68SD27	95－70	近現代
68D28	95－70	近現代
68SD29	95－70	近現代
68SD30	95－70	近現代
68SD31	96－70	近現代
68SD32	95－70	近現代
68SD33	96－71	近現代
68SD34	95－71	時期不明
68SD35	94－71	時期不明
68SD36	93－69	時期不明
72SD1	56－41	内側の堀
72SD2	53－40	外側の堀
72SD3	59－44	
73SD1	49－45	近世以降
73SD2	52－44	
73SD3	50－43	近世以降か
73SD4	50－43	73SC1
73SD5	49－43	
73SD6	52－46	
73SD7	48－45	73SC1
75SD1		欠番
75SD2		欠番
75SD3	58－76	
75SD4	57－76	
75SD5	55－77	
75SD6	56－77	
76SD1		欠番
76SD2		欠番
76SD3	81－107	

第３節．出土遺物

（１）遺物の概要

①出土遺物の概要

柳之御所遺跡堀内部地区で検出されている遺物を種別に表22に示した。この表は岩手県埋蔵文化財センター（21・23・28・31・36・41次調査）、岩手県教育委員会による調査での出土遺物を合わせた内容である。柳之御所遺跡からは多様な遺物が出土し報告されてきたが、埋文報告の対象となる調査において、堀内部地区で得られる遺物のうち多くの種別はほぼ網羅されている（岩手埋文1995）。その後の調査でも新出の資料も散見されるものの、埋文調査で出土した資料に量的に追加された内容が多い。そのため以下の記載の内容も、埋文報告での既報告内容に付加したものとなり基本的な出土資料の種別や傾向等に大きな変更はない。なお、既述のとおり本報告書は概ね50次以降の調査を主たる対象とするが、それ以前の調査成果を含めることで遺跡内容が理解できるものである。そのため遺物についてもできうる限りそれらを包含した内容での把握に努める。ただし以下の記述において、既刊の報告書での記述や掲載図に譲る部分等はその旨を記す。

出土遺物の概要は下記のとおりである。土器類はかわらけ、国産陶器、輸入陶磁器が出土している。木製品も多く出土しており、工具類から食事具、服飾具など生活用具や文房具や祭祀具などが多岐にわたって確認できる。金属製品は埋没環境も影響しているためか、他の遺物に比して出土量は少ない。

遺物の出土遺構をみると、遺物の多くは内側の堀跡を中心に堀跡からの出土である。その他、井戸跡などから多数出土している。各遺構での遺物の出土の様相について、主要な遺構からの出土資料については第２節で既述した。これらの遺構内の堆積土から出土した資料のうち、人為堆積土などの土層や祭祀的な性格が想定できる遺構などの一部の遺構からの出土は、その出土位置やあり方にも多様

表22　柳之御所遺跡堀内部地区の出土遺物

大分類	中分類	小分類
土器・陶器・磁器	かわらけ	ロクロ、手づくね、柱状高台、内折れかわらけなど
	国産陶器	渥美、常滑など
	輸入陶磁器	中国産磁器、中国産陶器など
木製品	工具・武具	刀子柄木、鞘、刷毛、ヘラ、木槌など
	紡織具	糸巻など
	運搬具	修羅
	漁撈具	網針
	服飾具	扇、櫛、下駄など
	容器	曲物、箱など
	食事具	箸、匙、杓子、折敷など
	文房具	物差、硯
	遊具	毬、将棋駒、独楽、羽子板状、木トンボ
	祭祀具	形代、宝塔、五輪塔、笹塔婆、呪符
	雑具	ちゅう木など
	部材	
	建築部材	
	漆器類	椀など
金属製品		工具、祭祀具など
土製品		壁土など
石製品		滑石製品など
その他		金付着礫、鉄滓、動植物遺存体

な含意が想定できよう。しかし、遺跡内の土層でも述べたように、この遺跡では多くの範囲で削平が著しいこともあり遺跡機能時の表土や整地層は残存していない範囲が広い。そのため出土資料の大半は遺跡間をまたぐような大きな移動は想定できないものの、原位置を保つものやそれに近い出土状況を示すものではない。遺跡内では後世の削平や元来の遺物量の膨大さを反映し、表土や後世の土層にも12世紀代の遺物を多く包含する状況である。

②本節の記述方法と内容

本節では出土遺物の概要を記載する。

土器　遺構の時期決定などに用いられてきた主要な要素となるかわらけなどの遺物については、第２節の各遺構の項目で既述した。なお、かわらけは遺跡範囲全体から10トンを超える膨大な量が出土している。遺構内からも多くの出土があるが、表土などにも多くの資料を包含する状況である。出土位置も遺跡内の特定の範囲に集中するものではなく、遺跡範囲全体に広く分布する。なお、遺構のうち、井戸については土器類の出土量を第２節で記した。

陶磁器類　それ以外の遺物のうち土器類では、陶磁器類などの破片資料が多く出土している。これらの国産陶器類や輸入陶磁器類は遺跡の内容や性格を示唆する重要な資料である。しかし、数量が国産陶器類を中心に極めて多く、一方で体部片を主にして破片資料などが多数を占める。さらに体部片が多いこともあり、個々の資料ごとの差異は少ない。そのため、国産陶器類や輸入陶磁器類については数量と出土傾向の把握を目的として、これらの遺物の全体の出土量や分布を示す。その際、重量と破片数を把握しできうる限り示すよう努めた。なお、柳之御所遺跡のこれまでの調査及び報告においては、これらを含めた資料の実測図等について破片資料を含めて実測図や拓影などを用いて図示可能な資料の多くを掲載してきている。そのため、個体ごとの差が少ない陶磁器類の体部片などの図面の多くは既報告に譲る。

瓦　瓦は遺跡内から一定量出土しており、研究の略史は第２章で既述したがこれまでも瓦の技術系譜や用法について検討がなされてきた。それらでも指摘されてきたように、瓦類は軒瓦などの文様をもつ資料は数量が少なく、多くは平瓦・丸瓦の破片資料である。ここでは瓦についても陶磁器類と同様に数量や出土傾向の把握を目的として、これらの遺物の全体の出土量や分布を示す。なお、瓦も実測図等は既刊の概報で図示可能な資料の多くを掲載してきている。個体ごとの差が少ない部位の破片資料などの図面の多くはこれらの既報告に譲る。

木製品　木製品については、遺跡の調査開始以来注目されてきた遺物でもあり、豊富な種別を含むことが指摘されてきた（三浦1990）。しかし、性質上数量を示すことが難しい資料も多く、ここでは種別ごとにまとめ、既報告のものを中心に数量的に把握可能な事例を示した上で、代表的な事例を中心に概要を記す。なお、木製品のうち出土遺構の記述や意義付けに有意な資料や特徴的な資料については第２節で出土遺構ごとにそれぞれの項で示したものがある。

その他　最後に、その他の数量は少ないものの、特徴的な遺物などを抜き出し種別ごとに概要を記す。金属製品や石製品がこれにあたる。

（２）国産陶器類

【種別と概要】

柳之御所遺跡堀内部地区で出土した国産陶器類の産地等による種別と、その概要を記す。出土資料の多くは体部を中心とした破片資料で、完形資料や器形を復元できる資料は少ない。また、体部片が

主となるため個体差は少なく、遺構の時期や特徴を検討しうる資料も少ないことが見込まれる。ここでは産地や種別の分類に基づいて、それぞれの出土量を図表で示し、出土傾向や数量の把握を行う。なお、既述のとおり調査範囲が重複および連続していることから、埋文報告に掲載された資料やその際の未報告資料とその後の調査を合わせて検討、掲載するよう努める。

分類検討に際して、渥美と常滑の分類など判別しがたい資料も存在することや、破片資料が多いため個体数との扱いの相違などの資料操作上留意すべき内容がある。甕などの大型品は破片数や重量も大きくなることが想定される。一方で小型品については整理段階でも注目され報告書等でも積極的に掲載するなど、多くが把握されてきたことも十分に考えられる。これらの前提条件を踏まえると、破片数や重量を示すことで数量の把握が可能になるもののそれらの実数での数値自体の比較より、数量比や傾向としての把握が有意な内容となることが想定される。また個別で特記すべき内容は別記するよう努める。

なお、柳之御所遺跡内で確認されている国産陶器類の種別と概要は下記のとおりである。

渥美　概要　愛知県渥美半島に分布する渥美窯産と推測できる陶器。
　　器種　甕・壺、片口鉢が多い。袈裟襷文壺や瓶類、山茶碗などを含む。刻画文や貼花などの文様をもつ資料は特徴的である。

常滑　概要　愛知県知多半島に分布する常滑窯産と推測できる陶器。
　　器種　甕・三筋壺を含む壺・片口鉢が多い。瓶類や山茶碗も含む。

須恵器系　概要　石川県能登半島の珠洲窯産を含む、須恵器系の陶器類である。珠洲産の資料のほか、現在の秋田県方面の窯などが産地として想定されているが、具体的な産地は不明の資料が多い。
　　器種　甕・壺が多い。波状文をもつ壺類が特徴的である。

須恵器　概要　古代の土器類を含むとみられるが、数量も多く12世紀代の資料を多く含むと推察される。具体的な産地は不明である。
　　器種　甕が多い。古代の須恵器を含む可能性があるが、すべてが古代の資料と見なすには数量が多く、当該時期の資料を多く含むと考えられる。

その他　愛知県猿投産が数点出土しているほか、宮城県石巻市水沼産とみられる資料がある。柳之御所遺跡堀外部の調査では、産地不明資料の存在も指摘されている。

【特徴的な個体】

完形に近い状態に復元できるなど資料について、各産地ごとに各器種から特徴的な資料を例示する（図262・263）。このうち50次以降の調査次出土資料については概要も記す。

渥美　渥美産は器形が復元できる資料は多くないが、甕や壺、片口鉢や山茶碗などが出土している。甕類では器形の全体が復元できる資料は少なく、口縁部などから径を復元できるような接合資料も多くない。壺類では袈裟襷文壺など文様をもつ資料を含む。70－215は70SX1から出土した壺で、70SX1の項で既述した（287頁）。底部の下端まで、器形の全体に釉がかかる。口縁部が欠損しているものの、残存高が26.3cm、底径9.1cm、胴部最大径20.1cmである。55－1087は55SK45から出土した壺類の口縁部片で、口縁が垂下する。全体に釉がかかる。壺類では刻画文等の文様が特徴的である。なお、貼付による文様は平泉でのみ確認されているとの指摘もある（愛知県史編さん委員会2012）。このほか、片口鉢などの鉢類も多い。52－1058は52SE1から出土した資料で、片口部は残存しないもの

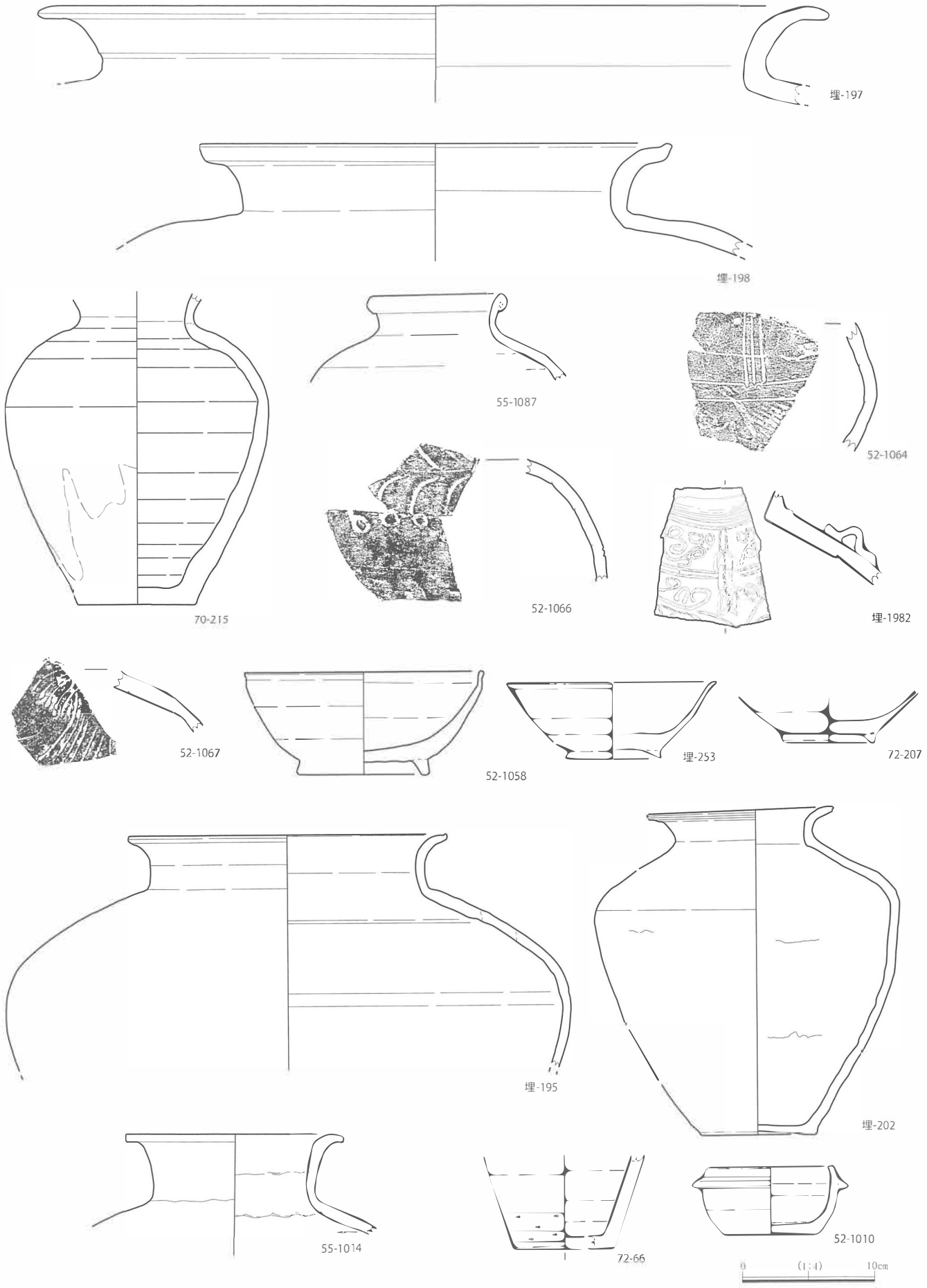


図262　国産陶器類実測図（1）

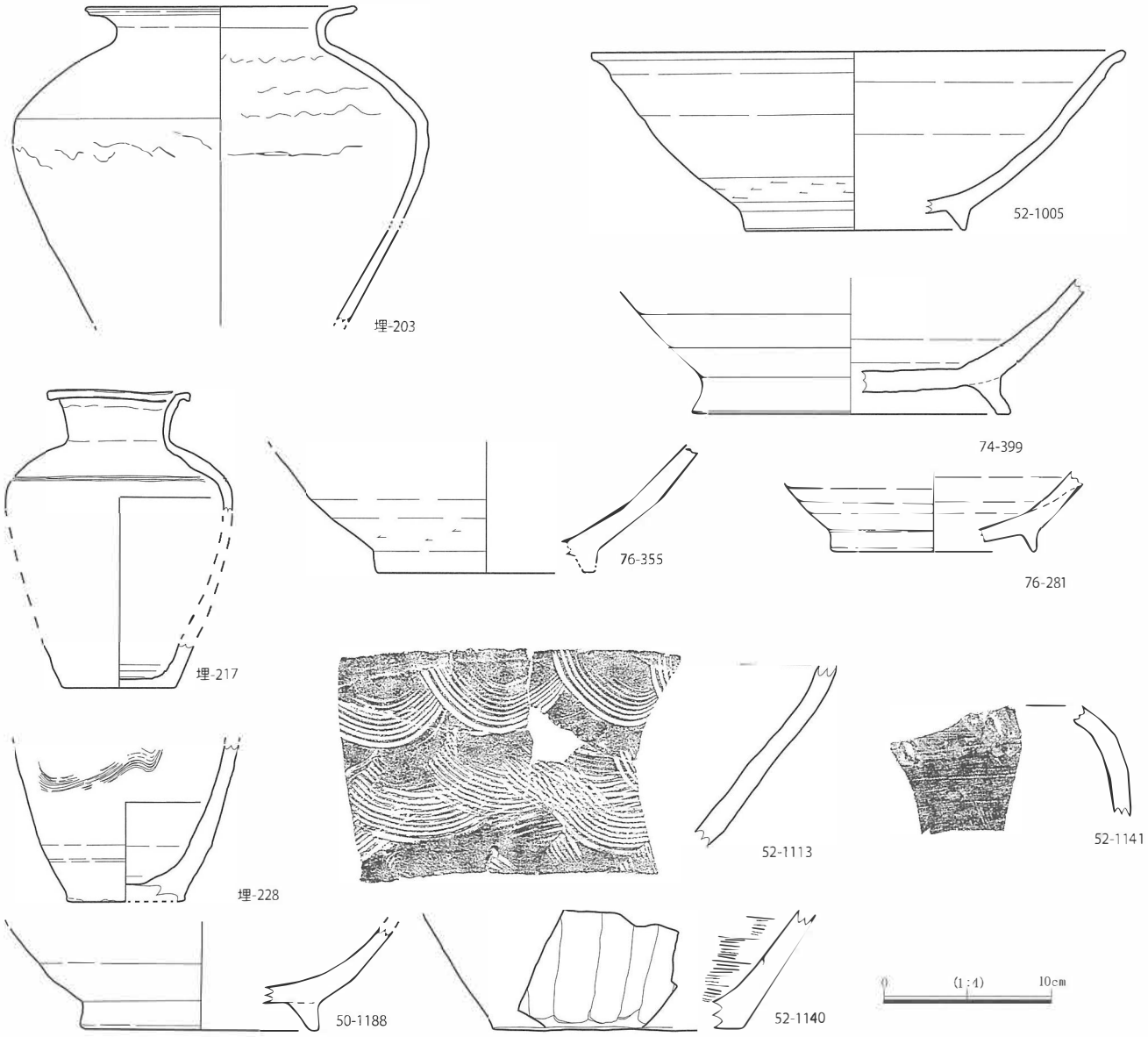


図263　国産陶器類実測図（2）

の片口鉢と推測できる。口径18cm程、底径10cm程、器高7.8cm程の器形である。片口の資料は鉢のほか、やや小形の碗類も少量含む。その他の山茶碗などの碗類は器形が復元できる資料は少ない。72－207は外側の堀から出土した碗類である。底部は径7.2cm程で、残存高が4.2cm程である。

常滑　常滑産は器形が復元できる資料は多くないが、甕や壷、片口鉢や山茶碗などが出土している。甕類では大甕などがあるものの全体を復元できる資料は少ない。壷類では、広口壷や三筋壷などがある。55－1014は55SK49から出土した広口壷である。口径16.5cm程である。72－66は72SD1から出土した壷類の体下部である。底径は８cm程である。体下部にはケズリが行われる。片口鉢は大型の器形と小型の器形がある。52－1005は52SE8から出土した片口鉢である。口径30cm程の大型の器形とみたが、残存は少ない。74－399は72 SD1から出土した片口鉢で、底径20cmを超える大型の器形である。76－355は21SD1から出土した片口鉢で、底径12cm程の器形である。76－281は21SD1から出土した片口鉢は、底径12cm程の器形である。山茶碗や皿などの小型品は少ない。52－1010は52SD26（59－56付近）から出土した口縁部下部に突帯が廻る合子類である。口径9.7cm、底径７cm、器高5.4cm

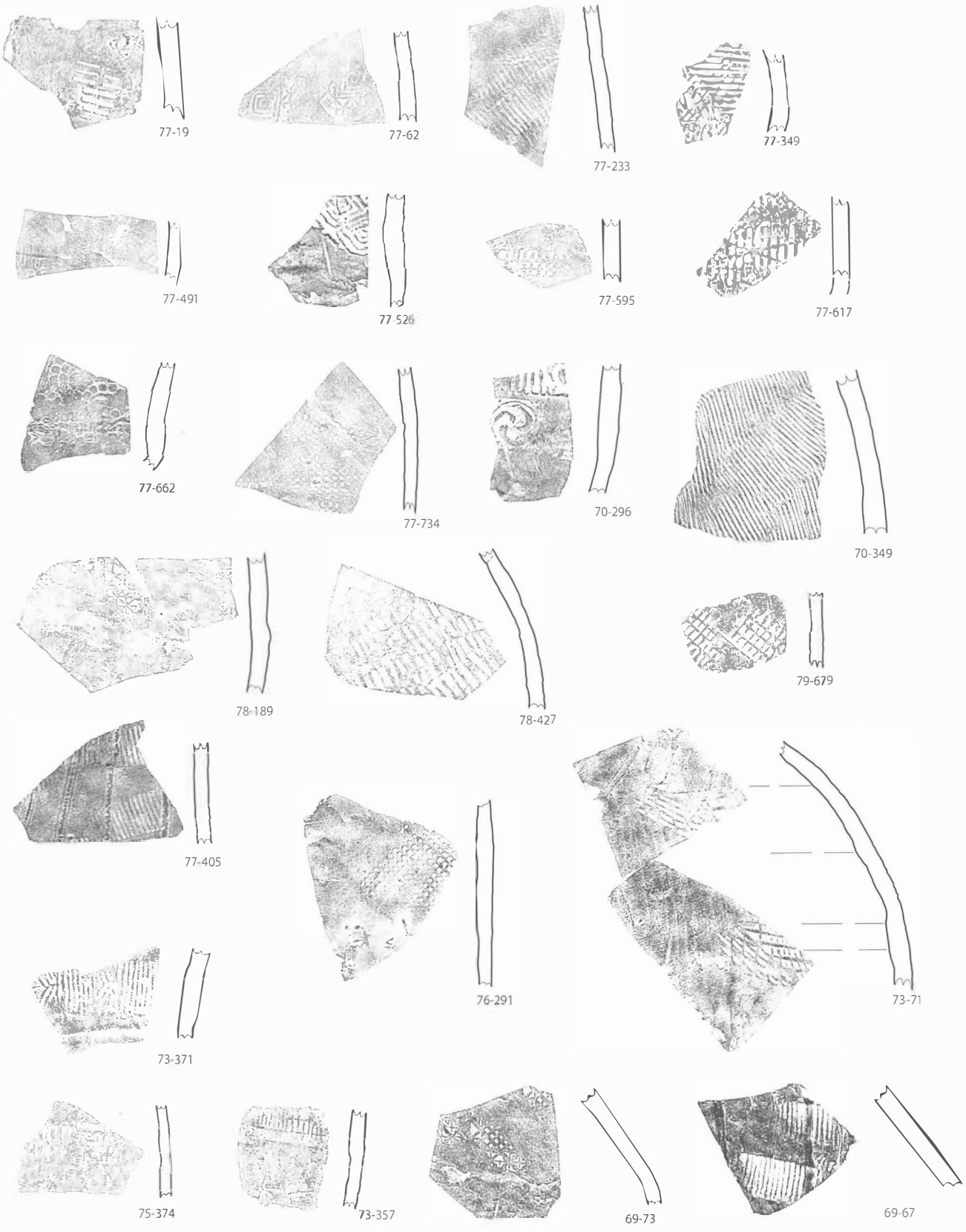


図264　国産陶器類体部片

程の器形である。

須恵器系　須恵器系陶器は甕類や壺類が出土している。甕類では波状文が描かれる。壺類では耳を持つ資料が特徴的である。須恵器は甕類の体部片が多く出土している。器形が復元できる資料は少ない。52－1113は52SE3から出土した甕類の体部で波状文が描かれる。

その他　そのほか、水沼産と推測できる資料は破片数でも数量が少ない。52－1141は表土からの出土した壺類の体部片である。50－1188は37SE2から出土した片口鉢である。底径13.6cm程で、器高5.6cmである。52－1140は64－59付近から出土した壺類の体部片である。猿投産とみられる資料は、器形が復元できる資料が少ない。

体部片　また、出土量の多数を占める甕、壺類の体部片にも多様な押印が指摘されている（図264）。格子文や縦線文のほか、格子に×文や装飾が組むものなどもある。このほか、装飾的な巴文（70－296）や重ね文（77－62）、花文（77－662）などもみられる。

【出土量と傾向】

調査次数別に出土量を示す（表23）。なお、出土量の集計は未報告資料を含めて行っているものの、調査が複数の機関で長期に及んだこともあり計測できていない資料も存在する。また、現状で展示などに活用されている資料や修復・復元により点数には含められるが重量が計測不能な資料などもある。そのため、以下で示す数値は計測、確認できた資料にとどまるものである。

また、破片数での計測には接合の状況や整理時における接合作業の多寡も反映するなどの課題がある。また産地の判別や器種の判別には経験則的な部分も多くを占めており分類が難しい資料も含むなどの資料操作上の課題も内包するものである。ただし、想定できる未計測の資料等は全体の数量との比率からは極めて少なく、調査次別の登録時の資料のうち９割以上の資料が把握できており遺跡の傾向やあり方を検討する上では十分な量が担保されたものと捉えられる。

○産地ごとの出土量と概要

国産陶器類は1310kg程が確認できる。このうち渥美産と常滑産が圧倒的に多数を占める。渥美産とみられる資料が約57％でもっとも多数を占める。次いで、常滑産とみられる資料が約33％である。両者を合わせて全体の90％を占めている。なお、渥美と常滑の破片資料での分類が難しい資料も含むが、複数の担当者が携わった複数次の調査時でも概ね近似した、渥美産が多く常滑産がやや少ない傾向を示しており、概ね出土量の傾向は把握できているとみている。

続いて、須恵器系陶器があり須恵器と分類したものを合わせて８％程である。なお、須恵器系とした資料は甕類が多く、須恵器と分類した資料には古代の資料を含む可能性がある。後述するように須恵器系陶器はこのうち62％である。須恵器系陶器とした資料は珠洲産の資料を含め日本海側での生産が想定される資料である。

その他の資料では、産地が特定できる資料に猿投産と水沼産があるがこれらの出土量は極めて少ない。いずれも流通量自体を反映するものであろうが、特に猿投産は小形品に限定されることも留意される。なお、猿投産は遺跡内から出土があること自体を重視した評価も可能であろうが、出土量は限定的である。このほか、同様に出土量が限定的な資料に水沼産がある。水沼産は生産の背景に平泉との関連性が指摘されている生産地でもある（藤沼1992）。柳之御所遺跡堀内部での出土量の限定性は注目される。器種も甕などの大型品であり、生産自体の規模や流通のあり方をふまえた製品の性格の検討には平泉町内の他遺跡での事例を加えた上での十分な吟味が必要であろう。

なお、平泉の中心域では花立Ⅰ遺跡で窯跡が確認されている（平泉町教委2009）。近年の発掘調査

表23　調査次ごとの国産陶器出土量（重量（g）で示した）

調査次数		渥美	常滑	須恵器・須恵器系	水沼	猿投	瓷器系	その他・不明	合計
21	緊急調査	79179.1	38437.1	15656.5	0.0	360.1	0.0	144.9	133777.7
23		77861.0	54963.1	9762.9	164.8	0.0	0.0	326.6	143078.4
28		23528.8	14534.2	4057.3	0.0	35.1	0.0	527.0	42682.4
31		25906.9	29208.0	5613.8	0.0	0.0	0.0	107.8	60836.5
36		65944.3	48078.0	12591.3	24.5	0.0	0.0	12.5	126650.6
41		104857.2	73119.3	9888.3	85.8	0.0	0.0	46.8	187997.4
37	範囲確認	9690.4	3164.0	3427.5	358.4	0.0	0.0	1464.9	18105.2
42		8783.7	8734.9	1561.8	0.0	0.0	0.0	92.6	19173.0
47	内容確認	339.1	92.7	114.6	0.0	0.0	0.0	0.0	546.4
48		4565.4	719.1	980.1	0.0	0.0	0.0	22.4	6287.0
49		6080.6	2610.4	722.1	0.0	75.1	112.9	19.9	9621.0
50	堀内部	8626.1	2837.8	1023.4	240.5	0.0	83.5	0.0	12811.3
52	内容確認調査	139820.1	43971.0	14635.9	402.3	0.0	0.0	370.3	199199.6
55		40502.9	19086.4	4367.5	0.0	0.0	0.0	86.4	64043.2
56		29727.7	17108.0	7081.8	0.0	0.0	0.0	1148.4	55065.9
57		15991.6	4844.3	1572.6	0.0	23.9	0.0	203.7	22636.1
59		7111.2	4399.6	708.0	0.0	0.0	0.0	140.0	12358.8
65		673.0	592.0	436.0	0.0	0.0	0.0	4.0	1705.0
68		6297.6	1925.6	4737.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12960.2
69		4161.0	3507.0	686.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8354.0
70		8174.4	3021.0	1852.6	0.0	0.0	241.8	5.8	13295.6
72		7777.0	3648.9	1043.4	0.0	0.0	0.0	0.0	12469.3
73		10922.9	4099.2	298.7	111.5	0.0	0.0	0.0	15432.3
74		15116.9	11600.9	2649.2	0.0	0.0	0.0	0.0	29367.0
75		17939.5	20538.2	3757.8	0.0	0.0	0.0	17.6	42253.1
76		14085.8	9202.0	1236.1	0.0	0.0	0.0	10.5	24534.4
77		13924.6	2839.9	1236.8	0.0	0.0	0.0	2348.8	20350.1
78		4735.2	3270.2	972.4	0.0	0.0	0.0	45.7	9023.5
79		3236.6	2675.5	173.9	0.0	0.0	0.0	115.6	6201.6
合計		755560.6	432828.3	112845.3	1387.8	494.2	438.2	7262.2	1310816.7
比率（%）		57.6	33.0	8.6	0.1	0.1	0.1	0.5	

でもありさらに遺構自体も大きく削平された状態であったため、遺物の特徴などに不明確な部分も残るが、花立Ⅰ遺跡の生産資料として特定できているものは現状では確認できていない。

○産地及び器種ごとの出土量と傾向

産地や器種が判別できる資料について、出土量と傾向を示す（表24）。表中には重量を主体に検討したが、点数も付記した。なお、これらの比較には既述のとおり、器種自体の大小に伴う破片数と重量との相違も想定される。

器種の出土量と傾向　まず、産地の種別を想定せずに器種毎の出土量をみていきたい。

器種ごとでは甕類がもっとも多い。重量では全体の80％程度、点数でも全体の70％程度を占める。次に壺類があり、重量で７％弱程度、点数で14％程度である。器厚が比較的薄い資料が中心になるため、重量より点数で比較した場合に比率が増えたものであろうか。甕類との出土量の差は、用途や性格を反映する可能性がある。甕、壺類で全体の80％以上を占めており、これらが国産陶器類の大半を占めることとなる。この傾向はこれまでも平泉の出土資料の特徴として指摘されてきた内容と一致する。破片資料が多く器形の復元できる個体が少ない柳之御所遺跡堀内部地区でも同様の傾向が理解できる。次いで、片口鉢などの鉢類も出土が目立つ。片口鉢等は重量で比較した場合には全体の５％弱程度、点数で全体の７％程度である。このほか、山茶碗などの碗、皿類は重量で全体の１％未満、点数では全体の１％強程度の出土量である。

重量での比較はもちろん、点数を加味した場合でも甕類の比重の高さが窺える。壺類は甕ほどではないものの、一定量を占める。なお、壺類は日常雑器としての性格のみではない可能性が指摘されている（愛知県史編さん委員会2012）。出土量の比率はこの可能性を否定するものではない。このほかの遺跡をふまえた評価が必要であろう。また、片口鉢を含む鉢類も10％未満ではあるものの、一定の出土量が確認できる。山茶碗や皿類などの小型の食膳具とみなされる資料はきわめて少ないことがわかる。

産地、器種の出土量と傾向　各産地の種別を加え、それぞれでの器種の出土量と傾向をみておきたい。

渥美産は甕類が重量で90％程度、点数で90％弱程度である。壺は重量で５％弱程度、点数で６％程度である。この中には袈裟襷文や刻画などの文様をもつ資料を含む。片口鉢などの鉢類は重量で２％程度、点数で３％程度である。碗・皿などの小型品は重量で１％未満、点数で１％程度である。その他とした資料は器種が判別できなかった資料や瓶類などである。

常滑産は甕類が重量、点数ともに78％程度である。壺類は重量で10％程度、点数で11％程度である。この中には三筋壺などを含む。片口鉢などの鉢類は重量で９％程度、点数で８％程度である。渥美に比して片口が多くなっている。これは分類方法にどの程度妥当性があるかなど、渥美と常滑での産地の個体識別についても別途検討する必要がある可能性がある。体部下部のケズリ痕跡などから判別されてきたことの影響も想定される。碗・皿などの小型品は重量で１％未満、点数で１％程度である。その他に瓶類や器種が判別できなかった資料などである。

須恵器系とした資料では、甕類が重量、点数ともに80％を超える。壺類は重量で10％程度、点数で13％程度である。これらには波状文などの特徴的な資料を含む。片口鉢などの鉢類は重量、点数ともに３％弱程度である。碗・皿などの小型品はほとんど含まず、その他とした資料は器種が判別できなかった資料や瓶類などを少量含む。

須恵器とした資料は甕類が多く70％程度を占める。なお、須恵器の分類では９～10世紀の古代と判断できる資料を除外するように努めたが、なお数量に含む可能性がある。

また、点数や重量が少ないため本表には含めていないが、水沼産は甕、壺類のほか、片口鉢が出土している。多くは甕や壺である。猿投産は壺類と片口鉢が出土している。壺も小型の壺などで小型品が多い。

表24　産地・器種ごとの国産陶器出土量（重量（g）で示した）

		渥美	比率	常滑	比率	須恵器系	比率	須恵器	比率	合計	比率
甕・広口壺	重量	680518.8	90.1	337469.0	78.0	60065.7	85.7	31791.4	74.4	1109844.9	85.3
	点数	10258	87.9	7217	77.8	812	82.4	723	73.1	10910	73.6
壺類	重量	36317.5	4.8	47022.2	10.9	6988.5	10.0	4718.6	11.1	95046.8	7.3
	点数	740	6.3	1075	11.6	129	13.1	197	19.9	2141	14.4
瓶類	重量	6260.0	0.8	2892.0	0.7	427.6	0.6	319.8	0.7	9899.4	0.8
	点数	32	0.3	21	0.2	8	0.8	15	1.5	76	0.5
片口鉢・鉢類	重量	14934.9	2.0	40424.6	9.3	1916.4	2.7	－		57275.9	4.4
	点数	262	3.3	755	8.1	29	2.9			1046	7.1
山茶碗・碗・皿類	重量	3402.3	0.5	1545.4	0.4	4.4	－	－		4952.1	0.4
	点数	126	1.1	115	1.2	1	0.1			242	1.6
その他	重要	14127.1	1.9	3475.1	0.8	708.0	1.0	5904.9	13.8	24215.1	1.9
	点数	255	2.2	92	1.0	7	0.7	54		408	2.8
合計	重量	755560.6		43828.3		70110.6		42734.7		1301234.2	
	点数	11673		9275		986		989		14823	

※比率は渥美産、常滑産、須恵器系、須恵器、全体でのそれぞれの分類内での比率である。

【出土分布】

破片資料の分布を示す。分布図は重量で作成した。分布図の作成では出土位置については、上記の次数別の出土重量に含むものでも、グリッド表記に対応できないものは除外している。

既述したように、柳之御所遺跡の調査に際しては遺跡範囲全体を包含するよう5×5mのグリッドを用いている。調査では遺物の取り上げに際してもこのグリッドに対応できるように留意して行ってきた。ただし、表土にも多くの遺物を含む状況であることや調査時の錯誤によりこれに対応できていない資料も含む。また、例言に記したとおり長期にわたる調査でもあり、グリッド表記の混乱も生じている。しかし、これらのうちグリッド表記に対応できていない資料を排除した場合でも、全体の出土資料のうち90%以上はグリッド表記に対応させて分布図に反映することができている。そのため、分布傾向の把握には十分な妥当性をもつものと判断した。

○国産陶器全体の出土傾向

国産陶器類全体の出土は（図265)、調査位置による多寡はあるものの堀内部地区の全体に広がる。遺構出土資料のみでなく、遺跡内の後世の改変により表土等にも多くの資料が包含されており、検出時の出土資料等も多く含むことによることは留意すべきである。しかし、後世における堀内部地区の範囲の利用が田畑や宅地等であったことから、資料の移動はあるものの近接範囲内での移動が多く、ある程度の出土位置と本来の位置との関係性の把握は可能であろうと推測しておきたい。

出土資料は遺跡南端部の内側の堀跡（21SD1）が多く出土している。Y=96にあたる南北軸付近やX=102～106にあたる東西軸付近がこれにあたる。また、内側の堀跡では北端部とした範囲のうち、猫間ヶ淵周辺との境にあたる位置（Y=54、X=56付近）でも多く出土している。これらは遺跡廃絶後の自然流入土に多く含まれたものである。猫間ヶ淵周辺では遺跡廃絶後の自然流入土に多く含まれている。

このほかの範囲では、掘立柱建物等が多く分布するY=74～82・X=63～72付近、やや北西側のY=58～74・X=53～66付近に分布がややまとまる。なお、甕と壺、碗皿類の器種ごとに分布を比較した場合にも、国産陶器類全体の分布傾向と顕著な差は認められなかった。遺跡範囲全体の分布が広がり、まとまりを示す位置も同様の傾向を捉えられた。ただし、掘立柱建物等が多く分布するY=74～82・X=63～72付近に注目すると、甕類は井戸跡などのいくつかの遺構があるためまとまりを示すものの、この区域全体に広がるものではない。これは評価が難しいが、甕類の使用範囲を反映するとみた場合には興味深い傾向であろう。

○産地ごとの出土傾向

渥美産の資料の分布は（図266)、国産陶器類全体の分布と同様の傾向を示す。また、遺跡の北端部周辺にあたるY＝74～86・X=50～55付近にもややまとまりが看取できる。このほか、遺跡の南端部では堀跡のみでなく地形的に平坦な位置も含めて出土が多い。一方で、掘立柱建物等が多く分布するY=74～82・X=63～72付近から23SG1池跡周辺では分布はするもののまとまりは顕著ではない。なお、器種ごとでの分布傾向の差異は顕著ではないが、上述の甕類の分布傾向とも対応しており興味深い傾向である。

常滑産の資料の分布は（図267)、国産陶器類全体の分布と同様の傾向を示す。また、遺跡の南端部では堀跡のみでなく地形的に平坦な位置も含めて出土が多い。一方で、掘立柱建物等が多く分布するY=74～82・X=63～72付近から23SG1池跡周辺では分布はするもののまとまりは顕著ではない。遺跡の北端部にあたる位置でも範囲内で広く分布はするものの、重量的なまとまりは顕著ではなくやや散漫な傾向を示す。なお、器種ごとでの分布傾向の差異は顕著ではない。

それ以外の資料の分布は、須恵器系陶器及び須恵器の分布は（図269)、国産陶器類全体の分布と同

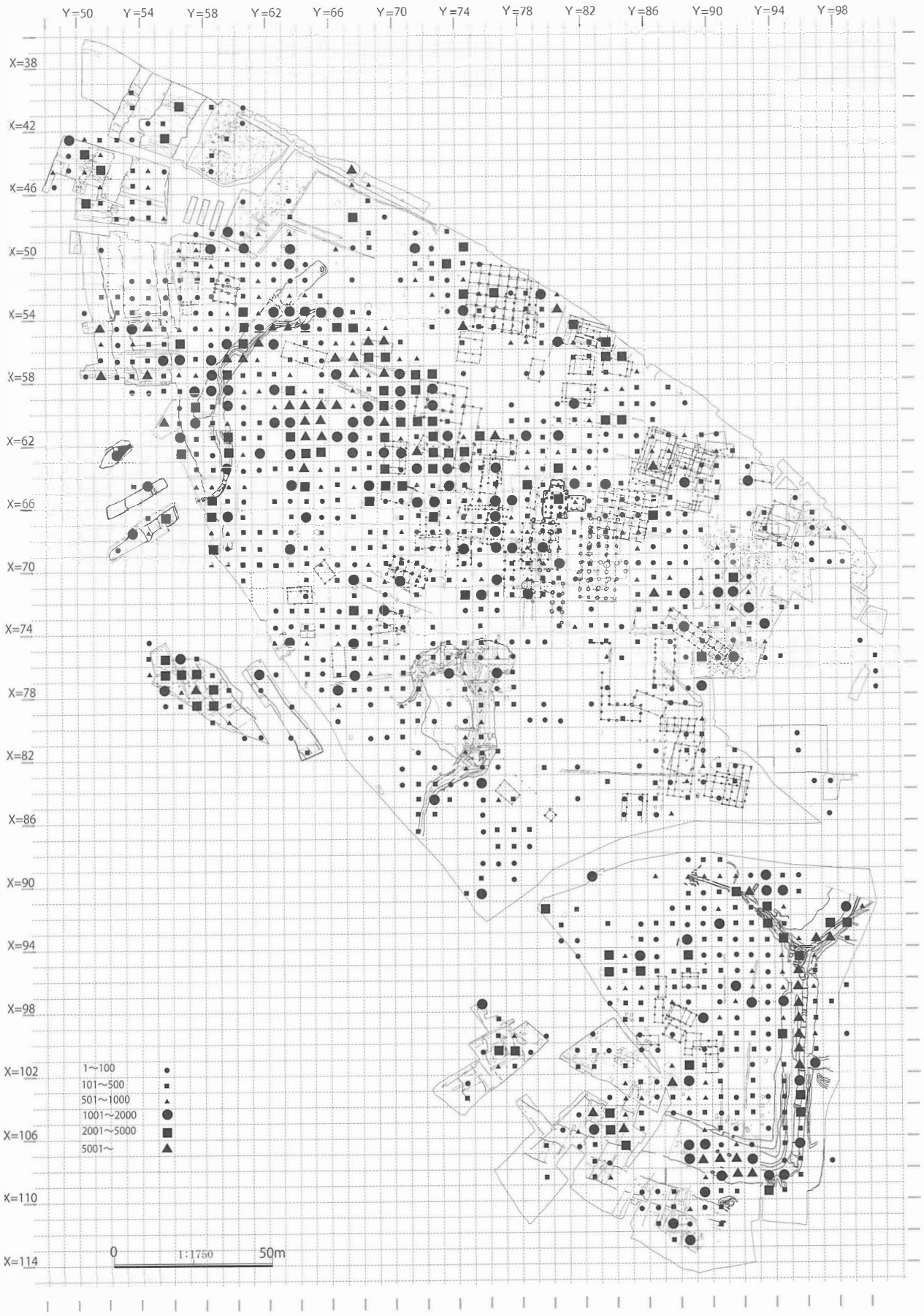


図265 国産陶器出土分布

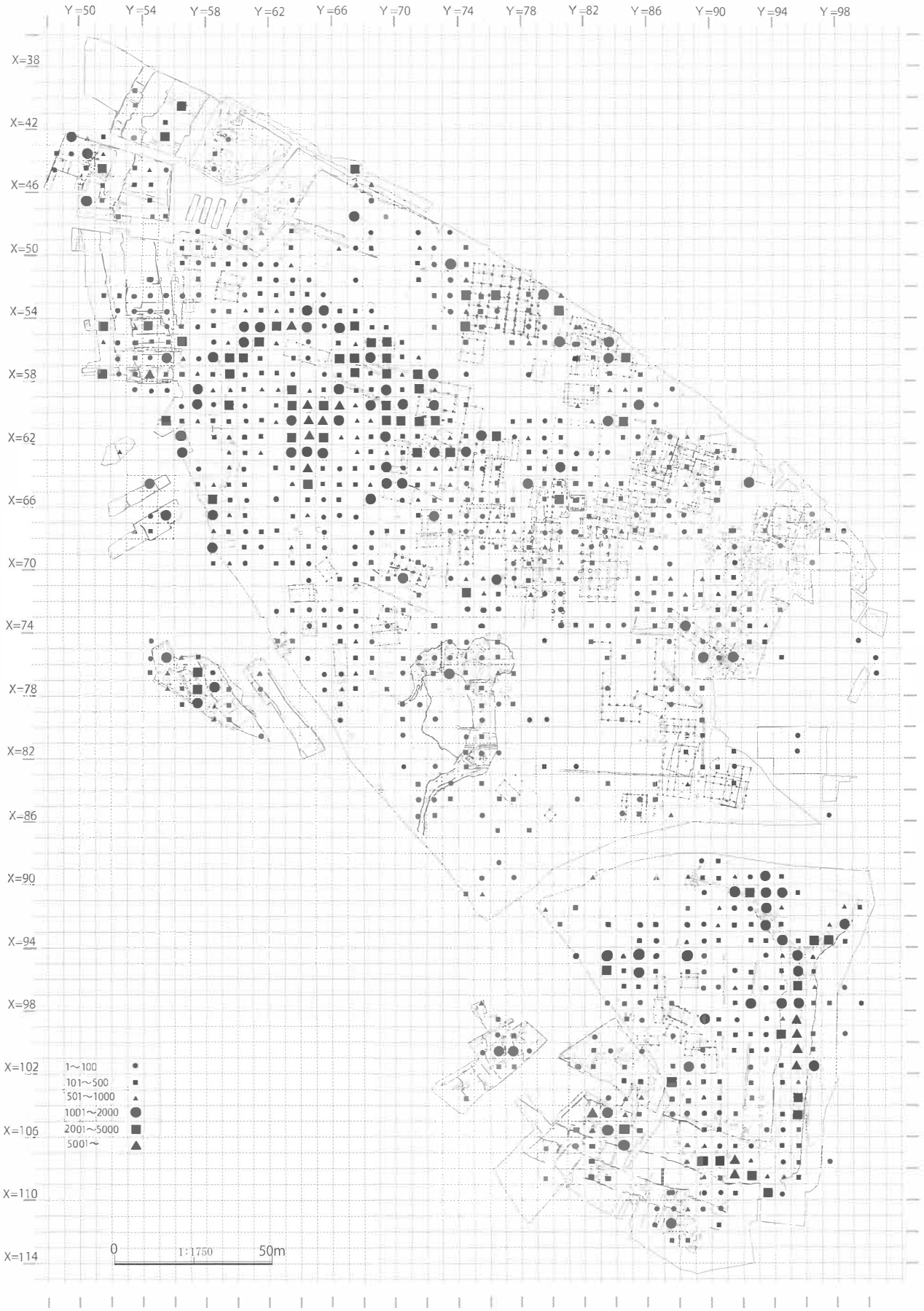


図266　国産陶器（渥美）出土分布

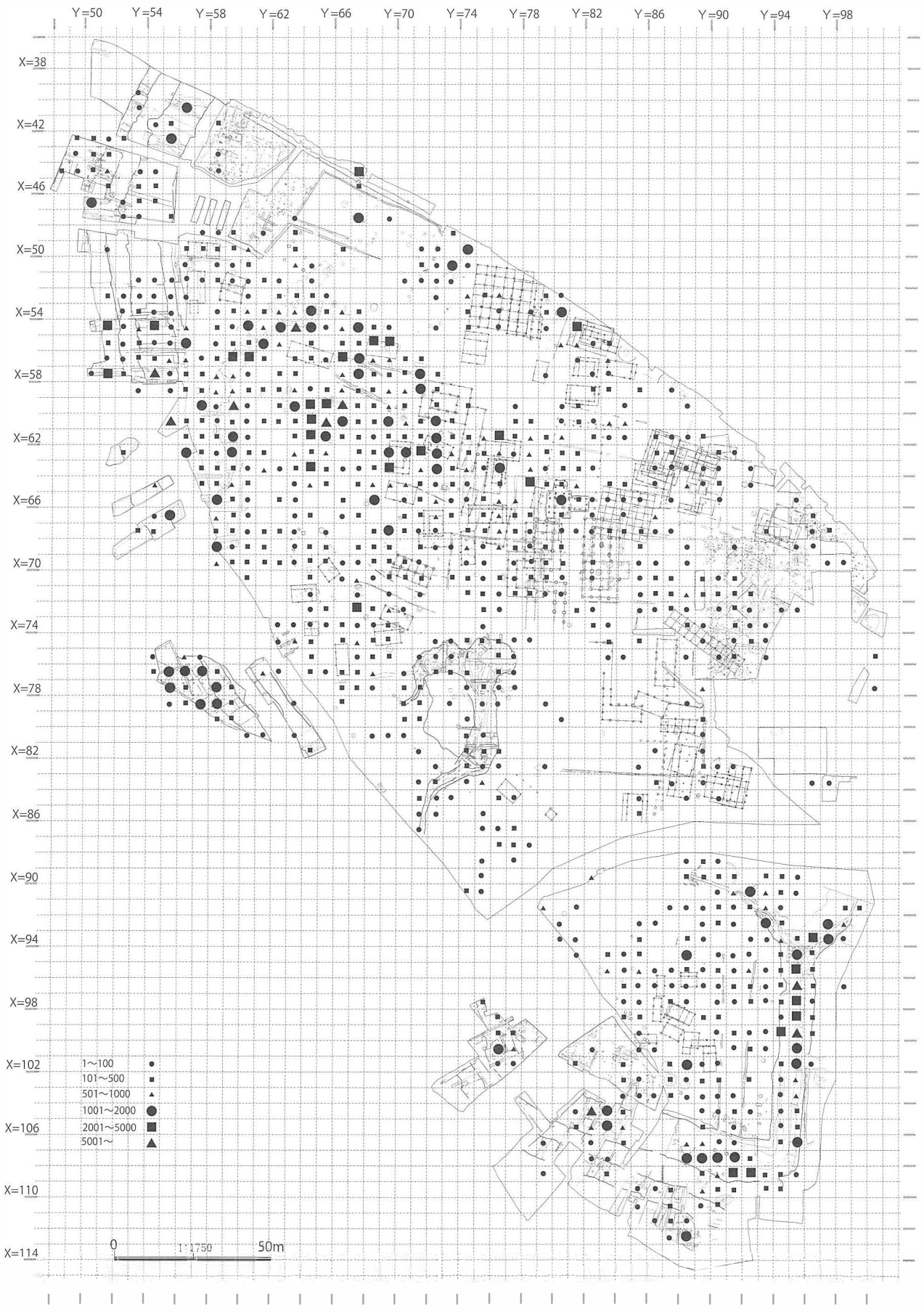


図267　国産陶器（常滑）出土分布

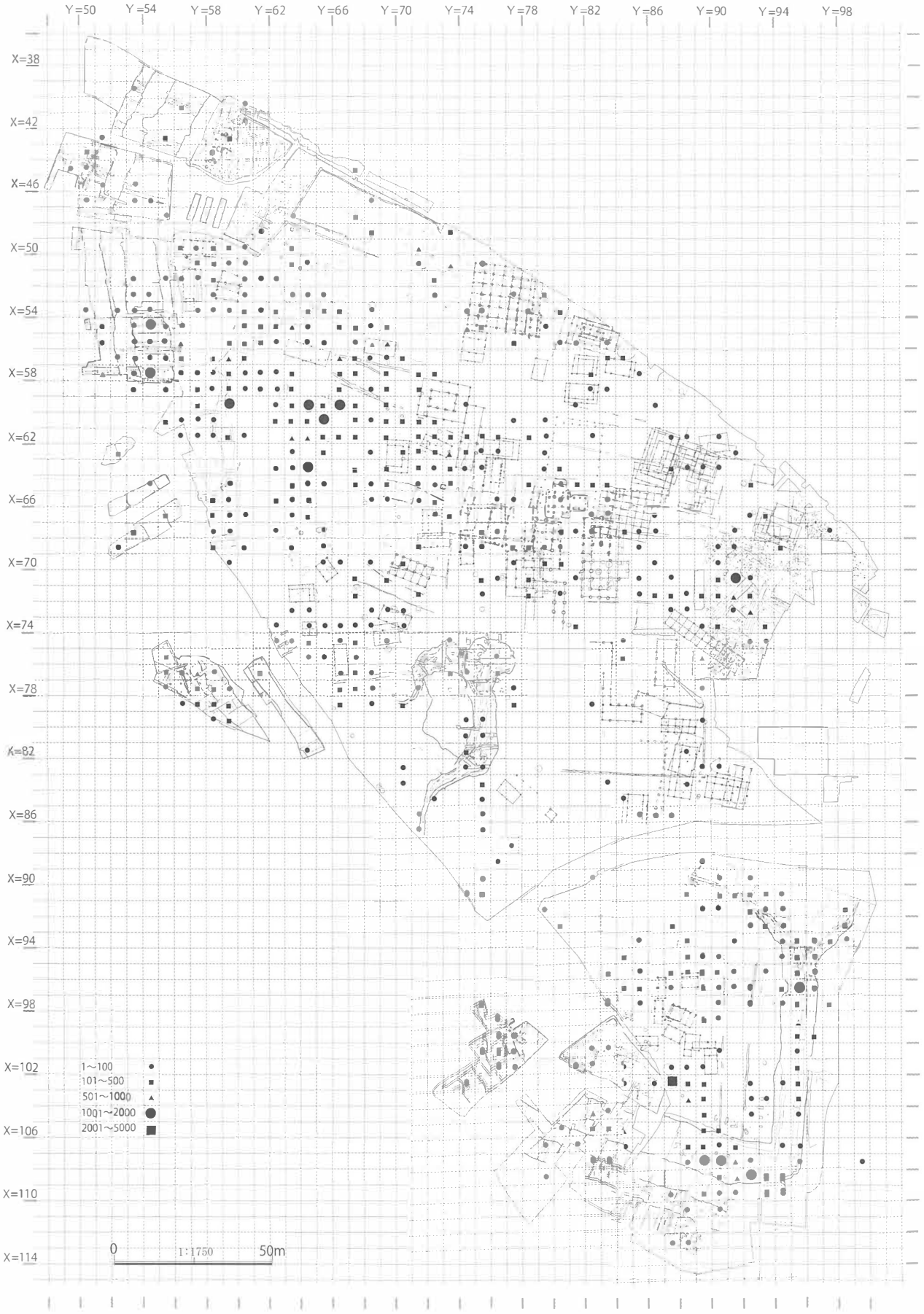


図268　国産陶器（須恵器・須恵器系）出土分布

様の傾向を示す。ただし、国産陶器類の出土が比較的まとまる範囲のうち、掘立柱建物等が多く分布するY=74～82・X=63～72付近の出土の集中は顕著ではない。また、須恵器及び須恵器系陶器のうち、須恵器系陶器に注目した場合にも分布傾向に大きな差異はみられない。上述したように、須恵器及び須恵器系陶器では器種では甕類に出土がまとまる。出土位置の傾向もこれと相関する可能性が想起できる。

出土量が少ないため分布図を掲載していないが、水沼産とみられる資料は出土量も少なく散漫な分布を示す。ただし、Y=83～84・X=59～64の遺跡の北側付近からややまとまって出土している。猿投産とみられる資料は出土量も少なく散漫な分布傾向を示すものの、遺跡の南端部にあたるY=85～91・X=97～104付近からややまとまって出土しているほか、Y=88・X=71～72付近からも出土している。

（３）輸入陶磁器類

【種別】

柳之御所遺跡堀内部地区で出土した輸入陶磁器類について、種別と概要は下記のとおりである。ここではこれらの分類に基づいて、それぞれの出土量を図表で示す。なお、既述のとおり調査範囲が重複および連続していることから、輸入陶磁器類についても埋文報告に掲載された資料とその後の調査を合わせて検討、掲載する。出土資料の多くは体部を中心とした破片資料で、完形資料や器形を復元できる資料は少ない。ここではこれらの分類に基づいて、それぞれの出土量を図表で示す。

破片資料が多いため個体数との扱いの相違も資料操作上留意すべき内容である。甕などの大型品は破片数や重量も大きくなることが想定される。一方で小型品については整理段階でも注目されて把握されてきたとも見なしうる。これらの前提条件もあり、破片数や重量を示すもののそれらの実数での数値自体の比較より、数量比や傾向としての把握が有意な内容となることが想定される。

白磁　概要　中国産の磁器で、遺跡内出土資料では福建省産とみなされてきた資料と広東省産とみなされてきた資料がある。
　器種　四耳壺などの壺や水注などの壷類、碗・皿類などがある。

青磁　概要　中国産の磁器で、「龍泉窯系」とみなされてきた資料と、いわゆる「同安窯系」として記述されてきた特徴をもつ資料がある。なお、「同安窯系」の呼称は研究の進展から産地の名称としては不適切な部分があろうが（徳留2018ほか）、ここではこれまでの研究において大別として認識されてきた内容と量比を示すため便宜的に「同安窯系」の呼称を用いる。
　器種　碗・皿類、合子などがある。

青白磁　概要　中国産の磁器で、景徳鎮産の資料が指摘されている。
　器種　碗・皿類、盤、壷類などがある。

中国陶器　概要　中国産の陶器で、釉の状況から褐釉・黄釉・緑釉などに細分される。遺跡内出土資料では２種の粘土による絞胎陶器もある。
　器種　壷類がある。

その他　高麗青磁と分類したものに鉄絵の資料がある。

【特徴的な個体】

完形に近い状態に復元できるなど特徴的な資料を例示しておく（図269）。

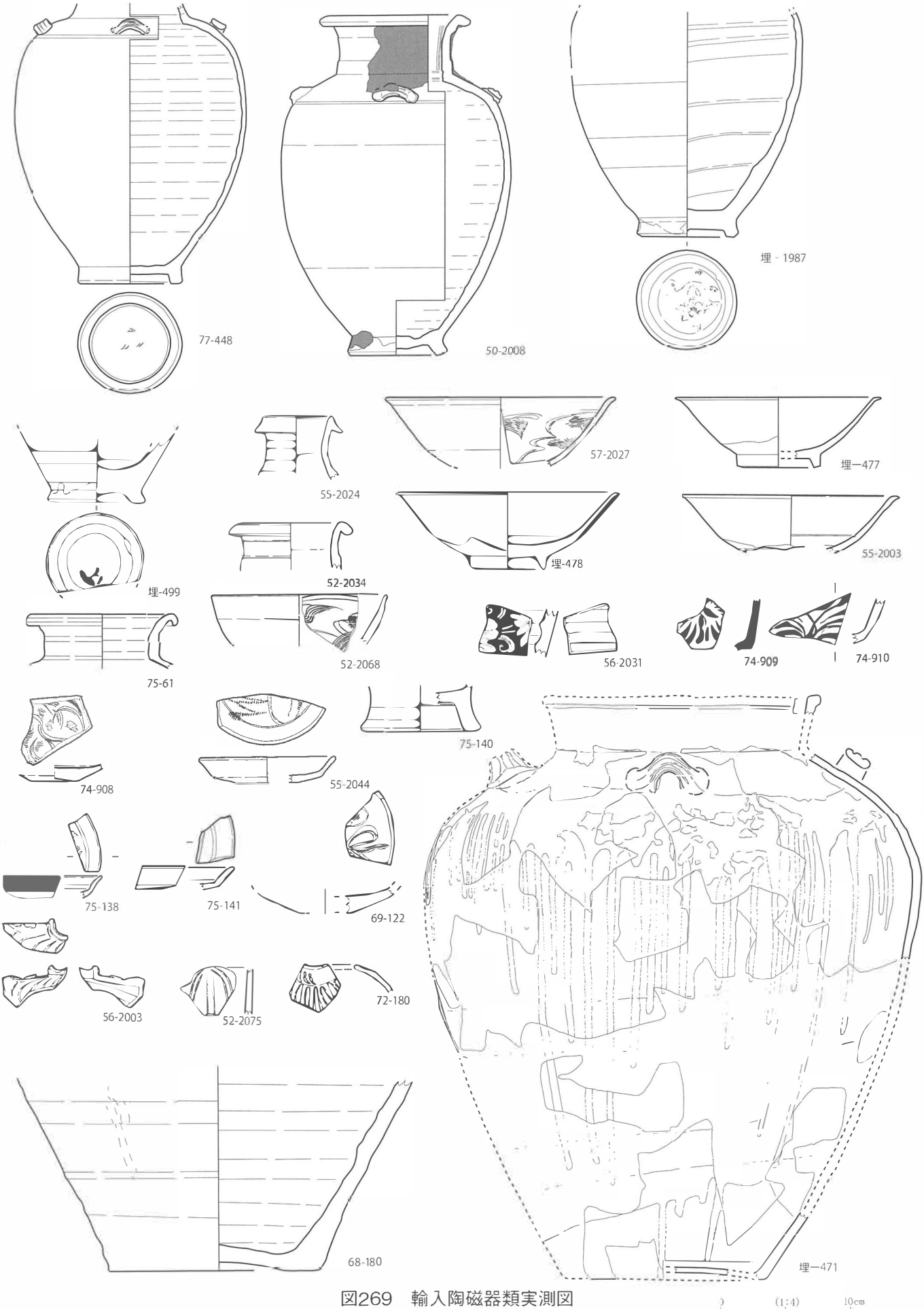


図269　輸入陶磁器類実測図

器種構成の詳細は後述するが、白磁では壺類が多く、そのうち四耳壺は完形に近い資料が数点出土している。77－448は21SD2の上層から出土し、残存高で21.7cm、最大幅は17.7cmである。台部は径8.0cm、高さ1.3cmである。底部外面に３カ所のロクロ爪の痕跡が残る。50－2008は50SE3から出土している。ほぼ完形で、高さ26.5cm程、口径10.1cm程、底径6.8cm程である。なお、この資料は既報告では高さ26cm程となっていたが若干の差異ではあるが訂正する。頸部から体部上半及び底面付近に漆が染みこんだ麻布が付着する。本来は器形の全体が覆われていたと推察される。いずれも福建省産とみられる。破片資料では広東省産とみなしうる資料も出土している。55－2024は75－62付近から出土している。水注類の口縁部である。52－2034は52SD6から出土している。75－61は55－77付近の75整地層の新期から出土している。このほかの器種では碗・皿類が出土している。57－2027は堀外部にあたる57SD41（37－27グリッド付近）から出土している。55－2003は55SD6から出土している。56－2003（56SK19）は水鳥形である。

青磁は点数が少なく、器種も皿類に限定される。52－2068（52SD26、59－56付近から出土）・74－908（72SD1）・75－138（75SD4）・75－141（75SD4）・69－122（21SD2）は龍泉窯系、55－2044は同安窯系である。

青白磁は点数が少なく、器種は小型品が多い。碗、皿類のほか、合子類も複数点みられる。52－2075は梅瓶等の体部片とみられる。72－180は合子類とみられるが、器形の全体は不明である。

中国産陶器では壺類が多い。56－2031（56SK31）は吉州窯産と推定される資料である。絞胎陶器は鉄絵が描かれ、後述するように分布も限定的である（74－909・910）。

【出土量と傾向】

調査次数別に出土量を確認しておく（表25）。なお、出土量の集計は国産陶器類と同様に未報告資料を含めて行っている。ただし、調査が複数の機関で長期に及んだこともあり計測できていない資料も存在する。また、現状で展示などに活用されている資料なども少数ながら存在する。そのため、以下で示す数値は計測、確認できた資料にとどまるものである。また、破片数での計測には接合の状況や整理時における接合作業の多寡も反映するなどの課題があり、また器種の判別には経験則的な部分も多くを占めており分類が難しい資料も含むなどの資料操作上の課題も内包するものである。調査次数を異にする資料の接合作業も行っているものの、今後とも更なる作業の継続が必要であろう。ただし、現状での計測においても９割以上の資料が把握できており遺跡の傾向やあり方を検討する上では十分な量が担保されたものと判断した。

○種別ごとの出土量と傾向

輸入陶磁器類は31kg程が確認できる。白磁が16,325.9ｇともっとも多く全体の50％を超える。点数では1,183点と全体の57％程度を占める。次いで中国陶器類が多く13,304ｇと全体の40％程度を占める。ただし点数でみた場合には中国陶器は607点で、比率がやや下がり全体の30％程度になる。これは後述する出土器種の傾向が大きく反映したとみられる。青白磁は895.6ｇで全体の３％弱程度である。点数では204点で、全体の９％程度となる。青磁は627ｇ程度で全体の２％程度である。点数では77点で、全体の３％程度となる。このほかに高麗青磁があるものの、出土量は極めて少なく、重量及び点数のいずれも全体の１％未満である。

全体の出土量をみた場合、白磁が多く、青磁は極めて少ない。この傾向はこれまでも指摘されてきたとおり、時期的な傾向のほか平泉の輸入陶磁器の特徴として把握できる内容であろう。また、青白磁は、点数は多いものの、重量比で比較すると比率が下がる。青白磁は青磁よりも多くを占める。な

表25　調査次ごとの輸入陶磁器類出土量（重量・点数で示す。重量の単位はgである。（）内は点数。）

調査次数		白磁	青白磁	青磁	中国陶器	高麗青磁	不明	合計
21	緊急調査	2352.1（85）	40.8（11）	59.4（7）	137.5（14）	0	0	2605.7
23		2016.3（128）	55.8（22）	88.6（10）	269.1（21）	0	4.6	2434.4
28		1272.8（129）	354.9（61）	10.4（2）	631.8（44）	70.0（10）	0	2339.9
31		951.0（88）	78.0（11）	11.2（2）	317.5（22）	0	0	1357.7
36		1023.6（69）	18.5（6）	12.3（1）	826.6（46）	0	0	1881
41		1108.6（101）	24.8（10）	54.8（9）	2170.5（104）	0	0	3358.7
37	範囲確認	130.4（17）	14.4（3）	0	174.8（5）	0	0	319.6
42		209.9（15）	10.4（3）	12.4（2）	323.1（12）	0	0	555.8
47	内容確認	0	0	0	0	0	0	0
48		0	0	0	15.0（2）	0	0	15
49		321.0（16）	4.0（2）	4.0（1）	32.0（1）	0	0	361
50	堀内部内容確認調査	188.6（15）	33.0（4）	35.3（3）	317.6（8）	0	0	574.5
52		1151.0（66）	26.0（6）	21.0（4）	2906.6（102）	0	0	4104.6
55		860.0（39）	22.0（3）	38.0（5）	1762.0（34）	0	0	2682
56		740.3（57）	30.5（5）	7.1（2）	214.9（12）	0	0	992.8
57		310.5（30）	0	7.1（3）	270.3（20）	0	0	587.9
59		266.0（20）	5.0（1）	0	51.0（3）	0	1	323
65		20.0（2）	13.0（1）	0	82.0（2）	0	0	115
68		278.0（18）	8.0（2）	55.0（1）	1224.7（8）	0	0	1565.7
69		41.7（6）	0	28.0（1）	37.0（4）	0	0	106.7
70		146.5（12）	0	0	132.9（5）	0	0	279.4
72		78.3（14）	22.0（5）	0	86.4（6）	0	0	186.7
73		110.9（14）	0	0	94.3（7）	0	0	205.2
74		376.0（43）	45.1（11）	59.4（4）	312.2（32）	38.9（4）	0	831.6
75		772.6（79）	77.1（17）	25.9（4）	867.5（65）	0	2.1	1745.2
76		137.8（33）	9.7（6）	28.6（8）	51.1（10）	0	0	227.2
77		1359.1（37）	0.7（1）	3.1（2）	44.5（7）	0	0	1407.4
78		80.8（16）	1.9（2）	25.6（5）	14.4（3）	0	0	122.7
79		22.1（4）	0	24.0（2）	0	0	0	46.1
合計		16325.9	895.6	627.1	13304.2	108.9	7.7	31269.4
比率（%）		52.2	2.8	2.0	42.5	0.3	0.0	(%)

お、中国陶器は大型品が多いため重量での比率がより大きくなるが、白磁に次いで多く一定量を占める。

○種別及び器種ごとの出土量と傾向

種別や器種が判別できる資料について、出土量と傾向を示す（表26)。重量と点数を記した。既述のとおり、器種自体の大小に伴う破片数と重量との相違も想定される。

種別ごとの器種別の出土量をみると、白磁では壺類がもっとも多く重量で71%程度、点数で60%程度を占める。またこのほかに、壺類のうち、四耳壺と認識できる資料は重量で11%程度、点数でも５%程度である。したがって、四耳壺や水注などの壺類で白磁全体のうち重量で80%程度、点数でも65%程度を占めることになる。次いで、碗類などが多い。碗や皿などの小型品は重量で白磁のうち15%程度、点数では30%弱程度となる。これらの壺と碗類の２種に大半が占められる。碗類は小型品で器厚も薄い資料が多いため、点数比がより多くなるものの、壺類とは大きな差異がある。それ以外の器種では不明品や蓋などがあるが少ない。

青白磁では碗や皿などの小型品がもっとも多い。青白磁のうち碗・皿類が重量で50%程度、点数で55%程度である。次に、壺類が多く重量で23%程度、点数で13%程度である。その他の器種では小壺や合子などがある。いずれも小型の器種が多い。また、鳥形など特異な器形の資料も含む。なお、従来から指摘されているように、数量的な把握は難しいものの二次被熱を受けた資料が散見される。

青磁では碗や皿などの小型品がもっとも多く、重量で97%、点数で94%と圧倒的多数を占める。壺類が少数出土しているものの、小型品である。なお、いわゆる龍泉窯系とされる資料が80%程度と大

半を占め、同安窯系とされる資料は極めて少ない。

中国陶器では壺類がもっとも多い。中国陶器のうち重量で72%、点数で75%を占める。次いで四耳壺が多く、重量で20%、点数で15%である。四耳壺と壺を合わせた壺類で、全体の90%程度を占める。このほかに、少量だが絞胎陶器などの小型品等を含む。

また、点数や重量が少ないため本表には含めていないが、高麗青磁は香炉類、壺類、瓶類などがある。鉄絵などが描かれる資料を含む。

表26　器種ごとの出土量

		白磁	比率	青白磁	比率	青磁	比率	中国陶器	比率	合計
四耳壺	重量	1930.3	11.8					2734.5	20.6	4664.8
	点数	62	5.2					92	15.2	154
壺類	重量	11663.2	71.4	206.9	23.1	17.6	2.8	9699.1	72.9	21586.8
	点数	739	62.5	28	13.7	4	5.2	459	75.6	1230
碗・皿類	重量	2514.5	15.4	452.1	50.4	609.5	97.2	267.7	2.0	3843.8
	点数	343	29.0	114	55.9	73	94.8	22	3.6	552
その他	重量	197.3	1.2	236.6	26.4			461.6	3.5	895.5
	点数	27	2.3	62	30.4			22	3.6	111
不明	重量	20.6	0.1					141.3	1.1	159.9
	点数	12	1.0					12	2.0	24
合計	重量	16325.9		895.6		627.1		13304.2		
	点数	1183		204		77		607		

※比率は白磁内、青白磁内、青磁内、中国陶器内、全体でのそれぞれの比率である。

【出土分布】

次に、破片資料の分布図を示す。出土位置については国産陶器類と同様にグリッド表記に対応できないものは除外している。しかし、これらのうちグリッド表記に対応できていない資料を排除した場合でも、全体の出土資料のうち90%以上はグリッド表記に対応させて分布図に反映することができている。そのため、分布傾向の把握には十分な妥当性をもつものと判断した。

○輸入陶磁器全体の分布傾向

輸入陶磁器の全体の分布は（図270)、調査位置による多寡はあるものの堀内部地区の全体に広がる。遺構出土資料のみでなく、遺跡内の後世の改変により表土等にも多くの資料が包含され検出時の資料等も含むことによる。しかし、後世における堀内部地区の範囲の利用が田畑や宅地等であったことから、資料の移動はあるものの近接範囲内での移動が多いと推測しておきたい。出土位置は堀内部の全域に及ぶものの分布は散漫である。重量もいずれもまとまるものではなく、顕著な集中をみせる位置は認められない。ひとつの遺構で白磁四耳壺などの器形大きな個体が出土した位置が、重量が大きく見かけ上まとまって認識される。遺跡の北側にあたる区域ではY=90以東は重量の大きい個体（50－5003）も含むため個別の遺構では分布のまとまりがあるものの、範囲全体では分布の広がりが比較的少ない。

○種別での分布傾向

種別での分布を確認すると、白磁の分布は（図271)、遺跡全体に広がり、輸入陶磁器類全体の分布と同様の傾向を示す。なお、壺類や碗・皿類などの器種ごとにみた場合にも白磁全体での分布傾向と類似し、有意と考えられるような顕著な差はみられなかった。

青磁の分布は（図272)、堀跡などから出土しているものの、分布は散漫で散在化する。青磁は碗・皿類の出土が多いため、青磁全体と器種ごとにみた分布は同様の傾向を示す。

青白磁の分布は（図273)、堀跡などから出土しているものの全体の出土重量及び点数は少ない。掘

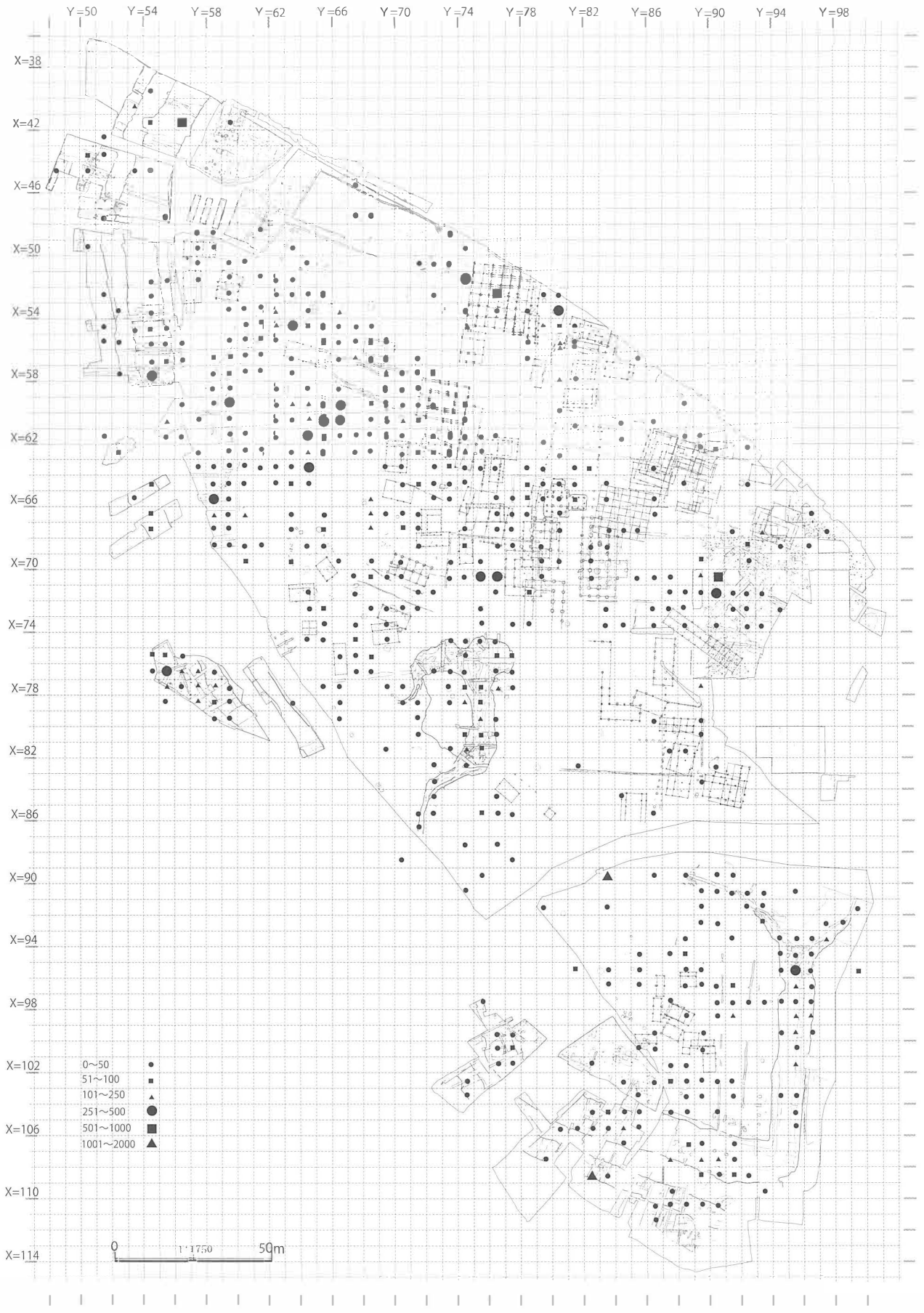


図270　輸入陶磁器類分布

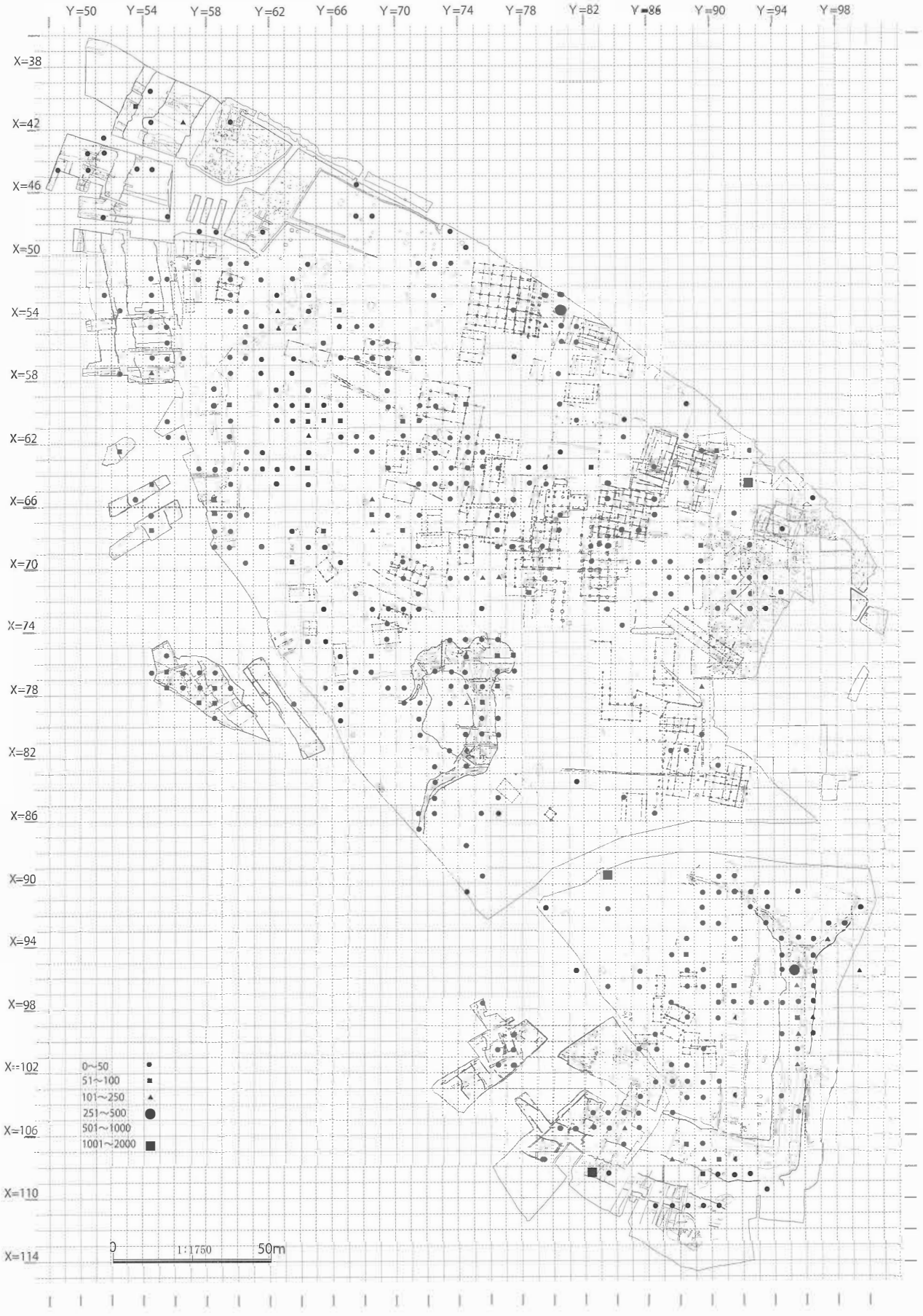


図271　輸入陶磁器（白磁）分布

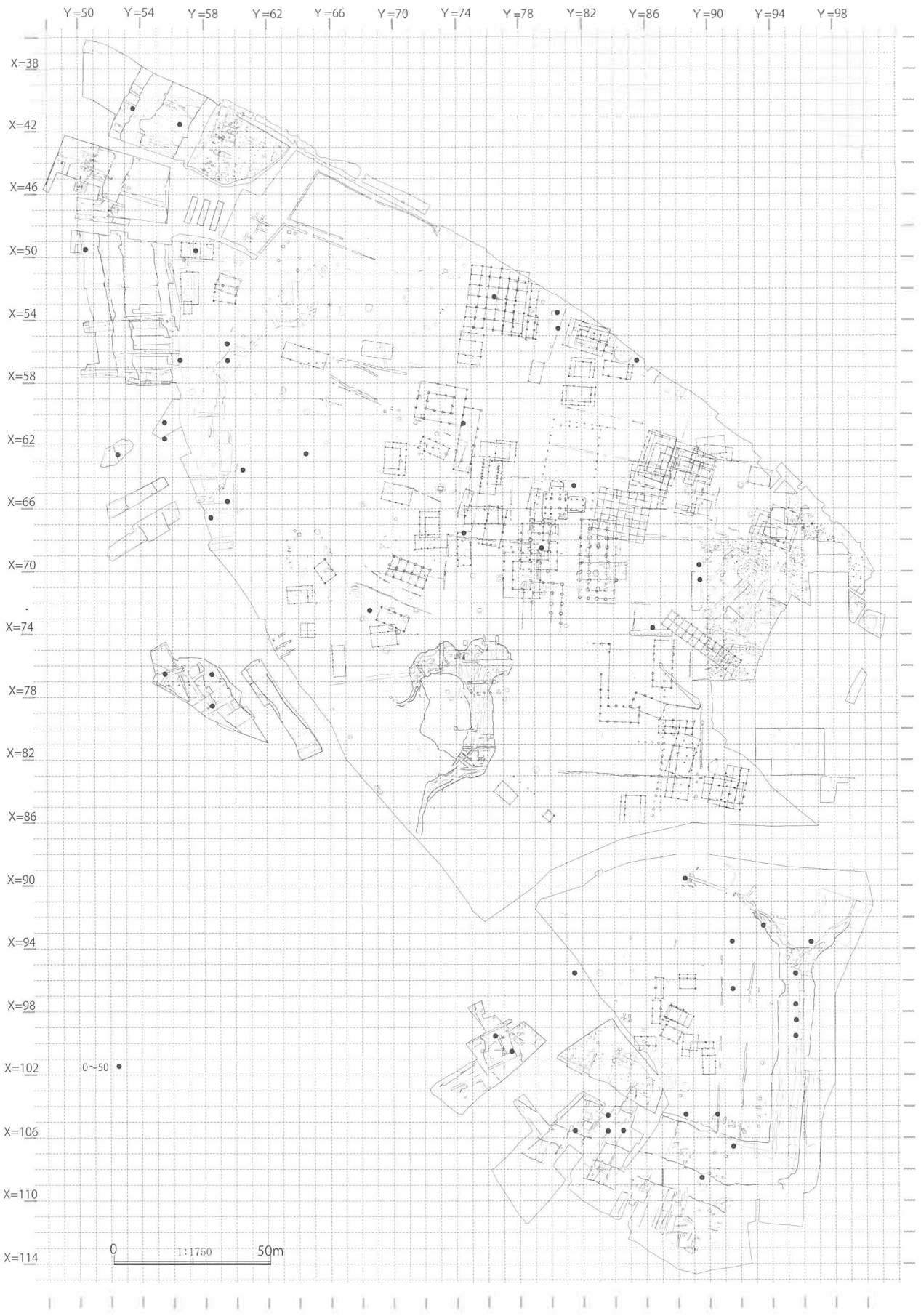


図272　輸入陶磁器（青磁）分布

図273　輸入陶磁器（青白磁）分布

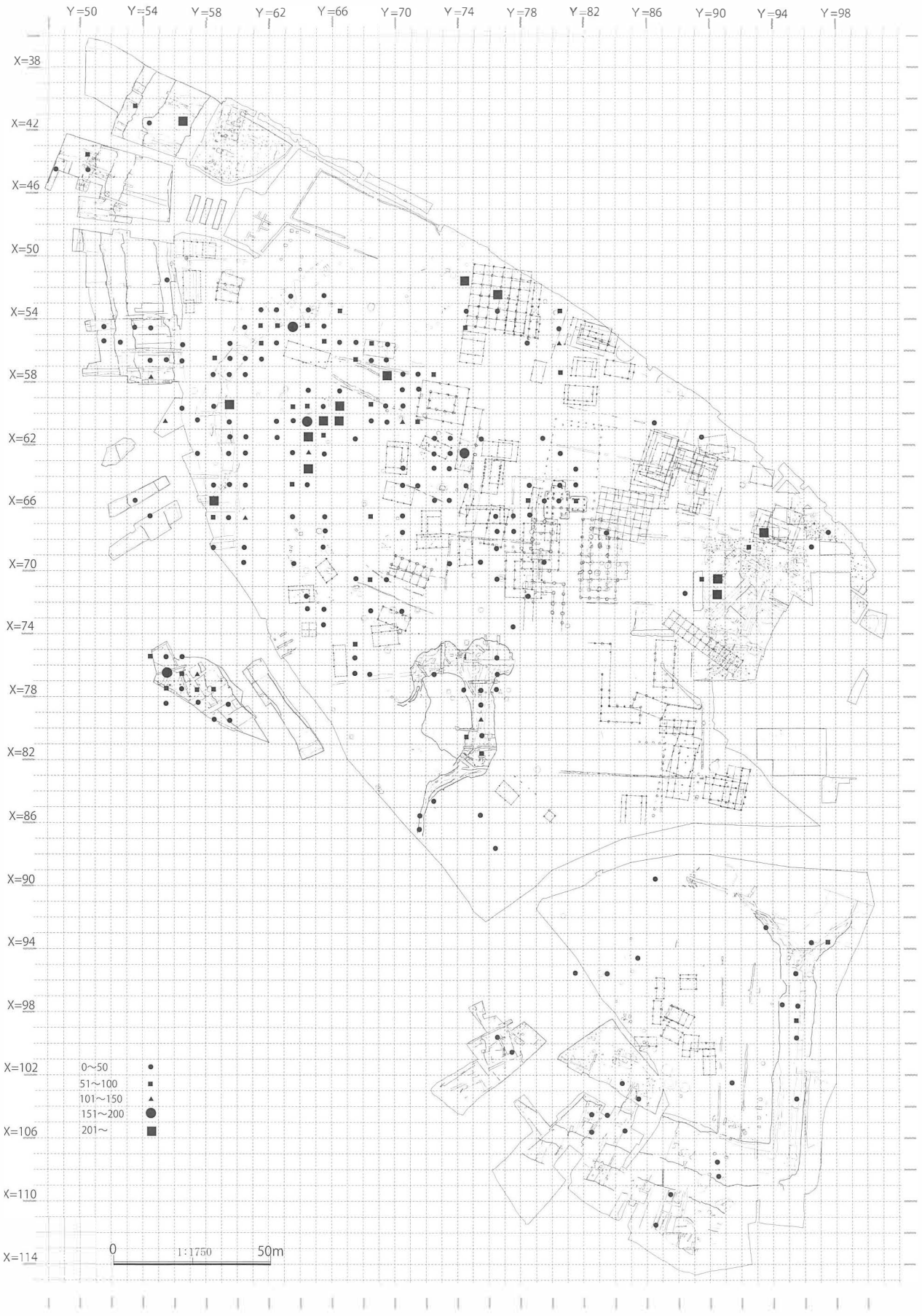


図274　輸入陶磁器（中国陶器）分布

立柱建物等が多く分布するY=74～82・X=63～72付近、やや北西側のY=58～74・X=53～66付近に分布がややまとまる。器種ごとにみた場合に、青白磁は碗・皿類が多く出土しており、青白磁全体での出土傾向も同様である。

中国産陶器の分布は（図274)、分布が遺跡西側を中心にややまとまる傾向が看取できる。23SG1池跡周辺から南側や東側は出土した場合でも重量が少ない。また、このうち絞胎陶器は分布が遺跡西側付近にまとまり、堀跡で北端部周辺として記載した位置にまとまる。接合はできていないものの個体数は少ないことが推察できる。

出土量が少ないため分布図は示していないが高麗青磁はY=71～77・X=68～76付近からまとまって出土している。

（4）瓦

【出土量と傾向】

柳之御所遺跡堀内部地区で出土した瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦がある。その他、鬼瓦なども少数出土している。まず、種別の出土量を図表で示す（表27)。瓦類は全体で175kgが出土している。瓦類の出土量からは、平泉の遺跡の中ではまとまって確認できる遺跡と把握できる。

軒丸瓦は重量が4,650ｇで、瓦類のうち2.6％程度である。軒平瓦は重量が7,263ｇで、瓦類のうち４％程度である。平瓦は重量が99,835ｇで、瓦全体の56％程度、丸瓦は重量が32,503ｇで瓦全体の18％程度である。軒瓦類は軒丸瓦と軒平瓦を合わせても全体の７％弱程度である。平瓦と分類した資料も多くは破片資料のため、熨斗瓦等を含む可能性を排除できないが、道具瓦類の存在は明確ではない。なお、軒瓦とそれ以外の平・丸瓦の比率は、軒瓦：平・丸瓦＝１：11.1となる。また、軒丸瓦と丸瓦の比率は、軒丸：丸＝１：6.9となる。軒平瓦：平瓦の比率は軒平：平＝１：13.7となる。軒瓦では瓦当部のみの破片が多いことも勘案すべき点ではあろうが、軒瓦に対する平瓦、丸瓦の比率が大きい。

また、参考として柳之御所遺跡及び周辺で瓦が多く出土した平泉町教育委員会の調査資料のうち把握できた数値を示した。13次調査は68－82付近で、井戸跡から多く出土している。15次調査はY=63～65・X=78～79付近で、75次調査の範囲と重複し、内側の堀跡を調査している。猫間ヶ淵跡３次調査とした調査はY=63～65・X=86～87付近を対象としており、内側の堀跡の一部が調査範囲に含まれている。これらの３次の調査を合計した数値では、瓦類は89kg程度を計測した。軒丸瓦は５％程度、軒平瓦は６％程度、平瓦は60％程度、丸瓦は27％程度である。軒丸瓦と軒平瓦を合計すると11％となり、前述の出土比率と比較した場合にやや軒瓦類が多い。これは13次調査において検出された13SE2において、軒瓦類がまとまって出土していることを反映している。なお、軒瓦とそれ以外の平・丸瓦の比率は、軒瓦：平・丸瓦＝１：7.7となる。また、軒丸瓦と丸瓦の比率は、軒丸：丸＝１：5.4となる。軒平瓦：平瓦の比率は軒平：平＝１：9.6となる。軒瓦では瓦当部のみの破片が多いことも勘案すべき点ではあろうが、軒瓦に対して平、丸瓦の比率が大きい。

参考に両者を合わせた数量では、軒丸瓦は重量で9239.1g、瓦類のうち3.5％程度を占める。軒平瓦は重量で1902.9g、瓦類のうち4.9％程度を占める。平瓦は153953.1gで、瓦類のうち57.9％程度を占める。丸瓦は57391.9gで、瓦類のうち21.6％程度を占める。なお、軒瓦とそれ以外の平・丸瓦の比率は、軒瓦：平・丸瓦＝１：9.5となる。また、軒丸瓦と丸瓦の比率は、軒丸：丸＝１：6.2となる。軒平瓦：平瓦の比率は軒平：平＝１：11.9となる。軒瓦では瓦当部のみの破片が多いことも勘案すべき点ではあろうが、軒瓦に対する平瓦、丸瓦の比率が大きい。

表27　調査次ごとの瓦類出土量（重量（g）で示す）

次数		軒丸瓦	軒平瓦	平瓦	丸瓦	その他	不明	合計
21	緊急調査	1194.8	492.9	3657.7	930.7	0.0	1020.7	7296.8
23		1131.5	545.4	3311.4	1299.8	0.0	347.3	6635.4
28		26.2	2419.1	20490.3	1041.7	0.0	1172.8	25150.1
31		314.6	557.0	11349.8	2191.3	22.0	10090.9	24525.6
36		0.0	623.0	3718.6	2252.8	0.0	1110.3	7704.7
41		374.3	53.0	4922.8	2172.8	491.5	507.7	8522.1
37	範囲確認	0.0	82.9	473.2	555.8	0.0	35.1	1147.0
42		119.8	0.0	269.9	75.6	0.0	155.6	620.9
47	内容確認	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
48		0.0	0.0	411.9	556.2	0.0	127.0	1095.1
49		4.0	153.1	2496.5	387.0	0.0	110.8	3151.4
50	堀内部内容確認調査	0.0	0.0	804.2	109.0	0.0	0.0	913.2
52		30.0	294.4	10809.6	4812.9	0.0	432.9	16379.8
55		0.0	0.0	114.0	46.5	0.0	9.8	170.3
56		0.0	350.9	4050.2	1635.0	0.0	82.5	6118.6
57		20.0	0.0	309.0	70.0	0.0	68.0	467.0
59		0.0	0.0	1266.2	71.4	0.0	36.3	1373.9
65		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
68		0.0	0.0	1352.0	222.0	0.0	0.0	1574.0
69		0.0	0.0	372.0	945.0	0.0	0.0	1317.0
70		0.0	0.0	1419.7	1505.8	0.0	80.3	3005.8
72		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	498.6	498.6
73		53.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	53.9
74		0.0	0.0	533.1	113.8	0.0	34.6	681.5
75		1309.5	1573.1	24687.6	10445.4	4.0	14180.8	52200.4
76		37.8	77.4	1749.5	713.5	0.0	328.1	2906.3
77		33.7	3.0	238.6	47.0	0.0	16.9	339.2
78		0.0	38.4	1027.7	302.4	0.0	480.1	1848.6
79		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計		4650.1	7263.6	99835.5	32503.4	517.5	30927.1	175697.2
比率（%）		2.6	4.1	56.8	18.5	0.3	17.6	

（参考）

次数		軒丸瓦	軒平瓦	平瓦	丸瓦	その他	不明	合計
13次	緊急調査	4523.4	5570.6	51439.9	23224.4	0.0	58.3	84816.6
15次		65.6	28.5	1061.8	867.4	0.0	240.5	2263.8
猫間３次		0.0	40.2	1615.9	796.7	0.0	252.9	2705.7
合計		4589.0	5639.3	54117.6	24888.5	0.0	551.7	89786.1
比率（%）		5.1	6.3	60.3	27.7	0.0	0.6	

点数での傾向も把握しておきたい。軒丸瓦は42点で、0.9％程度である。軒平瓦は85点で、1.9％程度である。平瓦は1015点で23．3％程度、丸瓦は315点で7.2％程度である。なお、軒瓦とそれ以外の平・丸瓦の点数での比率は、軒瓦：平・丸瓦＝１：10.4となる。また、軒丸瓦と丸瓦の比率は、軒丸：丸＝１：7.5となる。軒平瓦：平瓦の比率は軒平：平＝１：11.9となる。

なお、参考として柳之御所遺跡及び周辺で瓦が多く出土した平泉町教育委員会の調査資料のうち把握できた数値を示した。これらの３次の調査を合計した数値では、瓦類は89kg程度を計測した。軒丸瓦は５％程度、軒平瓦は６％程度、平瓦は60％程度、丸瓦は27％程度である。軒丸瓦と軒平瓦を合計すると11％となり、前述の出土比率と比較した場合にやや軒瓦類が多い。これは13次調査において検出された13SE2において、軒瓦類がまとまって出土していることを反映している。なお、軒瓦とそれ以外の平・丸瓦の点数での比率は、軒瓦：平・丸瓦＝１：11.7となる。また、軒丸瓦と丸瓦の比率

は、軒丸：丸＝１：5.4となる。軒平瓦：平瓦の比率は軒平：平＝１：21.7となる。

参考に両者を合わせた数量では、軒丸瓦は64点で、瓦類のうち1.3％程度を占める。軒平瓦は99点で、瓦類のうち2.0％程度を占める。平瓦は1320点で、瓦類のうち27.1％程度を占める。丸瓦は434点で、瓦類のうち8.9％程度を占める。なお、軒瓦とそれ以外の平・丸瓦の比率は、軒瓦：平・丸瓦＝１：9.5となる。また、軒丸瓦と丸瓦の比率は、軒丸：丸＝1:6.2となる。軒平瓦：平瓦の比率は軒平：平＝１：11.9となる。軒瓦では瓦当部のみの破片が多いことも勘案すべき点ではあろうが、軒瓦に対する平瓦、丸瓦の比率が大きい。

表28　瓦類出土点数

次数	軒丸瓦	軒平瓦	平瓦	丸瓦	その他	不明
点数	85	1015	315	3	2898	1020.7
比率（％）	0.9	1.9	23.3	7.2	0.0	66.4

（参考）

次数		軒丸瓦	軒平瓦	平瓦	丸瓦	その他	不明
13	緊急調査	20	12	236	78		8
15		2	1	30	19		17
猫間３次			1	39	22		27
合計		22	14	305	119		52
比率（％）		4.3	2.7	59.6	23.2		10.2

【瓦の種類】

軒瓦の種類を瓦当文様で分類して示す。これまでいくつかの分類が示されている（本澤2000、岩手埋文1995、木本2006）

○**軒丸瓦**　軒丸瓦は12種類が確認されている（図275）。なお、平泉町内で確認されている当該時期の軒丸瓦の瓦当文様の多くは柳之御所遺跡堀内部で確認されているものの、一部に柳之御所遺跡堀内部では確認できていないものもある。下図ではこれらを一部含めた分類を示した。

文様は大きく３種にわかれる。ここでは蓮華文系と花文、巴文系とした。蓮華文系の文様は少ない。花立Ⅱ遺跡出土瓦の瓦当文様は柳之御所遺跡では確認されていない。柳之御所遺跡例は瓦当中央部が欠損している。次に、花文とした資料も大きくは蓮華文系に含まれるとも考えられる。

巴文の文様がもっとも多く、さらにいくつかに分かれる。巴文のみで構成されるものを三巴文系とした。巴巻き方向には右巻き、左巻きがあり中央が接するものと離れるものがある。巴文と外区に文様が付加されるもので、珠文が付くもの、剣頭文が付くもの、連珠と剣頭文が付くもの、花文状の文様が付くものがある。

柳之御所遺跡の出土資料では巴文系が多数を占め、その他の文様はきわめて少ない。

○**軒平瓦**　軒平瓦は14種類が確認されている（図276）。軒丸瓦と同様に、平泉町内で確認されている当該時期の軒平瓦の瓦当文様の多くは柳之御所遺跡堀内部で確認されているものの、一部に柳之御所遺跡堀内部では確認できていない文様もある。下図ではこれらを含めた分類を示している。

文様は唐草文系、剣頭文系、三巴文系に分けた。唐草文系は唐草文のみのものと宝相華文系がある。瓦当の成形技法では、唐草文系は顎貼付と折曲による資料がある。宝相華文系は半折曲による。剣頭文系としたものは剣頭文のみのものと、連珠と剣頭文のもの、剣頭文と巴文が付くものがある。剣頭文のみのものは折曲による。連珠剣頭文は折曲による。剣頭文と巴文が付くものは、端部は剣頭

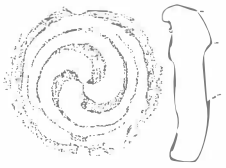
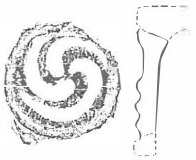
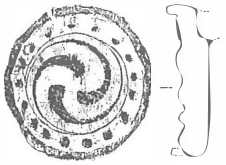
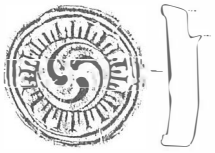
軒丸瓦
- 蓮華文系
  - 単弁 （花立Ⅱ遺跡） （花立Ⅱ遺跡）
  - 複弁 （花立Ⅱ遺跡） （柳之御所遺跡）
- 花文 （柳之御所遺跡）
- 巴文系
  - 三巴文
    - 左巻（接する）  （柳之御所遺跡）
    - 左巻（接しない） （柳之御所遺跡）
    - 右巻（接する）  （志羅山遺跡）
    - 右巻（接しない） （中尊寺）
  - 連珠三巴文  （柳之御所遺跡）
  - 剣頭三巴文  （柳之御所遺跡）
  - 連珠剣頭三巴文 （柳之御所遺跡）
  - 半裁花文 （柳之御所遺跡）

図275　軒丸瓦分類図

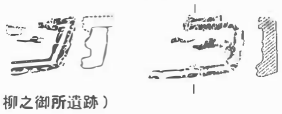
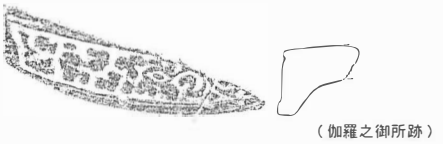
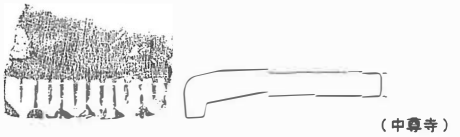
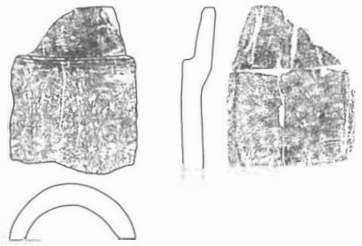
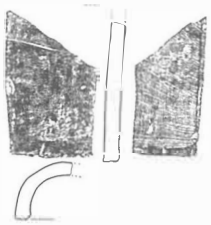
軒平瓦
- 唐草文系
  - 唐草
    - 偏行 （花立Ⅱ遺跡）
    - 偏行 （志羅山遺跡）
    - 偏行 （柳之御所遺跡）（柳之御所遺跡）（猫間が淵跡）
       （志羅山遺跡）（柳之御所遺跡）
  - 宝相華
    - 宝相華唐草 （花立Ⅱ遺跡）（花立Ⅱ遺跡）
    - 宝相華  （伽羅之御所跡）
      （志羅山遺跡）
    - 宝相華唐草（右） （柳之御所遺跡）
    - 宝相華唐草（左） （泉屋遺跡）
- 剣頭文系
  - 剣頭文のみ
    - 陰刻  （中尊寺）
    - 陽刻 （柳之御所遺跡）
  - 連珠剣頭 （中尊寺）
  - 剣頭巴文
    - 端部剣 （柳之御所遺跡）
    - 端部巴 （柳之御所遺跡）
    - 連珠 （中尊寺）
- 三巴文 （柳之御所遺跡）

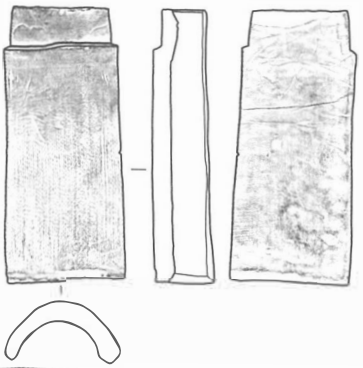
図276　軒平瓦分類図



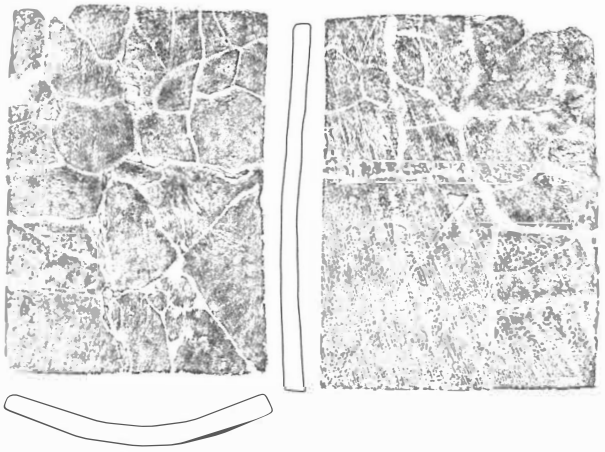
丸瓦 1



丸瓦 2

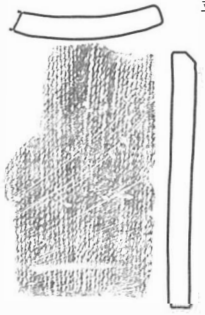


丸瓦 3

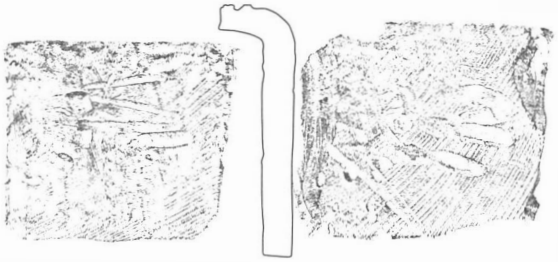


平瓦 1

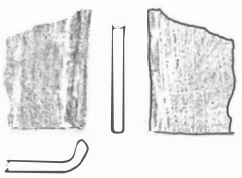
平瓦 2



平瓦 3



平瓦 4



平瓦 5

図277　平・丸瓦分類図

文のものは折曲、端部が巴文のものは顎貼付、連珠がつくものは折曲による。巴文のみのものがある。巴文のみのものは包み込みによる。

柳之御所遺跡の出土資料では剣頭文系が多数を占め、その他の文様はきわめて少ない。

○**丸瓦**　丸瓦も３種に分かれる。焼成が甘い軟質のもの（１）、焼成が比較的堅緻なもの（２・３）に大きく分かれる。

１）法量が大きく、焼成が軟質で甘い砂の多い胎土。凸面縄タタキ目→ケズリ（ほぼ全面）、凹面細かい布目で、丸瓦部の幅13cm程である。

２）凸面縄タタキ目、凹面細かい布目で、丸瓦部の幅が12～13cmである。

３）凸面ケズリ、凹面うすい布目で丸瓦部の幅が11cm程である。

○**平瓦**　平瓦は大きく５種に分かれる。そのうち、焼成の甘い砂の多い胎土と焼成が比較的堅緻なものに分かれる。

１）凸面縄タタキ目、凹面糸切り痕。長軸40cm以上と大きい。

２）凸面縄タタキ目、糸切り痕、凹面糸切り痕。長軸35cm前後である。

３）凸面糸切り痕。凹面糸切り痕。

４）凸面縄タタキ目、凹面布目痕。

５）凸面縄タタキ目、凹面糸切り痕。断面の屈曲が著しい。

○**鬼瓦**　鬼瓦が１点出土している（埋－1334）。分類に対応しないため、土製品の項に記載する（363頁）。

【分布】

資料の分布図を示す。出土位置については国産陶器類や輸入陶磁器類と同様にグリッド表記に対応できないものは除外している。しかし、これらのうちグリッド表記に対応できていない資料を排除した場合でも、全体の出土資料のうち90％以上はグリッド表記に対応させて分布図に反映することができている。そのため、分布傾向の把握には十分な妥当性をもつものと判断した。

また、参考として出土量を示した13次・15次・猫間ヶ淵跡３次調査の資料については分布図に含まれていない。ただし、これらの調査は既述したとおり小面積の調査のため、グリッド位置はある程度限定できる。

瓦全体の分布は（図278）、遺跡全体に広く分布するものの、他の遺物に比して分布の集中が顕著である。瓦類は23SG1池跡から西側にかけて猫間ヶ淵周辺に至る範囲（Y＝52～76・X=74～86）、やや北西側のY=58～74・X=53～66付近に分布がまとまる。また、参考とした３次の調査もこれらの瓦の出土がまとまる位置にあたる。そのため、これらを加えた場合には多量の瓦が出土する位置はかなり限定的な傾向が理解できることとなる。これは埋文報告（岩手埋文1995）で図示され、その後の研究においても理解されてきた内容と同様である（鎌田2006、上原2000）。これ以外の位置では瓦類が出土した場合でも数点程度にとどまる場合が多い。

軒瓦類の分布は（図279）、瓦類全体での分布と概ね同様の傾向が確認できるが、特に23SG1池跡から西側にかけて猫間ヶ淵周辺に至る範囲（Y＝52～76・X=74～86）に分布がまとまる。このほかに内側の堀などで出土があるが、いずれも分布は散漫である。また、やや北西側のY=58～74・X=53～66付近では分布が希薄である。

平瓦・丸瓦の分布は（図280）、23SG1池跡から西側にかけて猫間ヶ淵周辺に至る範囲（Y＝52～76・X=74～86）に分布がまとまり、さらにやや北西側のY=58～74・X=53～66付近にも分布がやや

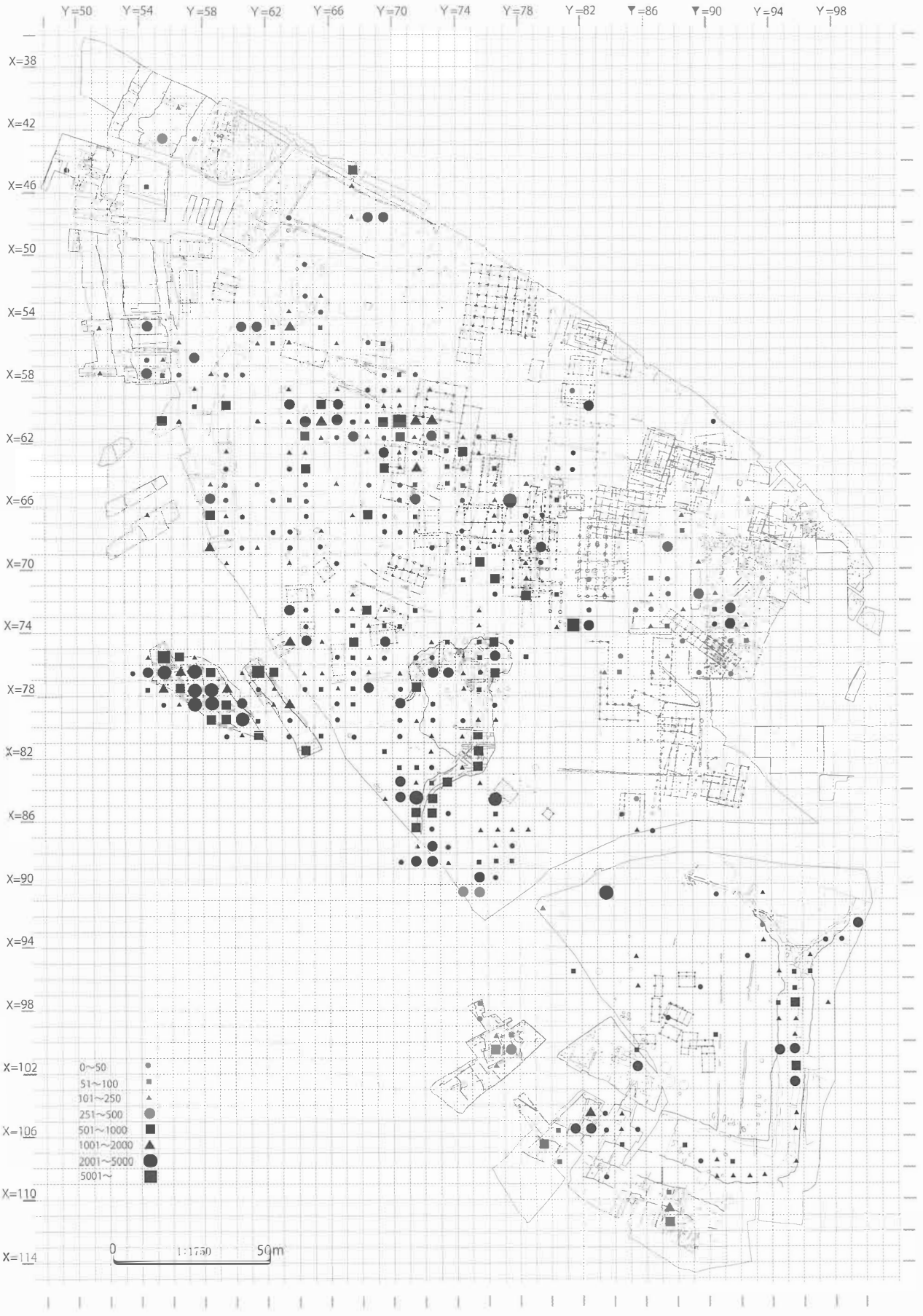

Y=50
Y=54
Y=58
Y=62
Y=66
Y=70
Y=74
Y=78
Y=82
Y=86
Y=90
Y=94
Y=98
X=38
X=42
X=46
X=50
X=54
X=58
X=62
X=66
X=70
X=74
X=78
X=82
X=86
X=90
X=94
X=98
X=102
X=106
X=110
X=114
0~50
51~100
101~250
251~500
501~1000
1001~2000
2001~5000
5001~
0
1:1750
50m

図278　瓦類出土分布

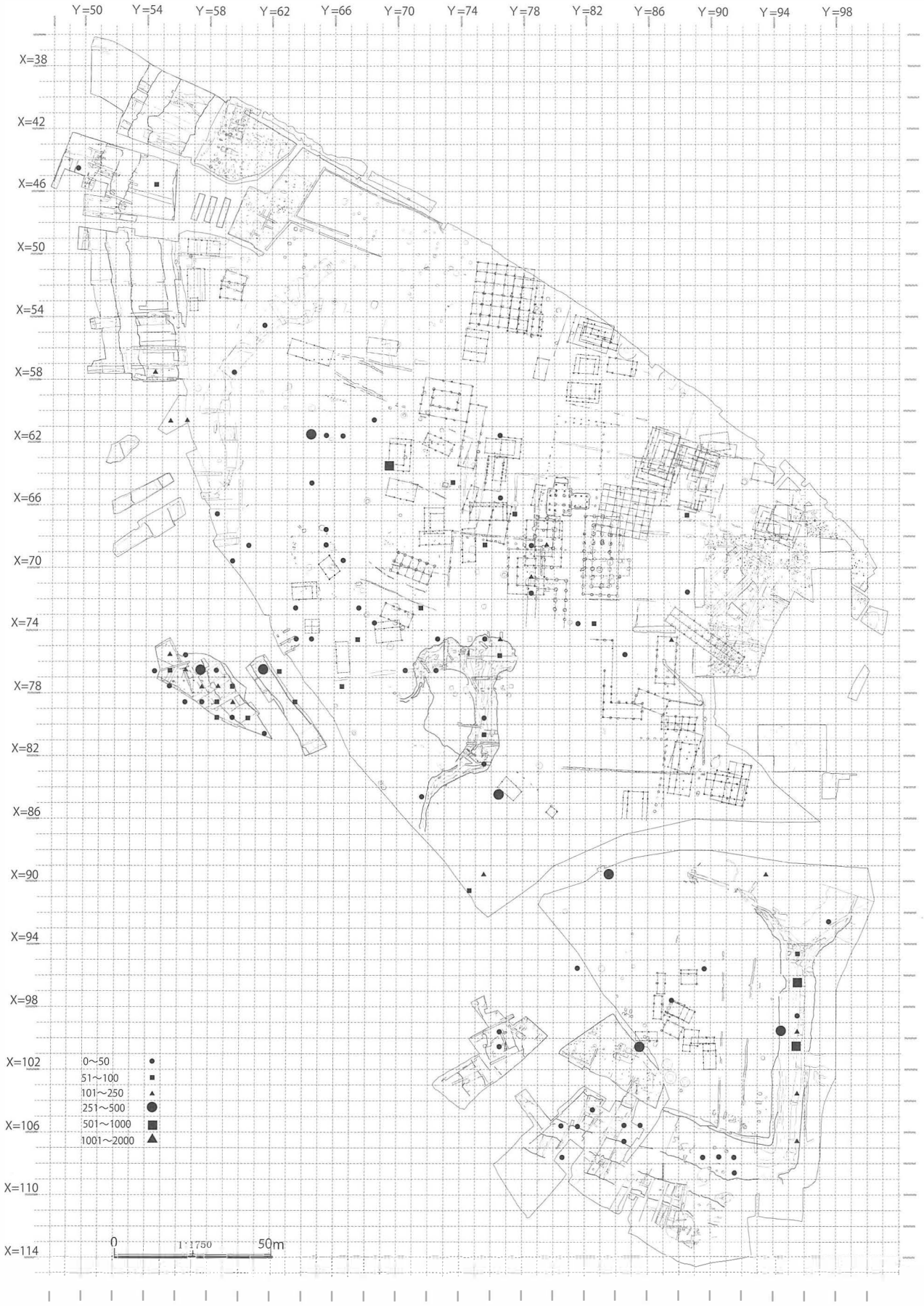


図279　瓦類（軒瓦）出土分布

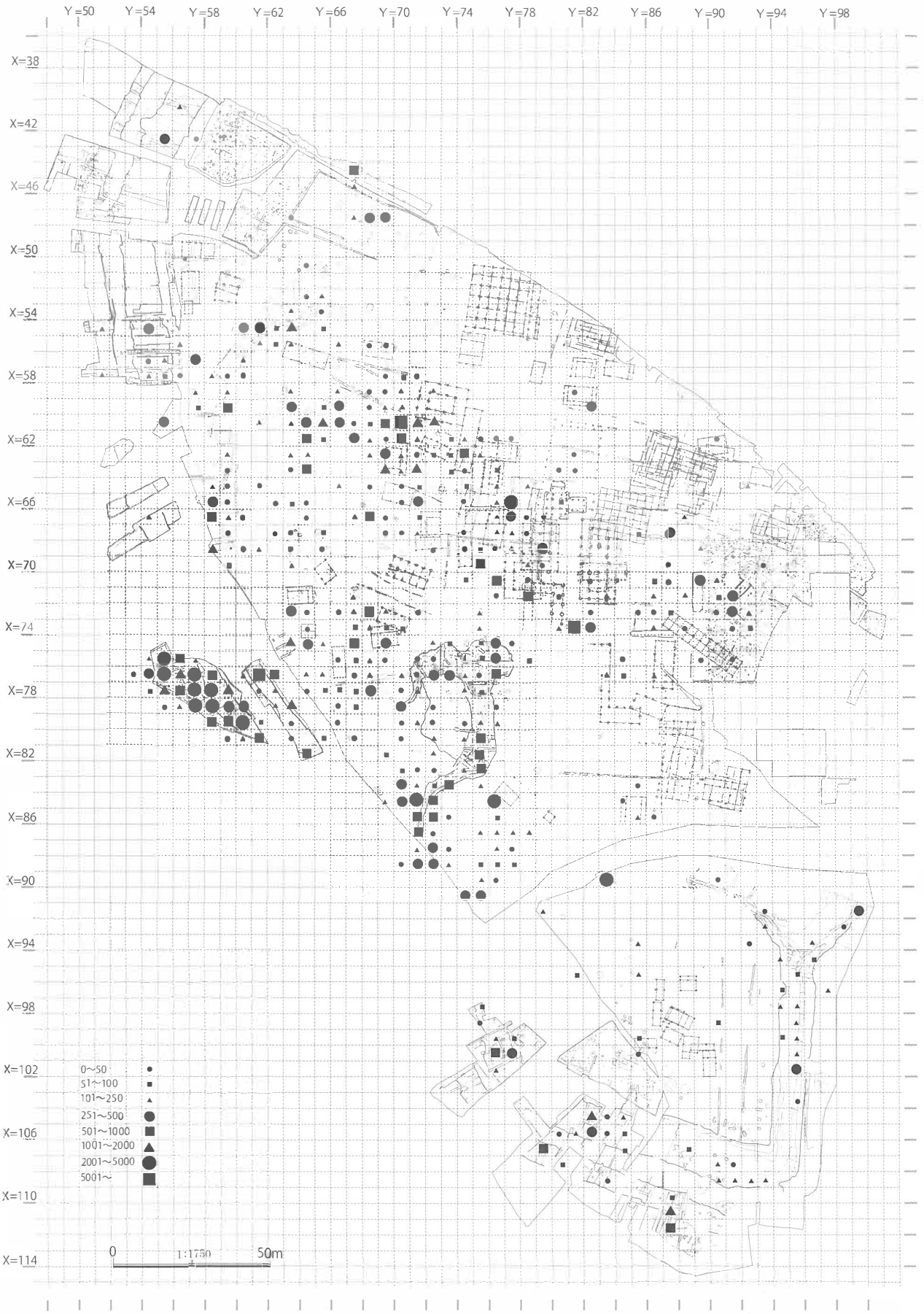


図280　瓦類（平・丸瓦）出土分布

まとまる。55SB19で確認されたように、掘立柱建物の礎板として利用された資料があることにも起因するとみられる。

（５）木製品等

①木製品

【種別】

木製品類は『木器集成図録　近畿古代篇』の分類に準じて（奈良国立文化財研究所1985）、埋文報告で既に報告されている（岩手県埋蔵文化財センター1995、）。その後の調査ではこの報告時の分類資料を基本にそれに資料が追加されており、以下ではこの分類を基本に報告事例と追加資料を中心に概要を記す。

なお、遺物番号については各報告書の掲載番号を記す。50次調査以降の調査における概報での報告と埋文報告等との区別のため、それぞれ「50－□」、「埋－□」等と記す。また、65次以降の調査については掲載番号のほか登録番号も備考に付記する。

○工具・武具

Ａ．刀子　刀子の柄木が29点ある。なお、刃部が残る資料も少量確認されており、これについては金属製品の項で記す。

柄木は内側の堀から多く出土している。南端部（21SD1（23SD34））から８点、北端部周辺（41SD2・72SD1）から６点が出土している。外側の堀からは南端部（21SD2）で１点が出土している。

また、井戸跡からもややまとまって出土しており、21SE1、21SE2から５点が出土している。21SE2や28SE16、52SE8からは複数点が出土している。

柄木は長軸12～17cm程、幅２～４cm程、厚さ１～２cm程の資料が多い。断面形状は隅丸方形から楕円形を呈する。平面形状は隅丸の長方形を基本とする。その柄木に上部から刃部が入る痕跡が残る。２枚の材を合わせたものと、一木の資料がある。また、刃部の固定の目釘痕として穿孔が確認できる資料もある。このほか固定に際して、柄木の端部を糸等で固定した痕跡が残る資料もある（埋－2748・2749）。

表29　刀子（柄木）一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－533	21SD1	15.0・2.6・0.8cm。目釘孔
埋－534	21SD1	(12.4)・2.5・0.7cm
埋－535	21SD1	(12.8)・2.2・0.6cm
埋－536	21SD1	(12.1)・3.3・1.0cm
埋－537	21SD1	(8.4)・2.9・1.6cm
埋－539	21SD1	(5.5)・1.7・0.9cm
埋－541	21SD1	(11.0)・2.7・0.9cm
埋－914	23SD34	(9.2)・2.6。1.2cm
埋－1127	41SD2	14.3・2.0・(0.8) cm。目釘孔。
埋－1128	41SD2	12.5・1.9・(0.9) cm
埋－1246	41SD2	14.6・3.4・0.8cm
埋－1587	21SE1	(4.7)・3.0・2.0cm
埋－1645	21SE2	(12.3)・3.6・0.9cm。目釘孔
埋－1646	21SE2	14.2・2.5・(0.9) cm。目釘孔
埋－1647	21SE2	15.0・(2.7)・1.0cm。目釘孔

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－1648	21SE2	16.1・2.4・1.7cm。
埋－2352	28SE4	14.3・2.3・1.4cm
埋－2748	28SE16	16.6・2.2・1.4cm
埋－2749	28SE16	17.3・2.4・1.4cm
埋－2805	28SE17	12.4・2.4・1.7cm
埋－2863	31SE2	14.5・4.0・2.0cm。目釘孔。
埋－3313	36SE3	16.6・1.9・2.2cm。
埋－5020	21SD2	26.6・2.9・1.0
50－4005	50SE3	(6.7)・2.8・1.6cm.
52－5059	52SE8	(10.0)・2.0・1.0cm。
55－4080	55SK40	13.0・2.6・1.5cm。
74－1056	72SD1	(8.7)・3.4・1.6cm。
74－1061	72SD1	13.0・3.1・2.0cm。
74－1062	72SD1	14.5・1.7・1.0cm。

B．鞘　刀子や小刀の鞘とみられる資料が９点ある。内側の堀から多く出土しており、南端部（21SD1）から５点が出土している。外側の堀からは、南端部（21SD2）から１点が出土している。井戸跡からはそれぞれの遺構からは出土点数が少ないが、28SE11、28SE16、52SE8、55SE1から各１点が出土している。28SE16からは柄木も出土しており（埋－2748、埋－2749、埋－2750）、これらは組になるものと推察される。

表30　鞘一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－531	21SD1	(29.0)・4.8・0.4cm
埋－532	21SD1	(13.7)・3.6・0.6cm
埋－538	21SD1	(7.5)・2.9・1.6cm
埋－540	21SD1	(10.0)・3.5・0.5cm
埋－2507	28SE11	28.9・3.1・0. 7cm
埋－2750	28SE16	18.8・2.8・1.0cm
52－5058	52SE8	29.0・3.5・0.7cm。
55－4008	55SE1	(10.8)・3.6・1.1cm。
69－246	21SD2	(9.4)・3.3・0.5cm。
75－503	72SD1	26.9・3.3・1.1cm。

鞘は長軸20～30cm程で下端は丸みを帯び、上端はＵ字形に抉れる。２枚の材を合わせて用いられる。内面は刃部の形状に平滑に成形される。全形が残存する資料は少ないが、長軸25cm以上の大型の資料を含む。

C．刷毛　21SD1から漆の付着した刷毛が１点（埋－542）、28SE16から１点（埋－2746）、49SE1から１点（49－470）が出土している。

21SD1から出土した埋－542は長さ18.7cm、幅3.2cm、厚さ1.0cm程の頭部が尖る直線的な部材が、２枚組み合う。先端に漆が付着した毛が残存し、２枚の材を合わせて毛を固定する。28SE16から出土した埋－2746は長軸17cmほどで細い柄に先端部に方形で身が作り出され、先端部に切り込みが入る。49－470も細い柄に方形の先端部が作り出される。埋－2746、49－470のいずれも先端の方形部には両側縁に上下２対の切り込みがあり、毛の固定の痕跡とみられる。刷毛の形状はそれぞれで持ち手となる柄部など細部が異なる。これらの柄部の形状の違いなどは、使用工程の差などに起因するとみられ、出土位置などからは確定できないが注目できる特徴である。

D．ヘラ　細長い板材のヘラ状の木製品がある。内側の堀から多く出土している。用途不明とした資料にも同様の資料はあり、判然としない。また漆塗りのヘラもある。これは漆製品の項で記す。

E．木槌ほか　木槌が３点ある。31SK8から１点（埋－3824）、52SE8から１点（52－5063）、21SD2（76次調査）から１点出土している（図35－131、76－993）。

埋－3824は31SK8から出土した資料である。一木作りで、長軸32cm程である。柄部分が2.6・2.2cm程の隅丸方形、頭部分が長軸11.5cm程で径６cm程の円形である。52－5063は52SE8から出土した。頭部分のみで方形の差し込み穴が残る。柄と別作りで、組み合わせたものと推測できる。長軸16cm程、径５cm程である。76－993は横槌である。一木作りで、全長72cm程の大型の資料である。柄は径５cm程と細く、長軸方向にケズリが行われる。頭部は径15cm程の円形で、全体が粗いケズリで整形される。中央付近の摩耗が著しい。

このほか、内側の堀跡（56次調査）から鍬先が１点出土している（56－4044）。方形の穿孔があり、下方が摩耗している。長軸21.4cm、幅14.0cm、厚さ2.3cm程である。また、後述するように金属製品でも鋤先が１点出土している。

○紡織具

A．糸巻　54点が出土している。枠木と横木に分かれる。なお、横木に通す軸棒は針等に分類した資料に含まれる可能性があるものの、明確には確認できていない。糸巻きは、いずれも４本の枠木と上下２対に２本が相欠きで組む横木が結合する形状に復元できる。

内側の堀では南端部（21SD1）から４点、北端部（41SD2）から２点が出土している。外側の堀

では南端部（21SD2）から６点が出土している。このほか、井戸跡からまとまって出土しており、28SE12から３点、50SE3から１点が出土している。28SE16からは21点、31SE8からは19点と特に多くの点数が出土している。

28SE16からは３層から他の木製品とともに出土している。枠木が４本出土しており、長軸23～24cm程である。上下の枘穴の間が直線的なものと抉れるものがある。横木は大きさ、形状ともに複数の種別に分類可能である。長軸は6～12cm程で、幅は2～4cm程と幅をもつ。形状では枘が明瞭に段をもって作り出されるものと細く削り出して枘部を整形するものがある。

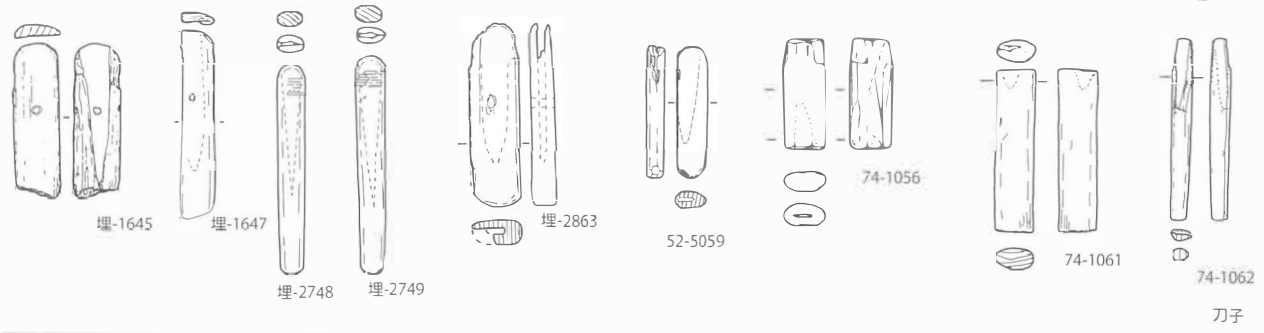
31SE8からは３層から他の木製品とともに出土している。枠木が６本出土しており、長軸22～23cm程である。枘穴の間は抉れる形態が多いが直線的な形態も含み、両者がある。横木は大きさ、形状ともに複数の種別が認識できるが、28SE16での事例と異なり枘が段などで明瞭に作り出される資料がなく、無段で細く削り出して枘部を整形するもので占められる。長軸は10～11cm程で、幅は３～４cm程と幅をもつ。また、埋－3281は枠木の枘に横木が結合しているが、他の横木と異なり細い板が組み合う。また、横木の埋－3286は相欠きが通常は長軸に対して直交方向に形成されるのに対して、長軸に対して斜行する。

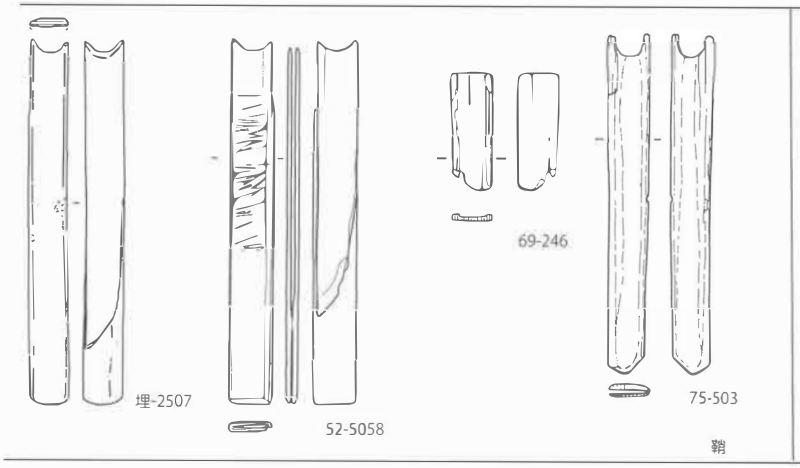
表31　糸巻一覧

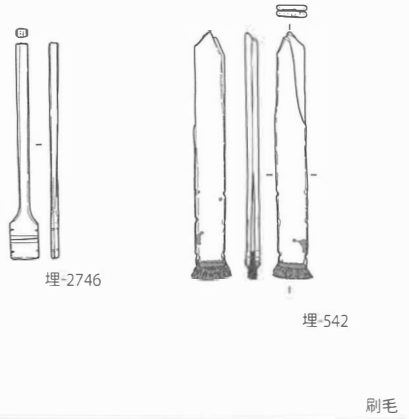
遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－554	21SD1	枠木。21.0・1.1・1.3cm。
埋－555	21SD1	横木。8.0・2.4・0.4cm。
埋－556	21SD1	横木。9.1・2.7・0.7cm。
埋－557	21SD1	横木。(5.1)・2.6・0.8cm。
埋－1125	41SD2	横木。(10.4)・3.7・0.9cm。
埋－1126	41SD2	横木。12.4・4.8・0.9cm。
埋－1535	23SG1	枠木。(9.0)・1.0・1.1cm。
埋－2357	28SE4	枠木。22.6・1.8・0.9cm。
埋－2519	28SE12	横木。(5.8)・(2.5)・0.8cm。
埋－2520	28SE12	横木。11.0・3.2・0.9cm。
埋－2521	28SE12	枠木。24.3・1.1・1.4cm。
埋－2756	28SE16	枠木。22.7・1.3・2.0cm。
埋－2757	28SE16	枠木。22.8・1.3・1.8cm。
埋－2758	28SE16	枠木。22.7・1.2・2.0cm。
埋－2759	28SE16	枠木。(8.3)・(1.2)・1.4cm。
埋－2760	28SE16	横木。9.3・(1.2)・1.4cm。2枚組合。
埋－2761	28SE16	横木。(11.7)・4.2・1.3cm。
埋－2762	28SE16	横木。6.7・2.4・0.8cm。
埋－2763	28SE16	横木。(6.5)・2.4・1.1cm。
埋－2764	28SE16	横木。6.9・2.4・1.0cm。
埋－2765	28SE16	横木。(5.4)・2.4・1.2cm。
埋－2766	28SE16	横木。(6.8)・4.1・1.2cm。
埋－2767	28SE16	横木。7.8・2.5・1.1cm。
埋－2768	28SE16	横木。8.0・2.5・0.9cm。
埋－2769	28SE16	横木。7.2・2.2・1.0cm。
埋－2770	28SE16	横木。7.5・2.4・1.0cm。
埋－2771	28SE16	横木。9.0・8.9・0.6cm。２枚組合。
埋－2866	31SE2	枠木。21.5・1.2・1.5cm。
埋－3273a	31SE8	枠木。21.9・1.2・1.5cm。
埋－3273b	31SE8	横木。11.7・4.1・0.8cm。
埋－3273c	31SE8	横木。11.9・3.6・0.9cm。
埋－3274a	31SE8	枠木。22.0・1.2・1.4cm。
埋－3274b	31SE8	横木。11.6・3.8・0.8cm。
埋－3274c	31SE8	横木。11.7・4.0・0.8cm。
埋－3275	31SE8	枠木。23.6・1.5・2.1cm。
埋－3276	31SE8	枠木。23.3・1.6・1.8cm。
埋－3277	31SE8	枠木。22.8・1.3・1.5cm。
埋－3278a	31SE8	枠木。23.5・1.4・1.9cm。
埋－3278b	31SE8	横木。10.1・3.4・0.9cm。
埋－3279	31SE8	横木。10.1・10.3・1.1cm。
埋－3280	31SE8	枠木。20.5・1.4・2.0cm。
埋－3281	31SE8	枠木。21.8・1.5・1.5cm。
埋－3282	31SE8	枠木。24.5・1.6・1.1cm。
埋－3283	31SE8	横木。9.9・3.4・0.9cm。
埋－3284	31SE8	横木。9.9・3.4・0.9cm。
埋－3285	31SE8	横木。8.7・3.7・0.6cm。
埋－3286	31SE8	横木。(4.4)・(2.3)・0.6cm。
埋－3287	31SE8	横木。11.0・2.1・0.8cm。
埋－5012	21SD2	枠木。22.5・1.1・1.4cm。
埋－5013	21SD2	枠木。22.2・1.2・1.6cm。
50－4004	50SE3	枠木。19.5・1.9・1.3cm。
69－257	21SD2	横木。
69－258	21SD2	枠木。22.7・2.1・1.5cm。
69－259	21SD2	枠木。(7.5)・0.9・0.8cm。
69－260	21SD2	枠木。(17.3)・1.7・1.4cm。

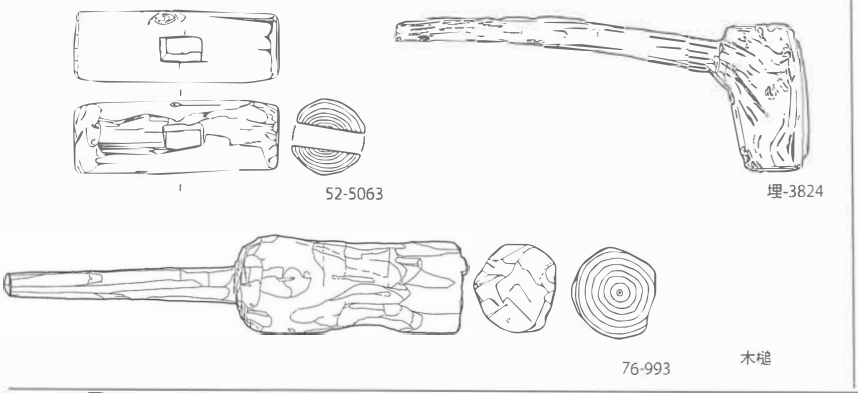
B．御簾錘　御簾を編む際に錘として用いられる、御簾錘として分類された資料である（渡辺1993）。21SD1から２点（埋－558・559）、21SD2から１点（埋－5019）が出土している。長軸16～18cm程の径２cm程の円形の棒状で、片側の体部が細く削り出され頭部との境に段を形成して作り出される。

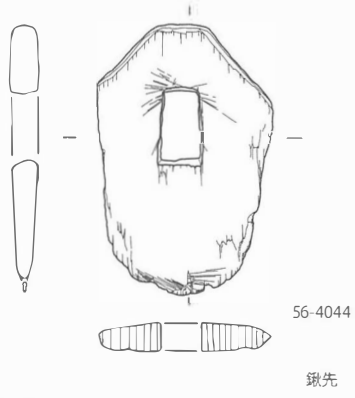
C．その他　紡錘車とみられる資料が３点ある。埋－740は内側の堀の南端部（21SD1）から出土し

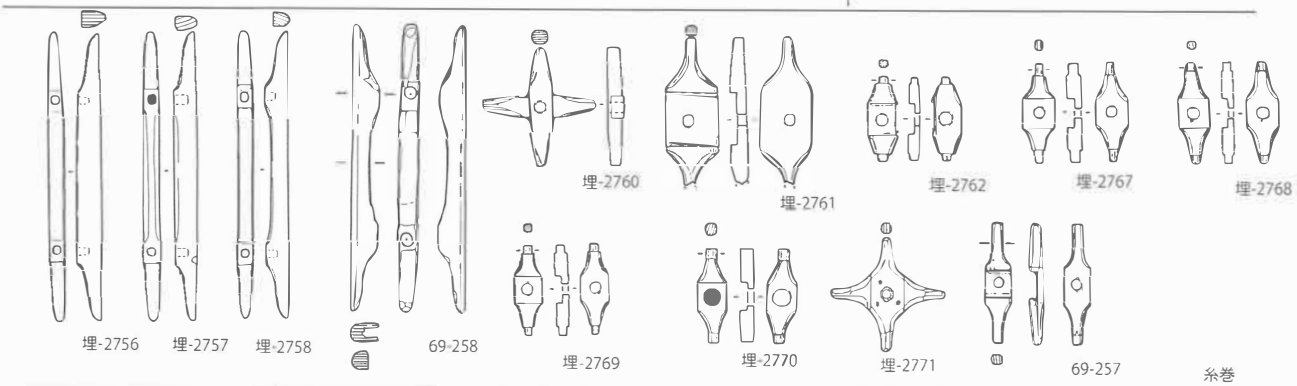


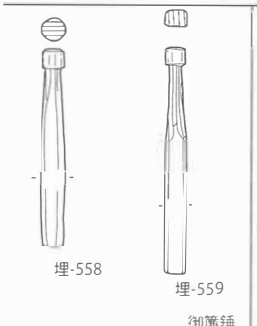












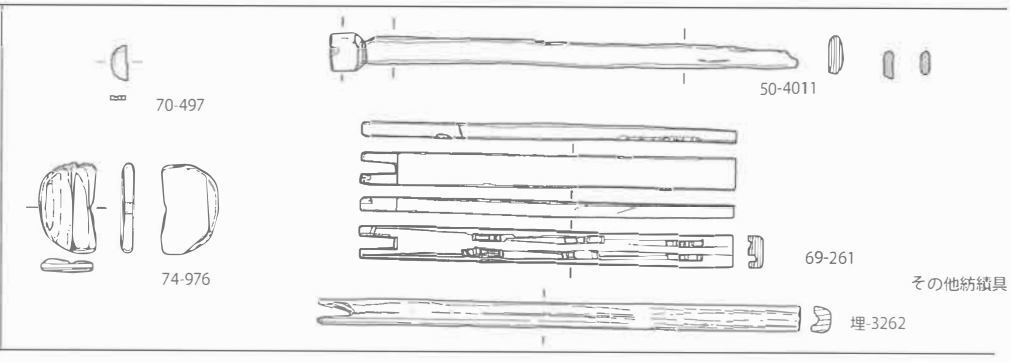


図281　木製品実測図（1）

た。直径４cm程の円形の板に中央に棒が刺さる。70SK22から出土した70－497は円形の板で、紡輪の可能性がある。74－976は内側の堀の北端部（72SD1）で出土した円形の薄い板材である。穿孔の痕跡と推定したが、中央からややずれる可能性もあり確定できない。なお、後掲するように金属製の紡錘車も内側の堀（21SD1）の南端部周辺で出土している。

このほかに紡織具あるいは類するものが複数点出土している。21SE7から出土した１点（埋－3291）は格子にも類似するが、紡織具の可能性もある。50SE3から出土した資料（50－4011）、69次で外側の堀から出土した資料（69－261）も紡織具の可能性がある。また、そのほかにも紡織具か確定できないが可能性が指摘されている資料がある（前川2015）。21SK8から出土した１点（埋－3455）と外側の堀から出土した１点（埋－5020）は舞羽と呼ばれる綛かけと推定されている。また31SE7から出土した１点（埋－3262）、21SK55から出土した１点（埋－3514）も紡織具の可能性が指摘されている。

○運搬具

Ａ．修羅　修羅とみられる資料が23SG1池跡から１点出土している（図175－57、57次調査）。出土土層からⅡ期池造成時の資料とみられる（189頁）。Ⅱ期池で確認されている景石等の存在と整合するとの把握も可能であろう。資料は自然木で、２本にわかれる。全長140cm程、幅76cm程である。２本の枝部には、先端部に近い位置に抉りが各２カ所入る。縄等の引掛けるものであろうか。

○漁撈具

Ａ．網針　21SD1から１点出土している（埋－560）。残存長15.5cm程で幅4.3cm程の板材である。一端は歯が３本成形され、もう一端は中央が深く抉れて２本の歯のようになる。この資料の形状のみからは網針としての特定が難しいが、古代の資料では福島県大猿田遺跡で網針が報告されている（福島県教委1997）。

表32　扇骨一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－563	21SD1	(18.7)・0.9・0.3cm。
埋－564	21SD1	(7.2)・0.9・0.2cm。
埋－565	21SD1	(7.0)・1.8・0.3cm。
埋－915	23SD34	(7.6)・1.1・0.5cm。
埋－1130	41SD2	(19.1)・1.3・0.5cm。要残存。
埋－1131	41SD2	23.1・1.4・0.4cm。
埋－1132	41SD2	23.1・1.5・0.5cm。
埋－1133	41SD2	23.1・1.5・0.4cm。
埋－1653	21SE2	(21.0)・1.2・0.3cm。要残存。２本結合。
埋－2356	28SE4	(6.1)・2.1・0.3cm。
埋－2405	28SE5	(7.1)・1.3・0.4cm。
埋－2807	28SE17	(23.8)・0.9・0.3cm。
埋－2808	28SE17	(22.6)・0.9・0.3cm。
埋－2809	28SE17	(20.7)・0.9・0.3cm。
埋－2810	28SE17	(22.0)・0.8・0.3cm。
埋－2811	28SE17	(20.0)・0.7・0.3cm。
埋－2812	28SE17	(18.9)・0.7・0.3cm。
埋－3519	21SK55	26.1・1.0・0.3cm。
埋－3677	23SK83	(26.8)・1.1・0.4cm。

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
50－4006	50SE3	(12.4)・1.7・0.4cm。
52－5050	52SE8	45.0・2.0・0.5cm。
52－5051	52SE8	(15.0)・1.5・0.3cm。
52－5052	52SE8	(18.0)・3.0・0.3cm。
52－5053	52SE8	(21.0)・1.5・0.4cm。
52－5054	52SE8	25.0・1.0・0.3cm。
52－5055	52SE8	25.0・1.0・0.3cm。
55－4010	55SE1	(32.3)・1.5・0.3cm。
55－4011	55SE1	(32.1)・1.5・0.3cm。
55－4012	55SE1	(7.6)・1.5・0.3cm。
55－4013	55SE1	(24.5)・1.8・0.5cm。
55－4014	55SE1	(20.1)・1.9・0.3cm。
56－4047	56SD38	(14.0)・1.3・0.5cm。
74－1048	72SD1	(9.3)・1.3・0.3cm。
74－1133	41SD2	(7.7)・1.7・0.3cm。
74－1140	41SD2	(7.3)・1.3・0.5cm。
74－1052	72SD1	(10.3)・1.5・0.2cm。
74－1085	72SD1	33.8・1.9・0.3cm。
75－694	C1～3層	(16.8)・0.7・0.3cm。

○服飾具

表33　横櫛一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－562	21SD1	(3.0)・2.7・0.7cm。歯21本。
埋－2397	28SE5	(3.9)・3.7・0.9cm。歯65本。
埋－4283	21SX4	(5.3)・3.5・0.9cm。歯60本。
埋－5011	21SD2	(7.6)・3.4・0.9cm。歯84本。
50－4008	50SE3	(4.5)・3.7・0.8cm。
52－5056	52SE8	(5.0)・3.5・0.5cm。歯59本。
52－5057	52SE8	(5.0)・4.0・0.5cm。歯76本。
74－1053	72SD1	(2.7)・4.3・0.6cm。歯8本

A．扇・扇骨　扇骨が38点出土している。内側の堀跡では南端部（21SD1）から４点、猫間ヶ淵周辺（56SD38）から１点、北端部（41SD2）から９点出土している。井戸跡では21SE2、28SE4、28SE5、21SK55、23SK83から各１点が出土している。そのほか、井戸跡には複数点が出土している遺構がある。21SE2出土の資料（埋－1653）は２本の骨が要で結合している。28SE17からは竹製の扇骨が６本まとまって出土している。52SE8からは４本の骨が要で結合して出土しているほか（52－5050）、５本の骨が出土している。55SE1からは３本が出土している。

長軸は23～25cm程で、幅1.5～２cm程である。長軸45cm程と大型の資料もある（52－5050）。骨の全形が残る資料は少ないが、全体が長方形で先端部も長軸に対し直交する形態である。

B．櫛　横櫛が８点出土している（表33）。52SE8から２点出土しているほか、各遺構からいずれも１点ずつの出土である。いずれも一端が欠損しており、器形の全体が判明する資料はない。

なお、平泉町教育委員会による11次調査では１号土坑から竪櫛が１点出土している（11次調査、平泉町教委1983）。

C．留針　片側もしくは両端が尖る棒状の資料で、針とされる資料がある。器形からは箸やその他の資料が混じる可能性もある。

D．下駄　123点が出土している。連歯下駄と台部と歯を別に作る差歯下駄の両者がある。連歯は41点、差歯は17点、歯のみで分類不能なものが63点である。

内側の堀から多く出土している。南端部（21SD1）から20点、猫間ヶ淵周辺から３点、北端部から70点と、特に北端部周辺で多く出土している。外側の堀からは、南端部から４点、猫間ヶ淵周辺から８点出土している。このほか、21SE2から４点、21SE4・31SE2から１点、31SE3から２点、31SE4から１点、31SE8から１点、31SK40から１点、50SE3から２点と井戸跡等からそれぞれの遺構からは少量だが出土している。

台部は楕円形で端部に角を形成しない曲線の小判型が多く、端部が隅丸方形になる方形もみられる。台部は長軸23cm前後で、幅12cm前後である。長幅比は平均で1.9となる。

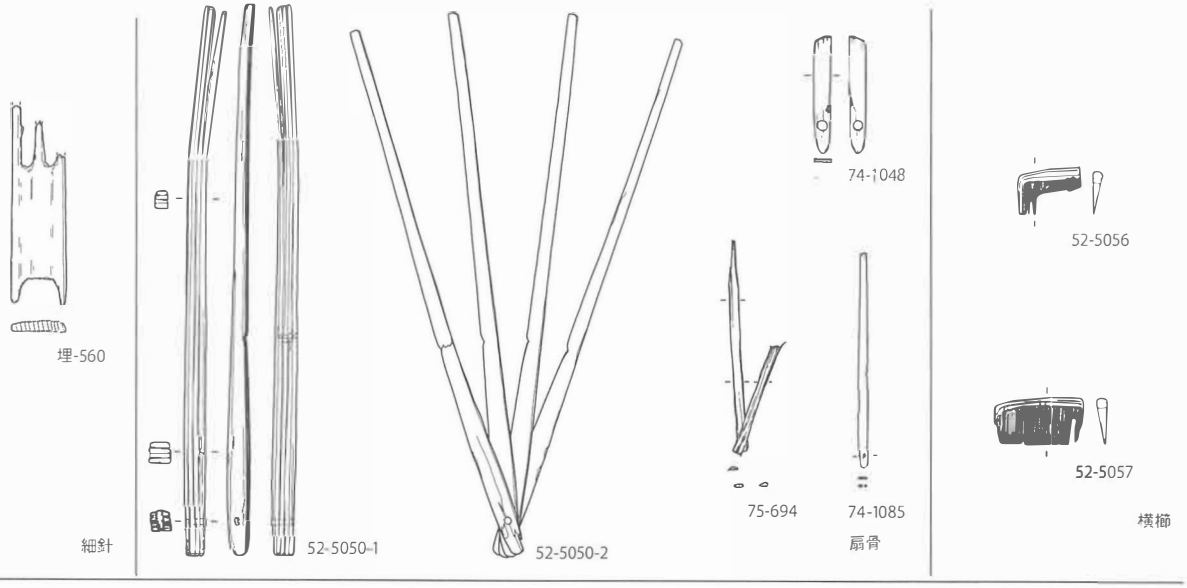
歯の下端部は台部と同一の幅で端部まで成形されるものが主体となるが、幅が広がり台形になるものが少数含まれる。また、歯の側面形状では直線で両側辺が平行になるものを主体とし、台形状に近い資料もあるが傾斜は顕著ではない。前壺は中央に穿孔される資料が多い。左右に偏る資料でも、偏りは小さく中心寄りの位置に穿孔される。後壺はいずれも後歯の前に位置する。なお、壺形状は前壺が後壺に比して小さいものが多い。穿孔はキリ状の工具を主体とし、火箸による穿孔が少数みられる。

差歯下駄の歯の枘穴の数は前後で２－１となるものが多いが、前後で１－１となる資料もある。枘穴の形状も方形を基本とするが、三角形となるものも１点含まれる。

木取りは台部を基本にみると、柾目、板目の両者がみられ、特定の木取りを選択する様相は顕著ではない。差歯下駄では台部と歯で樹種が異なるものもある。漆が塗布された下駄も少量含む。

表34　下駄一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋-577	21SD1	差歯。歯のみ。
埋-578	21SD1	差歯。歯のみ。
埋-579	21SD1	差歯。歯のみ。
埋-580	21SD1	差歯。歯のみ。
埋-581	21SD1	差歯。歯のみ。
埋-582	21SD1	連歯。台部22.1・12.1cm。
埋-583	21SD1	連歯。台部22.1・11．4cm。
埋-584	21SD1	連歯。台部22.5・11.9cm。
埋-585	21SD1	連歯。台部23.5・-cm。
埋-586	21SD1	連歯。台部23.9・11.9cm。
埋-587	21SD1	連歯。台部(20.7)・-cm。
埋-588	21SD1	差歯。
埋-589	21SD1	連歯。
埋-590	21SD1	差歯。
埋-591	21SD1	連歯。台部23.1・-cm。
埋-592	21SD1	連歯。台部(21.6)・-cm。
埋-593	21SD1	差歯。台部22.4.12.2cm。
埋-594	21SD1	差歯。
埋-595	21SD1	差歯。
埋-596	21SD1	差歯。
埋-1139	41SD2	歯のみ。
埋-1140	41SD2	歯のみ。
埋-1141	41SD2	歯のみ。
埋-1142	41SD2	歯のみ。
埋-1143	41SD2	歯のみ。
埋-1144	41SD2	歯のみ。
埋-1145	41SD2	歯のみ。
埋-1146	41SD2	歯のみ。
埋-1147	41SD2	歯のみ。
埋-1148	41SD2	歯のみ。
埋-1149	41SD2	連歯。台部22.5・11.9cm。
埋-1150	41SD2	連歯。台部23.4・11.5cm。
埋-1151	41SD2	連歯。台部25.1・12.1cm。
埋-1152	41SD2	連歯。台部23.8・12.0cm。
埋-1153	41SD2	連歯。
埋-1154	41SD2	連歯。
埋-1155	41SD2	連歯。
埋-1156	41SD2	差歯。漆塗り。台部22.6・13.6cm。
埋-1157	41SD2	連歯。
埋-1158	41SD2	連歯。22.9・12.4cm。
埋-1159	41SD2	歯のみ。
埋-1160	41SD2	歯のみ。
埋-1161	41SD2	歯のみ。
埋-1162	41SD2	歯のみ。
埋-1163	41SD2	歯のみ。
埋-1164	41SD2	歯のみ
埋-1165	41SD2	歯のみ。漆付着。
埋-1166	41SD2	歯のみ。
埋-1167	41SD2	歯のみ。
埋-1168	41SD2	歯のみ。漆付着。
埋-1313	41SD2	連歯。台部22.7・-cm。
埋-1314	41SD2	連歯。漆塗り。
埋-1315	41SD2	歯のみ。漆付着。
埋-1316	41SD2	歯のみ。
埋-1317	41SD2	歯のみ。
埋-1654	21SE2	連歯。23.0・11.0cm。
埋-1655	21SE2	差歯。歯のみ。
埋-1656	21SE2	-
埋-1989	21SE4	歯のみ。
埋-2897	31SE2	歯のみ。漆付着。
埋-2940	31SE3	連歯。台部25.3・12.9cm。
埋-2941	31SE3	連歯。台部25.4・13.7cm。
埋-2957	31SE4	連歯。台部21.7・11.3cm。
埋-3294	31SE8	連歯。台部23.3・9.1cm。
埋-3862	31SK40	連歯。
埋-5018	21SD2	連歯。
50-4001	50SE3	連歯。台部23.1・12.5cm。
50-4002	50SE3	連歯。台部(21.2)・10.5cm。
56-4051	56SD39	歯のみ。
56-4055	56SD39	連歯。
56-4092	56SD39	連歯。
56-4095	56SD39	差歯。　歯のみ。
56-4108	56SD39	歯のみ。
68-202	92-72	連歯。台部22.4・13.4cm。
68-203	90-70	連歯。
68-204	91-72	差歯。
69-344	21SD2	歯のみ。　漆付着。
69-345	21SD2	漆付着。
70-101	21SD2	連歯。
72-327	72SD2	歯のみ。
74-962	72SD1	歯のみ。
74-963	72SD1	歯のみ。
74-964	72SD1	歯のみ。
74-965	72SD1	歯のみ。
74-966	72SD1	歯のみ。
74-967	72SD1	歯のみ。
74-968	72SD1	歯のみ。
74-1025	72SD1	歯のみ。　漆付着。
74-1026	72SD1	歯のみ。　漆付着。
74-1027	72SD1	歯のみ。
74-1028	72SD1	歯のみ。
74-1029	72SD1	歯のみ。
74-1030	72SD1	歯のみ。
74-1031	72SD1	歯のみ。
74-1032	72SD1	歯のみ。
74-1033	72SD1	歯のみ。
74-1034	72SD1	連歯。台部18.0・-cm。
74-1035	72SD1	歯のみ。
74-1036	72SD1	歯のみ。
74-1037	72SD1	歯のみ。
74-1038	72SD1	歯のみ。
74-1039	72SD1	歯のみ。
74-1040	72SD1	歯のみ。
74-1041	72SD1	歯のみ
74-1042	72SD1	差歯。歯のみ。
74-1043	72SD1	歯のみ。
74-1044	72SD1	連歯。台部23.3・12.2cm。
74-1045	72SD1	連歯。台部20.8・16.1cm。
74-1047	72SD1	連歯。台部22.8・13.1cm。
74-1051	72SD1	歯のみ。
74-1110	72SD1	歯のみ。
74-1115	41SD2	歯のみ。
74-1118	41SD2	歯のみ。
74-1120	41SD2	歯のみ。
74-1121	41SD2	差歯。歯のみ。
75-513	21SD1	連歯。漆付着。
75-516	21SD1	連歯。漆付着。
75-525	21SD1	歯のみ。
75-565	21SD2	歯のみ。
75-599	21SD2	連歯。台部22.9・11.9cm。
75-600	21SD2	歯のみ。



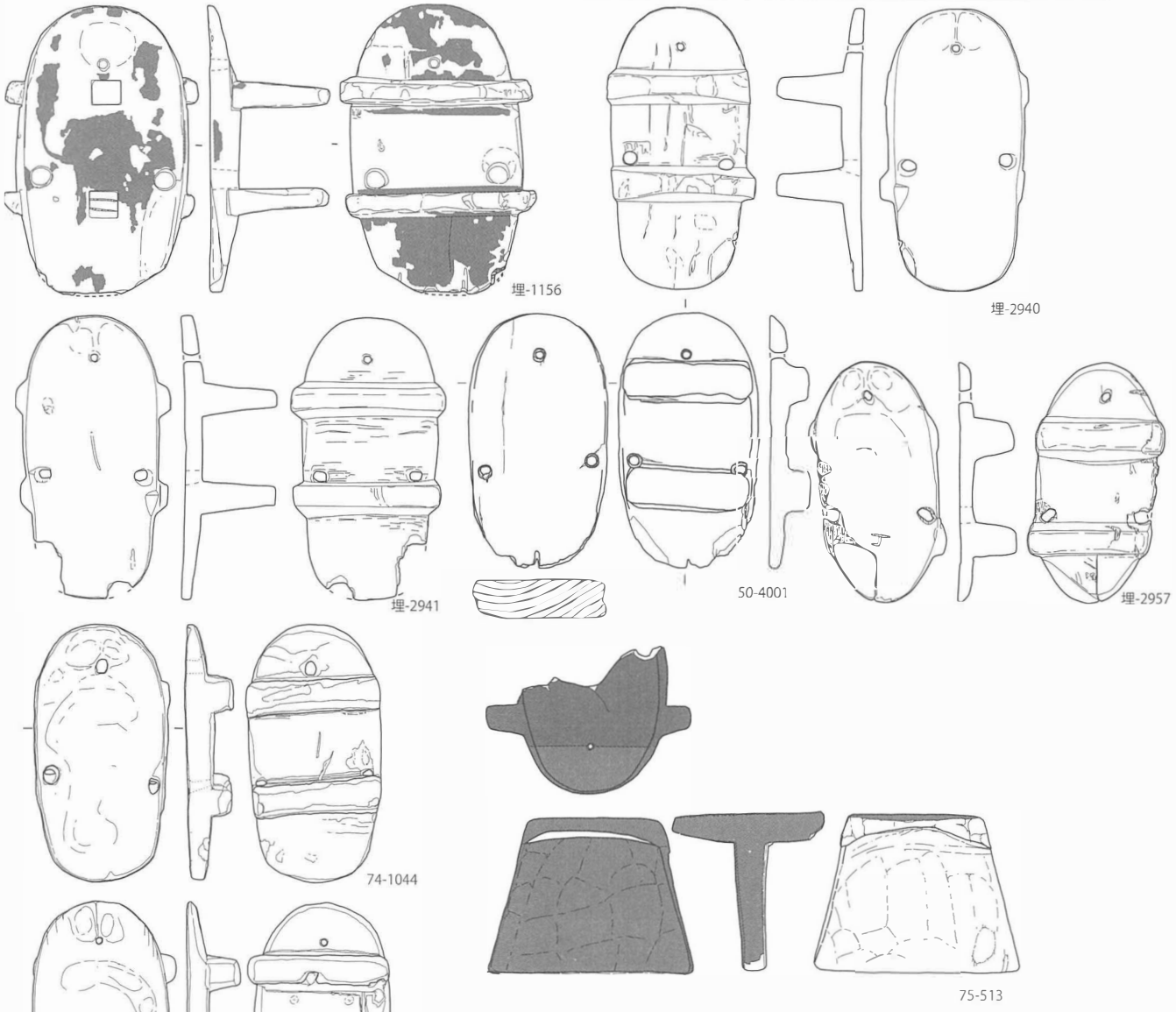


図282　木製品実測図（2）

E．草履状木製品　21SD1（23SD34）から１点出土している（埋－925）。長さ21.4cm、幅10.0cm程で、底面に抉り込みがある。

○容器

A．曲物　器形が残るのは５点のみだが、破片資料も含めて円形の曲物が多い。底板のみの資料などでは折敷との分類が難しいものも含む。

完形の円形曲物は21SE1から２点（埋－1585・1586）、21SK23から２点（埋－3406・3407）出土している。埋－1585・1586は径30．6cm程で高さが20～24cm程である。埋－3406・3407は径25cm程で高さ20cm程である。側板は樺皮綴じにより円形に綴られ、底板とは木釘で止められる。いずれも箍をはめており、上下２本が残存するものが３点で、１本のみのものも本来は上下にはめたとみられる。箍も樺皮綴じで綴じられている。内面にケビキが入る資料もあり、側板のみの資料でもケビキによって曲物と判別できる資料もある。なお、円形曲物では内面に漆が付着する資料がある。

方形曲物は器形がわかるものは28SE4から出土した１点のみである（埋－2364）。長軸47.8cm、短軸41.4cmと大型の器形で、側板の高さは７cm程である。側板は樺皮綴じで、木釘で止められる。

B．箱　21SD1から２点（埋－619・621）、21SK78から温石を入れた箱が１点（埋－3539）の計３点が出土している。

C．栓　棒状の木製品で、一端が細くなり壷等の栓と推測できる資料を栓として分類している。15点が出土している。用途不明とされている資料などにも同様のものが含まれる可能性が高い。

内側の堀（21SD1・41SD2）からの出土が多く、その他の遺構からは少量ずつの出土でまとまりはない。

52SE8から３点が出土している。これらは長軸7.5～9.0cm程で幅1.2～1.8cm程の細い器形である。楔としての利用も想定される。

表35　栓一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－614	21SD1	6.6・2.6・2.8cm。
埋－615	21SD1	(7.1)・4.2・3.0cm。
埋－616	21SD1	(4.7)・2.2・2.1cm。
埋－617	21SD1	(7.9)・3.3・3.2cm。
埋－618	21SD1	(12.0)・2.5・2.1cm。
埋－919	23SD34	棒状。(15.8)・1.8・1.4cm。
埋－1189	41SD2	3.6・(8.5)・7.4cm。
埋－2432	28SE7	6.6・5.8・2.8cm。
埋－4282	21SX4	(9.4)・2.4・2.2cm。
52－5081	52SE8	7.5・1.2・0.8cm。
52－5082	52SE8	6.5・1.8・0.7cm。
52－5083	52SE8	9.0・1.5・0.8cm。
55－4004	55SE1	3.4・3.1・2.4cm。
69－264	21SD2	4.2・6.4・—cm。
70－496	70SK22	3.2・3.0・2.4cm。
70－496	70SK22	3.2・3.0・2.4cm。

D．その他　椀の可能性がある資料が２点ある。いずれも内側の堀から出土している（埋－622、78－565）。ただしこれらは残存が悪く、漆膜が剥落した資料で漆器であった可能性が高いと思われる。なお、漆器類については後述する。

内側の堀（72SD1・41SD2）から荒型とみられる資料が２点出土している。いずれも北端部とした範囲から出土している。埋－1169は、椀等の未製品とみられる。口径が16.0～18.2cm程で、底径10.0～10.3cm程、器高７cm程である。内外面ともに粗いケズリで成形される。

もう１点は（図64－89、74－1057）、口径が10.9cm程度で、器高3.2cm程度とやや小振りな資料である。粗いケズリ痕が残る資料である。

○食事具

表35　遺構ごとの出土量（箸）

遺構名		点数
内側の堀	(21SD1)	46
	(56SD38・72SD1)	
	(72SD1)	
外側の堀	(21SD2)	67
	(56SD39・72SD2)	
	(72SD2)	
21SE3		1
28SE2		1
28SE4		3
28SE6		4
28SE12		2
31SE7		138（414）
36SE2		2
36SE3		3
41SE4		3
21SK55		1
49SE1		1
50SE3		9
52SE8		29
52SE10		1
52SK10		1
55SE1		14
56SK33		5

A．箸　箸とされる資料は、約330点が報告されている。遺構ごとに出土量を示す。小片になった木片などを含めればより多くの資料の存在が推察でき、木材の燃料材としての再利用や、他製品へ転用された資料の存在も想定できよう。

細長い棒状の木片で、全体にうすい削りにより整形される。中央部付近がやや器厚があるがこの部分も削りにより整形が行われ、折れなどの痕跡をとどめる範囲はみられない。両端部が細い削りにより整形される、両口である。片口や寸胴は確認できない。先端部の形状は① 尖るもの、② 方形に整形、③ 鈍い丸形の３者がある。摩滅などの長期の使用によると考えられる痕跡は顕著ではなく、多くは製作時の形状を基本的にとどめる。

中央部から端部まで全体にケズリにより整形が行われている。端部付近で一単位削りが追加される場合が多い。断面形は削りによる整形により多角形で円形に近い形態に仕上げられているものが多く、中央部が平坦な長方形の資料も一定量含まれるものの、全体が多角形の資料が多数を占める。やや角張った形状で方形に近いものもあるが、隅丸の形状を基本とする。断面形状が方形を主体とするちゅう木やその他の部材片とは異なり、平面形態とあわせて区別できる可能性が高い。

次に箸の形態的な特徴を示す数値的な属性を確認する。長軸が20～25cmの資料が多く、18cm以下のものや26cm以上のものはきわめて少ない。平均では22cmである。もっとも多くの資料が出土した31SE7井戸跡では414本の出土が報告されている（岩手埋文1995）。このうち、箸と明確に識別でき計測できた資料は138本あったが、長軸は20.2～27.4cmの範囲に収まり、平均では23.6cm、偏差は1.6となる。

表37　匙一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－669	21SD1	11.5・2.0・0.4cm。
埋－670	21SD1	8.2・(3.3)・0.4cm。
埋－671	21SD1	(6.9)・3.1・0.3cm。
埋－1889	21SE3	(6.8)・1.3・0.2cm。
56－4093	56SD39	16.0・3.1・1.0cm。

B．匙　５点が出土している。いずれも細い板で成形された匙形の木製品で、身が受け皿状になるような刳物の匙は確認されていない。内側の堀（21SD1）の南端部から３点、21SE3と外側の堀から各１点出土している。

C．杓子　18点が出土している。内側の堀から多く出土し、南端部で５点、北端部で４点が出土している。外側の堀では南端部で１点、猫間ヶ淵周辺で１点が出土している。そのほか、21SX4、28SE2、31SE4、50SE3から１点が、52SE8から３点が出土している。柱穴の底面から出土した資料は礎板として再利用されたとみられる。

多くの資料は長軸23～30cm程、幅6～13cm程である。74－1059は身の両端に穿孔があり、痕跡が連続する。

また、大型の資料があり、31SE1から出土した資料（埋－2822）は長軸70cmと大型で器厚も2.2cm程である。両面ともに丁寧に整形されている。52－5257も長軸70cm程と大型の器形である。52SB25の礎板として用いられている。

D．折敷　折敷は破片が多く出土している。このほかにも再加工された板材なども多く、小破片と

表38　杓子一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－672	21SD1	(15.7)・6.2・0.6cm。
埋－673	21SD1	23.7・6.5・0.6cm。
埋－674	21SD1	27.5・7.2・0.4cm。
埋－675	21SD1	28.5・6.8・0.6cm。
埋－676	21SD1	29.1・7.8・0.7cm。
埋－1194	41SD2	(20.7)・6.0・0.8cm。
埋－1195	41SD2	30.4・6.7・0.6cm。
埋－2073	28SE2	23.3・5.1・0.8cm。
埋－2822	31SE1	大型。70.6・21.6・柄幅4.9・2.2cm。
埋－4285	21SX4	30.0・8.1・0.6cm。

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
50－4003	50SE3	24.5・6.4・0.8cm。
52－5060	52SE8	(14.0)・7.5・0.3cm。
52－5061	52SE8	(17.0)・4.5・0.4cm。
52－5062	52SE8	27.0・5.0・0.3cm。
52－5257	52SB25	大型・部材か。70.0・13.0・2.0cm。
56－4054	56SD39	31.4・13.7・0.5cm。
69－248	21SD2	21.2・6.4・0.4cm。
74－1004	72SD1	40.7・12.7・0.5cm。
74－1059	72SD1	杓子状。18.6・8.9・0.6cm。

なった資料にも多く含まれる。

内側の堀（21SD1・56SD38・72SD1）から46点、外側の堀（21SD2・56SD39・72SD2）から52点出土しているほか、井戸跡から多数出土している。完形に近い資料の多くは井戸跡からの出土である。また、後述する文字資料にも折敷への墨書が多く確認されるほか、折敷を再加工した資料やその残材も多い。

完形の折敷や器形が把握できる資料は多くないが、１）桟の有無、２）四隅の仕上げにより、器形の分類が可能である。桟は桟は厚さが均等な断面方形の板材を基本とし、綴じは皮と木釘がある。二個一対の穿孔は皮綴じに限定され、一辺に複数の穿孔がみられる資料は木釘が多い。桟と綴じ部材は破損する資料が多く、桟の有無と接合方法は穿孔の痕跡から確認できる場合が多い。

四隅の仕上げは直角と隅切り、円弧を描くものに分けられる。

完形資料では長軸27～30cm、短軸18～20cm程である。器形に幅があり、器厚にも概ね平面形状に比例して0.2～1．0cm程と幅があるもの0.4cm程に分布がまとまる。木取りは柾目材が大多数を占め、板目材はきわめて少ない。木目方向は多くが長軸方向に平行し、短軸方向に平行する資料は少ない。

猫間ヶ淵周辺から出土した資料は（図53－11、56－4109）、桟も残る完形品で底面に円形の刺突痕が連続する。

表35　遺構ごとの出土量（折敷）

遺構名		点数
内側の堀	(21SD1)	46
	(56SD38・72SD1)	
	(72SD1)	
外側の堀	(21SD2)	52
	(56SD39・72SD2)	
	(72SD2)	
21SE2		1
21SE3		5
28SE2		23
28SE3		1
28SE4		8
28SE5		3
28SE11		10
28SE12		1
28SE16		7
31SE2		1
31SE6		1

遺構名	点数
31SE7	1
31SE8	2
36SE3	2
21SK55	1
21SK81	1
31SK80	4
49SE1	17
50SE3	18
52SE8	40
55SK29	9
55SK35	1
55SK40	5
55SE1	1
56SK26	1
56SK33	1
70SK22	20

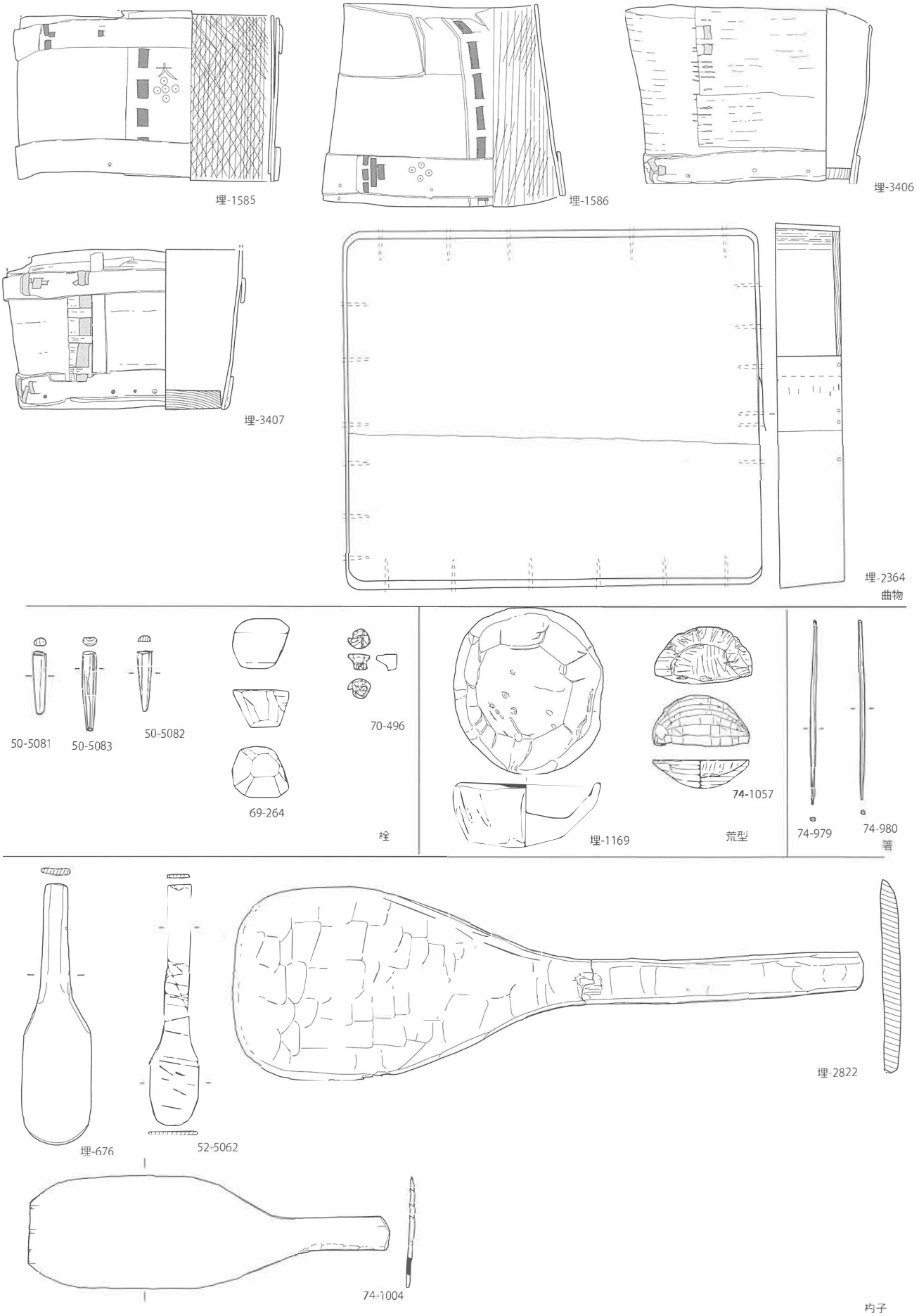


図283　木製品実測図（3）

文房具

A．物差　21SD1から１点（埋－682）、28SE16から１点（埋－2745）が出土している。埋－682は長軸47.6cm程、幅2.4cm程、厚さ1.0cm程の板材である。基点とみられる位置に「・」が刻まれ、５寸の位置に「・」が刻まれ罫線が２本重なる。１寸の長さが2.87～3.00cmで平均2.939cmとなる。埋－2745は長軸36.4cm程、幅1.9cm程、厚さ0．8m程の板材である。基点となる位置に「・」が刻まれる。１寸の長さが3.69～3.85cmで平均3．75cmとなる。鯨尺目盛相当と指摘されている（岩手埋文1995、岩田1994）。

このほか、50SE3から１点（50－4007）、出土している。残存が悪く、物差にあたるか判然としない。52SK11から１点（52－5236）が出土している。52－5236は漆塗りで２本の罫線が引かれる。１本は「・」が刻まれ、線間は3.55cmである。物差に類似するものの残存が悪い。

B．硯　木製の硯が31SK80から１点出土している（埋－3959）。

○遊具

A．毬　内側の堀（21SD1）から１点出土している（埋－694）。径４cm前後でケズリ調整による面取りで、円形に近い形状に整形されている。また、同じく内側の堀（41SD2）から出土した１点も形態的な類似から毬の可能性がある（埋－1260）。径３cm前後で、ケズリ調整により円形に整形されている。

B．将棋駒　23SG1池跡から２点（埋－1533・1534）、21SD1から１点出土している（78－560）。判読できる資料では、「歩兵」「と」の墨書がある。法量では長さ3cm前後、幅2cm前後、器厚0.5cm前後と、若干のばらつきはあるものの、まとまった値を示す。なお、本遺跡例は12世紀後半代とみられるが、12世紀前半と捉えられる中尊寺金剛院資料（平泉町教委1994）も同様の法量を示す。

C．独楽　内側の堀（41SD2）から１点（埋－1208）、同じく内側の堀（72SD1）から出土した１点（74－1058）を独楽と想定した。いずれも形態から判断しているが、円錐形の木製品で先端部がやや突起状になる。

この他にも後述するが、蓮実形とした円錐形の類似した形態の木製品（埋－1257）も内側の堀から出土している。

D．羽子板状　内側の堀跡（41SD2）から出土した１点を羽子板状としている（埋－1206）。

E．木トンボ　内側の堀跡（41SD2）から出土した１点（埋－1207）、52SE8から出土した１点（52－5087）を木トンボと想定した。薄い板材で表面がやや平滑に成形され、中央に穿孔をもつ。

○祭祀具

A．形代　多くの資料が出土しているが、飾り具との弁別が難しい資料や用途不明なものや残材もあり、定量的な把握は難しい。堀跡からの出土が多数を占める。形状からは下記が推定される。

１）人形　埋－705・706・707・708・2351・2398などがある。

２）木偶　立体的な人形に49－478がある。埋－2398は人形か判然としない。

３）刀形　埋－703・2865・3304・3311、52－5088、69－256、74－1011などがある。

４）刀子形　埋－2556、74－1126・1128などがある。69－255は包丁形であろうか。

５）笄形　埋－701・702などがある。

６）鏃形　埋－698・699、69－254などがある。

７）剣状　埋－704などがある

8）陽物形　埋－693・700・1319などがある。
9）鳥形　埋－2343、49－428などがある。
10）砧形　埋－1210・1129などがある。
11）杵形　埋－1209などがある。
12）五輪塔形　埋－695などがある。

B．宝塔　28SE3から1点（埋－2130）、49SE1から1点（49－474）、50SE3から1点（50－4013）の計3点が出土している。埋－2130は宝輪の先端を欠くもののほぼ完形で、底面には小穴がある。高さ11cm程で、台部は4.6×5.1cmの方形である。49－474と50－4013はいずれも一部分のみの残欠である。

C．五輪塔　内側の堀跡（41SD2）から1点が出土している（埋－1337）。花輪部の残欠である。

D．笹塔婆　18点が出土している。内側の堀から多く出土し、南端部で10点が北端部で1点が出土している、このほか、28SE2から1点、28SE4から3点、21SK55から1点、50SE3から1点が出土している。

桂頭状の上部に、側縁に切り込みをもつものが多い。下端は直線的なものと尖角になるものがある。墨書および針書のものも含む。

表40　笹塔婆一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－683	21SD1	4.9・0.9・0.1cm。
埋－684	21SD1	(4.5)・0.6・0.5cm。
埋－685	21SD1	(6.3)・0.7・0.2cm。
埋－686	21SD1	(8.0)・1.0・0.1cm。
埋－687	21SD1	(8.8)・1.8・0.3cm。
埋－688	21SD1	14.7・1.4・0.1cm。
埋－689	21SD1	14.9・1.2・0.1cm。
埋－690	21SD1	針書「南无□□□」 15.4・1.9・0.3cm。
埋－691	21SD1	20.8・1.5・0.3cm。

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－692	21SD1	17.6・1.1・0.4cm。
埋－1211	41SD2	墨書「南无大般若」 (11.9)・2.7・0.5cm。
埋－2079	28SE2	針書「南无阿」(19.8)・2.7・0.3cm。
埋－2348	28SE4	(7.8)・1.3・0.2cm。
埋－2349	28SE4	13.4・1.8・0.2cm。
埋－2350	28SE4	(22.4)・1.2・0.3cm
埋－3517	21SK55	18.7・1.5・0.2cm。
50－4012	50SE3	7.0・1.3・0.1cm。

E．呪符　28SE16から2点（埋－2742・埋－2743）、41SE4から1点（埋－3347）の計3点が出土している。長軸18cm程、幅2cm弱ほどである。いずれも桂頭状の頂部で、埋－3347は両側縁から切り込みが入る。墨書は下記のとおりである。

2742「天罡（符籙）急ゝ如律令」「☆　惣鬼鬼」
2743「天罡（符籙）急ゝ如律令惣鬼鬼」「☆　急々如律令」
3347「鬼鬼鬼　物急ゝ如律令」

○雑具

A．自在鈎　21SE1から1点（埋－1589）が出土している。

B．火きり具　火きり板が21SD1から1点（埋－711）、21SD2から1点（69－247）の2点が出土している。火きり杵は内側の堀（41SD2）から1点（埋－1247）、36SE3から1点（埋－3314）出土している。

C．ちゅう木　ちゅう木は折損した破片も含めひとつの遺構からの出土量も膨大な場合がある。図示できていない資料も含めると点数はこれより増加する。

当初からのちゅう木と他の木製品の再加工によるちゅう木とに分かれる。また、端部の調整の有無

でも分類できる。端部は一端に面取りを行うもの、両端に面取りを行うもの、加工のないものがある。ひとつの遺構からも複数の種別が出土する。

長軸は20～30cm程の資料が多く、法量分布の幅が広い。幅は1～2cm程の資料が多く、これらも法量分布の幅が広い。遺構ごとでの傾向をみると、31SK80では26cm程と30cm程に分布がまとまる傾向が指摘されている（岩手埋文1995）。

表41　遺構ごとの出土量（ちゅう木）

遺構名	点数
21SK53	41（150/617）
23SK83	29（426/2,192）
31SK46	-
31SK80	55（799/1,986）
36SK8	（443）
41SK7	-
52SK11	23（182）
52SK24	16（1,206）
55SK34	6
56SK28	4
56SK53	5
56SK67	3
56SK33	2
70SK22	114（）

○部材

A．部材　組み合わせて利用したとみられる板材等を部材として分類している。用途不明の資料が多い。複数点みられる資料として細い木釘が付く部材がある。円形の部材に木釘が付く資料や、方形の部材に木釘が付くものがある。

B．脚　全体の形状は判然としないものが多いが、形状などから箱等の脚と推定できるものである。埋－2358は箱や櫃類の脚であろうか。相欠き仕口と枘穴がある。埋－2401は小型の脚で、先端に突起がある。52－5091は円形の脚で、上下の両端に円形の突起が成形される。建築部材の可能性もある。52－5092は隅を落とした多面体の方形の脚で、上部に方形の枘穴が下部に円形の小さい穴がある。69－262は埋－2358と類似するが、相欠き仕口と枘穴がある。69－263は方形で、加工等はみられない。

表42　脚一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－732	21SD1	支脚。13.2・2.5・2.1cm。
埋－734	21SD1	9.3・2.5・2.5cm。
埋－1248	41SD2	支脚。（8.6）・2.9・3.4cm。
埋－1657	21SE2	支脚。（11.6）・2.1・1.5cm。
埋－2358	28SE4	台脚。35.7・4.4・3.2cm。
埋－2401	28SE5	支脚。13.6・1.8・1.2cm。
52－5091	52SE8	30.0・5.0・5.0cm。
52－5092	52SE8	30.0・4.0・3.5cm。
69－262	21SD2	31.2・3.0・2.9cm。
69－263	21SD2	29.3・3.1・3.9cm。

○建築部材

A.建築材　板材や柱材、井戸枠などがある。

橋脚等の橋に関わる材に、21SX35の橋脚部材や23SX12の橋脚部材がある。これらは内側の堀に架かる橋に関連する。21SX35の橋脚は21SK3（埋－1340、高64.0・径44.5cm）と21SK1（埋－1341、高38.5・径33.0cm）から出土している。23SX12の橋脚は23SK21（埋－1342、高37.1・径47.1cm）と23SK17（埋－1343、高38.5・径38.5cm）から出土している。

また、厳密な橋の位置は特定できていない69SX3とした土坑状の掘り込みから（51頁）外側の堀に架かる橋と推察できる橋の部材がまとまって出土している（埋－5021～5023、69－351～366）。遺構の記述に際して記したが、同位置から平泉町教育委員会の調査でも橋脚を検出している（43次調査、平泉町教委1994）。

建築部材では、31SE1からまとまって出土している。埋－2818～2820は両端に切り込みのある厚い板材、埋－2817・埋－2821は方形の板材である。埋－2823は長い板材で両端に切り込みがある。また、31SE2から屋根材とみられる板材（埋－2872～埋－2884）や破風板（埋－2862）がまとまって出土している。冨島義幸はこれらの建築部材から門を復元している（冨島2004）。52SE8からは柱材とみられる建築部材などが出土している（52－5086、52－5102～5104）。

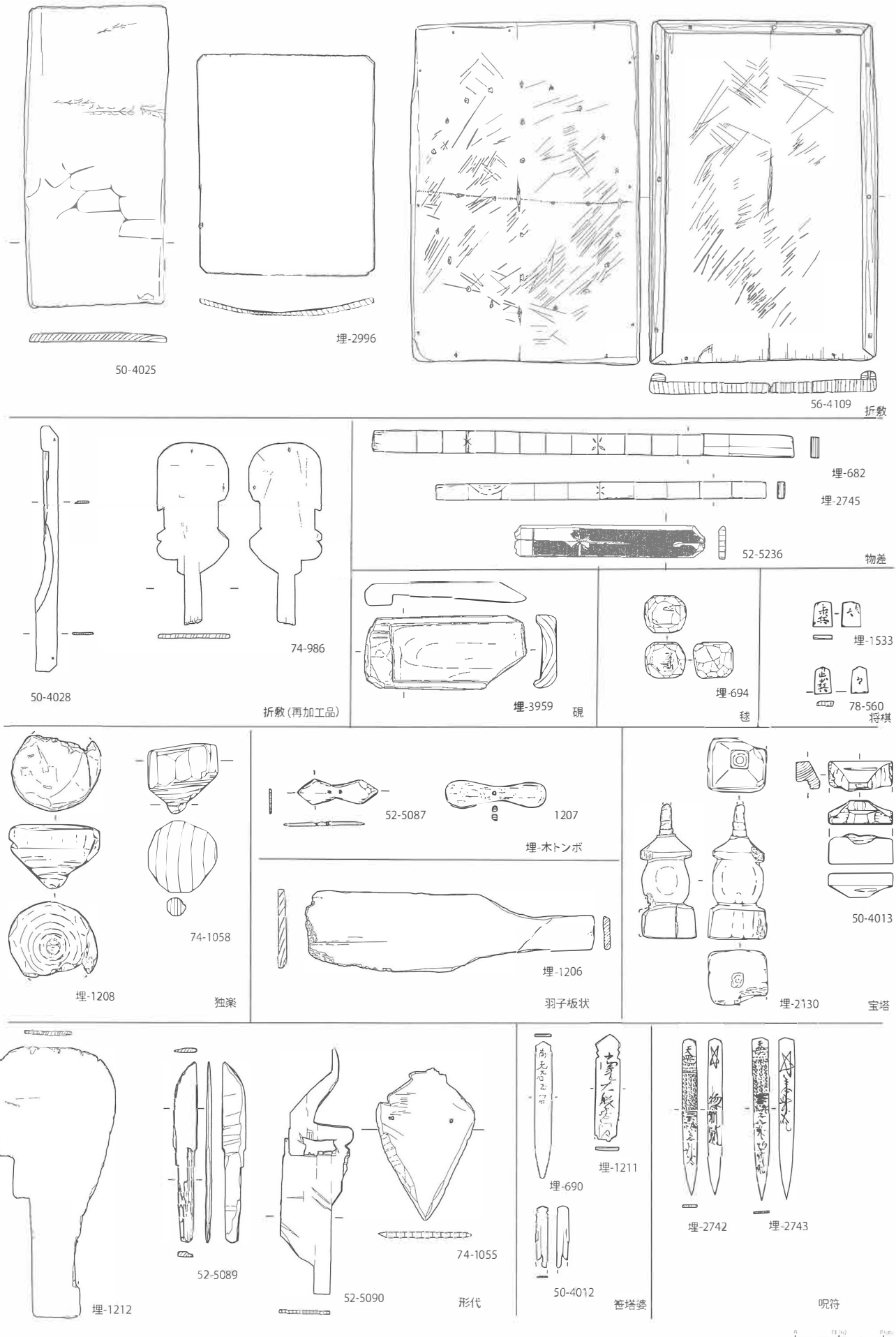


図284　木製品実測図（4）

井戸枠が確認されている井戸跡は少なく、確認されている事例でも井戸枠の一部が残存するのみで井戸の構造を把握できる事例は少ない。21SE2、36SE3、41SE1、37SE2から出土しているほか、55SE1からは井戸枠とともに楔も確認されている。このうち組み合った状態で出土し、井戸枠と想定できるのは21SE2と55SE1である。21SE2からは枘穴のある角材が出土している（埋－1649～埋－1652）。桟の一部が残されたものとみられる。41SE1から枘穴のある角材が出土している（埋－3332～埋3336）。55SE1からは四隅の柱と横木が出土するのみである。

また、平泉町教育委員会による調査で13SE1では井戸枠が確認されている（13次調査、平泉町教委1984）。この井戸枠は四隅に柱を立て、縦板を組んで横木で支える縦板組の構造である。

表42　建築部材一覧

遺構名	部位等	遺物番号
21SX35	橋部材（橋脚）	埋－1340（21SK3）。 埋－1341（21SK1）。
23SX12	橋部材（橋脚）	埋－1342（23SK21）。 埋－1343（23SK17）。
外側の堀（21SD2・69SX3）	橋部材	埋－5021～埋－5023。 69－351～366。
21SE2	井戸枠	埋－1649～埋－1652。
31SE1	建築部材等	埋－2817～埋－2821、 埋－2823。
31SE2	屋根材（板材） 破風板 柱材	埋－2862～埋2896

遺構名	部位等	遺物番号
31SE6	建築部材等	埋－2998
36SE2	建築部材等（柱材）	埋－3303
36SE3	井戸枠	埋－3324
41SE1	井戸枠	埋－3332～埋3336
31SX1	建築部材	埋－4084
37SE2	部材	
52SE8	建築部材（懸魚か、柱材等）	52－5086、52－5102～5104
55SE1	井戸枠（楔）	55－4045～4050
55SK29	屋根材か（板材）	55－4051～4054
56P447	柱材	56－4001
56SK67		56－4022
56SK33		56－4021～4034

B．格子　31SE7から10点が出土しており、これらは相欠き仕口で一個体に組み合う。55SE1から5点が出土し、55SK40から1点が出土している。いずれも相欠き仕口に加工されている。

表44　格子一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－3259a	31SE7	3259b～dの組。
埋－3259b	31SE7	14.1・1.2・1.8cm。
埋－3259c	31SE7	(9.8)・1.2・1.8cm。
埋－3259d	31SE7	(8.3)・1.3・1.5cm。
埋－3259e	31SE7	(8.4)・1.2・1.6cm。
埋－3259f	31SE7	(6.8)・1.2・1.8cm。
埋－3259g	31SE7	(6.8)・1.3・1.7cm。
埋－3259h	31SE7	(5.8)・1.3・1.8cm。

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－3259i	31SE7	(6.2)・1.3・1.8cm。
埋－3259j	31SE7	(6.7)・1.3・1.8cm。
55－4031	55SE1	27.2・3.9・2.0cm。
55－4032	55SE1	7.3・1.9・1.2cm。
55－4033	55SE1	10.0・2.4・2.1cm。
55－4034	55SE1	15.3・1.3・1.3cm。
55－4035	55SE1	12.1・1.8・1.3cm。
55－4081	55SK40	4.6・3.1・1.6cm。

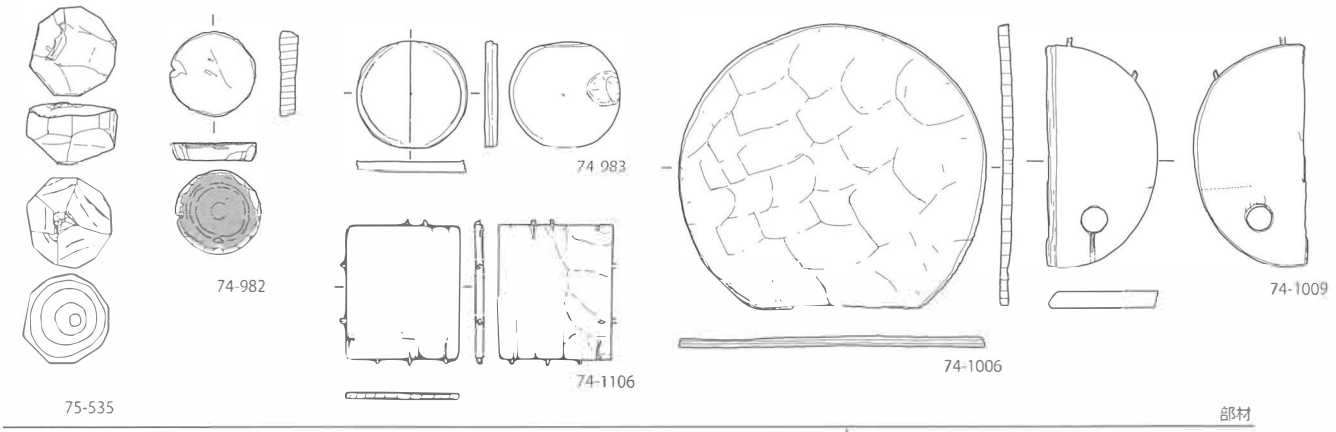
C．不明　そのほか用途等が不明なものの、大きさ等から建築部材と推測できる資料がある。

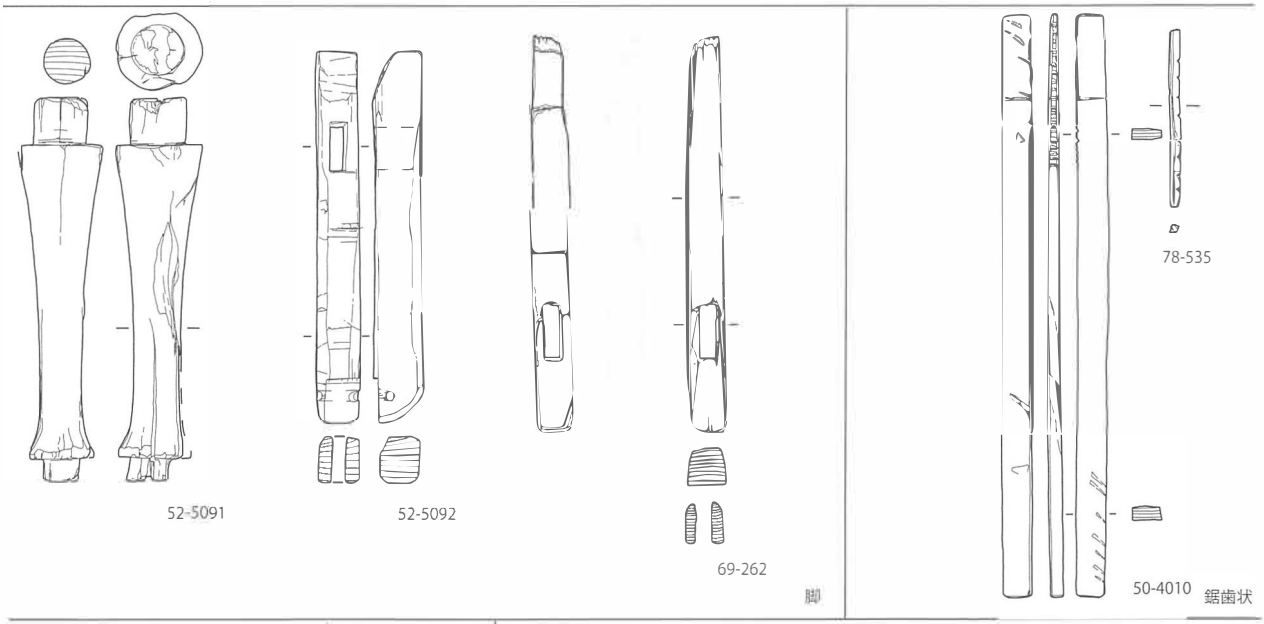
○用途不明品

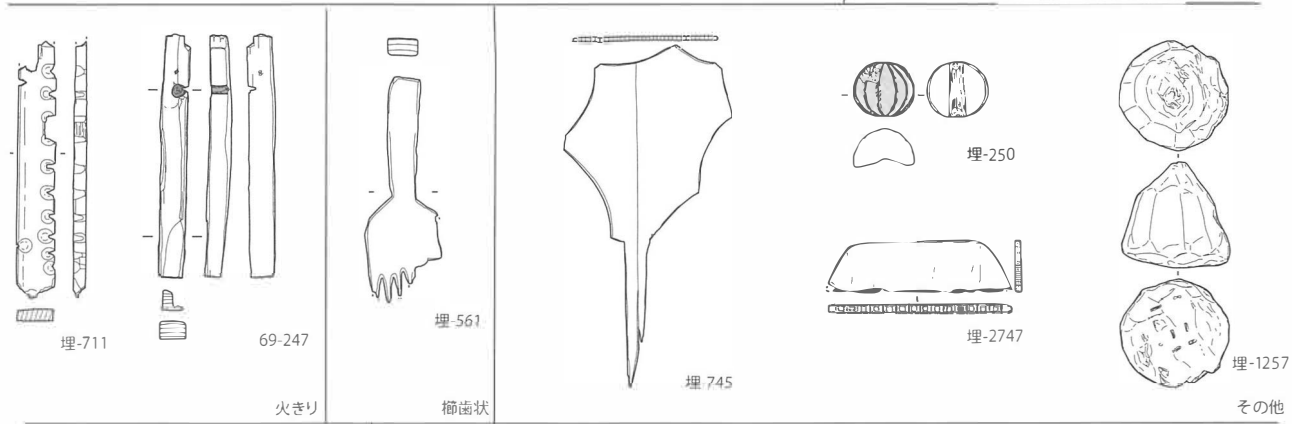
A．鋸歯状　埋－749、埋－749、埋－750や50－4010、78－535など鋸歯状の切り込みが入る木製品がある。50－4010は50SE3から、その他の多くの木製品とともに出土した。78－535は長軸19cm、幅8.5cmの小型の資料で、片側の側縁に鋸歯状の切り込みが入る。

B．櫛歯状　埋－561は櫛歯状で竪櫛にも似るが、歯の間隔は広い。埋－2804も形状が竪櫛に似るが、用途は判然としない。

C．その他　墨書はないものの上部に両側縁から切り込みが入る付札状の木製品が比較的まとまって







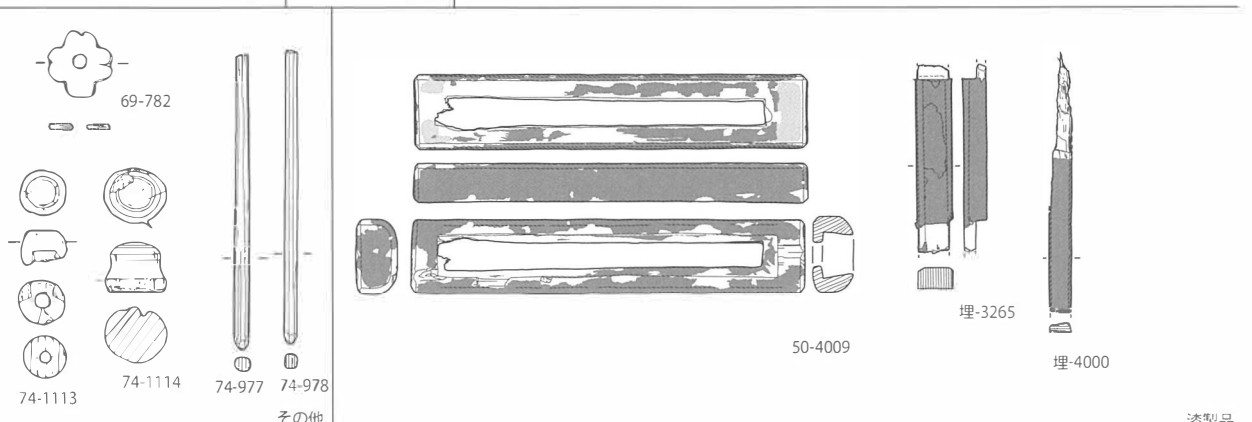


図285　木製品実測図（5）

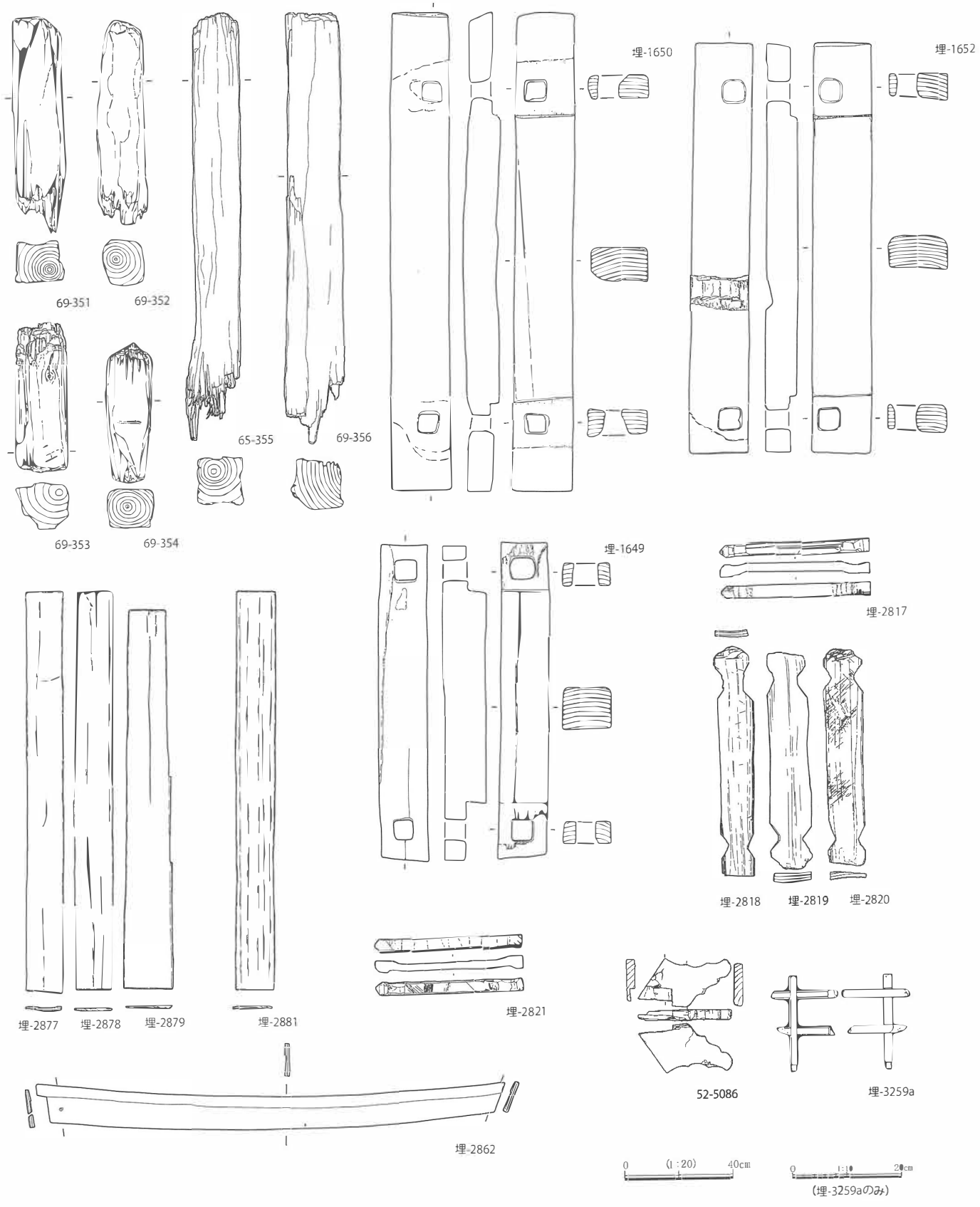


図286　木製品実測図（6）

出土している（埋－696・697、埋－1639～1643、49－427）。

楔状の木製品も多い（埋－753～埋－760、埋－917・918、埋－1251・1588、埋－2373、埋－3321、52－5081～5083）。円盤状などの整形された木製品も多い。棒状の木製品も複数みられる。

○その他

A．飾り具　薄い板材の飾り具は、形代も含むとみられるが、多く出土している。

B．その他　灰ならし（埋－2747）は長軸14cm程、幅４cm程、厚さ0.6cm程で、下端に鋸歯状の切り込みが入る。

蓮の実状とした木製品がある（埋－1257）。蓮実状木製品は径８cm程で、高さも８cm程の円形に近い形状で、片側端部がやや細く削り出される。このほか、蜜柑玉形の木製品もある（埋－782）。径５cm程で高さ３cm程の半円形で、上部に６本の筋が描かれる。朱漆が塗布される。これらは用途が判然としないが、丁寧な造作でもあり常花などであろうか。蓮実状木製品と蜜柑玉形の木製品は北端部から猫間ヶ淵周辺に下る位置の内側の堀から出土している（72SD1断面④付近）。なお、近接した位置を対象とした平泉町教育委員会による調査では宝塔とされる木製品が出土している（38次調査、平泉町教委1993）。

独楽状の資料もみられるが（75－535）、片側は切り込みが入る。小型の部材もあるものの、用途は判然としない（74－1113、74－1114）。砥石台（埋－712）などの資料もある。樺皮（77－767、76－995）は木製品の加工と関連する資料と捉えられる。

このほか、墨書木片等は文字資料としてⅣ章で掲載する。

②漆器・漆製品

漆が塗布された資料や漆工に関連する資料をまとめる。漆器は黒漆を基本とする。朱漆は文様に用いられるほか、皿等の内面に用いられるものが少量あるのみである。

○工具

A．篦　内側の堀（21SD1）から２点（埋－783、埋－785）、同じく内側の堀（41SD2）から１点（埋－1322）出土している。また、平泉町教育委員会の15次調査でも内側の堀からヘラが出土している（15次調査、平泉町教委1984）。

B．刷毛　内側の堀（21SD1）から１点（埋－542）出土している。

C．濾し布　内側の堀（21SD1）から１点（埋－787）出土している。

D．漆紙　内側の堀（41SD2）から1点出土している（岩手県教委2010）。確実な墨痕は判読できていない。

○服飾具

A．下駄　漆塗りの下駄は12点がある。連歯下駄、差歯下駄の両者がある。上述したとおり、漆塗布の有無で資料の諸属性に顕著な差は認められない。漆塗りの下駄は、脚部の内面にあたる位置などに塗装されない位置もあるものの基本的に器形の全体に漆が塗布される。また、漆は黒漆のみである。

○その他

A．挽物　柳之御所遺跡出土の木器椀類は約80点ほどが確認できる。

口径は大きく２つに分かれ、15cm以上の資料と10cm前後の資料が把握できる。器高は、3.5cm以

表45　漆器椀類等一覧

遺物番号	出土遺構	備考（口径・底径・器高）
埋－623	21SD1	皿。8.8・6.4・1.7cm
埋－624	21SD1	椀。16.0・7.2・4.9cm
埋－625	21SD1	椀。15.1・7. 2・5.6cm。
埋－626	21SD1	椀。11.2・6.1・3.5cm。
埋－627	21SD1	椀。16.1・7.4・3.7cm。
埋－628	21SD1	椀。15.8・6.7・5.1cm。
埋－629	21SD1	椀。(9.7)・5.8・(2.6) cm。
埋－630	21SD1	椀。15.7・8.2・5.1cm。
埋－631	21SD1	椀。15.4・7.0・5.0cm。
埋－632	21SD1	皿。(21.0)・8.2・0.9cm。
埋－633	21SD1	椀。(15.0)・6.7・(3.6) cm
埋－634	21SD1	椀。15.0・6.7・4.0cm。
埋－635	21SD1	椀。(13.2)・7.1・(2.4) cm。
埋－638	21SD1	蓋。(5.8)・4.0・1.1cm。
埋－639	21SD1	蓋。14.2・6.5・0.9cm。
埋－1177	41SD2	椀。19.2・8.1・7.2cm。
埋－1178	41SD2	椀。16.8・7.7・5.7cm。
埋－1179	41SD2	皿。10.5・6.2・2.5cm。
埋－1180	41SD2	皿。10.2・7.1・2.2cm。
埋－1181	41SD2	椀。(1.2)・7.2cm。
埋－1183	41SD2	椀。(1.4)・6.7cm。
埋－1321	41SD2	椀。17.0・7.1・5.9cm。
埋－1584	21SE1	椀。17.3・7.5・7.4cm。
埋－1663	21SE2	皿。10.4・5.8・2.9cm。
埋－1664	21SE2	皿。(11.6)・6.9・3.1cm。
埋－1665	21SE2	椀。10.5・5.8・3.1cm。
埋－2816	31SE1	椀。15.6・7.8・7.2cm。
埋－3674	23SK83	椀。－・7.2・－cm。
52－5007	52SE8	椀。14.5・7.0・6.2cm。
55－4001	55SE1	椀。15.8・7.9・7.4cm。
55－4002	55SE1	椀。－・7.9・－cm。
55－4003	55SE1	椀。
55－4079	55SK40	椀。
56－4030	56SK33	椀。
56－4035	56SK33	椀。
56－4083	56SD39	椀。16.6・－・－cm。
56－4097	56SD39	椀。－・7.6・－cm。
56－4173	56SD39	椀。
56－4174	56SD39	椀。
56－4206	56SD39	椀。
68－205	90－70	椀。
69－338	21SD2	椀。16.3・7.8・5.9cm。
69－339	21SD2	椀。18.6・－・(5.0) cm。
69－340	21SD2	椀。
69－341	21SD2	椀。
69－342	21SD2	椀。
70－102	21SD2	椀。－・7. 8・－cm。
70－103	21SD2	椀。
70－359	70SE3	椀。
70－517	70SK22	椀。
72－298	72SD2	椀。16.2・－・5.6cm。
72－299	72SD2	蓋。－・6.0・3.3cm。
72－300	72SD2	椀。
72－335	72SD2	椀。－・7.8・－cm。
74－961	72SD1	椀。15.6・7.4・5.7cm。
74－982	72SD1	椀底か。－・6.7・－cm。
74－1021	72SD1	椀。16.0・8.0・4.8cm。
74－1022	72SD1	椀。15.8・6.8・4.9cm。
74－1023	72SD1	椀。17.0・7.4・6.8cm。
74－1024	72SD1	椀。16.0・8.2・6.0cm。
74－1124	41SD2	椀。－・7.8・－cm。
74－1125	41SD2	椀。9.4・6.8・1.9cm。
74－1144	72SD2	椀。－・7.4・－cm。
75－517	21SD1	椀。－・7.8・－cm。
75－554	21SD1	椀。
75－592	21SD2	椀。－・8.2・－cm。
75－601	21SD2	椀。15.8・8.0・5.7cm。
75－602	21SD2	椀。－・8.6・－cm。
77－768	21SD1	椀。
78－501	21SD1	椀。－・5.8・－cm。
78－565	21SD1	椀。－・9.0・－cm。

上の資料とそれ以下の資料とに分かれる。２つの属性は相関を示し、器形が大小の２つに大きく分かれる。以下では器形の大きい前者を椀、器形の小さい後者を皿として便宜的に呼称する。

椀は器高が７cm前後、５～６cm前後、４cm前後の３者に分布が分かれる。ただし、４cm以下の資料は少なくどの程度定形化したか判断が難しい。器高が６cm以上の７cm前後に分布する器形を大、それ以下の５～６cm前後に主に分布する器形を小に分けておきたい。皿は法量の分布はやや散漫に分かれるが、椀の法量値の差が排他的な関係を示すのに比して漸移的な様相を示しており大小の差が器種として細分が可能かは量的な確保が少ないこともあり判断が難しい。ここでは一器種として扱う。これらの法量などの要素から木器椀類の大別が可能だが、器形の定性的な特徴は体部と底部の高台部に部位を分けることができる。体部は底部から直線的に立ち上がる器形と、緩やかに湾曲しながら立ち上がる器形がある。底部および高台部から直線的に立ち上がる形状はやや少なく、湾曲して立ち上がる器形が多い。また、椀類では体部の下半部で湾曲する部分を中心に明瞭な稜をもつ器形もみられる。

底部および高台の特徴では３つに分類が可能である。ベタ底のもの（１類）、小さい脚部を削り出すもの（２類）、脚部を削り出すものがある（３類）。２類と３類の弁別は漸移的な部分があるが、資料的には明確に脚部を削り出す３類としたものは少なく、多くは１類および２類にあたる。なお、個体差が大きく分類項目の設定は難しいが、口縁部形状などは個体ごとに異なる特徴を示す。口縁が外反する形状や直線的な形状などがあり、外反するものもその程度にも差がある。個体ごとの差もあり、他の部位との相関も弱い。また、明確な折縁などは確認できない。

これらの属性の相関をみると、底部形状のうち１類には立ち上がりが湾曲して立ち上がる器形の体部をもつものが多く、稜をもつ器形もみられる。ただし直線的に立ち上がる器形も含んでおり、いずれかに収斂する特徴ではない。２類でも同様に湾曲して立ち上がる器形が多く、１類と同様の傾向が認められる。３類では直線的に立ち上がる器形を含み特徴的な器形があるものの、湾曲して立ち上がるものが多い。また、これらの属性と椀の大小で認識できる器形差との相関は顕著ではない。

皿も椀と同様に器形に体部と底部の高台部にわけて特徴を把握できる。ただし、体部の立ち上がりの形状は部位が少ないこともあり顕著な差は看取できない。高台の特徴は、椀類で確認できる３種のうち１類としたベタ底の器形と２類とした小さい脚部をもつものが確認できる。

高台部の外面は漆が塗布されないものが多く、この部分にロクロの痕跡とみられる穴が確認できるものもある。ロクロ痕跡は５カ所程度の穿孔が多い。なお、その他の部位には同様の痕跡はみられず、底部をロクロに固定して整形が行われたことがわかる。その周囲に細い線状痕もあり、製作時に関連する可能性が指摘されている。木取りは横木取りを基本とする。

また、漆塗りは黒漆塗りを基本とする。朱漆が確認できるのは、小皿などの一部のみである。また、椀類では文様が描かれるものはない。

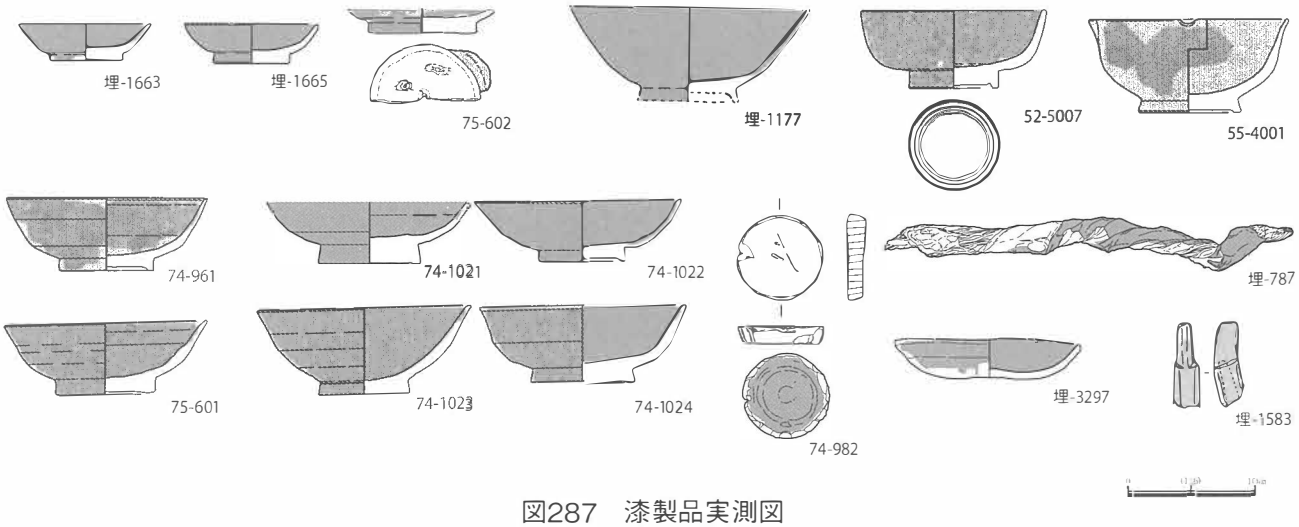


図287　漆製品実測図

B．その他　箱とみられる資料がある（埋637、埋－639）。埋－638は黒漆塗りで、朱漆で文様が描かれる。蓋に類似するが、残存部からは確定できないは漆が塗布された鹿角製の弭が21SE1から１点出土している（埋－1583）。50－4009は長軸31.1cm、短軸5.9cm、厚さ3.3cmで、全面に漆が塗布される。

このほか、平泉町教育委員会による13次調査では、13SE5で漆器の盤（口径28cm程）が出土している（13次調査、平泉町教委1984）

C．土器（漆付着）　漆が付着する土器類は８点出土している。このほかに小破片で漆が付着する資料も出土している。内側の堀跡を中心に堀跡等からの出土が多く、出土位置のまとまりは少ない。

埋－3977は手づくねかわらけ大皿で内面は全面に漆が付着し、外面に漆が垂れる。

なお、既述のとおり木製の曲物で内面に漆が付着する資料もみられる。漆の運搬・保管から利用の過程を想定した場合には器種ごとの使い分けが想定できよう。

表46　漆付着土器一覧

遺物番号	出土遺構	備考（長さ・幅・厚）
埋－3297	31SE10	手づくねかわらけ大
68－90	－	手づくねかわらけ小
72Rok54	－	手づくねかわらけ大
73Rok159	72SD2	ロクロかわらけ
74－191	72SD1	手づくねかわらけ
76－172	21SD1	手づくねかわらけ大
76－199	21SD1	手づくねかわらけ大
76R●k268	21SD1	かわらけ

③木製品の樹種

遺跡内から出土した木製品について樹種同定を行っている資料も多い。傾向を確認しておきたい。樹種同定の分析の詳細は既報告に掲載しており、同定結果に対する所見も示されている。なお、表45は全種別から抜粋しており、表46は木製品種別の代表的な事例を抽出しており、合計点数等は一致しない。

樹種同定した資料全体の傾向は表45のとおりである。樹種同定可能な資料のサンプル数量や木製品自体の出土数量にも影響されるため位置づけは難しいが、まとめておく。

表47　樹種同定結果

樹種	比率（サンプル数）
スギ	61％（603）
アスナロ	12％（121）
ケヤキ	９％（85）
クリ	５％（50）
ヒノキ・ヒノキ属	４％（36）
モクレン属	３％（30）
竹	１％（８）
ネズコ	１％（６）
イスノキ	0.5％（５）
コナラ属	0.5％（４）
その他（アサダ・カエデ属、サワラ・ヌルデ・エゴノキ・カヤ・ブナ属・ウコギ属・ウリカエデ・カツラ・カバノキ・キハダ・クマシデ属・スイカズラ・ツゲ・トチノキ・ナナカマド・ハイノキ属・ハシバミ属・ミズキ属・モミ属・ヤナギ属）	３％（33）

スギがもっとも多く全体の61％占める。これ以外の樹種は数量がまとまるものでも一割前後以下となる。アスナロやケヤキが10％前後と一定量を占めるほか、後述するように柱材などの大型の建築部材などに多く用いられるクリも比較的多い。そのほか、ヒノキやモクレンも多用される。また少量ながらイスノキも利用されているものの、後述するように特定の器種に限定される。

次に、木製品の種別ごとでの傾向を確認しておく（表46）。

【工具・武具】柄・鞘・刷毛・ヘラなどの小型の工具はスギが多い。柄ではモクレン属なども利用されている。

【紡織具】糸巻きはアスナロ、スギ、ヒノキ属がある。

御簾錘はスギが用いられている。

【運搬具】修羅はクリが用いられている。

【漁撈具】網針はスギが用いられている。

【服飾具】横櫛はイスノキが多く、ツゲが１点ある。扇骨はスギが多いほか、竹がある。ただし、竹は一個体とみられる。

下駄はケヤキ、スギ、クリが多く、アスナロもみられる。連歯下駄、差歯下駄での樹種の相違は顕

著ではない。差歯下駄では台部と歯で樹種が異なる資料もある。漆塗りの下駄もあるが、使用樹種の傾向は漆の有無での差は顕著ではない。

【容器】曲物はスギが多く、その他にアスナロ、サワラ、ヒノキが少量含まれる。

【食事具】箸や匙、杓子などの小型の食事具はスギが多く、アスナロも少量含まれる。折敷はスギが多い。クリが用いられた折敷で、桟はスギの資料もある（埋－2778）。

【文房具】物差はアスナロ、スギ、ヒノキがあり、まとまりは看取できない。

【遊具】将棋駒はカヤが、独楽はケヤキが用いられている。

【祭祀具】宝塔はケヤキが、五輪塔はモクレン属が用いられている。形代はスギが多く、同様に器厚の薄い笹塔婆や呪符はスギが用いられる。

【雑具】ちゅう木はスギが多く、折敷などの再加工品が多いことと対応する。

【建築部材】建築部材は柱材ではクリが多く用いられるほか、アスナロやヒノキがある。また、本表には追加していないが、整備に際して検討を行った出土柱材についてはクリ材であった（岩手県教委2007）。その他の建築部材では板材はスギが多用される。小型品の格子はスギが多く、その他ヒノキ属、アスナロがある。

資料が少ないため偏差が想定されるが、井戸枠はモクレン属が用いられる。

【漆器類】漆器椀類はケヤキが多用される。なお、荒型とみられる資料もケヤキである。

表48　資料種別樹種同定結果

木製品種別	樹種	数量（種別ごとの比率）
柄（26）	モクレン属	8（31%）
	スギ	8（31%）
	アスナロ	6（23%）
	カツラ	1
	ハシバミ属	1
	ヒノキ	1
	ヤナギ属	1
鞘（9）	スギ	8（89%）
	サワラ	1
刷毛（1）	スギ	1
ヘラ（22）	スギ	18（82%）
	アスナロ	3（14%）
	カバノキ	1
木槌（2）	クリ	1
	ミズキ属	1
鍬（1）	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1
糸巻き（48）	アスナロ	20（42%）
	スギ	12（25%）
	ヒノキ属	12（25%）
	モクレン属	2
	ウリカエデ類似種	1
	ヒノキ属類似種	1
紡輪（1）	スギ	1
御簾錘（3）	スギ	3
修羅（1）	クリ	1
網針（1）	スギ	1
扇骨（22）	スギ	13（59%）
	竹	6（27%）
	アスナロ	3（14%）
横櫛（6）	イスノキ	5
	ツゲ	1
留針（16）	スギ	11（69%）
	アスナロ	5（31%）
下駄（68）	ケヤキ	26（38%）
	スギ	15（22%）
	クリ	14（21%）
	アスナロ	6（9%）
	モクレン属	4（6%）
	キハダ	1
	トチノキ	1
	ヒノキ属	1
漆下駄（9）	ケヤキ	6
	アスナロ	1
	クリ	1
	モクレン属	1
草履状木製品（1）	アスナロ	1
曲物（31）	スギ	26（84%）
	アスナロ	4（13%）
	サワラ	1
	ヒノキ	1
箱（2）	アスナロ	1
	スギ	1
栓（6）	スギ	3
	アスナロ	2
	ナナカマド属	1
箸（60）	スギ	44（73%）
	アスナロ	15（25%）
	ヒノキ	2（3%）
	ウコギ属	1
匙（5）	スギ	3
	アスナロ	2

木製品種別	樹種	数量（種別ごとの比率）
杓子（12）	スギ	10（83%）
	アスナロ	1
	クリ	1
折敷（69）	スギ	66（96%）
	クリ	2
	ネズコ	1
物差（3）	アスナロ	1
	スギ	1
	ヒノキ	1
硯（1）	クリ	1
将棋駒（2）	カヤ	2
独楽（1）	ケヤキ	1
羽子板状（1）	モクレン属	1
木トンボ（1）	アスナロ	1
形代（26）	スギ	20（77%）
	アスナロ	5（19%）
	ヒノキ	1
宝塔（1）	ケヤキ	1
五輪塔（1）	モクレン属	1
笹塔婆（13）	スギ	13
呪符（1）	スギ	1
自在鉤（1）	カエデ属	1
ちゅう木（142）	スギ	127（89%）
	アスナロ	8（6%）
	ネズコ	5（4%）
	クリ	1
	サワラ	1
建築部材板材（29）	スギ	26（90%）
	クリ	1
	ケヤキ	1
	ヌルデ	1

木製品種別	樹種	数量（種別ごとの比率）
建築部材柱など（9）	クリ	5（56%）
	アスナロ	3（33%）
	ヒノキ	1
井戸枠（14）	モクレン属	10（71%）
	アスナロ	3（21%）
	スギ	1
格子（7）	スギ	4（57%）
	ヒノキ属	1
	アスナロ	1
鋸歯縁状（4）	アスナロ	2
	スギ	2
飾り具（44）	スギ	42（95%）
	アスナロ	1
	スイカズラ属	1
支脚（4）	スギ	4
付け札状（5）	スギ	5
砥石台（1）	アスナロ	1
灰ならし（1）	コナラ属コナラ節	1
部材・用途不明（113）	スギ	74
	クリ	15
	アスナロ	11
	ヒノキ	6
	モクレン属	2
	エゴノキ属	1
	ケヤキ	1
	コナラ属	1
	カエデ属	1
	モミ属	1
漆椀・皿類（43）	ケヤキ	42（97%）
	ブナ属	1

（6）その他

その他の数量が少なく、定量的な把握には適当ではないものの遺跡の性格を示す上で重要と考えられる遺物について概要を記す。

①金属製品

○工具・武具

刀子　内側の堀跡（21SD1）から２点（埋－819・820）、21SE1から２点（埋－1599・1600）、49SE1から１点（49－477・49RW01）、55SK54から１点（55－4091・55RW93）、70SK25から１点（70RM1）の計７点が出土している。

柄の木質部が残る資料は４点あるものの、柄も含めて全形が残存する資料はない。柄の特徴は木製品の項で既述の内容と同様である。刃部も全体が残存する資料はないが、残存長で15cm前後、幅３cm弱ほどである。

金槌・鑿　金槌（埋－3717）と鑿（埋－3718）の各１点が、28SK14の底面隅から対面して出土している。金槌は長軸13.9cm、幅2.3～3.4cm、厚0.8～2.6cm程である。木質部はわずかに付着するものの、

表49　刀子一覧

遺物番号	出土遺構	法量・備考
埋－819	21SD1	木質部あり。先端欠損。全長（23.9）・刀身部長（11.7）・茎長7.5・刀身部幅2.7・背部厚0.4cm。
埋－820	21SD1	長（6.8）・幅1.9・厚0.8cm。
埋－1599	21SE1	木質部あり。先端欠損。全長（26.4）・刀身部長（15.1）・茎長（11.3）・刀身部幅（2.2）・茎幅（1.8）cm。
埋－1600	21SE1	長（7.3）・幅0.8～1.4・厚0.7cm。
49－477	49SE1	木質部あり。先端欠損。全長27.3・幅3 cm。
55－4091	55SK54	木質部あり。先端欠損。長軸18.1・2.7・1.7cm。
70RM1	70SK25	（4.1）・（2.5）・0.5cm。

ほぼ残存しない。

鑿は先端が少し欠損しているものの、長軸は全長が（25.2）cm程で、鑿部の長さは15.7cm、柄部の長さは9.5cm程である。袋部は径3.3cm、柄部の径3cm程である。冠部の外径3.2・内径2.5・幅1.0・厚0.4cm程である。木質部も残存する。

馬具　杏葉が28SE11から１点（埋－2505）、轡が28SE11から1点（埋－2505）出土している。杏葉は２破片に分離しているが、同一個体と推定している。

鉄斧　鉄斧が21SD1から１点（埋－826）出土している。長軸は残存長が14.8cm程である。刃部は幅5.5cm程、厚さ4.4cm程である。手斧は41SK7から１点（埋－4001）出土している。長軸は全長10.5cm、刃部は長さ4.9cm程、幅3.5～5.9cm、厚0.1～0.7cm程である。袋部は最長3.7・外径2.4・3.0・内径2.0・2.3・厚0.5 cm程である。

鋤先　77SK3から１点が出土している（77－770）。77SK3の2a層から出土した鉄製鋤先である。長軸11.8cm、最大幅9.8cm、刃部の幅が5.1cm、厚さは1.5cmでほぼ完形である。先端部は丸みを帯びるものの断面形は尖り、１cm程度の刃部が整形される。内面は木工具との組み合わせ部に窪みがある。

その他　その他の工具類に、環状金具が21SD1から1点（埋－827）、49SE1から1点（49－488・49RM1）出土している。

また、釘が21SD1から８点と21SE2から４点、41SK7から２点、21SD2から２点（69－370・371）、72SD1から１点（72－291）、72SD2から１点（72－730）、鏃が21SE2から１点出土している。

表50　その他金具（釘・鏃）一覧

種別	遺物番号	出土遺構	法量・備考
釘	埋－828	21SD1	長（4.9）・幅1.2・厚1.0cm。
	埋－829	21SD1	長（5.2）・幅1.3・厚0.7cm。
	埋－830	21SD1	長5.1・幅1.1・厚0.5cm。
	埋－831	21SD1	長（5.4）・幅0.5・厚0.5cm。
	埋－832	21SD1	長（7.5）・幅0.5・厚0.6cm。
	埋－833	21SD1	長（8.0）・幅0.8・厚0.4cm。
	埋－834	21SD1	長（9.4）・幅0.7・厚0.4cm。
	埋－1668	21SE2	長（5.3）・幅0.6・厚0.6cm。
	埋－1669	21SE2	長（6.9）・幅0.6・厚0.4cm。
	埋－1670	21SE2	長（8.3）・幅1.0・厚0.7cm。
	埋－1671	21SE2	長（11.4）・幅0.9・厚0.7cm。
	埋－4002	41SK7	長（4.8）・幅0.5・厚0.4cm。
	69－370	21SD2	長（9.5）・幅0.4・厚0.4cm。
	69－371	21SD2	長（4.2）・幅1.1・厚0.7cm。
	72－291	72SD1	（4.3）・0.7・0.7cm。
	72－730	72SD2	（5.8）・0.6・0.4cm。
鏃	埋－1677	21SE2	長（6.5）・幅6.0・厚0.2cm。

鉄鏃　23SD2から１点出土しているものの、時期は不明である。
小札　52SK24から３点が出土している（図210、52－6026・6027・6028）。平面は頂部が丸みを帯びた長方形で、全体が判明する資料は長軸7.9～8.6cm程、短軸4.2～4.3cm程である。0.3cm程の穿孔があり、穿孔は２列でそれぞれ７個並ぶ。

○祭祀具
輪宝・橛　28SX1の項で既述のとおり、28SX1から７点のかわらけとともに土坑に埋納された状態で出土している（図262）。輪宝（埋－4082）は銅製で径20cm程に復元でき、連珠がめぐる外輪から、軸が中央に伸びる。軸は完形であれば８本と推測できる。橛（埋－4083）は鉄製で長軸27cm程である。
火舎・花瓶　鉄の鋳物で、21SK108から上（花瓶）下（火舎）に重なる状態で出土している。火舎（埋－3617）は外径40.0・内径30.0・高13.2・鍔幅5.1・湯口径2.1・2.5cm程である。湯口は丸形である。吊り手が２個付き、獣脚が３足付く。
　花瓶（埋－3618）は高29.7cm程、最大径32.2cm程である。接合部の径14.5～17.2cm程である。本体部は高さ18.4・外径最大32.2cm程で、開口部の外径20.9cmである。鍔幅3.9・2.1・厚0.5～1.5、脚部は高11.3cm程である。外面は唐草文と蓮弁文が描かれ、耳が２個付く。裾に突起が付く。

○容器
内耳鉄鍋　21SD1から１点が出土している（埋－822）。口径33.6・器高16.9・器厚0.5cm程で、内面に２個の耳が付く。単純な底部から、口縁がやや外に反る。底部に丸形の湯口が観察できる。
提子金具　90－67で遺構検出時に出土している（50次調査、50－5012）。 銅製で、幅1.2cm程で残存長6.7cm程である。本資料は下部が欠損しており、全形は不明である。志羅山遺跡21次調査例（平泉町教委1993）と類似する。

○服飾具
和鏡　松双鶴鏡が31SE2から１点（埋－2902）出土している。松双鶴鏡は径11.5cm程で、周囲に松とみられる樹枝文が配され、中心に双鶴が置かれる。なお、平泉周辺では鋳型が出土している（志羅山遺跡37次調査、平泉町教委1995）。北上川東岸の里遺跡では２面の鏡が出土している（岩手埋文2002）。鋳型などからは平泉周辺で鏡生産が行われていたことが分かり、松双鶴鏡についても平泉周辺での生産の可能性が指摘されている（杉山2002、久保2010）。報告書掲載時の12世紀後半との年代比定は、出土遺構の土器類から12世紀中葉に遡る可能性が高い。ただし、既往の研究による評価を大きく変更する内容ではないと思われる。
　このほか、八稜鏡が28SE9から１点（埋－2481）出土している。八稜鏡は小破片のため全形は不明である。

○その他
雑具　金銅製の掛金具が21SD1から１点（埋－823）、金銅製の飾り具が21SD1から１点（埋－824）紡錘車は21SD1から1点（埋－825）、21SX4から軸部が１点（埋－4289）、毛抜きが21SX4から１点（埋－4290）出土している。

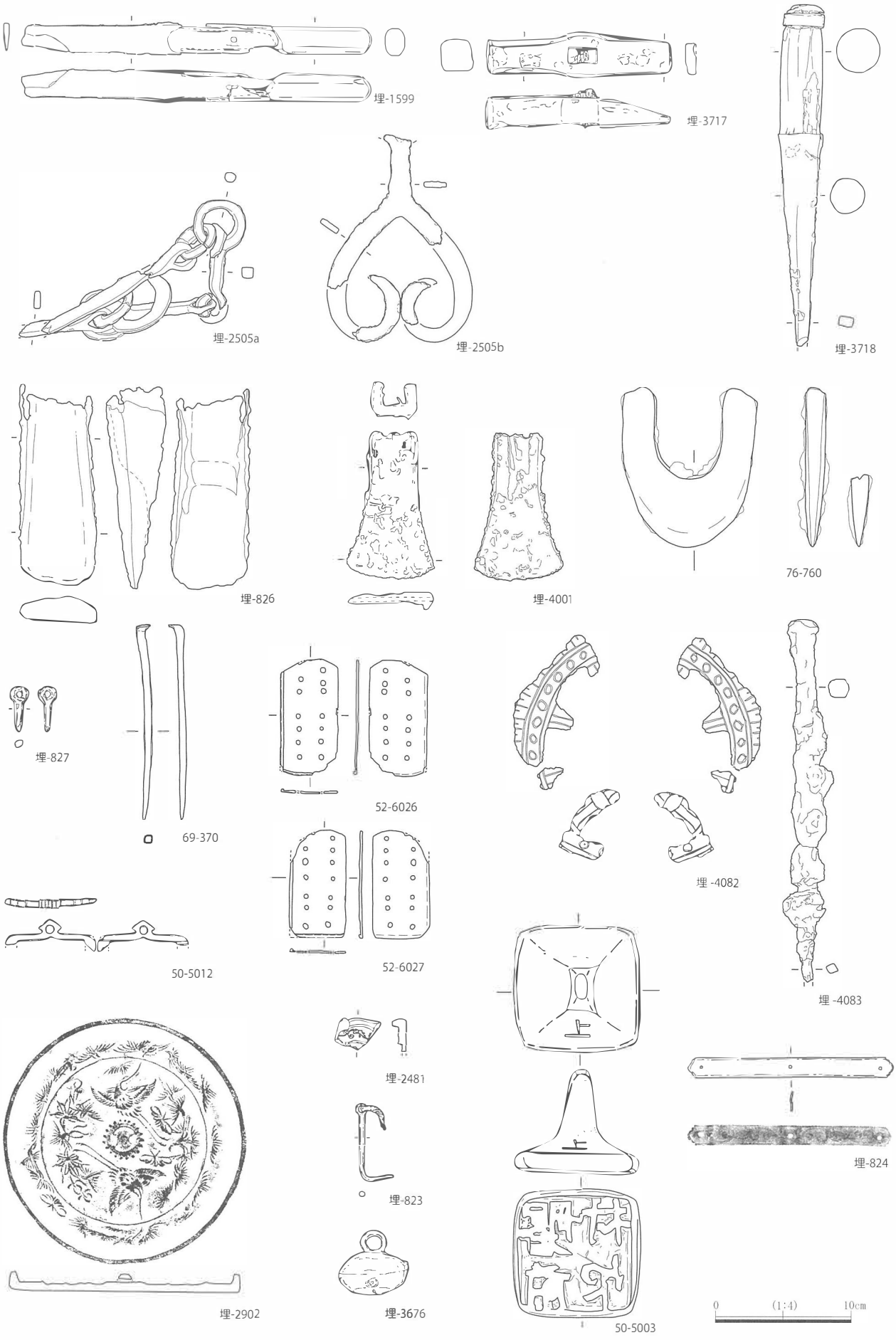


図288　金属製品実測図（1）

銭貨　12世紀代の遺構などからは宋銭６点が出土している。

なお、21次調査で検出された中世後期以降の柱穴から一括埋納の貨幣が29枚出土している。そのなかには皇宋通宝、元祐通宝を含む（岩手埋文1989）。したがって、表土出土資料などはこれらが12世紀代に用いられたことを示すものではない。

表51　銭貨一覧

遺物番号	種別	出土遺構	備考
埋－835	政和通宝	21SD1	北宋　初鋳1111年
	大観通宝	21SX4	北宋　初鋳1107年
埋－1339	至道元宝	41SD2	北宋　初鋳995年
埋－3295	開元通宝	31SE9	唐　初鋳621年
	聖宋元寶	56次調査	北宋　1101年
	熙寧重宝	11次	

銅印　50SE3から１点が出土している（図180）。50SE3の項で既述したとおり、同じ遺構から白磁四耳壺などが出土している。「磐前村印」と陽刻され、持ち手側に「上」の陰刻がある。

鉄鈴　23SK83から1点が出土している（埋－3676）。

②土・石製品

土器　かわらけの大皿、小皿以外の少量出土した特徴的な土器について記す。

底部を打ち欠いて穿孔する穿孔かわらけは、ロクロかわらけと手づくねかわらけの両者があり、それぞれ大皿と小皿のいずれにもみられる。出土は内側の堀跡（21SD1・72SD1）で多く出土しているほか、井戸跡などから出土している。55SX1からは合わせ口の状況で、まとまって出土している。

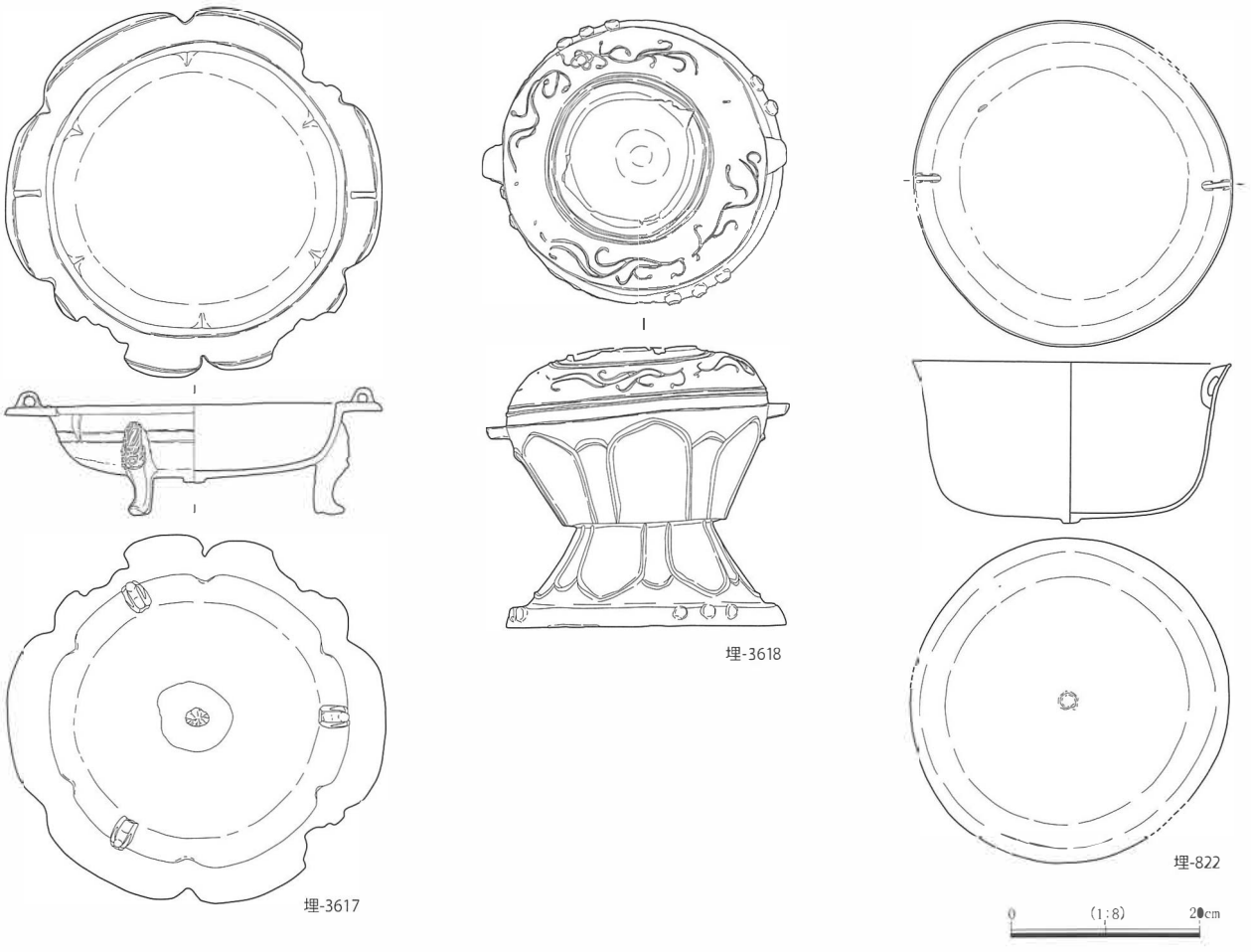


図289　金属製品実測図（2）

表52　穿孔かわらけ一覧

遺物番号	遺構	備考
埋－131	21SD1	手大。13.7・2.9cm。
埋－171	21SD1	ロ大。13.8・3.3・7.5cm。
埋－176	21SD1	手大。12.7・3.0cm。
埋－179	21SD1	手大。12.3・3.1cm。
埋－893	21SD1	手小。9.8・1.9cm。
埋－947	21SD1	手小。10.0・2.3cm。
埋－959	21SD1	手大。13.7・2.6cm。
埋－1883	21SE3	ロ大。14.3・3.7・7.6cm。
埋－1884	21SE3	ロ大。14.0・3.6・7.0cm。
埋－1937	21SE4	手大。13.1・2.5cm。
埋－2437	28SE8	ロ大。(15.1)・3.1・8.2cm。
埋－3023	31SE7	手大。13.4・2.9cm。
埋－3024	31SE7	手大。12.6・2.3cm。
埋－3025	31SE7	手大。12.5・3.0cm。
埋－3787	28SK18	手大。13.9・2.9cm。
埋－3788	28SK18	ロ大。14.5・3.7・7.9cm。
55－377	55SX1	手小。9.7・2.0cm。
55－378	55SX1	手小。9.6・2.2cm。
55－379	55SX1	手小。8.8・2.0cm。
55－380	55SX1	手小。8.9・2.0cm。
55－381	55SX1	手小。9.0・1.8cm。
55－382	55SX1	手小。9.4・2.0cm。
55－383	55SX1	手小。9.2・1.9cm。
55－384	55SX1	手小。9.4・2.0cm。
55－385	55SX1	手小。9.2・2.0cm。
57－37	23SG1	手小。12.8・2.9cm。
68－55	68SK35	ロ大。15.5・3.2・9.1cm。
68－56	68SK35	ロ大。16.2・3.1・10.1cm。
69－158	21SD2	手小。8.0・1.7cm。
70－4	69SX3	ロ大。14.0・4.0・8.4cm。
70－14	21SX4	手小。8.8・1.9cm。
70－60	87－110・Ⅳb層	手大。15.0・3.6cm。
74－23	72SD1	ロ大。14.5・7.6・5.1cm
74－24	72SD1	ロ大。－・－・6.8cm。
74－72	72SD1	手小。9.6・2.0cm。
74－157	72SD1	ロ大。14.6・7.5・3.8cm。

このほか、刺突による穿孔もある（埋－931、埋－932、埋－2741、埋－3789、64－78、76－939）。紡錘車であろうか。

内折れかわらけは手づくねによる成形で、口縁部が内側に折れ曲がるコースター状の器形である。概ね手づくねかわらけ小皿程度の大きさである。

表53　内折れかわらけ一覧

遺物番号	遺構	備考
埋－1	21SD1	9.1・1.7cm。
埋－57	21SD1	中央に穿孔あり。7.8・1.5cm。
埋－1407	23SG1	8.4・7.2cm。
埋－3010	31SE7	(6.8)・1.3cm。
埋－3011	31SE7	(7.2)・1.1cm。
埋－3041	31SE7	(8.6)・1.1cm。
埋－3115	31SE7	9.3・1.8cm。
埋－3554	21SK81	9.2・1.0cm。
埋－4008	21SD4	8.2・1.6cm。
49－6	49SD24	(7.1)・1.1cm。
49－7	49SD24	(8.6)・1.0cm。
49－8	49SD25	(7.6)・1.2cm。
49－158	49SX9	
49－212	88－72 Ⅲb層	(8.2)・(1.0) cm。
49－213	86－73 Ⅲb層	(8.0)・1.4cm。
49－214	88－72 Ⅲb層	
52－395	52SE8	9.8・1.2cm。
55－88	55SK1	10.6・1.6cm。
56－19	56SK28	9.2・1.3cm。
57－131	90－71	9.0・1.1cm。
72－201	72SD2	(8.8)・(1.3) cm。
73－218	72SD2	6.3・1.2cm。
73－219	72SD2	－・0.9cm。
74－34	72SD1	(7.0)・1.4cm。
74－35	72SD1	－・1.2cm。
74－37	72SD1	(8.0)・1.3cm。
74－203	72SD2	(7.0)・1.0cm。
74－231	72SD2	－・0.8cm。
76－229	21SD1	－・1.2cm。
76－230	21SD1	7.6・1.3cm。
76－231	21SD1	－・1.1cm。
76－232	21SD1	－・1.2cm。
76－336	21SD1	－・0.5cm。
76－337	21SD1	－・1.1cm。
76－338	21SD1	－・0.8cm。
76－928	21SD2	－・0.9cm。
77－56	21SD1	－・0.9cm。
77－57	21SD1	－・1.1cm。
77－58	21SD1	－・1.0cm。
77－198	21SD1	(9.0)・0.9cm。
77－199	21SD1	(7.8)・1.1cm。
77－200	21SD1	－・(0.9) cm。
77－201	21SD1	－・(1.0) cm。
77－202	21SD1	－・(1.2) cm。
77－477	77SK1	－・(0.6) cm。
77－517	85－102	－・1.8cm。
77－518	85－102	－・0.6cm。
78－124	21SD1	(9.0)・(0.8) cm。
78－125	21SD1	－・(0.8) cm。
78－126	21SD1	－・(0.8) cm。
78－308	21SD1	－・(0.8) cm。
78－309	21SD1	－・(0.9) cm。
78－399	78SD1	－・(1.0) cm。
78－400	78SD1	－・(1.1) cm。
78－401	78SD1	－・(0.8) cm。

このほかに、小型の壷（埋－837）、土鍋（埋－840・1264・1324・1602・3421・4842）、鉢（埋－3422・3874）、内耳土鍋（埋－4087）、瓦器とされる資料（埋－1265、52－6018）、土製脚（50－5002、55－5002、75－171）、大型の破片（50－5003）などがある。

円盤状土製品

側面を調整して円盤状に整形した円盤状土製品がある。また、これらに類似した資料に円盤石製品や陶製円板がある。周縁の研磨が顕著なものや、きわめて小型の資料が含まれる。材質の異なる円盤状製品の存在から印地打ちなどに用いた遊戯具や、祭祀に関わる資料を含むことが想定される。円盤状土製品でも打ち欠いただけのものと周縁の研磨が顕著なものがあり、小型の資料なども注目できる。

表54　円盤状土製品

遺物番号	遺構	備考
埋－788	21SD1	径3.4・3.7・厚1.0cm。
埋－789	21SD1	径4.3・4.6・厚1.1cm。
埋－790	21SD1	径5.0・5.4・厚0.7cm。
埋－791	21SD1	径4.9・5.0・厚0.8cm。
埋－792	21SD1	径5.2・5.4・厚1.4cm。
埋－793	21SD1	径5.5・6.0・厚0.9cm。
埋－794	21SD1	径6.1・6.4・厚0.9cm。
埋－795	21SD1	径6.1・6.2・厚1.1cm。
埋－796	21SD1	径6.6・厚0.7cm。
埋－797	21SD1	径6.3・6.7・厚1.0cm。
埋－798	21SD1	径9.0・9.4・厚1.2cm。
埋－799	21SD1	径5.4・厚1.0cm。
埋－800	21SD1	径6.4・6.7・厚1.2cm。
埋－801	21SD1	径8.0・8.4・厚1.1cm。
埋－802	21SD1	径（8.7）・厚0.9cm。
埋－803	21SD1	径9.5・厚1.1・孔径0.7cm。
埋－929	23SD34	径5.0・5.5・厚0.4cm。
埋－930	23SD34	径7.1・厚1.1cm。
埋－931	23SD34	径9.4・厚0.9・孔径1.0cm。
埋－932	23SD34	径5.4・5.7・厚1.2・孔径1.3cm。
埋－1363	78－66－p12	径2.1・2.2・厚0.9cm。
埋－1372	76－70－P2	径5.4・5.5・厚1.0cm。
埋－1594	21SE1	径7.3・7.7・厚0.9cm。
埋－1595	21SE1	径6.5・7.0・厚1.0cm。
埋－1596	21SE1	径6.3・7.3・厚1.2cm。
埋－1597	21SE1	径6.5・6.7・厚1.2cm。
埋－1598	21SE1	径6.7・厚1.2cm。
埋－1910	21SE3	径（8.4）・厚2.5cm。
埋－1911	21SE3	径7.6・厚1.1cm。
埋－2741	28SE16	径（4.8）・5.6・厚1.2・孔径0.4cm。
埋－3433	21SK43	径6.0・6.3・厚1.3cm。
埋－3606	21SK96	径5.4・5.7・厚1.2cm。
埋－3624	23SK19	径2.3・2.6・厚0.5cm。
埋－3789	23SK18	径3.7・3.9・厚0.9・孔径0.5cm。
埋－4813	90－103	径5.2・5.4・厚1.2cm。
埋－4814	94－90	径5.2・厚0.9cm。
埋－4815	92－95	径5.9・6.2・厚1.2cm。
埋－4816	77－71	径6.3・6.6・厚1.1cm。

遺物番号	遺構	備考
埋－4817	90－103	径6.4・6.9・厚0.9
埋－4818	94－90	径5.5・5.7・厚1.1
埋－4819	90－103	径5.7・5.8・厚1.2cm。
埋－4820	88－103	径4.7・4.9・厚1.0cm。
埋－4821	93－96	径5.5・5.6・厚0.9cm。
埋－4822	95－98	径6.0・6.1・厚1.1cm。
埋－4823	94－90	径5.9・6.0・厚1.2cm。
埋－4824	95－99	径6.4・6.9・厚0.8cm。
埋－4825	92－97	径6.9・厚1.2cm。
埋－4826	92－97	径5.2・6.7・厚1.2cm。
埋－4827	95－108	径（6.7）・6.9・厚1.2cm。
埋－4828	92－97	径6.8・7.4・厚1.1cm。
埋－4829	90－80	径3.1・厚0.6cm。
埋－4830	94－90	径3.4・厚1.0cm。
埋－4831	89・90－79	径3.7・4.0・厚1.0cm。
埋－4832	89－99	径3.4・4.0・厚0.9・孔径0.3cm。
埋－4833	91－97	径6.1・6.2・厚1.0・孔径0.9cm。
埋－4834	92－90	径6.5・6.6・厚1.0・孔径0.6cm。
埋－4835	93・94－90	径4.0・厚0.9cm。
47－2	47SK13	径6.6・厚1.2cm。
49－137	49SE1	径6.7・厚0.9cm。
49－138	49SE1	径6.5・厚0.9cm。
49－139	49SE1	径6.0・厚1.0cm。
49－140	49SE1	径6.1・厚0.9cm。
49－141	49SE1	径5.1・厚1.2cm。
49－160	49SX6	径4.1・厚0.9cm。
49－161	49SX6	径6.0・厚0.9cm。
49－200	49SX10	径5.2・厚0.7cm。
49－215	76・77－88	径5.0・厚0.9cm。
49－216	76・77－88	径5.5・厚0.9cm。
72－92	72SD1	径6.6・厚1.1cm。
73－144	72SD2	径7.2・厚0.8cm。
74－2	72SD1	径7.0・厚1.2cm。
74－180	72SD1	径4.2・厚1.3cm。
74－195	72SD1	径5.1・厚0.8cm。
75－15	72SD1	径5.4・厚1.4cm。
75－20	72SD1	径7.2・厚1.0cm。
75－48	72SD2	径6.4・厚1.5cm。
77－6	21SD1	径5.7・厚0.9cm。
77－40	21SD1	径5.3・厚1.4cm。
78－2	21SD1	径6.4・厚1.7cm。

石製円盤　石製の円盤は内側の堀跡（21SD1）から２点出土している（埋－805・806）。

壁土　壁土は火を受けた資料が残存しており、主に遺構内の埋土から出土している資料について取り上げる。これ以外にも検出面等からの出土がある。

出土遺構は比較的まとまりがあり、23SG1池跡の北東側に多いほか、52SE8で多く出土している。また76次調査では人為堆積土の崩落土に多く混入していた。遺跡内でも最終末に近い時期とみられる31SE7、52SE8から多く出土している点も特徴的である。

木舞の痕跡が残る資料もあり、木舞の間隔が４～５cm程の値を示すものがあるものの３～７cm程とばらつきがある。なお、壁土の中には白色に仕上げられた資料が含まれる。これについては成分分析が行われており（文化財保存計画協会2007）、白漆喰ではなく白土による仕上げ層と推察されている。

表55　遺構ごとの出土量（壁土）

遺構名	点数
28SE1	1
28SE2	19
28SE3	38（2064g）
28SE5	7
28SE6	5
28SE7	3
28SE9	4
28SE10	2
28SE11	13
28SE12	2
28SE13	2
28SE15	2
28SE16	2
28SE17	2
31SE5	4
31SE6	64（5178g）
31SE7	174（11576g）
31SE9	1
23SK96	1

遺構名	点数
28SK6	1
28SK9	3
28SK11	2
28SK14	1
28SK16	1
28SK18	1
28SK29	3
28SK37	1
67－70P1	（2003g）
52SE8	（21860g）
56SK43	－
56SK80	－
56整地層	粘土塊含む
68次調査	37（483g）
72次調査	（72.5g）
73次調査	（517.3g）
74次調査	
76次調査	（4225.2g）

石鍋・温石　石鍋は５点出土している。把手付きの１点は器形が把握でき、その他は口縁部のみの破片である。埋－1360は方形の耳が残り、口縁部は直立して立ち上がる器形である。残存する体部の下部では一部黒色化している。明確な再加工の痕跡は確認できない。遺跡の中心的な範囲の南側に位置する柱穴から出土し、共伴する遺物からも時期は確定できないが、形態の特徴から12世紀前半代の資料と考えられる。このほか、口縁端部から約７cm部分まで残存する個体もある。口縁端部から残存しており、鍔を削り取るなどの再加工の痕跡も確認できず、把手付の器形の可能性もある。内外面ともに炭化物が付着する。この他は口縁部、体部片ともに小片で器形の全体は不明である。

表56　滑石製品一覧

遺物番号	種別	出土遺構	備考
埋－1323	石鍋	41SD2	口縁部片
埋－1360	石鍋	97－92P5	把手付
埋－4838	石鍋	97－94	鍔あり
埋－4839	石鍋	77－66	口縁部
52－6009	石鍋	52SD26	体部
埋－3434	温石	21SK43	石鍋転用
埋－4840	温石	56－66	石鍋転用
埋－3539	温石	21SK78	木箱入り
52－6010	滑石片	52P927	

同じく滑石製品として、温石が３点出土している。温石には石鍋の転用品と、非転用の温石製品がある。埋－3539は完形で、木箱に入った状態で出土している。

硯　陶硯が1点、転用硯（猿面硯）が１点、石硯が４点ある。既述の木製品の硯１点と合わせて、６点出土している。

表57　硯一覧

遺物番号	種別	出土遺構	備考
埋-3959	木硯	31SK80	長13.7・幅6.2・厚1.4cm。
埋-807	石硯	21SD1	直（4.5）・幅（13.2）・厚0.6・縁高1.3cm。
埋-808	石硯	21SD1	長（4.0）・幅3.6・厚0.3・縁高0.9cm。
埋-809	石硯	21SD1	長（8.1）・幅10.1・厚1.0・縁高1.1cm。
埋-3857	石硯	31SK42	長8.6・幅4.7・厚1.5cm。
埋-2901	陶硯	31SE2	長（7.9）・幅5.3・厚1.7cm。
埋-3876	猿面硯	31SK70	長12.3・幅9.5・厚1.3～2.1cm。

金鉱石　金付着礫として報告されている１点が出土している（埋－2693）。

琥珀原石　31SE6から２点（2994、写図230）のほか破片が多数、41SD2から１点、73－83から破片が多数出土している。このほか、23SG1、31SE3、31SE4、31SE5、31SE7、36SE2から破片が出土している。

碁石　碁石は径1.5～２cm前後の円形で、器厚は１cm弱となるものが多い。色調から黒子と白子がある。確認された資料では黒子が多く、白子は少ない。この出土量の差が、白子には他の材質を用いたこと事例があることを反映するのであれば興味深い傾向である。調整痕跡等では表面に擦痕が確認できる資料もあるものの、多くは加工痕跡が明瞭ではなく、自然の川原石等が多数を占める。そのため、表土出土資料の場合や12世紀代の遺構出土の資料についても碁石かどうか判別が難しい資料が含まれる。資料の形態変化が少ないため時期的な課題も残る。多くの点数がまとまって出土した事例などは、碁石にあたる可能性が高いと判断できる。

その他碁石の可能性があるものも散見されるが、自然石の可能性もあり確定できない。

表58　碁石

遺物番号	遺構	備考
埋－1397	31SA2	径1.5・厚0.5cm。黒。
埋－1536	23SG1	径1.5・厚0.5cm。黒。
埋－1537	23SG1	径1.8・厚0.7cm。黒。
埋－2376	28SE4	径2.4・厚0.9cm。白。
埋－2740	28SE16	径2.3・厚1.1cm。黒。
－	31SK58	
埋－3883	31SK74	径1.9・厚0.7cm。黒。
埋－4004	41SK7	径1.8・厚0.7cm。黒。
49－482		径1.8・厚0.6cm。黒。
49－483	49SX6	－
50－5010	37SE2	径1.6・厚0.5cm。白。

遺物番号	遺構	備考
50－5002	50SK1	径1.8・厚0.8cm。白。
56－5006	56SK26	径2.5・厚1.1cm。黒。
57－5005	57SE1	径2.5・厚0.8cm。黒。
68－199	6b層	碁石か
68－200	6b層	碁石か
74次	72SD1	2点
74次	72SD2	3点
以下参考		
11次	－	16点
12次	－	6点

双六駒　平泉町教育委員会による11次調査で１点出土している（11次調査、平泉町教委1983）。

羽口　羽口は遺跡内から多く出土しているものの、12世紀代と明確に把握できる資料は少ない。

鉄滓も埋土に含まれる場合があるものの、まとまった出土は確認されていない。

表59　羽口

遺物番号	遺構	備考
埋－804	21SD1	
－	21SD7	
埋－1261	41SD2	
埋－1262	41SD2	
23次		12点
埋－1532	23SG1	ほか24点
－	28SE2	1点
－	28SE13	1点
31次		11点
埋－2944	31SE2	
－	36SE3	
埋－4070	21SC1	
50－5004	90－68	時期不明
50－5005	93－69	時期不明
50－5006	91－67	時期不明
50－5007		12世紀か
52－6022	52SD26	
55－5011		
68－197		
68－198		
68次		
69次	21SD2	1点
72次	72SD1	
72次	72SX1	
73次	72SD1	1点
74次	72SD1	9点
74次	72SD2	6点
76次	72SD1	7点

砥石　砥石は遺跡内から多く出土しているものの、12世紀代と明確に把握できる資料は少ない。

なお、古代の竪穴遺構である21SI1からも２点出土している。

表60　砥石

遺物番号	遺構	備考
埋－810	21SD1	6.4・4.0cm。
埋－811	21SD1	5.8・2.3cm。
埋－812	21SD1	5.8・2.3cm。
埋－813	21SD1	7.4・4.8cm。
埋－814	21SD1	8.9・6.3cm。
埋－815	21SD1	7.2・8.5cm。
埋－817	21SD1	6.2・4.0cm。
埋－818	21SD1	13.6・6.2cm。
埋－926	23SD34	12.4・5.8cm。
埋－1263	41SD2	8.4・4.8cm。
埋－1582	21SE1	5.4・4.8cm。
埋－1673	21SE2	10.5・6.1cm。
49－484	49SD15	
49－485	49SX10	刻画あり。5.4・4.0cm。
49－487	87－72	10.8・6.2cm。
50－5008	42SD1	12世紀
52－6002	52P372	
52－6003	52P498	
52－6004	52P534	
52－6005	52SD24	
52－6006	52SD24	
52－6007	52SD26	12世紀
52－6008	52SD27	
55－5004	55SX1	12世紀
55－5005	55P282	
55－5006	55SD4	
55－5007	55SD14	
59－5001		
68－201		
69－372	21SD1	
69－373	検出面	
74次	72SD2	3点 そのほか検出面から1点
以下参考		
11次		2点
13次		5点

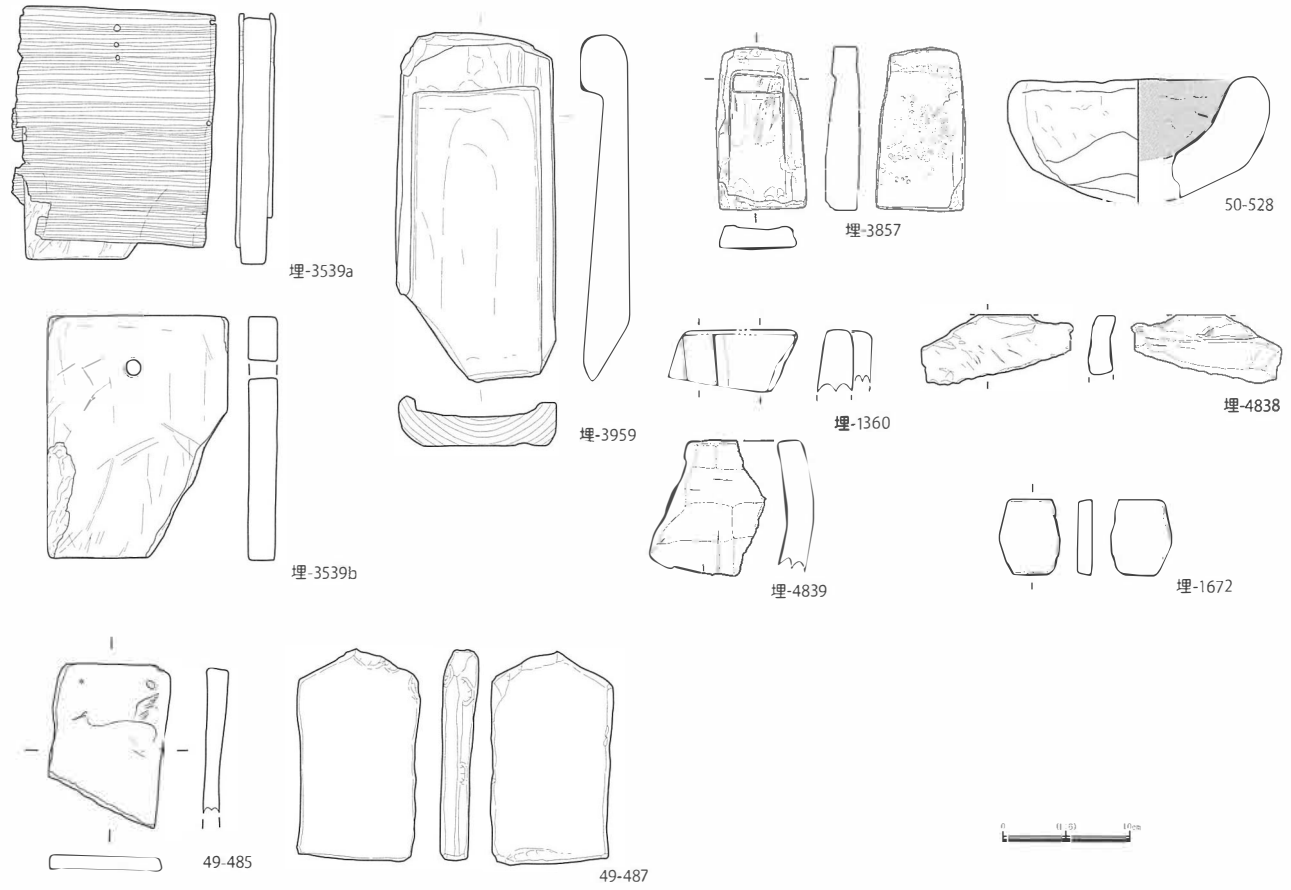
坩堝　52SE10から１点（52－528）、56次調査で２点（56－5001・5002）21SX4から１点出土している。

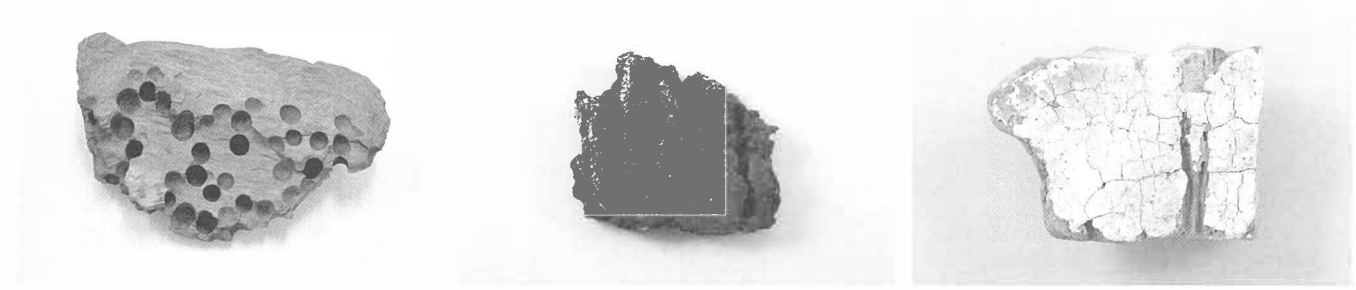
土錘　23SD34から１点、表土（93－91）から１点出土している。なお、古代の竪穴遺構である21SI1から２点出土している。

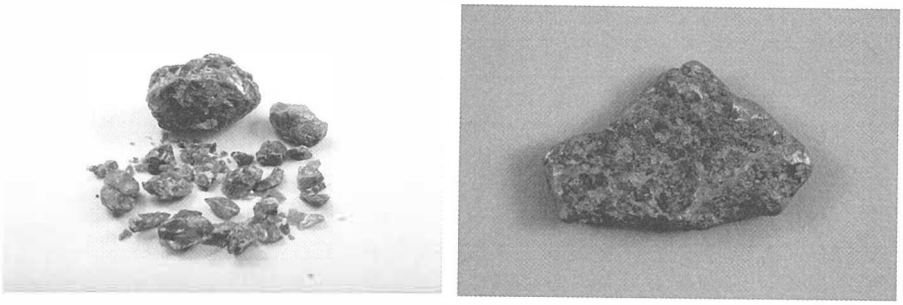
石帯　21SE2から１点出土している。周囲に古代の遺構も存在しており12世紀代の遺物か確定できないものの、平泉町内での出土事例もある（志羅山遺跡21次調査、平泉町教委1993）。

穴あき石　52SE8の５層から出土した粘板岩で、貝の巣穴による穴が多数あく。毛越寺の類例などから庭園等の石に用いられたとみられる。59次調査でも２点が出土している。

このほか、水晶片が21SD1、28SK18、23SG1から出土している。







1. 穴あき石(52SE8出土)
2. 壁土(31SE7出土)
3.壁土(31SE7出土・31RY114)
4.琥珀原石(31次調査出土・31RY11)
5.金付着礫(埋-2693)

図290　その他遺物（1）

鬼瓦　本来は瓦の項に分類記すべき資料だが、1点のみの出土のためここで記す。41次調査に際して、内側の堀（41SD2）のY＝58・59、X=68グリッドから出土している。他の瓦類の分布傾向等はやや異にするように捉えられる。長さ12.5cm、幅14.8cm、厚さ2.5cm程で、焼成は軟質である。左下半のみの破片で、全形の大きさや文様は不明である。

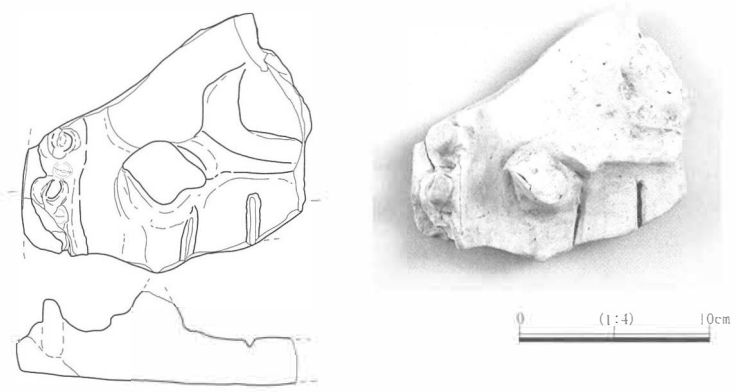


図290-2　その他遺物（2）

③動植物遺存体

○動物遺存体

動物遺存体は報告事例が少ないものの、遺跡内で堀などを中心に散見される。分析事例が少ないため詳細には判然としない部分が残るが、出土が確認できる事例をまとめる。また、トイレ状土坑などでは寄生虫分析も行われている。

表61　動物遺存体の出土遺構

遺構	種別	
21SD1	獣骨	
41SD2	ガムシの羽・獣骨	
21SX4	動物骨	
38次調査	シカの顎骨	
72SD1（猫間ヶ淵周辺）	動物骨	ニホンジカ、イノシシなど。12世紀以降の堆積か。
72SD2（猫間ヶ淵周辺）	動物骨	ニホンジカなど。12世紀以降の堆積か。
21SE1	動物骨	
31SE1	獣骨片	
31SE2	獣骨片	
31SE4	シカ下顎骨	
31SE7	獣骨片	
31SE8	獣骨片	
31SK80	獣骨片	

○植物遺存体

植物遺存体はまとまった事例はないものの、トイレ状土坑を中心に土層中などに包含されるものが散見される。ここでは出土が確認できる事例をまとめる（表63）。なお、種実分析などが行われているほか、花粉分析も行われている（表60）。

敷葉工法等の植物質の工法とみられるのは遺跡南端部の21SX4（本文編52頁）と21SD1の一部であ

る（本文編53頁）。

表62　植物遺存体の出土遺構

遺構名	種別
21SD1	種実
41SD2	コナラの葉
21SX4	ウリ科種子
21SE1	ウリ科種子
21SE2	ウリ科種子、クルミ、桃
21SE3	ウリ科種子
21SE4	ウリ科種子、桃の種
28SE4	ウリ科種子
28SE9	ウリ科種子
28SE11	ウリ科種子
28SE12	ウリ科種子
28SE13	ウリ科種子
28SE15	ウリ科種子
31SE1	ウリ科種子
31SE2	ウリ科種子
31SE3	ウリ科種子、クルミ、桃
31SE4	ウリ科種子
31SE6	ウリ科種子
31SE7	ウリ科種子
31SE8	ウリ科種子
36SE3	ウリ科種子、桃
21SK16	ウリ科種子
21SK43	ウリ科種子
21SK48	ウリ科種子
21SK49	ウリ科種子
21SK53	ウリ科種子、桃
21SK54	ウリ科種子、桃
21SK55	ウリ科種子
21SK63	ウリ科種子
21SK80	ウリ科種子
21SK81	ウリ科種子、桃
21SK95	ウリ科種子、クルミ
21SK96	ウリ科種子
21SK104	ウリ科種子
23SK10	桃、クルミ

遺構名	種別
23SK80	ウリ科種子
23SK81	ウリ科種子
23SK83	ウリ科種子、梅
28SK14	ウリ科種子
28SK23	ウリ科種子、植物茎
31SK18	ウリ科種子
31SK27	ウリ科種子
31SK33	ウリ科種子
31SK40	ウリ科種子
31SK41	ウリ科種子
31SK46	ウリ科種子、草本類
31SK58	ウリ科種子、草本類
31SK70	ウリ科種子
31SK80	ウリ科種子
31SK87	ウリ科種子、梅、植物種子
36SK8	ウリ科種子
36SK9	ウリ科種子
36SK23	梅、針葉樹樹皮、広葉樹葉
41SK7	
52SK9	ウリ科種子
52SK24	種子
55SK41	種子
55SK51	種子
56SK26	種子
56SK27	種子
56SK28	種子
56SK29	種子
56SK33	種子
56SK53	種子
70SE1	種子類
70SE3	種子類
70SK20	種子類
70SK22	種子類
70SK24	種子類
56SK52	種子類

表63　柳之御所遺跡自然科学分析等一覧

執筆	題目	報告書名	分析項目
高橋利彦	柳之御所跡第23次・31次調査出土材の樹種	岩埋文288集、1995年	樹種
能城修一	柳之御所跡から出土した木製品の樹種		樹種
菊池美智子	柳之御所跡から出土した漆濾し布の鑑別結果報告		
苅谷道郎	柳之御所跡出土ガラス片		
パリノ・サーヴェイ	柳之御所跡自然科学分析		植生分析（花粉分析・種実分析・珪藻分析）
パリノ・サーヴェイ	柳之御所跡造営時の植生について		花粉分析
金原正明・金原正子・中村亮仁	柳之御所跡の寄生虫卵・花粉・種実の分析		
三辻利一・金枝正志	柳之御所跡出土須恵器・中世陶器の蛍光X線分析		
赤沼英男	柳之御所遺跡出土鉄製遺物の金属学的解析		
永嶋正春	柳之御所遺跡出土銅印の素材について	岩文111集、2001年	
パリノ・サーヴェイ	柳之御所遺跡から出土した木製品の樹種		

執筆	題目	報告書名	分析項目
高橋利彦	柳之御所遺跡第56次調査出土材の樹種	岩文117集、2003年	
高橋利彦	柳之御所遺跡第55次調査出土材の樹種		
古環境研究所	柳之御所遺跡のテフラ		
	柳之御所遺跡における花粉分析		
	柳之御所遺跡におけるトイレ遺構分析		
光谷拓実	柳之御所遺跡出土木製品の年輪年代測定結果	岩文121集、2006年	
加速器分析研究所	年代測定結果		AMS年代測定
古環境研究所	柳之御所遺跡における放射性炭素年代測定		炭素年代測定
岩手県教育委員会	柳之御所遺跡園池（23SG1）の水源測定	岩文123集、2007年	
古環境研究所	柳之御所遺跡における植物珪酸体分析		
上田弥生	柳之御所遺跡12世紀出土木製品の樹種同定		
文化財保存計画協会	柳之御所遺跡出土壁材調査		
古代の森研究舎	土壌分析	岩文125集、2008年	花粉・寄生虫卵・種実
	種実分析		
	樹種同定		
	放射性炭素年代測定		
古環境研究所	出土木材樹種同定	岩文127集、2009年	
	テフラ分析		
	放射性炭素年代測定		
	微化石（花粉・珪藻・種実）分析		
古代の森研究舎	自然科学分析	岩文130集、2010年	放射性炭素年代測定
			花粉化石群
			種実分析
			珪藻化石群
パリノ・サーヴェイ	自然科学分析	岩文133集、2011年	放射性炭素年代測定
			花粉分析・寄生虫卵分析
			種実分析
			樹種同定
			骨同定
			脂質分析
パリノ・サーヴェイ	自然科学分析	岩文135集、2012年	放射性炭素年代測定
			テフラの分析
パリノ・サーヴェイ	自然科学分析	岩文137集、2013年	放射性炭素年代測定
			樹種同定
加速器分析研究所	柳之御所遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	岩文140集、2015年	
パリノ・サーヴェイ	柳之御所遺跡第75次調査における火山灰分析	岩文144集、2015年	
パリノ・サーヴェイ	柳之御所遺跡第76次調査	岩文147集、2016年	放射性炭素年代測定
	柳之御所遺跡第74次調査出土木製品の樹種同定		微細物分析
パリノ・サーヴェイ	柳之御所遺跡第75次調査出土木製品の樹種同定	岩文150集、2017年	
加速器分析研究所	柳之御所遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	岩文153集、2018年	